横浜国立大学
工学部五十年史

大正9年～昭和45年（1920～1970）

序

横浜国立大学 工学部長　田　口　武　一

横浜国立大学工学部の前身であります横浜高等工業学校が，大正９年に創設されましてから，満50周年を迎えました昭和45年11月には，その輝かしい歴史を顧み，将来の発展を祈りまして，恩師ならびに卒業生多数が参集し，盛大な記念祝典が挙行されました．その節，せん越ながら，50年史編さんの希望を申し上げましたところ，幸いにも先輩，同窓各位多数のご賛同を得まして，今回創立 50 年史が発刊され，ここに序文執筆の光栄に浴しますことは，まことにしあわせな時代に際会し得ましたことでございます．

顧みますれば，この50年間に，本学園は草創期から発展期へと，まことに輝かしくも多難な道を踏破し，当工学部の今日を得たのであります．古くは関東大震災，ついで第２次世界大戦，その後の学制改革と幾多の激動期に直面して，よくそれを克服し，その規模も開設当初の機械工学，応用化学，電気化学の３学科から，今日の大学院をもつ10学科１研究施設の工学部へと，大いなる進展を続けて参りました．また，この間，多数の教官の研究業績とともに，今や 13,000 名に及ぶ卒業生が，わが国産業界へ貢献しております成果は，まことに目ざましいものがあります．そもそも学園の社会的評価は，教官の熱誠もさることながら，多くの卒業生の不断の努力の蓄積に負うところがきわめて大きいのであります．おそらく，過去の50年間に比較し，今後の発展の速さは格段の違いがありましょうが，当工学部は，本学史上に，特筆すべき確固たる基礎をすでに築き上げたのであります．

しかしながら，半世紀続きました弘明寺時代に，別れを告げなければならない時期が近づいております．創立以来50年の足跡をここ弘明寺の地に残し，それにまつわる幾多の感懐には，限りない哀惜の念を禁じ得ませんが，今後一層の飛躍を期して，近く常盤台の新キャンパスに統合し，ここに光輝ある一時期を画します．そして50年にわたってつちかわれました誇るべき伝統をもつ弘明寺時代のすべては，偶然にも本史の内容そのものとなっております．

私はこの記念すべき機会に，過去50年間における本学園の先覚者各位の功績をた

たえ，先輩，同窓，関係者の偉業を回想して，深甚なる敬意と謝意を表し，来るべき新時代に対処する決意を新たにして，さん然たる本学50年の歴史に，いやが上にも輝かしい栄光を加えるべきことを念願してやみません．

終りに，本50年史を刊行するにあたりまして，先輩，同窓の諸賢，本学教職員各位から賜わりました絶大なご協力，ならびに本書編さんに貴重な資料を提供された方々，さらに執筆編集に直接たずさわれた方々に，心からお礼を申し上げ，あわせて本学が躍進発展の一途をたどりますことを祈念しまして序文と致します．

工学部創立五十周年を祝して

横浜国立大学長　越　村　信三郎

天地人三才をめぐる時間の連続は無限である．この流れの先頭に棹さして，わが学園の工学部は五十年のかがやかしい歴史をつづった．悠久の流れにくらべれば，この歳月はほんの一瞬と言えるかもしれない．しかし個人の生涯にとっても，組織体の生命にとっても，これは祝典に価する一区画——golden jubilee を意味している．

この半世紀は，日本の歴史にとって変転と激動の記録の連続であった．工学部の前身，横浜高等工業学校が大岡の地に創設されたのは，第一次世界大戦直後の1920年である．そしてこの学園は間もなくこうむった大地震の災禍のなかから不死鳥のようによみがえり，大恐慌，満洲事変，日中戦争，第二次世界大戦などのきびしい試練にも耐えぬいて，こんにちの隆盛に到達したのである．

大正から昭和の初頭にかけて，初代校長，鈴木煙洲先生は，日本の教育史に特筆すべき三無主義の炬火をかかげて数多くの青年を育成された．

冨山保先生はこのバトンを受けついで，戦中，戦後の学園を守りぬき，1949年，高商と師範を統合して国立大学を創建し，初代学長に就任されたのである．

高工時代から工学部時代にかけてこの学園に集った教授スタッフは日本一流であり，また歴代の学部長，II 部主事を助けて校務に献身した職員のはたらきも抜群であった．自然の名教はこれらの人たちのあいだに協和音を奏でたのである．こうした校風にはぐくまれて，創造的精神にみちあふれた万余の人材が，昼間と夜間との分ちなく，大岡の学園を巣立っていった．

これらの人たちが戦前，戦中，戦後にかけて日本の工業技術の発展につくした役割は大きかった．それはスイスの科学技術を世界的水準に高めたチューリヒ工科大学のそれに比肩されうる．

工学部は新しい装備をととのえ，1976年までに常盤台の統合地に移転することになる．そのときには東大，東工大とならんで名実ともに日本有数の学部となるだろう．

いま五十年の歴史をさかのぼり，往年を回想しながら耳を澄ますと，かつての根岸や横浜公園の球場にどよもした勇ましいエールがきこえてくる．

「ハイザ高工，……」

Alma Mater の栄光をたたえるこのエールをもって，工学部の jubilee をことほぐ私の言葉の結びとしたい．

1972 年 7 月 23 日

往時を回想しながら学園創立五十年を祝う

冨山　保

大正年間の第一次世界大戦を契機として，我国産業は欝然として勃興したるに促され，国立実業専門学校増設の国是が決定したる時，横浜市は従来貿易一辺倒であったが，永遠の繁栄を維持するためには併せて工業立市も又緊要なりとの世論も起り，高等工業誘致の声が識者間に昂揚され，県市協同して巨額の寄附金を拠出して横浜市に高等工業学校設立が決定した結果，わが横浜高等工業学校が大正九年四月に呱々の声を揚げた．初代学校長としては不世出の教育家鈴木達治先生が任命せられた．鈴木校長は独特の自由啓発の教育主義により，正満十五年間心血を注がれて教育指導に当られ「名教自然」の標語により表現される学風を確立し，先生御退任後も堅持して三十年を経過し，昭和二十四年その学風伝統を持続しながら新制大学工学部に移行し，五十有余年を閲みして現在に到った．創立当初は三学科を数うるに過ぎなかったが，現在は三倍の九学科に拡充せられ，此歳月間に幾百幾千の英才を育成して世に送り，国運の隆盛に寄与貢献し得て創立当時の要望に応えたことは洵に慶祝の至りである．五十年は必しも長しとはせぬが，古人は人間の一生涯になぞらえる歳月であり，我が学園も発足以来今日に到る間に幾多の変遷波瀾重畳は免れ得なかった．発足以来僅三年にしてかの関東大震災に遭い建物設備の殆んど全部が壊滅したが，直ちに焦土の上に立ち上がり挙校一致復興に全力を尽し，年ならずして厄災前の機能を恢復したるのみならず建築，造船の二学科の増設を見るに至った．鈴木先生は昭和十年学校長としての大任を完遂せられて退任せられた．その後間もなく我国は曠古の大戦に突入し，その影響を受けて教育，研究の遂行上少なからざる障礙を受けたことは否み得ないが，協力一致多くの難関を突破し，且此間時勢の要望に応えて航空工学科の新設を敢行して拡充発展の一途を進み得た．唯戦時中数多くの卒業生が戦線に立ち，あたら英才を懐きながら戦場の露と消えたことは忘れ得ぬ痛恨事であった．尚終戦に際しては，占領軍の命により航空工学科廃止の悲運となりたるは遺憾の至りであった．又終戦米軍進駐直後軍より全学園接収の厳命を受けたが，よく学校の特殊事情を理解せしむる事を得辛じて命令解除，接収を他と転

換することとなり事無きを得たこと真に天恵であった．多年培はれた教育，研究の成果により昭和二十四年には審査機関より最優秀の判定を得て，堂々と大学工学部に移行するを得，爾来関係担当方々の撓ざる努力により四学科増設，更に待望の大学院の新設等真に刮目に値いする発展を遂ぐるに到った．更に近く常盤台に広袤実に十数万坪の敷地獲得に成功し，其処に近い将来壮麗なる建物と最新式の設備を有つ世界的有数の大殿堂に移転すること決定したる洵に慶祝此上もないことである．学園創立五十周年を迎え曩に記念大祝宴ありて堂に溢れる錬達の卒業生と歓談し，又今次五十年史の編纂成り脱稿刊行を見る．何れも教育者のみに与えられる最大愉悦であり，関係方々の努力に対し深甚なる謝意と慶祝を表する所以のものなり．

昭和47年12月12日に冨山先生は逝去されました．ここに謹んで先生のご冥福を祈り，絶筆となりました祝辞を掲載させていただきました．発刊の上は本史をご霊前に捧げたいと存じます．

（田　口　記）

例　　言

1. 本「横浜国立大学工学部50年史」は，大正９年に創設された横浜高等工業学校，終戦直前に名称のかわった横浜工業専門学校の各時期，および学制改革による大学期の３期にわたる発展の過程をたどり，創立50周年にあたる昭和45年までの経過を記述したものである．

その内容は大きく２編にわかれ，前編の高工時代は，鈴木校長時代の約15年間，および冨山校長時代の約15年間が２章に大別され，第１章は鈴木校長時代として創設から鈴木校長退任と冨山校長就任，ならびに名教自然碑の設立までとし，第２章は冨山校長時代で，昭和10年から昭和24年の学制改革による大学移行，冨山学長退任までが述べられている．後編は，大学期時代として，新制大学の誕生から冨山学長時代を経て昭和45年までの約20年間にわたる記録となっている．

また，編集の方式は，原則として編年体とした．

2. 本書の編集については，特別の委員会等は設けられず，創立50周年記念祝賀会席上の田口工学部長の提案を同窓の菅要助氏（大正13年電気化学科第２期生，現東芝音楽工業K.K.社長）がとり上げ，同氏のご紹介による布雄吉氏* にお願いして，全般の執筆を担当していただいた．一方，工学部内では各学科における同窓生の先任者をもって学内の世話人会を構成して，編集方針ならびに原稿内容の検討に参加するとともに資料の収集にも努力した．

各学科世話人は次の通りである．

機械工学科	小栗　達	（昭和17年９月卒）
応用化学科	佐藤菊正	（昭和19年９月卒）
電気化学科	友成忠雄	（昭和７年　卒）
建築学科	田口武一	（昭和７年　卒）
造船工学科	吉岡　勲	（昭和７年　卒）
電気工学科	都築泰雄	（昭和30年　卒）
金属工学科	井口栄資	（昭和39年　卒）

なお，化学工学科，安全工学科は，卒業生もまだきわめて少なく，これに参加することはしなかった．

また，創立当初から開設された機械工学，応用化学，電気化学の３学科が満50周年を迎えたということと，長年月の間本学に勤務されたということで，斎藤輝治（機械工学科第１期生大正12年卒），阿部滋弘（応用化学科第１期生大正12年卒），河村文一（電気化学科第３期生大正14年卒）の３先生に，主として前編および後編の初めの部分の原稿の査読をお願いして正確を期した．

3. 資料の収集については，荒井文治氏（機械昭和10年卒，本学教育学部教授），鈴木博人氏（応化昭和28年卒，岡村製作所課長），平林興郎氏（電化昭和８年卒，萩原電気K.K.東京事務所長）平川芳彦氏（応化昭和14年卒，日石化学K.K.調査室長）等のご協力に負うところが大きく，同氏等が提供された横浜高工時報，横浜工業会誌，また煙洲鈴木達治先生に関する「自由教育10年」，「名教自然」，「六ツ川夜話」，「煙洲残筆」，「入愚亭独嘯」，「先生の思い出」等の著書が，特に前編に関するきわめて重要な資料となった．

また，応用化学科，電気化学科のそれぞれ同窓会誌である「応化会会報」と「DENKA」も有力な資料であった．

その他，開校当時からの横浜高等工業学校一覧，横浜国立大学要覧も各年代における学科編成，規則などの重要出典であった．

工学部関係教職員からのものとしては，故森川幾久雄名誉教授（応化昭和４年卒）の日記は貴重な資料の一つであったし，機械工学科元教授中本守氏，現教官鶴岡　武，小川忠彦電気化学，丸尾　孟造船工学，飯島健一電気工学，青木隆一化学工学，北川徹三安全工学の７教授からもそれぞれ資料をいただいた．

なお，豊倉富太郎，鈴木房幸，藤堂勇雄，木下恭二，宮本統，佐藤仁，沢村鶴松，井口栄資，鳥飼直親，高橋正雄等各教官から在学，在職当時を回顧願って，種種お話を伺い，そのほか，多数の方々のご協力をお願いした．

また，特に工学部松尾延治事務長，同遠藤敏雄二部事務長による主として学内関係資料の収集が大きな力となった．

後編における資料は，前記要覧等のほか，教授会，評議会の議事録，学報，広報等で正確なことはわかったが，これらには，とかく大学全体の記録のみが多く，昭和44年の大学紛争のため，大学新聞の散逸等は大きな痛手であり，多くの現職教職員から

注　同氏は，東京芝浦電気株式会社85年史の編さん者，文学士

のご協力があったとはいえ，前編に比較して資料の貧困に苦しんだ．

なお，これらの資料による個人の発言内容等には多少の誤りと思われる点もないことはなかったが，あえて訂正せず原文のままとし，また，編集者の主観をきらって客観性を重んじたため，多少冗長となっても全文を掲載したところが多い．

口絵，および随所に挿入されている写真は，各年代各学年の卒業アルバムから複写したものが多い．

4. 本企画が決まってから，資料の収集，執筆，印刷までがわずかに2年半という短時間のうちになされたので，資料収集の不足，編集の不手ぎわ等をまぬがれなかったばかりでなく，紙数の制約上数多くの資料を割愛してしまったのはまことに残念であった．

本書の発刊によって今後さらに資料の追加もあろうが，他日の完成を期したいと思う．

5. 本文中の個人名についてはすべて敬称を省略し，「漢字」は，固有名詞等を除き原則として当用漢字を用い，「かな」は現代かなづかいによった．ただし引用文については原文のままとした．

目　次

序　横浜国立大学工学部長　田口　武一

工学部創立五十周年を祝して　横浜国立大学長　越村信三郎

往時を回想しながら学園創立五十年を祝う　冨山　保

例言

前　編

序　章　日本における実業専門学校の歴史…… 1
(1) 明治時代　(2) 大正時代の高工教育の拡充

第1章　鈴木校長時代（大正9年～昭和10年）

序　世界大戦と工業立国　横浜市の希望 … 4

第1節　設立…… 5
1. 設立に至るまで…… 5
2. 鈴木達治　初代校長に任命…… 7
3. 鈴木校長の略歴…… 7
4. 新進気鋭の教授陣…… 8
5. 事務取扱について…… 9
6. 設立時のこと…… 9
思い出：小林長之助，堀江不器雄
7. 横浜高等工業学校規則……10
8. 電気化学科について……16
冨山保　談
9. 敷地，建物，設備……17
10 図書館とオーナーシステム……22
11. 寄宿寮……22
思い出：村上泰助
12. 設立当時の学校の周辺……23
(1) 弘明寺　(2) 若宮八幡　(3) 伊勢山皇太神宮　(4) お三の宮　(5) 三殿台遺跡　(6) 横浜公園　(7) 大岡川　(8) 蒔田城跡　(9) 外人墓地　(10) 山下公園　(11) そのころの交通
13. 創立時代の思い出……26
鈴木達治，山口真造，阿部滋弘，小林長之助，斎藤輝治，石井欣之助，村上泰助
14. 第1回入学者……28
15. 授業開始と校長訓旨……28
思い出：阿部滋弘
16. 第2回目の入試……31
17. 開校式と校長答辞……31
18. 記念祭……33
(1) 前夜祭　(2) 記念植樹　(3) 記念祭　(4) 記念祭の歌　(5) 記念祭の意義について
19. 本校の校風と三無主義……34
20. 校風徐興……36
荒牧寅雄談
21. 徽章　校歌……36
22. 商議委員（大正10年～昭和17年）……37
23. 観光外人招待大音楽会……39
24. 第1回卒業式……39
学校長告辞
25. 支那北京双橋無電と遠藤教授……40
26. 横浜工業懇話会……41
（付）(1) 県立商工実習学校その沿革
(2) 横浜市立大岡工業補習学校その沿革
27. 校友会の発足……44
校友会会則，野球部のできたころ（定期野球戦史より）
村上泰助談，阿部教授談

第2節　関東大震災とその復興
（大正12年9月～大正15年）
1. 大震災と本校……50
関東大震災：阿部滋弘，震災の思い出：大山春翠
2. 復興の第一声……52
3. 名古屋へ移転命令……53
4. 授業再開……54
横浜舎密研究所
5. 横浜市復興会と本校……55

6．震災の損害と復興 …… 58
寄宿寮２むね開設
7．大震災追憶会 …… 59
8．震災記念奨学資金と互助主義10銭会 …… 60
9．第２回卒業式挙行 …… 60
10．復興成り更生期へ …… 61
思い出：矢田部庄栄
11．端艇３隻　進水 …… 61
12．第３回卒業式 …… 62
学校長式辞
13．海外発展と大陸会の誕生 …… 63
(1) 設立に至るまで　(2) 創立総会　(3) その後の活動
14．学校教練の実施 …… 66
思い出：矢田部庄栄
15．諸設備ようやく整う …… 67
16．建築学科の増設 …… 68
17．建築学科と中村教授 …… 69
煙洲先生と草創期の建築学科：網戸武夫，建築科志望学生に与う：中村順平
18．対高商野球戦始まる …… 71
定期野球戦：山口久
19．第４回卒業式 …… 72
学校長式辞
20．互助主義公心一円会 …… 72
21．横浜高工時報　発行 …… 73
(1) イオン会時代　(2) 創刊時代　(3) 文芸部の不振　(4) 出版部の出現
22．大正年代の記念祭について …… 75
23．横浜高工のベヒシュタイン・ピアノ …… 75
24．横浜工業会　創立 …… 76
思い出：鈴木達治，山口辰男
25．震災後の校友会 …… 77

第３節　10周年を迎える
(昭和２年～昭和５年)

1．第５回卒業式 …… 80
学校長告辞
2．入試にも無試験制度を採用 …… 81
思い出：都築正芳
3．３博士生れる …… 82
4．荒木講師　世界一周競争に …… 82
5．柏木教授　若くして逝く …… 82
6．第６回卒業式 …… 82
学校長告辞
7．御大典と本校 …… 84
8．校旗 …… 84
9．第７回卒業式 …… 85
学校長告辞
10．造船工学科の新設 …… 86
鈴木校長の先見の明
11．外人教師赴任 …… 88
12．工業教員養成所の設置 …… 88
13．対高商野球戦　中止となる …… 90
14．航空研究会 …… 90
15．第８回卒業式 …… 91
学校長告辞
16．創立10周年を迎える …… 91
当時の教職員一覧
17．10周年記念式 …… 94
10年以上勤続者，10周年記念祭，「自由教育10年」
18．そのころの寮の費用 …… 95
19．そのころの軍事教練 …… 95
20．鈴木校長　文部省審議会委員に …… 96
21．横浜工業会　社団法人となる …… 96
定款
22．校友会の発展 …… 99
部の増加，総務部，野球部，籠球部，競技部，柔道部，庭球部，剣道部，弓道部，音楽部，絵画部，講演部，ラグビー部，蹴球部，端艇部，山岳部，応援歌　思い出：宇田典夫

第４節　校運ますます隆盛
(昭和６年～昭和10年)

1．入試全国高工一の難関 ……105
2．第９回卒業式 ……106
学校長告辞　(付) 商工実習学校，阿部翁の胸像を建設
3．第２期復興建築工事始まる ……107
遠藤教授談　斎藤教授談
4．消費組合の設立 ……108
5．校長の暑中見舞状 ……110
6．社団法人横浜工業会第１回総会 ……110
7．浜の早慶戦復活とその収支決算 ……111
8．横地講師　逝く ……112
同講師の銅像
9．記念祭に祝賀飛行機墜落 ……112
10．大陸会の活躍 ……113
(1) 満州駐屯軍慰問　(2) 満鮮旅行団
11．井上準之助暗殺される ……113
12．活字合金の研究で本校卒業生賜杯 ……113
13．第10回卒業式 ……114
学校長式辞
14．第11回卒業式 ……115
学校長式辞
15．軍事教練 ……117
16．第13回開校記念祭 ……117
17．就職状況ようやく好転 ……117
(1) 就職難時代　(2) ようやく好況に向かう　(3) わが世の春となる　(付) 昭和６年までの卒業生就職状況調査
18．本校６博士祝賀会 ……120

19. 第12回卒業式 ……121
学校長式辞
20. 昭和９年の記念祭 ……122
21. 実業教育50周年
鈴木校長，河合教授表彰 ……122
22. 松田文相の来校 ……123
23. 高工時報創刊10周年を迎える ……123
24. 創立15周年 ……124
25. 学園人事 ……124
池内教授　退官，木戸教授 理学博士に，河合教授 工学博士に，安中助教授 逝く
26. 校友会運動部の活躍 ……125

第５節　鈴木校長の退任と冨山校長の就任
1. 鈴木校長の退任 ……132
2. ３教授の辞任 ……136
3教授略歴
3. 横浜工業会主催　新旧母校々長送迎会 …136
4. 鈴木前校長　感謝会 ……140
5. 鈴木前校長　名誉教授に ……142

第６節　名教自然碑
1. 設立までの経過 ……143
2. 記念碑落成式 ……144
3. 当日の祝辞 ……145
(1) 委員長報告　(2) 祝辞．徳富蘇峰，大幸勇吉，青木周三，有吉忠一，近藤賢二，安川数太郎，　日野義一　田尻常雄(3)挨拶：鈴木達治
4. 徳富蘇峰選文(碑裏面) ……156

第２章　　冨山校長時代（昭和10年～昭和24年）

序 ……159

第１節　非常時から日支事変ぼっ発へ
（昭和10年～昭和12年）
1. 運動場確保される ……160
2. 図書館蔵書数 ……161
3. 第13回卒業式 ……161
学校長式辞
4. 入学検定合格者発表 ……163
5. 入学式 ……163
学校長挨拶
6. 横浜工人クラブ誕生 ……164
7. 昭和10年学園人事 ……164
岡実講師去る，藤村教授母校へ栄転，小山教授の辞任と草間博士の再任
8. 本校出身の最初の教授生れる ……166
9. 第３期復興工事 ……166
学校校舎等配置図
10. 夏季実習 ……167
11. 野外演習 ……167
12. 開校15周年記念式 ……168
学校長挨拶　開校15周年記念祭
13. 新艇３隻進水 ……169
14. 第14回卒業式 ……169
学校長式辞
15. 渡辺義勝講師　本校10人目の博士に ……171
16. 百戦百勝
弘陵漕艇史に刻む不滅の歴史 ……171
17. 第３期復興工事成る ……172
18. オリンピック(ベルリン)視察 ……172
19. 入試に全科筆記試験を実施と発表 ……172
20. 第16回記念祭 ……173
21. グライダー「そよかぜ」号 ……173
22. 山田教授辞任 ……174
23. 体育研究会発足 ……174
24. 12年度入学志願者 ……174
25. 第15回卒業式 ……175
学校長式辞
26. 運動選手の体位 ……176
27. 特設防護団設置 ……177
28. 工業技術員養成科設置 ……177
29. 事変下記念祭開催 ……178
30. 御真影奉戴 ……178
31. 出征会員の慰問
本校関係者相ついで出征 ……178
本間・大木両教官も出征
32. 井上助教授逝去 ……179
33. そのころの人事 ……179
遠藤・堀江両教授辞任，河村助教授　教授に，箕作講師解嘱，山本助教授来校
34. 本校卒業生初の工博・理博生れる ……180
35. ようやく内装工事に着手 ……180
36. 校友会各部の活躍 ……181
(1) 対内的なもの　(2) 対外的活躍　(3) 新応援歌

第２節　日支事変より宣戦布告まで
（昭和13年～昭和16年）
1. 航空工学科独立をひかえ，
海軍機など下付 ……186

2. 志願者数激減 ……186
3. 第16回卒業式 ……187
学校長告辞
4. 飯島中尉戦死　本校卒で初めて ……188
5. 煙洲翁　前線を慰問 ……188
北満，北支旅行談
6. 航空工学科の設置 ……189
学科課程　富山校長の追想
7. 校内洪水で休講 ……193
8. 集団勤労作業　プール造り ……193
9. 第４期工事成る　新館で授業開始 ……193
10. 第３学年　授業繰り上げ ……194
学校長談
11. 第18回開校記念式 ……194
学校長式辞
12. 本年度記念祭は中止 ……195
13. 遠藤先生胸像除幕式 ……195
14. 準戦時下の就職情況 ……196
学校長談
15. 13年学園人事 ……198
三井教授辞任，川田助教授来任，中島助教授　教授に栄進，河合教授辞任，津村教授着任，寺沢教授辞任，後任に木原教授
16. 建築学科前進の歌 ……199
久遠に尽きぬ芸術の流
17. 14年度入試 ……199
18. 第17回卒業式 ……200
学校長式辞
19. 慰霊祭挙行 ……202
20. 高工時報300号を迎う ……202
21. 天皇御親閲 ……203
22. 大陸会の復活 ……203
23. 航空工学科新館落成 ……204
24. 木炭自動車使用 ……204
25. 夏季勤労奉仕 ……204
26. 電化満州工業調査隊 ……205
27. 興亜青年勤労報国隊に参加 ……205
28. 原富太郎逝く ……206
原三渓先生記念碑成る
29. 第19回記念式 ……207
学校長祝辞　記念祭校内開放
30. 繰上げ就職　校友会送別会 ……208
31. 14年学園人事 ……208
紫田教授着任，鈴木助教授ハルビン工業大学へ，森川正助教授の入営後任木村講師
32. 本校建築学科の真価を発揮 ……208
33. 皇紀2,600年　紀元節式典 ……209
34. 第18回卒業式 ……210
学校長式辞
35. 15年度入学式 ……212
36. 学級の増加と教授陣の多忙 ……212
37. 中野正剛の講演 ……213
38. 高工初の女生徒 ……213
39. 夏季集団勤労奉仕 ……213
40. 第２回興亜勤労報国隊 ……213
41. 渡辺勝三郎逝く ……213
42. 開校20周年記念式典および記念祭 ……214
学校長談
43. 輝く永年勤続者 ……215
44. 校友会の解散と報国団の結成 ……215
(1) 校友会解散までの経過　(2) 報国団の結成と校友会の解散　(3) 解散時の校友会　(4) 報国団規則　(5) 報国団役員
45. 15年度査閲　査閲官賀陽宮殿下 ……220
46. 紀元2,600年奉祝 ……221
47. 生徒課新設 ……237
48. 15年学園人事 ……221
津村教授博士に，川井助教授応召，高橋教授辞任，山野教授着任，木下教授着任，草間教授講師に，木下教授博士に，友成助教授教授に昇進，三原教授博士に
49. 報国団団歌成る ……222
50. 報国団予算(16年度) ……223
51. 第19回卒業式 ……224
学校長式辞
52. 16年度合格者発表 ……224
53. 準戦時下の学生生活 ……225
54. 相つぐ朗報　建築科出身者当選 ……226
55. 第３回興亜青年勤労報国隊に参加 ……227
56. 学校報国団を再編成
学校報国隊生まれる ……227
57. 第21回記念式および記念祭 ……228
58. 遠藤博士逝く ……228
59. 大東亜戦争に突入　その日の学園 ……229
60. 16年度卒業は12月と決定 ……230
61. 第20回卒業式　12月に繰上げ挙行 ……230
学校長式辞
62. 学年暦　臨時措置 ……231
63. 盛大な土俵開き ……231
64. 報国隊強化 ……231
65. 16年学園人事 ……231
津田教授辞任，会計課主任大山春翠去る，小竹助教授辞任　鈴木京平教授栄転，鈴木助教授応召，鈴木，森川両助教授　教授に昇進，工藤教授着任，中野教授転出，広田講師教授に
66. 校友会および報国団鍛錬部の活躍 ……233
新応援歌を採用

第３節　宣戦より終戦まで
(昭和17年～昭和20年)

1. 17年の新春を迎える ……239

2. 第１回大詔奉戴日 ……240
3. 報国団予算成る ……240
昭和17年度報国団予算
4. 大東亜学徒大会 ……241
5. 第１次戦捷慶祝日 ……241
6. 教練査閲　成績優秀 ……241
7. 学生５訓 ……241
8. 入学志願者願書受付け締切る ……242
9. そのころの授業料など ……242
10. 17年度入学式 ……242
11. 本校報国隊に初の出動命令下る ……243
12. 本校の台所(昭和17年度) ……243
13. このごろの学園の春 ……243
学園の春（鶴岡生）校庭桜花（煙洲）
14. 敵機本土に初空襲 ……244
15. 躍進する本校科学研究陣 ……244
16. 図書課に課長を置く ……245
17. 野球班　全国制覇す ……245
18. 卒業生送別各科対抗体育大会
機械科優勝 ……246
19. 第21回卒業式 ……246
学校長告辞
20. 待望の講堂成る ……247
21. 開校22周年記念式および記念祭 ……248
22. 皇居前に戦勝祈願　学校から強行軍 ……248
23. 金属回収と鈴木前校長胸像応召 ……248
24. 17年学園人事 ……249
河村教授 博士に，津村教授 東工大へ，池田教授 東大へ，吉岡助教授 応召，山下博士 逝く，中島教授 博士に
25. 17年鍛錬部，国防部の活躍 ……250
26. 対高商定期戦すべて中止，成績一覧表 …253
対高商野球戦の今昔
27. 決戦２年の春を迎える ……253
学校長談
28. 大詔奉戴日 ……253
29. 冬季鍛錬 ……253
30. 入営者壮行会 ……253
31. 遠藤教授胸像も応召 ……254
32. 本校に勤労動員令下る ……254
33. 18年度入学試験 ……254
18年度入学試験問題
34. 昇格問題起こる ……256
35. 努力会誕生 ……256
36. 報国団組織および予算 ……257
37. 戦没会員慰霊祭 ……257
38. 臨時全国専門学校長会議
同高等専門学校長会議 ……258
39. 新入生の野営　画期的壮挙 ……259
40. 総合鍛錬大会 ……259
41. 校内建設進む ……259
42. 就職早くも決定 ……259
43. 高専体育大会無期延期　文部省通達 ……259
44. 夏休みも返上　実習に錬成に ……259
教授陣も夏休み返上
45. 海軍予備学生入隊者壮行式 ……260
46. 第22回卒業式 ……260
学校長式辞
47. 海軍より計算を依頼 ……261
48. 教育に関する戦時非常措置方策決まる …262
49. 開校記念式典挙行　記念祭は中止 ……262
学校長談
50. 錬成大会 ……263
51. 連合演習 ……263
52. 報国団改組　新報国団組織 ……263
53. 渾大坊小平　新情報班長に ……264
54. 18年学園人事 ……264
山本教授逝く，新学年を迎え教授陣異動，遠藤教授京城大へ，田口講師 教授に，阿部教授 博士に，中島教授 急逝，横山教授 金沢高工校長に栄転，本間教官帰還
55. 昭和19年を迎える ……266
56. １月８日大詔奉戴日 ……266
57. 紀元節におしるこの配給 ……266
58. 血液型 ……266
59. 本年度入学者増員募集　入学者発表
受験者の体力 ……267
60. 学徒勤労動員について ……268
(1) 春休みの勤労動員 (2) 新学期の勤労動員（富山校長談）(3) 夏休みから冬への勤労動員 (4) 勤労動員に対する批判
61. 新食堂完成 ……271
62. 教職員　日曜日返上 ……271
63. 昭和19年ごろのカリキュラム ……271
64. 新入生野営訓練 ……272
65. 名称変更　横浜工業専門学校となる ……272
官立工業専門学校規程
66. 報国団規則一部改正 ……273
19年度報国団予算
67. 六ツ川夜話擱筆 ……273
68. 横浜高工時報　廃刊となる ……273
廃刊の辞　弘陵雑報発行
69. 中等学校教員錬成講習会 ……274
70. 初の警戒警報発令 ……275
(森川日記)
71. サイパン陥落　東条内閣総辞職 ……275
72. 第23回卒業式 ……275
思い出：鳥飼直親
73. 開校記念日に初の空襲警報 ……276

74. 12月８日大詔奉戴日
開戦３周年を迎える ……276
75. 空襲はげしく 年暮れる……276
(森川日記)
76. 19年学園人事 ……277
77. 昭和20年を迎える ……277
78. 在郷軍人横浜工専分会発会式 ……277
79. 勤労動員と授業 ……278
建築科の動員について 木藤広太郎談
80. 電気通信科の増設 ……278
東芝分室長 今井春蔵談
81. 決戦下の入学試験と入学式 ……279
82. 横浜初空襲 ４月４日 ……280
83. 学校疎開案と冨山校長の反対 ……280
84. 学制の変遷 学校の教育的玉砕 ……280
85. 授業を１年間停止ただし本校では継続 …281
86. 戦時研究依頼 白樺油 ……281
87. 神奈川県と空襲 ……281
88. 空襲と本校 ５月29日の大空襲 ……282
森川日記，５月29日の空襲 冨山校長，横浜空襲の思い出 古賀基夫
89. 吉田嘱託一家戦災死 ……283
90. ８月15日終戦 ……283
(森川日記)，終戦前後のこと佐藤仁
91. 必勝懇談会と首相官邸襲撃事件
(終戦秘話) ……284
(1) 煙洲残筆より (2) 鈴木首相襲撃の一隊 日本終戦史 (3) 痛ましい記録 阿部滋弘

第４節 終戦から新制大学となるまで
(昭和20年９月～昭和24年５月)
一般概況 ……287
教育関係の概況 ……288
(1) 文部省の応急措置 (2) 連合軍総指令部指令 (3) アメリカ使節団来朝 (4) 教育刷新委員会の発足 (5) 教育勅語の問題 (6) 教育基本法の制定 (7) 学校教育法と新学制 (8) 陸海軍諸学校生徒転学
1. 終戦直後の苦難 校舎接収命令 ……289
2. 授業再開 ……290
3. 第24回卒業式 ……291
4. 航空機科の廃止 ……291
航空機科卒業生数
5. 食糧難のため休校 ……292
6. 昭和21年を迎える ……292
7. 授業再開 ……292
8. 公職追放と鈴木前校長 ……292
9. 戦後初めての入学試験 ……293
10. 電気通信科を電気科と改める ……293
11. 横浜高工時報復刊第１号 ……293
12. 校内に清新の気 ……294
13. 教務課一本建てとなる ……294
14. 鈴木前校長の講演 ……294
15. 出席率低下 夏休み早まる ……294
16. 体育館改装 ……295
17. 校内人事委員会設立 ……295
18. 校友会の復活 ……295
ハマの早慶戦再開からその終りまで 思い出：小泉仰 籠球部強し
19. 昭和22年を迎える ……296
20. 事務取扱更迭ならびに新理事 ……296
21. 校友会規則改正 ……296
校友会規則
22. 第25回卒業式 ……298
学校長訓示
23. 22年度入学式，狭き門女子に開く ……299
24. 進学適正検査の実施 ……299
冨山校長の思い出話
25. 昭和23年を迎える ……299
26. 第26回卒業式 ……300
学校長告辞
27. 23年卒業生の就職状況 ……301
28. 23年度入学志願者 工専最後の入学者 …301
29. 横浜工業会総会 ……301
30. 横浜貿易産業科学研究所 ……302
大船の思い出 中村康治
31. 講堂焼失
ベヒシュタイン・ピアノは無事 ……303
32. 陸上優勝 ……303
33. その頃の学生々活 ……303
戦後の学生生活 川口輝明，その頃の学生生活 松沼厚士，野球戦と記念祭 松沼厚士，そのころの思い出 吉田孝，戦後の学生生活 北島宣光，第一寮の思い出 小暮陽三
34. 自治会の誕生 ……305
35. 第27回卒業式 ……306

後 編

第１章 横浜国立大学工学部の誕生

序 ……307
第１節 新制大学へ ……308
1. 新制大学設置への準備 ……308
2. 大学設置委員会 ……308

3．単科大学案 ……308
4．大学人事委員会の設置 ……309
5．後援会の活動 ……309
発起人依頼状　横浜工業大学設立後援会趣意書
6．総合大学を指令 ……312

第2節　横浜国立大学の生まれるまで……313
1．審査 ……313
2．学校名決定　横浜国立大学 ……313
3．横浜国立大学ここに誕生 ……314
冨山学長の苦労，国立学校設置法(抄)，国立学校設置法施行規則(抄)
4．各地の新制大学 ……316

第2章　創設期の横浜国立大学工学部

序 ……318
第1節　発足時の工学部
1．横浜国立大学の発足 ……319
包括学校の沿革，初期の横浜国立大学工学部概要，横浜国立大学学則，横浜国立大学工学部規程，施設
2．第1回入試および入学式 ……335
3．開学式 ……336
記念植樹
4．徽章について ……337
5．工学部長に阿部教授 ……337
阿部教授　略歴
6．本学工学部の教養基礎科目の充実 ……338
7．科目の成績表示を決定 ……338
8．イールズ旋風 ……338
9．自治会捜査される ……339
10．第2次アメリカ教育使節団来校 ……339
2．昭和25年度の大学，工専 ……340
昭和25年学校要覧(抜粋)
3．横浜工業専門学校32年の歴史を閉じる ……348
思い出：下平欣一，渡辺隆，N生
4．横浜高工（工専）の卒業生総数，分布状況 ……348
5．講堂跡に事務局庁舎完成 ……349
6．工学部長に江国教授 ……349
江国教授　略歴
7．27年度就職状況 ……350
8．27年度入学試験 ……350
9．授業料値上げ ……351
10．冨山校長の退任 ……351
冨山学長退任の辞，鈴木達治談

第2節　工専から大学へ冨山学長の退任 ……340
1．開校ここに30年 ……340

第3章　工学部の発展

序 ……354
第1節　工学部の拡充発展(昭和27年～昭和43年)
1．江国教授学長に就任 ……355
2．横浜国立大学学長候補者選挙規程 ……355
旧，新
3．入学試験および入学式 ……357
4．冨山保（初代学長）名誉教授に ……358
冨山学長略歴
5．横浜国立大学名誉教授の称号授与規程 …358
6．第1回横浜国立大学卒業式 ……359
7．電炉電解実験室完成 ……360
8．煙洲鈴木達治　横浜文化賞 No. 1 ……360
9．評議会規則を制定 ……360
新，旧，横浜国立大学事務機構図
10．進学適性検査　廃止 ……362
11．工学部に専攻科設置 ……363
12．工学部建築学科実験研究室の一部竣工 …363
13．工学部長に山中直次郎教授就任 ……364
14．協議会規程 ……364
15．学生歌「みはるかす」……364
16．横浜国立大学工学部付属カーバイド化学研究所施設の設置から，材料基礎工学研究所施設に発展するまで ……365
カーバイド化学研究所規程，カーバイド化学研究施設規程，材料基礎工学研究施設規程

17．横浜国立大学工学部　施設拡充後援会 …368
趣意書，資金募集要領，会則，収支一覧表，図書館工事概要，研究センター工事概要，飯島教授の話
18．化学２号館竣工 ……374
19．工学部長に永井彰一郎教授就任 ……374
永井教授略歴
20．校歌の制定 ……375
21．金属工学科設置 ……376
三原教授略歴，学科目
22．横浜国立大学工学部金属工学科施設拡充後援会 ……378
趣意書
23．多和田寛教授の急逝 ……378
24．第一寮移転改築 ……379
25．黒沢学長（第３代）就任　江国前学長に名誉教授の称号授与 …379
黒沢教授略歴
26．工学部長に大岡実教授就任 ……379
大岡教授略歴
27．工学部長に岩崎高雄教授就任 ……380
岩崎教授略歴
28．金属工学科実験研究室完成 ……380
29．横浜国立大学工業教員養成所開設から廃止まで ……380
卒業生数
30．煙洲鈴木達治　米寿祝賀会 ……381
31．煙洲鈴木達治　逝く ……382
煙洲会について
32．第二、第三寮閉鎖問題 ……383
33．化学工学科の新設 ……384
新設を企図した理由とその構想，学科目，野手教授略歴
34．工業教員養成所のいっせい授業放棄 ……390
35．工学部電気工学科，化学工学科実験研究室完成 ……391
36．大学院工学研究科設置 ……392
設置案
37．横浜国立大学大学院学則制定　同委員会規則制定 ……393
38．大学院第１回入学式挙行 ……396
39．工学部長に中村教授就任 ……396
中村教授略歴
40．図書館落成 ……397
41．横浜国立大学大学院第１回修了式 ……397
42．中村教授学長に就任 ……397
43．河村文一名誉教授に ……398
河村教授略歴
44．工学部長に河東教授就任 ……398
河東教授略歴
45．一般教育審議会設置 ……398
一般教育審議会規程，一般教育についての横浜分校暫定規程
46．阿部滋弘名誉教授となる ……401
47．工学部長に小山教授就任 ……401
小山教授略歴
48．安全工学科の新設 ……402
講義要目，北川教授略歴
49．安全工学科の建築 ……405
50．42年頃の工学部の運営について ……405
小山工学部長談
51．昭和43年（明治100年）学長の年頭の辞 …406
52．第20回入学式 ……407
学長式辞
53．黒沢 清，森川幾久雄　名誉教授に……410
森川教授略歴

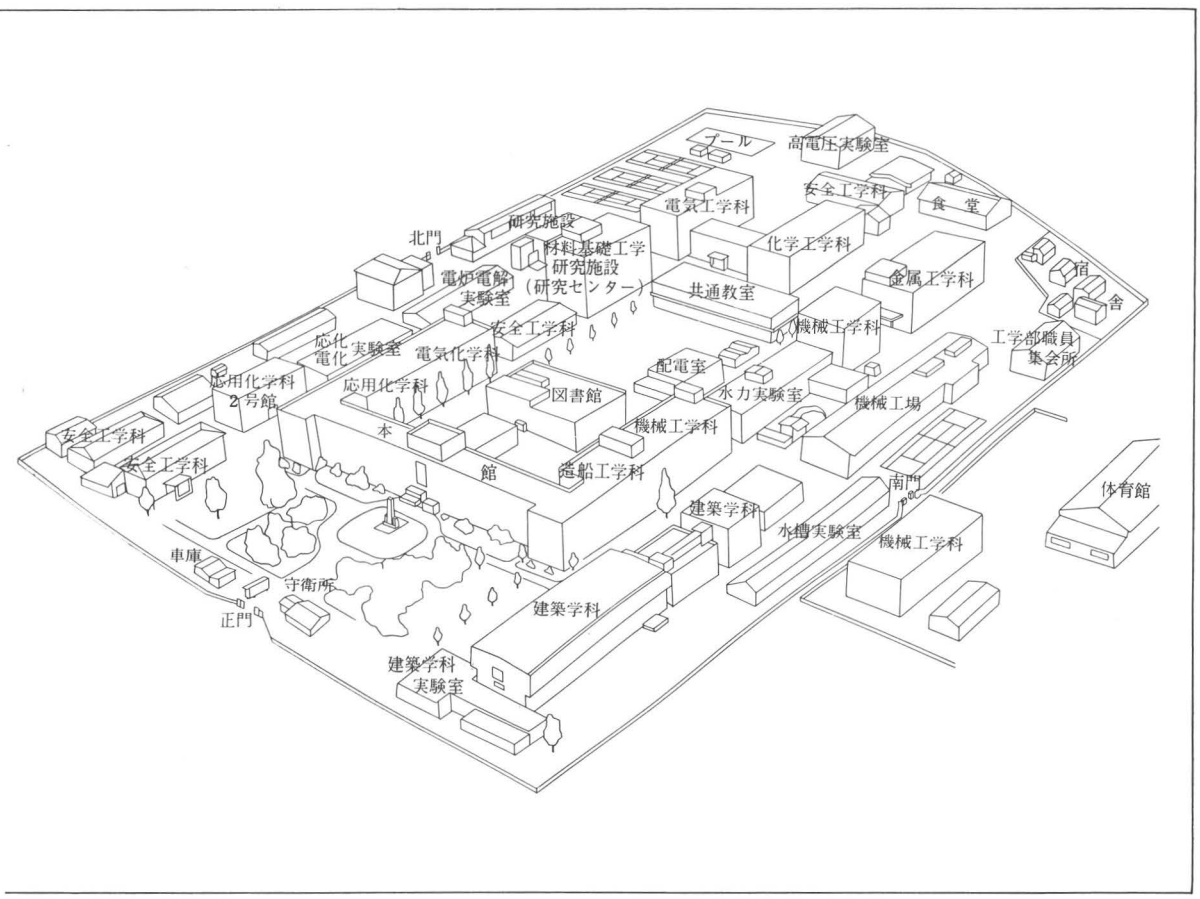
第２節　統合問題と学園紛争 ……411
1．学舎統合について ……411
(1) 当初案　(2) 大船案　(3) 第３案　(4) 保土ケ谷に決定　(5) 土地取得で難航，統合委員会規約　(6) 第１次土地購入成る，中村学長の「統合の道程」(7) 第２次土地購入成る，中村学長のよろこび　(8) 統合企画委員会，連絡会議，統合企画委員会規則，建設委員会規程
2．学報および統合ニュースの発刊 ……415
(1) 学報発刊　(2) 統合ニュース
3．学園紛争 ……416
(1) 紛争のはじまり　(2) 工学部見解「工学部学生諸君に告ぐ」(3) ７項目の要求　(4) 団交つづく　(5) 最悪の事態に突入，「紛争について思う」中村学長　(6) 田口工学部長の就任，就任あいさつ，田口教授略歴　(7) 中村学長の辞任　(8) 水戸部学長事務取扱の就任と紛争解決への努力　(9) 工学部の封鎖解除と授業再開，声明書　(10) 水戸部学長事務取扱の辞任，「辞任にあたりて」水戸部教授略歴　(11) 越村学長事務取扱の就任と紛争解決への決意，「学長代行をお引きうけするにあたって」越村教授略歴　(12) 工学部集会　(13) 全学集会　確認書　(14) 清水ケ丘封鎖解除，立入禁止，告示　(15) 全学授業再開
4．全学封鎖中の入学試験 ……431
5．卒業式中止 ……433
卒業生を送るに当りて水戸部学長事務取扱
6．入学式中止 ……433
新入生諸君への挨拶水戸部学長事務取扱
7．田口工学部長再選 ……434
8．黒川教授　逝去 ……434

第３節　横浜国立大学工学部（高工・工専）50周年を迎える
1．昭和45年の新年を迎える ……436
「新年を迎えるにあたって」越村学長事務取扱
2．越村信三郎学長に就任 ……437
「学長就任にあたって」
3．大学院修了式と入学式 ……438
4．卒業式と入学式 ……438
「卒業の式辞にかえて」「新入生諸君を迎えるにあたりて」越村学長

5．昭和45年度入学試験に関する調査 ……440
6．機械工学部第２学科の設置 ……442
7．事務局の移転 ……442
8．一般教育の改革 ……443
9．広報の発刊 ……444
広報委員会規則
10．学舎統合への努力再開
統合配置計画図 ……445
建設委員会細則，設計委員会細則
11．45年ごろの工学部の学舎 ……449
12．創立50周年記念祝賀会 ……449
挨拶：別府英一，田口工学部長　祝辞：越村学長，富山元学長

付　表

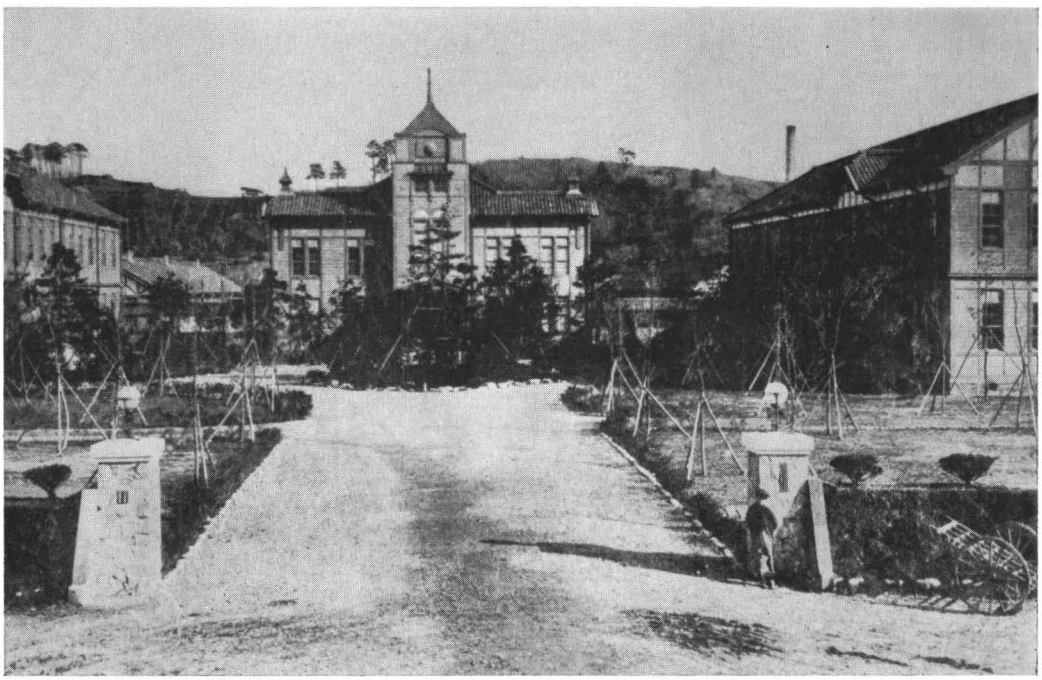
1．横浜高等工業学校創立時の教員名簿（大正９年） …… 454
2．教員異動状況一覧表（大正10年～昭和19年） …… 454
3．歴代管理職一覧表 …… 458
4．歴代学長 …… 458
5．横浜国立大学工学部教員名簿（昭和27年） …… 458
6．教員異動状況一覧表（昭和28年～昭和45年） …… 459
7．横浜国立大学工学部教員名簿（昭和45年） …… 461
8．横浜国立大学工業教員養成所創設時の教員名簿（昭和36年） …… 462
9．教員異動状況（昭和37年～昭和44年） …… 463
10．横浜高等工業学校（工専）入学状況一覧表 …… 463
11．横浜国立大学工学部入学状況一覧表 …… 466
12．横浜高等工業学校（工専）卒業状況一覧表 …… 468
13．横浜国立大学工学部卒業状況一覧表 …… 470
14．定員変遷一覧表 …… 471
15．横浜国立大学工業教員養成所入学・卒業状況一覧表 …… 474
年　表 …… 475
おもな参考文献 …… 485
編集後記 …… 486

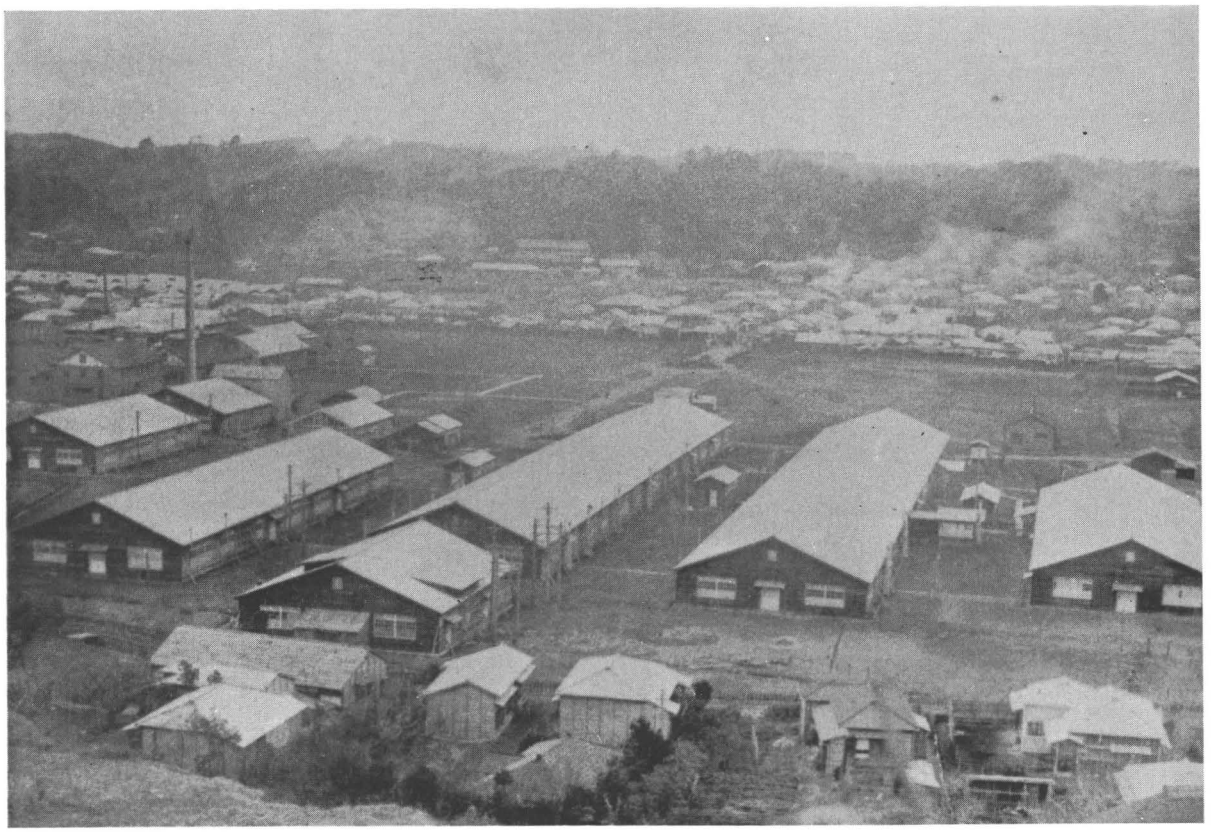

プール
高電圧実験室
安全工学科
食　堂
電気工学科
研究施設
北門
材料基礎工学
研究施設
（研究センター）
化学工学科
電炉電解
実験室
共通教室
金属工学科
宿
舎
安全工学科
機械工学科
工学部職員
集会所
応化
電化　実験室
電気化学科
配電室
応用化学科
2号館
応用化学科
図書館
水力実験室
機械工場
安全工学科
本
機械工学科
安全工学科
館
造船工学科
南門
体育館
建築学科
水槽実験室
機械工学科
車庫
守衛所
建築学科
正門
建築学科
実験室

現在の校舎

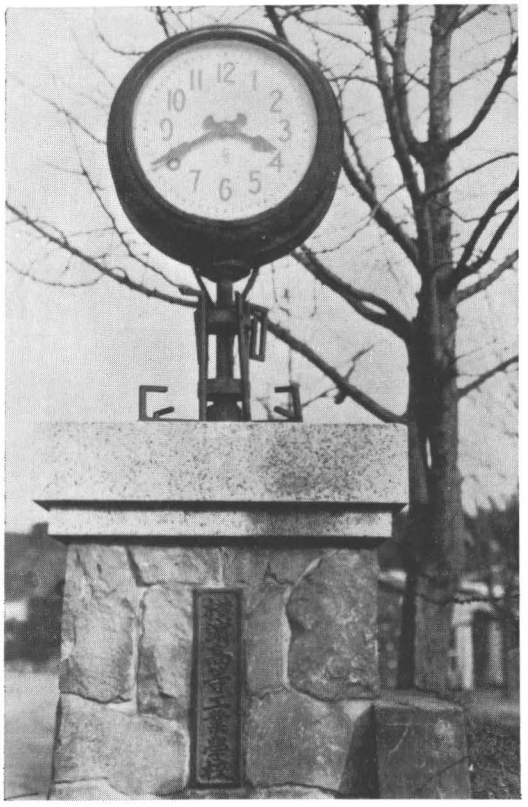
工学部本館正面

関東大震災前の校舎





震災後の校舎

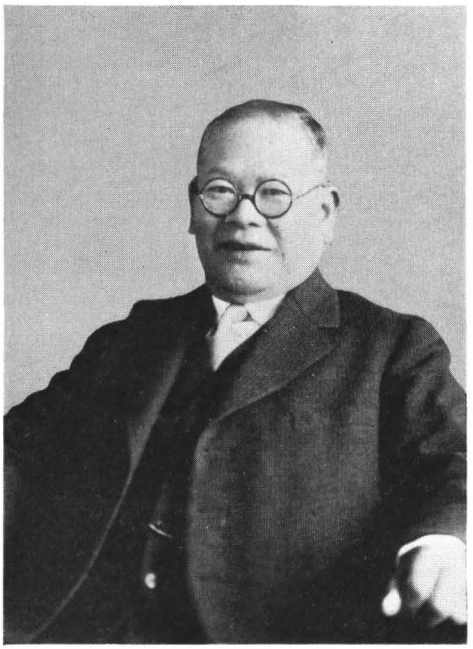


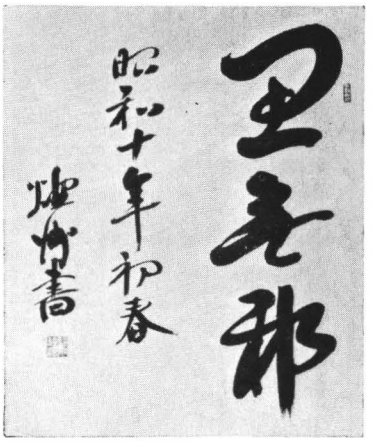
門柱と時計

校　旗

初代校長

鈴木達治

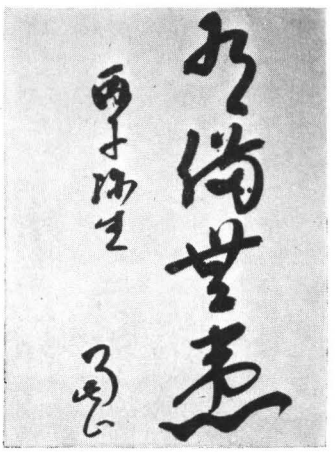




名教自然碑

第２代校長
初代学長
初代工学部長

冨山　保



校長就任時代の筆蹟

開校(大正)時代の
商議委員

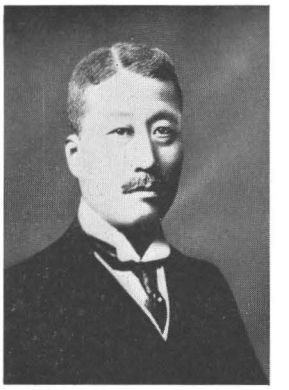
井上準之助

井上孝哉

井坂　孝

原　富太郎

渡辺福三郎



久保田政周

左右田喜一郎

渡辺勝三郎

安河内麻吉

中村房次郎

清野長太郎

堀切善次郎

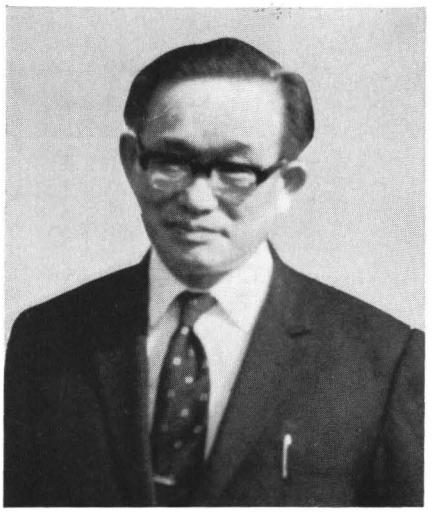
有吉忠一

歴代学長

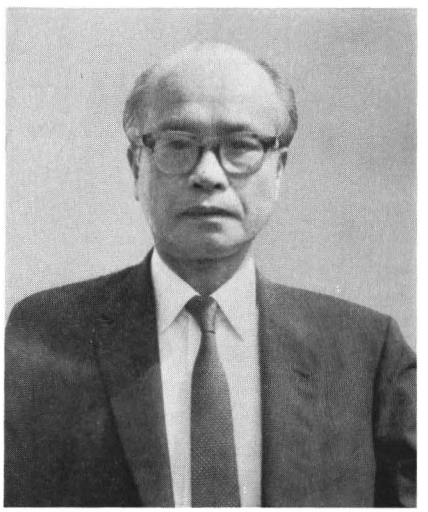
第２代学長・第３代工学部長　**江国正義**

第３代学長　**黒沢　清**

第４代学長・第９代工学部長　**中村康治**



学長事務取扱(教育学部長)　**水戸部正男**



現学長　**越村信三郎**

歴代工学部長

第３代校長
第２、４代
工学部長　阿部滋弘

第５代工学部長　山中直次郎

第６代工学部長　永井彰一郎

第７代工学部長　大岡　実

第８代工学部長　岩崎高雄

第10代工学部長　河東　準

第11代工学部長　小山永敏

現工学部長　田口武一

統合地の航空写真

前　　編

大正９年～昭和24年

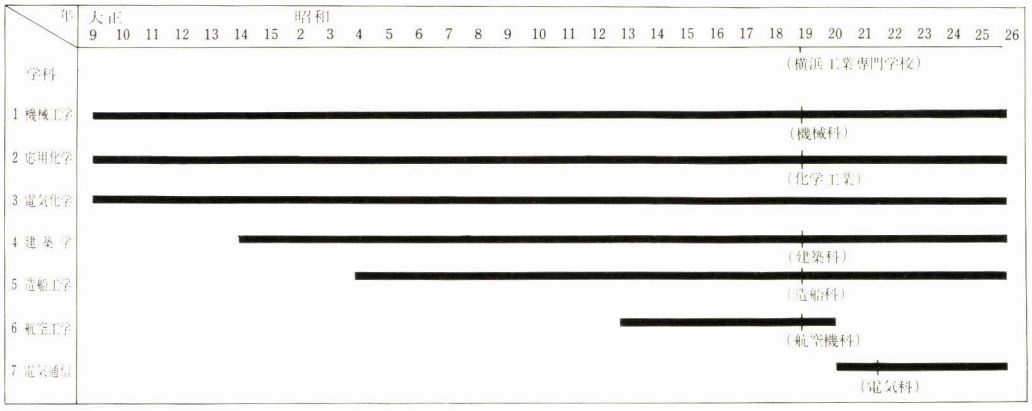
大正９年、わが横浜高等工業学校は、弘明寺の一角に地を卜(ぼく)し、鈴木達治を初代校長に迎え呱々(ここ)の声をあげた.

前編ではこの発足時より、終戦後の昭和24年新制大学工学部に移行するまでの、高工時代について述べる.

鈴木校長は自由啓発、名教自然の旗じるしを高くかかげ、官立学校として当時としては特異な教育方針をうち立てた. 昭和10年２代校長として冨山保が就任したが、前校長の方針をうけつぎ、特に戦時中の教育については、なみなみならぬ困難に遭遇しながらよくこの校是の本旨を存続した.

学科の増設（高工）

（　）は名称変更



序 章　日本における実業専門学校の歴史

(1) 明治時代

日本における実業専門学校の歴史は古い．すなわち明治36年３月27日勅令第62号をもって「実業学校令」を改正し，「第２条　実業学校ニシテ高等ノ教育ヲ為スモノヲ実業専門学校トス」とし同年４月１日施行した．次の７校を施行の日より実業専門学校とした．

したがってそれ以前には正式には実業専門学校と称するものは存在しなかった．いずれも皆中等程度の実業学校で「只例外的に更に高等実業学校の設置を認めたに過ぎない」(実業教育50年史382頁)

札幌農学校　盛岡高等農林学校　東京高等商業学校　神戸高等商業学校　東京高等工業学校　大阪高等工業学校　京都高等工芸学校　　(以上７校)

次に明治時代の官立工業専門学校を一覧すると次の通りで，京都高等工芸学校，秋田鉱山専門学校を含めて８校に過ぎない．

〔東京高等工業学校〕 明治23年東京職工学校を改めて東京工業学校とし，同34年　東京高等工業学校と改称　昭和４年　東京工業大学となる

〔大阪高等工業学校〕 明治29年５月創設　同34年　大阪高等工業学校と改称　昭和４年　大阪工業大学となる

〔京都高等工芸学校〕 明治32年創立

〔名古屋高等工業学校〕 明治38年設立

〔熊本高等工業学校〕 明治30年第五高等学校工学部として創設　同39年分離して熊本高等工業学校となる

〔仙台高等工業学校〕 明治39年仙台高等工業学校として創立　明治45年東北帝国大学工学専門部となり　大正10年　東北帝大を離れて仙台高等工業学校と旧名に改称

〔米沢高等工業学校〕 明治42年設置　同年開校

〔秋田鉱山専門学校〕 明治43年設置　44年開校

注◇勅令第62号　　明治36年３月26日

実業学校令中左ノ通改正ス

第２条ノ２　実業学校ニシテ高等ノ教育ヲ為スモノヲ実業専門学校トス

第３条第１項……以下略

附　則

本令ハ明治36年4月1日ヨリ施行ス　以下略

◇勅令第61号　明治36年3月26日　改正昭和3年8号　昭和18年39号

専門学校令

第1条　高等ノ学術技芸ヲ教授スル学校ハ専門学校トス
専門学校ハ特別ノ規定アル場合ヲ除クノ外本令ノ規定ニ依ルヘシ

第2条　北海道府県又ハ市ハ土地ノ情況ニ依リ必要アル場合ニ限リ専門学校ヲ設置スルコトヲ得　但シ沖縄県ハ此ノ限ニ在ラズ

第3条　略

第4条　略

第5条　専門学校ノ入学資格ハ中学校若ハ修業年限4箇年以上ノ高等女学校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等ノ学力ヲ有スルモノト検定セラレタル者以上ノ程度ニ於テ之ヲ定ムヘシ
但シ美術，音楽ニ関スル学術，技芸ヲ教授スル専門学校ニ就テハ文部大臣ハ別ニ其ノ入学資格ヲ定ムルコトヲ得
前項ノ検定ニ関スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

第6条　専門学校ノ修業年限ハ3箇年以上トス

第7条　専門学校ニ於テハ予科，研究科及別科ヲ置クコトヲ得

第8条　官立専門学校ノ修業年限，学科，学科目及其ノ程度並予科，研究科及別科ニ関スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム……以下略

第12条　第1条ニ該当セザル学校ハ専門学校ト称スルコトヲ得ス

附　則

第13条　本令ハ明治36年4月1日ヨリ之ヲ施行ス

第14条　明治20年勅令第48号ハ之ヲ廃止ス

第15条　以下省略

(2)　大正時代の高工教育の拡充

さきに述べたように明治時代の高等工業学校は秋田鉱山専門学校を入れて全国でわずか8校に過ぎなかった．しかしながら，このような少数の高工では，世界の一流国に伍（ご）しえないことは明らかである．欧州大戦後このことが痛感され高専教育の大拡張が論ぜられた．

寺内内閣時代（大正5年〜大正7年）に岡田良平文部大臣は，高等教育の拡大の大きな意図を抱いていたが実現をみないうちに，内閣は原内閣（大正7年〜大正10年）に変わり，中橋徳五郎が文部大臣となった．この時 4,450万円の追加予算を第41議会に提出可決した．この計画は大正8年度から大正13年度に至る6カ年間に，総収容力を2万人とし高等学校8校を25校に，高工8校を18校に，高等農林5校を10校に，高等商業5校を12校に，外語1校を2校になど大々的に新設するものであった(文部省実業教育50年史)．これによって増設された高工は本校を含め次の通りであった．

横浜高等工業学校

桐生高等工業学校　大正4年桐生高等染織学校として誕生，創立当初は色染科と紡織科であったが，大正8年応用化学科を加えた

広島高等工業学校　大正9年1月創立　創立当初の学科は機械工学科　電気工学科　応用化学

科　醸造学科

金沢高等工業学校　大正９年11月創立　当初の学科は土木工学科　機械工学科　応用化学科

明治専門学校　明治42年４月私立明治専門学校として開校　大正10年３月文部省に移管
鉱山工学科　冶金工学科　機械工学科　応用化学科　電気工学科

東京高等工芸学校　大正10年12月創立　当初の学科は工芸図案科　金属工芸科　精密機械科
木材工芸科　印刷工芸科

神戸高等工業学校　大正10年12月設立　当初の学科は建築科　電気科　機械科

浜松高等工業学校　大正９年設立　当初の学科は機械学科　電気学科　応用化学科

徳島高等工業学校　大正11年10月設立　当初の学科は機械工学科　応用化学科　土木工学科

長岡高等工業学校　大正12年12月設立　当初の学科は電気工学科　機械工学科　応用化学科

福井高等工業学校　大正12年12月設立　当初の学科は建築科　機械科　繊維工業科

山梨高等工業学校　大正13年９月設立　当初の学科は機械工学科　電気工学科　土木工学科

第1章　鈴木校長時代（大正9年～昭和10年）

序　　世界大戦と工業立国　横浜市の希望

横浜市にわが横浜高工が設立されたのは大正9年であるが，それまでには横浜市に官立の大学はおろか　高等専門学校さえ一つもなかった．

鵬翼第2号（後述）にも記してある通り「顧みれば慶応2年に野毛の修文館が始て建てられたことは，恐らく我が横浜市に於ける官立学校の起源であらう．爾来多くの学校が有志の人々によって創められたが，要するに英語専門の学校で，工業教育など思ひもよらぬことであった．然るに文運進歩，往時の一漁村が帝都を凌がんとする大都市となり，商工業の発達に伴って多くの中等諸学校が競って創設さるるに至ったが，高等専門の諸学校に至っては，未だ一もその建設の運びに至らなかった．是れ誠にわが横浜市の為に否日本の為め遺憾この上なき次第であった．」

このように横浜市に大正の始めに至るまで高等専門学校が一校もなかったことは，諸学校の集中している東京に近接していたことが主たる原因であったであろう．

大正3年世界大戦が突発し，日本は空前の経済的繁栄をみるに至った．大正3年（1914）から大正8年（1919）にかけて農林，水産，鉱工業の総生産高は価格で3倍以上に増加した．とくに工業生産は5倍以上となった．製鉄，造船，機械器具の生産は急速に上昇した．工業立国が識者の間で叫ばれ，わが横浜市も横浜港から発達した商業都市であったが，貿易のもとは工業であるとして，工業の振興が市是として打出されるに至った．

ちょうどこの頃，すなわち大正5年頃であるが広島市に高等工業学校が新設されるというううわさが横浜市の有力者である井上準之助，佐藤善作，中村房次郎らの耳にはいった．中村房次郎は寺内内閣の文相高田早苗を訪問し，横浜市に高工を設けることを陳情した．文部省では横浜に専門学校を設置するなら，高工よりもむしろ高商を可とするという空気が強かった．しかし，さきにも述べたように，横浜としては工業立市を市是としていたので，高工招致を力説した．一方県，市では有志と相はかって，土地および創立費を政府に寄付することにより，これが実現を期することとなり，着々とその工作を進めた．以上が本校が設立されるまでの一般情勢である．

第1章　第1節　設　　立

1.　設立に至るまで

大正５年12月22日，有吉神奈川県知事から岡田文部大臣にあてて，横浜市に高等工業学校を設置されたいと申請，同時に創立費として大正６年度から大正10年度まで５カ年継続して計75万円，および敷地２万余坪を寄付する旨を稟申（りんしん）した．

そして同月28日，前記創立費，および敷地寄付の件は採納された．敷地は横浜市大岡町字中町，久能下にまたがり２万1071坪（約69,534.5 m²）が選定された．なおこの内訳は横浜市が創立費45万円，神奈川県が敷地全部と創立費30万円であった．

この間の事情については大正５年12月14日に開かれた神奈川県会における有吉知事の説明が詳しいので次に記しておく．

○県第28号議案

自大正６年度
至同　10年度　神奈川県教育寄附金継続年期及支出方法……可決

１金30万円　　教育寄附金

内訳

金６万円	大正６年度支出額
金６万円	大正７年度支出額
金６万円	大正８年度支出額
金６万円	大正９年度支出額
金６万円	大正10年度支出額

右高等工業学校建築設備費寄附金トシテ支出スルモノトス

○県第29号議案

不動産処分ノ件……可決

左ノ土地ヲ県下ニ高等工業学校設置ノ為該敷地トシテ国ニ寄附スルモノトス　但シ政府ノ都合ニ依リ敷地トシテ適当ナラスト認メラレタルトキハ之ヲ売却シ該売却代金ヲ以テ更ニ適当ノ土地ヲ買入レノ上寄附スルモノトス

横浜市南太田町字西中耕地　1778 番地ノ１　　同所字霞耕地1868番ノ１

１　原野段別１町６反７畝歩　　１　原野段別１町４反３畝９歩

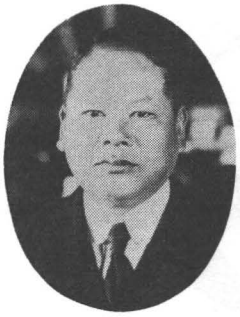
同所1778番ノ11　　合計段別　３町８段１畝29歩

１　原野段別７段１畝20歩　　此価格金13万7508円

以上の県第27号同第28号同第29号議案は，高等工業学校設置に関係ある議案である．

○提案理由知事説明

茲ニ提案ヲ致シマシタ大正6年度追加予算並ニ是ニ伴フ諸案ノ大体ノ説明ヲ致シタイト思ヒマス．唯今我国ノ工業界ノ状況ハ未曾有ノ活気ヲ呈シテ居リマス．誠ニ御同慶ニ存ズル処デアリマス．而カモ海外諸国ニ於ケル批評ヲ聞キマスルト云フト，我製品ガ粗製濫造デアルト云フ処カラ，将来此戦後ニ於テ我国生産品ノ信用ヲ持続スルト云フコトニ就テ大ニ危惧ノ念ヲ懐カシムルコトガアリマスルコトハ誠ニ憂慮ニ堪ヘヌ処デアリマス．是モ原因ニ就テハ色々ゴザイマセウト思ヒマスガ，併シ其中デ斯様ニナリマシタル大ナル理由ト申シマスノハ，注文ガ非常ニ多イニ拘ラズ，我生産力ガ是ニ伴ハヌト云フコトガ大ナル理由デアルマイカト思ハレルノデアリマス．生産力ヲ増加スルト云フニ就テハ，素ヨリ資本モ要リマスシ，原料モ要リマスガ，而カモ此生産力ヲ進メルニ就テ今日工業界ガ最モ苦痛ヲ感ジテ居リマス処ハ，之ニ当ル処ノ人物デアリマス．殊ニ其中デモ技術者デアルト云フコトハ明白ナル事柄デアリマス．政府ニ於キマシテハ此点ニ鑑ミル処ガアリマシテ，大ニ実業教育ノ進行ニ力ヲ致サレル趣意デアリマス．ソレデ是ニ就テハ色々計画サレテ居ル処モ多々アルヤウデアリマスガ，而カモ御承知ノ通リニ政府ノ財政モ色々ノ事業ノ為ニ頗ル急迫ヲ告ゲテ居ル次第デアリマスカラ，必要ハ認メテ居ルガ，直チニ之ヲ実行スルト云フ処ニモ至リ兼ネテ居ルヤウナ次第デアリマス．併シ此実業教育，殊ニ工業ノ高等ノ技術ニ当ル人物ヲ養成スルト云フコトハ今日ノ時勢ニ於テ最モ急務トスル処デアリマスル処カラ，何トカ致シテ之ヲ実行スル方法ヲ講ジタイト云フノデ，茲ニ政府――ト即チ国地方トガ共ニ力ヲ戮セテ此今日ノ刻下ノ急務ニ当ルヤウニシヤウヂヤナイカト云フ処カラ，政府ハ是ヨリ年々必要トシマスル処ノ経常費ヲ支弁イタシマスルガ，之ヲ建設スル最初ノ費用ハ之ヲ地方ノ供給ニ待ツコトガ出来ルト，此計画ヲ直チニ実行スルコトガ出来ルト云フ処カラ段々ト評議ヲ重ネマシテ政府ニ於テモ地方ニソレダケノ決心ガアレバ経常費ヲ負担スルト云フ意味デ予算ヲ組ム，ドウ云フ状態デアルカト云フ相談ヲ受ケマシタ．然ルニ是ハ重大ナル問題デアリマスルガ故ニ，参事会員諸君ハ素ヨリ，本会ノ議長，副議長，市部会ノ議長，副議長，郡部会ノ議長，副議長，此県会ノ役員諸君ニ非公式ナガラ御集リヲ願ヒマシテ内相談ヲ致シマシタ処，サウ云フ趣旨デアルナラバ，素ヨリ今日ノ国家ノ急務ニ応ズル事柄デアルノミナラズ，又此地方トシテハ地方ノ工業招致ト云フ上ニ於テモ多大ノ便宜ヲ得ルコトデアルシ，又都市ニ於ケル工業者ニ対シテ或ハ研究上ノ便宜ヲ与ヘ，或ハ技術者ヲ招聘スルニ就テノ便宜ヲ与ヘ，其他此地方ヲ発展向上セシムル上ニ於テ高等工業ノ出来ルト云フコトハ，単リ今日ノ国家ノ急用ニ応ズルバカリデナク，地方ヲ発展セシムル上ニ於テ多大ノ効果ガアルコトデアル故ニ，是ハ宜シク政府ノ希望スル処ヲ容レテ地方ト政府ト共同シテ此事業ヲ遂行スルコトガ得策デアルト云フ意味ヲ以テ同意ヲ表サレマシタ．其結果ニ基キマシテ更ニ是ハ県バカリノ力デモ実ハ多額ノ費用ヲ要シマスルノデ，負担ニ就テ心配ヲ致シマシテ，所在ノ地トナルベキ横浜市ニ対シテモ其幾部ヲ負担セシムルコトガ適当ト存ジマシテ，更ニ之ヲ市ニ諮リマシタ．市長ハ又ソレゾレノ方面ニ対シテ内交渉ヲ遂ゲマシタ処ガ，市ニ於テモ素ヨリ是ニ就テハ異論ノアル筈モアリマセズ，大ニ賛成ノ意ヲ表スルコトニ相成リマシタ．其金額ノ大要ヲ申シマスルト，敷地ハ素ヨリ全部，ソレカラ建築費ガ50万円，其建築ノ中ニ器械類ノ設備ヲ致シマスル設備費，初度調弁費ガ25万円，ソレデ金ト致シマシテ要スル処ガ75万円，ソレニ敷地ヲ加ヘテ提供ヲスルト云フコトニシテ貰ヒタイト云フ希望デゴザイマス．ソコデ此大体ノ趣旨ニ於テソレガ適当ナリト云フ相談ガ纏リマシタカラ，更ニ此市ト県トノ負担区分ニ就キマシテ，市ハ其中ノ45万円ヲ提供スル．県ハ丁度県有財産トシテ所有シテ居リマスル久保山ノ土地ガ，是ハ以前ニ売却スルコトニナツテ居リマシタノガ，其儘予定価格ガ高イガ為ニ売レズニ残ツテ居リマシタ．此土地ヲ提供ヲ致スコトニ致シマシテ，此価格ガ13万余円ト確カ記憶シテ居リマスルガ，坪平均12円デアリマス．此土地ト其他ニ要スル処ノ費用30万円，合セテ43万円ト云フモノヲ県ガ負担ヲスル，斯ウ云フ事ニ相談ヲ進メマシテ是デ略々内協議ガ調ヒマシタ．ソコデ其旨ヲ政府ニ返答致シマシタ．政府ハ此結果ニ基キマシテ来年度ノ予算ニ此建築費ヲ提案サレルコトニ定マリマシタ．ソレニ就キマシテ是ニ関係イタシマスル議決ヲ求メテ県ノ意思ヲ決定致ス必要ガゴザイマスルガ故ニ，是ニ関スル議案ヲ提案ヲ致シマシタ次第デアリマス．ソコデ唯今県ガ持ツテ居リマスル其敷地ヲ政府ニ提供イタシマシテ政府ガ其敷地デ可ナリト認メマシタ時ニハ至極簡単ニ事ガ運ビマスルガ，ソレガ不適当ナリト認メラレタ時分ニハソレニ代ルモノヲ提供スル必要ガゴザイマ



そのころの鈴木校長

岡田文部大臣〔昭和2年〕

ス．其場合ニハ唯今ノ敷地ヲ売却致シマシテ其売却代金ヲ以テ敷地ヲ購入シテ是ニ充テル考デアリマス．是等ニ対シマシテ願ハクハ本会ニ於キマシテモ相当便宜ナル方法ヲ購ゼラレルヤウニセラレムコトヲ深ク希望イタシマス．大体此案ニ伴ヒマス経過並ニ趣旨ハ以上申述ベルヤウナ次第デアリマス

つづいて大正6年10月9日東京高等工業学校長阪田貞一他4名が本校創立委員に委嘱された．

こうして設立の準備が着々と進められた．大正6年度より敷地の埋立て整理に着手し，同7年度より建築にとりかかった．しかしそのころから物価が異常に騰貴し，その影響をうけ工事は予定通りには進捗（しんちょく）しなかった．

2.　横浜高等工業学校設置　鈴木達治　初代校長に任命

大正9年1月19日，勅令第15号をもって文部省直轄学校官制を改正し，本校の設置が公布された．そして同日付けで，東京高等工業学校教授鈴木達治が，本校初代校長に任命された．

鈴木達治が本校校長に任命された時は齢50歳で，人間としても最も円熟した時であり，後にいわゆる名教自然で知られる新しい教育方針を胸にいだいて，勇躍赴任してきたのであった．鈴木校長は最初に校長任命の内意を受けた時のことを次のように述べている．

「私は初めて文部省に呼び出され，松浦局長から口頭で，お前を今般新設される横浜高等工業学校々長に任命するとの旨申し渡され，同時に学校は万事校長に任すのであるから，よろしく頼むと付言された．学校の経営は勿論文部省の監督下にあるが，万事学校長に任すの一言は私には有難かった．」（名教自然碑の由来と教育私見の断片より）

鈴木校長の専攻は化学であった．しかし校長として赴任するや深く期するところがあり，多年にわたり化学の講義のために編集した数10冊のノートを庭前に持ち出し，ことごとく焼き棄て，化学，物理，数学の書物，雑誌類は学校図書館に寄付し，背水の陣をしいて，学校経営に専念することを心に誓った．

3.　鈴木校長の略歴

明治4年9月11日愛媛県宇摩郡松柏村 525（今日の伊予三島市）鈴木礼作の長男として生れる．小学校卒業後，15歳で笈（きゅう）を負い，京都同志社予備校に学ぶ．明治19年9月同志社本科1年に編入される．同校4年修了で，同志社系のハリス理科学校に入学．化学を専攻し，3年の課程を修め卒業した．同志社においては校長新島襄，教頭浮田和民の感化を受けること大であった．

第2代
東京高等工業学校長
手島精一

第3代
東京高等工業学校長
阪田貞一

明治27年7月前記の理科学校卒業後，熊本の私立英学校に赴任したが間もなく辞任し，熊本第五高等学校の嘱託となり，しばらく英語を講じ，間もなく化学教室の助手となる．その間高等学校卒業の資格試験をとり，明治29年東京帝国大学化学科に入学，32年同校卒，直ちに仙台第二高等学校講師となる．後教授となり，明治37年広島高等師範学校教授に転ずる．広島高師在職3年で蔵前の東京高等工業学校教授に任ぜられ，直ちに欧州留学を命ぜられる．欧州では主としてドイツのハノバーの高等工業学校に籍を置き勉学2年10カ月，アメリカ経由で帰朝，横浜高工校長に任ぜられるまで，蔵前に職を奉じ．この間わが国工業教育の父といわれた同校校長手島精一の指導影響を受けること大なるものがあった．本校校長就任は手島校長の推輓（すいばん）によるという．

先生ははじめ天羊と号したが，のち煙洲と改めた．けだし煙草を好むことはなはだしかったによるという．

4. 新進気鋭の教授陣

大正9年1月19日，文部省直轄諸学校職員定員令によると本校の職員の定員は校長1，教授5，助教授1，書記3であった．ついで同年4月17日職員の定員が教授5を8，助教授1を3，書記3を4に，同年同月31日助教授3を4に改められた．さらに10年4月26日に教授8を13に，助教授4を6に，書記4を5に，11年4月29日に教授13を20に，助教授6を10に，書記5を6に改められた．

鈴木校長は校長に任命されるや直ちに各科の教授陣を選考，着々諸般の準備を進め，新進気鋭の少壮有能教授，助教授，講師を充当することができた．次に着任順に記す．

大正年月日	本校職名	氏名	備考（前任校その他）
9 1 19	校長	鈴木達治	東京高工教授
〃 1 31	助教授	堀江不器雄	東京高工助教授
〃 3 3	教授	岩橋遵成	文学士
〃 〃 〃	〃	遠藤政直	九大助教授，バチェラー・オブ・サイエンス
〃 〃 15	〃	安川数太郎	公立中学校教諭 理学士
〃 〃 30	〃	長俊一	広島高師教授 理学士
〃 〃 〃	〃	伊藤万太郎	秋田鉱専教授 工学士
〃 4 14	講師	平野利貞	理学士
〃 〃 24	助教授	石垣松三	
〃 〃 30	助教授	飯塚正市	東京高工助教授

9	5	31	教　　授	池　内　　本	理学士
〃	6	21	〃	水　野　常　吉	文部属，マスター・オブ・アーツ
〃	〃	30	講　　師	冨　山　　保	理学士
〃	9	1	〃	草　間　時　蕃	理学士
〃	〃	9	〃	渋　谷　武　松	
〃	〃	17	〃	浅　井　郁　太　郎	理学士
〃	11	11	〃	小　林　　鼎	
〃	〃	2	〃	佐々木　　等	東京高師訓導
〃	〃	13	教　　授	柏　木　一　三	理学士
〃	12	7	助　教　授	藤　川　由　太　郎	桐生高工助教授
〃	〃	〃	教　　授	河　合　　匡	東京高工教授
10	4	22	講　　師	山　田　健　吉	工学士
〃	5	9	教　　授	渡　辺　義　勝	理学士
〃	〃	〃	〃	津　田　幹　夫	理学士
〃	〃	14	講　　師	横　地　捨　次　郎	
〃	〃	16	助　教　授	横　山　盛　彰	理学士
〃	〃	〃	〃	今　井　行　雄	理学士

書記として庶務課主任小林長之助，会計課主任大山春翠，中谷章一，図書課調慧心が任命された．

なおこのうち助教授石垣松三（9年12月21日）講師平野利貞（10年1月31日）講師佐々木等（〃）は（　）内の年月日を以ってそれぞれ依願免本官または解嘱された．

また創立時の教職員一覧は資料「教職員名簿」を参照されたい．

〔開校時の在外研究員〕（留学教官）

氏　　名		自	至	場　所	研究題目
教　授	遠　藤　政　直	大正7年11月	9年1月	欧，米	水力及水車
〃	柏　木　一　三	大正7年	9年10月	仏	合成化学
〃	藤　村　利　常	年月日不明	11年2月	瑞典	合金類
〃	河　合　　匡	大正10年11月	12年　月不明	英，仏	材料強弱
	長　　俊　一	大正11年3月	12年　月 〃	英	化学工業
助教授	堀　江　不　器　雄	大正11年3月	12年　月 〃	蘭印	化学原材料

なおひきつづき大正年代には教授横山盛彰，教授池内本，講師伊藤直，教授安川数太郎，教授津田幹夫らがそれぞれ欧米各地に留学した．

5.　事務取扱について

鈴木校長は各学科に恒久的な学科長を置くことを不可として，大体1年ごとに順次交代する事務取扱の名称で，各科の科長事務を司る者を任命することとした．この制度は長く持続された．

6.　設立時のこと

(1)　**設立時の思い出**　書記　小林長之助（高工時報 昭和5年10月25日）

当校設置の官制が発布になりましたのは大正9年1月19日で，同日に現校長（鈴木達治）が就任せられ，その月の28日に大山氏（大山春翠）と私とが事務員として任命されたのであります．

私はこれよりさき，当学校創立事務嘱託として，文部省実業学務局に勤務し，すでに当学校設

堀江教授

立の事務に関係しておりましたが，当校職員として正式に勤務したのは任命当日からでありました．

いよいよ官制が出ましたので，文部省の室を借り受けて，横浜高等工業学校創立事務所の看板を掲げ，同時に設置された広島高工創立事務所と同居して事務を開始したのでありますが，当時は職員としては校長と私どもの3人の所帯でありました．2月中はこの事務所で規則の草案，学生募集等の仕事をして，3月1日から本校内に事務所を移し，同時に各職員が就任して入学試験から授業開始の準備をしたのであります．

(2) **創立時の思い出**　教授堀江不器雄　(高工時報 昭和5年10月25日)

鈴木校長もお若く非常にお元気だった．談論甚だ放胆で昼食後の食堂は賑やかだった．根岸のお宅から山越しに徒歩出勤せられることも多かった．各科の大教授達も30台の青年で学生の年齢との開きが少なく，加うるに創業の気魄が学園に充満し実に潑剌たるものがあった．学生は各自学園学風創立の責任感が強く字義通り自由啓発，正課に，研究に，校友会的活動に精進した．町では横浜に初めてできた専門学校で最高学府の学生たる誇りと名誉，羨望に甚だ多幸祝福すべき生活であった．その後震災の大試練を受けた学生諸君は，学校職員の復興精神と協調し．盛んなる精神生活時代が再現し，幾多の業績を残している．

7.　横浜高等工業学校規則

大正9年1月23日　本校の規則が制定された．これは本校の原始規則であるので，煩(はん)をいとわず次に記載する．

1，横浜高等工業学校規則

第1章　総　則

第1条　本校ハ実業学校及専門学校令ニ拠リ工業ニ従事スヘキ者ニ高等ノ学術技芸ヲ教授スルヲ以テ目的トス

第2条　本校ノ学科ハ機械工学科応用化学科電気化学科トス

第3条　本校各学科ノ修業年限ハ3箇年トス

第4条　本校ニ研究生及選科生ヲ置クコトアルヘシ

研究生及選科生ニ関シテハ別ニ規定アル場合ヲ除ク外本科生ニ関スル規定ヲ準用ス

第2章　学科課程

第5条　各学科ノ学科目及其ノ程度ハ左ノ如シ但シ必要ノ場合ニ於テハ定時間外又ハ休業期間ニ於テ臨時講演ヲ聴カシメ又ハ実習ヲ課スルコトアルヘシ

機械工学科

学科目＼学年	第1学年毎週教授時数			第2学年毎週教授時数			第3学年毎週教授時数		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
修身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体操	2	2	2	2	2	2	2	2	2
英語	5	5	5	4	4	4			
数学	6	6	6	4	4	4			
物理学	4	4	4						
機構学		1	1	2					
応用力学	2	2	2						
材料強弱学及機械力学				2	2	3			
水力学				2	2				
水力機						2	2	2	2
熱力学				1	1	2			
蒸気機関				2	2	2	3	2	
内燃機関							2	2	
空気機械							1	1	
電気工学			2	2	2	2	2		
物理実験				3	3	3			
電気工学実験							3		
機械設計法製図及学科実習	11	10	8	9	11	9	10	13	18
機械製作法	2	2	2	2	2	2			
工場実習	6	6	6	3	3	3	3		
実験工学講義							2		
機械工学実習							3	6	6
運搬機械								2	2
鉄鋼及合金								2	2
汽関車								1	1
紡績							1	1	1
経済原論							2	2	2
工場経営法							2	2	2
合計	39	39	39	39	39	39	39	39	39

応用化学科

学科目＼学年	第1学年毎週教授時数			第2学年毎週教授時数			第3学年毎週教授時数		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
修身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体操	2	2	2	2	2	2	2	2	2
英語	5	5	5	4	4	4	2	2	2
数学	4	4	4						
物理学	4	4	4						
無機化学	6	3	3						
有機化学		3	3	4					
物理化学					4	4			
鉱物学		2							
製造化学通論				3	3	3			

機械学				2	2	2	3	3	3
電気工学							2	2	2
機械製図				5	5	5			
化学実習	17	15	17	13	13	13	17	17	17
経済原論							2	2	2
工場経営法							2	2	2
製造化学特論				油脂工業 2 酸及アルカリ工業 3	油脂工業 2 酸及アルカリ工業 3	油脂工業 2 工業化学薬品類 3	油脂工業 2 化学肥料 4 合成化学工業 2	顔料塗料 2 合成化学工業 4 合成化学工業 2	顔料塗料 2 澱粉，砂糖工業 2 合成化学工業 2 醗酵化学 2
合計	39	39	39	39	39	39	39	39	39

電気化学科

学年 / 学科目	第1学年毎週教授時数			第2学年毎週教授時数			第3学年毎週教授時数		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
修身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体操	2	2	2	2	2	2	2	2	2
英語	5	5	5	4	4	4	2	2	2
数学	4	4	4						
物理学	4	4	4						
無機化学	6	3	3						
有機化学		3	3	4					
物理化学					4	4			
鉱物学		2							
電気磁気	2	2	2						
製造化学通論				3	3	3			
機械学				2	2	2	3	3	3
電気工学							2	2	2
機械製図				5	5	5			
化学及電気化学実習	15	13	15	15	15	15	19	19	19
経済原論							2	2	2
工場経営法							2	2	2
電気製造化学特論				電解工業 3	電解工業 3	電解工業 3	電炉工業 3 電鍍電鋳 3	電炉工業 3 電池工業 3	電炉工業 3 電灯 3
合計	39	39	39	39	39	39	39	39	39

第3章　学年，学期及休業日

第6条　学年ハ4月1日ニ始リ翌年3月31日ニ終ル

第7条　学年ヲ分チテ3学期トス其ノ期間左ノ如シ

第1学期　4月1日ヨリ8月31日ニ至ル

第2学期　9月1日ヨリ12月31日ニ至ル

第3学期　1月1日ヨリ3月31日ニ至ル

第8条　休業日ハ左ノ如シ

1　祝日，祭日

1　日曜日

1　本校記念日

1　春季休業　4月1日ヨリ4月7日ニ至ル
1　夏季休業　7月11日ヨリ9月10日ニ至ル
1　冬季休業　12月25日ヨリ翌年1月7日ニ至ル

第4章　入学，在学，退学及処罰

第9条　生徒ヲ入学セシムヘキ時期ハ学年ノ始メ1箇月以内トス

第10条　各学科第1学年ニ入学ヲ許スヘキ者ハ品行方正，志望鞏固ニシテ左ノ各号ノ1ニ該当シ且入学検定及身体検査ニ合格シタル者タルヘシ

1　中学校ヲ卒業シタル者
2　専門学校入学者検定規程ニ拠ル試験検定ニ合格シタル者
3　一般専門学校ノ入学ニ関シ専門学校入学者検定規程第8条第1号ノ指定ヲ受ケタル者
4　工業学校ヲ卒業シタル者

第11条　中学校又ハ工業学校在学者ニシテ当該学校長ヨリ該学年3月末日迄ニ卒業スヘキ見込アリト認定セラレタル者ハ其ノ証明ヲ以テ入学ヲ願出ツルコトヲ得

前項入学志願者ハ其ノ学校ヲ卒業シタルトキ直ニ卒業成績証明書ヲ提出スヘシ但シ卒業試験ニ落第シタル者ニハ入学ヲ許サス

第12条　試験検定ハ左ノ学科目中3学科目以上ニ就キ中学校卒業ノ程度ニ依リ本校ニ於テ之ヲ行フ

1　国　語　　1　英　語　　1　数　学
1　物　理　　1　化　学　　1　図　画

第13条　入学志願者ハ第2条ニ掲ケタル学科中ニ就キ志望学科ヲ指定スヘシ但シ志望学科2箇以上ヲ指定スル場合ニハ志望ノ順序ヲ明ニスヘシ

第14条　入学ヲ出願スル者ハ左ノ書類ニ入学検定手数料及写真（入学志願前6箇月以内ニ撮影シタル脱帽半身手札形）ヲ添ヘ学校長ニ差出スヘシ

1　入学願書
2　戸籍謄本

第15条　入学ノ許可ヲ得タル者ハ其ノ許可ノ日ヨリ20日以内ニ尊属親又ハ監督者ノ連署シタル誓書（第2号書式）ヲ学校長ニ差出スヘシ

第16条　生徒ハ本校所定ノ制服制帽ヲ着用スヘシ

第17条　生徒疾病其ノ他已ムヲ得サル事由ニ依リ欠席セントスルトキハ其ノ事由ヲ詳記シテ速ニ届出ツヘシ但シ病気ノ為メ欠席7日以上ニ亘ル者ハ医師ノ診断書ヲ添付スルヲ要ス

第18条　生徒徴兵令第13条ニ依リ1年志願兵ニ服役セント欲スル者ハ学校長ノ許可ヲ得テ其ノ間休学スルコトヲ得

第19条　生徒疾病ニ依リ引続キ3箇月以上修学シ能ハスト思料スルトキハ医師ノ診断書ヲ添ヘ尊属親又ハ監督者連署ヲ以テ願書ヲ差出シ許可ヲ得テ其ノ学年間休学スルコトヲ得

前項ニ依リ休学ヲ許可セラレタル者ハ次学年ノ始メヨリ更ニ原級ノ課程ヲ修ムヘシ

第20条　生徒改姓，改名，改印，転籍若ハ転居ヲ為シタルトキハ其ノ旨直ニ届出ツヘシ但シ改姓，改名，転籍ノ場合ニハ戸籍抄本ヲ添付スルヲ要ス

第21条　生徒ハ学校長ノ許可ヲ受クルニアラサレハ他ノ学校等ニ入リ又ハ各種ノ試験ニ応スルコトヲ得ス

第22条　生徒已ムヲ得サル事由ニ依リ退学セントスルトキハ其ノ事由ヲ具シ尊属親又ハ監督者連署ノ上学校長ニ願出テ許可ヲ受クヘシ但シ疾病ニ依リ退学セントスル場合ニ於テハ医師ノ診断書ヲ添付スルヲ要ス

第23条　左ノ各号ノ一ニ該当スル者ハ其ノ学籍ヲ除ク

1　成業ノ見込ナシト認メタル者
2　課業ニ怠慢ナリト認メタル者
3　正当ノ理由ナクシテ引続キ30日以上欠席シタル者

4　授業料納付ノ催告ヲ受クルモ尚之ヲ納付セサル者

第24条　生徒ニシテ校規命令又ハ訓育ノ趣旨ニ違背シ其ノ本分ヲ失ヘリト認ムヘキ行為アル者ハ学校長之ヲ処罰スルコトアルヘシ

第5章　修業及卒業

第25条　各学年ノ課程修了ハ該学年中平素ノ勤惰及学業ノ成績等ヲ考査シテ之ヲ定ム

第26条　第3学年ノ課程ヲ修了シ成績考査ニ合格シタル者ニハ卒業証書ヲ授与ス

第27条　第3学年ノ成績考査ノ結果卒業証書ヲ授与セサル者ニハ詮議ノ上修業証書ヲ授与スルコトアルヘシ

第28条　成績考査ニ関スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

第6章　入学検定手数料，授業料，実習実験費

第29条　入学検定手数料ハ金3円トス

第30条　授業料ハ1学年本科生及研究生ハ金35円選科生ハ金30円トス

第31条　授業料ハ1箇年ヲ左ノ3期ニ分チ毎期ノ始メニ於テ之ヲ徴収ス

	本科及研究生	選科生
第1期　（自4月　至8月）	金12円	金10円
第2期　（自9月　至12月）	金12円	金10円
第3期　（自1月　至3月）	金11円	金10円

第32条　研究生選科生ニハ実習実験ニ要スル費用ノ全部若ハ1部ヲ負担セシムルコトアルヘシ

第33条　入学検定手数料，授業料及実習実験費ハ一旦納付ノ後ハ何等ノ事由アルモ之ヲ返付セス

第34条　休学ノ許可ヲ得タル者ハ其ノ期間内授業料ヲ徴収セス

第35条　授業料ハ定日ニ之ヲ納付スヘシ但シ定日以後ニ入学ヲ許可セラレタルトキ又ハ休学中ノ者其ノ事由止ミ出席シタルトキハ其ノ日ヨリ5日以内ニ之ヲ納付スヘシ

第36条　授業料ヲ定日ニ納付セサルトキハ第23条ニ依リ処分ス

第7章　研　究　生

第37条　本校又ハ他ノ実業専門学校卒業者ニシテ既修ノ学科ニ就キ更ニ研究セント欲スル者アルトキハ詮議ノ上研究生トシテ2箇年以内在学ヲ許可スルコトアルヘシ

第38条　研究生タラント欲スル者ハ其ノ研究セント欲スル事項及在学ノ期間ヲ具シタル願書ヲ学校長ニ差出スヘシ

第39条　研究生ハ本校内ニ於テ研究ニ従事スルモノトス但シ必要ノ場合ニ於テハ或ル期間ヲ限リ指導教官指揮ノ下ニ学校以外ニ於テ研究スルコトヲ許可スルコトアルヘシ

第40条　研究生ハ其ノ研究事項ヲ了リタルトキハ研究報告書ヲ学校長ニ差出スヘシ

第41条　学校長ハ研究報告書ヲ考査シ其ノ成績佳良ナリト認メタルトキハ証明書ヲ授与ス

第8章　選　科　生

第42条　本校所定ノ各学科ノ中，1学科目若ハ数学科目ヲ選択専修センコトヲ願出ツル者アルトキハ詮議の上選科生トシテ入学ヲ許可スルコトアルヘシ

第43条　選科生トシテ入学ヲ許可スヘキ者ハ品行方正，志望鞏固，年齢17年以上ノ者ニシテ左ノ各号ノ1ニ該当シ且入学検定及身体検査ニ合格シタル者タルヘシ

1　3箇年以上引続キ志望学科目ニ関スル工業ニ従事シタル者

2　工業学校ヲ卒業シタル者

第44条　選科生ノ入学検定ハ所選ノ学科目ヲ学修スルニ必要ナル学科目ニ就キ試験検定ヲ行フ

第45条　選科生ノ入学時期ハ毎学年ノ始メ1箇月以内トス但シ特別ノ場合ニハ学年ノ半途ニ於テ入学ヲ許可スルコトアルヘシ

第46条　選科生ノ在学期間ハ3箇年以内トス

第47条　選科生ニシテ成績考査ニ合格シタル者ニハ所選ノ学科目履修ノ証書ヲ授与ス

第48条　選科生ハ制服制帽ヲ着用セサルコトヲ得

外国人入学規程

第1条　外国人ニシテ本校各科課程ノ教授ヲ受ケント欲シ外務省在外公館又ハ本邦所在ノ外国公館（領事館，公使館，大使館）ノ紹介書ヲ添ヘ入学ヲ願出ツル者アルトキハ詮議ノ上入学ヲ許可スルコトアルヘシ

第2条　外国人ニ対シテハ総テ本校規則ヲ準用ス

第1号書式

入　学　願　書			
志望学科（第2志望以下ヲ指定セサル者ハ第1志望ノ外記入ヲ要セス）	第1志望		
	第2志望		
	第3志望		
私儀御校へ入学前記学科修業仕度候間御試験相成度検定料金3円相添へ此段相願候也			
現在所			
本籍及族称			
家業		氏名（右側ニ仮名ヲ附スヘシ）	
日附	大正　年　月　日	出生　年　月　日	明治　年　月　日生
横浜高等工業学校長　鈴木達治殿			

歴履												
	学業											
	兵役											
	職業											
	賞罰											
学業成績	学科目／学年								総点	平均	総員	席次
	第　学年											
	第　学年											
	最終学年											
	備考											

右者　大正　年　月　当校卒業予定／専門学校入学者検定規程ニ拠ル試験検定ニ合格　ノ者ナリ依テ之ヲ証ス

大正　年　月　日　　学校長

備　考

1，卒業者ニ対シテハ本文中「予定及専門学校以下ノ21字ヲ」卒業予定ノ者ニ対シテハ「専門学校以下ノ21字ヲ」塗抹シ又検定合格者ニ対シテハ「卒業予定」ノ4字ヲ塗抹シテ其下ニ「ニ於テ」ノ3字ヲ記入セラレタシ

2，学業成績ハ入学志願者ノ出身学校長ニ於テ証明セラルヘキモノトス

3，卒業見込ヲ以テ出願スル者ニ対シテハ最終学年欄ニ該学年第2学期ノ成績ヲ記入シ其次ノ欄ニ第1学期成績ヲ記入セラルヘキモノトス

4，専門学校入学者検定規程ニ拠ル試験検定合格者ニ対シテハ検定ヲ行ハレタル学校長ニ於テ証明セラルヘキモノトシ其成績ハ最終学年ノ次ノ欄ニ記入セラルヘキモノトス

第2号書式

3銭収入印紙貼付印印

誓　書

私儀今般御校へ入学許可相成候ニ付テハ校規命令及訓育ノ御趣旨ヲ遵守シ専心学業ニ勉励可致候仍テ誓書如此候也

道，府，県，何国，市，郡，区，町，村大字何番地
道，府，県，華，士族，平民，戸主或ハ何某何男又ハ弟等
何　某　印
何年何月何日生

右何某在学中御規則等堅ク相守ラセ候事ハ勿論退学後タリトモ同人在学中ニ係ル一切ノ事件ハ拙者ニ於テ引受可申候此段保証仕候也

現住所　道，府，県，何国，市，郡，区，町，村大字何番地
道，府，県，華，士族，平民，何業
尊属親又ハ監督者　氏　名　印
何年何月何日生

横浜高等工業学校長何某殿

学　年　暦

4月1日	第1学期始，春季休業始	10月17日	神　嘗　祭
4月3日	神武天皇祭	10月31日	天長節祝日
4月7日	春季休業終	11月23日	新　嘗　祭
4月8日	授 業 開 始	12月25日	冬季休業始
7月11日	夏季休業始	12月31日	第2学期終
7月30日	明治天皇祭	1月1日	四方拝，第3学期始
8月31日	天長節，第1学期終	1月7日	冬季休業終
9月1日	第2学期始	1月8日	授 業 開 始
9月10日	夏季休業終	2月11日	紀　元　節
9月21日	授 業 開 始	春 分 日	春季皇霊祭
秋 分 日	秋季皇霊祭	3月31日	第3学期終

8.　電気化学科について

設立時における本校の学科は，さきに述べたように機械工学科，応用化学科，電気化学科の3科であったが，このうち電気化学科は当時としては他校より注目された学科であった．この学科を本校3科の中に加えたことは，鈴木校長の日本化学工業に対するなみなみならぬ意欲的な現われともいえる．これは次の冨山二代校長の話にもあるように，鈴木校長の恩師であり本校創立委員長でもあった東京高等工業学校長手島精一の意向を受けついだものであろう．

そもそもわが国の工業学校に電気化学科の名が見えるのは東京高等工業学校で明治29年のことである．同校60年史（337ページ）に次の通り記されている．

電気化学科沿革

1.　明治29年5月当校規則の改正によって，化学工芸部・機械工芸部の名称を廃し，同時に電気工業

科を電気工科と改め，その下に本科は「電気化学分科」なる名称にて設置せられ，同年９月より授業を開始した．

1. 明治31年６月電気工科を電気科と改称せられた．
1. 明治44年８月規則を改正し本科を電気化学科と改称して，独立の一科とした．

本校の電気化学科新設当時の思い出として冨山保は後年次のように記している．

電気化学工業は比較的近年に起った工業で，特に我国に於ては当時まだ揺籃時代と申してもよい位であった．しかし同時に世界大戦を契機として我国の電気化学工業も最近の化学工業として急激に勃興するの気運が醸成するに至ったので，他の２科と全く同時に１学級40名の学生を入学せしめて発足するという英断を敢行することになった．

これはおそらく学校の創立委員長であられ，工業教育の鼻祖と仰がれた前東京高等工業学校長手島精一先生が，明治29年日本で始めて同校に電気化学科を設けられ，又同先生が最も信頼厚く且，かつてその電気化学科長をせられたことのある教授鈴木達治先生を横浜の学校長に推薦せられたので，両先生のご発議に基いて立案せられたことと察せられる．（中略）

電気化学科は教授予定者としての藤村利常氏が，開校直前に海外留学生として欧洲に出発されたので，恰度その月に欧米に２ヶ年視察見学して帰国した自分が，講師として任命せられ，教授と全く同等の職務を司ることとなり，その直後に助教授として任命された小林鼎氏及び桜井春雄氏と協力して電気化学科創設発足する一切の事項を担当することとなった．

自分は身分は講師であったが，特に電気化学科の事務取扱に任ぜられ，前記小林，桜井両氏と共に学科の基礎造りに全力を尽した．自分が最年長であったが，それとても年歯漸やく30に達した許りであり，学生との年齢の距りも少なく教師というよりは兄弟子の様な気分で教室でも実験室でも親しく接しておった．開設された翌年には新進気鋭の横山盛彰氏を迎えて教授陣は強化された．

（横浜電化会報　第４号　昭和44年９月１日）

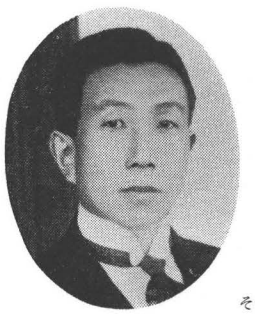
9. 敷地，建物，設備

(1) 敷地，建物

前述のように，本校創立に当たっては，神奈川県より土地および創立費，横浜市より創立費が寄付され，直ちに土地が選定され，大正６年度より建物が起工され，同８年度　事務室，教室，

	坪　数	評　価　額
敷　地	20,467坪	511,680円
建　物	2,343	583,292
工　作　物		70,038
備品図書類		633,106

（震災直前調べ　横浜復興誌による）



その当時の冨山　保

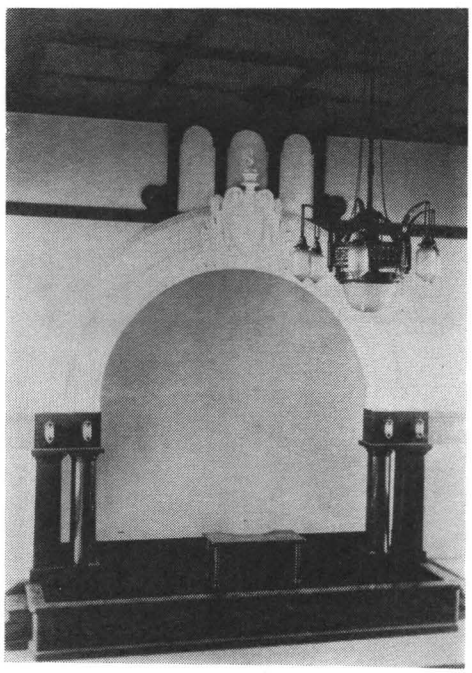
実験室の一部が完工し，同12年初めにはほとんど全建物が完成するに至った．

建物の内訳は次の通り．

事務室及教室	木造(2階建)	1棟	建坪 170坪	第1機械工場実験室	木造(平家建)	1棟	建坪 150坪
付属舎	木造(平家建)	1棟	建坪 26坪	第2機械工場実験室	木造(平家建)	1棟	建坪 180坪
普通教室	木造(平家建)	1棟	建坪 170坪	職工控室	木造(平家建)	1棟	建坪 20坪
付属舎	木造(平家建)	1棟	建坪 26坪	薬品庫	鉄筋コンクリート(平家建)	1棟	建坪 8坪
第1応用化学実験室	木造(平家建)	1棟	建坪 125坪	水力実験室	木造(平家建)	1棟	建坪 60坪
第2応用化学実験室	木造(平家建)	1棟	建坪 125坪	講堂	木造(2階建)	1棟	建坪 148坪
付属舎	木造(平家建)	1棟	建坪 5坪	書庫及倉庫	煉瓦造(2階建)	1棟	建坪 30坪
第3応用化学実験室	木造(平家建)	1棟	建坪 26坪	柔剣道場	木造(平家建)	1棟	建坪 73坪
第1電気化学実験室	木造(平家建)	1棟	建坪 125坪	砂置場		1棟	建坪 5坪
第2電気化学実験室	木造(平家建)	1棟	建坪 125坪	動力及汽罐室	鉄筋ブロック造	1棟	建坪 1坪
生徒控室	木造(平家建)	1棟	建坪 75坪	第1渡廊下	木造(平家建)		建坪 48坪
物置	木造(平家建)	1棟	建坪 40坪	第3渡廊下	木造(平家建)		建坪 27坪
物置	木造(平家建)	1棟	建坪 7坪	外材料置場		1棟	建坪
小使室	木造(平家建)	1棟	建坪 25坪	便所		4棟	建坪

(大正大震災誌記載による)

なおこのうち講堂は全建物中最後，すなわち大正10年4月落成したもので，横浜開港記念会館*にその範をとり，収容人員1,000名，講堂としては，採光，音声いずれも満足すべきもので，講壇

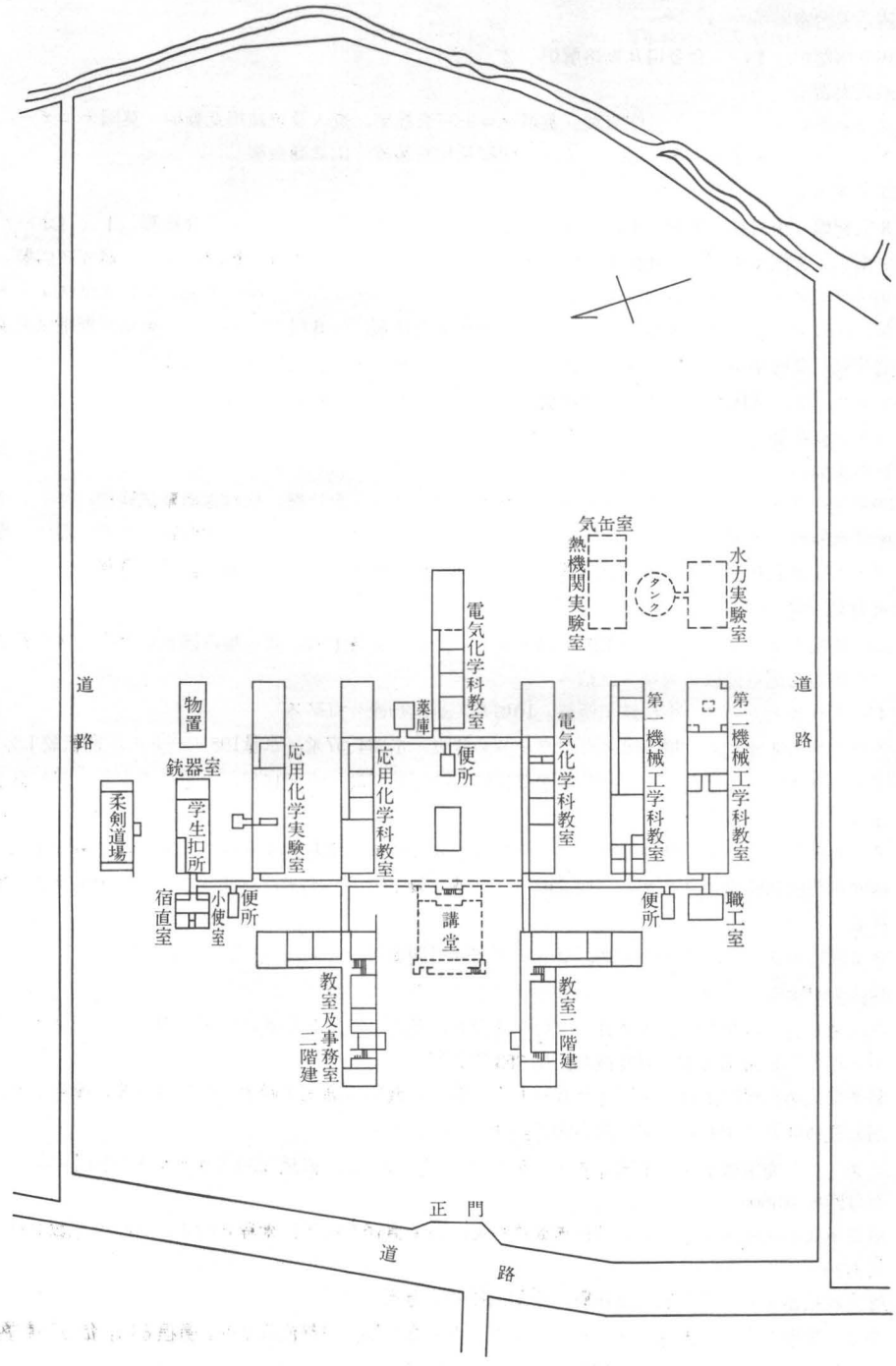


その当時の講堂

は特に電気，ガス，水をも使用することができ，また映写設備もあり本校自慢の建物であった．

（注） 横浜開港記念会館は，明治42年開港50年記念に建築したものであったが，大震災で廃虚となった

横浜高等工業学校平面図 （大正9年学校要覧による）



(2) 設　備　　(注) 大正10年学校一覧より

本校各科ニ於テ設備シタル諸機械，器具及図書類ハ頗ル多数ニ上リマスノデ，之ヲ枚挙スルコトハ困難デアリマスガ，左ニ其主ナルモノノミヲ掲ゲマス．

機械工学科

○木工実習室

32吋帯鋸　米国クレセント会社製，6呎旋盤　碌々商店製2台

○鋳造実習室

鋳鉄熔解炉　1，　合金用瓦斯熔解炉　2

○鍛造実習室

「ハンドレットウェート」空気鎚　英国マッセー会社製，焼入及焼鈍用瓦斯炉　英国オルデー，エンドオニオンス会社製，第2号アセチリン熔接及切断装置　山武商会製

○仕上実習室

8呎旋盤　小松鉄工所製　1，　6呎旋盤　米国ロッヂエンドシップレー会社製　1．（オールギーア型）　米国モナーク会社製1，仏国エルノー会社製1，園池製作所製24吋旋盤　碌々商店製　1，36吋ラヂアルドリル　唐沢鉄工所製　1，　12吋センスチブ，ドリル　米国レランドギフォード会社製，16吋シェーパー　米国グールド，エバハート会社製，　6吋プレーナー　東京瓦斯電気工業株式会社製，2吋半ホリゾンタルボーリングマシン　英国カーンス会社製，　第2号ユニヴァーサルシリングマシン　米国シンシナター会社製，ユニヴァーサルツールエンドカッターグラインダー　米国ノルトン会社製

○材料実験室

30噸ユニヴァーサルテスチングマシン　瑞西国アムスラー会社製，松村式衝撃試験機，ブリンネル式硬度試験器　米国オルセン会社製，　ショーア氏スクレロスコープ，　100粍精密測定器　瑞西国ゼネヴォア会社製，　圧力計試験器　東京計器製作所製，　本多式焼入試験装置等

○水力実験室

300粍低圧タービンポンプ及125粍高圧タービンポンプ各1台　共ニ瑞西国エシヤウィス会社製ニシテ30馬力変速電動機ノ両端ニ直結ス

4吋タービンポンプ　小松鉄工所製，10馬力変速電動機ニ直結ス

スパイラルタービン　瑞西国エシヤウィス会社製，水頭4.57米，水量198リートル，廻転数1分間300

オプンフリユーム田沢式タービン　電業社原動機製造所製，水頭15呎，水量7立方呎，廻転数1分間400

インパルスタービン　独逸国フォイト会社製，水頭61米，水量20リートル，廻転数1分間1,300

速度調整機試験用タコグラフ　独逸国ホーン博士製1吋半ハイドローリックラム，米国ライフ製造会社製

水量測定用タンク，高圧タンク，ウェーア実験用開渠等

○熱機関実験室

蒸汽罐1台　煖房及動力用ノ目的ヲ以テ設備ス，英国「バブコックエンド，ウィルコックス」会社製100馬力，常用圧力150封度被熱面積983平方呎

竪型復式蒸汽機関1台　英国「ロビー」会社製，汽筒直径高圧7吋半，低圧11吋半，衝程7吋，毎分回転数200乃至400ニテ発生馬力20乃至40

「ターボ」発電機1台　米国「スターテヴアント」会社製，直流250「ヴオルト」10「キロワット」毎分回転数3600

横型単式蒸気機関1台　東京岡機械製作所製，汽筒直径8吋半，衝程8吋半，毎分回転数250，発生馬力20

触面凝結器1式　横浜船渠会社製，冷却面積98平方呎

空気圧縮機1台　米国「インガーソールラント」会社製，気筒直径7吋，衝程6吋，毎分回転数350，空気圧力80封度ニテ所要動力10馬力

石油機関1台　東京池貝鉄工所製，陸上用6馬力，気筒直径6吋半，毎分回転数 380

吸入瓦斯機関1台　大阪藤村機械株式会社製，8馬力，気筒直径7吋4分ノ1，衝程11吋，毎分回転数 270

自働車「シヤシー」1台　米国「フオード」会社製

電動発電機1台　米国「ウェスチングハウス」会社製

市中電力ヲ購入シテ校内ニ直流電力ヲ供給ス

応用化学科

分析化学，有機無機実習用並ニ精密実験器械類ノ必要ナルモノハ大略備ヘテアリマス，猶半工業的実験施行ノ為メ左ノ化学機械ガ設備セラレテ居リマス．

粉砕機，遠心分離機，低圧蒸気乾燥器，真空喞筒，粉磨機，低圧蒸発器，メリル式濾過器，オートクレーヴ，乾餾装置

化学及化学工業ノ研究ニハ是等ニ関スル文献ガ必要デアリマスガ独逸化学会誌及外4部ノ完結シタル図書ヲ所有シテ居リマス．

電気化学科

電気化学基礎実験ニ要スル設備ハ完成シ其他ニ於テ主トシテ根本トナルベキ設備ヲ整ヘマシタ．即チ

電動発電機　1基　安小電機製作所製

直流15キロヲ5—20ヴォールトノ任意ノ電圧ニテ最高電流1,000アンペア迄ノ強電流ヲ発電シ得ルモノ

蓄電池

チユードル T.14型（容量420アンペア時）　60個　チユードル蓄電池会社製

同　T.44型（同 1,320　同　）　5個　帝国蓄電池会社製

此発電機並に蓄電池ハ電解実験ニ用フ

配電盤　1組　敷島電機製作所製

発電機及蓄電池ヨリノ電流ヲ任意電圧ニテ所定ノ場所ニ送ル

単相誘導調整器　35キロ　1基　芝浦製作所製

単相変圧器　30キロ　1基　同　上

両面ニ依ツテ単相交流ヲ電圧0—100 ヴオルトノ最高電流1,000アンペア迄ノ範囲内任意ニ調整供給ス電気炉実験ニ用フ

単相1.5キロ特別高圧変圧器　1基　東京電機工業会社製

ケノトロン及機械的整流装置附属

整流サレタル最高12万ヴオルトノ特別高圧電流ヲ以テオゾナイザー及コツトレル氏法ノ実験ニ用フ

其他金相学研究実験用　顕微鏡　3個　ワツトソン会社製

同　用　写真機　1個　ライヘルト会社製

酸水素発生装置，電解漂白装置，オゾン発生装置

抵抗式，弧光式ノ諸電気炉等ハ相当規模ニ設備シ粉砕機，ボールミルセントリフューガル等ト相俟チテ工業的実験ニ供ス

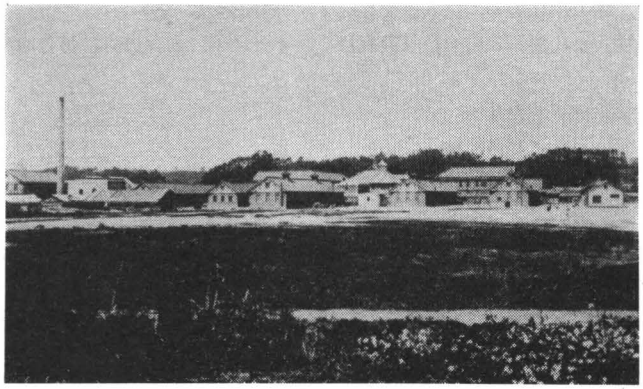
尚文献トシテ左記2種ノ雑誌モ其初号ヨリ備附ケタリ

Transactions of the American electrochemical society.

Zeitschrift für elektrochemie.

基礎学科

物理学教室ニハ教授上一通リノ器械器具ガ設備シテアリマスガ，特ニ光学ノ一部及輻射学ニ関スル研究装置ニ重キヲ置キ，ラヂウムノ如キハ10ミリ瓦（価格 2,800円）ヲ有シテ居リマス．数学教室ニハ計算機械（ミリヨネーア）ヲ初メ積分器，求積器，表面模型等ガ備ヘテアリマス．



本校の全景(震災前)

10. 図書課とオーナーシステム

本校に図書課を設け，主任として基礎学科英語教授マスター・オブ・アーツ水野常吉，書記調慧心を置いた．大正11年の図書目録によると，和漢洋3,000部7,000冊を超え，これを第1門事彙，叢書，随筆，雑書，新聞，雑誌，第2門　宗教，哲学，教育，第3門　文学，語学，歴史，伝記，地誌，紀行，第4門　政治，法律，経済，財政，社会，統計，第5門　数学，物理学，医学，第6門　化学，第7門　機械，第8門　美術，音楽，娯楽，体育，第9門　産業，交通，通信，家事の9部門に分け一般共通的の図書は中央図書館に置き，専門図書は該当学科の図書館分室に置いた．

本校の誇りとするところは，できるだけ多くの人にこれらの本を読んでもらうために，日本では珍しい自由閲覧方式「オーナーシステム」を採用したことである．

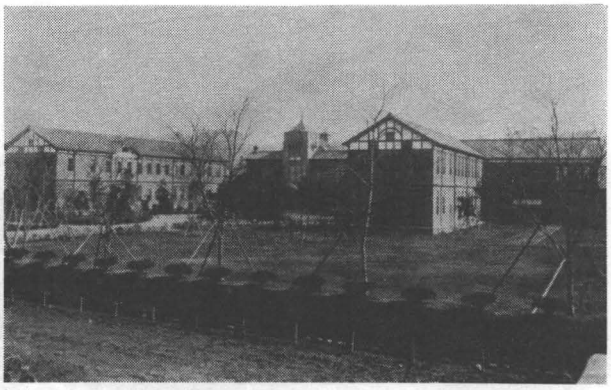
なおこのオーナーシステムは，学校の方針として後年までつづけられた．実際問題として当初はまれに図書の散佚(いつ)することもあったが，次第に学生の自由自治の精神により，図書のなくなることもごくまれとなり，一般参観者などオーナーシステムに感嘆して帰るのが常であった．

これら苦心して集めた図書はすべて，大震火災のため焼失したが，その後また逐次貴重書が集められ，これらは後に述べるように，第2次世界大戦の際の横浜大空襲にも戦災をまぬがれ，戦後の学問研究の大いなる助けとなった．

11. 寄　宿　寮

さきに述べたように本校の所在地は横浜市の南端に位し，新開地ともいうべきところであったので宿舎が少なかった．第1回入学者は全国各地から集まっていたので，寮が必要であった．そこで鈴木校長は，大岡町および蒔田町に寮を設置し，第一寮，第二寮と称した．両方あわせて20数名を収容した．この寮はいずれも民家を借り受けたもので，設備なども不完全であったが，男子志を立てて郷関を出てきた若い血に燃える学生たちは，本校の校是である自治の精神を体し，楽しい学生生活を享受した．

ついで大正12年，校友会所属の学生寄宿寮を本校近くの大岡町岸ケ谷の山腹に建築，5月4日



震災前の校舎

地鎮祭，８月20日落成した．建坪130余坪（528 m²）収容人員36名であった．

たまたま９月１日の大震災に遭遇したが，破損軽微であったので，一時被災市民の収容所にあてた．11月１日授業開始に当たり，学生の寄宿寮とし非常に寮生から喜ばれた．

寮生活の思い出　村上泰助　（機械１期生　高工時報 昭和10年７月）

その頃の寄宿舎というのが民家を借りていたもので，二つありましたが，何分にも民家なので一つの家に10人がやっとでした．

舎監もなければ先生も見回りに来ないという暢気な有様で，ついには生徒の方から教務におられた飯塚さんあたりに，たまには寄宿舎へきてくれと頼んだような具合で，生徒が監督されるという気分は少しもなかった．

12.　設立当時の学校の周辺

さきに述べたように，神奈川県が選定寄付した土地は，横浜市大岡町字中ノ町で敷地が２万1,000余坪（69,000余m²）あった．これは大正５年本校創立決定のとき，時の神奈川県知事有吉忠一が本校の将来の発展を考え，当時同時に設立決定した同種他校のきめられた敷地１万5,000坪（50,000 m²）よりも5,000坪（16,500 m²）以上も多い敷地であった．しかしその土地は深田であった．それを北側の小山を切り崩して幾尺か埋め立てたのである．

この土地のことについては「高工教育」昭和２年５月発行の横浜高工特集に次の通り記している．

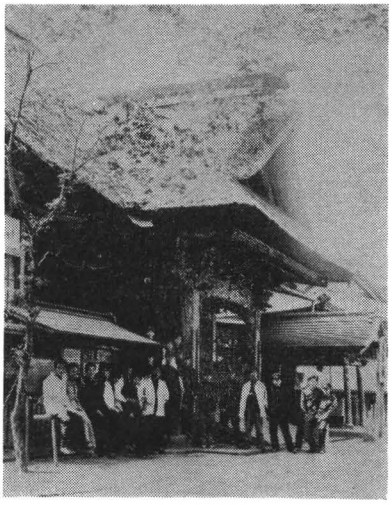
大正３，４年頃までは一望の水田で，本校の整地は勿論その一部であり，その内の三分の一が桃畠であった．大正３年に電車が延長され本校正門前が現在の通り終点となったが，その時でさへ附近の家と言ってはたった一軒終点の角にだんご屋が出来たのみであった．

その後大正５，６年に，弘明寺前に花柳界が許可されて，一時に人家がたちならび，８，９年まで繁栄したが，本校開設に先だち時の有吉知事が撤廃を命じて，全く跡を断ち学校街にかわったのである．

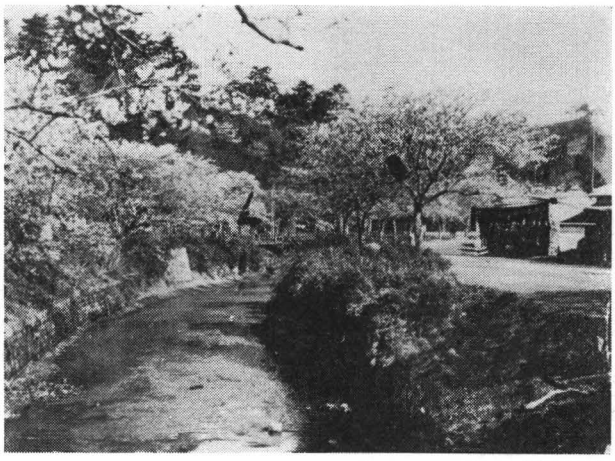
次に当時の学生達に親しまれていた学校近くの名所，古跡について記しておく．

(1)　弘明寺

学生が野球の応援のとき声をからして歌った本校応援歌に「弘陵健児のその自由の声は」というのがある．弘陵とはいつごろ誰がつけたものか詳かにしないが，おそらく本校開設後間もなく誰がいうとなく生れたもので，弘明寺の岡という意味であろう．



その当時の弘明寺



大岡川の桜

現在京浜急行の駅を弘明寺というが，これは弘明寺の寺領の中を電車の線路が横切っており，そこに設けられた停留場なのである．

弘明寺は中区弘明寺町字山下267番地にあり，瑞応山蓮華院と称し真言宗高野山金剛峯寺の直末で，寺伝によれば，開基は弘法大師で大同4年(809年)の伽藍（がらん）の建立という．一時は寺運盛んであったが中道にして衰え，鎌倉時代にはいって源頼朝の尊崇を受けるに及んで再び隆盛に赴いた．治承5年（1181年）源家累代祈願所となったことが東鑑に見えている．現在の寺前の仁王門は江戸時代の建築といわれている．本尊十一面観世音は藤原時代の作といわれ，身の丈1ｍ8，1木1体の荒彫りでこの種のものとして非常に珍しい貴重な文化財で国宝に指定されている．

坂東33番のうち第14番札所であり，明治にはいり荒廃したとはいえ，後ろに山を背負い，梅林を控え，樹木うっそうとしていたが，湘南電車が境内を横断するにおよんで樹木は切られ，山は削られ殺風景なものとなってしまった．しかし本校開設当時はなお若干趣を有し，門前は一面の田んぼであった．

(2) 若宮八幡宮

中区大岡町2158番地に鎮座，創立年代不詳，明治41年村社鹿島大神，村社神明社，村社熊野神社，無格社神明社他4社を合祀，毎年9月6日，7日例祭があった．

(3) 伊勢山皇太神宮

明治3年，現在の地に奉遷，横浜総鎮守とした．明治8年県社．震災により神殿その他焼失したが，その後再建された．

(4) お三の宮（日枝神社・稲荷神社）

今の大岡川と中村川にはさまれた伊勢佐木町付近一帯の土地は，江戸時代初めまで釣鐘形の入海になっていた．万治2年（1659）～寛文7年（1667）にかけて吉田勘兵衛によって開かれ，横浜市域の新田で一番規模の大きな，一番早くに出来た新田であった．後に吉田新田と名付けられたが，日枝神社通称お三の宮はその新田の鎮守として，勘兵衛によって創建されたものである．祭神は大山咋命で，新田守護のため法華経を埋め江戸の山王社を勧請したもので，初めは山王大権現または山王宮と称せられ，それがお三の宮と転訛(か)したとも，また工事中の再度にわたる防波堤欠壊を海神の祟りと思い，それを静めるために立っておさんという女性の霊をまつったためこの名がついたともいわれている．事実は前者だとみるのが有力で，人柱があったかどうかは別としても，おさんの宮の人柱は根強い信仰となり今に伝えられてきたのである．

稲荷神社も同時に建立されたものである（お三の宮略誌による）．

(5) 三殿台遺跡と三殿台考古館

明治時代より繩文時代の貝塚として知られていたが，全域の発掘調査が行なわれたのは，1959～1961年で，1万平方メートルの台地上に，繩文，弥生，古墳の3時代の集落跡があり，繩文は8，弥生は200，古墳は43の住居跡が残っていて，出土した器具類は付設考古館に収めてあり一般に公開している．

(6) 横浜公園

わが国最古の公園で，園内には四角な広い芝地があり，桜樹が多く植えられ名所の一つでもあった．大正12年の関東大震災にはこの公園に逃げこみ2万余人の生命が助かったという．芝地の大部分はその後野球場となり，園内は緑樹が枝を交えているが，これら樹木は全部この公園で助かった人が長く忘れないため，公園復旧に際し寄付したもので，北隅に音楽堂，西隅に児童遊技場などがある．また，ここは日本の野球の発祥地でもある．（横浜めぐり　昭和8年12月1日発行）

(7) 大岡川

分水嶺は峯のキュウで知られる円海山で，この峯々からわき出た清水が集まり流れ落ちるところが氷取沢町で大岡川の源流といわれる．笹下から上大岡へと落ちるまでを笹下川といい，そしてここで日野町から発し鎌倉街道沿いに流れる日野川と合流し大岡川となる．弘明寺観音付近から花咲町付近までは川の西岸に桜が植えられ市内桜の名所に数えられてもいたが，戦争中多く薪に利用され，今はその面影もないし，護岸工事のためおもむきを異にしてしまった．また花の木町を中心とした沿岸のなっ染工場の汚水でよごされ，宅地化が外円に進むにしたがって下水化し，川底も浅くなってしまった．

(8) 蒔田城跡

通町1丁目から南方丘一帯の丘陵地がそれで，北条氏綱が女婿吉良佐兵衛佐頼康のため築城したが，北条が滅び吉良も城をすて武州世田ケ谷に移ったといわれるので，この城塞そのものがいつなくなったのかはさだかではない．今はその跡に学校（成美学園　旧横浜英和女学校）が建てられ大分変わってしまっている．

(9) 外人墓地

ペリーの2度目の来航の際事故死した水兵に対し，米政府が特に海の見える丘と墓地を指定し，当時の増徳院の境内の丘に埋葬したのが外人墓地第1号であった．外人居住の増加に伴い，外人専用墓地も5,600余坪(18,400㎡)に広がり，百年を経て多数の外人が眠っている．墓地はさまざまなデザインの大理石などの美しい石材が刻まれて立ちならび，四季おりおりの草花が植えられ，明るく美しい独特な風景をかもし出し公園化されている．生麦事件の英人レノックス・リチャードソンなどの墓がある．

(10) 山下公園

大桟橋入口から山下橋ぎわまでの道路に沿った面積22,462坪（74.124.6㎡）の細長い臨海公園で，大正14年に震災復興事業のひとつとして，震災の焼土，灰燼(かいじん)をもって埋立てに着手，総工費約80万円で完成した．当時は数多い常緑樹，日米親善国際バラが植えられ，その間に芝ふや池があって，広く港が展望され，世界一の臨海公園と自負されていた．昭和10年3月から6月にかけて震災復興記念大博覧会が催されたのもここである．終戦後昭和34年6月の全面接収解除まで米軍将校宿舎用地として接収を受け，その後，公園のきわを鉄道高架が走ったので大分景色をそこねたが，手を入れ市民の憩いの場となっている．噴水中央には，昭和35年に姉妹都市米国サンディエゴ市から贈られた水の守護神の像が立っている．

(11) そのころの交通

1. 市電

そのころ電車は弘明寺まで通じていた．これは横浜電気鉄道株会式社による経営で，駿河橋―お三の

宮大正２年９月14日，お三の宮―弘明寺は大正３年９月19日開通した．市電すなわち横浜市電気局に経営が移ったのは大正10年４月１日であった．震災によってほとんど壊滅状態となったが応急修理をして，12年10月26日弘明寺―日本橋線はその他の５系統と共に早くも運転を開始したが，車両の被害はなはだしく無がい車であった．

2. 京浜急行

大正14年12月27日湘南電鉄が設立され，黄金町―浦賀区間の工事に着手し，昭和５年４月１日に開通した．弘明寺駅の開業も同年月日でつまり開通と同時であった．のち京浜電鉄に吸収（昭和16年６月23日）東横・小田急，京浜の合同（昭和17年２月７日）等を経た．（京浜電気鉄道沿革史 昭和24年５月30日発行）

13. 創立時代の思い出

創立時代の思い出として記録に残っているものを記して，当時の学校周辺を想像してもらうこととする．

設立当時の思い出　鈴木達治　（初代校長）（高工時報 20周年記念祭特集号）

開校当時は実に貧弱なもので，今の学校敷地は深田であったところを裏山を崩して埋立てたものである．校庭というものも実に殺風景極まっていた．附近の街も寂しいところで今の通り１丁目の停留場へ来れば学校の校舎は見えていた．

校庭の樹木　鈴木達治　（六ツ川夜話 昭和15年４月記）

校庭の桜は学校創立の大正９年の秋，若宮八幡の境内にあったものを移し植えたものである．当時は全くの幼木で運搬から植込みまで一切合財１本80銭の取引きで数は33本であった．その後幾本か枯れて今は30本足らずになっている．20年経った今日は弘明寺附近の桜の名所となった．

学校の庭樹としては桜の他に公孫樹と欅が植わっている．その当時は門をはいると正面に講堂があった．これは正面道路で，この道路の中程から左右に分れて各一筋の路がついていた．この三筋の道路の並木として私は欅の苗木を植えることを命じておいた．所が係の主任大山春翠君が正面の街路樹として公孫樹を植えた．そして同時に左右の側路には欅を植えた．これらの苗木は，２，３年たってあの大震災で大部分は焼かれて今残っているのは５，６本に過ぎない．また学校の残り三方の境界は静岡から茶の実をとりよせ播種した．これは震災にあって僅かしか残らなかった．なお今のバラック講堂前のアカシヤの木は大陸会の会員がある夏支那満洲旅行をした時の記念である．

その頃　小使　山口真造　（高工時報 昭和５年10月25日）

私が参りました時（大正９年３月１日）校門横の土堤がなく昔の仇討ちのように青竹を斜に組んだ竹やらいでした．学校へ志願してきますと係の人はたった２人で，１人は今の大山さんと文部省の新山さんという人が今の小使室のところにあったバラックに陣取っていました．愈々勤めることになって見ますと丸で原っぱの中で淋しいことは一通りでなく，それに隔日の宿直で受付へ宿ったのですから弱りました．表通りと言っても百姓家がポツポツあっただけでしたから，あれから考えると随分開けたものです．

大正９年頃の学校附近　阿部滋弘　（応化１期生　横浜国大教授）（名教自然）

大正９年横浜高工が開校した当時の大岡川の堤は，横浜の桜の名所の一つで，その並木は，今はアーケードで覆われている商店街の西側から，もう古木になって花も余りつかない工学部の構内にある桜並木にもつづき，４月初め頃はこのあたり一帯が花で覆われていた．ここは鎌倉街道のはづれで，それから先は家もまばらで，麦畑からは雲雀の上るのも見えた．それに緑色に塗った木造２階建ての校舎があり，門扉の広い正門の西側には石で積んだ太い短い門柱の左右に小松のある堤が

連っていた外特に柵はどこにもなく，学園の芝生も花壇にも「立入禁止」の札は一つもなかったので，近くの人は子供を連れて構内へよく遊びに来た．

創立時の学校周辺　書記　小林長之助　(高工時報 No. 127)

当時の学校附近は人家極めて少なく，学校の宿直室から中島の市電停留場を見通せる一面の田圃で，学校の境界から細道を隔てて南北ともに畑或は水田で，弘明寺観音の表通りだけが僅かに町並になっていましたが，裏通りは見渡す限り田や畑で当時私共は草深き都と称した位であります．今（昭和5年）から思えば全く隔世の感とでもいうのでしょう．

創立当時　斎藤輝治　(機械1期生　本校教授)（高工時報　20周年記念号)

本校創立当初は勿論，その後数年間は本校の存在などは横浜市民と雖も知らない者が大多数で，しかも旧市のはずれに在った為に，桜木町駅で下車して学校の所在を聞いても，即座に返答は得られなかった．且つまた横浜は元来貿易を主とする都市で商業は盛んであったが，工業に至っては頗る貧弱で，大工場の如き殆どなかったといっていい．また同時に教育ということにも頗る冷淡であったが，その非を悟って高工を当市唯一の最高学府として創設し工業立市を一大目標とするに至った．このような訳であったから校長先生始め職員一同もまた当時の学生も皆揃って我が校風を興して，世人をしてその真価を発輝し，将来大いに寄与雄飛せんことに大いに努力苦心を払った．

されば学生たる者外に向っては当市唯一の最高学府の一人としての衿持を以って行動し，内にあっては各科としてまとまりつつも更に科を超越して一団となり共に校長先生を中心として勉学訓練にはげみ以つて学校宣揚につとめた．一言にして言えば，創造の希望に燃え潑溂たる意気が横溢していた．

昔の思い出　石井欣之助　(第1回入学者)（横浜工業会報 No. 9)

弘陵原頭……その頃はまだこんな言葉はなかった．……弘明寺の市電終点の草原に木の香も新らしい横浜高工ができ，そこで第一回の入学試験が行なわれ，我々は大きな希望をいだいて校門をくぐった．しかしまだ制服も，制帽もなく，受験浪人姿か，中学の制服のままであった．この時最も大量に入学した横浜一中即ち神中出身者が，その中学の制帽をかぶって押し歩き幅をきかせていた．

まだ万事草創の時代で何もかもこれからという学校で一年生だけしかいないのでお互に語りあうことも真剣であり悩も多かった．

懐しき芽生えの頃　村上泰助　(機械1期生)（高工時報 昭和10年7月)

大正9年私が横浜へ来た時は，本建築の工事が丁度出来かかっていて，いかにも工事場らしい竹矢来が結い囲らしてありました．木の一本もない原の中に殺風景な校舎がポッカリと立っているだけだったが，何か新らしみが感ぜられました．

何しろお三の宮から，弘明寺まで郊外電車のように砂利を敷いたレールが畑の中を通っていたような始末で，本牧行がやってくるのを製図室の窓から見て置いては飛び出して帰ったものでした．

実習の工場や講堂も1年2年と経つうちに追々完成されて，殺風景だった構内にも欅や公孫樹の苗が心細く風に吹かれていました．

当時は学生の数も少なかったせいもあるでしょうが，各科ともお互に結びついていて，何か事が起ると，すぐ心を合せてやったものです．

私たちの服装というのは鈴木校長が「服装はなんでもいい」ということだったので最初はまちまちでソフトや鳥打や中には中学生の時の帽子をかぶって来る者もいて，あまり統一がつかないからというので，学生の方からの意見で，教務の先生と学生委員とがはかって服装をきめたのですが，さあ服がきまると徽章も定めねばならぬ，そこで生徒から募集して，当選したのが，機械1期の金子という人の図案で，そこに少し手を加えたのが，今に伝わっているあの波の徽章です．

14. 第1回入学者

学校敷地もきまり，校舎も不完全ながらほぼ整い，教授陣もおいおいとそろい，ここにいよいよ開校のはこびとなった．それにはまず学生を迎えねばならない．

設立時の本校の学科は前述の通り機械工学科，応用化学科，電気化学科の3科で受験資格は

1. 中学校を卒業した者
2. 専門学校入学者検定規程による試験検定に合格した者
3. 一般専門学校の入学に関し専門学校入学者検定規程第8条第1号の指定を受けた者
4. 工業学校を卒業した者

と規定されていた．

以上により全国から集まった志願者総数は656名であった．大正9年3月24日より3日間本校において，記念すべき第1回入学試験が施行された．この試験の結果，この難関を突破して輝かしい本校第1回入学の栄冠を獲得した者は115名であった（他に選科生電化1名，応化1名）．今各科別にあげると次の通りである．なおこの時の検定料（入学試験料）は3円であった．

科　　名	入学志願者	入　学　者
機械工学科	325	41
電気化学科	149	35
応用化学科	182	39
計	656	115

また入学者を地方別で見ると，さすがに地元神奈川が最も多く26名で，東京の11名，長野，兵庫の各5名，千葉，愛知の各4名がこれについでいる．

15. 授業開始と校長訓旨

本校の輝しいスタートともいうべき初めての授業は，大正9年4月12日をもって開始された．

授業開始にあたって，鈴木校長は次のような訓旨をおこない難関を突破してここに本校第1回入学者となった110余名の生徒たちに，さらに一段の希望と感激を与えた．いま煩(はん)をいとわずこの時の校長訓旨を記しておく．この第1回の鈴木校長の訓旨の中に長く本校の特色となった，いわゆる自由啓発の教育方針とおよび海外発展の校是が打ち出されていた．

授業開始ニ際シ学校長ノ訓旨

本校ハ神奈川県ト横浜市トガ大正5年ニ75万円ト其敷地トヲ政府ニ寄附シテ設立スルコトニナリ同6年度ヨリ敷地ノ埋立整理ニ着手シ同7年度ヨリ建築ニ取掛リ，同8年度ヲ以テ落成ノ筈デアリマシタガ，時局ノ為メ物価ガ異常ニ騰貴シタ其影響ヲ受ケマシテ未ダ全ク落成ニハ至リマセンガ，略ボ授業ニハ差支ナキマデニ運ビマシタノデ，玆ニ予定ノ通リ本日ヨリ授業ヲ開始スルコトニ致シマシタ．開校ニツキ入学生徒募集ヲ致シマシタ処ガ定員120名ニ対シ656名ノ応募者ガアリマシタ．今斯ノ如キ難関ヲ通過シ来レル諸君ト一堂ノ下ニ相見ルコトヲ得ルノハ，実ニ諸君ノ為メニ慶賀ニ

堪ヘヌコトデ我輩満腔ノ喜悦ヲ感ズル次第デアリマス．然シナガラ同時ニ他ノ多クノ落第者ノ為メニハ同情禁ズル能ハザル所ガアリマス．中学又ハ工業ノ卒業生ハ何レモ我ガ校ニ入学シ得ル資格ヲ具備シテ居ルノデアリマスガ募集定員ヲ超過スル為ニ余儀ナク選抜試験ヲスルノデアリマス．今回不幸ニシテ選抜ニモレタ人々ノ中ニモ学材ニ於テ又品性ニ於テ優秀ナ人ガアツタデアラウト思ハレルノデアリマス．随テ諸君ハ入学ノ幸ヲ得タト云ツテ決シテ自分等ノミ優秀ナ青年デアルト云フ自負高慢ノ心ヲ起シテハナラヌ．自負高慢ノ心ハ今日折角贏チ得タル諸君ノ月桂冠ヲ汚損シ，ヤガテハ諸君ヲ堕落失意ノ境ニ導クモノデアルコトヲ思ハバ却テ益々謙譲ノ心ヲ起シテ学ニ努メネバナラヌト思ヒマス．

偖テ我輩ガ今玆ニ諸君ヲ迎ヘタトイフコトハ恰モ我家ノ子弟ヲ迎フルガ如キ感ガスルノデアリマス．ドウカ健康デ無事デ業ヲ卒ヘル様ニト只管祈願シテ止マナイノデアリマス．特ニ諸君ハ当校開始第1回ノ入学者デアル．3年後ニハ第1回ノ卒業生トシテ校門ヲ出ルノデアルカラ恰モ我ガ家ノ長子ノ如キ感ガスルノデアリマス．サレバ諸君ニ於テモ我輩ニ対スル恰モソノ父兄ニ対スル如キ親愛ノ情ヲ以テセラレン事ヲ希望スルノデアリマス．長子タルモノハ将来其一家ノ責任ヲ負フ義務ヲ有スルガ如ク，我ガ校ノ将来ニ於テ善良ナル校風ヲ起シ国家ニ貢献スルコトニ就テハ諸君ハ我輩創業ニ関係スルモノト共ニ大ニ其責務ヲ有スベキデアリマス．其業績如何ハ将来続々校門ヲ出ヅル卒業生ノ上ニ重大ナル影響ヲ及ボスコトヲ覚悟シナケレバナラヌ．ソコデ今日始業ニ当テ，我ガ校ハ果シテ如何ナル目的ヲ以テ又如何ナル方針ニ由テ学生ノ教養ニ力メントスルカトイフコトヲ詳シク説明シテ置ク必要ガアルト信ジマス．此ノ種学校ノ目的ハ実業学校令及専門学校令ニ拠リ「工業ニ従事スベキ者ニ高等ノ学術技芸ヲ教授スルヲ以テ目的トス」ト規定セラレテアリマス．本校ハ勿論此ノ規定ニ基イテ教育ヲ施シマス．ケレドモ又一ツノ学校トシテ出来ルナラバ何等カノ特色ヲ有シタイト思フノデアリマス．何ヲ以テ本校ハ其特色トシタイカト云フト我輩ハ玆ニ二ツノ事項ヲ挙ゲタイノデアリマス．

第1，技術上ノ知識ノ外ニ一般社会及ビ経済ニ関スル知識ノ修得ニ就テ特ニ注意ヲ払ヒタイト思フテ居ルノデアリマス．今日ノ日本ハ大ナル工業国トナリツツアリマス．而シテ資本ト労働トハ工業ニ於ケル二大要素デアリマス．サレバ此ノ二大要素ニ関スル十分ナル知識ト理解トヲ有スルコトハ殊ニ必要デアラフト思ヒマス．是レガ又抑モ工業界ニ立ツ人々ノ人格ノ大切ナル要素ヲ形成スルモノト信ズルノデアリマス．国家ノ歴史ヤ哲学ノ上ニ基礎ヲ置キタル社会及ビ経済ノ知識ハ特ニ実業界ニ立ツ人々ニ円満ナル徳性涵養ノ材料ヲ供給スルモノト信ズルノデアリマス．尚ホ此等ニ関スル我輩ノ所見ハ諸君在校ノ間随時吐露シテ諸君ノ参考ニ供シタイト思フテ居リマス．

第2，　横浜ハ我ガ国ニ於ケル古キ貿易港トシテ長崎ト共ニ最モ早ク且ツ広ク世界ニ其名ヲ知ラレタル処デアリマス．ソレガ為メ昔ハ一小漁村ニ過ギナカツタ処ガ今日ニ於テハ我ガ国六大都市ノ一ニナツテ居ルノデアリマス．サレバ其地理上ノ便宜ヨリ本校ハ海外ニ於ケル工業ニ関シ当然特別ノ関係ヲ存スベキデアリマスカラ，本校ハ特ニ此点ニ留意致シタイト考ヘテ居ルノデアリマス．ソコデ将来ハ海外ノ工業ニ関スル特別講座ノ如キモノヲ設ケ，此ノ方面ニ志アル学生ノ為メニ特ニ其素養ト知識トヲ授ケタイト思フテ居リマス．私自身ハ従来此ノ方面ニ多少ノ注意ヲ致シテ来タノデアリマスカラ，此等ノ事項ニ関シテハ随時ソノ所見ヲ発表シタイト思ツテ居リマス．

上記特色アル我校教育ノ目的ヲ達スル方針トシテハ成ルベク自由ニシテ且ツ啓発的ノ教育ヲ施シタイト云フ考デアリマス．即チ諸君ヲ最モ自由ナル境遇ニ置キ其ノ天賦ノ才能ヲ阻害セズ，恰モ春光慈雨ニ浴スル花木ノ如ク其天稟ノ才能ヲ培養発育セシメタイト考ヘテ居リマス．決シテ日蔭デ成長セシメタクナイ．陰雨ニ腐朽セシムルコトナキ様ニト考ヘテ居ルノデアリマス．而シテ玆ニ特ニ注意致シタキコトハ自由ト云フ意義デアリマス．即チ自由トハ決シテ即チ放縦ト云フ意味デハナイノデアリマス．自由ハ容易ニ気儘ニナル傾向ガアリ，又屢々自由ト気儘トハ混同セラルル場合ガアル様ニ思ハレマス，此区別ヲ判然ト心得テ居ラネバ大ナル過失ヲ生ジ教育ノ目的修養ノ効果ガナクナリマス．否ナクナルノミナラズ或ハ反対ノ結果ヲ生ズルコトナキヤヲ恐レルノデアリマス．気儘ハ人ヲ堕落ニ導キ自由ハ人ヲ向上ニ就カシムル道デアリマス．二者ハ全然反対ノモノデアリマス．サレバ自由教育ト云ツテモ，学課ニ欠席スルモ出席スルモソハ勝手次第ト云フノデハナイ．理由ナ

クシテ欠席スルノハ気儘デアル．コレスデニ一歩堕落ニ墜チタト同様デアル．或ハ規定サレタル校則ヲ全然顧ミナイモ亦仝ジク気儘デアル，決シテ自由ト混同スベカラザルモノデアル．我輩ノ所謂自由教育トハ人間天賦ノ才能ニ適応シテ教育ヲ施シタイト云フノデアリマス．諸君ハ既ニ法，文等ノ学科ヲ撰バズシテ工科ヲ撰択セラレタルコトハ諸君ノ天賦ノ才能ハ法，文等ヨリモ工科ニ適応シテ居ル人々ト考ヘテ居ルノデアリマス．然シナガラ諸君ハ中学ノ業ヲ５ケ年修業サレタル今日ニ於テモ自分ハ果シテ工業ニ其天賦ノ才能ヲ有スルヤ，又工業ニシテモ如何ナル工業ノ分科ニ其才能アルヤハ的確ニ自覚スルコトハ困難デアラウト思ヒマス．又是レヨリ当校ニ３ケ年学ンデモ尚ホ且ツ的確ニ自覚スルコトハ出来ナイカモ知レナイ．ソコデ本校ハ其間ニ於テ諸君ノ此等ニ関スル自覚ガ成ルベク的確ニ出来ル様ニ教育ヲ進行サセタイト思フテ居リマス．勿論本校ノ主タル目的ハ身体健全，思想堅実．知識豊富タル技術者ヲ社会ニ出シテ製造工業ノ現場ニ従事セシムルノデアリマス．然シナガラ我ガ校ハ自由教育ヲ尊重スル為メ決シテ此目的方向ニ諸君ヲ強制スルノ意志ガナイノデアリマス．３年ノ修業期間ニ於テ自分ハ工場ノ現業ニ不適当デアル．ソレヨリモ研究室ニ引籠リテ創意的研鑽ニ従事シタイ．或ハ其二者何レモ自分ニハ適応シナイ．自分ハ工業製品ノ販売取引ニ従事シタイトノ考ヲ起ス人ガアルカモ知レマセン．或ハ更ニ其範囲外ニ出デ工業上ノ著作又ハ記述ニ志シ或ハ工業教育ニ従事シタイト云フ人ガアルカモ知レマセン．当校ハ諸君ヲ強制シテ千遍一律ニ教育スル考ガナイ．ソコデ今ヨリ３年間ノ修業中ニ於テ諸君ガ自分ハ果シテ工業ノ如何ナル方面ニ其才能ガ適応シテ居ルカト云フコトヲ発見シ的確ニソノ自覚ヲ有タレンコトヲ希望シマス．コレガ又自由教育ノ自然ノ結果デアラウト考ヘマス．第１年ニ於テ学ブベキモノハ工業ニ必須ノ基礎学科デアツテ，誰ニデモ必要ナ学科デアル．第２年以上ニナレバ各種ノ題目ハ漸次分岐シテ来ルカラ其際ハ成ルベク範囲ヲ広クシテ撰択修業ノ便ヲ与ヘンコトヲ考ヘテ居ルノデアリマス．上述ノ如キ方針ヲ執ルニ於テハ其試験制度ニ於テ又其他ノ施設ニ於テ従来世間ニ執リ来レル方法ト異ナル点ハ自然ニ生ズル事ト思ヒマス．然シ此等ハ随時適当ナル時機ニ其意見ヲ発表シテ諸君ノ覚悟ヲ促スコトト致シマス．

諸君言フハ易クシテ行フコトハ困難デアル．特ニ厳格ナル規則ヲ以テ束縛セラレズシテ一ツノ団体ガ規律アリ制裁アリ所謂一糸乱レズ整然トシテ其団体ガ所期ノ目的ヲ達スルコトハ団体所属ノ各員ガ各自責任ト義務トヲ知ルコトニ由テ初テ行ハルルノデアツテ実ニ，困難ナル事デアリマス．当校モ一ツノ団体デアリマス．我輩ノ所謂自由啓発的教育ヲ完フスル為ニハ職員ト学生トハ一層ノ緊張ト奮励トヲ要スルコトト思ヒマス．我邦ノ現状ト将来トヲ慮ヘバ斯ノ如キ組織ノ下ニ修養ヲ積マシムルコトハ最モ肝要ノコトデアルト思フノデアリマス．又斯ノ如ク教育セラレタル人物デナケレバトテモ国家ノ良材トナルコトガ出来ナイト考ヘルノデアリマス．諸君ハ十分此ノ主意ニ共鳴シテ自己ノ責任ト義務トヲ自覚セラレンコトヲ切望シマス．

今ヤ国家ガ人材ヲ要スルコト益切デアリマス．特ニ年少気鋭ノ人材ヲ要シマス．諸君ハ速カニ業ヲ卒ヘ研究事項ナリ又事業ナリ何レニシテモ自分ニ適応セル方面ニ向ヒ若クシテ責任ノ地位ニ就キ社会ニ独立ノ地歩ヲ占メ，諸君ノ父兄ヲ光栄ナラシメ，又諸君ノ国家ヲ光栄ニ導カレンコトヲ切ニ希望スル次第デアリマス．

入学式の思い出　阿部滋弘　（横浜工業会誌 昭和10年４月）

入学，あの入学式といふものを忘れることが出きない．大ていの学校ならば創立であっても学校の制帽徽章などは既にきまっておるであろうが，それは入学した学生から募集して図案を求めるという具合で式場で申された校長の自由主義というものは実行の上にも全く徹底したものであった．したがって１年，２年と浪人生活をやったものは勿論，中学からすぐ入ったものでも中学の帽子はかぶれないし，ヨレヨレな服に鳥打帽子，その他は和服に鳥打，ホー歯の下駄といった具合で，これが市電から下りてゾロゾロと校門を入るところは全く見物であった．夏服から制服になり，応募した中から徽章もきめられ次で校歌の募集もあったが，これはいゝのがなかったようで土井晩翠に依頼されるということを聞いた．こゝいうところへ入ってきて我々は仕来りというか，大きく言え

ば校風とでもいうものがない事に多大の不便を感　じたがまた一方のびのびとして嬉しかった.

16.　第2回目の入試

大正10年3月の入学志願者総数は556名で．入学者は127名（他に選科　機械3名　応化2名）であった．内訳は

科　　名	入学者数	入学者
機械工学科	247	42
応用化学科	121	43
電気化学科	188	42
計	556	127

17.　開校式と校長答辞

無試験　無採点　無賞罰の三無主義を表明

大正10年10月29日，本校にとっては記念すべき開校式が本校講堂において挙行された．この年は9月から約1カ月余も陰うつな秋雨が降りつづいていたが，この日は天が当校の前途を祝福するかのように秋らしくからりと晴れ上がり，参会者一同の顔も晴れ晴れとしていた．

この日当局からは中橋文部大臣，山崎実業学務局長，井上神奈川県知事その他来賓としては清浦枢府副議長，吉武東京高工，下山米沢高工，川口広島高工，的場明治専門，三輪千葉医専，長屋外国語学校等の各直轄学校長をはじめ，朝野500名の来臨があった．（なお弟校である神奈川県立商工実習学校の開校式も一諸に挙行された.）

この席上，鈴木校長は来賓に対する答辞で特に本校の教育方針としての無試験，無採点，無賞罰主義のいわゆる三無主義を説明し，多大の感動を与えた．これは長く本校の校是となり，当時官立学校としては破格の特色ある教育方針として識者の注目を浴びた．

中橋徳五郎文相は祝辞として大略次の通り述べた.

33年前人口4万に過ぎなかった横浜市は今や40余万となり，特に近年の発達は著しいものがあります．実に市の現状及び将来を考えれば，唯単に我国貿易にのみ依頼せずして，工業と相俟たねばその発展を望むことが出来ぬ．是非とも工業の基礎をこゝに樹てその永久の発達に備えねばならぬということは私，屢々耳にする所であるがこれ誠に同感であります.

また清浦奎吾子爵も大略次のごとく祝辞を述べた.

由来商業地商業国と雖もその背景に工業がなければ本当の発達は出来ない．英国が商業国として永久の命脈を保有しているのは植民地の関係もあるが要はその背後に工業があるからであります．而して工業の背後には工業の進歩を促すべき基礎たる教育の必要なるはいうまでもありません.

開校式ニ於ケル学校長ノ答辞

来賓閣下各位，御繁劇ノ身ニアラセラルルニ係ラズ，本日横浜高等工業学校並ニ神奈川県立商工実習学校ノ開校式挙行ニ際シ，当局トシテハ文部

大臣閣下，神奈川県知事閣下，来賓トシテハ清浦子爵閣下ヲ始メ朝野ノ貴顕多数ノ御臨場ヲ忝ウシ，且ツ御懇篤ナル祝辞並ニ御奨励御鞭撻ヲ賜ハリ，洵ニ二校ノ光栄之ニ勝ルモノガアリマセン．茲ニ両校ノ教職員学生々徒一同ヲ代表シ，謹ンデ厚ク御礼ヲ申シ上ゲマス．

此無上ノ光栄ニ浴スル機会ニ於イテ，私ハ両校ノ校長トシテ，此両校ガ如何ニシテ相提携スルニ至リタルカ又此両校ガ今後如何ナル抱負ヲ以テ其発展ヲ図ルカ，簡単ナガラ茲ニ一言スルコトハ，私ノ当然ノ義務デアリ且ツ此開校祝賀ニ賛同ヲ忝ウシタル来賓閣下各位ノ御盛意ニ酬ユル所以デアルト存ジマス．

私ハ東京高等工業学校ノ前々校長手島精一先生ノ門下生デアリマス．手島先生ハ我国工業教育ノ先覚者デアリ，元勲デアツタコトハ，世既ニ定評ガアリマス．而シテ先生ノ工業教育ニ於ケル本領ハ寧ロ工業徒弟及ビ工業補習教育ノ方面デアツタト私ハ信ジテ居リマス．私ガ先年当校経営ノ内命ヲ受ケマシタ時，潜ニ先生ノ志ヲ継承シ，其本領トセラルル所ヲ本校ニ於テモ聊カ実現セシメタイトノ希望ヲ抱イテ居リマシタガ，私ノ微力ナル，斯クノ如キ計画ハ前途甚ダ遼遠ノ事ト思ツテ居リマシタ．然ルニ大正8年9月故安部幸兵衛氏ハ1,000,000円ヲ公共事業ノ経費トシテ神奈川県ニ提供セラレマシタ．此ノ資金使用ニ就イテハ県ノ当局及ビ横浜市ノ之ニ関係セラレタ方々，並ニ県政ニ参与セラルル諸君ト私共トノ考ガ幸ニシテ一致共鳴シ，遂ニ設立ヲ見ルニ至ツタノガ，実ニ此ノ商工実習学校デアリマス．私ノ宿志ガ斯クノ如ク容易ニ又速カニ成立シタコトハ実ニ望外ノ喜ビデアリマシテ故安部氏ニ対シテハイフモ更ナリ県及市ノ各位ニ対シ厚ク感謝ノ意ヲ表スル次第デアリマス．

横浜高等工業学校ハ実業学校令及専門学校令ニヨリ，工業ニ従事セントスルモノニ高等ナル学術及技芸ヲ授クルヲ以テ目的トシ，目下機械工学，応用化学，電気化学ノ3科ガ設置セラレテ居リマス．修業年限ハ3ケ年デアリマスガ，学理ニ相当スル実地ノ技術ヲ練習セシムルコトハ，此短日月ヲ以テシテハ容易ノ事デアリマセン．故ニ技術ノ練習ニハ特ニ実際的工場ノ訓練ヲ要シマス．

仍テ商工実習学校ハ実地ニ重キヲ置イテ居リマス．工業部ノ方ハ本校即チ横浜高工トノ連絡上，マタ同ジク3科ヲ置キ修学年限ハ5ケ年デ其各工場ハ営利的経営ニ立脚セシメテ居リマス．此ノ工場デハ本校ノ学生ニモ亦実際的経営ニ当ラシメ，技術的ノ訓練ヲ茲ニ補フコトト致スノデアリマス．商業部ノ方ハ此実地工場ノ経営即チ原料ノ買入，製品ノ荷造リ運送，販売等ニ就キ実地練習ヲ致スコトトシマス．本校ハ実習学校ニヨリ多大ノ利便ヲ得ルト同様ニ，又実習学校ハ本校ヨリ多大ノ利便ヲ得ルコトト信ジマス．斯クノ如ク相提携以テ唇歯輔車ノ関係ニアルコトハ即チ両校併立ノ主旨ニ外ナラヌノデアリマス．

次ニ本校ハ実習学校ト異ナリ文部省ノ直轄デアリマス．然レドモ其所在ヨリシテ至大ナル関係ヲ当市及ビ当県ニ有シテ居リマス．即チ此程度ノ専門学校トシテ，所在地ト交渉ナシニ超然孤立スルコトハ出来マセン．広ク我国ノ製造工業ノ実際ト常ニ聯絡交渉ヲ有タネバナリマセン．而シテ特ニ私ノ希望スル所ハ何ヨリモ先ヅ県及市ノ実業方面トノ緊密ナル聯絡関係デアリマス．即チ，是等ト善良ナル理解ヲ有チタイト思ヒマス．具体的ニ云ヘバ県及市ノ諸工場ハ，我両校ノ為メニ差支ナキ限リ開放セラレ，我ガ教授及学生生徒ノ見学ニ資セラレタイノデアリマス．同時ニ諸工業会社ニ於テ技術上ノ困難ナル事件ニ遭遇セラルルニ於イテハ，本校ニ交渉ヲ願ヒタイノデアリマス．本校ハ其教育ノ余裕アル限リ，又本校ノ可能デアル限リ，其等技術上ノ困難ヲ排除スル事ニ努力イタシタイノデアリマス．是等ハ本校トシテ当然ノ義務デアリマスガ，猶本校ハ横浜ナル最モ光栄アル貿易港ニ所在スル特殊ノ関係ヨリ学校ガ自発的ニ一ツノ特色ヲ具備シタキ一事ガアリマス．是レ所謂植民地的物産ノ研究デアリマス．外国ニテハ之ガ研究ニ特別ノ講座ガ設ケラレテ居リマスガ，本邦ニ於テハ未ダ之ヲ試ムルニ至ツテ居リマセン．当校ニ於テハ特ニ此点ニ注意シ，支那ヲ初メ南洋，南米ニ至ルマデ工業上ノ物資ノ研究ニ努力イタシタク既ニ其端緒ヲ開キツツアリマス．此点ニ就キ只今，川口広島高等工業学校長ノ御宣伝ヲ忝ウシタルコトヲ感謝イタシマス．

以上我校ノ本領及ビ其特色ヲ発揮スルニ於テ，豊富ナル国家ノ援助ヲ期待スルコトノ切ナルト同時ニ，当県及当市ノ同様ナル後援ヲ懇願シテ止マザル次第デアリマス．

最後ニ本校ガ是等ノ希望，抱負ヲ以テ如何ニ学生ヲ薫陶スルカニ就テ一言ヲ許サレタイノデアリマス．教育ノ根柢トスル精神ハ，先帝ノ下シ賜ヒ

タル教育勅語ヲ遵奉スルノデアリマス．而シテ本校ガ昨年四月授業開始以来特ニ標榜シテ居リマスモノハ，自由啓発ノ教育主義デアリマシテ勿論教育勅語ヨリ流レタル一涓滴ニ過ギナイノデアリマス．之ヲ論ジ之ヲ宣伝スルハ易キモ実践ノ難キヲ看取シ，本校ハ従来ノ採点的試験制度ヲ断乎トシテ廃棄イタシマシタ．之ガ為メニ特ニ懇篤ヲ極ムル教師ノ指導ト学生ノ自覚自発ヲ絶大ニ要求シテ居ル次第デアリマス．自発的修学ハ独リ真正ナル学業ノ成績ヲ収ムルノミナラズ，又学生ノ品性陶冶ニ影響スル処至大ナルモノアラント信ジテ居リマス．業ヲ終ヘテ社会ニ立チ責任ヲ重ンズル人，名節ヲ尚ブ人，彼ハ頼モシキ人，彼ハ苦節ヲ共ニスルニ足ルノ人ト我モ許シ人モ許ス人格者ハ無理解ナル束縛ヨリ脱シ監視ナキ自由ノ環境ニ自発的ノ薫陶ヲ授ケラル、コトニ由ツテ，ヨリ多ク輩出スルコトト確信シ，所謂試験的勉強ヨリ青年学生ヲ解放イタシマシタ次第デアリマス．

茲ニ重ネテ来賓閣下各位ニ敬意ヲ表シ，両校ノ教職員学生々徒一同ヲ代表シ，本日ノ御盛意ヲ感謝イタシマス．

当時を追想して鈴木校長は「名教自然碑の由来と教育私見の断片」において次のように述べている．「初め開校式に中橋文部大臣は臨席することを容易に承諾せられなかった．東京以外の開校式には出席しないということであった．私は再三懇請して終に承諾を得た．三無主義の黙諾を得んが為であった．式後大臣随行の山崎実業学務局長等から三無主義で行くことが出来るなら結構であると，いささか消極的ではあったが別に異議疑問をはさむ人はなかった．大臣は実業家出身であった為か一言の批判もなかった．」

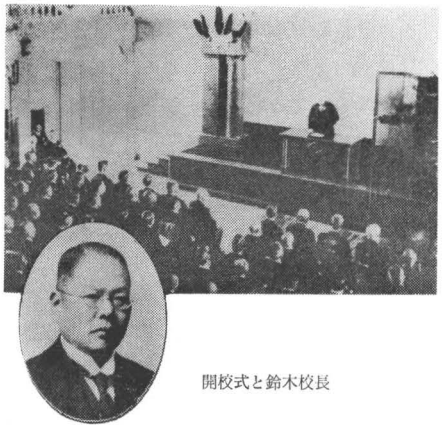
（注） 神戸大学工学部50年史（p. 12～13）によれば神戸高工でも早くから無試験，無落第を標榜し，「この制度は横浜高工にならったものである」とある．

18. 記 念 祭

(1) 前夜祭

開校式の行なわれた10月29日の前日28日には校門前の大アーチには「祝開校」の扁額（へんがく）を掲げ，紅白のまん幕を張りめぐらし，本館前には万国旗を四方に張り渡した．午後4時1発の花火と共に，本校生をはじめとし横浜一中，同二中，浅野総合中学，皇道中学，商工実習の各校生徒ら1,200名が青年隊を先頭にちょうちんをかざしつつ校歌と記念祭歌を合唱して大行進をおこなった．

学校正門より大岡町，関外，関内，県庁，商業会議所，市役所に至り万歳三唱，横浜公園に至り9時散会した．横浜全市を挙げての喜びの前奏曲であった．



開校式と鈴木校長

正 門 前

(2) 記念植樹

10月29日午前9時，図書館前で，校長，教職員生徒一同によって，開校記念樹の植樹式を挙行した．

(3) 記念祭

10月29日開校式に引きつづき午後は校庭で運動会を開催，本校はじめ付近中，商業学校，小学校生徒らも参加した．30日，31日の両日は学校全部を一般に公開し盛大な記念祭を催し，学生の製作したものを一般の観覧に供した．入校者25,000余名に上った．なお31日夜は講堂で学生主催の余興を行ない，これまた満場立錐（りっすい）の余地なき盛会であった．

この余興には開校記念祝賀劇と称して，電1の「出家とその弟子」，応2の風刺劇「飢餓」，機1の悲喜劇「命の針」，応1の「忘れてきたシルクハット」，電2の史劇「ナーマン」，機2の風刺劇「蘇命の旅」，のほか各科各級のマンドリン，バイオリンの演奏があった．

（主として高工時報　昭和6年11月1日　思い出による）

(4) 記念祭の歌

1. いざや歌はん記念祭
   胸にあふるる歓びの
   声はとどろくこのあした
   仰ぐ理想の高き空

2. いざやたたへん記念祭
   夕日照り添ふもみぢ葉の
   赤き心の燃える時
   染めなす波の旗じるし

3. いざや歌はん記念祭
   長き夜ふけて横浜の
   灯の波映ゆる街々に
   残る健児の栄ある名

（アムール河の曲譜）

(5) 記念祭の意義について

記念祭そのものの是非についてはとかくの論議があるが，その意義について，創設者である鈴木校長は，六ツ川夜話（52回）で次のように述べている．

私が蔵前に在職していた大正初年頃の同校の記念祭は非常に盛大であった．おそらく一高と蔵前両校の記念祭が二大記念祭であったであらう．一高の方は所謂向陵男子の意気を示した実に朗かな記念祭であった．蔵前の方は全く実質的なもので，学校を開放して世間に工業知識を普及すると同時に，学校といふものを以て東京市民の楽しみを助成することにあっただらうと思はれる．私は蔵前の手島校長に沢山のものを教へられその意見に敬服していた．それで本校に於ても開校早々この記念祭を始めた．畢竟本校のそれは蔵前にならったものである．

記念祭といふものはお祭り騒ぎじゃ，学生のする仕事としては相応しからぬことじゃと学校外の世間でも面白からぬ感情を持っている者もあらうと思ふ．

然しこのお祭ということは古今東西を問はず行はれている．これは政治の一つである．記念祭といふものは学校政治即ちスクール・ポリテイックの一つであると思ふ．百姓が秋豊年祭をするやうに学校も一年一度お祭りをする……（中略）……非常に元気よく朗かにこの数日を過すのは誠に結構な事であると思ふ．無論記念祭後もこの気分を牛のよだれのやうに流している事は大禁物である．これは祭に対する私の見方である．…….

19. 本校の校風と三無主義

本校の校風は鈴木校長着任と同時に興った．大正9年4月12日の授業開始の日の校長訓旨，同10年10月29日の開校式の校長式辞などにおいて自由主義，三無主義が本校の教育主義として宣言

され，教職員，学生一同が相協力してこの校是の達成に努力した．この主義主張はいうはやすく成すは最も難いことではあったが「校風徐ろに興り」官立専門学校としてはまことに特異な校風が形成されていった．

いわゆる鈴木校長の唱えた三無主義とは無試験，無採点，無賞罰主義である．鈴木校長は，「三無主義は決して私の創意のものではない．又この三無主義を実行するに於て，私のとった手段といふものも，何一つ私の創意といふものはない．凡ては先哲又は先輩同僚の人々がその範を示してくれた足跡を，そのまま踏み又その形式に少し許りの修正を加へたものに過ぎないのである」．（名教自然碑の由来と教育私見の断片）

と述べているが，鈴木校長の傑出しているところは，これを無理せずに自然に実行に移していったところにある．同じ書に次のように苦心を述べている．「さて三無主義を以て高工の教育に当ってみたが，単なる信念のみでは容易く目的が達せられない感じがせられてならない．そのままにして置けば，放縦に陥入る危険があり，野放し教育になる恐れがある．そこで私は私の教育上の信念である自覚を，学生の脳裡に植えこまねばならないと考え，同時に学校の性質をよく学生に理解せしむる為に，私は1週1度1時間教壇に立つこととした．……」

自由教育を実行するには，学校全体が自由の空気を呼吸しなければならない．すなわち校風が興らねばならない．校長や教授陣はもちろんのこと，給仕や小使に至るまで，校風に染まり，一団とならなければならない．そのためには校長教授陣は自ら率先し，細部に目をくばり，あらゆる努力をなし，校長から学生まで一つにならねばならぬ．あらゆる障害を乗り越えてこれを実際に実行していったところに，鈴木校長の真面目があった．

「我校の自由教育は，三無主義を徹底的に実行するを以て，第一の要諦とした」と鈴木校長は各処で述べている．煩をいとわずさらに「自由教育10年」に鈴木校長の述べているところを記すこととする．

> 我校の学風とする自由啓発主義の樹立は，決してこれを訓練に求むべきではない．各自の自覚，責任に直面しての自覚，研究に対しての自覚，困難に対しての自覚，これらの意味の自覚を措いて他に求むることはできない．故に学校はこれらの意味よりして生徒の自覚，自発を要求すること甚大なのである．業を卒えて社会に出て責任を重んずる人，名節を尚ぶ人，彼は頼もしき人，彼は苦節を共にするに足る人と吾も許し人も許す人格者は無理解なる束縛より脱し，監視なき自由の環境にあって，自発的の薫陶を受くることによって，始めて生れ出づべきものと確く信ずるものである．これわが校が無試験，無採点主義を採用して所謂試験的勉強より青年を解放したる所以である．
>
> 然しながら斯くの如きは言ふべくして行い難きところである．凡そ集団生活は如何に厳格，細密なる規則を設くるも所謂一糸乱れず整然たる秩序を保つが如きことは難事中の難事とされている．況やそのすべてを解放して，然かも猶その成果を挙げんと欲せば，須らく集団構成の各個人がその責任と義務の完璧を期するの外はないのである．わが校はこの完璧に向って，二六時中絶えざる努力を継続する一つの修養団体なのである．……教育の功果如何はこれを短日月の経験に徴して早計に批判し去るべきものではないと考える．わが校の主義とし，主張するところも畢竟するに多年の歳月によって解決せらるべきであって，今玆に予断を許されないところであるが，所信よりすれば必ずその花を開き，実を結ぶべき秋の到来すべきことを疑はざるものである．

なお前文でも見るように鈴木校長は自由主義と称したり，あるいは後に自由啓発主義といった

りしているが，この両者は同じことを意味していたようである．

鈴木校長は終戦後自由啓発主義について次のように語っている．（六川丘語 昭和28年）

昭和の初め頃から，帝国々防の第一線は，満洲にあると唱え初めてからは，帝国主義の気勢は，益々尖鋭を加えてきた．国内の世論も軍国主義に拍車をかけて，自由主義は表面に顔を出すことは，許されなかった．我校は自由主義を標榜したが，それでなくとも，当初から多少の危険と不安を感じた．その当時中学教育者で自由教育を主張した為め，教職をなげ捨てなければならなかった校長さえあった．私は倫理の教授岩橋遵成君の知恵をかりて，自由の下に二字を添加して，自由啓発主義と改め，世の中をカモフラージュした．しかし教育の内容については少しも異なるところがなかった．無益の反抗を避けるに過ぎなかった．皇室中心主義を奉じ，教育の中心を，教育勅語に置きながら，御神影を奉戴せず，教育勅語の下賜を受けず，従って三大節に職員生徒を招集して，御神影の祝賀式を行なわず，三大祭日に一同を野放しにして置いた事は，私自身には確固たる信念と，闘志に燃えて居た．……

20. 校風徐興

大正12年1月26日，自由啓発の思想を徹底，樹立するため，教職員，学生の有志によって，校風徐興会が設置され，1月31日第1回例会を開催した．

横浜高工学校一覧（大正12年度）には次のように記している．

〔校風徐興会〕 訓育上学校当局の期待する処，若し学生の希望する処と相容れざるところあらば，両者の弊処欠陥互に気附かず，意志の疎通を欠き，為めに教育の能率漸減するの事実なきを保し難し．殊に自由啓発を標榜する本校に於ては居常意を玆に留めざるべからず．本校教職員と学生との間に協議成立し，毎学期凡そ1回全職員と学生の代表者並に有志者を加え，一の協議会を興し教育振興上に関する諸問題を討究することとなしたり．名づけて校風徐興会と称し，その第1回を大正12年1月31日開催したり．健全醇良なる校風は全校の和衷協戮により益々発揚せんことを希望してやまず．

鈴木校長は，校風徐興について昭和4年の第7回卒業式の式辞で次のように述べ，本校の校風が徐々ではあるが形成されつつあることを喜んでいる．

学校の経営として最も努力を要することは校風の樹立にあると思う．古人曰く，清風徐に来つて水波起らずと，校風も徐々に吹き興すと波瀾を生ずることがなからうと思い，急がずに同僚と一致して，不断の努力をつゞけ爾来9年となる．この9年の間に朧げながら校風のある形が生じて来つゝあるのではなからうかと想像せられ，喜びに堪へぬ次第である．

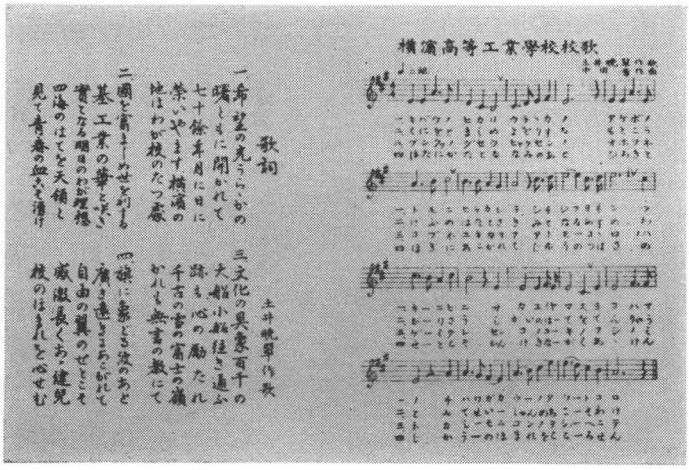
吾校の標榜する自由啓発は，校風の根元とならなければならぬと考へます．

また荒牧寅雄（大正15年機械卒）は高工時報で次のように語っている．

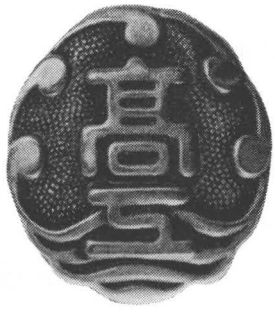
名教自然が示すように自由教育を標榜して立った煙洲鈴木先生が，技術教育に独自の方式を採用されたこの学校は，横浜というエキゾチックな雰囲気の中で，全く従来の専門学校が持たない，何となく開放的でしかも進歩的な校風を持っていました．

21. 徽章　校歌

本校の波に高工の徽（き）章は創立後間もなく何かなくてはということで，本校生徒に呼びかけ懸賞募集をしたところ，機械1期生の金子徳雄のものが当選した．これに少しく手を加えたものが，あの波に高工のわれらが横浜高工の徽章である．



横浜高工校歌



横浜高工徽章

校　歌

「希望の光うららかの　曙ともに開かれて」われらのなつかしい校歌については残念ながら資料として存在するものは何もない．ただ口づたえで次のようにいわれている．徽章と同じように，創立時，一般職員，生徒から募集したが，佳作が得られなかった．それで鈴木校長はかつて二高で同僚であった有名な詩人の土井晩翠に依頼し，できたのがこの校歌であると．作曲者の中田章についてもつまびらかにしない．

22.　商議委員

文部省の規則として各校に商議委員数名を置くこととなっていた．これは学校経営に関し重大なことについて審議する機関である．本校商議委員会規程は大正10年制定された．

横浜高等工業学校商議委員会規程　（大正10年制定）

第１条　文部省直轄諸学校官制第19条ニ依リ横浜高等工業学校ニ商議委員会ヲ置ク

第２条　商議委員ハ左ノ人員ヲ以テ之ニ充ツ

神奈川県知事又ハ其ノ他ノ神奈川県高等官	１名
横浜市長又ハ其ノ他ノ横浜市吏員	１名
商工業ノ経験アル者	３名以上７名以下

第３条　商議委員会ハ学校経営上重大ナル事項其ノ他学校長ニ於テ必要ト認ムル事項ヲ審議スルモノトス

第４条　商議委員会ハ文部大臣ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述スヘシ

第５条　商議委員会ノ会議ハ学校長之ヲ開キ其ノ議案ヲ提出スルモノトス但シ商議委員ニ於テ意見アルトキハ之ヲ議案ト為スコトヲ得

第６条　商議委員会ノ議事ニ関スル規定ハ委員会ニ於テ定ムルコトヲ得

第７条　商議委員会ノ決議ハ学校長ヨリ之ヲ文部大臣に報告スヘシ

初めての委員には次の７人が任命された．

日本銀行総裁	井上　準之助	神奈川県知事	井上　孝哉	横浜商業会議所会頭	井坂　孝
原合名会社社長	原　富太郎	渡辺銀行頭取	渡辺　福三郎	横浜市長	久保田　政周

左右田銀行頭取　左右田喜一郎

（イロハ順）

なお昭和17年までの委員をここに記しておく．

◇大正11年

日本銀行総裁　井上　準之助
神奈川県知事　井上　孝哉
横浜商業会議所会頭　井坂　孝
原合名会社々長　原　富太郎
渡辺銀行頭取　渡辺　福三郎
左右田銀行頭取法学博士　左右田喜一郎

◇大正12年

井上　準之助
横浜商業会議所会頭　井坂　孝
原合名会社々長　原　富太郎
渡辺銀行頭取　渡辺　福三郎
横浜市長　渡辺　勝三郎
神奈川県知事　安河内　麻吉
左右田銀行頭取法学博士　左右田喜一郎

◇大正13年

井上　準之助
横浜商業会議所会頭　井坂　孝
原合名会社々長　原　富太郎
渡辺銀行頭取　渡辺　福三郎
横浜市長　渡辺　勝三郎
中村　房次郎
左右田銀行頭取法学博士　左右田喜一郎
神奈川県知事　清野　長太郎

◇大正14年

井上　準之助
井坂　孝
原　富太郎
神奈川県知事　堀切　善次郎
渡辺　福三郎
中村　房次郎
横浜市長　有吉　忠一
左右田喜一郎

◇大正15年

井上　準之助
井坂　孝
原　富太郎
渡辺　福三郎
中村　房次郎
横浜市長　有吉　忠一
左右田喜一郎

◇昭和2年

日本銀行総裁　井上　準之助
井坂　孝
神奈川県知事　池田　宏
原　富太郎
渡辺　福三郎
中村　房次郎
横浜市長　有吉　忠一

◇昭和4年

大蔵大臣　井上　準之助
井坂　孝
原　富太郎
渡辺　福三郎
中村　房次郎
神奈川県知事　山縣　治郎
横浜市長　有吉　忠一

◇昭和5年

大蔵大臣　井上　準之助
井坂　孝
原　富太郎
横浜市長　大西　一郎
渡辺　福三郎
中村　房次郎
神奈川県知事　山縣　治郎
有吉　忠一

◇昭和7年

井坂　孝
原　富太郎
横浜市長　大西　一郎
渡辺　福三郎
神奈川県知事　横山　助成
中村　房次郎
有吉　忠一

◇昭和9年

井坂　孝
原　富太郎
横浜市長　大西　一郎
神奈川県知事　横山　助成
中村　房次郎
貴族院議員　有吉　忠一

◇昭和10年

井坂　孝
神奈川県知事　石田　馨
原　富太郎
中村　房次郎
貴族院議員　有吉　忠一
横浜市長　青木　周三

◇昭和11年

井坂　孝
原　富太郎
中村　房次郎
神奈川県知事　半井　清
貴族院議員　有吉　忠一
横浜市長　青木　周三

◇昭和15年

井坂　孝
中村　房次郎
貴族院議員　有吉　忠一

横浜市長 青木 周三
◇昭和16年
井坂 孝
中村 房次郎

貴族院議員 有吉 忠一
横浜市長 半井 清
神奈川県知事 松村 光麿
◇昭和17年

井坂 孝
中村 房次郎
貴族院議員 有吉 忠一
横浜市長 半井 清

23. 観光外人招待大音楽会

大正12年3月1日米国観光団1,500余名がエムプレス・オブ・フランス号で横浜港に入港した．本校校友会音楽部は3月3日夜，本校講堂に観光団を招待し大音楽会を開催大盛況であった．本件につき「学校一覧」には次のように記している．

「……本校は横浜なる帝国の首港に位置せるものとして此挙の決して徒労にあらざりしを欣幸とす．」

24. 第1回卒業式

大正12年3月17日，本校第1回卒業式が本校講堂で挙行された．思えば大正9年開設と同時に，第1期生として入学した学生はここに3年の螢雪(けいせつ)を積んで，めでたく本日卒業式に臨むこととなったのである．卒業生はもちろんのこと，校長始め教職員一同の喜びは如何ばかりのものがあったろうか．

卒業式の時の鈴木校長の告辞がよく第1回卒業生に対するきびしい期待と喜びを伝えている．

なお当日は本校とは特に関係深い後藤新平が臨席して講演を行なった．

学校長 告辞

本日当校第一回卒業式挙行ニ際シ当局文部大臣代理並ニ朝野来賓閣下各位ノ御来臨ヲ忝ウシ厚ク感謝イタシマス．特ニ後藤子爵閣下ニハ大ナル御家庭ノ御不幸後デアリ，且又国家公私御多用ノ折ニモ拘ラズ御来臨一場ノ御教示ヲ賜ルコトハ，我卒業生ハ勿論本校ノ光栄之ニ過ギズ洵ニ感激ニ堪ヘヌ所デアリマス．

卒業生諸君，3年螢雪ノ功空シカラズ本日ノ光栄ヲ獲ラレタルヲ衷心ヨリ喜ビマス．又是等卒業生ヲ指導誘掖シタル教官諸君ノ丹誠及ビ終始諸般ノ事務ニ服シタル職員諸君ノ労ニ対シ，私ハ学校長トシテ厚ク感謝イタシマス．卒業生諸君ガ今日ノ如キ光栄ニ浴スル事ハ畢竟我国家ガ諸君ニ期待スルコト大ナル為メデアル．諸君ノ責任ハ此期待ニ孤負スルコトナキヲ祈ツテ止マザル次第デアリマス．諸君ハ又我校第一回ノ卒業生デアル．諸君ノ今後ニ於ケル業績如何ハ我校将来ノ運命ニ影響スル処尠カラヌノデアリマス．然ラバ諸君ハ二重ノ責任ヲ有シテ居ルモノデアル．社会ニ立ツテハ須ラク国士ヲ以テ任ジ同窓ノ間ニ於テハ先輩ヲ以テ任ジ以テ其実績ヲ挙グルコトヲ今後一日ト雖モ忘レテハナラヌ．

来賓閣下各位，本校ハ大正9年4月開校以来屢々宣言主張イタシマシタ主義方針ナルモノガアリマス．

本校ハ実業専門学校トシテ工業ニ関スル高等ナル学術技芸ヲ教授イタシマスガ，是等ノ上ニ猶特ニ注意ヲ傾注シテ居ル事項1，2ヲ簡単ニ申上ゲマス．

第一国家ノ歴史ヤ哲学ノ上ニ基礎ヲ置キタル社会及経済ノ知識ヲ獲得セシムルコトデアリマス．是等ノ知識ハ実業界ニ立ツ人々ニ円満ナル徳性涵養ノ材料ヲ供スルモノト信ズルカラデアリマス．

第二ニハ国際的工業ノ開拓デアリマス．是レ横浜ト云フ光栄アル貿易港ニ設立セラレタル地理的ニ必然的ナ計画デアルト信ジマス．

本校創業日猶浅ク是等ノ特色ヲ発揮スルノ充分ナル機会ニ接シ得ズト雖鋭意此方針ニ進行スル積リデアリマス．後者ノ主義ノ為メニハ本校ハ既ニ

昨年3月在外研究生トシテ教官ヲ蘭領印度及海峡殖民地方面ニ派遣シ現ニ此方面ノ化学工業ヲ調査研究セシメツヽアリマス．又今回ノ卒業生中ニモ今後直ニ海外ニ渡航シ事業ニ従事シ研究ニ没頭セントスルモノ両3名アルコト我校ノ方針ガ実行ノ端緒ニ就キタルモノト観察シテ居リマス．猶本校ハ教育ノ方針トシテ自由啓発主義ヲ取リ従来ノ試験制度ヲ全廃シ強制的試験勉強ヨリ学生ヲ解放シ自己ノ責任ヲ重ンジ自発的ノ勉強ニ由リ其課程ヲ卒ヘシメマシタ故，今日ノ如キ盛典ニ際会シ其儀礼ニ相応シキ各種賞品ノ授与，特待生，優等生等ノ表彰ハ全然行ハヌノデアリマス．是レ我国憲法ノ政治，自治ノ制度ニ順応シ社会ニ立チ独歩ノ地位ヲ占メ責任ヲ重ンジ名節ヲ尚ビ虚偽ヲ退ケ正義ヲ社会ニ捧ズル人ハ斯ノ如キ主旨ニ由リ教育ヲセネバナラヌト信ズル為デアリマス．閣下各位此ノ如クニシテ今日92名ノ卒業生ヲ社会ヘ初メテ送リ出シマス．不幸ニシテ一般工業ノ不景気ニ際会イタシマシタ．特ニ化学工業ガ甚シキニ拘ラズ当校ハ二科マデ化学工業ニ属シテ居リマス．然レドモ世上ノ同情ニ由リ大ナル困難ヲ見ズ各方面ニ略就職ノ途ヲ得マシタコトハ実ニ欣幸トスル処デアリマス．

卒業生ノ業績如何ハ，今後世間ガ実証シテ下サルコトデ学校トシテハ至大ノ注意ヲ払フ処デアリマス．是等ノ新人物中ニハ必ズヤ高材逸足所謂千里ノ馬アルコトト信ジマス．幾多ノ駿馬アルコトヲ信ジマス．併シ之ヲ策ツニ其道ヲ以テセズ，之ヲ食ツテ其材ヲ尽サシムルコトガ出来ナケレバ或ハ駑馬ニ等シク空シク槽櫪ノ間ニ斃死セシムル恐ガアリマス，是レ又我校ガ鋭意教育ニ尽スト共ニ弘ク社会ニ希望スル処デアリマス．何分ニモ閣下各位並ニ江湖ノ厚キ御後援ト御鞭韃トヲ今後益々仰ギタイ次第デアリマス．

玆ニ蕪辞ヲ開陳シ本日ノ卒業式ニ於ケル閣下各位ノ御芳情ヲ厚ク感謝イタシマス．

25. 支那北京双橋無線電信と遠藤教授

機械工学科教授遠藤政直は，大正12年三井物産株式会社の依頼で，無線電信用発電機を運転する蒸気タービン付属の特殊精密速度調整機を設計製作した．当時としてはこれは画期的なものであった．三井物産はこれを用いた無線電信設備を支那北京郊外の双橋無電台に納入したので，遠藤教授は13年双橋に調整のため出張した．このことについて高工学校一覧（大正12～13年）に次のように記し同教授の偉業を称えている．

遠藤教授は昨年（大正11年）以来三井物産の依頼をうけて，無線電信用発電機を運転すべき蒸気タービンに付属する特種精密速度調整機を設計製作せり．是より先，同社は支那政府との間に北京双橋に於て欧米各国と直接通信し得る大無線電信局を建設することを契約し，その工事を進行したるも，該無線電信に使用する所の発電機を運転するに蒸気タービンを直結使用するの方法を取りたるを以て，蒸気タービンの廻転数をこの種発電機に於て特に必要なる精密の程度を以て正確に一定に保持するの必要を生じ，その変化の限度は負荷の如何なる変化に対しても正速度の0.1% 以下とせられたり．抑もこの蒸気タービンを以て無線電信発電機を直結運転するの装置は，外国に於てもその例なく，上述の如く精確なる動作をなす調整機の製作は至難の事とせられたり．而してこれが設計は同教授自らこれを担当し，整作はその監督の下に石川県小松製作所に於てなさしめ竣工するに及びて，本校水力実験室を利用してその予備試験をなし，順次これを支那に発送したり．本年（大正12年）6月上旬同教授は支那双橋の現場に出張し，取付及び働作の調節に従事したりしが，良好の結果を収めて11月中旬帰朝せり．北京無線電信は今や日米支間の国際問題として，世界の注意する処なるが，これが建設に本校の関与する処あるは本校の欣幸とする処なり．

26. 横浜工業懇話会

本会は，鈴木校長がその敬愛する東京高工校長手島精一の故知にならって創設したもので，大正11年５月横浜銀行集会所で第１回を開いた．

工業および工業教育に従事するもので，横浜市ならびに付近にある者が相会して毎月１回15日と日をきめ，（ただし７，８月は休み）名士の講演会を開き，会員相互の意見を交換し，気脈相通じ，斯（し）界の向上発展に資するを目的とした．

初めの間は主として工業に関する講演であったが，おいおいと範囲が広まり政治，経済，外交，教育，軍事と各方面にわたり，講師も当時の一流人士が招かれた．会員数300名以上となり，毎回出席者も150名以上の大集会となった．

本会は22年間つづき回を重ねること227回に及んだが，終戦後惜しいかな自然消滅の形となった．

その間の講演者の主なる人は岡実，石橋湛山，大河内正敏，有吉忠一，梶原仲治，結城豊太郎，藤原咲平，白川義則，安達謙蔵，小島政二郎，鈴木梅太郎，沢田節蔵，佐々木信綱，西春彦，白鳥敏夫，大西滝治郎，鳥居竜蔵，芦田均，伊藤正徳，布施勝治，沢田廉三，徳富蘇峰等であった．

付(1) 県立商工実習学校（県立商工高等学校）

大正８年　横浜の豪商，安部幸兵衛は死去に際し，当時の金で100万円を県に公共事業費として寄付した．

鈴木達治はそのころ，横浜高工の創立に関係していたので，商業と工業を合わせた中等学校を横浜高工の付属として，すなわち文部省直轄の学校として共に経営したいと考え，熱心にこの件を申出て運動をした．

県ではこのほか．図書館，病院，育英資金等その金の使用申込みは数10件あったが，子弟の教育を第一義と考え，県立商工実習学校設立に踏みきった．

鈴木校長はこれは当初の文部省直轄という同校校長案とは違っていたが，大局的見地から一歩を譲り，同校経営の任を引き受けた．よって県は直ちに横浜高工の隣接地に敷地を選定したが大正９年の開校には間にあわなかったので高工の校舎の一部を借り受け，高工と同時に開校の運びとなった．

鈴木初代校長の抱負は次の通りであった．すなわち，本校（商工実習）は実地に重きを置き，工業部の方は横浜高工と同じく３科を置き，各工場を営利的経営に立脚せしめ，相互に補いあい，商業部の方は工場の原料買入れ，製品の荷造り，運送，販売などの実地練習をする．高工は実習学校により多大の利便を得ると同様に，実習学校はまた高工より技術その他の助けを得る．このように相提携して唇歯輔車(しんしほしゃ)の関係にあることを理想とした．

創立満10周年の昭和７年１月鈴木校長は退任し，主事の山本政人が二代校長に就任した．

昭和36年鈴木達治永眠の日，同窓会々長大須賀与喜三は「私たちの県立商工高等学校は安部幸

商工高校２代校長　山本政人

兵衛翁と鈴木先生のお二人がおられなければ，この世に生れることが出きなかった学校です．創立当初において，あいついで起った学校の危機は実に先生の卓越した手腕によって，それぞれ無事に切り抜けることができ発展の一路をたどることができた.」と弔辞に述べている．

沿　革

大正９．４．１　安部幸兵衛の寄付金により神奈川県立商工実習学校(５年制)設立，設置学科商業，工業（機械,電気,応用化学）
９．４．19　第１回入学式，初代校長に横浜高等工業学校長鈴木達治兼務就任
12．８．16　事故により本館焼失
12．９．１　関東大震災により残存校舎倒壊
15．２．６　現校舎本館完成
昭和３．２．９　実習工場完成
７．１．20　二代校長，山本政人就任
14．６．22　夜間部設置（２年制）設置学科工業（電気・応用化学）
14．７．５　運動場設置
17．２．28　三代校長，村上泰助就任
22．５．31　四代校長，椙山威郎就任
23．４．１　神奈川県立商工高等学校と改称
設置学科　全日制　商業，工業
（機械・電気・工業化学）
定時制　工業
（機械・電気）
26．４．１　定時制課程に商業科増設
28．３．31　体育館兼講堂完成
36．２．１　五代校長，稲毛俊郎就任
41．９．２　六代校長，田中信義就任

付(2)　横浜市立大岡工業補習学校（市立横浜工業高等学校）

横浜高工鈴木校長は，横浜に着任早々から横浜に補習学校を設立すべきであるとの理想をもっていた．昼間働いている者のために夜間工業教育を施す学校を経営したいというのは，鈴木校長の師事していた蔵前の東京高工手島校長のいだいていた工業教育についての素志でもあった．鈴木校長はこの手島校長の遺志を横浜において実現したいと考えた．そしてこれを時の横浜市長久保田政周に進言した．市長は一言のもとに賛成，その創立を鈴木校長に一任した．

こうして大正11年４月，横浜高工の校舎設備を借用して，夜間補習の横浜市立大岡工業補習学校が開設された．

校長は鈴木達治，主事はかつて鈴木校長が広島高師での教え子，横浜女子師範教諭であった隅部朴をもってした．授業は同年４月24日横浜高工において開始された．機械科，応用化学科の２科があった．大正12年３月31日横浜工業専修学校と改めた．

後横浜工業高等学校と改名し,現在も横浜国立大学内に工学部と関係をもって運営されている．

沿　革

大正11. 4 . 1　横浜市立大岡工業補習学校として官立横浜高等工業学校内に創立，中等部に機械工学科と応用化学科を設置．横浜高等工業学校長鈴木達治，校長事務取扱となる．

12. 4 . 1　横浜市立横浜工業専修学校と校名改称．

13. 4 . 1　高等部を設け機械工学科．応用化学科を設置．

14. 4 . 1　中等部電気工学科を増設．

15. 4 . 1　中等部建築工学科を増設．

昭和2 . 4 . 1　高等部に電気工学科を増設．

3 . 4 . 1　高等部に建築工学科を増設．

10. 3 .31　横浜高等工業学校長鈴木達治退官のため本校校長事務取扱を解かれる．横浜高等工業学校長冨山保，本校校長事務取扱となる．

10. 4 . 1　青年学校令による学校となり，中等部高等部の別を廃止し，高等小学校を入学資格とする修業年限4年の本科に改組．

10.10. 1　公立青年学校神奈川県横浜市立横浜工業専修学校と校名改称．

15. 3 .30　横浜高等工業学校長冨山保，校長事務取扱を解かれる．

15. 4 . 1　実業学校令工業学校規程に基づく学校に組織替えを行ない，横浜市立横浜工業学校と改称．機械科，応用化学科，電気通信科，建築科の4科を設置修業年限は4年．横浜高工主事鈴木京平校長に就任．

16. 3 .31　校長鈴木京平，官立東京高等工芸学校長に転出．

16. 4 . 1　横浜高等工業学校長冨山保，本校校長事務取扱となる．

17. 4 . 1　造船科，航空科の2科を増設．応用化学科を工業化学科と改称．

20. 8 .15　横浜工業専門学校長冨山保，本校校長事務取扱を解任．横浜工業専門学校教授安川数太郎，本校校長に着任．

21. 3 .31　終戦により航空科を廃止．在校生は機械に吸収．

21. 4 . 1　土木科を増設．

23. 4 . 1　学制改革によって横浜市立横浜工業高等学校と改称．

23. 4 .30　校長安川数太郎，横浜市立大学教授に転出．本校教諭梶谷忠吉，校長の事務を取扱う．

24. 3 .31　本校教諭梶谷忠吉，市立戸塚高等学校へ転出．

24. 4 . 1　本校教諭長谷川光次，校長の事務を取扱う．

24. 6 .30　本校教諭長谷川光次，校長の事務取扱を解任．

24. 7 . 1　横浜国立大学長冨山保，本校校長を兼任．

24. 7 .15　横浜国立大学長冨山保，本校校長兼任を解かれる．国立横浜工業専門学校教授斎藤輝治，校長に着任．

28. 3 .31　土木科を廃止．在校生を建築科に吸収し建設課程とし，建築コースと土木コースに暫定的に分ける．

31. 3 .30　校長斎藤輝治退職．

31. 4 . 1　副校長長谷川光次，校長に就任．

34.12. 1　横浜市中区翁町4の132元横浜市立寿小学校を寿分校とし，電気，電子，建築の3科を設置．

38. 4 . 1　電気通信科の新入生から電子科と改称．

39. 5 . 1　校長長谷川光次，市立戸塚高等学校校長に転出．市立南高等学校副校長山崎友美，本校校長に着任．

40. 4 . 1　造船科の募集を停止．

43. 3 .31　造船科を廃止．

43. 3 .31　校長山崎友美，市立桜丘高等学校校長に転出．

43. 4 . 1　市立横浜商業高等学校校長代理石山延雄，本校校長に着任．

45. 4 . 1　工業化学科の募集を停止．

27. 校友会の発足

横浜高等工業学校校友会は本校創立の直後すなわち大正9年6月，学生の発起により組織的に成立し，同年10月9日発会式を挙行し，その時校友会会則を決定した．

本会の目的は会員の心身を錬磨（れんま）し，相互の親ぼくをはかるにあった．会員は全生徒および全教職員で会長に学校長を置き，各部に部長があった．会費は生徒が1カ年金8円で，教職員もそれぞれ会費を納入した．設立時には，総務，文芸，弁論，野球，庭球，競技，剣道，柔道，音楽，水泳の10部があった．大正14年には端艇部，絵画部ができた．

なお付言すれば，このうち最も古いのが弁論部で発会式前の9年6月19日発足し，ついで野球部7月2日，庭球部10月2日の順であった．また文芸部の雑誌「鵬翼」の第1号が発行されたのは，10年3月8日であり，柔剣道部道場の落成したのが10年9月で，その月の24日に道場開きを行なった．また庭球部のテニスコート，野球部のグラウンド，競技部のトラック，フィールド等も不十分ながらおいおいと整備された．

次に9年10月9日制定された校友会々則を記すが，本会則は永く本校校友会の原始会則として守られた．本校友会は爾(じ)来学生の自治によって運営され，後にもしばしば述べるように心身の鍛練と相互親ぼくの目的を達したが，昭和15年12月「新体制」により解散され報国団となった．

横浜高等工業校友会会則

第1章　総　則

第1条　本会ハ横浜高等工業学校校友会ト称ス

第2条　本会ハ会員ノ心身ヲ錬磨シ併セテ会員相互ノ親睦ヲ計リ以テ協同的精神ヲ涵養シ自治ノ校風ヲ発揮スルヲ以テ目的トス

第3条　本会々員ハ左ノ四種トス

1. 通常会員（学生）　2. 賛助会員（職員）　3. 特別会員（卒業生及修業生）
4. 客員（旧職員）

第4条　本会ハ其目的ヲ達センカ為メ左ノ各部ヲ置ク

総務部　文芸部　弁論部　野球部　庭球部　競技部　水泳部　剣道部　柔道部　弓道部

尚別ニ左ノ事業ヲ行フ

本校記念祭　其他

第5条　本会ニ左ノ役員ヲ置ク

1. 会長　学校長ヲ推戴ス
1. 部長　各部ニ1名宛賛助会員中ヨリ会長之ヲ委嘱ス
1. 幹事　総務部ニ1名賛助会員中ヨリ会長之ヲ委嘱ス
1. 委員　各部ニ若干名宛通常会員ノ互選ニヨリテ定メ会長ノ承諾ヲ経ルモノトス

但総務部委員ハ各科2名宛選出スルモノトス

1. 委員長　各部ニ1名宛当該委員中ヨリ互選ニヨリテ定ム

尚本会ノ庶務及会計事務ヲ処理スル為メ本校事務員若干名ニ会長之ヲ嘱託ス

第2章　役員，評議会

第6条　役員ノ任務左ノ如シ

1. 会長ハ本会ヲ総理ス　1. 部長ハ当該部ノ指導ニ任シ兼ネテ部務ヲ管理ス但シ総務部長ハ会長事故アル時，代理ヲナシ又庶務及会計ノ事務ヲ統理スルモノトス

1. 幹事ハ部長ヲ補佐シ部長事故アル時ハ其事務ヲ代理ス

1. 委員長ハ当該部ノ委員ヲ代表シ兼ネテ部務ニ参与ス

第7条 本会ハ各部長幹事委員長総務部委員ヲ以テ評議会ヲ組織シ左ノ事項ヲ審議ス議長ハ総務部長之ニ当ル

予算決定 本会則ノ改正基本金及会費ニ関スル件其他重要ナル事項

第8条 評議会ハ評議員過半数ノ出席ヲ要シ其決議ハ出席者3分ノ2以上ノ同意ヲ要スルモノトス

第9条 評議会ハ会長ノ許可ヲ経テ之ル執行スルモノトス

第10条 役員（会長ヲ除ク）ノ任期ヲ1ケ年トシ毎年2月中ニ改選又ハ委嘱ス但シ翌年度予算ニ関スル事項及卒業生送別等ニ関スル事項ノ外ハ翌年3月マテ旧役員各所定ノ任務ニ従事スルモノトス

第3章 会 計

第11条 会員ハ左ノ会費ヲ納ムルモノトス

1. 通常会員ハ1ケ年金8円（第1学期4円，第2学期4円授業料納付期ニ於テ分納）トス

又入会ノ際入会金1円トス 1. 賛助会員ハ毎月俸給月額200分ノ1トス

1. 特別会員ハ卒業年度ヨリ20年間毎年1円宛納付スルモノトス但シ便宜上一時ニ納メントスルモノハ金15円トス

第12条 臨時ニ費用ヲ要スル時ハ評議会ノ決議ヲ経テ徴収スルコトアルヘシ

第13条 本会ハ収支決算ヲ毎年1回適当ノ方法ヲ以テ会員ニ報告ス

第14条 各部ハ毎年3月当該部ノ収支決算ヲ会長ニ報告シ又次年度予算ヲ作成シテ総務部ニ提出スヘシ

第15条 毎年ノ予算ハ総務部ニ於テ査定シ其原案ヲ評議会ニ提出スルモノトス

第4章 基 本 金

第16条 本会ハ其基礎ヲ鞏固ニシ事業ノ発達ヲ図ランカ為メ基本金ヲ置ク

第17条 本会基本金ハ毎年度ノ決算剰余金，特別収入，通常会員ノ入会金及特別会員納付ノ一時金ヲ以テ之ニ充ツ

第18条 基本金ハ会長之ヲ保管ス

第19条 基本金ノ使途ハ別ニ之ヲ定ム

第5章 雑 則

第20条 本会々則ヲ改正シ又修正セントスル時ハ会員20名以上ノ同意ヲ得テ評議会ニ其議ヲ提出スルコトヲ得

第21条 本会各部細則ハ当該部ニ於テ之ヲ定メ評議会ノ承認ヲ経テ会長ノ許可ヲ受クルモノトス

なお設立当時の校友会役員についてはまことに遺憾ではあるが，記録がないのでここに大正13年度の役員を載せておく．

校友会役員（昭和13年度）

会 長 鈴木校長

総務部長	長 教授	同幹事	飯塚教授	競技部長	飯塚教授 同委員長 山口 祝
文芸部長	大西教授	同委員長	置村 忠雄	剣道部長	横地講師 同委員長 石川 菊治
弁論部長	水野教授	同委員長	岩井 三郎	柔道部長	河合教授 同委員長 村岡 敏明
野球部長	今井教授	同委員長	横溝 実	音楽部長	三井講師 同委員長 山下 博
庭球部長	木戸講師	同委員長	佐々木祐吉	水泳部長	桜井助教授 同委員長 牧野 三郎

発足当時の校友会

校友会は立派な会則もでき，学生自治のわが校の方針により着々として，その趣旨にそって教職員ならびに全校生徒が協力して発展，充実していった．

文芸部は後の新聞部の前身であるが，大正10年３月８日には機関紙鵬翼第１号を出し，同年12月には，第２号を発行した．この記念すべき鵬翼第１号は散佚して入手することができなかったが，幸いに２，５，６号が寄贈先の横浜市立図書館に蔵されていたので見ることができた．No. 2 は菊判143頁で発行兼編集人小林長之助，発行所　横浜高等工業学校校友会となっている．この No. 2 は開校記念号となっており，内容は多分に文芸的である．

運動部としては前記のように野球，庭球，競技，剣道，柔道，水泳の部があったが詳しい記録がないので正確なことはわからない，前記の鵬翼の中の記事や高工時報などに載った思い出話をつづりあわせて，そのころをしのんでみよう．

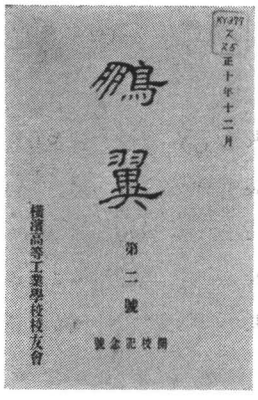
◇野球部

まず野球場であるが，水田を埋め立てただだっぴろい広っぱを部員が汗みずくとなってならし平らとし，休み時間のキャッチボールから始まった．そのうちメンバーもやっとそろってくると相手がほしくなり，あまり強くないチームに試合を申しこんで草野球が開始された．

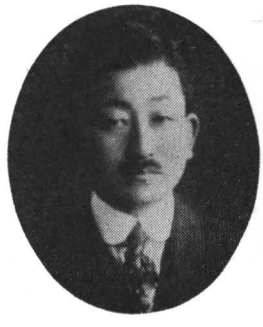
手始めに行なった試合は大正10年７月半ばごろ行なわれた対藤沢中学戦である．この時は投手阿部（後の本校教授応化第１回）の肩さえて14—3で破っている．同年11月６日蔵前（東京高工）を本校グラウンドに迎え20—9で大勝，11月12日には同じく本校グラウンドに神中を迎え21—5でこれまた大勝（ただし前回練習試合では負けている）つづいて翌11月13日には同じ本校に東京薬専を迎え13—9で勝ち，大正12年には初代池内部長がフランスへ留学したので，教務主任の飯塚晶山が二代部長となった．以上のように野球部は徐々に力をつけてきて14年対高商戦を受けて立つ素地ができた．

◇庭球部

大正10年には庭球コート（何面か不明）もでき，10月15日には生徒も先生も一緒になって校内



鵬翼第２号


池内教授

秋季庭球大会（軟式）を開催，11月23日には貿易新報社後援で県下中等学校庭球大会を開催，神奈川師範，神奈川工業，一中，二中，横浜商業，逗子開成中学，小田原中学，県立農業，藤沢中学，関東学院が参加，神奈川師範が藤沢中学を２―１で破り優勝している．

◇競技部

競技部では創立（大正９年４月）以来なんとかトラックを完成させたいと熱望したが，「そは余りに完全に過ぎし為に万事多端の際にある我校としてはこの計画を許さず」（鵬翼 No.２より）予算要求は実現しなかった．しかし大正10年夏に至り校長，部長に懇望した結果，200円の予算が出ることとなった．しかしいかに物価の安い当時でも200円では，どうにもならず，400メートルトラックを300メートルで我慢し，暑中休暇を利用して工事をすすめ，ようやく悲願のトラックは不完全ながら完成した．

12月４日待望のトラック開きを開催，校内個人戦を行なった．種目は50，100，200，400，800メートル競走，円盤投，鉄弾投射，槍投，走高跳，棒高跳，走幅跳，三段跳であった．参考までに述べれば．この時の100メートルの記録は，電化桜井春雄の11秒$^{3}/_{5}$であった．

◇柔，剣道部

柔，剣道部は大正10年９月待望の武道場が落成したので，９月24日，道場開きを兼ねて第１回校内武道大会を開催，当日は市内中学校および警察署を招待した．

以上のようにグラウンド，庭球コート，トラック，柔，剣道場などが不完全ながら完成し，校友会の活動が活発となったが，12年夏の震災は一瞬にしてこれらの施設を烏有（うゆう）に帰せしめた．

野球部のできた頃　（横浜高工・横浜高商定期野球戦史 より抜粋）

横浜高工野球部のおいたちを語るにあたってまず忘れてならないことは，野球部創立の恩人であり育ての親だった池内本先生のことである．当時の池内先生は他の多くの先生と異なり，頭髪は５分刈り，正義感に溢れたちょうど夏目漱石の坊ちゃんの感じで，学生からはポンチャン（先生の本という名からくる）というニックネームで親しまれていた．先生は少壮有為の物理学者で，放射線で知られているフランスのキューリー研究室に留学されたという連想とは程遠い熱血漢であった．

先生は一高では素手，足袋はだしで３塁手をつとめられた方で，一高式のコーチで選手を鍛えられた．中学時代野球の経験のあった桜井春雄氏（府立一中出身）が主将で，部費は500円であった．この桜井氏と石井欣之助氏とがグラウンドでキャッチボールをしたのが野球部の始まりという．

当時はグラウンドといっても，田を埋めたててやや平らかにしたくらいで凸凹があり，穴ありのものだった．大きな岩の間に深い割れ目があり，球がはいると手をさしこんで探している間にホームランになったりした．

思い出を語る　村上泰助　（機械第１回卒）（高工時報 昭和10年７月）

丁度今バラックの建っているところが運動場で，それも埋立てたばかりの柔い土だったので，私たちが自分でならしたり，固めたりしてトラックを作ったものです．応化の阿部さんが野球部の投手をしておられて相当の珍試合が見られたものでした．何といっても今の運動部に較べたらお話にも何にもなったものではありませんでしたが，伸び伸びと楽しんでやっていた境地は，今でもこのましいものです．

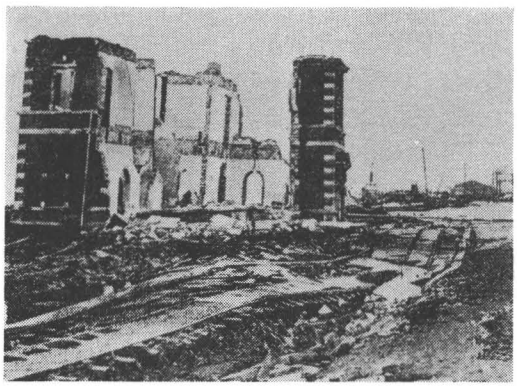
野球部の昔話　阿部教授　（応化第１回卒）（高工時報　昭和10年８月14日）

私の頃は中学校とよくやりました．こちらが弱いので，つづけて負けると評判が悪くなるのでしばしば藤沢中学などと行い勝ってごま化しました．そのころの野球部長は池内先生で，先生のシートノックは凄いもので，外野手などは先生が打つと同時に，後へしりぞかないと頭の上を越されるおそれがありました．

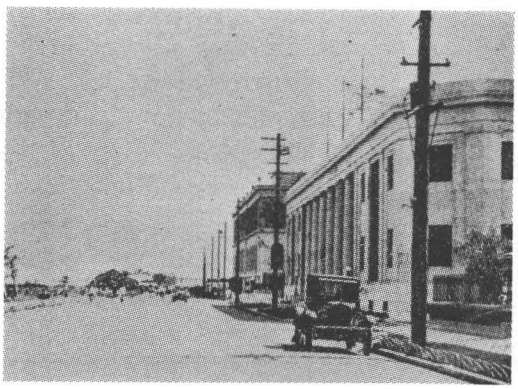
第１章　第２節　関東大震災とその復興 (大正12年９月～大正15年)

大正12年９月１日午前11時58分，関東南部をはげしい大地震が襲った．震源地は東京から80キロメートル離れた相模湾の北西部で，後にその規模はマグネチュード7.9と称された．震源地に近い神奈川県では，小田原が全家屋の８－９割が倒壊し，市内は全焼，鎌倉では神社仏閣が多数倒壊，横浜では中心部が最もひどく建物が多数倒壊し，またたく間に各方面から火災が起き，多数の圧死者，焼死者，溺死者を出した．その災害がいかに悲惨なものであったかは，「大正大震火災誌　神奈川県警察部編纂大正15年」に次のように述べている．

> 大正12年９月１日は早朝より驟雨数々来襲し，暗雨朝暾(*)を鎖し，天候の険悪を憂慮せしめしも恰も厄日と称せらるる二百十日の前日なりし為め，世人は敢て意に介せざるものの如かりしに，午前10時頃より風雨歇み残暑の陽光は灼くが如く雨後の地上を照して蒸熱く，時辰将に正午に入らんとし早きは既に食卓に就きたるものもあらん歟，此の刹那実に此の一刹那なりき，恰も遠雷を聴くが如き身に感応する異様の地鳴りを覚へしよと思ふ間もなく突如として，強烈なる上下動の大震は起れり．さしも建築の堅牢を以て聞へ，従来地震感の極めて微弱なりし　我が神奈川県庁々舎すら動揺激甚にして，床上を歩行することさへ能はず，寔に風浪上の　孤舟も啻ならず　四壁撼き天井鳴り室内の書架，書函は前後左右に乱倒し，匍匐して猶且つ身の安定を保つ能はざりしが，一瞬間にして天地鳴動し隣接せる，警察部の一部たる衛生試験室，横浜税関，横浜郵便局，中央電話局，英，米，露国領事庁等は倒潰し濛々たる砂烟四方に起り殆ど咫尺を弁ずべからず　僅に窓を排して街頭を瞰下すれば倒潰家屋は街衢を擁塞し，電柱倒れ樹木摧け傷者は鮮血に塗れて呻吟し，死者は算を乱して地上に仆れ，右往左往に逝げ惑ふ民衆の叫喚は随所に起り直ちに全市の潰滅を相感ぜしめたり．
>
> (注)　朝暾(ちようとん)　朝日のこと



震災当時の横浜港



復興後のホテルニューグランド前通

1. 大震災と本校

人事は測るべからず．人生一寸先は闇(やみ)という．本校はこの大震の数カ月前の大正12年３月第１回の卒業生を世に送り出し，自由啓発の校風 徐ろに興り 伸びゆく若人の力は校内に満ち満ち，その前途は洋々として開け 各方面から大きな期待が持たれていた．教室，実験室，講堂，柔剣道場，図書室などの建物，諸設備などようやく整い，さてこれからという機運がみちあふれていたのであった．しかるに真にこの一刹那(せつな)，いっさいが灰じんと帰してしまったのである．

> 激震ト共ニ煉瓦作リノ書庫及ビ鉄筋ブロック構造ノ動力室ハ倒潰シタリ．他ノ校舎モ甚シキモノハ半潰シ然ラザルモノモ皆多クノ損害ヲ受ケタルガ如シ．震後数分ニシテ応用化学科及電気化学科ノ実験室ヨリ火災ヲ起シタリ．当時余（鈴木校長）ハ在校執務中ナリシヲ以テ出勤中ノ同僚ト共ニ消火ニ尽力セシモ人手少ナク防火ノ水ナク如何トモナシ難ク終ニ水力実験室，機械工学科ノ実験室１棟，職工控室，物置２棟及ビ応用化学科ノ１小工場ヲ除キ 他ハ悉ク灰燼ニ帰シ 殆ド全焼ノ厄ニ遭遇シタルハ遺憾ナリトス．

と鈴木校長は当時の模様を，横浜高等工業学校一覧（自大正12年至13年）の中で述べている．実に被災校舎 2,292 坪 (7,564 m²) で残存校舎はわずかに 291 坪 (960 m²) であった．

また鈴木校長から震災の翌日（９月２日）鎌田文部大臣にあてた報告書には次の通り述べられている．

> ９月１日小官出勤執務中，正午少し前突然激震に逢ふ．小官脱出に稍々機を失し，辛ふじて逃れ校庭に出づ．震始後僅かに数分にして，既に電気化学及応用化学科実験室より火気を認む。直ちに消火栓を開き，消火に従事せしめんとするも鉄管に一滴の水なし。更に廊下破壊工事に着手せしも，人手なく効を奏せず，機械工学科工場一棟，水力実験室一棟，職工控室一棟，写真印刷室一棟（県有）応用化学特別工場(小建築)一棟を残し他は全部焼失せし事，実に遺憾千万なり．
>
> 猶重要書類を蔵する会計課保管の金庫は執務中開扉せしものを閉鎖せんとせしも激震の為め既に扉を損じ閉鎖不能に陥れり．此れが為め内容幾分持出したるも，危険にして屋内作業を許さず，已むなく焼失に委したり．

また横浜震災誌によれば，次の通り記されている．

市内大岡町なる横浜高等工業学校は，大正９年１月の設立に係り，震災前に在つては，市内及県下に於ける唯一の直轄専門学校であつた．今次の激震では，煉瓦造の書庫及鉄筋ブロック構造の動力室が倒潰し，他の建物も半潰乃至大破し，破損を見なかつたのは講堂及印刷所だけであった．当時学校は暑休中で，生徒は１名も居合はさなかつたけれども，授業開始も遠からぬので，校長以下職員傭人等20余名登校し，夫々準備中であつたが，何れも逸早く校庭に避難し，軽傷者１名を出だしたに過ぎなかつた．然るに震後数分にして，電気化学科実験室内の蓄電池及応用化学実験室の薬品より発火したので，一同は直に消防に著手したが，水道が悉く断水してゐたので寸効なく，已むなく，破壊消防に努むるの一方，辛うじて重要書類の幾部かを校庭に搬出したに過ぎなかつた．其うち火は折柄の強風に勢を得て見る見る各建物に延焼し，遂に応用化学科実験室・事務室・講堂・書庫・普通教室・生徒控所・機械工学科教室を灰燼となして，僅に機械工学科の一部即ち実験工場の一隅・水力実験室・職工控所等を半潰乃至破損の儘残存せしめたに止まり，全校の八分通りを挙げて烏有に帰せしめた事は，洵に遺憾の至りであつた．以上の損害見積額は，建物で約150万円，

備品・標本・器械・図書等で約45万円計195万円に達した．然し乍ら生徒職員より雇傭人に至るまで，一人も犠牲を出ださなかつたことは，実に不幸中の幸で，後の調査に拠れば，京浜其の他に散居せる卒業生にも亦一人の死傷を見なかつたのであつた．職員中で類焼に遭つた者８名倒潰に遭つた者10名を算した如きは，他と一列一斉の損害であつたのである．

僅に焼残つた校舎は，災後暫く罹災民の避難所として提供し，収容者日々200人内外を算したが，20日頃には全部退散した．

関東大震災　阿部滋弘　（応化１期）　（かたりすと　No. 3　昭和40年）

私はその時月給45円で科の助手をしていた．夏休みを２週間ほどもらって家に帰り，丁度研究室へ出てきた日だった．雲足は低く速く，横降りのしゅう雨がしぶきをあげるとみる間に忽ち晴れて，暑い陽が照るような不安な日であった．先生の柏木さんは２年程サバチエの研究室におられて帰ってきて間もなくのことで，ニッケル触媒でニトリルの還元をやっておられた．先生が仕事をやっておられるので，上衣だけぬいですぐそれを引きついで，昼に科の図書室の中にあった自分の机にもどり，腰かけてホッとした時であった．椅子ごとゆり上げられるひどい衝動のくり返しの後に，左右に大きくゆれて，額は落ち，書棚は倒れ，崩れた壁土の烟りで室中が暗くなる程だった．室からとび出し実験室を通って外へ出ようとするのだが，とてもまともには歩けない．実験台につかまり，又反対側の壁を突張りようやく庭に出た．瓦は全部落ちて土だけが屋根に残っていた．余震は続いていて，とても上衣を取りに室に戻ることも出来ない．そのうちに実験室の数ケ所と蓄電池室から火災が起った．岩井三郎（あとで警視庁の研究所長になった）と，消火栓のホースを引き出し，元栓を廻したが水の出るはずもなく，庭には処々に深くて長い亀裂が出来ていた．渡り廊下を壊して延焼を防ぐつもりでやりはじめたが，これも丸太一本ぐらいで突いてもとても壊れない．最後には独身者だけが残って必死にやったが力尽き，結局燃えるにまかせる外なかった．溶剤の罐が爆発する毎にコンクリート倉庫の窓から黒烟りと，赤い炎が，ほんとうに天に冲するように上るのを，浪のようにゆれる草原に坐って眺めている時，何とはなしに涙が溢れた．下宿が戸部にあったので，山伝いに行って遠くから見ると焼けてあともない．生麦にあった先生の家へたどりついたのが夕方だったが，早く出たはずの先生はまだ帰っていない．若い奥さんが心配されるので何度も横浜の駅の方へ迎えに出かけた．火に追われ廻り道をし暗くなってからようやく帰って来られ，前の草原に一家と不安な夜をあかした．

翌日は東京の空，横浜の空ともに黒い煙雲に覆われて，太陽がにぶい朱色に見えた．

大正９年に開校した学園もこのようにして焦土となった．

野毛山公園より震災当時の市中を望む

震災の思い出　書記主任　大山春翠　(高工時報)

9月1日土曜日でした．今少しで金庫に押しつぶされそうな大難は免れたが火は出た．大事な会計帳簿だけでも取り出さんと事務室へ飛びこんだ．漸やく帳簿10数冊を投げ出し得て，後日諸調査に支障を来さなかったのは不幸中の幸でした．その間家族の安否を考える遑更になし．校長はじめ数名の職員，巡視，小使らと天魔の狂うに任かすの外術なかったことは悲惨の極みでした．さあこれからだ．大いに活動したのは．校長の不眠不休の指揮命令下に．校長のお供をして貨車で東京文部省へ行ったり，その帰りでしたね．横浜駅から戸部電車線路を伝って帰校の途中，たしか藤棚近辺でした．葦簀張の掛茶屋で校長にスイトンのご馳走になった時のその美味，今に忘れられんね．或は授業開始の為，バラック急造に奔走するなど随分活動したね．

2.　復興の第一声

9月1日横浜は灰じんに帰した．鈴木校長が，無事であったわが家に帰りついたのは夜の9時過ぎであった．陰暦7月21日の月は中天にかかり凄惨一入(せいさんひとしお)であった．校長一家は庭前にかやをつり避難してきた人々と共に寝についた．

鈴木校長は震災の翌2日庭前に卓をすえ，文部大臣あてに前記の「学校全部焼失」の報告書をしたため，これを使の者に県庁へ持参させ，知事経由で文部省に届けることを依頼した．まだ火災はおさまらず，東京への交通の道は途絶しており，不逞(ふてい)の徒が横行しているというううわさが飛んでいた．

鈴木校長は「越えて7日混乱と不安と死屍(し)の街を横切って仮設の県庁に安河内知事，市役所に渡辺市長，商業会議所に井坂会頭，野村洋三，戸井嘉作諸氏を訪れ，更に日本橋を経て弘明寺に至り，学校裏なる飯塚教授宅に開かれた最初の職員会議に列して，種々善後策を講ずるところがあった．」(自由教育10年)

翌8日には文部省より川原，四方田両属が慰問使として来校．校長は大山書記を帯同11日横浜より無蓋の貨車に乗り，途中幾多の困難をなめながら，小石川大塚の東京高師内の仮設の文部省をたずね赤司次官，粟屋実業学務局長に会い報告，同日東京に1泊，翌日の罹災(りさい)直轄学校長会議に出席，席上横浜高工としては一日も早く授業再開をしたい旨を強く述べた．

14日，焼け残った職工控室で職員会議開催，衆議は期せずしてこの際他力を待たず，自力をもって授業再開の手段を講ずべしと決まった．

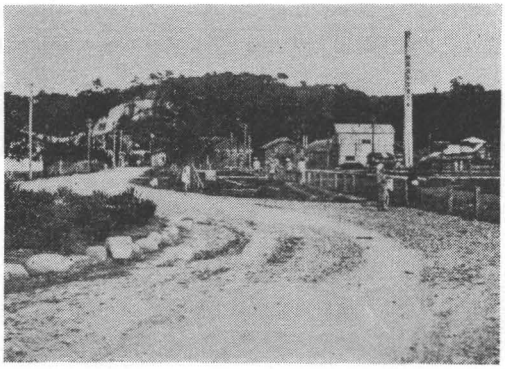
9月15日　市中4カ所の要所，すなわち日本橋，馬車道，横浜駅，学校前に次の立て札が立てられた．

「仮校舎を急造し，成るべく速に授業開始の予定　横浜高等工業学校」

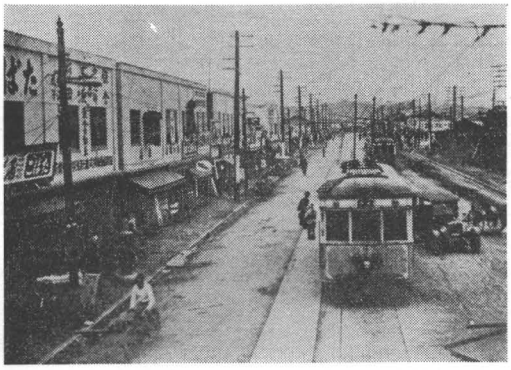
この立て札の開校声明はおそらく横浜での復興第一声であったであろう．

一方緊急の場合であったので，校長独断で清水組に交渉，100坪(330 m²)のバラックを学校敷地内に急造することとした．つづいて9日17日，在学生に対し次のステートメントを発表した．

前略　省みれば本校は開校以来，職員，学生諸君と共に拮据経営，茲に3年有半を経過し，今や設備成って声名共に高からんとするに方り，一朝にして此の災厄に遭ふ，真に痛恨に堪へません．……仮校



大正15年頃の母校



復興当時の弘明寺市電終点

舎を構内に急造し，更に横浜舎密研究所を借り受け，又寄宿舎の設備をなし，以って成るべく速かに授業を開始せんことを籌画し，凡そ第三学年は11月１日より，第二学年は12月１日より，始業し得る予定であります．

仍て学生諸君に於ては其間多少の余日あるを以って，各自自修に努め，貴重なる此光陰を空過せざらんことを望むと共に，此の不慮の天災地変に由る困難に際し，毫も意気を沮喪せず，捲土重来の勇を鼓し，進んで将来の発展を企図し，自由啓発の学風を確立し以て他日の大成を期せん事是我が大国民の資格を完うする所以にして，我校の責任重大なりと信じます．切に諸君の健康を祈る．

大正12年９月17日　横浜高等工業学校長

こうして開校の準備は焼土の中から職員一同の一致協力によって着々その歩を進めた．

3.　名古屋へ移転命令

大震火災後わずかに20日，わが校の開校準備は校長はじめ教職員，在校生一同の努力によって着々と進められた．だれもかれも物資の窮乏，家族への心配，交通不便等々をはねのけて，汗みどろ，血みどろになって一意専心学校復興に必死であった．

９月21日，鈴木校長は文部省に出頭を命ぜられた．何事ならんと再度上京すると，次官ならびに実業学務局長から，名古屋へ移転せよと申し渡された．まさに晴天の霹靂(へきれき)とはこのことであった．次官は「東京の直轄学校の多くは焼失したが，県知事と名古屋市長の両方から現在名古屋の陸軍幼年学校の建家があいているので，これを使用することにより，直轄学校のひとつを引きうける．との申し出があり文部省としては横浜高工を名古屋に移す方針を決めた」と．

しかし鈴木校長は断固として「バラックでよいから，是非焼け跡で学校を復興したい」と嘆願した．次官はバラックは，り災民を優先するから学校復興は困難であると，名古屋へすぐ移るようにと命令した．鈴木校長はそれでも承知しなかったので，その日はついに物別れとなった．

横浜へ帰った鈴木校長は早速，原富太郎，中村房次郎ら横浜の有力者をとい，相談の結果　横浜復興会長らの名前で文部大臣あてに陳情書を提出した．その「陳情書」は次の通りであった．

今回ノ震災ニ依リ横浜市ハ全滅ノ悲運ニ遭ヒタリト雖モ市民ハ従来未聞ノ勢ヲ以テ市勢ノ挽回ニ熱中シ曩ニ市会ハ満場一致横浜市ノ復興ヲ決議シ近クハ官民合同ノ下ニ横浜復興会ヲ設立シ貿易ニ産業ニ其

ノ他各般ノ事項ニ付積極的活動ヲ開始シ今ヤ挙市一致寝食ヲ忘レテ新都市ノ建設ニ努力セサルハナシ政府亦夙ニ帝都ノ復興ト共ニ当港復興ノ大方針ヲ確立セラレ現ニ総理大臣ヲ始メ当局者ヨリ屢々当市責任者ニ言明セラレタルトコロナリ然ルハ頃日仄聞スル所ニ依レハ横浜高等工業学校ヲ一時他ニ移転シ授業ヲ開始セムトノ議アル由素ヨリ臨時応急策に過キスト雖モ斯ノ如キハ熱狂セル市民ヲシテ政府ノ真意ヲ誤解セシメ為メニ極度ノ激昂ヲ招来スルニ到ルヘク国策上極メテ遺憾トスルノミナラス当市復興上一大障害タリ宜シク如上ノ事情御賢察ノ上直ニ当市ニ応急設備ヲ施シ速ニ授業ヲ開始セラルル様御詮議ヲ仰度上申候也

大正12年9月26日

横浜復興会長　原　富太郎　　横浜市会議長　平沼亮三
横浜商業会議所会頭　井坂孝　　横浜市長　渡辺勝三郎

文部大臣　岡野敬次郎殿

鈴木校長はこの移転反対の陳情書を持って9月27日三たび文部省におもむき，実業局長に提出した．9月30日横浜市会では学校非移転の決議をした．文部省ではこのような学校側，および地元横浜市の熱意に動かされ，移転説はついに立消えとなった．

4. 授業再開

この学校側の断固たる授業再開の声明に近在の学生はもちろんのこと，休暇で帰省中の者も続々と登校してきた．途中交通機関はまだまだ不便をきわめており，また物資も極度に欠乏していたが，愛校心にもえる若人達にはものの数ではなかった．

教職員は授業再開の準備のため，東奔西走し，一方学生達も必死となってその協力を惜しまなかった．10月10日校庭の焼け跡に学生ならびに卒業生の有志が集まり，学校の復興は自分らの手でと復興の旗幟(きし)を立て次の檄(げき)を飛ばし，同志を糾合し，労力奉仕を申し出た．この檄を一読すれば，当時の学生がいかに学校を愛したかがよくわかる．

檄

嗚呼　我が親愛なる会員諸君にして，誰かこの震火による本校の悲惨なる焼失を傷まざるものあらん．

今や横浜及び近郊にあって，この大震火に同一の不幸なる運命に陥ったるものも，身を容るるに足るべき仮宅の出来を遅しとして，本校の復興のために起ち，而して又遠方の地にあって，本校の不幸を憂ふるもの交通の不便を意とせずして来浜登校し，同じく本校復旧のために一臂の力を致さんとするもの，期せずして一団体を作るに至り，今日焼け跡に有志として大会を開けり．

吾々は全市及び本校の無残なる焼け跡を見るにつけても，一倍の大勇気を以て復旧に力を尽すべき念益々切にして，愛校の精神と鉄腕との高く響鳴するものあるを覚ゆ，来れ！　愛校の念に燃ゆる我が校友会会員諸君．集れ，自治自発に平素志操を練る有志諸君！

大岡近在にして，吾々愛校の念に燃ゆる正義の労働を慰するため，安全の住宅を提供せんとするもの既に50軒に及べり．食物に対する憂も更らになし．乞ふこれ等に対する心配は少しも持つこと勿れ．

ハンマー，ツルハシ，シヤベル等便宜持参せられたし．

大正13年10月1日　横浜高等工業学校校友会有志

こうして焼け跡整理工事は即日開始され，10月20日終了した．この労働に従事した者139名，延べ人員747名であった．工事中は各自校庭で自炊しながら寸時を惜しんで作業をつづけた．

復興計画はこのように内外の努力により，順調に進み，また名古屋移転説もいつか立消えとなり，待望の授業は予定通り再開された．すなわち，応化および電化の両科の３年生は，東神奈川の横浜舎密(セーミ)研究所*で，他の各学年は本校焼残りの校舎および急造のバラックを使用することにより，11月１日より逐次授業を開始した．

(注)　横浜舎密研究所

横浜舎密研究所は大正３年中村房次郎が発起人となり，化学研究を目的として東神奈川浦島町に設立された．所長が当時東京高工の化学の教授であった鈴木達治で，主任が二代横浜高工校長となった冨山保であった．鈴木教授は学校の関係上１週１回しか来所できないので，当時明治専門学校で教授をしていた冨山保を懇請して主任として招聘(へい)したのであった．冨山保は，ここにいる間に学位を獲得した．研究所には化学研究に必要な文献類を始め相当な設備があった．大正12年の震災ではこの研究所は幸いに焼失をまぬがれた．

5.　横浜市復興会と本校

大震災で最も大きな被害を受けた横浜市では，その復興は官民一致，公私一体，全市民をあげて協力しなければよくなしあたわずとして，９月19日　渡辺市長は，仮庁舎に全市の有力者200余名を召集し協議会を開催した．

この協議会で渡辺市長議長となり，横浜市復興会々長に原富太郎を推し，満場一致で賛意が表された．

つづいて９月30日，創立総会を開催，出席委員96名であった．開会にあたり，会長原富太郎は「横浜の復興は横浜市民の力を以ってせねばならぬ．自ら復興するの決心と努力がなければ他の救助も同情も集るはずはない．」と大要次の如き烈々(れつれつ)たるあいさつを述べた．

> 今回図らずも本会々長たる御推選を蒙れり．非才克く重任に勝る器に非ず．されど横浜復興の大業は成敗の問題たらず苟も市民たらむものは其の衆智衆力を傾注して各自の総てを犠牲として当るべき義務ありと信ず．仍て此の際辞退するが如きは市民の一分として忍びざる所なり．故に皆様の一致協力を唯一の頼とし自ら揣らず一時御請をなせり．
>
> 而して此の際簡単に所感を申陳べむに，今回の事変は素より未曾有の災害なるが又半面に幾多の光明を見出し得べし．顧みれば今回は横浜開港以来吾々祖先が其の心血を注ぎて60年来蓄積せる総ての機関も組織も挙げて一朝の烟と消えしめたり．されど斯くの如きは横浜の外形を焼燼せるも市の本体は儼然として尚ほ存在せり．而して玆に横浜市の本体と称するは市民の精神なり．市民の元気なり．常に市の中枢となり原動力となりて活動せらるる御列席の200有余の諸君が斯く健在なるは以て本市の本体の儼然たるを断定するに難からず．併しながら諸君の中には多年の行懸りもあらむ．主義の相違もあるべく又党派の争も之れありしならむが今日となりては皆過去一場の夢として改造の大業完成までは赤心を披瀝して協力一致猛進せざるべからず．既に御会同の諸君は悉く熱烈なる御決心を有せらるるを思へば乃ち今日の闇黒裡に一路の光明を認むといふ所以なり．
>
> 更に又吾々の見出し得る一の光明は新らしき文化を利用するに於て絶好の機会なること之れなり．惟ふに最新の文化は之れを巧みに利用するものは勝ち利用せざる者の敗るるは現代の大勢なるが之れを利用するに当り旧来の組織を破壊するに非ざれば其の決行は容易ならざるが本市は今や全く一枚の白紙となれり．随つて最新の文化を利用するに任意なるは千載一遇の好機といふべく吾々が不幸中に見出し得る第２の光明となす所以なり．

次に又吾々の見出せる光明は数千年来の常道たる勤倹実行の機会を得たることなり．今仮りに横浜今回の損失を5億円と仮定し40万市民が1日に50銭の余剰を得るとせば1日に20万円1ヶ月に600万円1年に7,200万円となるを以て7年にして5億円を償還し得るのみならず旧市街は新文化に依りて美化すべし．之れ乃ち算数上より認め得る第3の光明なり．

傍上記の諸光明を認むるも事実問題として急を要するは資金にして国家の援助に俟たざるべからざるも吾々は他の援助を仰ぐに先立ち先づ自ら背水の陣を張らずんば他の同情も援助も期待すべからざるべし．かかれば吾々市民は横浜なる焼残りの孤城に籠城して事若し成らずんば各枕を駢べて討死せんのみ．

横浜市復興会設立趣意書

我横浜市は未曾有の大震に遭ふて其の中心地区全く潰滅し全市の大部分亦同時に焼失し60有6年間の努力に依りて築き上げたる金港の面目や幾んど尋ぬるに由なからむとす．我等市民此の意外なる天災を体験し感慨切々真に耐へ難きものありと雖も我等は此の際唯茫然自失して已むべきに非ず．我等の財産は今や斉しく焦土化し我等の多くは又其の一家近親の者とも死別し具に人生の悲痛を喫しつつあるも，而かも此の惨事に際会して尚ほ且生残りたる幸福を念へば我等奚んぞ残存の心血を灑ぎ我横浜市の復興を期せざるべけんや．現に一度死地を踏みたる我等は今や一層我横浜市を愛し且之れが為に益協力奮闘せむとするの念に満たされつつあり．若し夫れ各人一斉に奮ひ起たば旧横浜にも優る新横浜の再現に接するの日決して遠きに非ざるべきなり．我等茲に「横浜市復興会」を組織し市政当局者と相俟ちて当面の重要事項を講究し以て最も敏速に又最も適切に震災の善後と復興の大策との遂行を期せむとするもの蓋し之れが為のみ．翼くは各自協心戮力勇み奮つて此の大難を挽回し以て新横浜の再興を図らん哉．

役員は次の通りで，本校鈴木校長の名が見える．

主要役員

会長	原　富太郎				
顧問	大谷嘉兵衛	村野常右衛門			
	安河内麻吉	児玉謙次			
	島田三郎				
総務部	部長	原　富太郎			
部員	池田勝次郎	石川徳右衛門			
	芳賀権四郎	若尾幾造			
	渡辺福三郎	渡辺文七			
	田中　茂	松原権四郎			
	松下久次郎	上郎清助			
	神鞭常孝	出口直吉			
	安芸杏一	佐藤政五郎			
	左右田喜一郎	守屋此助			
	鈴木達治				
(庶務)	野村洋三	(会計)	小島　周		
計画部	部長	井坂　孝			
市財政部	委員長	井坂　孝			
	副委員長	戸井嘉作			
	同	赤尾彦作			
市事業部	委員長	平沼亮三			
	副委員長	竹内定吉			
	同	上保慶三郎			
港湾部	委員長	小野哲郎			
	副委員長	堀谷左治郎			
	同	近藤賢二			
都市計画部	委員長	渡辺利二郎			
	副委員長	山崎小三			
	同	三宅　磐			
運輸交通部	委員長	若尾幾太郎			
	副委員長	牧内元太郎			
	同	湯浅凡平			
生業部	委員長	大浜忠三郎			
	副委員長	大久保宇之助			
	同	伊東三省			
貿易部	委員長	渋沢義一			
	副委員長	綿野吉二			
	同	上甲信弘			
工業部	委員長	中村房次郎			
	副委員長	石塚彦輔			

	同	東条 玉太郎	同 斎藤 虎五郎
金融部	委員長	大久保 利賢	（各部委員名省略）
	副委員長	井上 治兵衛	

こうして，この復興会は横浜市復興の大核子となったが，大正15年 ほぼ所期の目的を達し解散となった．横浜市会はその功績を認め次のような感謝状を贈呈し，その労苦をねぎらった．

感謝状 横浜市復興会

大正12年９月１日ノ震火災ハ我カ横浜市ヲ潰滅シテ悽惨ヲ極メ終ニ其ノ興廃如何ヲ疑ハシムルニ至レリ，此ノ秋ニ方リ横浜市復興会ハ矍然起チテ焦眉ノ救済応急ノ措置並ニ前途ノ復興ニ力メ，戮力協心一ノ遺漏ナク克ク緩急ヲ稽ヘ善後ヲ処ス，殊ニ470余ノ重要案件ヲ凝議シテ対策ヲ定メ実現ヲ期シ中央政府ニ披陳頗ル勗メテ要望ヲ達シ官民ノ間ニ介在シテ調制躍動宜シキニ適シ内ニ自失セル市民ヲ激励シテ自立ヲ促ス等寝食ヲ廃シ終始熱誠ヲ極メタル行動ハ悉ク肯綮ヲ得テ復興ノ裨補タラザルナク本市ノ今日アル与リテ其力大ナリ，而カモ漸ク秩序ノ恢復ヲ告クルヤ更に将来ヲ策シテ討究研鑽ヲ重ネ之ヲ持続シテ満３年ノ久シキニ及ヘルハ其ノ労功寔ニ顕著ニシテ永遠ニ録スヘキモノトス仍テ玆ニ市会ノ議決ヲ経テ感謝ノ意ヲ表ス

大正15年10月14日　　横浜市長正三位勲二等 有吉 忠一

（横浜復興史 昭和７年より）

この復興会で鈴木校長は総務部，および工業部の委員となったが，11月16日の工業部委員会で，石塚彦輔，出口直吉両委員から，本校に土木，建築の両科を増設し，県立商工実習学校に色染科を増設の件が付議可決され，続いて総会で可決された．文部大臣あて陳情書は次の通りであった．

陳情書 横浜高等工業学校拡張の件

由来関東及東北地方の生産物は横浜港に於て，海外に分散せらるるもの多く，特に帝都の物産に於て然りとす．若夫れ輸入品に至りては，当港は重要の関門にして，大小の貨物此地を経由せざるはなし．今若し之らの原料を当地に於て加工し，之を需要地に移出するに於ては，其利便と国益とは蓋し挙げて数ふべからず．今や未曾有の大震災に遭ひ，万事根柢より立て直しを要するのとき，工業都市の建設は刻下の急務にして，総て技術者養成機関たる横浜高等工業学校を直ちに復旧し，更に進んで其規模を拡張し，従前及既定計画の学科の外に建築及び土木の２科を増置せらるるを得ば，当市復興を促進する，其幾何なるかを知るべからず．願くば如上の事情御賢察の願意，御採用被下候様至急御詮議を仰度奉懇願候

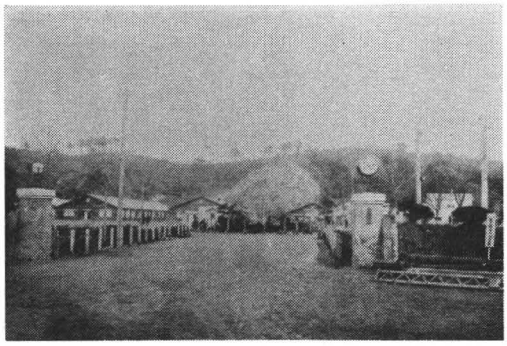
大正12年 月 日　　横浜市復興会長 原 富太郎

文部大臣 岡野敬次郎殿

10月26日この陳情書を携え，平沼亮三，出口直吉，中村房次郎，鈴木達治は文部省に出頭，詳細に陳情し，文部省は大体においてこれを諒とした．しかし大蔵省ではなかなか了承困難の模様であったので，原富太郎，井坂孝，中村房次郎，鈴木達治は再三にわたり大蔵省と折衝の結果，土木科を除き，建築学科増設の了解をとりつけることができた．（自由教育10年による）

鈴木校長は昭和３年３月の卒業式の時，当時を思い次のように述べている．

「御承知のように大震災により東京，横浜が忽ち焦土と化しました際に，敢然と起ちました横浜復興会は原富太郎氏を会長とし，災害復興のために勇気と熱心，その意気は天を衝くの概を示したのでありました．今なお当時を想起いたしましてもその壮烈なるに血湧き肉躍るものがございます」



震災後の正門

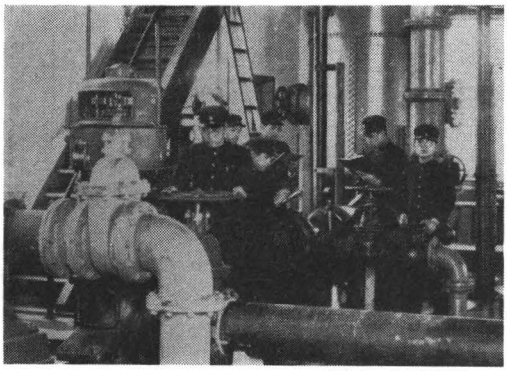
学園全景

6. 震災の損害と復興

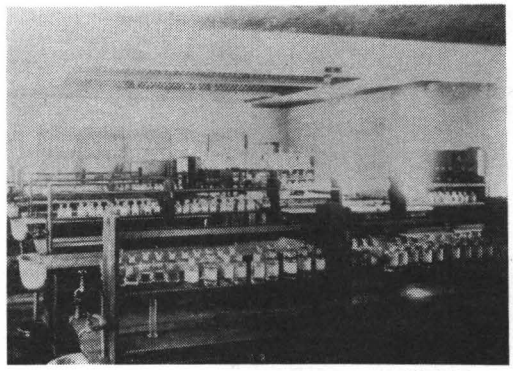
この大震火災により，本校のこうむった損害は，建物約150万円，備品約45万円計約195万円（横浜市震災誌による）であったが，これは単に数字の上のことで，有形無形の損害は，はかり知れぬものがあったことはもちろんのことである．

しかし，幸いにして教職員60名とその家族，360名の学生，第1回卒業生99名中，1名の死亡者もなかったことは真に天ゆうであった．

これが復興に要する復興費として文部省では新営費163万7,825円，設備費68万8,7000円，計232万6,525円が計上された．（横浜復興誌）

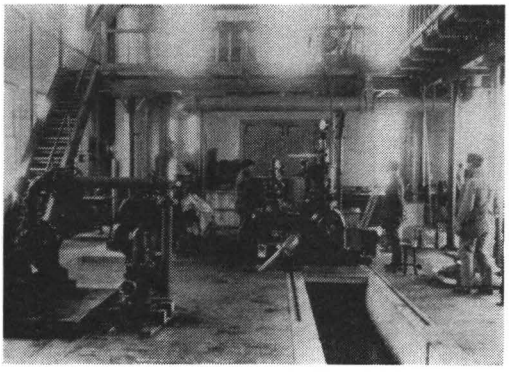


復興後の水力実験室

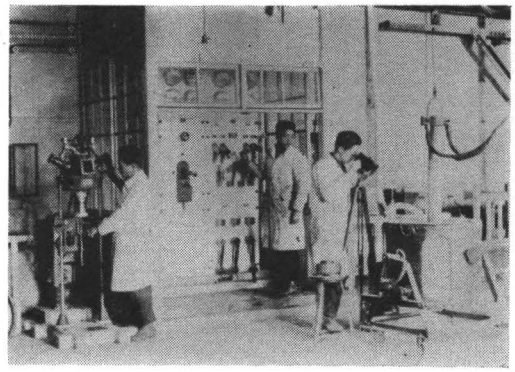


応化実験室

同　　上



電気炉実験室



（しかしながらその後の緊縮財政のためなかなか予算がとれず建築工事は予定通り進まず，復興工事の完了したのは昭和12年であった.）

なお仮校舎（木造バラック 銭高組施工）は大正12年12月中旬起工，13年3月上旬落成した．8棟(とう) 2,250坪 (7,425 m²)，工費34万5,000円であった．なおこのうち，最も大きな間口9間 (16.2 m) 奥行63間 (114 m) の校舎は13年1月15日の強震で倒壊したが，全体の工事の進展にはほとんど障害もなくほぼ予定通り完工した.

各科の設備については，13年度30万円の予算で進められ，概略次の通りであった.

〔機械工学科〕

水力実験室および機械実習工場は火災をまぬがれたが，損害甚だしかったため応急修理をした．火災にあった機械類で修理できるものはできるだけ修理して使用した．新しく購入装置した主なものは，次の通りである.

低圧渦巻喞筒（端西ヴルツアー会社製）
30頓万能試験機
硬度試験器各種
フエロース歯車切機械
万能研磨機（ランジス会社製）
平面研磨機（チンメルマン会社製）
精密測定器（ゼネボア会社製）
廻転体平衡検査器(オルセンカーウエン会社製)
アムモニア式製氷機（1日製造能力2噸）

〔応用化学科〕

当科は全部焼失したので設備全部新たに購入．各種試験器，測定器類，応用化学に関する文献等も購入.

〔電気化学科〕

当科も全部焼失．分析実験室，物理化学実験室，基礎電気化学実験室，金相学および高温度実験室，電解化学実験室，電鋳電鍍実験室，電炉室，配電室，蓄電池室等を設置.

なお，基礎学科の物理学教室も設備を整えた．概説すれば，短日月の間に授業に大体差支えのない程度に充実することができた.

寄宿寮2むね開設

大正13年4月1日寄宿寮2むねが開設され，震災によって下宿が不足していたのを補うことができた.

興風館(峯谷町所在)，復興館(力者町所在)の2寮でいずれも学生36名ずつを収容した.

鈴木校長は学校一覧に次のように述べて，全校教職員学生一同に呼びかけ，今後の努力を要望している.

「吾人はこの大震災により得たる貴重なる経験を傾尽し，帝都及本市復興の帰趨に鑑み，至誠事に当り熱心労に服し速かに復旧の実をあげ，以て我校の使命を全うせんことを祈って止まざるなり．蓋し我校復興の前途また決して容易ならざるものあらん．然らば飽くまで緊張せる態度を持続し9月12日震災に関し下されたる大詔の趣旨を体し，事に当り……．本校が開校以来標榜し来れる自由啓発の学風を確立して以て今後の天災をして天啓たらしむべく，余は全校教職員学生と共に，切々偲々一致協戮以て鞠躬努力せんことを欣ぶもの也」

7. 大震災追憶会

震災の翌年の大正13年に本校および商工実習学校，工業専修学校3校の職員で震災当時在職した者が集まり大震災追憶会を組織した．毎年9月1日粗食をたべながら震災当時をしのぶ会合で

ある．死線を越えた仲間が当時の艱苦(かんく)を忘れず，相互援助の精神をもって，将来ますます発奮努力することを目的とするものである．本会は鈴木校長在任中毎年９月１日に必ず開催された．

8. 震災記念奨学資金と互助主義10銭会

震災の翌13年大震災のため学資支給の途が断たれ，修学が困難となった学生に対し，当面の救済をはかり，一方この大天災を永久に記念するため，校友会の事業のひとつとして，震災記念奨学資金が設けられた．

きょ出予算額を6,000円と定め，その中の3,100円を在学生，卒業生，および教職員一同できょ出，残り2,900円を一般篤志家の寄付にまつこととした．

13年度中に集まった額は3,473円82銭となった．
内訳は次の通りである．

学　　生	981円50銭	三菱合資	500円
卒業生	230円	久原鉱業	200円
職　　員	877円10銭	貝島健次 同百吉	500円
小　計	2,088円60銭	そ の 他	4円36銭
神戸高工校友会	90円86銭	小　計	1,385円22銭
秋田鉱専学生	50円	合　計	3,473円82銭

この資金は毎月10円ないし25円を本校在学生に補給し，本人卒業後，任意本校に返済する規定で，この時点ですでに14名の学生に補給していた．

なお，このとき補給した被災学生10数名は大正15年３月全部学業を中断することなく卒業することができた．その後，学資補給を要する学生を救済するため，同資金では不足となるので，大正15年，新たに互助主義10銭会を組織した．これは本会の趣旨に賛成の教職員学生が１箱のたばこ，１回の電車賃を節約して，たとえ10銭でもお互いにきょ出するもので，このきょ金は震災記念奨学資金に繰入れられた．大正15年現在で，７名の学生が学資の補給をうけていた．

この震災記念奨学資金は，これからずっと長く継続され，多数の学生がこのお陰をこうむった．このことにつき鈴木校長は，昭和８年３月の卒業式の式辞で，次のように述べている．

「あの震災当時，災害のため学資に窮した学生は約14人程ありました．幸にして神戸高工，秋田鉱専などから若干の慰問金がありましたので，それに職員，在学生および卒業生その他からの寄付金を加え，ここに震災記念奨学資金部が創立されました．爾来10ケ年間，資金の調達に一方ならぬ苦労をいたしましたが，最近発明を奨励する目的を以って組織された公心一円会が解散してその資金約5,000円の寄付をうけ，ここに本部は思いがけなき幸運に際会しました．貸与をうけた学生がいかに安心して本校にその勤学を継続しつつあるか，また父兄が如何に喜びつつあるか察すべきであります．」

9. 第２回卒業式挙行

大震災の余燼(よじん)まださめやらぬ大正13年３月17日，第２回卒業式が挙行された．

卒業者は機械工学科42名，応用化学科42名，電気化学科37名，計121名，機械工学選科を修業したもの2名であった．

当日は特に民有社社長徳富蘇峯の講演があった．（この時の校長告辞の記録はない）

10. 復興成り更生期へ

大正13年，バラックながら校舎もほぼ完成し，興風館，復興館の2寮もできた．大正9年から12年までを本校の創生期とすれば，13年から15年までを更生期といえよう（高工時報 昭和10年11月1日号回想15年による）．この更生期中でも大正14年は，わが学園の能動時代であって，後年盛んとなった数多くの事業の創立がこの年になされた．

待望の建築学科の創設がその最も大きなものであり，第2が高工時報の誕生，第3が大陸会の発足，第4が互助主義十銭会の生まれたこと，第5が対高商野球戦の開始，第6が端艇3隻新造，第7に横浜工業会の創立等々である．

鈴木校長は前項でも述べたように大震災直後「今次の天災をして天啓たらしむべく」全校教職員，学生と共に一致協力して1日も早く復興したいと述べたが，当時の復興に対する全学の意気実にさかんなるものがあり，全学一致して事に当たるという学風がこれら事業をつぎつぎと実現していったといえよう．つぎに順次その展開を述べる．

震災後のバラック時代の思い出　矢田部庄栄（応化大正15年度卒）（高工時報221号　昭10年9月25日）

バラックの建った最初に入学したのが私達大正13年4月グループで，これがバラック第1回入学生であった．学校へはいって一番最初に感じたのはバラックが新しかった為，木材の香，防腐剤と塗料の臭い，この三つの臭いがプーンと一緒に鼻をついた．

その時代は先生も生徒も皆若かったので，元気潑溂としたものがあって，先生と生徒との隔りなどなかった．先生が生徒を見るのは兄弟か何かのような親しみのある目で見，生徒も先生を非常に懐しいものに思っていた．

学生としては意気にまかせて非常に無茶をやった事もあった．定期戦のあとなどザキは高工の生徒が一人舞台のように威張って歩いていた．高商はわれわれと一緒に大正13年に第1回の入学者があったので，始めのうちは高工の方へ高商の職員生徒は宿借りしていた関係もあり幅もきかなかったのである．今の湘南弘明寺駅ができる前はあそこには大きな梅林があって，春になると梅の花見が始まったものだが，吾々も学校の暇を見つけてはそこへ行ってオデンなどで一杯やったりして，お午からの講義にフーフー言いながらきいた事もあったが，幸い先生にも見つからず（黙視かも知れぬが）すんだという様な事もあった．化学の実験などで余り刺戟的な蒸気を出す様な時には蒸発皿やビーカーをさげて野外で実験をやったものだ．実験の間では定ってクローバの上で甲羅干しをやった．

このバラック時代の初期に於ては全校に再建，更生或は建設的覇気が旺盛であった．

11. 端艇3隻進水

大正14年2月21日午後2時，山下町海岸で新造端艇3隻の進水式が挙行された．定刻，長端艇部長の開会の辞，林委員長の工事報告があり，鈴木校長より新艇にパナマ，マゼラン，スエズとそれぞれ命名があった．これはいうまでもなく世界3大航路にちなんで名づけられたもので，レセップス，マゼラン，バスコダガマ3偉人をしのんで，わが校のだれが最初にこの3海峡を通過

するか，海外雄飛を目ざす本校にふさわしい艇名であった．命名式後応化，電化，機械3科の選手整列，鈴木校長より舵手(だしゅ)に各YTCの文字を染め出した青色の艇旗を授与，終わって各選手それぞれの艇に艇旗を立てて乗りくみ，岸壁に結んだ5色のテープを鈴木校長は七首（あいくち）を抜いて順次に切り放すと，新艇は岸を離れて沖合にこぎ出た．この時花火が打ち上げられ，岸に集う学生は「旗に象る波のあと　広き遠きにあこがれて」と校歌を合唱してこのよき日を祝った．

新艇は固定隻6人乗り，1隻900円で，学校，教職員および卒業生らのきょ金によったものであった．この艇により，のちに述べるように，横浜高工端艇部無敵の100戦100勝が達せられたのであった．

12.　第3回卒業式

大正14年3月17日第3回卒業式が挙行された．前大蔵大臣，本校商議委員井上準之助が来賓として祝辞ならびに講演を行なった．なお本校の弟校ともいうべき，神奈川県立商工実習学校は第1回，横浜市立横浜工業専修学校は第2回の卒業式を同時に行なった．

〔本校卒業生〕

機械工学科	36名	
応用化学科	35名	
電気化学科	32名	計 103名
選科修業者	5名	

〔商工実習学校〕　商業部　33名
工業部　応用化学科　14名

機械科	22名	
電気科	11名	
	計	80名

〔横浜工業専修学校〕

中等部	機械工学科	16名
	応用化学科	4名
	計	20名

この日鈴木校長は卒業生に対し式辞を述べ，その際本校の教育方針としての自由啓発主義と三無主義についての信念を披歴した．

学校長　式辞

……而シテ今日本校トシテノ第3回，実習学校トシテ第1回，専修学校トシテ第2回ノ卒業式ヲ挙行スルニ当リ其5ケ年ノ久シキニ渉リ未ダ嘗テ所謂校規ニ触レ校則ヲ破リ其ガ為メ停学若クハ放校等ノ処分ヲ受ケタルモノノ1人モナカツタコトハ特ニ申上ゲタキコトデアリマス．若シ斯ノ如キ不都合ナルモノハ皆無デアツタカト云ヘバ決シテ左様デハアリマセン．3校1000有余ノ青少年ヲ集メ校規校則ニ1人モ触レルコトノナイト云フ様ナ感化ノアル教育ハ私校長ヲ初メ教職員一同余リニ不徳且ツ無能デアリマス．只少数ヲ罰シテ多数ヲ懲ラシメ或ハ少数ヲ賞シテ多数ヲ奨励スルト云フガ如キ方法ヨリモ之ヲ懲ラサズ之ヲ賞セズシテ全校ヲ挙ゲテ相互理解ニ導キ自治自覚ノ下ニ教育ヲシ又教育ヲセラレルト云フ根柢ニ立ツテ努力シタマデヽアリマス．我学校ノ教育ハ子弟ヲ教養シテ新タナル人物ヲ作ツタトハ毛頭モ学校トシテハ考ヘテ居ラナイノデアリマス．発達スベキ天賦ノ才能進歩スベキ天稟ノ徳性ハ夫々各個人ニ宿ツテ居ルモノト信ジテ居リマス．我自由啓発主義ノ教育ハ是等天賦天稟ノ才能徳性ヲ阻害スルコトナク自由ニ其発達ヲ促進セシムル即チ名教ハ自然デアルト心得テ只管努力シタ次第デアリマス．麗カナル春ノ日光ト恵風滋雨ヲ投ゲ与ヘタ積リデアリマス．而シテ其生育シタ苗木ヲ今社会ニ提供スルノデアリマス．此苗木ノ中ニハ将来亭々トシテ天ヲ摩ス

ル幾多ノ喬木アルコトヲ信ジマス．其苗木タル3校ノ学科課程ニハ各差別ガアリマスガ．苗木トシテハ何レモシカ信ズルノデアリマス．而シテ是等ノ苗木ハ如何ナル地味ノ所ニ移植セラルヽカ，如何ナル肥料ガ施サルヽカ，如何ナル保護ガ与ヘラルヽカ，此ノ208本ノ苗木ノ将来ニ就テハ切ニ来賓各位及ビ一般社会ノ理解アル御後援ト御鞭撻トニ待ツ次第デアリマス．

申シ後レマシタガ本日ハ前大蔵大臣井上準之助閣下ハ特ニ我々学校ノ卒業式ニ御来臨下サレマシタコトハ学校並ニ卒業生諸君ノ光栄ト深ク感謝ニ堪ヘナイ次第デアリマス．

政府が我高等工業ノ設立ヲ決定シタノハ大正5年デアリマシテ当時閣下ハ正金銀行ノ頭取トシテ当横浜ニ御在職中デ其創立ヲ思ヒ立ラレ且ツ御尽力下サレタ結果デアルコトハ隠レタル事実デアリマス．サレバ閣下ハ横浜市トハ深イ御関係ガアリ本校トモ又浅カラヌ因縁ガアルト存ジマス．閣下ノ御尽力ニヨツテ出来タ我学校ノ校舎ハ其設備ト共ニ，一昨年ノ大天災ノ為メニ一朝ニシテ灰燼ニ帰シ今日ハ昔ノ其ノ面影ヲ只此バラツクニ残シテ居ルノミデアリ，又閣下ト関係深キ我市ハ其建築物其橋梁，道路，今日親シク閣下ノ御覧ノ通リ実ニ悲惨ノ状態デアリマス．今日社会ニ送リ出ス我208人ノ若キ学生等ハ何レモ此大天災ニ遭遇シツブサニ其ノ苦難ニ処シタルモノデ天災ヨリノ復興ニ大ナル決心ヲ有シテ居ルモノデアリマス．国家棟梁ノ材タル閣下ト復興未ダ半ナラザル此ノ横浜市デ，シカモ此バラツク講堂ノ内ニ謦咳ニ接シ得ルコトハ一層其ノ決心ヲ緊張セシムル所以デ，私モ亦一市民トシテ閣下ニ感謝措ク能ハザル処デアリマス．聊カ蕪辞ヲ陳述シテ式辞ト致シマス．

13. 海外発展と大陸会の誕生

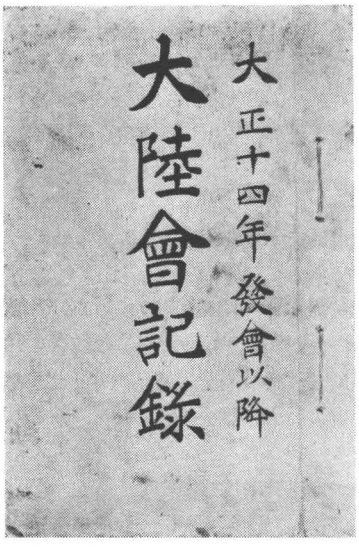
海外の物資を研究しこれを輸入して，わが国の乏しい資源を補い，大いに工業立国に資しようというのは，鈴木校長の開校以来の大旗幟の一つであった．

大正14年，この趣旨にのっとり，学生の手によって大陸会が生まれた．広く学内外から会員を募り大いに海外に雄飛せんとの意欲を燃やした．次にその概略を述べる．

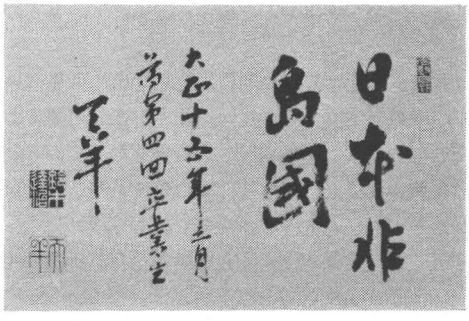
(1) 設立に至るまで

1. 堀江助教授を南洋へ派遣

大正11年3月，当時助教授であった堀江不器雄を蘭領東印度，および馬来(マレー)半島方面へ在外研究生として派遣，同助教授は化学工業に関する原材料の研究を行ない，12年5月帰校し



大陸会記録控



鈴木校長筆

た．おそらく大学，高専で南洋へ資源調査に留学した嚆矢(こうし)であろう．しかし不幸震災のため一時この計画も後続が断たれた．

2．支那見学旅行団

大正13年に至り，支那見学旅行団が組織され，本校各科３年生計13名は教授飯塚晶山（体育）引率のもとに朝鮮，満洲，支那各地を見学した．７月４日横浜を出発，釜山に上陸京城，仁川，平壌を見学，満洲に入り，奉天，大連，旅順を経て海路青島に渡り済南，曲阜（孔子廟）泰山，天津，北京を視察，８月２日無事帰校した．

3．支那視察学生団

大正14年夏季休暇を利用して，外務省対支文化事業として，支那視察学生団が組織された．各帝大，単科大学３校，私大３校，高師２校，高校３校，高工３校，高等農林１校，高商２校より各１名ずつ合計23名で，本校の鈴木校長がその団長を委嘱された．７月26日出発，ハルビンより上海に至る支那各地を見学し，８月29日無事帰校した．

以上の３件などが大きな刺激となり，海外発展の何らかの機関を持とうとの声が学生間から翕然(きゅうぜん)としておこり，14年秋，応化専科３年斎藤興次が第一声を上げ，職員側から助教授堀江不器雄，学生側から，前記斎藤興次をはじめ，入沢貞二（応化２年），西井守蔵（応化３年），時田雅夫(電化２年)，笠井進一（応化３年），田代盾志（電化３年），前田春助(電化３年)栗林達男（機械３年），平田義雄（応化３年），比嘉樽吉（応化３年）が発起人となり，大陸会を結成し，鈴木校長が会長に推薦された．その趣意書および会則は次の通りであった．

大陸会趣意書

鎖国300年の扉を開きて玆に60年，吾人の先輩は泰西の文物を採り，3,000年の歴史ある日本精神を以て奮励努力し，よく我国をして世界三大強国の地位に列せしむるを得たり．

現代の日本を担ふ吾人は何を以て此光輝ある先輩の業績に応へ，且つ後世子孫に対する所あらん乎．

熟々我国の現状を静視するに内　産業不振にして国民の生活安定を欠き，外　国際関係に於いて痛痕甚だしきものあり．是れ国土狭隘加ふるに天然の資源乏しきが為にして，7,000万の人口を抱擁せる我国が，更に年毎に780万人を逓増する実状にあるを思はゞ吾人は実に時期の重大なるを痛感せざるを得ず．

洵に狭少なる地域に多数の住民を支持せんと欲せば広く天与の資源を国外に輸出する方策を樹講せざるべからず．実に工業立国の大策を講ずべきあるのみ．

広く世界の情況を察するに，豊富なる工業原料を蔵して，吾人の利用を俟てる大陸あり，吾人と協力して共存共栄の理想を実現せんと欲する国民あり，吾人の国外事情に精通する肝要なるは固より論を俟たず．

幸にして我横浜の地は日本の門戸に位し，広く世界に通じ，正に天涯比隣の観あり．現代の国民に課せられたる内容の充実は，洵に此地に起てる吾人の隻肩に懸りて特に重大なるを覚ゆ．我が横浜高等工業学校はその創立と共に海外発展の大旗幟を掲げてより既に６星霜欧洲大戦の不況に次ぐに関東大震災を以てし，復興の大業未だ成らず，国歩艱難を極む，此秋に当り，吾人の素志益々熾烈を加へ，吾人の抱負を貫かんとする意志愈々鞏固なるものあり．

玆に同志胥（あい）謀り，大陸会を組織し互に研鑽攻究を重ね以て此重責に当らんとす．

大正14年秋

後藤新平

大陸会会則

第1条　本会は大陸会と称す
第2条　内外事情を調査研究し，特に産業の隆盛を期するを以て目的とす
第3条　第2条の目的を達成するため左の事業を行ふ
　1　内外の事情の調査研究
　2　毎月一回例会を開き会員の調査研究を発表し併せて会員相互の意見を交換す
　3　出版物を発刊し時々講演会を開く
　4　其他必要なる事項
第4条　会員は左の2種とす
　正会員　本会の目的に賛同し入会したるもの
　賛助会員　本会に於て特に推薦したる者
第5条　本会に左の役員を置く
　1　名誉会長　　1名
　1　会長　　1名
　1　相談役　　若干名
　1　幹事　　若干名
第6条　略
第7条　正会員は会費1ヶ年金3円を毎年4月納入す
　但し学生々徒よりは会費を徴集せず
第8条　略
第9条　略

(2)　創立総会

大陸会の創立総会は，大正14年10月3日午後本校講堂で，本会会員第1号である後藤新平子爵をはじめ，横浜の政治家として知られた守屋此助らのほか，外来者300余名本校，専修学校，実習学校教職員学生生徒ら400名，計700名という多数の賛同者を集め盛大に行なわれた．後藤子爵は「大陸会の本領は島国根性を洗い落とし，大陸と共に生きるべきである」と述べ，鈴木校長は「万里の長城」と題し支那大陸を論じた．

(3)　その後の活動

第1回海外視察団

ついで大陸会では大正15年の夏季休暇を利用して；第1回海外視察団を組織し満鮮を視察した．

団員33名　今井教授，田中少佐（本校配属将校）引率のもとに7月23日横浜出発，大連，旅順，鞍山，遼陽，奉天，撫順，長春に至り再び奉天に引返し，本溪湖，安東県を経て，朝鮮にはいり，新義州，平壌，京城，仁川，釜山を視察，8月11日無事帰校した．

その他講演会としては次の通りであった．

第1回講演会	大正14．10．26	八坂丸の地中海に於ける金塊引揚げ作業について		片岡　弓八
2	〃　11．27	南北中米視察談	南洋協会理事	井上　雅二
3	〃　12．17	揚子江流域に於ける支那事情		後藤朝太郎
4	〃 15．2．19	南洋視察談		藤山　雷太
5	〃　5．26	アフガニスタン旅行談	元東亜同文書院理事	田鍋安之助
6	〃　6．11	南米事情	リオデジャネイロ領事	野田　良治
	〃　10．12	殖民地事情講演会朝鮮の話他（校友会主催大陸会後援）	元朝鮮政務総監	有吉　忠一
7	不　詳	満蒙事情	陸軍少将	佐藤安之助
8	〃	南洋を見る（主として馬来半島）		鈴木　達治
9	〃	〃　（前回のつゞき）		〃
10	〃	〃　（　〃　）		〃
11	昭和2．1．24	支那民族性の推移と長江流域の形勢		後藤朝太郎

14.　学校教練の実施

大正14年第2次加藤内閣の時，宇垣陸相の手で，いわゆる軍備縮小(軍縮)が実現した．当時陸軍の兵力は25個師団（台湾軍，関東軍を除く）であったが，そのうちの4個師団を廃止した．これはひとつには国際的な平和主義の大潮流，またひとつには日本国民の熱望によぎなくされ，世論を先制して国防力の改善をはかるためであった．しかし，陸軍は人員，馬匹を減らした代わりに，装備の改善機械化を促進し，それだけ重工業との結合を深めた．すなわち宇垣軍縮は平時の常備兵員数をへらし，その分の費用を軍備の充当，育成にあてた．そして総力戦の思想をとりいれて中等学校以上の学校に現役将校を配属して生徒の軍事教練を義務化した．陸軍現役将校学校配属令の公布がこれである．また，市町村には青年訓練所を設け，その訓練をうけたものは現役兵にとられた時，在営2年を1年半に短縮することとした．このようにして，有事の際動員してもすぐ役に立つ予備兵力の増強をはかった．

（日本の歴史　井上清による）

この軍事教練の実施が決まると，学連（学生社会科学連合会）をはじめとする学生団体，いわゆる進歩的教授等でつくっていた教育擁護同盟などでは，研究の自由を圧迫するものとして反対した．

（中央公論社・日本の歴史　今井清一による）

本校では，大正14年より陸軍少佐田中忠三郎を配属将校として迎え，教練を実施したが，学生間には特に反対はなかった．大正14年から大正15年にかけて日常の教練のほかに実施した特別訓練のおもな事項を述べると次の通りである．

(1)　大正14年夏　兵営における幹部特別訓練．

(2)　大正14年秋　対抗野外演習

編成の内容は無電，有電，号旗，火煙，火光，乗馬伝令，写真，活動写真（2巻撮映），軍楽隊，偽装，記事，救護等の各班を置いた．

(3)　大正15年春　諸兵連合演習ならびに新兵器実験および見学，

(4)　大正15年夏　満鮮戦跡，工場等の視察旅行．

(5)　大正15年秋　箱根山嶺踏破．

学校長としては大正14年の学校一覧に次のように述べている．少しく長いが，これから昭和20年の終戦までつづく軍事教練の当時の見解のひとつとして次に記しておく．

学校教練ノ実施

昨年来我言論界ニ於テ賛否交々起リタル教練ノ振作所謂軍事教育ナルモノハ愈本校ニ於テモ去ル4月ノ新学年ヨリ実施セラルヽ事トナリマシタ．本校職員及学生中ニハ最初カラ之ニ反対ノ意見ヲ有スルモノガナカツタノミナラズ，寧ロ之ヲ積極的ニ賛スル点ニ於テ既ニ豊富ナル資料ト準備トガ久シク蓄積セラレテ居マシタ．故ニ其実施ニ当リテハ何等ノ支障ヲ見ズ，今日マデ実ニ順調ナル進捗ヲ見ルニ至リマシタ．是レ他方ニハ最初ノ配属将校田中忠三郎少佐ノ時勢ト青年トニ対スル理解ヲ有シ，且懇切熱心ナル努力ニヨルノデアツテ，特ニ同少佐ニ感謝スル次第デアリマス．

学校教練ノ目的ガ学生ノ心身ヲ鍛練シ団体的観念ヲ涵養シ併セテ国防能力ヲ増進セシムル為デアルコトハ，是レ当局ノ学校教練ニ期待スル処デアツテ何人ト雖モ異議ハナカラウト思ヒマス．然レドモ学校トシテ此教練ノ目的ニ直面正視スルトキハ訓練ト国防トノ二大条件ニ対シ採ルベキ手段ヲ如何ニスベキカハ，自然ト解決セラルベキモノガアル様ニ思ヒマス．本校ノ如キ自由啓発ノ教育ヲ施ス処ニ於テ，理解ナキ第三者ヨリ見ルトキハ如何ニモ自由放縦デ規律モ節制モ服従モナキガ如ク思ハレマセウガ，事実ノ真相ハ決シテ然ラズデアリマス．「特ニ厳格ナル規律ヲ以テ束縛セラレズシテ一個ノ団体ガ規律アリ制裁アリ所謂一糸乱レズ整然トシテ其団体ガ所期ノ目的ヲ達スルコトハ団体所属ノ各員ガ各自其責任ト義務トヲ知ルコトニ由ツテ初メテ行ハルヽモノデアリマス．」（第一年本校一覧参照）是レ本校ガ開校以来標榜セル所デ，全校打ツテ一団トナリ共ニ甚大ノ努力ヲ此点ニ傾注シ来ツタノデアリマス．此貴重ナル訓練ニ我団体ガ刀折レ矢尽キ今更ニ軍事教育ニ之ヲ委ネバナラヌ必要ヲ認メテイナイ．併シナガラ国防ニ至ツテハ大ニ然ラズデアル．世界大戦以来人類ノ平和ヲ唱道スルコトガ大ニ普遍的ニナツタコトハ世界人類ノ為メニ祝福スベキ事柄デアル．然レドモ何人モ国防ヲ不必要トスルモノハナイ．一旦不幸ニシテ外国ト戦端ヲ開カンカ．今日ノ戦争ハ昔日ノソレト大ニ其趣ヲ異ニセルハイフ迄モアリマセン．仮令ヘバ明治年間ニ於ケル我々ノ二大戦役ニ於テハ大体戦線ニ立ツテ居ル戦士サヘ健闘シテ居レバ国民全体ハ大ナル危害ヲ感ジマセンデシタ．併シ今日飛行機ヤ潜水艦ヤ其他ノ武器ガ使用セラルヽニ於テハ我日本帝国全土ガ敵ニ対シテ危害ニ暴露セラルヽモノト見ナケレバナリマセン．国家ノ長城ト国士トヲ以テ任スル青年ハ国防ノ技能ト知識トヲ養成シ置カズシテ何ヲ以テ国民全体ガ枕ヲ高ウシテ安ンズルコトガ出来マセウカ．一朝有事ノ時ニ当リ独リ戦線ニアル陸海軍ノ戦士ニノミ国家ノ安危ヲ託シテ以テ事足ルベキ時代ハ既ニ遠ク過ギ去リマシタ．今日青少年教育ニ於テ国防ノ一科ヲ加フルコトハ時代ノ要求デアリ最モ必要デアル．故ニ国防ハ軍事教育ノ第一条件トシナケレバナラナイ，規律，節制等ノ訓練的効果ハ其副産物デアリマス．我校自由啓発，自覚自治ノ訓練ガ又此ニ由ツテ百尺ノ竿頭一歩ヲ進ムルモノトシテ深ク期待シテ居ル次第デアリマス．是レ我校全体ガ今回ノ軍事教育ニ対スル見解デアリマス．

思い出を語る　矢田部庄栄　（応化昭和2年卒）（高工時報 昭和10年9月25日号）

軍教もこの時代に他の大学，専門学校に卒先して生徒が自発的に熱心にやったというのも，一方では当時の初代教官田中少佐の熱誠と，指導宜しきを得たのはもちろんであるが，全国第一の折紙をつけられたのもこの時代であった．時には，野外演習に高商と合同で陸軍から活動写真の撮映隊を頼んできて，演習状況をフィルムに収め一般公衆に公開し，また陸軍関係，学校関係をも持ち廻って見せた．藤沢での野営の夕べ等には音楽部が楽隊を組織して盛んな音楽の夕べ等をやって町民を驚かしたが，これも矢張りバラック時代（震災後より昭和6年頃）の建設的意気の現われと思われる……．

15.　諸設備ようやく整う

震災後，大正13年4月からの新学期には，一応授業に差支えない程度に諸設備は整ったが，その後1，2年間に急速に充実した．簡単に次に記す．

〔機械工学科〕

アムモニア式製氷機　14年7月初めより製氷に着手，9月中旬まで運転，市場に供給

石鹸工場　15年4月より運転

75馬力重油機関　研究に資すると共に校内動力の補助

〔応用化学科〕

アインタウンレフラクトメートル

ナッテイング・スペクトロ比色計

リュウイス・スペクトロフォトメートル

ヴァルヴジェネレーター

ショッパー・ゴム験機試1式

クールマン・ウルトラワーゲ

ジーデントップ・ジグモンディ・シュバルト

ウルトラミクロスコープ（固体液体両様）

コンプトン型象限エレクトロメートル

〔電気化学科〕

2キロワット直流分捲電動発電機　1基

3キロワット直流複捲電動発電機　1基

抵抗測定器

波型分解器

〔基礎学科〕

X光線用25万ボルト直流発電機

性能検査機械20余種

16. 建築学科の増設

建築学科

学科目＼学年	第1学年毎週教授時数			第2学年毎週教授時数			第3学年毎週教授時数		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
修身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体操	4	4	4	4	4	4	4	4	4
外国語	5	5	5	4	4	4	3	3	3
物理学	3	3	3						
漢文							2	2	2
数学	4	4	4	2	2	2			
配景図学				1	1	1			
建築構造	3	3	3	3	3	3			
材料強弱				2	2	2			
建築材料	1	1	1						
建築史	2	2	2	1	1	1			
測量				1	1	1			
施工法							1	1	1
鉄骨鉄筋				3	3	3			
日本画							2	2	2
木炭画	8	8	8	6	6	6			
塑像	4	4	4	4	4	4			
建築学	1	1	1	2	2	2	2	2	2
建築法規							1	1	1
製図 アルケオロジー	5	5	5						
製図 クラシック				7	7	7			
製図 設計							25	25	25
合計	41	41	41	41	41	41	41	41	41

大正14年5月22日文部省令第23号ヲ以テ本校規程中改正シ建築学科ヲ増設セラレ同時ニ学科課程ヲ制定.

本校に，建築学科を増設するの件はさきに横浜市復興会の項で述べた通りであるが，当局では13年11月予算を計上，いよいよ14年度より開校の運びとなった.

中村教授

そこで14年3月下旬，別に建築学科生徒募集広告を出し，4月11日入学試験を行ない，第1回入学生として37名を収容した．教授陣は次の通り，

教授　フランス政府公認建築士　中村　順平　　講師（建築史）文学士　斎藤茂三郎
〃　工学士　建部裕一郎　　嘱託　中末　郁二

17. 建築学科と中村教授

中村教授の教育はいわゆる英才教育といおうか，芸術教育といおうか，官立の専門学校の教育としては全く特異なものであった．鈴木校長は中村教授のよき理解者であり，鈴木校長あって初めて中村式教育が実現したといいうる．これらのことについては，第1期生である，網戸武夫が煙洲残筆（昭和34年刊）の中での「煙洲先生と草創期の建築科」および中村教授の「建築科志望の学生に与う」を次に記載しておくので参考とされたい．

煙洲先生と草創期の建築学科　網戸武夫

建築学科が横浜に創設されるまでの経過については沢山のエピソードがある．

当時我国の建築界の長老であった現社会党の曾称益氏の父君達蔵博士および故宮本百合子さん父君中条精一郎氏の両氏に，当時の校長煙洲先生が再三に亘って相談され，フランスの美術大学を卒業されD.P.L.G.の称号を得て帰朝された中村順平先生を科長に推されて創立されたものである．任命されるまでの手続とかその他文部当局との折衝など，従来の慣習にこだわらず，煙洲先生は自由濶達な，貫かねば止まない熱意で，各方面を動かされて，中村順平先生の建築学科を実現されたのである．

この建築学科が当時の我が国の建築界の風潮に抗って孤高の学風を堅持するには，煙洲先生あって初めて可能であり，中村順平先生もまた煙洲先生なくしては1日として教育の場を日本国土の上に恐らく持ち得られなかったに相違ない．我国建築界の動乱の中に生れその中で生育したわれわれ初期の学生は，維新前夜の中に生きる異状な渦巻を身を以て，体験してきたのである．

中村先生の教育はまことにきびしく，1本の描く線にも容赦する処はない．天才教育といおうか，息の切れたものは3年というマラソン競争より落伍するより仕方がなかった．

1年から3年までは製図教室を一つにして上級生と下級生とは故参と新参との区別を日常の修練の上でも劃然と強いられ，然かも実力によって甲乙を明確にするという合理性に裏付けされた徹底的な優才教育であった．教室は昼夜の別なく開放され，寒中といえども夜を徹してストーブが燃やされて思う存分に教育の機会が与えられた．文部省直轄という専門学校としては到底思いも及ばない自由さを満喫出来たのである．これは煙洲先生の名教自然という教育に対する信念と熱情あふれた中村順平先生の火の出る様な教育とによらねば許されるものではなかったと思う．その意味でも我々はまことに幸福であった．

この様にして技術の修練に終始しながらも学生が先生の教育の間に体得したものは技術ではなかった．芸道の修練即ち人間性の鍛練を強くたゝきこまれた．いゝかえれば自我の確立ということを徹底的に教えられたのである．この自我は民族の自覚と強く結びついて誇りにまで強調され，格調の高い批評

精神に点火し若い学生の血を燃やし，たぎらせた．

中村先生の横浜建築界に残された歴史の一時期は度はずれた狂い咲きの様に，今となっては昔の語り草となろうとしているが，何時か忘れられない中に日本の教育特に建築教育の歴史の上に記録として残して置かねばならないものだと思う．

〔建築科志望の学生に与う〕　中村　順平

青年諸君．諸君は中学校又は之に相当する学校を卒業して，只今恐らくは諸君の一生を左右すべき職業選定の運命に逢着して，真面目に前途を見つめて居るに相違ない．そして将来建築士になろうとして，若し横浜高等工業学校建築学科本科（教員養成所は別）入学の志を持っているならば，今玆に諸君に述べる事柄を注意深く読んで，よく腑に落ちた上で諸君の前途の方向を定めなければ曾に入学手続が無駄骨折りとなるばかりでなく，折角入学しても修学が不可能であり従って将来真の建築士にも成り得ずして，国家又は世界人類文化の為にも無益な事になるかもしれぬ．

夫故先ず建築士とは如何なる職掌か従って如何なる素質を持った者が選ぶべき性質のものであるかということを簡単に述べようと思うが，此際注意すべきは諸君の建築に志した他の友人達とは全然相違した様な事をいうかも知れぬから，今諸君に説く建築士というものの実例として，現在日本の建築家建築学生又は生徒の素質や天性を対象として脳裏に描いて理解しようと努めると，甚だ解りにくい事が起ることがあろうから諸君の頭を謙虚にして玆に述べる事柄をよく聞いてもらいたい．

一体建築士とは何であるか

此の定義は下の通りである．

「建築士（Architecte）とは諸々の比例（Proportion）の美や，配置やその装飾を自分で創造して以て諸々の建物を構成し，その命令の許に之等を施工せしめ，是等の工費を制規通りに処理して行く芸術家である．」（1878年発刊仏蘭西翰林学院編集の書に之を定義す）

此の内で比例の美とは卑近な例でいうと，日本の男女の洋服が実に見苦しいという事実があったとする，それは身体を構成している五体の長さの比例や大きさの比例が甚だ悪い為であって，同じ手足を持ち同じ様な構造でありながら，希臘彫刻に見る身体は実に見事にも美しく尊いという事は，即ち五体の比例が誠に美しい為である．これと同じく諸々の建物がその総てにおける比例の如何に依っては，後世建物の存続する限り人心を慰め欣ばしめる程に美化させられるものであり，又建物の機能に従って之が有用価値をも高めてくるのである．それ故文化のある国の建築には比例の美が大きな要素となってくるのである，それにも拘らず比例には一定の規則がない，千変万化物の夫々に応じて存在し，必ずしも常に科学的であるとは限らずして，芸術的なる動機によって創作解決しなければならぬ事が多いのである．従って建築士とは芸術的なる素質によって比例の美を創生し此等を組合せて種々の建物や，その内外の装飾や，庭園並びに都市を創造すべき天職を有った芸術家である．従ってこの職業が全然科学の範囲のみで物を設計する土木技術家若くは構造専門家（シビルエンジニアー）とは全然その立場を異にしている事に注意すべきであり，諸君が此等と建築士とを混同々一視して，一国文化の一要素であるべき建築芸術を低下せしめる原因としてはならない．

建築士は又建築請負師とも全然相違する．建築士が自分の創造した芸術を実際に建てる場合には，請負師等の手で施工せしめて此等を監督こそすれ，その職掌は営利業者たる請負師建築材料商人および此等の雇人とは寧ろ反対の立場にあるのである．従って建築士にして営業に関係するものは，外国でも日本でも，建築士の名を返還せしめる堅い道義上の規約がある．それ故特に物質上に趣味又は欲求を有する者に対しては甚だ適した職業とはいえないかも知れぬ．

建築士を志す青年はどういう素質であることが最適当か

もし諸君が建築士たらんことを志望するならば，諸君はここに述べんとする学術および技芸に対して，各人が各々の才能を十分ふり返って考えて貰いたい．諸君は已に中等教育を卒え立派な各自違った特長を有った有為な青年である事を信ずるが，只この場合において各人が個々の特長を自覚して適材適所を選ぶという一事だけが，どんなに諸君と国家および世界人類との将来に幸福を齎

らすかを考えて，それぞれの天稟の素質に就て，自らを考察して将来の方針を定めて貰いたい．諸君は不幸にして建築を余り多く見ていない事が甚だ残念であるけれ共，若し左に掲げる諸科目にして諸君に十分の素質があったと自覚するならば，それはやがて建築士を志すに適した素質であると考えて差支えない．建築学は学校で修学する事が出来る．然し建築士の素質は学校で教えることが出来ないからである．従って先づ，

第1，何といっても出来るだけ画を描くことに優れていなければならぬ．画といっても自己の個性本位な単に見た目に美しい画を描くというのではない．己の今迄に想像も出来なかった物体でもその形を正確且忠実に出来得るだけ実物に近く描き現はし得る画を描く事を絶対に必要とする即ち出来るだけ立派な写生画家でありたい事である．若い諸君が今迄の過去において，例えば中学校在学時代を通じて，他生徒と比較して以上の性質の画について己がどれだけの技能を持っていたかを追想して貰いたい．幸にして諸君がこの点において非常に優れていたならば，此後諸君の厳格且真率な写生の努力は想像力を増進し，平面立体面の観念および視覚が発達し，比例に対する眼識感情は繊細且つ豊富になって来るもので，この実証は200年来巴里国立美術院の建築学生においても優れた写生画家が最も深い創造構成芸術家になっており，また如何に画家としての素質なき日本の建築志望者が後年の不首尾に建築士たることを抛棄したかの事実を見ても判る事である．それ故相当若くは以上に勝れた写生画家でない限り，諸君は建築士として志しても大成の見込が全くないのであるから始めから入学を志望しない方が本人の為である．

以上の素質は即ち諸君が此後の努力次第で発芽し成長し大成し得る建築士としての核子であって，同時に又製図の作製および工事の施行の時にも必要な要素である．従って諸君が高工入学における口頭試問に当って，時には石膏写生を為さしめられる事もあろうし，また入学をした後にもなお，木炭写生と塑造とを十分勉強しなければならぬ．

第2，科学としては論理推理的の能力が必要である．これは諸君の芸術を深くもし芸術的価値を高め，これなくては諸君の思想を実現する事が出来ないのである．また建築士の社会的実務に当っても是等の能力は必要である．而して先づ数学が出来るだけ優れている事が望ましい．少くとも算術平面立体幾何，代数，就中幾何および幾何図学は甚だ重要であって，諸君は入学してからも是等の数学を土台とし更に進んで種々な高等数学の修学を続けねばならぬ．然し是等は建築家の要素として甚だ大切でありとはいえ第二義的のものである事は勿論である．何故かなら諸君に最も必要な想像力および芸術的才能は是等によって決して発芽するものではないからである．

建築芸術は常に構造的に真でなければならぬ．この為諸君は数学を十分に修得すべきである然し呉々も数学に依て建築芸術の創意が生れるものと誤解しては大変である．語学者必ずしも文豪ではない．

第3，其他健全な文学によって己の思想感情を啓発してゆく事は甚だ重要な事であって，これがやがて諸君の創作上の原動力となるべき筈のものである．

18. 対高商野球戦　始まる

大正14年7月，対横浜高商野球対抗戦が行なわれた．後年ハマの早慶戦とうたわれ，横浜ッ子の人気を2分したといわれた対高商戦のはじまりである．

横浜高商20年史（昭和18年刊行）によれば，同校は大正13年3月開校，14年3月まで高工校内の仮校舎で授業をつづけ，3月27日に南太田富士見台の新校舎に移転，4月1日より新校舎で事務を開始，となっている．引越し後の5月25日，本校グラウンドで，はじめて高工対高商の野球

戦が行なわれた．この時は，日没となったので6回10—10で引分けの成績であった．これはきたるべき定期戦の前哨(ぜんしょう)戦ともいうべきものであった．すなわち，まだ3年生のいない高商側であったが，この成績に気をよくし，毎年日をきめて定期戦をやろうではないかと，正式に本校野球部へ申入れがあった．本校も これを受けて立ち，いよいよ 第1回定期戦は 同年7月1日，横浜開港記念日に新山下球場で開催されることとなり，両校とも応援団を組織し張切ったが，この日は雨で中止，翌2日に挙行，本校が4A—3で初勝利を 得た，翌15年7月1日同球場で第2回戦が行なわれ，この時は4—5で本校が敗れた．

高商・高工　定期野球戦　　横浜野球協会々長　山口　久

高商対高工の定期戦が始まったのは震災後の大正14年からで，この定期戦がかもし出した熱狂と興奮は，単に両校の学生応援団がそうなっただけでなく，広くいえば，横浜市民全部が，そのるつぼの中に投げこまれたものなのです．(横浜高商・高工定期球野戦史より)

19.　第4回卒業式

大正15年3月17日第4回卒業式が挙行された．同時に神奈川県立商工実習学校第2回，横浜市立横浜工業専修学校第3回の卒業式を挙行した．前首相高橋是清が来臨し学生に一場の演説をした．当日の学校長式辞は次の通りである．

なおこのなかで本校教職員は本校の復興ならぬうちは卒業式にも記念祭にもいっさい式服は着用しないことにきめたと述べられている．

学校長　式辞

……大正12年ノ大震災ハ人類ガ経験シタル天災ノ最モ惨憺タルモノデアリマシタ．而シテ今回卒業シタル青年ノ多数ハ此災害ニ学生トシテ際会シ，我々ト其苦難ヲ共ニシタル同志デアリマス．而シテ本校トシテハ其最後ノ学生ヲ出スノデ私トシテハ実ニ名残惜シイ感ジガ致シマス．

彼ノ天地ヲ焦ガス火焔ニ直面シタル青年，アノ凄惨ナル破壊ト無数同胞ノ目モ当テラレヌ残骸ノ間ヲ奔走シタル青年ニ由ツテ，復興ノ大業ハ成就セラレナケレバナラヌ．ノミナラズ偉大ナル人物ヲ此ノ天災ガ生ミ出スモノト私ハ確信シテ鋭意災後ノ教育ニ当リマシタ．爾来少クモ我校ノ復興成ラヌ中ハ卒業式ニモ記念祭ニモ礼服ヲ着用シナイト我々同僚ガ一致シテ居ルノハ単ニ節約ヲスルト云フケチナ消極主義ノ観念カラデハアリマセン．只以上ノ確信ヲ固守セントスル一片耿々ノ志ニ過ギナイノデアリマス．我250名ノ卒業生ガ在学中ニ於テ其学業ニ顕ハレタル成績ノ如何ヲ問ハズ，此雰囲気ノ中ニ螢雪ノ功ヲ積ミタルコトハ，彼等ノ将来ニ何等カノ意義ガ潜在スルコトヲ信ジマス．何卒来賓各位ノ御引立ヲ重ネテ御願ヒ致ス次第デアリマス……．

20.　互助主義公心一円会

横浜市の工業は震災前は，その工業立市の市是によりかなり隆盛をたどりつつあり，特に家内工業は市の経済の重要項目であった．ところが大正12年の大震災により全く昔の面影はなくなり市にとってはゆゆしい問題となった．

大正15年12月，本校が音頭をとって市の工業発展を目的として互助主義公心一円会なるものを設立した．

工業上の研究費の援助，その成果に対する表彰，工業上の調査などを行なった．その資金源として，個人または法人から毎月一口一円の会費を徴収したが，これが会名のできたゆえんである．

21. 横浜高工時報　発行

大正14年1月15日横浜高工時報第1号が発行された．以来幾多の変遷はあったが学校新聞の雄として連綿として終戦直前の昭和19年4月28日第399号に至るまで続いた．次に当時のことを記しておく．

(1) イオン会時代

大震災の余燼(じん)いまだ消えやらず，バラックの校舎が骨組み最中の大正12年暮れごろ，当時応化の1年生(第4期生) の級では山口辰男(後，横浜市大教授) らが中心となって「イオンの叫び」という謄写版刷りのささやかな級会誌を発行した．これはわずか50ページばかりのものであったが，級メンバー40のイオンは，若き情熱に燃えて各自こづかいを節約して経費にあて，真っ黒になって謄写版を刷って発行をつづけた．そのうちクラス会誌では物足りないというので，学校全体の新聞にしようということになった．こうして名も横浜高工時報と改め，大正14年1月15日第1号を発行した．

第1号の発刊の言葉に「……吾々は組として40名足らずで，お互を向上さしているだけでは物足りなくなりました．組としての団結だけでは満足し得ない気分に捉れ出したのです．そして周囲を見廻した時，そこには3つの科によって障壁が作られている諸君が，さらに科の下に統一されている小さい30何名かの組々で，各自やれるだけのことをやって行かれるのを見出したのです．

この時です．組として完全な団結にある吾々はもっとラージスケールに学校として完き団結にまでなりたいと痛感したのは……吾々は若いのです．痛切に感じたことを何でそのまま投げ捨てておくことが出来ませうや．……お互いこれから時報を介して団結して行きませう．……」なお第1号は編集兼発行人は横浜高工飯塚晶山，印刷所横浜市西戸部町紫成社となっている．

(2) 創刊時代

こうして若人の熱情によって学生新聞としての高工時報は誕生したが，間もなく経済難に陥った．自由購読の制度をとったため購読者はきわめて少なく，広告も思うにまかせなかったからである．しかしながら，熱心な学生有志達の手によって第27号まで続刊された．当時の金で 1,500円余の経費がこれら有志のこづかいその他から支弁されたのであった．

この時分は編集も幼稚で，タブレット版4段組，旧5号活字であった．発行も月1回か2回がせいぜいであったようである．

(3) 文芸部の不振

本校校友会に文芸部が設けられたのは大正10年3月であった．じ来校友会会誌「鵬翼」が文芸部によって発行されていた．「鵬翼」とは鈴木校長が伊達政宗の次の詩からとって名づけたものである．

邪法迷国唱不終 欲征蛮国未成志
図南鵬翼何時振 久待扶揺万里風　　伊達　政宗

しかしながら，文芸一本槍の文芸雑誌としての鵬翼は間もなく行きづまりを生じ，衰微していった．

(4)　出版部の出現

イオン会の手で27号まで発行された高工時報は，いよいよ経営が苦しくなってきたが，一方時報を救う道として，鵬翼を糾合して校友会で経営してはどうかという案が出た．天正15年3月この案がいれられ，文芸部を出版部と改め，この校友会出版部で時報を発行することとなった．初代出版部長として藤村教授が就任した．

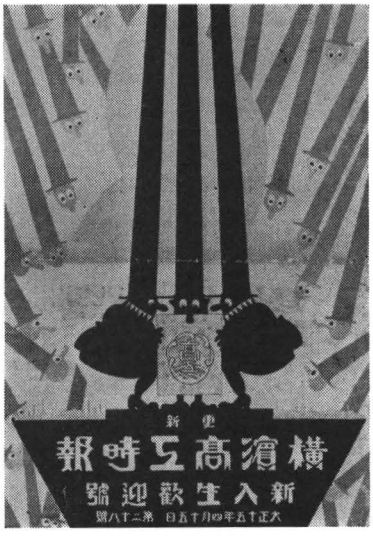
大正15年の学校一覧によると校友会の項に「出版部は従来の文芸部を改称したるものにして昨年以来学生有志によって刊行せられたる「横浜高工時報」を引受け発行することとなり，本年末までに41号を出し，思想の発展，消息報道，通信等の機関として重要なるものと認めらるるに至りました」とある．

こうして時報は第28号から校友会出版部の手で発行されるに至り，藤村部長の積極的施策と相まって，経営難も解消し漸次充実味を加えていった．藤村部長の経営方針は

(1)　校友会全部に配布すること
(2)　毎年1回鵬翼に相当する特別号を発行すること
(3)　従来の文芸部の文化的事業をできるだけ継承すること
(4)　経費は出版部費と購読料によること
(5)　収支の会計報告を紙上に発表すること

等であった．なお初代委員長は応化の山下俊雄，会計は電化の足助七郎であった．

次に高工時報の編集方針は，学生の寄稿を本体とし，本校自由教育主義の徹底に眼目をおくこ



高工時報 28号 大正15年4月15日

とであった．学校としては，新聞発行に対してはあくまでも学生自治を信頼し，干渉あるいは検閲などということはいっさいしなかった．大正15年末横浜貿易新報から吉田昌興が教務課嘱託として来任し，その指導により，新聞半截型7段組，活字旧5号という，ややスマートな体裁となった．高工時報の発展については後節に逐次述べることとする．

横浜高工時報　大正15年4月15日第28号について

更新横浜高工時報 No.28 は3色版刷り表紙で内容10頁6段組旧5号活字であった．新入生歓迎号という特別号である．定価1部10銭，編集兼発行人 藤村利常，印刷所 横浜市南仲通5，98 文華印刷株式会社．発行所 横浜高等工業学校 校友会出版部となっている．

22.　大正年代の記念祭について

第1回の記念祭は第1節で述べたように開校記念日の大正10年10月29日～31日に行なわれた．これは，先輩格の蔵前あたりの思想を多分に受けついでいて，主として校内を開放し，学園と一般市民との交流をはかり，あわせて工業知識の普及につとめるという意味を持っていた．（当時は29日から31日の天長節祝日までの3日間であったが，後に明治節ができてから11月1日～3日までと変わった）当初は好景気時代の名残りがまだあり，記念祭も向こう見ずな稚気がみなぎっており，学生たちもなかなか元気なものであった．なかでも，天長節祝賀の学生芝居は珍でもあり，悲壮でもあった．最初の年，大正10年の天長節の日には開港記念館で，横浜居住の外人などにも招待状を出し，入場券にプレミアムがついて飛んで売れたというくらいの人気があった．出し物は「ベニスの商人」などであったが，活人画などに至っては，褌（ふんどし）一本の全裸体で，10月末の寒さの中で，石像になった男があったくらいの，当時としても無茶といえば無茶をやってのけた．大正12年は震災で記念祭はとりやめとなったが，翌13年は，うつ勃としてわき上がった復興の気迫に記念祭も調子が上がり，学生芝居は各科競演となり，田舎回りの壮士芝居そこのけのできばえで市民の大喝采(かっさい)を博し，ハマの名物となった．

しかしこの学生劇も，岡田文相（大正13年～昭和2年）の時，社会風教上よろしかずとして禁止令が出て，以来本校では音楽会に切り替えられた．

大正14年建築科ができ記念祭も4科競争のかたちとなった．このとき建築科では校舎に船首と船尾をくっつけて大海賊船に仕立て，さすが建築科なるかなと感心させた．大正15年の記念祭には建築科では正門前に異色あるエッフェル塔を建て，一躍市民の人気の的となり，加えて芸術行進なる一大デモンストレーションを行ない，市内をねって歩き市民をアッといわせた．以来記念祭にはなくてはならぬものとなった．

なおこのエッフェル塔に刺激されて，以後各科でもこぞって自分の科の歓迎塔に腐心しだした．このようにして，ハマの名物記念祭は一つの型ができ上がっていった．

23.　横浜高工のベヒシュタイン・ピアノ

前項で述べたように，岡田文相のとき学生劇が禁止となったので，鈴木校長は学生たちの失望

を思い，その代償としてベヒシュタインのピアノを購入し，音楽会開催に切り替えさせた．このピアノは当時ではぜいたくともいえる高価なもので，震災直後としては思い切った買い物で，その時分横浜一のピアノといわれた．

ベヒシュタインのピアノ　鈴木達治　(煙洲残筆)

岡田良平さんが文部大臣に任命せられてから，学生劇を禁止したことがあった．本校でもそれまで学生劇が盛んで，天長節の祝賀会には市内の呼び物とまでなっていたのであったが，私は生徒を納得させて，当時学校としては過分の6,000円を投じ，ベヒシュタインのピアノを買い込み，学生劇の代わりに音楽会を開催して人気を集めた．その直後，岡田文相が来校されたので，私はピアノを示し，「これは学校には過分のものと，御叱りを受けるかも知れないが，学生は子供であるから，学生劇という玩具を取り上げたからには，他の手にこれに代る新しい玩具を摑まさねばならない．高等教育に於ても，矢張りこれは教育の一手段であると心得たためである」と説明したことがある．

先生の思い出　横浜工業会理事長　山口辰男　(煙洲夜話より)

「子供からおもちゃを取上げたら，別のおもちゃを買ってやらなきゃ，子供だって怒るよ．文部省は学生から学生劇を取上げたから，ワシゃ別のおもちゃを買ってやるよ」と買って下さったおもちゃの一つは，今この壇上にあるベヒシュタイン・フルコンサート・グランド・ピアノでした．

ベヒシュタイン　SM生　(高工時報252号　昭和12年3月3日)

我々が我々の講堂にベヒシュタインを持っているということは実に偉大な誇りである．

僕もときどき音楽関係の人に会うこともあるが，「高工には立派なピアノがあるのですね」とよく聞かされた．また東京の各音楽学校などでも，皆横浜高工にはベヒシュタインがあるということを承知している．実際僕はその有名なのには驚いている．このピアノは現在なお日本でも数えるほどしかないとの事だが事実横浜第一のピアノであろう．以前は横浜ではこのピアノを使用したいがために，わざわざ現在の学校の講堂で音楽会を開いたものだそうだが，無理もないことだろう．

が，しかし我々が真に誇りとするのはただ1万円以上もする高価なピアノを所有していることに終るものではない．……高等工業にかくも立派なベヒシュタインを擁しているということは情操方面に殊に音楽方面に一大自覚をもっているということを表徴したものである．そこに我々の誇りがある．……

(注)　ベヒシュタイン

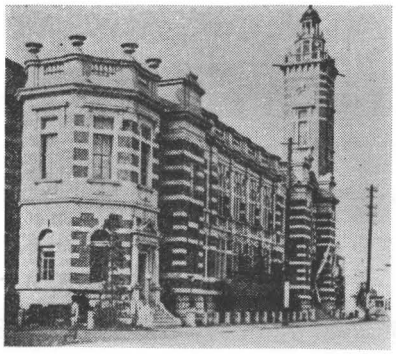
1.　Friedrich Wilhelm Karl Bechstein 1826～1900

ドイツのピアノ製作者，ドイツの各種ピアノ製造会社で働いた後，ロンドンおよびパリへ旅行してパーペ (Pape) およびクリーゲルシュタイン (Kriegelstein) のもとでも研究し，1853年わずかの資本でベルリンにピアノ製造会社を設立した．まもなくハンス・ビューローをはじめ多くのピアノの巨匠たちが彼のピアノに興味を示したので非常に発展し，しだいに大型の演奏会用ピアノ製作に従事するようになり，ロンドン，パリ，ペテルブルグなどにも支店を持った．第一次世界大戦前には約1,100人の従業員を擁し，年産4,700台を数えた．彼の死後第二次世界大戦でベルリン工場は破壊されたが，1949年再開され，今日でもベヒシュタイン・ピアノはスタインウエーと並んで世界最高級の楽器とされている．(平凡社百科辞典より)

2.　このベヒシュタイン・ピアノについては戦後に後日談がある．

24.　横浜工業会　創立

われらが横浜工業会は大正14年10月創立された．これは本校の出身者によって組織された，いわば卒業生の統合的集まりである．さきにも述べたように本校第1回卒業生は大正12年94名，同



新装復興した横浜開港記念会館

雪の校舎全景（大正15年）

13年に123名，同14年に103名となり，さらに各年増加するわけであるから，同窓生としても学校としても，何らかの集まりが必要となってきたのは当然のことで，むしろ本会の創立は遅きに過ぎたとも思われた．

このことに関し会長である鈴木校長は横浜工業会の創立に際しこれを祝して「工業会の創立が，稍々遅れた気味はありますが，之が所謂自然の発達で，我校の主義に適合したものと思います．故に此会の組織には，少しも無理がない．出身者各自が自然と其の必要を自覚して，興り来った結果であると思はれます．この様な自然的発達の団体は将来必ず健全な発育をするものと私は特に喜ぶ次第であります．……而して同時に諸君の僚友，特に同窓出身者と手を取り，信義を重んじ，名節を尚び，社会奉仕の崇高なる信念を持して，益々発展を期して貰ひたいのである．諸君の母校たる我校は又諸君の期待に孤負*することなく，時勢に遅れず，常々社会の先駆となり，絶えず諸君と連絡を保ち，諸君の後援となることを勉めます．」と述べている．

（注）孤負する（そむく）

本会では本会の目的（会則第1条　本会は会員の親睦をはかり併せて工業の発展に資す）達成のため大正15年5月 機関紙として 横浜工業会誌を発刊した．本誌は 消長はあったが 昭和18年8月第18巻1，2，3号合併号まで継続刊行された．（戦後の復活については別に述べる）

横浜工業会第1回総会

第1回総会は大正15年10月31日（天長節，母校記念祭最終日）に開かれた．事務報告，会計報告の後，鈴木会長の南洋視察談があった．なお常議員の改選があり次の通り当選した．

村上泰助　石井　暎　門田　実　上条　勉　石原輝一　石井文雄　横田義雄　荒木義雄
内田義信　菅　要助　河村文一　越川嘉治

25.　震災後の校友会

前節で述べたように，運動施設はすべてあの大震災で破壊されてしまった．間もなくそのグラウンドのあとには，復興のバラックが建てられ，運動部の練習どころではなくなった．しかし若人の熱はそれを克服して，わが校友会各部は次々と再起した．

野球部

大正13年の春ともなると「抬頭せんとする元気抑え難く，熱心な努力により校舎の側に，沙漠の如きグラウンドを借り，真に復興的努力を積んだ.」(鵬翼第５号) ５月末ようやくグラウンド新設の運びとなり，６月中旬に完成した．６月13日開場祝賀の校内野球大会を催した．つづいて横浜球界の雄商友野球団を８－５で破った．６月23日駒場農大を迎え16—1で撃破，７月横浜復興大会には卒業生および在校生で弘陵クラブを結成参加した．また，７月18日帝大主催の高専野球大会に出場，浦和高校に 4—5 で敗れた.

翌14年は当部にとっては記念すべき年で，対高商野球戦が初めて行なわれた．このことについてはさきに述べた通りである.

庭球部

この時代庭球部は軟式から硬式へ移る過渡期で，コートの問題，経費の問題など種々の難問に行き当たり，部としては大変苦労が多かった．時代の趨勢により本校に硬式をとり入れたのは大正13年であった．そして15年春に硬式で対高商第１回定期戦が開始され，つづいて秋に第２回戦が行なわれ，本校は幸い２回とも勝つことができた．対高商定期戦としては野球部につぐ古い歴史を持っている.

水泳部

水泳のプール（といっても借りものの貯水池）も震災で破壊されたが，13年６月にはようやく修復されて使用可能となり，７月初めクラス対抗水上競技会が開かれた．まだこの時分には横浜には「淡水遊泳場」（このころはこのように称していたようである）がなかった（鵬翼第５号による）ので，校内にプールの設立が強く望まれた．対高商水上定期戦が初めて行なわれたのはずっと後の昭和10年のことである.

第1章　第3節　10周年を迎える（昭和2年～昭和5年）

本節では昭和の初めから本校が創立10周年を迎えた昭和5年までを記述する.

大正15年12月25日，大正天皇が亡くなられ，摂政の地位にあった皇太子裕仁が皇位につき昭和と改元された．日本はこのころ大きな転換期にさしかかっていた.「それは天皇即位の3ケ月後の金融恐慌に始り，内に外に社会不安が日ましに大きくなり，血なまぐさい弾圧，暗殺，クーデターがくりかえされ，遂に太平洋戦争となったのである.」（中央公論社・日本の歴史・ファシズムへの道）

すなわち昭和時代は金融恐慌ではじまった.「ちょうどこの時，これまで何とか取りつくろってきた日本経済の矛盾が爆発し，2年2月，地方の小銀行の破産がおこり，3月には東京の渡辺銀行も倒れ，4月には鈴木商店が破産し，鈴木に無担保で巨額の貸付をしていた台湾銀行が危機にひんした．若槻内閣は総辞職し，翌日台湾銀行は休業，東京の十五銀行はじめ大小の銀行，会社が相ついで倒れ，空前の大金融恐慌となった.」（岩波新書・日本の歴史）

神奈川県では「まず昭和2年3月15日に渡辺銀行*が休業，1週間後の22日には代表的な郷土銀行である左右田銀行*も休業した.……預金者が連日同行の前にひしめくさまを見て，政府も50円以下の預金者には全額支払いを命じたものの，銀行側も打つ手はなく，これが原因の親子心中，発狂など悲惨な事件が相ついだ.」（読売新聞社横浜支局編・神奈川の歴史）

そして左右田銀行は同年，現横浜銀行に買収合同された．次に第二銀行（株主はほとんど横浜商人）も打ちつづく財界不況のため銀行整理の意を決し，昭和3年4月横浜銀行に預金全額と，これに相当する資産を引きついだ．また横浜貿易銀行も経営不振となり，3年5月，同じく横浜銀行に合同された（主として横浜銀行40年史による）.

（注）本校初期商議委員に　渡辺銀行頭取渡辺福三郎，左右田銀行頭取左右田喜一郎　がある（商議委員の項参照）

昭和3年2月，普通選挙法による第1回総選挙が行なわれた．11月京都で天皇即位の大礼があった．この間中国における情勢は緊迫の度を加え，昭和2年，第1次山東出兵，同3年第2次出兵とあいついだ．4年7月，田中内閣総辞職し，浜口内閣成立，10月アメリカに始まる空前の大恐慌が世界全体をおおい，日本経済も最大の危機におちいった．失業者は300万人以上と推定された．5年11月浜口首相が東京駅で撃たれて重傷を負った.

一方，わが学園では経済界の不況による政府の緊縮財政のため，大震災の時のバラック建築のまま授業をつづけざるを得なかった．当時初めて本校へ受験にきた学生は隣の商工実習と本校をとりちがえたほどであった．昭和2年，入試にも無試験制度を採用した．昭和4年，造船工学科

が新設された．昭和5年，本校は創立10周年を迎えたが鈴木校長の考えで，なんら特別の祝賀行事は行なわなかった．5年6月横浜工業会は社団法人となった．このころはいわゆる就職難時代で，本校もその例外ではあり得なかった．

1. 第5回卒業式

本校第5回卒業式は昭和2年3月17日午前，講堂で挙行された．卒業生は機械工学科38，応用化学科30，電気化学科33，他に本科修業 1，選科 1，計103名であった．この時鈴木校長は式辞の中で本校のいわゆる自由啓発の教育方針と無処罰主義について述べた．なお当日は南洋協会会長 田 男爵の講演があった．

学校長　告辞

……来賓各位，私は今日の如き機会に於て，屢々本校の自由主義教育に就き御話を致して来ました．実を申せば私は現代教育に於て，尠からず不満を感じて居る一人であります．私の眼には多くの学校と云ふものは，皆単純に職業的教育を施して居るのみの様に思はれてなりません．即ち学校に於て理学，工学，法律，経済等を学んで技術家となり，弁護士となり，判検事となり，官吏となる．畢竟職業を目標とする教育に過ぎないのであります．此為め立派な技術家が出来て，鉄道や，電気事業や，其他のものが能く設備せられ凡ての事が便利になり，官吏や法律家が揃って社会の組織や制度の樹立に努力を致しませうが，夫れで決して人間社会が安定せらるる訳でもない，幸福が増進せらるる訳でもない，又国家の基礎が堅実になったとも考へられないのであります．

欧洲に於て近代異常の発達をした職業教育の跡を観れば其功過は明白であると思ひます．即ち世界大戦争を起して，彼の悲惨極まる末路を作りました．今日我国人にして欧洲各国を視察し，其鋭意回復を計りつつあると云って，其勉強振を三嘆するものが多くありますが，悟らずんば悲惨の末路を又繰り返すに過ぎないのではないかと思はれます．欧洲の職業教育に倣ひたる我教育も，最早や既に行き詰りつつあることは各方面の不平不満より観ても明らかなことと思ひます．

勿論我国に於ても，技術の習得のみでは不可である，知識の取得のみでは不可である，人格養成と相待って始めて教育が完成せらるべきであるとは，何人も語る処であります．而して其人格養成には如何なる主義，如何なる方法に拠るやと云へば，勤勉であれ，忠実であれ，信用を重んぜよ，曰く何，曰く何と凡ての道徳の目次を列ねて之を奨励鞭韃し，若し之に違反するものがあれば悉く之を懲戒処罰すると云ふ所謂道徳主義教育を加味して居る許りである様に思はれます．無論加味して居ることは決して不可でない，併し此道徳主義教育は一方から観れば賞罰主義猶極端に云へば万事が懲戒主義教育とまでなって居るのでなからうか，頗る疑問である．而して之は教育家自身が既に道徳家であり，又人格者であると云ふ立場から出立して居るかの様に考へられます．果して然らば之で現代青少年は満足し得るでありませうか．

故に彼等の学校に在るや，心あるものの多くは不満ながら，不平ながら，其校規校則に服従し，唯無事に卒業証書を得，卒業者の得権により，就職の機会を望んで居るのみで，学校を以て彼等が真に生きたる愉快な修養の場所と考へず，従って人生に対する明るい気分を消失し，共存共栄の奉仕的精神を消磨するに至らしむるものと思ひます．故に社会に出でては，自己の価値に生きることを忘れ，正義に立つことを忘れ，金力や権力に生きんと焦慮するに至り幸にして成功せば其得たる金力や権力に耽溺するに至ることさへあるは実に慨歎すべきことであります．然らば深甚の考慮は，徒に利害得失にのみ払はれ，朝には此の主義夕には彼の主義と，臨機応変のことのみ流行し，恰も迷へる羊，而も大なる迷羊が現はれ来ることに誰しも不思議を感じないのでせうか．是れ畢竟我国職業教育の弊竇であると信ずる外ありません．道徳主義の加味も玆に至れば無力であります．仮令無力ならずとも，微力であると私は信じます．

是れ我等の学校に於て所謂道徳主義教育を踏み越え，自由主義を採り，之を根柢として職業教育をなしつつある所以であります．

此自由主義から割出したる施設に就ては，既に声明したるものは若干ありますが，玆に更に一つを添加するものは無処罰主義であります．過去7年間に於て，我三校は何れも之を実施して居りますが，就中最も其試練に苦辛したものは商工実習学校であります．而して終に未だ一人も処罰いたしません．罪悪をし犯したるものを，校門の外に放逐して学校は浄化したとは，決して考へられません．停学を命じたとて必ずしも改悛が期せられるものとは信じません．処罰主義教育によって何処に共存共栄の意義がありませうか，何処に奉仕的精神がありませうか．何処に社会互助主義がありませうか．無処罰主義の実行には我実習学校は其の学校を所謂社会事業にまで延長し，自ら其重任と苦痛とを背負うたことは実に涙の事業で，若干の教師に対しては特に深甚の敬意を払って居ります．

併しながら我校の自由主義教育は決して徹底して居るとは申しません．只日夜我々は其徹底に努力して居るのみであります．此の如き主義主張の下に今年も280有余の人物を出しました．来賓客位並に我社会が何卒是等青少年を御鞭韃御引立下さる様玆に御紹介を兼ねて御願致します……．

2. 入試にも無試験制度を採用

本校では前にもしばしば述べたように在学生の試験はいっさい行なわず，いわゆる無試験無採点主義をとっており，官立学校としては全く破格な教育方針だと世間から驚きの目で見られていたが，昭和3年度からは入学試験にまで無試験制度を採用して，世間をさらにあっといわせた．本校学校一覧昭和3年度に「所謂無試験制度を採用して入学志願者の選抜を為す」とある．このころ入試に無試験制度採用の可否が盛んに論ぜられていたが，実際無試験にふみ切ったとは鈴木校長の大英断といえよう．

このことについて当時の入学者自身が驚いた様子が次の話でわかる．

思い出を語る　都筑正芳　（機械9回卒）（高工時報 昭和10年10月）

我々の入学したのは昭和3年です．ちょうど無試験入学の始まった年です．その頃の中学生にとっては正に晴天の霹靂でした．特に学校をサボって受験勉強ばかりしていた者は大周章です．……口頭試問は至って簡単でした．屠所に引かれる羊のように試問室へはいると，内には半円形に偉そうな先生方がずらりと並んで居ります．「君は何所の学校か」「何故この学校を志望したか」など月並の試問1，2分の後解放されてほっとする．しかし，こんな事で及落を決められるかと思うと，何だか心細く感じました．

最初の事で先生方も勝手が分らなかったか，私のようなものまで憧憬のあの波の徽章を戴く身分になりました．

鈴木校長はこれについて次のように述べている．（煙洲残筆）

私は入学試験にも学科を用いず，専ら中学時代の成績と面接による結果を総合して判定したものである．筆答試験の点数のみに拘泥せずして入学者を決定することは，色々な情実が侵入する訳である．しかし，その情実には夫々明確な理由がなくてはならない．例えば工業家の子弟には工業学校であるからには，多少の便宜を与えても差支えなかろうというが如きである．工業教育は国家の工業を隆盛にすることが目的であるならば，その方向に向って便利を考えて然るべしと思った．……私の在職15年の間には情実というものが相当あったと記憶するが，私は常に公然として行い，それについて自分の良心を曇らせたことは一つとしてなかった．……

3. 3博士生れる

昭和3年初め，本校教官の中から3人の博士が誕生した．全国高工では珍しいことであった．

池内　本（物　　理　教授）理学博士　博士論文　短波長の等質X線より空気に生ずるピーター線について

柏木一三（応用化学　教授）理学博士　〃　フルフラル誘導体の研究

冨山　保（電気化学　講師）理学博士　〃　キザントゲン酸の電離恒数とその加里塩の加水分解について

なお安川数太郎（数学教授）も昭和3年ロンドン大学よりDoctor of Scienceの称号を受けた．

4. 荒木講師　世界一周競争に

荒木講師は，時事新報主催の世界一周競争選手志願者370名中より選ばれ，東行選手として昭和3年4月4日，桜咲く祖国を鈴木校長らの見送りを受けて勇躍出発．ニューヨーク，ロンドン，パリ，ベルリン，モスクワの5大都市を通過し，所要時間33日16時33分29秒の世界的新記録で5月10日帰日，勝利の栄冠を得た．（横浜工業会誌 No. 3-1）

5. 柏木教授　若くして逝く

応化教授，理学博士　柏木一三は　昭和3年4月30日，脳膜炎のため死去した．享年38歳．

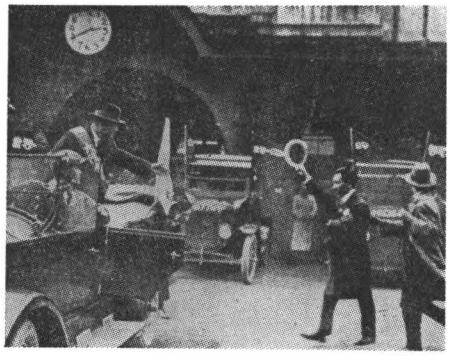
明治24年10月7日東京府下千駄ケ谷に生れ，青山学院中等部，第一高等学校を経て，東京帝国大学理科大学化学科入学，大正5年7月卒業，大学院へ進む．大正9年本校開始と共に教授として迎えられる．この間大正7年　米，英，仏，瑞　留学，同9年10月30日帰朝．

昭和3年3月3日理学博士となる．英，独，仏語に堪能で，人格高潔，学を好む人であった．5月4日，本校において告別式が行なわれた．

6. 第6回卒業式

第6回卒業式は昭和3年3月15日午後3時30分より本校講堂で行なわれた．

機械40，応化36，電化36，建築32，他に応化修業 1，機械選科 1，合計146名で，建築学科はこの年初めて卒業生を出した．校長式辞においてもこの点について述べている．なおこの日鎌田枢密顧問官が来臨，講演を行なった．



荒木選手出発

柏木教授

なおどこの学校でも卒業式は午前ときまったものであったが，本校ではこの年から午後3時30分とした．このことについては，当時の横浜貿易新報で「鈴木校長一流の奇抜な卒業式　けふ午後3時30分から」として次の通り記している．

『従来卒業式と言えば午前と決ったものだが，それが午後となり，その上横浜高工の自慢の学生オーケストラ団が君ケ代の国歌並に「希望の光うららかに」の校歌を演奏，猶又来賓には三校々章に型どった菓子に「三体一心」と表書した記念の御土産を贈るなど卒業式の定石は散々に破られたわけである．右につき鈴木校長は「本校の来賓には都市の名士千余名を招待したが，これらの方々はいづれも多忙であるから午前に挙式して一日丸つぶれとなっては甚だ御気の毒であり，又時間経済から言っても大損失であるが，午後にすればひと仕事をして帰宅までの間を利用し得るので都合がよい」と語った．』

学校長　告辞

……本校は今や内外の経営順調に進み，自由主義の旗色が漸次濃厚を加へつつあることは誠に同慶に堪へぬ次第でございます．……本校の卒業者は本回を以て第6回と致しますが，中で建築学科は本年始めて32名の第1回卒業者を出すものでございます．就きましては貴重な時間でございますが一言申述べることを御許し願ひます．

御承知の通り大震火災によって東京，横浜が忽ち焦土と化しました際に，敢然として起ちました横浜復興会は原富太郎氏を会長とし，災害復興の為めに勇気と熱心，其意気は天を衝くの概を示したのでありました．今猶当時を想起致しましても其壮烈なるに血湧き肉躍るものがございます．

然して我が横浜復興会は大正12年の10月16日に工業部会を開きまして我横浜高工の復旧を速かにし，既設三科の外に土木，建築の両科を増設すべきことを議決致しました．又続いて総会に提出してこれ又議決致しました．この決議は時の岡野文部大臣に上申しましたところ，この議が容れられまして大蔵省に廻付されましたが，其後迂余曲折を経まして両科の内建築の一科のみを大正14年4月より開設さるるに至りました．此れ全く原，井坂，中村，平沼，石塚，出口等諸氏の異常なる努力がこの結果となったものであります．この記憶すべき建築科の第1回卒業者を出しますことは誠に感慨の深いものでございます．同時に産みの親たる横浜復興会に満腔の謝意を表するものでございます．又横浜復興会に於かれても定めて御満足の事と察するのであります．

私思ひまするに，一国の文化はどうしても其国の有する芸術によって批判さる可きものと考へるのであります．一国芸術のうち最も重きをなすものは建築でございましょう．建築は芸術の最も大にして，最も秀でたるものと言ふことが出来ましょう．

然らば何故に芸術は重んぜられるかと申しますとそれは一々人間の工夫，創作によって出来るものだからであります．これ芸術が一国文化の上に重きをなす所以でございます．更にこの芸術上に於て建築が重きをなす所以は，その時代々々，その社会々々の各相は建築によって後世に残されるからでございます．即ち建築は文化に芸術に必須のものと言はねばなりません．

文化を形造るものは建築の外に発見，発明等の要素があります．例へて申しますと現代文化の表現と致しましては自動車，飛行機，ラヂオ等はいずれもそれであります．然し自動車，飛行機，ラヂオを持つもの必ずしも文化国であり，文化人であるとは申されません．現に之等の諸機械は我国にも沢山あります．然らば我国の文化であるかと申しますと，遺憾ながら只だ持っていると言ふ丈けであり，他所のものを使用していると言ふ丈けであって決して我国の文化とは申されないのであります．何んとなれば只だあると言ふ点から言ひますれば，馬来半島にも，爪哇にも，スマトラにも，ボルネオにも，セレベスにもあるのであります．故に其国の文化とするには其国の発明であり創作であり，機械芸術を以って作り上げたものでなければなりません．

我国は世界の一等国と誇り，三大強国と誇って

います．何故一等国であり，三大国であるかと申しますと，それは軍備の点に於て偉いと言ふ丈けでありまして，文化の点から申しますと誠にお恥しい次第でございます．我国は文化の点から申しますと常に債務国の立場にありまして曾て債権国とはなり得ないのでございます．果して然りと致しますれば我国は後世文化史上に一等国として，将た三大国たりとして歴史を残すことが出来ましょうか甚だ寒心に堪へない次第でございます．

私どもはどうかして文化の債務国から脱して債権国とならねばなりません．それには我国民が奮起一番，その償却に任ぜねばなりますまい．この意味で本校建築科はその義務を負担し，其義務を果したいと思ふのでございます．本校の各科は単に建築科に限らず機械工学科にしろ，応用化学科にしろ，電気化学科にしろいづれも同じ精神を以って教へ，学んでいるのでありまして工業国家奉仕の実を挙ぐることを眼目と致しているのでございます．この点は本校各科のみならず三体一心でありまする，商工実習，工業専修両校に於ても同様であります．3校は斯くして所謂打って一丸となり文化促進の第一線上に立つことに努めているのでございます．

今日の式日に当りまして我々3校はこの精神の貫徹に精進するものであることを私から社会に宣言致します．……

7. 御大典と本校

昭和3年11月10日，天皇は京都において即位の大礼をあげられ，国をあげて奉祝した．

本校では鈴木校長がこの大典に参列の栄に浴した．校長は11月7日小林書記を帯同上京，11月10日賢所大前の儀，同日午後紫宸殿の儀，11日賢所御神楽の儀，17日大餐夜宴の儀に列し19日帰校した．

本校では奉祝のため校庭に菊の花壇を5カ所に作り一般に公開，見物多数でにぎわった．

11月10日の御大礼の当日は，全校職員生徒は本校講堂に集合，御大礼奉祝の儀挙式，同夜は市主催の奉祝行事に参加，14台の花車，牛車を連ね提灯(ちょうちん)行列で市内を練った．

8. 校　旗

昭和3年12月15日東京，神奈川，千葉，山梨，埼玉1府4県の諸団体親閲式が二重橋前で行なわれたが，本校では3年生全員が参列した．その時までは本校にはきまった校旗がなかったので，いそぎ仮校旗として幟（のぼり）式のものに本校名を大書したものを持参した．昭和3,4年の学校一覧に「3年生全員二重橋前に於て御親閲の光栄に浴す．背嚢，外被の武装と幟式の新校旗異彩を放つ」とある．

この幟式の校旗は，地はモスリンで文字は当時庶務課主任であった小林長之助の筆である．

その後昭和5年ごろ，および昭和7年ごろにも新校旗制定の話が出，図案までできまったが実現せず，この幟式のものが昭和24年まで正式の校旗として用いられた．

この幟式の校旗は他校では見られぬ純日本式のもので鈴木校長のお気に入りであり，かつ桃太郎の校旗と通称され卒業生，在校生も非常な愛着を持っていた．

この校旗は現在も学校にたいせつに保管されている．

9. 第7回卒業式

昭和4年3月15日第7回卒業式を挙行した．機械36，応化39，電化37，建築29，計141名であった．来賓として高田早苗早大総長が講演を行なった．高田総長は本校創立の際の文部大臣である．鈴木校長は式辞において本校の校風おもむろに興ると述べた．

学校長　告辞

……我々の学校は創立以来自由啓発と無処罰とを旗印として奮闘して参りました．御承知の通3校夫々国立，県立，市立と其所管は異って居りますが，全く同じ主義主張の下に所謂三体一心となり努力し来ったのであります．

私が考へますに，学校の経営として最も努力を要することは校風の樹立にありと思ひます．古人の句に「清風徐に来つて，水波起らず」とあります．校風も徐々に吹き興すと波瀾を生ずることがなかろうと存じまして，急がずに同僚と一致して不断の努力を続け爾来9年となります．9年の歳月は短いとは言へませぬが，学校の生命から見れば実に短日月でありませう．然して此9年の間に朧げながら，校風の或る形が生じて来つゝあるのではなからうかと想像せられ喜びに堪へぬ次第であります．

吾校の標榜する自由啓発は，校風の根元とならなければならぬと考へます．然して其意義の根柢には創作力の動きが潜在して居ると言ふことは，最も大切なる点であります．人間の職業は広い意味に於て凡て芸術的であります．芸術は創作を求めて邁進するものであります．

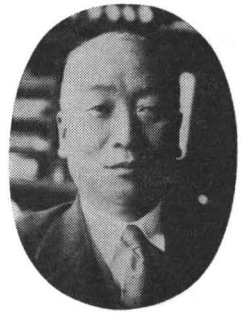
凡そ国民が創作力を失ふときは，其国家の帰趨する処は，国際間に於て労働国になるより外ないことゝ存じます．其大切なる創作力は自由啓発の洗礼を受けたるものにより，其大成が期せらるゝものであると考へます．短を棄て長を採るといふことを金科玉条と考へる如きは，自由啓発の洗礼を受けざるものゝ言であります．

此点に於て吾校の最も喜ぶべきことは，昨年以来教授及講師中より，学位論文の提出により5人の理学博士を輩出したことゝ，又実習学校より有為の教育者を出したることゝであります．勿論之等の方々が，其天禀の素質と努力とによりて贏得たる美しき賜でありますが，何れも創作の途を辿り行くもので，自由啓発の学風に陸離たる光彩を添へたるものと信じ，欣快に堪へざる処であります．人或は質実剛健の青年を養成するとか，勤勉努力の人を作るとか申しますが，人間はしかく飴細工かしんこ細工の様に思ふ儘の人物といふものを養成せらるゝものでありませうか．私共の微力に於て其困難なることを能く承知いたして居ります．

学校教育の第一義は訓練にあらずして自覚にあり，責任に直面して自覚する，研究に対して自覚する．困難に対して自覚せしむるにあります．然して自覚の要諦は自由啓発の学風を樹立するにありと信じて居ります．其適切なる例を示し下さった同僚に対して私は深甚の謝意を表し，且つ吾校を祝福して居る次第であります．

此等の人々は教育界の勇将であります．又自由啓発の学風の下にある者は，皆勇将ならざるはなしと信じます．勇将の下に弱卒なしとせば此の如き教師の訓育を受けたる我青年は決して弱卒ではなく，何れも一騎当千の若武者だと信じます．只今此等青年470人を来賓各位並に社会に御紹介申上げることは，我校の最も快心と致すところで御座います．何卒彼等の前途に多大の御同情と御後援を願ひ上げます……．

猶又今日高田閣下を御迎へ申上げることは，更に重大なる意味があります．それは我校の創立と閣下との関係であります．即ち大正5年我校の創立に決裁を与へられたる時の文部大臣は閣下であったからであります．然して最初に其献策をなしたる人は当市の中村房次郎氏で，同氏も今日御来場を辱ふしたる次第でありまして，此の実に因縁深き御両氏が御揃ひで本日御臨場を得ましたことを深く光栄と致しまして特に感謝の意を表する次第であります．



川原教授

10. 造船工学科の新設

昭和4年3月30日，文部省令第10号を以て本校に造船工学科を新設することに決まった．よって生徒を募集し同年4月10日より造船工学科の授業を開始した．

本校に造船工学科が開設されるに至ったわけは次の経過があった．昭和4年度に東京，大阪両高工が大学に昇格してので，両校がもっていた各科を全国の高工に案配した．その結果，造船工学科は大阪より神戸高工に移ることになっていたが，神戸では土木科を希望したので，造船工学科は全国高工から姿を消す形勢となった．このとき鈴木校長は造船工学科は関東造船界の中心である当横浜に置くべきだと決意し，当校に新設されんことを要望した．こうして当校に昭和4年度より造船工学科が新設され，高等工業学校では造船工学科を有するただ一つの学校となった．

教授方針としては基礎的学理と実習および製図等に重きを置き，学校卒業後造船所に入社してもすぐ実務のできる優秀なエンジニアを養成するように心がけた．

なお特筆すべきことは，造船学と航空学とは共通点が多いから，卒業生が航空機製作等もできるよう意を用いたことであった．たとえば航空力学等を講じたことなど航空機が将来急速に発達し国防上も重要なものになるという「鈴木校長の先見の明」からで，これは将来当校に航空機科が増設される基となるものであった．

昭和5年刊行の自由教育10年に，鈴木校長は次の通り航空機の重要なことを述べている．

「何れの事業も国家的事業だといえばいえない事はないかも知れないが，特に造船業，航空機製作業は直接国防に関係するものであって，政府はこれら工業の発達すると否とは単に工業の盛衰に関するのみならず，国防上国家の安全を期する上よりして優秀なる技術の進歩発達を促しておる次第である．従ってこれら工業の進歩発達のためには種々の方法を以て奨励している．……かく国家的使命を帯び工業の中堅となるべき優秀技術者の養成を任務とするため当科は相当重大性を持っているものである．」

なお造船工学科設置の経緯については，この科の第1回卒業生を出した昭和7年3月の第10回卒業式のときの鈴木校長式辞を参照されたい．

なお造船工学科の学科課程と教授陣は次の通りであった．

造船工学科

昭和4年3月30日文部省令第10号ヲ以テ本校規程中ヲ改正造船工学科ヲ増設セラレ同時ニ学科課程ヲ制定サレル

学科目＼学年	第1学年毎週教授時数			第2学年毎週教授時数			第3学年毎週教授時数		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
修身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体育	4	4	4	4	4	4	4	4	4
外国語	5	5	5	4	4	4	2	2	2
数学	6	5	4	3	3	3			
物理学	4	4	4						
物理実験									
応用力学	3	3	3						
材料強弱学				3	3	3			
木鋼船構造	2	1	1	3	3	3	1	1	1
船舶算法	1	1	1						
造船幾何学				1	1	1			
艤装	1	1	1	2	2	2	1	1	1
軍艦構造及艤装				1	1	1			
船舶復原性				1	1				
船舶抵抗推進及旋回						1	1		
船舶動揺及振動								1	1
造船所論及見積							3	3	3
舶用機関				2	2	2			
電気工学				1	1	1			
航空学 構造							1	1	1
航空学 理論							1	1	1
船舶法規							1	1	1
航海運用術							1	1	1
計画及製図	4	16	17	11	11	2	22	22	22
機関計画及製図				4	4	3			
工場実習 船舶	10								
工場実習 機関						10			
工業経済							1	1	1
工場経営及建築							1	1	1
合計	41	41	41	41	41	41	41	41	41

物理実験ハ第1学年ニ於テ隔週3時間トシ計画及製図時間内ニ於テ之ヲ課ス

昭和4年造船工学科

教授	木鋼船構造，艤装，製図	学科事務取扱 工学士	川原　五郎
助教授	船舶算法，製図	工学士	寺沢　一雄
助教授	数学，応用力学	理学士	遠藤　重郎

鈴木校長の先見の明

このことについては，昭和7年造船1期卒業現本学教授吉岡勲が，煙洲残筆（昭和34年刊行）の中で「鈴木先生への傾斜」と題して，次のように述べている．

造船工学科というのは，先生の横浜高工での5人息子の末子でして昭和4年3月の生れです．あるいは里子のようなものと言えるかも知れません．というわけは，在学中いく度か先生からいきさつをおききしたことですが，今ではこういうことを聞く機会も少ないと思いますので披露しておきましょう．

昭和4年3月大阪高工が工業大学に昇格するについて，文部省は造船科を神戸高工に新設しようとしたのですが，当時は経済不況に入った頃で卒業生の就職が困難であったため，神戸ではこれを断わり引き受け手がなくなりました．それでは専門学校に造船科がなくなってしまうのでまことに惜しい．それに造船工業のような大量生産方式にのりにくいものは，輸出工業として日本の国情に合っている．幸いに横浜は当時日本第一の貿易港であったので，立地条件もすこぶるよいから，こちらで引きうけようと先生が申し出られたものだったようです．これには一つの条件がついていて，他の学校には設けないという約束が文部省との間にできていたということでした．以来30年先生の先見は見事に当たって，造船工業は今や外貨獲得では断然他を引き離して首位に立つようにさえなり，我々の造船工学科の卒業生はすでに900人を越えその大部分が業界の中核となって，全国各地で働いております．しかし，文部省はあの約束を守らないで，その後3校に増設しました．……

11. 外人教師 赴任

昭和4年5月22日付けで雇外国人教師ドクトル・エンジニア　アルフレッド・レーゲンスブルゲルが着任した．当時発行の「高工教育」は次の通り「話のたね」として記している．

「横浜高工では今度独逸カールスルーへ高等工業学校教授，ドクトル　アルフレッド・レーゲンスブルゲル氏を招聘することに内約成立したが，来春来朝の運びとなるらしい．同氏は宗教上の立場から土曜は筋肉労働例へば（字を書くことや実験等）に服しないといふことを条件としているのが一寸変つている．ペーパーも随分出している新進学者であるが授業は物理，化学の実験であるそうだ.」

なお，ドクトル　アルフレッド・レーゲンスブルゲルは昭和14年3月31日まで在任した．

12. 工業教員養成所の設置

昭和4年4月1日勅令第40号を以て文部省直轄学校官制に改正を加え，本校に工業教員養成所が付設された．本校教授鈴木京平が主事，同三井透が教授に選任された．

入学者は機械7，応化7，電化4，建築7，計25名であった．（養成所に造船工学科はない）

特典として「入学検定料の免除」「無月謝」でなお生徒の半数には毎月25円ずつの手当てが出た．入学資格も一般専門学校入学資格者のほかに師範学校卒業者，小学校本科正教員免状所有者，実業学校卒業者にも入学資格が与えられた．

附設工業教員養成所規程

第1章　総　　則

第1条　本所ハ実業学校教員養成規程ニ拠リ工業ニ関スル学校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スルヲ以テ目的トス

第2条　本所ノ学科ハ機械工学科，応用化学科，電気化学科，及建築学科トス

第3条　各学科ノ修業年限ハ3箇年トス

第2章　学　科　課　程

第4条　各学年ノ学科目及其ノ程度ハ横浜高等工業学校当該学課程ヲ適用シ更ニ実習時間内若クハ授業定時間外ニ於テ左ノ学科目ヲ課ス

学科目＼学年	第1学年			第2学年			第3学年		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
心理学	2	2	2						
論理学	2	2	2						
教育史				2	2	2			
教育学				2	2	2			
教授法							2	2	2
学校衛生							3		
教育法令								3	
職業指導				1	1	1			
授業練習									3
合計	4	4	4	5	5	5	5	5	5

第3章　入学及在学

第5条　各学科第1学年ニ入学ヲ許スヘキ者ハ品行方正志望鞏固ニシテ左ノ各号ノ一ニ該当シ且入学検定及身体検査ニ合格シタル者タルヘシ

1. 師範学校ヲ卒業シタル者
2. 中学校ヲ卒業シタル者
3. 専門学校入学者検定規程ニ拠ル試験検定合格者
4. 実業学校ヲ卒業シタル者

但シ尋常小学校卒業程度ヲ以テ入学資格トスル修業年限5年，高等小学校卒業程度ヲ以テ入学資格トスル修業年限3年若クハ之ト同等以上ノ学校ヲ卒業シタル者

5. 前号ニ該当スル者ノ外専門学校入学者検定規程ニ依リ一般専門学校ノ入学ニ関シ無試験検定ノ指定ヲ受ケタル者

第6条　前条第1第2第4及第5号ニ該当スル学校在学者ニシテ当該学校長ヨリ該学年3月末日マテニ卒業スヘキ見込アリト認定セラレタル者ハ其証明ヲ以テ入学ヲ願出ツルコトヲ得

前項入学志願者ハ其学校ヲ卒業シタルトキハ直ニ卒業証明書ヲ提出スヘシ

但シ卒業試験ニ不合格ノ者ニハ入学ヲ許サス

第7条　入学ヲ出願スル者ハ入学願書ニ写真（志願前6箇月以内ニ撮影シタル脱帽半身手札形）ヲ添ヘ学校長ニ差出スヘシ

第8条　左ノ各号ノ一ニ該当スル者ハ其学籍ヲ除ク

1. 成業ノ見込ナシト認メタル者
2. 課業ニ怠慢ナリト認メタル者
3. 正当ノ理由ナクシテ引続キ30日以上欠席シタル者

第9条　本所ハ入学検定料及授業料ヲ徴収セス

第4章　義　　務

第10条　本所卒業者ハ大正4年文部省令第7号実業学校教員養成規程第2条ノ義務ヲ負フヘキモノトス

第11号　大正4年文部省令第7号実業学校教員養成規程第5条各号ノ一ニ該当スルトキハ授業費及学費ヲ償還スヘキモノトス

但シ文部大臣ハ事情ヲ酌量シテ其全部又ハ一部ノ償還ヲ免除スルコトアルヘシ

附　　則

第12条　横浜高等工業学校規則第6条乃至第9条第12条第13条第15条乃至第21条ノ2第23条乃至第26条第47条乃至第55条ハ之ヲ本所ニ適用ス

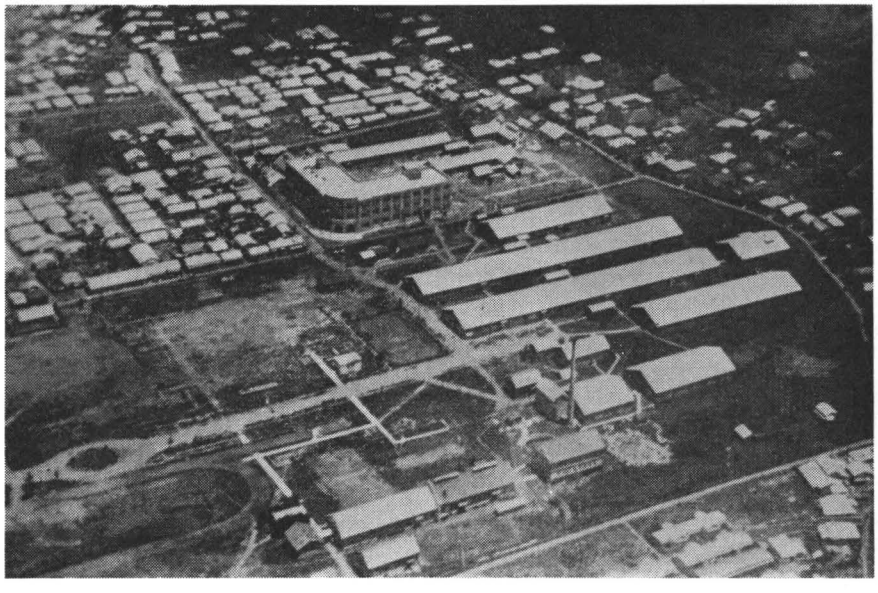
13. 対高商野球戦　中止となる

大正14年に開始された対横浜高商野球戦は同15年第２回戦を行ない，両校応援団の熱狂に加え両校ファンの騒ぎはついに横浜名物の一つとなり，ハマの早慶戦と称された．昭和２年の第３回は新山下町グラウンドで７月10日行なわれ，1-0 で本校が勝ったが，諒闇(りょうあん)中であったので，太鼓などの鳴り物は禁止され応援も比較的静かであった．翌３年は滝頭球場で７月１日挙行，3-4 で本校が敗れた．昭和４年に至り，高商側から試合を実力本位にやるため，３回戦としたいとの申入れがあり，両校の意見が対立し一時中止となり，同５年にも妥協点に達しなかった．こうして２カ年間試合は中絶し定期戦は見られなかった．なお本件については本節終わりの校友会野球部の項を参照されたい．

14. 航空研究会

本校航空研究会の発会式は昭和５年４月26日，本校教官食堂で開催された．会長造船工学科教授川原五郎のあいさつの後，田中館博士の講演があった．本研究会は日本学生航空連盟の下部組織で，横浜ではこの時点では本校と関東学院が加盟していた．

なお本校航空研究会は操縦部と研究部の２部に分かれ，前者は操縦を専門に実施し，後者は機体の分解組立て，発動機の分解組立て，およびこれらの実験，電気系統，照明，通信，パラシュート等に各方面の技術的研究を行なうものであった．



飛行機から見た全景（昭和２年ごろ）

15. 第8回卒業式

昭和5年3月15日，第8回卒業式が例年の通り3校合同で挙行された．本校卒業生は機械35，応化34，電化35，建築27，他に修業 3，選科 1，合計135名であった．

鈴木校長はこの日告辞の中で，本校が今年1月19日で創立満10周年を迎えたことを喜び，この10年を1期とし3校の職員子弟とさらに一段の勇気をもって今後にまい進したいと述べた．なお当日は来賓として桜井帝国学士院長が特別講演を行なった．

学校長 告辞

……次に我校も今年1月19日を以て，創立満10ヶ年の経過を見ました．大震火災以来，既に8ヶ年，建築，造船の両科を加へ，其内容は拡大いたしましたが，全国に比類なき，破れ小屋で，努力して居ります．満10ヶ年の祝賀会を催し，盛儀を極めたきは，素より願ふ処でありますが，一方国家経済の難局より，他方我復興建築の未だ着手だに至りません故に，此満10年を迎ふるに当り何等特別の祝賀を催さず，一意国家奉仕の前途を見かけて，勇往邁進いたす許りで又一同の快心とする処であります．只商工実習学校に於きましては，此機会を以て，創立の資金を寄附したる，故安部幸兵衛氏を記念する為め，記念事業会を興し，本年11月1日の学校創立記念祭を卜し，其記念事業を完成したいと，只今奔走中で，既に其事業を世間に発表してあります．御承知の事と存じますが，何分の御後援，御賛同を願ひ上げます．

10年の歳月，人生としては決して短きにあらず．久しきに亘れば人情又自然緊張の意気を消失するの憂がある．自由教育又自覚主義の受難を思はざるに非らず．併し自由教育も，幾多の受難と試練を経て能く達成すべきであると覚悟し，此10年を1期とし3校の職員子弟と更始一新の勇気を以て.今後に処したい覚悟を持って居ります…….

16. 創立10周年を迎える そのころの職員

昭和5年1月19日をもって本校はここに早くも創立10周年を迎えた．この間関東大震災に遭遇するなど，まことに風荒るる10年であった．不景気のため震災後8年を経たにかかわらず文部省の予算がとれず，未だにその当時のバラック建ての破れ教室で我慢を余儀なくされ，荒廃の様子は全国一と称されたほどであった．

しかしながら鈴木校長はじめ教職員先輩，学生一体となっていわゆる自由啓発主義の校風を徐(おもむ)ろに興し，横浜高工の名は，全国に知られるに至った．

本校は当初の3科のほかに建築，造船の2科を加え，教職員，生徒数もふえ一層の充実ぶりを示した．このころの本校教職員は次の通りであった．

職　員

学校長　理学士　鈴木　達治

◇機械工学科

教　授　学科事務取扱　工学博士　遠藤政直
バツチエラー，オブ，サイエンス（マサチウセツツ，インスチチユート，オブ・テクノロジー）
水力学，水力機械，空気機械，実験工学，実験，実習，製図

教　授　河合　匡
材料強弱学，機械設計，金属材料，実験，製図

教　授　山下誠太郎
マスター，オブ，サイエンス，イン，エンヂニアリング（ミシガン大学）
応用力学，熱力学，内燃機関，実験，製図

教　授　工学士　岡村　幸雄
化学機械，機械学，製図

教　授　工学士　山田　嘉久
蒸汽機関，製図，実験

講　師　工学士　徳永　晋作

汽関車

助教授　斎藤　輝治
水力実験，工作法，実習

助教授　鈴木　正次
運搬機械，製図

雇　4名

工　手　6名

◇応用化学科

教　授　理学士　津田　幹夫
製造化学通論，酸アルカリ肥料，化学実験

教　授　理学士　今井　行雄
無機化学，分析化学，燃料化学，化学実験

教　授　堀江不器雄
油脂工業，熱帯特産物化学工業，化学実験

教　授　学科事務取扱　橋本　重隆
化学通論，理論化学，繊維素工業，実験

教　授　理学士　鈴木　京平
皮革工業，化学実験

講　師　沢　全雄
砂糖工業

講　師　理学士　小山　亮清
有機化学，一般化学，実験

雇外国人教師　ドクトル，エンジニア
アルフレツドレーゲンスブルゲル
化学実験

助教授　阿部　滋弘
有機合成化学，化学実験

助　手　山口　辰男
化学実験

書　記　井奈　薫次

雇　4名

◇電気化学科

教　授　学科事務取扱　理学士　藤村　利常
電炉工業，高温度計及金相学電炉及金相実験

教　授　理学士　横山　盛彰
物理化学，有機電気化学，電池及蓄電池工業

教　授　藤川由太郎
マスター，オブ，エレクトリカル，エンジニアリング（コーネル大学）
電気工学，実験

教　授　工学士　竹内強一郎
マスター，オブ，サイエンス（ダウトマウス大学）
電気工学，電気実験

教　授　工学士　飯沼　義雄
（在外研究中）

講　師　理学博士　理学士　富山　保
電解工業，理論電気化学

助教授　河村　文一
分析化学

助教授　中島　正己
電気化学実験，湿式冶金

講　師　正木　康作
バツチエラー，オブ，サイエンス（ユタ大学）
製造化学概論，実験

講　師　小林　鼎
電解化学

雇　6名

工　手　1名

◇建築学科

教　授　フランス政府公認建築士　中村　順平
建築学，建築設計，建築図学，木炭写生

教　授　学科事務取扱　佐藤　好
応用力学，材料強弱，鉄骨構造，耐震構造

講　師　工学博士　阿部美樹志
鉄筋コンクリート構造

講　師　文学士　斎藤茂三郎
建築史

講　師　工学士　森井　健介
建築構造，建築材料

講　師　工学士　山田七五郎
旋工法

助教授　伊藤　三郎
幾何図学，配景図学，測量

講　師　渡辺　郁一
塑造

雇　4名

◇造船工学科

教　授　学科事務取扱　工学士　川原　五郎
木鋼船構造，艤装，製図

講　師　工学士　福田　弘一

講　師　海軍造兵少佐　矢ヶ崎正経

助教授　工学士　寺沢　一雄

船舶算法，製図
助教授　理学士　遠藤　重郎
数学，応用力学
講　師　工学士　近藤　政市
工　手　2名

◇基礎学科

教　授　理学博士　理学士　安川数太郎
ドクター，オブ，サイエンス（ロンドン大学）
数学
教　授　理学博士　理学士　池内　本
学科事務取扱
物理，物理実験
教　授　理学士　渡辺　義勝
数学
教　授　生徒主事　文学士　大西　友太
修身，英語
教　授　理学士　加藤　述之
物理実験
教　授　理学士　木戸　潔
物理，物理実験，数学
教　授　英語，独語　文学士　三井　透
教　授　竹内　秀雄
英語
講　師　法学博士　法学士　岡　実
課外講演
講　師　石橋　湛山
経済
講　師　文学士　内藤　濯
仏蘭西語
講　師　文学士　元木　清
独語
助教授　石川　房治
体育
助教授　生徒主事補　本間　淳治
体育
講　師　荒木東一郎
マスター，オブ，サイエンス（オハイオ大学）
工場経営法
講　師　理学士　内田　義信
鉱物
講　師　座間美都治
漢文
嘱　託　大木波之輔
教練
嘱　託　野村洋一郎
数学教室
嘱　託　小菅　義雄
簿記
雇　1名（物理教室）

◇配属将校

歩兵第49聯隊附陸軍歩兵中佐　吉野栄一郎

◇庶務課

書　記　主任　小林長之助
雇　3名

◇教務課

教　授（兼）　主任　安川数太郎
講　師　横地捨次郎
助教授　石川　房治
助教授　本間　淳治
書　記　鈴木　快市
嘱　託　吉田　昌輿
雇　1名

◇会計課

書　記　主任　大山　春翠
書　記　寺沢　亀吉
書　記（兼）　鈴木　快市
雇　5名

◇図書課

教　授（兼）　主任　三井　透
書　記　長尾和肥虎
雇　2名

◇事務嘱託

波多野重太郎

◇嘱託教師

柔　道　矢部　正作
剣　道　飲島四男之助
弓　道　浦上　栄

◇学校医

医学博士　加藤　耕蔵

○附設工業教員養成所

主　事　教授　鈴木　京平
教　授　文学士　三井　透
心理学，論理学

17. 10周年記念式

昭和5年11月1日開校記念日を迎え，創立10周年記念式が午前9時より本校講堂で挙行された．式は国歌合唱にはじまり，ついで鈴木校長のあいさつ，職員代表として遠藤教授の祝辞，生徒代表として仲谷勇（機械昭6卒）の祝辞があった．そのあとで引きつづき，10年勤続者下記13名に記念品が贈呈され，代表者安川教授の謝辞があり，校歌合唱，校長の万歳三唱でめでたく式を終わった．

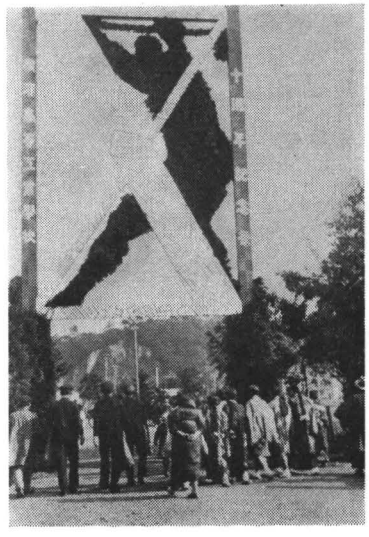
10年以上勤続者

任命年月日	勤続年月数	官職	氏　名	任命年月日	勤続年月数	官職	氏　名
大正 9. 1.19	10年9.5月	校長	鈴木　達治	大正 9. 3.15	10年7.5月	教授	安川数太郎
同 1.28	10年9月	書記	大山　春翠	同 5.31	10年5月	〃	池内　本
同 1.28	〃	〃	小林長之助	同 7.31	10年3月	講師	冨山　保
同 1.31	〃	教授	堀江不器雄	同 8.25	10年2月	工手	山口　恵一
同 3. 1	10年8月	小使	山口　真造	同 9. 1	10年1月	〃	土村庄次郎
同 3. 3	〃	教授	遠藤　政直	同 10.10	10年0.5月	職工	桐山　陽一
				同 10.11	〃	講師	小林　鼎

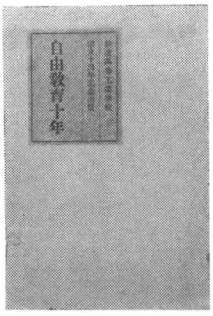
10周年記念祭

記念祭は恒例により菊薫る11月1日から3日まで学園を一般に公開してにぎやかに行なわれた．例年のことであるが記念祭は全く学生の手で自由活発な発想のもとに計画実行された．今年は特に10周年というので学生の力の入れ方も大変なものであった．

安川教授



10周年記念祭



自由教育10年

「自由教育10年」

10周年記念出版として「自由教育10年」が昭和5年10月31日発行された．4.6版 150 ページ．

発刊の序に「満10年と言うと，どこでも御祝ひをするのが普通である．本校でも大いにお祝ひをしたいのであるが，時節柄お祭騒ぎは一切差控へて，何か記念に残るものをと考えて本書を刊行した．」と編者の鈴木校長は述べている．本書が刊行されるや，全国新聞紙はこれを紹介し，各方面に非常な反響を呼んだ．

18. そのころの寮の費用

昭和5,6年浜口内閣は緊縮財政を打ち出し，世の中は不景気時代であった．このころ当校寄宿舎の経費は次の通りで，18円30銭(月)というのは，この当時としても緊縮実行の小額と言える．

寮　費	2.00円	修 養 費	.20	その他	.25
食　費	14.00	衛 生 費	.05	計	18.30
水道料	.50	娯楽運動費	.25		
電灯料	.40	懇 親 会 費	.15		

(昭和5年5月調)

19. そのころの軍事教練

大正14年，文部省の方針として学校教練が実施され，それについての本校の見解は前に述べた通りであるが，国土防衛に対する鈴木校長の信念と初代教官歩兵第49連隊付田中忠三郎少佐，2代同連隊付吉野栄一郎中佐の熱心な指導で，学生も積極的に訓練にはげみ，国家の要請にこたえた．訓練は学校内における教練のほかに野外訓練が年中行事として行なわれ，また年一回の査閲には陸軍より中，少将級が査閲官として来校し毎年優秀との講評を受けた．次に昭和3年から5年にかけての教練の一端を記しておく．

◇昭和3年4月24，25日，野外教練のため横須賀へ行軍，軍艦，工廠を見学し下士官集会所で宿泊した．

◇同年5月30，31日，6月1日，野外教練のため習志野に行軍，営舎に宿泊し，軍隊と連合演習の後，騎兵，歩兵両学校および鉄道隊を見学した．

◇同年11月30日，野外教練のため藤沢に行軍し，遊行寺に宿泊，藤沢中学ならびに同町青年訓練所生徒と連合演習を行なった．また同町民のため野外劇，講演，映画を公開した．

◇昭和4年1月28日，教練査閲のため小川第1旅団長来校，雪中分列式を行ない偉観であった．
◇同年5月23日より25日まで，2年生は箱根，富士裾野方面で野外演習を行なった．
◇同年7月6日より8日まで，3年生は横須賀より軍艦長門に便乗，清水港まで航行，野外演習を行なった．
◇同年10月10日，1年生は千葉県習志野，四街道方面へ行軍した．
◇昭和5年4月28日，第3年生全員は海事思想体験のため，横須賀軍港，海軍工廠および海空博覧会を見学した．
◇同年5月末，2年生は東大久保の陸軍技術本部を見学の後，砲兵第1連隊で4日間にわたり野外演習をおこない兵営生活を体験した．
◇同年11月11日より3日間，3年生は相模平野で行なわれた佐倉連隊および第3連隊の秋季対抗演習に参加した．
◇同年11月19日より22日まで，1年生は野外教練のため横須賀重砲兵連隊で宿営ならびに三崎回り行軍を行なった．
◇同年12月10日，校庭において昭和5年度教練査閲があった．査閲官は梅津第1旅団長で真崎第1師団長が臨席した．梅津査閲官の講評は「真剣味にあふれ，全般の成績極めて優良」とあった．

これら訓練は学生にとってはきびしさもさることながら，在校3年間の楽しい思い出として運動会や記念祭などと共に忘れ得ぬものの一つとして卒業記念アルバムの一葉を飾っていた．

20. 鈴木校長 文部省審議会委員に

鈴木校長は昭和2年12月19日付けで文部省より文政審議会委員に，同年4月末，体育・運動審議会委員にそれぞれ任命された．

21. 横浜工業会 社団法人となる

本校卒業生によって組織されている横浜工業会については前述したが，昭和3年11月4日の第3回総会で，これを社団法人に改めることを決議，同4年11月3日の第4回総会で社団法人の定款を可決，同5年5月設立認可となり，同年6月2日登記を完了，ここに「社団法人横浜工業会」が発足した．

許可書

商工省指令工第一四二六号

社団法人横浜工業会

設立者 阿部滋弘 外十三名

昭和五年一月二十七日附申請社団法人横浜工業会設立ノ件許可ス

昭和五年五月九日

商工大臣 俵孫一 印

名誉会長　鈴木達治（学校長）初代理事長　斎藤輝治(機1期)で，大阪，台湾，名古屋の3支部が置かれた．昭和5年5月現在，正会員（卒業生）数957名，死亡34名，現在数923名であった．なお正会員分布状態は東京284名，神奈川235名，大阪55名，兵庫32名，台湾25名等でその他全国各地に会員があった．

社団法人　横浜工業会定款

第1章　総　　則

第1条　本会ハ社団法人横浜工業会ト称ス

第2条　本会ノ主タル事務所ハ横浜市中区大岡町740番地横浜高等工業学校内ニ置ク

第2章　目的及事業

第3条　本会ハ工業ノ進歩発達ヲ図リ併セテ会員相互ノ親睦ヲ図ルヲ以テ目的トス

第4条　本会ハ第3条ノ目的ヲ達スル為メ左ノ事業ヲ行フ

1. 工業智識ノ普及ニ関スル施設
2. 工業ニ関スル学理及実際ノ調査研究ヲナシ且ツ之ヲ発表スルコト
3. 各工業団体トノ連絡ニ関スル事業
4. 会員相互ノ親睦並ニ横浜高等工業学校トノ連絡ニ関スル施設
5. 海外発展ニ資スル為メノ施設
6. 其他必要ト認ムル諸般ノ事業

第3章　会　　員

第5条　会員ヲ分チテ左ノ3種トス

1. 正会員
2. 賛助会員
3. 特別会員

第6条　正会員ハ左ノ資格ノ1ヲ備フルモノトス

1. 横浜高等工業学校卒業者及修業者
2. 同校附設工業教員養成所卒業者
3. 同校ニ在学セシモノニシテ評議員会ノ承認ヲ経タルヲ者

第7条　賛助会員ハ本会ノ主旨ニ賛同シ会費トシテ一時ニ金100円以上ヲ納入シタル者又ハ物品其他ノ寄贈ニ依リ本会ノ事業ヲ援助シタルモノニシテ評議員会ノ承認ヲ経タル者

第8条　特別会員ハ左ノ各号ニ該当シ評議員会ノ推薦ニ依ルモノトシ会費納入ノ義務ナキモノトス

1. 横浜高等工業学校職員並ニ職員タリシ者
2. 同校附設工業教員養成所職員並ニ職員タリシ者

第9条　正会員ハ会費トシテ年額金6円ヲ負担スルコトヲ要ス

第10条　入会又ハ退会セントスルモノハ其旨本会ニ届出ツヘシ

第11条　会員ニシテ定款又ハ総会ノ決議ニ違反シタル者及本会ノ名誉ヲ毀損シタル者ハ評議員会ノ決議ヲ経テ除名スルコトアルヘシ

第12条　会員退会，死亡又ハ除名セラルルモ既納ノ会費其ノ他ノ返還ヲ求ムルコトヲ得ス

第13条　本社団ニ名誉会長及名誉会員ヲ置クコトヲ得

名誉会長及名誉会員ハ工業ノ発達ニ関シ功績顕著ナルモノ又ハ学識名望アルモノヨリ総会ノ決議ヲ以テ推薦シ会費納入ノ義務ナキモノトス

第4章　役　　員

第14条　本会ニ左ノ役員ヲ置ク

1. 理　事　15名以内
1. 監　事　5名以内
1. 評議員　120名以内

第15条　評議員ハ会員総会ニ於テ正会員中ヨリ之ヲ選挙ス

理事又ハ監事ハ評議員会ニ於テ正会員中ヨリ選挙ス

前項ノ規定ニヨリ理事又ハ監事ニ選挙セラレタル評議員ハ評議員ノ資格ヲ失フ

理事ハ互選ヲ以テ理事長1名常務理事若干名ヲ定ム

第16条　評議員ハ理事長ノ諮詢ニ応シ重要ナル会務ヲ審議ス

理事ハ理事会ニ出席シ重要ナル事務ヲ決議ス

監事ハ民法第59条規定ノ職務ヲ行フモノトス

第17条　理事長ハ本社団ヲ代表シ会員総会，評議員会，理事会ヲ招集シ議長トナリ其ノ決議事項ヲ執行シ会務ヲ統理ス

常務理事ハ理事長ヲ補左シ常務ヲ掌理ス

理事長ヲ故アルトキハ理事長指名ニ依ル理事之ヲ代理ス

第18条　役員ノ任期ハ弐ケ年トシ毎年其ノ半数ヲ改選ス但シ再任ヲ妨ケス
補欠役員ノ任期ハ前任者ノ残期間トス
役員任期満了ノ場合其後任者ノ就任スル迄ハ前任者其職務ヲ行フモノトス

等19条　理事又ハ監事ニ欠員ヲ生シタルトキハ評議員会ニ於テ直チニ補欠選挙ヲ行フ

第20条　評議員ニ欠員ヲ生シタル場合ハ次ノ会員総会迄延期スルコトヲ得

第5章　会　　議

第21条　理事会ハ隔月1回之ヲ開催ス，但シ必要アル場合ハ臨時之ヲ開催スルモノトス
理事会ハ理事3分ノ2以上ノ出席ヲ要シ其ノ決議ハ出席数ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス
可否同数ナルトキハ議長ノ決スル所ニヨル
理事会ハ場合ニ依リ書面決議ノ方法ニ依ルコトヲ得

第22条　評議員会ハ理事長ニ於テ必要ト認メタルトキ之ヲ開キ評議員3分ノ1以上ノ出席ヲ要ス
評議員会ノ決議ハ出席者ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス，可否同数ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル
評議員10名以上又ハ監事ノ請求アリタルトキハ理事長ハ遅滞ナク評議員会ヲ開クコトヲ要ス

第23条　評議員会ノ権限左ノ如シ
1.　総会提出ノ議案ノ審議
1.　事務施行ニ関スル規定ノ議決

第24条　本社団ノ定時総会ハ毎年4月之ヲ開キ前年度事業報告，財産目録，貸借対照表，収支決算ノ承認ヲ経ヘキモノトス
臨時総会ハ理事長又ハ理事会ニ於テ必要ト認メタルトキ，監事又ハ10分ノ1以上ノ会員ヨリ会議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求アリタルトキ之ヲ開ク

第25条　総会ハ会員5分ノ1以上出席スルニ非サレハ議決スルコトヲ得ス

第26条　総会ニ於テハ予メ通告シタル目的事項以外ノ決議ヲ為スコトヲ得ス
総会ノ通知ハ少クトモ10日以前ニ会議ノ目的タル事項ヲ記載シテ会員ニ通知スルコトヲ要ス

第27条　総会ノ決議ハ出席会員ノ過半数ヲ以テ之ヲ為ス可否同数ナルトキハ議長之ヲ決ス
定款改正ノ決議ハ会員3分ノ1以上出席シタル会員総会ニ於テ出席者3分ノ2以上ノ同意アルコトヲ要ス

第28条　会員ハ30名以上ノ賛成ヲ以テ議案ヲ総会ニ提出スルコトヲ得但シ定款変更ノタメニスル議案ハ会員50名以上ノ賛成ヲ以テスルコトヲ要ス，前項議案ハ遅クトモ総会開催前20日マテニ其ノ理由ヲ具シ書面ヲ以テ理事長ニ送達スルコトヲ要ス

第29条　総会ニ於ケル会員ノ表決権ハ平等トス
会員ハ委任ニヨリ表決ヲナスコトヲ得，但シ会員以外ノ者ニ委任スル事ヲ得ス
前項ノ規定ニヨリ表決権ヲ委任シタルモノハ出席者ト見做ス

第30条　総会ノ決議録ハ議長及出席会員弐名署名ノ上之ヲ保管ス

第6章　資産及会計

第31条　本社団ノ資産ハ本法人設立ノ際ニ於ケル別紙目録記載ノ資産ノ外基本金寄附金及ヒ其他ノ諸収入金ヨリ成ル
本社団ノ資産ノ管理並ニ処分ニ関スル重要ナル事項ハ第27条第2項ノ決議ヲ経ルコトヲ要ス

第32条　本社団ノ経費ハ資産ヨリ生スル果実，会費，寄附金其他ノ収入ヲ以テ支弁ス

第33条　本社団ノ経費予算ハ理事之ヲ作製シ会員総会ノ決議ヲ経ルコトヲ要ス

第34条　本社団ハ毎年正会員ノ会費ノ一部ヲ基本金トシテ積立ツルコトヲ要ス
前年度剰余金ハ評議員会ノ決議ヲ経テ基本金ニ繰入ルルコトヲ得

第35条　本社団ノ会計年度ハ毎月4月1日ニ始マリ翌年3月31日ニ終ルモノトス但シ初年度ニ於ケル事業及会計年度ハ本法人設立ノ日ヨリ始マル

第7章　支　　部

第36条　本会ハ各地方ニ支部ヲ置ク

第37条　支部ニ関スル規定ハ別ニ之ヲ定ム

附　　則

第38条　本定款ニ依ル初年度役員ノ半数ニ限リ任期ヲ壱年トシ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第39条　本社団設立ノ際ニ於テ第15条ニヨリ選挙セラレタル理事就任スル迄ノ間左記ノ者ヲ以テ理事又ハ監事トス

理事，理事長	斎藤輝治		正木康作
理事	阿部滋弘	監事	佐々木武雄
	八田篤敬		高橋武忠
	石井文雄		山口辰男
	河村文一		松永尚文
	村上泰助		永岡利司
			鳥谷寅雄
			吉田正吾

22.　校友会の発展（昭 2～5）

校友会とは何ぞや．「全校の教職員と生徒とがいわゆる水いらずで最も自由に，最も愉快に智，体育の両方面を修め研いてゆく機関である」（横浜高工時報 昭和6年3月28日）本校の校友会は前節で述べたように，大正9年秋誕生し昭和5年には10周年を迎えた．この間，めざましい発展を遂げ，横浜高工校友会の名は全国にとどろくにいたった．次に昭和2～5年の間の発展の跡をたどり当時を回想しよう．

部の増加

設立当初は，わずかに10部あったものが昭和5年には正式な部が17部，ほかに準部が19部合計36部門となった．

当時全国大学24校のうち，明大の23部が筆頭で，神戸商大，立正大学22部，あとは10部台が大多数であった（神戸高商学友会昭和6年初調べ）．これによってみると本校の36部は数の上では大学並み，否大学以上ということができる．なお本校生徒でどの部にも属しないという者はほとんどなかった．いずれもどの部かに入部して活躍していた．次に36部をあげると

〔部〕・総務・出版・講演　音楽　絵画・野球・庭球・競技・剣道・柔道・水泳　端艇・弓道　籠球　ラクビー　ア式蹴球　山岳（・印設立時より）

〔準部〕射撃クラブ　乗馬クラブ　アルコー会　排球クラブ　航空研究会　ホッケー倶楽部ラジオ倶楽部　映画研究会　写真倶楽部　英語会　エス語会　独語会　俳句会　YMCA　漢詩会　園芸倶楽部　生花会　盆栽倶楽部　カメラ倶楽部

校友会　昭和5年度予算（円）

総務　232.85	端艇　652.00	野球　936.15	蹴球　605.40
講演　465.70	弓道　266.95	競技　698.60	籠球　279.45
庭球　702.10	山岳　93.15	柔道　465.75	計　7,542.00
剣道　465.75	ア式　279.45	水泳　372.55	
音楽　605.40	出版　327.60	絵画　93.15	

総務部

各級から選出された15名の委員から成る．各部を統制し，予算の編成，決算等の事務を行なう．各級から選出の代議員の猛者（もさ）を相手に統制，指導してゆくことはなかなかの苦労がいった．名誉職的，縁の下の力持ち的存在でもあった．

野球部

ハマの早慶戦，対高商定期戦が昭和４年に中止となったことは前項で述べたが，中止となった年までの戦績は次の通りであった．（昭和６年再開）

第１回戦　大正14年　4A—3　本校勝
第２回戦　大正15年　　4—5　〃 負
第３回戦　昭和２年　　1—0　〃 勝
第４回戦　昭和３年　　2—4　〃 負

こうして対高商戦が中止されたが，これに代わるべきものとして当時の藤村部長らが発起して昭和４年に市民体育復興記念野球大会と銘打って高工戦を行なうことになった．参加校は本校，名古屋，浜松，桐生の４校で，この時は桐生高工が優勝，翌５年には参加校は本校，名古屋，浜松，桐生，福井，山梨の６校となり桐生と本校が決勝を争い 8—2 で本校が優勝した．

この他高専大会などに出場している．野球部の記録によると年度別対外試合成績は次の通り．

昭和２年　9戦７勝　勝率77.8%
　３年　18戦11勝　〃 61.2%
　４年　30戦18勝　〃 60%
　５年　38戦23勝　〃 60.5%

あの頃の思い出　宇田典夫（電化昭４卒）

私は鹿児島一中の卒業で，先輩にすすめられて本校へ入学した．鹿児島一中は当時私が投手で甲子園へも進出したので目をつけられたのでしょう．大正15年に電化へはいったところ野球部長の池内先生が，お前ちょっと投げてみろと言われ，素手で受けられたのにはびっくりした．先生は一高の名三塁手でした．

対高商戦は大正15年は 4：5 で敗れた．そのときの投手は私で捕手が大久保伍郎さん（応化昭２卒）遊撃が竹井光男さん（電化昭２卒），3塁が北里次郎さん（電化昭２卒）でした．まだ野球部ができて間もなくて曲がりなりにもチームができたというだけで，今から考えると草野球程度でしたでしょう．

しかし意気込みだけは大したものでした．翌２年の対高商戦は１：０で勝ち，次の３年は２：４で負けでした．この年夏の全国高専大会では，高商を破り，晴れの甲子園へ出場しました．私としては対高商戦はこれで ２：２ の 成績でした．１回戦には，福岡高校を 破り，２回戦で，矢折れ力尽きて同志社に敗れました．兎に角ピッチャーは私一人で，チーム全体も補欠が2,3名いたぐらいのものでした．大阪からの帰途は私だけ２等寝台に乗せて貰いました．これが横浜から全国大会に出場した最初でした．

対高商戦の時は両校の応援団が大変なもので，柔，剣道衣に朴歯の高下駄でした．終戦の時の有名な佐々木武雄（建築昭３卒）さんは当時の応援団長でした．阿部さん作*のあの「聴けや我らが雄々しき叫びを」は私どもの時にできたように思います．

（注）この応援歌は阿部滋弘作といわれているがそうではなく
作詞　小林正平（電化昭和３年卒）
作曲　田中　晋（建築昭和３年卒）

籠球部

本校に籠球部ができたのは昭和３年である．前年の昭和２年に籠球倶楽部として誕生，翌年校友会の正式部として認められた．昭和３年から対高商定期戦を開始，戦績は次の通り．

第１回　昭和３年６月　本校　25-27　高商
　２　　〃 ４　〃　〃　15-32　〃

第3回　昭和5年6月　　本校 25-16 高商

また昭和4年から市内4専門学校リーグ戦が開始され，第1回(昭4)優勝は高商で本校3位，第2回（昭5）優勝は関東学院で，本校は2位であった．

競技部

大正9年校友会発足と同時に誕生，初代部長は飯塚晶山教授，2代が石川房治助教授であった．対高商定期戦は昭和2年11月本校トラックで開催，戦績は次の通り．

第1回　昭和2年　本校　　30-27　高商
2　　3　　〃　26.5-30.5 〃
3　　4　　〃　28.5-28.5 〃
4　　5　　〃　　30-27　 〃

このほか大正14年より開始された全国高工陸上競技連盟に毎年出場．特に昭和5年6月7,8両日当番校であった本校校庭で行なわれた第6回大会では，次の成績で見事本校が優勝した．

本校56点　福井50点　名古屋31点　浜松25点　桐生11点

対外事業としては，昭和2年まで本校競技部が主催してきた県下中等学校体育大会，翌3年より6年まで主催の全関東中学校陸上競技会があった．

対内事業としては，大正15年から始められたハマの名物対級駅伝競走がある．これは校内対級競技中もっとも各級が力を入れたもので，級ごとの応援団は春の学園の花であった．また秋には級対抗競技が開催された．

柔道部

本部も大正9年発足，古い伝統と歴史を持っていた．初代部長藤川教授，ついで横山教授，佐藤教授，橋本教授とつづく．大正時代の記録は現存していないが，昭和初期からの対高商定期戦の戦績は次の通りである．

第1回　昭和2年　本校敗
2　　3　　〃
3　　4　　〃
4　　5　　引分

対外事業としては県下中等学校柔道大会を主催している．

その他では昭和3年11月3日記念祭当日，浜松高工を迎え5名を残して勝つ．なおこの年は東京高工，名古屋高工にも勝っている．

庭球部

庭球部も本校創立後まもなくその第1歩をふみ出した．大正15年に至り対高商定期戦が開始された．戦績次の通り．

第1回　大正15年6月　本校 6—3 高商
2　　〃 15　12　　6—3
3　　昭和2年6月　　2—7

第４回　昭和２年12月　本校 6—3 高商

5　〃 3　5　6—3

6　〃 4　5　8—1

昭和５年からＹ専を加え市内３専門学校リーグ戦が開始され，初優勝をとげた．

昭和５年５月　本校 5—4 高商

本校 5—4 Ｙ専

また全国高専大会には昭和５年に初めて出場し決勝戦にまで進出したが，惜しくも高師に敗れた．このほか対外的には県下中等学校庭球大会(軟式)を主催，対内的には校内大会(軟式)があった．

剣道部

最も古い部の一つ，初代部長横地講師の創業期の古武士的熱心さ，２代安川教授の数学者らしいき帳面さで部も充実．昭和５年には．３段２名，２段７名，初段10名を擁する大部となったが，天われに組せず対浜松高工定期戦，東大主催全国大会いずれにも敗退無念の涙をのんだ．

昭和３年10月27日　東京高工に遠征し大将同士の決戦となり奮闘して勝つ．

弓道部

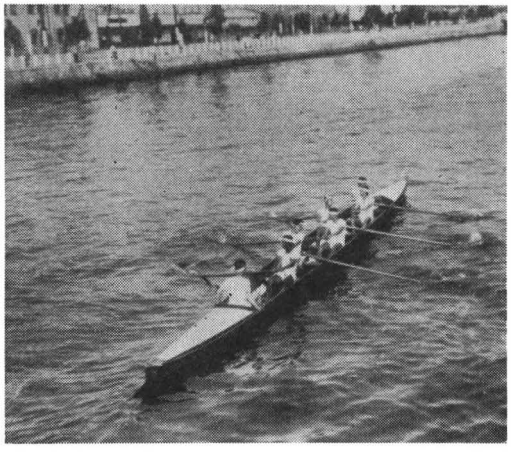
弓道部は柔，剣道部と共に最も古い部の一つ，創設時より浦上栄範士の教えをうけていた．(なお同範士は終戦直前まで本校嘱託をつとめた)．

昭和３年より開始の対高商定期戦では3,4，５年と連勝，意気高いものがあった．昭和５年６月の成績は，各選手５名出場，各20射で高工75中，高商55中であった．

音楽部

音楽部の歴史も古い，初代部長藤村教授のとき，大正12年３月１日開かれた観光外人招待大音楽会は，浜の人気を博した．２代三井部長に受けつがれ，音楽部はさらに発展した．

昭和５年の時点では，音楽部の中に (1)オーケストラ部 (2)マンドリン部 (3)コーラス部 (4)邦楽部の４部があり，行事の主なるものは天長節祝賀の新人紹介音楽会，明治節祝賀音楽会，卒業生送別演奏会の３つであった．このころには音楽部の有する楽器も充実してきた．特に本校の



ボート部（大岡川にて）

剣道部（昭和５年）

ベヒシュタインのピアノのは有名であった(前述)．また卒業式にオーケストラで祝うことは本校独特のものであった．

絵画部

絵画部が呱々(ここ)の声をあげたのは，大正14年であった．当部生みの親は当時応化３年の市村三男と応化１年の矢田部庄栄である．２人とも陸上競技部の選手であった．絵画部が運動選手によって創設されたことは興味あることであった．

絵画部の部室は常に開放されており，部員外の同好の士を歓迎していた．記念祭祝賀展などに部員の作品を展示し，地味ながら大衆化に努力していた．

絵画部では昭和５年度のしめくくりとして６年２月25日から３月１日まで伊勢佐木町相模屋７階ホールで，展覧会を開催（建築展も共催），入場者は１日平均1,000名を越え大好況であった．

講演部

当部も最も古い部の一つ，初めは弁論部と称していた．学内，学外の世論の指導者を以て任じていた．本校講演部の特徴の一つは広く名士を招き，その風ぼうに接し，その高説を聞く講演会の開催であった．また夏季休暇中における学生による工業普及の国内各地での巡回講演も有名であった．横浜全市青年雄弁大会，校内雄弁大会などを行事として行なっていた．

ラグビー部

当部の誕生も古い．大正12年末，電化中島正己（大正15卒，後本校助教授）らによってゼブラ倶楽部の名で呱々の声をあげた．昭和２年正式に校友会に編入，初代部長に三井教授を迎えた．翌３年大木教官部長時代に関東ラグビー協会に甲種会員として入会した．

昭和5,6年ころは当部は黄金時代と称された．昭和５年秋行なわれた市民大会での対高商戦は高商をノートライ　前半 9—3 後半 23—0 で堂々と破っている．

蹴球部

当部が校友会の正式部として認められたのは昭和４年のことであった．

大正15年春から設立準備にとりかかり，昭和２年ナイキ倶楽部として誕生，昭和３年神奈川県ア式蹴球連盟が設立されるや横浜高商などと共にこれに加入，翌４年ア式蹴球部として校友会に編入，初代部長は体育の石川助教授であった．翌５年寺沢教授が２代部長となった．

対高商戦は，３度戦って３度引分けとなっている．すなわち

昭和３年　本校 1—1 高商

4　〃　0—0　〃

5　〃　3—3　〃

端艇部

端艇部は本校校友会の華であった．戦えば必ず勝つ，とはこの部の合言葉であった．

大正９年校友会端艇部として誕生，同14年２月21日，海外発展の理想に燃える鈴木校長命名のパナマ（機械）マゼラン（応化）スエズ（電化）の３艇が進水した．以来この３艇に鍛えられた当部は横浜公園前における市内専門学校競漕に連勝，昭和４年に始まった墨堤における神宮大会

での優勝と全く向かう所敵なしの概があった．また毎年夏行なわれた校内対級，対科レースは若き血をわきたたせる年中行事の一つであった．

山岳部

校友会では最も若い部，初代部長が加藤述教授，昭和５年第１班富士登山，第２班白馬岳，第３班燕，槍縦走，第４班槍，穂高縦走，第５班烏帽子岳，槍縦走，第６班針の木，杓子岳，白馬，第７班白根三山縦走，第８班八ケ岳，第９班聖岳，赤石岳，間岳，第10班海岸キャンピングと多彩な行動を行なった．

出版部　高工時報の項で別に述べた通りである．

応援歌

このころ野球その他の試合に弘陵健児によってさかんに歌われ，またその後もずっと愛唱された応援歌3,4を次にあげておく．

応援歌　小林正平（電化昭３卒）作詞
田中　晋（建築昭３卒）作曲

1. 聴けや我等が雄々しき叫びを
　弘陵健児のその自由の声は
　文月の空に谺して
　金港の波高らかに歌うなり
　奮え奮えいざやいざ奮え
2. 見よや英姿の颯爽たるを
　寄せ来る敵を打ち破るに何ぞ
　大岡の原野に培われたる
　男子よ起てよ剣を執る時なるぞ
　奮え奮えいざやいざ奮え
3. 起てよいざ起て我等が健児
　宇宙の黙示しかと身に秘めつつ
　心の緒琴ただ一筋に
　弘陵の萠ゆる若葉に報いずや
　奮え奮えいざやいざ奮え

応援歌　阿部滋弘　作詞

青春の力満てる　我が黒鉄の腕
高く高く高く　覇者の剣かざす
青春の血潮たぎる　我が胸さくるまで
高く　高く　勝闘の凱歌あぐる
秋ぞいま　秋ぞいま　奮え若き人
我等が希望を負いて　いざ奮え

応援歌　作者不詳

弘陵緑し烈日に映ゆ　時来りて血は胸にたぎる
かつたる響，力，力　熱砂に相搏つ若き日の叫び
宇内に輝く自由の学徒　おお起つべき時将に今
時に弘陵緑濃き　高工，高工，高工，横浜高工

応援歌　作者不詳

1. 大岡の野に吹き荒ぶ
　嵐に散るや花吹雪
　過ぎてぞ時は初夏の
　クローバの香にさしそえば
　黙示の声をさとりうる
　自由の園の気は高し
2. 日はうららかに風なぎて
　金港の波和らぎて
　千鳥の夢は深くとも
　弘陵健児の若き血は
　遠きを望み仰ぎ見て
　世々に光を放つなり
3. 緑樹の蔭のささやきに
　答えて響くささなみの
　何を歌うて祝うらん
　聞け弘陵の健男児
　宴のむしろ高らかに
　祝歌唄いし去年の日よ
4. 誓いて来たる一年の
　見よ健闘の夜は明けて
　烈火の時は今熟す
　立たずや健児時ぞ今
　鍛えし腕に剣とりて
　栄ある戦たたかえや

第1章　第4節　校運ますます隆盛 (昭和6年～昭和10年)

昭和6年4月若槻内閣成立，同年9月18日奉天北郊の柳条溝で満鉄の線路が何者かによって爆破された．これが満州事変の発端であり，以後14年にわたる大戦争の第一歩となったのである．

同年暮れ，また内閣が変わり犬養内閣となった．7年1月満州事変は遂に上海事変へと進展，同年2月元蔵相井上準之助，3月三井の総帥団琢磨とつづけて血盟団によって暗殺された．つづいて5月15日，一団の海軍将校が自動車で首相官邸にのりつけ「話せばわかる」という犬養首相を「問答無用」と射殺した．いわゆる5，15事件がこれである．このように国の内外はいよいよただならぬ様相を呈してきた．

7年5月斎藤内閣成立，8年3月日本は「東洋平和の根本方針につき連盟と全くその所信を異にする」として国際連盟を脱退，いわゆる東洋の孤児となる．9年7月岡田内閣成立．10年12月海軍軍縮会議を脱退，太平洋は無条約時代となった．こうして12年7月の日華事変（日中戦争とも称する）へと突き進んでゆく．

一方，わが国の軍備拡張に伴う軍需工業の発展は金属，機械器具，化学などの重化学工業の急速な発展となり景気は6年暮れから立ち直ってきた．(主として岩波新書　昭和史による)

わが学園においては昭和6年に至りようやく復興建築予算が認められ，基礎工事のクイ打込みの音で授業中の学生はうれしい一方，その騒音に悩まされた．昭和4年，5年と中止となっていた対高商野球戦は昭和6年再開され，浜の人気をさらった．なおこの時代は本校運動部の黄金時代で各部が全国の覇(は)を唱えた．昭和7，8年に至り軍需景気により長らく不況をかこった就職状況も好転してきた．昭和9年満州事変ぼっ発．軍事教練の強化など学生生活もおいおいと緊迫の度を加えてきた．

1.　入試全国高工一の難関

昭和6年度の本校入学志願者受付けは，2月10日から開始され，3月11日をもって締め切られた．募集人員200名に対し受験者総計2,052人で，実に全国高工中第一の難関であった．なお晴れの入学式は，4月10日午前9時より挙行，鈴木校長の本校方針の大綱についての講話の後，安川教授より教務課について，横地講師より生徒心得について注意があった．

2. 第9回卒業式

昭和6年3月14日，第9回卒業式が例年のとおり3校合同で行なわれた．本校の卒業生は機械36，応化31，電化40，建築29，ほかに修業6，選科4，計146名であった．

当日鈴木校長は式辞の中で，就職状況について述べたほかに特に商工実習が10周年を経過したので，同校創立者安部幸兵衛翁の偉業について述べるところがあった．

学校長 告辞

我高等工業学校及商工実習学校は，昨年を以て早くも創立満10周年を経過いたしました．別に誇るべき事跡とてはありませず，又学校の年齢としては，10年位は僅かの歳月でありますから，別段取りたてて記念祭行事を致さず，些かな内祝で済せました．

唯商工実習学校は此機会に於て，創立者安部幸兵衛氏の胸像を，同校庭に建立して記念いたしました．……今後校庭に於て，我等教職員及び生徒は，日夕此胸像に対し，独立自尊の人故安部翁の颯爽たる風貌を仰ぐと共に胸像建立の事業を想起し，我実習学校精神教育の尊き俤として永へに残ることと信じます．

……而して世間一般不況のため，卒業生の就職難には実に閉口するのであります．然るに今年は，卒業期を繰上げて，既に2月中旬南洋に渡りましたものが2人あります．猶此中旬には更に2人の同方面行が予定されて居ります．併し此等は例外のことで一般には中々容易ではありません．然し何れも頭と腕を鍛へ上げたものですから，其処に自信を持って，各自の努力と学校の斡旋で，何とか都合をつけたいと思つて居ります．此点に就て切に来賓各位の御同情と御助力をお願ひいたします．

現下社会の情勢を観察いたしますと，教育界は左傾思想防圧と，卒業生の就職，上級学校への進出とに没頭して，他を顧みるの余裕がない有様であります．文部当局に於ても亦同様であります．国家最高の目的や，国民の帰趨何れの辺にあるやは，全く指導的精神に欠如して居るかの様に考へられます．此れは独り教育界のみならず，凡ての方面に於ても亦然りと言はねばならぬことは，真に痛嘆すべきことであります．

卒業生諸君，今日は金子堅太郎子爵が，特に諸君の前途を祝福せんがため，態々御来臨下さいました．而して憲法制定に関する御話を拝聴し得ることは何よりの幸福と存じます……．

付 商工実習学校 安部翁の胸像を建設

商工実習学校では昭和5年をもって創立満10周年を迎えた．同校ではこれを記念して，創立者安部幸

安部幸兵衛翁 胸像

兵衛翁の胸像を建設することとなり，一般から資金の寄付を仰ぎ総計9,500円を得た．このうち3,000余円で胸像を建設，残り5,000余円で安部記念奨学会を設立した．

なおこの9,500円のうち3,000円は，商工実習の教職員および生徒が3年5カ月間，毎月わずかの積立てをして蓄えたものであった．

3. 第2期復興建築工事始まる

本校では大震災後応急工事としてバラック建てで授業を再開したが，その後一般的不況のため，予算がとれず，長らく全国高専一と称された破れ建築で我慢をしてきた．昭和5年7月7日田中文部大臣が視察のため来校し，教育に関する諸施設について聴取，聞きしにまさる荒廃に驚き1日も早く復旧すべきことを約した．このことについて「自由教育10年」に鈴木校長は次のとおり記している．

> 我校は大震火災後，応急工事として仮校舎を建築し，一方復興予算として171万円を計上せられたのであったが，諸種の事情のため今日（昭和5年）に至るも未だ着手を見ず，依然たる仮校舎に7年を過したのである．殊に建築，造船の学科の如き，市の小学校バラック建築の古材を移して，使用して居る惨状である．
>
> 然かも昭和2年より5年に至る継続事業として，建築を完成せらるべきであったが，我校現在敷地の地盤軟弱の為，基礎工事に要する費用の大なるに拘らず，該費用を予算上に増額せらるることなく，又開校以来我校の性質上其所在地として稍便宜を欠ける等の為，大震火災直後神奈川方面に移転の議が起ったが，仮校舎竣工となり其後大正14年11月商議員会を開いた結果，現敷地に決定し，只校舎の位置を敷地交換により後方に移動せしむることとなった．
>
> 然るに昭和2年8月，校舎地盤軟弱を理由として再び移転問題を惹起し，事態急となれる為，商議員会を開会し，附議するところがあったが，其結果私は京浜各新聞社を招き，席上我校は移転せず，復興建築は現在地に再築すべき旨を声明するに至った．
>
> 其後鋭意復興建築進捗に努力し，文部省並に我校より建築委員* を選出して協議を遂げ，或は予算増額を具申するところがあったが，孰れも具体的成果を挙ぐるを得ず，就中昨年(昭和4年)成立せる浜口内閣の緊縮政策の犠牲となりて，既定予算額より更に減額せられ百数十万円となった．
>
> 諸物価は今日低落せりとは言へ，敷地工事に失費多き為所期の建築を得ること困難なるも，とに角本春には実際着工せらるべき機運となった．
>
> 我校復興建築に当っては，特に商議員中村房次郎氏に感謝するところが多い．

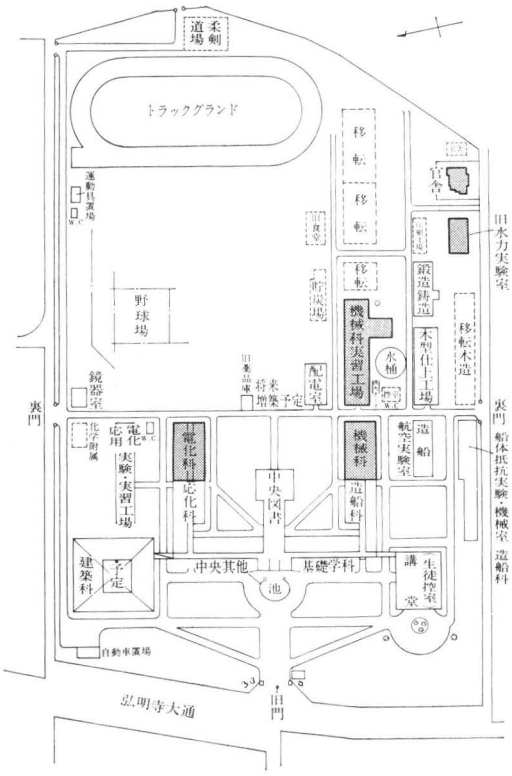
（注） 横浜高工建築委員(昭和3年) 栗屋次官，建部普通学務局長，白上実業学務局長，秋保督学官，柴垣建築課長，伊東工業教育課長，木村会計課長，鈴木校長，遠藤教授

文部省ではその後，別図のごとき建築設計図を作成，とりあえず第2期工事として一部予算を計上，昭和6年初め入札の結果236,000円で大林組に落札，早速工事にとりかかることとなり，同年3月28日，伊勢山皇太神宮宮司祭主となり，厳かに地鎮祭を執行した．文部省からは中村技師が出張所長として在校，事務を開始した．今回の工事は，水力実験室，鋳物工場，機械科実習室，応用化学科および電気化学科の一部等であった．

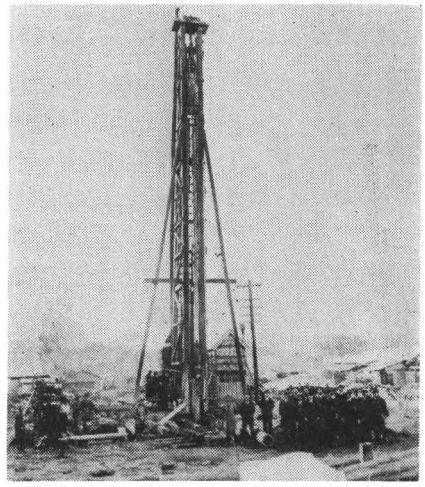
なお本工事はその後，予定どおり着々と進み，昭和7年9月の夏休み明けにはほぼ完成した．

この第2期復興工事について遠藤政直教授は横浜工業会誌（昭和6年7月発行）で，大略次の

第2期工事
校舎配置図



本館建築くい打ち工事



通り述べている.

本建築はいろいろの事情で延び延びになっていたところ，一月になって急に着工することとなった．実はこの本建築に先だち，ここは余り地盤がよくないので他処へ移転してはどうかという話もあった.

杭代だけでも3万数千円を要することとなるからであった.

さて今の工事が完了した後の継続工事はどうなるのか，最近また割当てがある模様であるが，幾分でも費用があれば，漸次継続して行くうちにはどうにかなることであろう……

また斎藤輝冶教授は後年次のように当時を語っている.

遠藤教授が文部省から建築主任技師を委託され私はその助手として手伝っていた.

余り地盤が悪いので鶴見市場に建てようとしたが，これは校長その他の反対で沙汰やみとなった．ボイラールームの煙突を基準として機械，電化の両袖から建てられ，その両袖をつなぐ正面を工事して完成された．その後間もなく鉄の統制がとられたので，まことにきわどいところであった．4ヶ所に約90尺の杭を打込み沈下試験をした．これは遠藤教授指導で私がやりました.

4. 消費組合の設立

昭和4年ごろ，学生控所の売店改善問題に端を発し，当時物価がいちじるしく高騰し学生生活も楽ではなく，物価高にあえぐ学生の必然的な要求として学生自身による売店の経営，すなわち

学生消費組合設立の声がわきおこった．各科から１名の委員を選出し消費組合調査委員会が結成され，昭和５年５月28日その第１回委員会が開催された．

委員長嘉藤作次郎（機械３）委員小竹雄四郎（応化３）鎌塚明（電化３）松本延太郎(建築３）吉岡勲（造船２）であった．

これは多忙な学生が学業の余暇をさいての調査で大変な仕事であった．しかし各委員は全国高専以上の百数十校に消費組合の有無の照会をし，現在施行中の組合の定款規則等を調べる一方，本校学生の購買力，消費量の調査をするなど精力的に実情を掌握することに努めた．またその経営方法等についても，出資金の問題，仕入れの問題，販売の方法等素人の学生としては苦心のいることであった．

こうして一応の調査も終わり，学校当局の了解も得たので，５年12月22日，校友会評議委員会を開き，組合設立の可否につき論議の結果満場一致で実施することに決定．今後は実際運営に当たることとなる２年生から実行委員を選出し，設立準備に当たることとなった．

ついで昭和６年２月18日の校友会総会において横浜高工校友会消費組合設立が宣言され，新学期よりいよいよ事業を開始することとなった．

学校側ではこのため特に横浜市教育課に勤務していた今井圭三を教務課主任として招へいし専務理事に任じた．

消費組合はこうして設立されたが，今後の運営をどうしてゆくかは大きな問題であった．

事務的には今井専務理事の下に２名の事務員を雇い，資金的には組合員の出資（組合加入に際し金２円を出資，卒業の時返還）のほかに学校より300円を借り入れた．仕入れは全くの素人の学生の手によることゆえ，遅々として進まぬことは，はじめはやむを得ぬことであった．しかしながら学校側の積極的な援助と組合員の熱烈な協力によって，まずは好調のスタートを切ることができた．

すなわち４月初めの売上高は，１日300円平均で最高1,000円以上の日もあり，４月の総売上高は9,000円以上に達した．おもなものは教科書，製図機械，洋服，食堂などあった．

なお組合では次の標語をかかげた．

1. 相互扶助の協同社会建設
1. 利潤の撤廃
1. 学生大衆による組合管理
1. 学生は学生の店へ
1. 横浜高工消費組合を支持せよ

売店風景

食堂風景（昭和９年）

横浜高工消費組合の創立当時の組織は次の通りであった.

組 合 長　鈴木校長

専務理事　今井圭三

理　　事　15名（各級より1名選出）

監　　事　7名（内2名は職員より委嘱，他の5名は各科より1名ずつ互選）

評 議 員　各級より3名選出（評議員会は最高決議機関）

組 合 員　全校職員，生徒

なお創立1年後の昭和6年度決算では，804円57銭の剰余金（利益）を得たので，準備金，特別積立金，繰越金等にあてることができた.

5. 校長の暑中見舞状

鈴木校長は昭和4年から，夏季休暇中の学生に対して，暑中見舞状を出していたが，昭和6年には体裁を巻紙式とし，それへ一々自筆の署名をして出した．これに対して学生や父兄からの返書も多く，学校と学生，父兄との気持ちの交流に大いに寄与したことは見逃せない．少しく長いが慰問状を次に抜粋して載せておく.

拝啓　今夏は気候殊の外不順でありますが，貴君には別に御変りはありませんか．我校には些の異状もありません．只だ復興建築が日々進渉し，目下鉄筋の組立中でありまして略外形を想像し得るに至りました．9月の学期始めには定めて驚かれることであらうと思ひます.

さて貴君はこの暑中休暇に当って，色々の御計画の下に活動せられつゝあることと信じますが，帰するところは懐かしき故郷の土を踏まれ，温かき家庭の人とならるゝことと思ひます．……

貴君はよく我国体の真髄を嚙みしめ，大国民たるの自覚と自信を体得し，併せて我校の自由啓発主義に範り，充分自制ある言動あらんことを望みます.

猶時事に就て一言したいと思ひます．近年我国の対外関係を直視しますと，明治時代に我等の父祖の発揮した潑溂たる理想と，信念は徒らに消磨し，国民の気力に一大変調を示しつゝあることは昨今の対支，対露問題を考証して充分察知し得ることであらうと思ひます.

然し斯く言へばとて貴君等は直接此れ等の問題に関与する立場ではありません．只管人格の修養と学術の研究を本分とせねばなりません．そうしてそれが嬓て国家の隆盛と，国威宣揚の根本となるものであります．老生国事を憂慮する点に於て敢て人後に落ぬと自信しますが，唯微力にして報国の実を示すことが出来ません．偏へに我弘陵子弟諸君の発憤，努力に待つ所以であります.

何卒この上とも心身を鍛練せられ，来る新学期には大手を振って意気揚々と登校せらるゝよう今から鶴首してゐます.

末筆ながら父兄の方々へ敬意を表します．よろしく御伝言下さい.

昭和6年8月　横浜高等工業学校長　鈴木達治

6. 社団法人横浜工業会第1回総会

社団法人となった横浜工業会第1回総会は昭和6年4月29日，横浜開港記念館で開催された．議長に斎藤輝治が推され，議事に入り河村文一より事務報告，村上泰助より会計報告の後鈴木校長を名誉会長に推薦した.

この時点での会員数は，機械科卒業生320名，応用化学科卒業生280名，電気化学科卒業生309名，建築科卒業生88名で，ほかに特別会員68名，名誉会員7名，名誉会長1名，会計1,137名であった．なお死亡会員は40名をかぞえた．

7. 浜の早慶戦復活とその収支決算

昭和4年，5年と中止された対高商野球定期戦は，機熱して両校の意見まとまり，昭和6年に至り復活し，6月1～2日公園球場において行なわれた．第1戦5—12A，第2戦3—6で，武運つたなく本校の敗るるところとなった．久しぶりの浜の早慶戦とて，両日とも会場は内外野とも超満員となり，両軍応援団の熱気はグラウンドの内外に充満した．

今経理面より当時の運営その他をうかがってみることとする．

収　入	第1日	4,021円	内野	5,000人	外野　7,606人（有料のみ）
	第2日	4,338円40銭	〃	5,000人	〃　9,192人（　〃　）
	計	8,359円40銭	計	10,000人	16,798人
			総計		26,798人
支　出	球場使用料	1,253円94銭			
	諸経費 印刷，宣伝 出札，審判謝礼	831円77銭			
	計	2,085円71銭			
	差引残高	6,273円89銭			

以上の通りであったがこの残金を両校で3,136円94銭5厘ずつ折半した．
これを当校では次のごとく処分した．

1.	グラウンド復興基金積立	2,000円
2.	仮グラウンド地均費	400円
3.	定期戦雑費	199円99銭
4.	ユニホーム代	211円90銭
5.	ボール及バット代補助	325円05銭
	計	3136円94銭

なお入場者数は2日間において球場開始以来のレコードを作った．有料入場者26,798人無料入場者5,000人であった．

本試合会計について責任者である電化3年の田淵克己は，高工時報第139号（昭和6年6月25日）において次のごとく述べている．

「2日間での諸費用は僅か全金額の10%で，しかもその中に球場修理費80余円を含んでいる．学生スポーツとして如何に各方面の，ことに校友諸君，青年団，警察等の犠牲的な努力に俟つかを物語っていると思います．われわれは本試合の目的の中に斯道発達を目したるを以て本残額を最も有効に支出し入場料問題に対して明確なる解答を与えんとするものであります．」

8. 横地講師 逝く

昭和6年10月11日，横地捨次郎講師が死去した．横地講師は，わが国最初の体育教程機関であった文部省体操練習所第1回卒業生で卒業後東京府，静岡県，奈良県を歴任，広島高師の教職を経て朝鮮総督府に奉職14年，本校創立されるや体操科講師として来任，以来10余年本校体育に尽すいした．わが国体育研究家の鼻祖であった．なお長らく本校剣道部長をつとめ本校の名物先生の一人であった．

なお8年11月11日東京多磨墓地に横地講師の銅像が本校，商工実習の職員，生徒らにより建設され，その除幕式が行なわれた．その碑文は次の通りである．

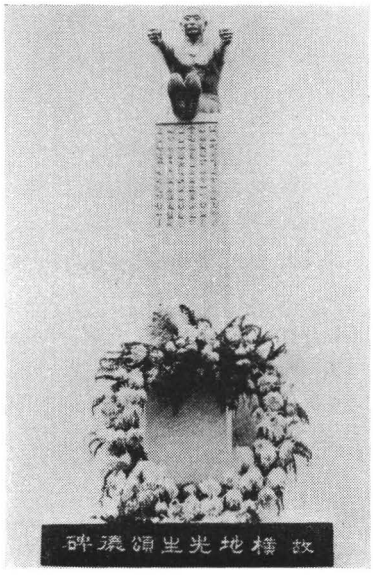
「故横地捨次郎先生資性明朗質実従事育英四十七年或奨合理体操之法或修全鮮体育之基其薫化有炳然者実為斯界先覚玆門人故旧胥謀建碑以頌其徳干時昭和七年十月」

9. 記念祭に祝賀飛行機墜落

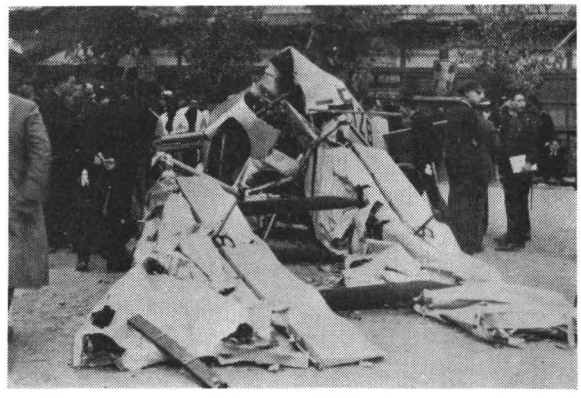
開校記念祭の第3日目であり，かつ明治節にも当たる昭和6年11月3日，全校が一般観覧者でわきかえっていた校庭へ，母校訪問飛行に飛来した横浜商工実習学校出身者操縦の飛行機が失速し墜落，死亡したといういたましい事故が起きた．

この日本校ならびに商工実習開校記念祭の行事の一つとして，実習校出身の津田沼飛行学校軽飛行倶楽部の2等操縦士大里保蔵（20歳）は，母校祝賀訪問飛行のため，千葉県津田沼町の伊藤飛行場から仏国アンリオ式28型80馬力機に3等操縦士宮脇文作（23歳）を同乗し，一気に横浜市に飛来，母校上空を50メートルの低空で3度旋回，大陸会の「満蒙の権益を守れ」「日本の主張を貫け」の宣伝ビラを撒布盛んな歓迎をうけながら飛行中午前10時15分ごろ，突然機体が速力を失い，見物人の少ない高工建築科製図室前の校庭に機首を下にして墜落した．

直ちに鈴木校長はじめ職員，学生らがかけつけたが，両操縦士ともほとんど即死であり，いか



横地先生頌徳碑



墜落した飛行機

んとも手当ての方法がなかった.

なお幸いに多数群衆のいる校庭をさけ，比較的人の少ない建築科前の広場につっこんだため群衆には被害者がなかった.

学校当局では，このため祝賀の音楽会や仮装行列を中止し，遺体は校長室に移し，関係者一同で通夜をし，両操縦士のために弔意を表した．鈴木校長は暗然として次のように語った.

> 何とも遺憾の至りである．ただ見物の群衆に一人の怪我人もなかった事は不幸中の幸であり両飛行士が群衆の点を考慮せずに自己の安全を図って滑走着陸すれば自己は或は安全であり得たかも知れぬ．両君が尊い犠牲的精神から最後の手段をとったのは実に感激に堪えない.
>
> （当時の新聞紙および高工時報記事による）

10. 大陸会の活躍

(1) 満州駐屯軍慰問

本校大陸会では満州駐屯軍慰問のため，高田富男(応化)，黒田福雄(応化)，大崎交明(電化)，松本才（建築）の４人を満州へ派遣した.

一行は昭和６年11月３日午後９時，鈴木校長はじめ教職員，大陸会委員，先輩，在校生ら多数の見送りを受けて横浜駅を出発，釜山，京城を経て６日午後１時寒冷はだを刺す奉天に到着，駅の２階にある兵たん部に持参の本校ならびに横浜市内各校有志から送られた慰問状3,200通と慰問袋700袋を手渡し，直ちに関東軍司令部を慰問，翌７日北大営を訪問，再び司令部へ引き返し，関東軍司令官本庄中将にあいさつ，翌８日長春，９日寛城子，吉林，10日南嶺，鄭家屯，11日四平街をそれぞれ慰問し12日奉天に戻り同日奉天発，15日無事横浜へ帰着した.

(2) 満鮮旅行団

わが大陸会では昭和７年の夏休みを利用して満鮮旅行を行なった．一行は団長堀江教授，大山会計課長，学生19名で，７月11日横浜を出発，朝鮮経由で，京城，仁川，平壌を経て16日満州奉天着，軍司令部を訪問，横浜市小学児童よりおくられた慰問文3,000通を渡し，撫順，公主嶺を視察，19日新京着，長春，ハルビン，鞍山を見学，旅順，大連を経て29日無事神戸港へ帰着した.

11. 井上準之助暗殺される

昭和７年２月９日午後８時，元蔵相井上準之助（本校商議委員）は，選挙応援演説を行なうため本郷駒本小学校校門をはいったところを，血盟団員の１人にピストルで暗殺された.

井上準之助は本校商議委員として，創立以来本校のために尽力するところ多大であった．遭難の翌日鈴木校長は私邸を弔問，２月12日横浜開港記念会館で行なわれた告別遙拝式には生徒代表と共に参拝し，さらに校長は青山霊場の告別式に参列，学校よりの花輪を供えた.

12. 活字合金の研究で本校卒業生賜杯

本校大正14年機械科卒，青木信利は昭和６年12月23日，活字合金の研究で印刷術に光明をもたらすものとして，賜杯の光栄に浴した.

本校では7年2月10日講堂で青木先輩を招き賜杯記念講演会を開催した.

会は鈴木校長のあいさつ，河合教授の解説ののち青木信利は「活字合金の研究」と題して苦心談を語った．同日夜横浜銀行集会所で歓迎夕食会を開き，鈴木校長天杯を手にして同氏のために乾杯した.

13. 第10回卒業式

昭和7年3月15日午後3時から，第10回卒業式が講堂で挙行された．今年は造船工学科および付設工業教員養成所の第1回卒業生を出したことで特筆される.

式は在学生のオーケストラによる国歌によって開かれ，鈴木校長の熱のある式辞，大西横浜市長の祝辞，原嘉道枢密顧問官の憲法に関する有益な講話があり，卒業生代表の答辞ののち，オーケストラの校歌で式を閉じた.

学校長 式辞

……昨年の第9回迄は，県立商工実習学校も，此卒業式に参加致しまして，所謂三体一心を標榜したる県と市と政府の合併卒業式でありましたが，昨年私が実習学校長を勇退致しました為め，今年からは両校のみの卒業式となりました．併し乍ら他方本校に於て，今年最初の造船工学科及び，附設工業教員養成所，各第一回の卒業生を輩出致しました事は，実に本校の慶賀と致す処であります.

前年東京及び大阪の高等工業学校が昇格して，各工業大学となるに関連し，本校には新に電気工学科が増設せらるゝ事になって居りました．本校又其準備に着手して居りましたが，増設実施の前年，即ち昭和3年に至り，大阪高等工業学校の造船工学科は，元来神戸高等工業学校へ行くべきでありましたが，神戸高等工業学校は土木工学科を選択したる為め，其儘に致し置かば，全国高等工業学校中に於て造船工学科が無くなる事になりました．文部当局に於ては，多少其点に憂慮する処がありましたので，当校は進んで此造船工学科を引受け，既定の電気工学科を棄てたのであります．果して，此交換が当を得たるか否かに就ては，其衝に当つた私としては絶へず責任を感じて居る次第で御座います.

抑我国は所謂海国で，第1，造船工業は是非共世界何れの国よりも，優るとも決して劣つてはならない覚悟を持たなければならない．第2，横浜は貿易港たる事を忘れてはならない．第3，造船工業は大量生産の許されないもので，特に我国情に適応した大工業であると云ふ感念を持つべきである．第4，飛行機及飛行船は，今後異常の発展を見るものと想像して差支なからふ．而して船舶は海を行き，飛行機及飛行船は空を行く，故に其学問上の原理は海空殆んど共通のものであります．即ち，造船工学は航空工学と，其軌を一にするものであります．其れが為めに，本年造船工学科を卒業したる22名中の若干は，特に航空，即ち飛行機に関する学課を専攻したるものであります．さらば将来，我造船工学科は名実共に海と空との工学に分科するか，更に進んで航空工学科として独立するかの運命を持つて居ります．果して此が実現を得ば，我校が造船工学科を選択したと云ふ事は，決して誤れりと云ふべきで無いと考へるのであります.

而して，此が実現に関しては，我校の所在地たる横浜市並に，神奈川県下の賢明なる方々の御後援を偏に仰ぐ次第であります．即ち以上4ケ条の考慮が，我校が造船工学科を選択した理由であります.

工業教員養成所も，又本年第1回の卒業生を輩出致しました．教育の改造問題は多年朝野の懸案であり，政府当局に於ても，既に其所謂教育制度改革に就き其具体案を提出し，昨年諸方面に一大衝動を与へましたが，何等なす処なく終に事止みとなりましたことは，遺憾千万であります．凡ゆる国民生活の状態は，教育と因果関係を有することは勿論のことゝ存じます．さらば国民生活の行詰りは又教育の行詰りで，随て教育の改造を叫ば

るゝことは，当然の事で有ると考へます．然るにも係らず，教育制度は無論の事，其教育の精神と云ふものまで，殆んど旧により改善せられない様に思はれます．即ち，相変らず詰込み主義，知識偏重主義，卒業証書万能主義が最も有力であります．

我校は時流に慣はず，自由教育10年，無試験，無採点，無処罰の三無主義を奉じて，奮闘して来ました．素より不完全にして，遺憾の点尠からずと雖も，附設工業教員養成所は，即ち，此雰囲気の裡に，其最初の卒業生を出しました．異日国家教育の，霊知異材が此内より生じ来らん事を，期待して止まざる次第であります．

卒業生諸君，今日憂国の人士が口を開けば，国家多事又国歩多難と申します．特に満洲及上海事件に就ては，我国は全く国際的孤立の状態になつて居ります．斯の如き開国以来，未だ嘗てなき処であります．満蒙に関しては，私は大正４年に，東蒙古に於ける天然曹達を探険して，鉄道其他の交通機関なき当時，鄭家屯及洮南附近を踏査致しました．爾来満洲及支那各地へは数回来往致しまして，満蒙と我国との関係に就きましては，常に留意致して居りました．大正14年に支那より帰りました機に於て，我校に大陸会を創立致しました．我国と亜細亜大陸との間には海がない，我国は亜細亜大陸の東端である．凡ての国策が，此趣旨より画策されねばならぬと云ふ根拠から，此会の名称が来つたのであります．

而して市内の有志と，本校と協同して，満蒙支那を研究し来りました．昨年満洲事変の勃発するや，我校は率先して，満洲軍慰問使を派遣し，且つ慰問金の募集及各所に於ける講演等に由て，大に国民の士気発揚に勤め，更に又，臨時的満蒙研究会を組織して，各方面より満蒙研究の実蹟を挙ぐる事に努力致しましたことは，満蒙に留意する私に取つて，又一大会心の事でありました．

国家有為の青年が，今日の如き国家多端，国歩艱難，国際的無援孤独の時局に直面して，我国家の成立と，其動向を認識体験し得る事は，異日国家棟梁の材となる素地を作る事に於て，又此上なき好機会で有ると信じ，卒業生諸君に向つて祝福せねばならぬ事と存じます．……

14. 第11回卒業式

昭和８年３月15日，第11回卒業式が挙行された．

機械33，応化39，電化36，建築29，造船23，他に本科修業者１，選科１，計162名，工業教員養成所20，合計182名，市立工業専修学校180名が卒業した．なお来賓として深井日本銀行副総裁の講演があった．

学校長 式辞

……此等卒業生を養成する為めに教職員各位の御努力は尋常ではありませんでした．思想混乱の世相の裡に動揺し易き多数青年を指導誘掖して，其針路を誤らしむることなく，国家の目的と其帰趨を理解せしめ，失職者の多き事業界の風波の中に，職を求めて安処せしむる等，並大抵の骨折ではありません．特に我自由教育は細心なる注意と，大胆なる施設を要します．実施以来既に十有三年未だ嘗て其城壁の一角だも崩さず，歩一歩づゝ其所志の目標に向つて進行しつゝあるを見るは実に快心の事にして是れ実に各位の不断の努力と，崇高なる犠牲心の発露に外ならないと信じます．私は学校長とて，此機会に於て深甚の謝意を表する次第であります．……

諸君の在学中は，実に我国として内外多事，所謂非常時でありました．内に於て政治経済思想共に安定する処なく，特に昨年２月より５月に亘り，一種の暗黒時代をさへ出現しました．外に於ては満洲及上海に於ける戦乱と，国際聯盟の波瀾がありました．其等に就ては屢々私が此壇上より所見を吐露し諸君の注意を促し，且つ参考に供しました．一方諸君に於ては，他に率先して，慰問使を満蒙の奥地まで派遣し，或は視察団を送り，寿府，上海派遣軍及関東皇軍へは，激励又感謝の電文を致し，校内に於ては満蒙研究会等を組織し，我校健児として赤心報国の意気を表示し得た

ことは，実に多とするに足ると存じます．我全権の寿府を退去したることに由り，所謂大風一過の観があります．聯盟脱退が余儀なかつたことは，我外交の失敗であるか否やは，別の事として苟くも世界の外交場裡に，40有余国を相手にし其所信を主張して，一歩も枉げざる其態度は我国外交としては空前の事に属し，帝国の威信又大に発揚せられたることは，実に痛快の至りであります．此の如きは万古不易の我国体に帰因することは勿論でありますが，又一方に於ては我国工業の進歩発達が貢献することの尠からざるは，何人も否定すること能はざる処と存じます．

回顧するに，我国の工業は戦争の度毎に長足の進歩をいたしました．就中世界戦争の時には特に目醒しき進歩発展を遂げましたが，爾来10有余年，之を現今の状態と比較いたしますと，又隔世の観があります．大戦後打続く大不況の裡にも，独り工業技術上の進歩発達は，実に確実なる針路を辿つて進展して来たことは，実に我国として，非常に心強き次第でありまして，私をして，転々好景気は粗製濫造を恣にせしめ，不景気は技術の進歩を促進せしむるの思ひをなさしめます．

諸君は，在学中体得したる，非常時の我帝国，学得したる専門的智識，自由啓発により練磨したる人格，何れも貴重なものでありますが，猶至つて貧弱なものと存じます．今後世に立ち社会を以て学校の延長と心得，造次顚沛にも向上修養の途を忘れず，益々其包容を大にし，又技術家たりと雖も，天晴国士の風を以て，一層君国の為めに尽粋せられ，我国工業の充実に勤め，国威発揚に貢献せられんことを希望いたします．

来賓各位，本校の創立は大正9年でありました．当時既に不景気の風は全国に吹き渡り，相当に就職難の声がありました．大正12年に初めて卒業生を出しましたが，景気は更に回復せず，卒業生の就職が困難でありました．爾来10ヶ年にして，今年初めて稍愁眉を開きました．

併し景気が良からうが，悪しからうが，卒業したものが如何なる地位にでも就職を為さしめ其処を得せしめなければなりません．何卒閣下各位の御同情御後援を仰ぎ度く，懇願する次第で御座ります．

我校の出身者が，其成績が佳良であると賞賛をされますれば，我々教職員に取ては此程嬉敷い事がありません．同時に其成績が悪いと非難されますれば，我々教職員に取つては，此程参考になり，又刺戟になるものはありません．

併しながら此等の批判を聞くにつけ，時とすると私に一種不満の感を起さしむることがあります．それは優良な卒業生であると，何だか其工場に能率のよい機械か，器具を購入したるかの如き思ひを為さしめ，劣等なものであると悪い機械か，器具を購入したかの感を持つて居らるゝことであります．今度購入した機械がとても能率が良い．此では金が儲かる，今度の機械は非常に故障が多い，此ではやり切れないと云ふ様に，全然人間と機械を混同して居られる様であります．併し此は決して東京や，横浜での事ではありません．悪しからず御容赦を願ひます．

或は広き意味に於て，左様な理屈になるのかも知れませんが，人間と機械との間には，其処に何等か，根本的の相違があることを，確信いたして居ります．故に今日流行する，管理工学即ち能率増進法とか，事業の合理化と云ふことに於ても，能率や事業其物のみを攻究して，人間を除外した法規を作つたならば，何時かは其弊を受けるものと，私は想像いたします．米国や独逸や其他，外国ならいざ知らず，我国では必ず其弊があります．如何となれば，法律に於ては人間の自由は，其等外国で能く確保せられて居るかも知れませんが，人間天賦の自由は，より豊かに，我民族が社会的に保有して居ると信ずるからであります．

此の如き問題は，平素私の頭に断へず来往する処のものであります．来賓各位には，平素御懇親を忝ふする方々でありますから，機を以て御垂教を賜はらば幸甚の至りで御座ります．

此は一つの楽屋話しでありましたが，今一つお聞きを願ひたいことがございます．其れは我校に於ける震災記念資金部の事業であります．彼の震災当時，災害の為め学資金に窮した学生は約14人程ありました．幸にして神戸高工，秋田鉱山専門学校等から若干の慰問金がありましたので，其れに職員在学生及び卒業生其他よりの寄付金を加へ，玆に震災記念奨学資金部が創立されました．爾来10ヶ年間，資金の調達に一方ならぬ苦労を致しましたが，最近発明を奨励する目的を以て組織せられた，公心一円会が解散して，其資金約5千円の寄付を受け，玆に本部は思ひがけなき幸運に際会しました．如何に貸与を受けた学生が，安心して本校に其勤学を継続しつつあるか，又其父兄

が如何に喜びつゝあるかが，察すべきであります．特に公心一円会の如きものを，私をして容易に組織せしめ，又其清算に由て，其多額の資金を寄付せられたるが如き，公心一円会員各位の御同情と，御理解は何と感謝を申上げて宜敷か，只々感激に堪へぬ次第で御座ります．……

15. 軍事教練

軍事教練については前節でも述べたが，昭和8年秋の3年生の野外演習は，少しく戦線異状あり，と言える．この演習は10月4日から7日まで滝河原で行なわれたが教官の国方中佐が帰郷不在のため，本校職員で軍職にあった伊藤歩兵少尉（建築教授）鈴木工兵少尉（機械助教授）北里工兵少尉（電化雇）が軍服姿で随行，指導をした．国方中佐の代役を仰せつかった大木教官も感心するほどの出きばえで全員和気あいあいの野外訓練であった．

16. 第13回開校記念祭

昭和8年11月1日から3日まで恒例の開校記念祭が開催された．校内開放は快晴にめぐまれ，参観者は前年度よりはるかに多かった．校内の催しは各科とも大体前年度同様だったが，売店，喫茶店が復活し賑わった．校外進出の催し物としては横浜名物の建築科芸術大行進「大主亜細亜義」および応化の「ダルマ行列」があったが，第1日目は夜行なわれ中途で秋雨におそわれ，第3日目は朝香宮妃殿下薨去のため取止めとなった．

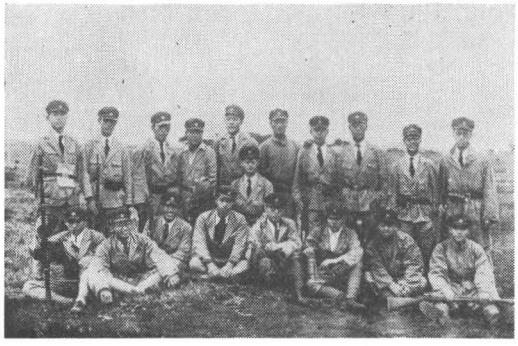
17. 就職状況ようやく好転

(1) 就職難時代

大正の終わりから昭和初頭の金融逼迫(ひっぱく)，つづいて世界パニックと，日本経済は10数年不況にあえいだがその間就職難，失業者の増加が，大きな社会問題として憂慮された．

ところが景気は日支事変を契機として立ち直り，職業難も昭和6年ごろがピークで，7年末ごろからようやく好転しはじめた．

軍事教練の小休止（昭和7年）



記念祭（昭和8年）

本校卒業生は世間から優秀と認められていたのと，校長はじめ職員一同の努力により大部分が何とか適所へ就職することはできたが，しかし，世間一般の情勢からは例外ではあり得なかった．

横浜高工時報昭和6年3月5日号に校友会講演部委員栗林藤作(機械)が，当時の就職難が如何に深刻なものであったかを次のように述べている．

> 毎年同じセカンドにきざまれて回り来る卒業期3月は，幾年か前わが国資本主義が上向線を辿りつつ進展を続けていた時代，学生にとって華かに祝福さるべき幸福の3月であった．しかし深刻化しゆく財界不況は，遂に失業問題の解決を絶望的状態に落入らしめ，尨大なるインテリ予備軍の畳々たる中に，更に無数の失業者群を街頭に抛り出す3月となった．我に職を与えよ！　パンを与えよ！　それは大学専門学校3万の卒業生の肺腑よりほとばしり出る現実に対する苦悩の叫びだ．猛烈なる就職運動の勝者と生活不安のドン底に墜落さるる敗者との二分は，昨日の純真なる学徒をして，前者は魂の抜けたる一個の傀儡乃至一個の小利巧なる機械たらしめ，後者は建設的現実性を欠く一個の反逆児たらしむ．肉弾相交ゆる就職戦線を凝視めながら，なお生命を賭して突進せざるを得ない者の必然の結果といわんか，……眼前に展開されたる苛酷なる就職難の脅威に萎縮するか，将又……そは自由主義の真髄をつかむ諸兄により実証されることである．別離の哀愁を胸に秘めて一文を送る．

高工時報昭和5年12月20日号には「恐慌の最中に乗出す卒業生」と題して

> 大量馘首と日々に増大する失業群！　この底知れぬ不景気！　わけても失業地獄の展開の中に来春3月又もや25,000の大学高専の卒業生が投げ出されようとしている．今日この頃，今春学校を出たものの43%は未だに彼らの安定した職場を見出すことが出来ずにいる．

と述べ，本校昭和6年春卒業生の就職率を次のように記している．

応化100%，機械97%，建築75%，電化52%（5年12月調査）

さらに前出の昭和6年3月の第9回卒業式の校長式辞には「世間一般不況のため卒業生の就職難には実に閉口するのであります．……此点に就て切に来賓各位の御同情と御助力をお願ひいたします．」と述べている．

【昭和6年までの本校卒業生の就職状況】

この就職難がどのようなものであったかの具体的数字について，非常に興味ある統計が横浜工業会昭和6年の会誌に山口辰男（応化4期，大15卒）調査で記載されている．本校のごとき有名校でかつ実力十分な卒業生を擁している学校においてすら，このころの就職難がいかなるものであったかがよくうかがわれる．次に簡単に転載する．

	機械 322名		応化 309名		電化 307名	
	名	%	名	%	名	%
1. 官庁方面	63	19.57	45	14.56	52	16.94
2. 会社工場 〃	168	52.19	152	49.19	125	40.72
3. 学校 〃	21	6.52	35	11.33	51	16.61
4. 自営	10	3.11	10	3.23	3	0.98
5. 上級学校	10	3.11	7	2.27	6	1.95
6. 海外方面	4	1.24	4	1.29	4	1.30
7. 兵役	5	1.55	4	1.29	7	2.28
8. ルンペン	41	12.73	52	16.84	59	19.22

この統計のうちのルンペン* が失業者をさしており，筆者（山口辰男）は次のように解説している．「ルンペンとはまことに失礼な言ひ分ですが時節柄，職業を得られない諸兄をこう呼んでみました．御気にさわったら御許し願ひたい．このルンペン諸氏の数は相当多く，実に機械41名，応化52名，電化59名の多きに達しております．このルンペン氏らは各期とも殆ど同数位宛あります．この中には第9期を除く以外は，全然未就職と言ふのはなく，何れも中途にして失業された諸氏が多いのであります．」

（注） ルンペン （Lumpen ドイツ）（ボロ，屑の意） 浮浪人失業者 （広辞苑）

なおこの調査の対象は大正12年第1回卒業生から昭和6年3月卒業の第9期生までの合計である．

機械（1期～9期）	卒業生総数	336名	死亡	14	行方不明	0	調査対象	322名
応化（　〃　）	〃	329		10		10		309
電化（　〃　）	〃	322	死亡・行方不明		計15			307

また，6年2月8日の東京日日新聞（神奈川東日）には「街に出たエンジニア就職地獄を蹴飛ばして　力だめしの朗かな生存　浜の高工に胆を練った人々」として応化昭2卒のK. Yの米屋，応化大14卒 M. I の画家，電化昭4卒 R. H の洗たく屋，同科同期卒 Y. H の養鶏業など変わった方向へ進路を求めた人々のことを載せている．

昭和7年はじめに至っても，まだ不景気風は去らず，失業者はちまたに満ちあふれた．昭和7年3月5日高工時報では「卒業生を送る」と題し「ここに長々と述べるまでもなく，現社会の情勢は世界的経済恐慌激化のクライマックスに達し，幾万という失業者群は，餓死線上を彷徨している．而してその惨状極まるルンペン層には本年も亦旬日の後に幾千というインテリ階級が加えられんとし，今や世は就職難の最高潮に達せんとしている．……」

(2) ようやく好況に向かう

昭和8年になると景気は好転をみせはじめた．岩波新書・昭和史によると「昭和7年秋ごろからようやく恐慌をぬけ出した日本資本主義は，8年，9年と景気回復の坂を上りつづけた．日本が列国に先んじて景気回復に向かったのは，軍事費の増大と，時局匡救費の放出にともなう財政インフレと，金輸出再解禁以後の為替安を利したダンピング輸出にもとづくものであった．昭和7年度の一般会計予算は，追加予算を含め20億円をこえ，前年の14億7千万円をはるかに上まわった．とりわけ軍事費は6年の4億6千万円（総予算の31.2%）より7年，7億円(35.9%)，8年，8億5千万円（37.9%），9年，9億5千万円（44%）とうなぎ上りにあがった．

軍需インフレによって，従来軽工業中心だった日本資本主義は，金属，機械器具，化学などの重化学工業を急速に発展させた．これら3部門の工業生産額は6年には工産総額の34%だったのが10年には48%に上り，重化学工業の労働者の占める比率は6年の22%より10年末の34%と上昇した．これとともに職工1,000人以上の大企業の生産額は6年より10年末までの間に7倍以上に増大し満州ブームといわれた9年，10年はとくにサラリーマン階級にとっては，一時的にもせよ

生活の安定感を回復した．それは農業恐慌がまだ続いて米価その他の生活費が安く，労働者の生活に比較して相対的に安定していたためであった．銀座のカフエーが全盛期を迎えたのもこの時期であった」とある．

昭和８年３月第11回卒業式の鈴木校長の式辞中に

「本校は大正12年に始めて卒業生を出しましたが，景気はさらに回復せず，卒業生の就職が因難でありました．爾来10ケ年にして，今年始めて稍愁眉を開きました．……」とある．

(3) わが世の春となる

これが昭和10年となると次のように「猛景気の就職陣」となる．すなわち昭和９年12月20日の高工時報によると「我が世の春を謳歌する猛景気の就職陣，全科決定目睫に迫る」という見出しで次のように記している．「さて卒業と共に心配になるのは自分の職業であるがここ２，３年来，軍需工業，インフレ景気の波に乗って就職戦線も全く活況を呈し，数年前の如く各先生の宅を廻って歩き，それでも間に合わなくて学校は出たけれどと嘆いた事などは全く夢のよう.」とあり，さらに各科に分けて記している．略記すると次の通り，

【機械工学科】

当科は12月６日に早くも全員就職が決定した．従来最も良好な状態にあった機械科においても年内に全部決定したことは初めてである．就職先の内訳けは　△機械製作工場　17　△人絹製糸，製菓，紡績，製糖 10　△電気機械　5　△航空，自動車　3　△満鉄，鉄道　4　△その他 2

【応用化学科】

「今までに半分以上決定しており，残りも大体交渉中で，来春になれば例年の如く京浜間工場から申し込みがあるから，３月末までには全部決定する」と先生方も落着いている．

【電気化学】

「年内には全部目鼻がついて，売切れの看板を出す程で既に確定，又は内定したものが32名，残りも交渉中です．就職先は住友，三菱，三井，日本窒素，満鉄，曹達が重なところ，とにかく２学期中に殆ど目鼻がついたのは近年稀なことです.」

【建築学科】

「当科は例年各科に比して遅れ勝ちだが今年は５名がすでに決定，残りも来年３月迄には片がつく」と先生方も楽観.

【造船工学科】

全国に唯一つというこの科の就職状況の優秀なことは世間に知られたこと，しかし今年はどうした事か決定した者は 1/3，申込み数の多い割に決定が少ないという珍現象を呈している．

18.　本校６博士祝賀会

本校職員中，昭和３年以来昭和８年までに博士の学位を授与されたもの９名という多数に達したが，この事は本校の名誉であるのみならず，横浜市の誇りであるとして，市の有識者　井坂孝，

原富太郎，大西一郎，渡辺福三郎，横山助成，中村房次郎，有吉忠一らが発起人となり，昭和9年2月24日午後5時半より横浜ニューグランドで祝賀宴を開いた．（なお柏木一三，池内本，冨山保の3博士はすでに昭和3年祝賀会を開いたので，今回はそれ以後の6博士を主賓とした．）出席者170余名で盛会であった．席上，有吉商工会議所会頭は大略次の通りの祝辞を贈った．

横浜高工は神奈川県と横浜市が創立費も敷地も一切合財引きうけて立てた学校である．わが横浜にとっては，わが子の様である．その子が段々と成長して一度に6博士の祝賀会をやる様になったのは嬉しい限りである．そしてこれらの名誉ある学者を横浜高工にピックアップされた鈴木校長の手腕に多大の敬意を表する．

当日の主賓である6博士とその主要研究論文は次の通りである．

草間　時蕃（応化）　「ナフタリンの接触環元について」
安川数太郎（数学）　「変量函数の平均値，標準偏差，相関係数及び度数分布について」
遠藤　政直（機械）　「タービンポンプに関する実験的研究」
横山　盛彰（電化）　「チクロヘキサーン及その誘導体の電解酸化について」
河合　　匡（機械）　「常温加工による金属の諸機械性質の変化に関する研究」
木戸　　潔（物理）　「化合物及イオンの磁気係数について」

19.　第12回卒業式

第12回卒業式は昭和9年3月15日午後3時より本校講堂で工業専修学校と合同で行なわれた．この日来賓として荒木大将（前陸相）を迎え，在郷軍人100余名，県市の名士，父兄等多数の来会者を見，さすがの大講堂もあふれんばかりであった．

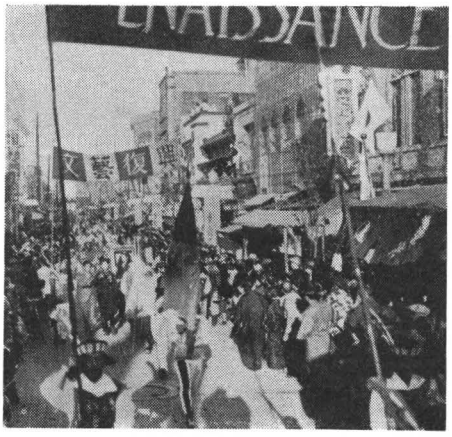
校長の式辞，横浜市長の祝辞，荒木大将の講演，卒業生の答辞あって午後6時終了した．

なお鈴木校長は後述のように昭和10年2月退任したので，これが同校長の卒業式式辞の最後となった．

学校長 式辞

……卒業生諸君，今や螢雪の功成り本日を以て各其所定の業を了へ，340人一団となつて，校門を出づることは，実に目出度き限りであります．門に倚り，諸君の錦衣帰郷を待つ，父兄諸君に於ても，嘸御満足の事と察します．特に大正12年，第1回の卒業生を社会に送つて以来打続く不景気の為め，折角校門を出でゝも，就職難の為め，一方ならず苦労をいたしましたが，経済界の一陽来復せる為め，今年初めて就職難より解放せられ，漸く愁眉を開き得たることは，実に御同慶の至りに堪へざる次第であります．抑も諸君が我々の学校に於て学び得た処のものは，技術家として，又科学者としての全くいろはに過ぎないものであります．此より社会に出でゝ，刻苦勉励之を大成せしめねばなりません．而して自由啓発，自治自覚の我校精神は諸君の全生涯を通して，深く脳裡に徹底せしめ，颯爽たる国士的風格と，真摯なる科学者的態度を以て，奮励努力，一身を忘れて，国家の為め尽瘁し，以て皇恩の万分の一に酬ひ奉らんことは，男子の本懐でありまして，造次顚沛にも忘れてはなりません．

教職員諸君，過去1年間，和衷協同，不肖を助けて，厳格なる規則も，又規約もなく，一見頗る放慢無秩序の裡に，規律と，制裁を樹立して，整然として，今日の盛典に達せしめたる，諸君の御努力に対し，此機会に於て，深甚の謝意を表しま



記念祭での建築科大行進（ルネッサンス）（昭和９年）

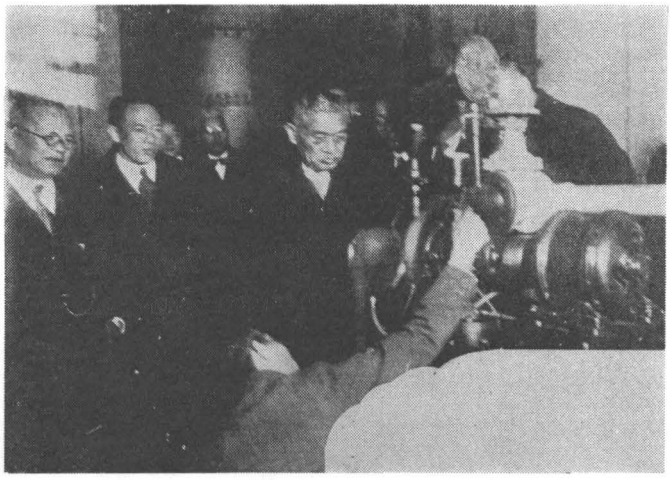
す．特に卒業生の就職に就ては，一方ならぬ御苦労をかけ，又，就職難の時に於て，一層の面倒を見る次第でありまして，実に容易ならぬ．職責以外の重任であります．就職は卒業生に取り，実に重大なる件で，利害関係の纏綿したる，実際問題であります．此れが取扱の如何は，教育の根源に，大なる影響を，及ぼすものと信じます．愛情を離れたる，無邪の心境を以て，就職の為めに尽くすべきことは，我校教育に，陸離たる有終の美を，添へるものと存じます．猶此等間断なき，職務に服しながら，更に諸君の学術に精進せられ，学界に貢献せられたる，幾多の業績が現れてゐます．此等の業績は，学生の指導教育上，無言裡に大なる感化を及ぼすべきは言ふまでもありません．此機会に於て，感謝と，敬意を表する次第であります……．

20.　昭和9年の記念祭

開校ここに14年，11月１日講堂において開校記念式が挙行された．遠藤，鈴木(京)，池内，大西４教授および鈴木校長の祝辞ののち校歌斉唱，万歳三唱があって式を終わり，配られた赤飯を一同で食し当日を祝った．午後は名物の記念祭に移った．同日および翌２日は雨で人出も少なかったが，最終日の３日の明治節の日は快晴に恵まれ，入場者２万人以上の盛況であった．今年は実業教育50周年に当たり，鈴木校長もひとつ大いにやるべしと声をかけたので，例年に増して，職員，校友会も大はりきりであった．また，各科の催し物も非常時を反映したものが多く盛大であった．なかでも建築科の名物の芸術大行進は「ルネッサンス」と題した山車を先頭にして２日，３日市中をねり歩き人気をさらった．

21.　実業教育50周年　鈴木校長　河合教授表彰

昭和９年をもって実業教育満50年になったので，文部省を中心として各地で盛んな行事が行なわれた．この50年を記念して文部省実業学務局から昭和９年10月に刊行された「実業教育50年史」の序につぎのように記されている．



松田文部大臣（中央）来校 （昭和10年）

我国の教育制度は明治５年に頒布された学制に濫觴する．……如実に我国の実業教育法令と認むべきものは寧ろ明治16年に発布された農学校通則に在ると信ずる．本年はそれより満50年に相当するところから，仲秋10月を期し，実業教育50周年記念を催し，その事業の一として本書を編纂し，大方の清鑑を煩はす次第である．

50年の歳月短かしと言ふべからずと雖も，今や実業専門学校52，実業学校 1,003，実業補習学校 15,082を数へ，……実業教育創始以来 700 万に余る人材を養成し，以て邦家の発展に貢献しつつあるは偉なりと云ふべきである……．

鈴木校長　河合教授表彰

鈴木校長は昭和８年11月13日，帝国教育会50年記念として同会より教育功労賞が贈られた．

また鈴木校長，河合教授は昭和９年10月20日実業教育50周年記念会より，実業教育功労者として表彰された．

22.　松田文相の来校

昭和10年１月10日午後，松田文相（松田源治，岡田内閣）菊地実業局長が本校を視察した．航空科の独立問題，本建築促進問題等を控え，文相の来校は注目されるところであった．

23.　高工時報創刊10周年を迎える

昭和10年１月15日をもって，わが横浜高工時報は創刊10周年を迎えた．さきに述べたように大正14年１月15日，１号を刊行してから早くも10年を経過した．この10年間部長，委員長，部員と時報発行に携わった人々は年月と共に変わったけれども，そこには時報精神，高工スピリットは変わることなく，その紙面は全国学生新聞中他に比肩するもののない充実ぶりを示した．昭和10年１月19日第200号をもってその記念号とした．

その記念号の部説では「10周年を迎えて更に躍進を期す」として次のように述べている．

厳正忠実なる態度を持し，常に世論の喚起を促し，不偏不党，学内融和，自由主義扶育を標榜し，校友の自覚を助長，また弘陵に関心を有する一般人士の圧倒的歓迎を受け，校外発送の6割が横浜市内有力団体であることは時報が一般社会層にも浸潤しつつある証左でもある．この10年の健実なる発展を基礎に，さらに自由主義達成の彼岸へ邁進せんとするものである．

24. 創立15周年

昭和10年1月19日をもって本校はここに15周年のめでたい日を迎えた（大正9年1月19日勅令によって本校の設置が公布）．このことに関し10年1月18日の新学期に当たり，鈴木校長は15年ぐらいでお祝いをするのは学校としては早い．今年は何も特別のことはしない，と次の通り語った．

「何周年のお祝などということは卒業生が主となってすべきことで，世の中からあの人はと言はれる程の傑物も出ていない今から，それに15周年に祝辞を読む為に急ごしらへのモーニングなど板につかぬものを着こんで来たところで噴飯ものである．25年もしたら必ずや卒業生中にも傑物が出てきて本当に25周年祭を飾ることであらうと確信して，今年の15周年は平年として過すつもりである．」

25. 学園人事

池内教授 退官

本校の名物教授でポンちゃんで親しまれていた池内本教授は，昭和8年9月30日付けで自ら教授の職を退きあと講師を委嘱された．

同教授は本校創立時代に年齢わずか36歳で物理学教授として赴任，14年間本校教授として本校のために尽くした．同教授はまた一高の名3塁手として鳴らした人で，本校の初代野球部長として，素手で投手の球を受け選手たちを驚かせた．あだ名のポンちゃんは名前の本を夏目漱石の坊ちゃんにもじったものである．

退官にあたって同教授は次のように語った．

物理学界は新量子論のめざましき発展により自分など拱手して唯々その進歩の早きに驚ろくのみである．例へば数年前に自分も少しばかり実験した事のあるコンプトン効果についても，その当時の理論は今や古典的理論と言はるる様になってしまってゐる．

又他方現代の世相を観るに5，15事件*突発以来，益々渾沌たる状態となり自分には全く分らなくなった．この際静かに考へて見たい．……

（高工時報　退官に当り私の心境）

（注）　5，15事件　昭和7年5月15日　三上卓，山岸宏両海軍中尉らが首相官邸を襲い，犬養首相をピストルで射殺した事件．

木戸教　理学博士に

木戸潔教授はかねて母校東北帝大へ「化合物及イオンの磁気係数に就て」の論文提出中のところ，昭和8年11月理学博士の称号が授与された．これで本校8人目の博士が誕生したわけである．なお日本学術振興会より研究費1,700円が交付された．

東北帝大総長鉄の本多光太郎博士の愛弟子である.

河合教授 工学博士に

機械工学科の河合匡教授はかねて東京帝大に「常温加工による金属の諸機械性質の変化に関する研究」という論文を提出していたが，昭和8年12月工学博士の称号を授与された．本校では9人目の博士で工学博士は2人目である.

なお同教授は蔵前の工業教員養成所出身の学究である.

安中助教授 逝く

応化助教授安中足穂は病気のため，10年1月12日死去した．行年31歳の若さであった.

長崎生れ，本校応化第3期で大正14年卒，故柏木博士門下で仏国トールズに留学，ポール・サバチエー（ノーベル賞受賞者）に師事し，「有機化合物に関する触媒の作用」について学位を得，昭和5年5月帰国，本校においては故柏木教授の「フランの誘導体の研究」を継承，研究をつづけていた篤学の士で，その死は各方面より惜しまれた.

26. 校友会運動部の活躍

昭和6年から9年にかけて本校運動部の活躍はめざましく一黄金時代を画した．若人たちは3年の弘陵生活に青春の血をたぎらせ「金港の波高らかに」「大岡の原野に」「弘陵の萠ゆる若葉に」走り，漕ぎ，投げ，撃ち，歌い，ある時は勝って欣喜雀躍(きんきじゃくやく)し，ある時は敗れて明年を誓って泣き，若き日の感激を満喫した.

次にこのころの主な優勝記録を拾ってみよう.

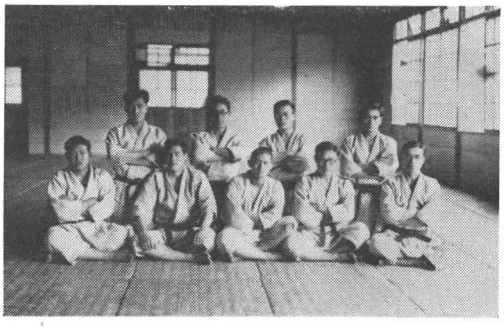
＜昭和6年度＞

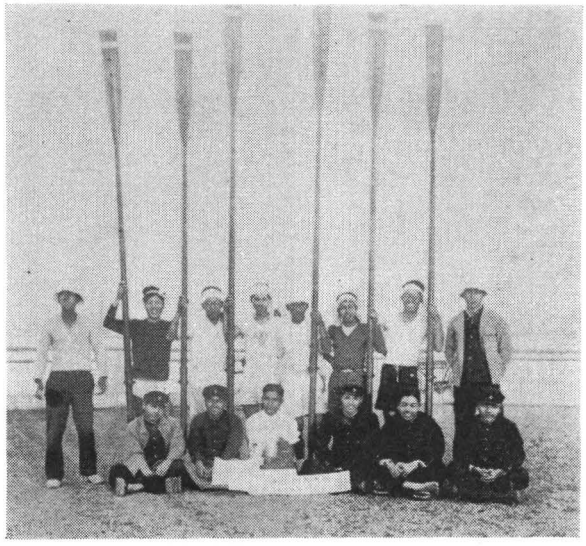
1. 対高商定期戦

野　球	負	5—12，3—6，5月31日，6月1日　公園球場
庭　球	勝	5—3，5月17日
競　技	負	28—29，6月14日　Y校々庭
柔　道	勝	6月24日　本校道場　大将1人を残して勝
蹴　球	負	1—6，2月12日　公園球場

駅伝ゴール前風景（昭和7年）

柔道部（昭和9年）





ボート部 （昭和7年）

ボート部合宿所にて

籠　球　　勝　　40—18　7月初日　高商コート

弓　道　　勝　　69中—62中　6月14日

ラグビー　勝　　22—0　12月13日　本校々庭　雪中に大勝

2.　その他の対外試合

剣道部

対浜松高工定期戦　本校勝　6月14日　本校道場これで2勝3敗となる.

端艇部

① 横浜4専門大会に優勝　　6月21日　第1回対横浜商専を破り，決勝に関東学院を破る

② 全国高専大会に優勝　　8月23日　隅田川において1回戦日大工科を破り，決勝に長崎高商棄権したため独漕する

③ 第6回明治神宮体育大会に優勝 11月1日—3日 隅田川において第1予選商大専門部を，準決勝で日大予科を，決勝で商大冬来倶楽部をそれぞれ破り，一昨年に引きつづき優勝.

ラグビー部

黄金時代ともいうべきか，昭和6年は対高商定期戦は22—0で勝ち，早大OBを一蹴，市民大会では高商を27—5で破った.

庭球部

各部のトップを切って5月17日対高商定期戦に勝ち，夏休み中の全国高工大会には惜しくも準決勝で敗れた．秋遠征の浜松高工を一蹴，市民大会には田中伊藤組がダブルスに優勝，6年度の対校マッチ勝率8割2分であった.

柔道部

ラグビー部（昭和7年）

新聞部（昭和7年）

東工大主催第一回全国高工大会は8月15日より参加校山梨，浜松，福井，神戸，本校の5高工および日大専門部工科，東京高等工学校の計7校で行なわれ，本校は東工，山梨を破り，日大と決勝を争い，大将以下3人を残してついには権を握る．

水泳部

1．　7月7日元町プールで開かれた第4回市内4専門水泳大会に出場優勝．

①　本校 58点，②　商専 51，③　高商 43，④　関東 5

2．　9月6日大阪府下茨木中学プールで行なわれた全国高工大会に出場，次の成績で優勝．

①　本校 66点，②　浜松高工 49，③　神戸高工 48，④　広島高工 25，⑤　福井高工 24，⑥　名古屋高工 8，⑦　京都高芸 0

山岳部

夏休み次の7班を組織してそれぞれ山を楽しんだ．

第1班　上高地キャンピング

2　　針の木，烏帽子，槍

3　　槍肩小屋，上高地

4　　富士登山

5　　赤城山，大沼湖畔キャンピング

6　　赤石岳

7　　白馬

＜昭和7年度＞

この年排球部が新しく校友会の正式な部となり，大山会計主任が新部長となった．活躍を今後に待つ．

1．　対高商定期戦

対高商定期戦の1年間の成績をみると8部のうち，野球，蹴球に敗れたのみで，他の6部においては完全に高商をおさえた．

野　球　復活第２回の対高商戦は開港記念日の６月２日より開かれ，第１回戦2—3Aで負，第２回戦は 4—1 で勝，第３回戦は1—10Aで惨敗.

庭　球　５月15日　高商コートで開かれ6—3で快勝

競　技　６月19日　高商グラウンドで$36^{1}/_{3}$点—$20^{2}/_{3}$点で勝

柔　道　６月25日　高商道場で対戦，大将同士の決戦となり遂に勝

籠　球　６月12日　高商コートで31—30の接戦で勝

弓　道　６月18日　元町道場で挙行59中—49中で５連覇

ラグビー　12月10日　本校グラウンド　勝

蹴　球　11月19日　横専グラウンド2—5で再び敗れる

2.　その他の対外試合

庭球部　４月24日より開催の県下硬球トーナメント戦に出場，は権を獲得した.

庭球部　７月25日からの大阪工大主催の第２回全国大会に出場，第１回本校 3—2 京都高工芸，第２回戦本校3—2明治専門，決勝戦本校3—2名古屋高工で本校初めて優勝.

籠球部　５月４日より開かれた市内４専門籠球リーグ戦には，本校は５勝１敗で優勝した.

競技部　競技部は６月４日，５日に福井高工グラウンドで開催の第８回全国高工陸上競技大会に出場，次の成績で優勝した.

①　本校 52点，②　福井 $46^{1}/_{3}$，③　浜松 $43^{1}/_{6}$，④　名古屋 $34^{1}/_{2}$

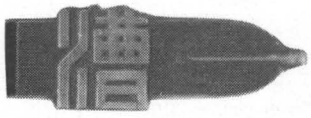
端艇部　６月29日の第１回横浜４専門リーグ戦に出場，西の橋—港橋間 750 メートルコースで３戦３勝して優勝.

京大主催第２回全国高専大会は７月30，31日の両日瀬田川で関催されたが，第１日は長崎高商を，第２日は決勝戦で強豪広島高師を破り，「固定席では横浜高工」の名を高からしめた.

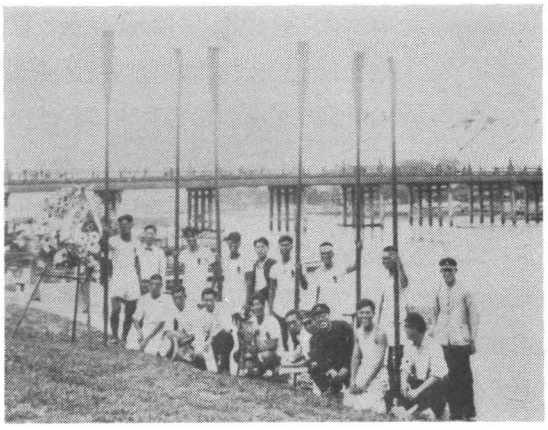
剣道部　６月18日東京高等工芸と対戦２人を残して勝，同月26日の第１回市内４専門リーグ戦には惜しくも敗れる.

籠球部（昭和９年）

邦楽部（昭和９年）



ボート部バッジ



第3回全国専門学校優勝競漕大会
優勝記念（後は瀬田の唐橋）

水泳部　第5回市内5専門対抗大会は7月8日，9日と元町プールで開かれたが，次の成績で3連勝．①　高工 61，②　高商 49，③　横専 28，④　Y専 19，⑤　関東 1

7月24日　大阪市立運動場プールでの大阪工大主催第3回高工水上競技大会において再び優勝．成績次の通り．①　本校 80点，②　福井 44，③　京都 39，④　神戸 37，⑤　浜松 25，⑥　名古屋 7，⑦　広島 19

野球部　鮮満各地に遠征　竹内部長，大塚委員長部員15名は暑中休暇を利用して 7月27日下関出発，朝鮮，満州，青島方面へ遠征，各地で試合を行ない25日間に11戦7勝の成績で8月下旬帰校した．

3.　工場陸上競技大会

本校競技部主催第1回京浜工場対抗陸上競技大会は，11月26日保土ケ谷競技場で開催，参加工場はマツダ，芝浦，東洋電機，森永製菓，旭スレート，古河電線，新潟鉄工，富士電機，専売局の9社で，マツダが60点を獲得優勝した．この種の工場対抗の運動競技は今回がはじめてで，工場人の体育増進と，工場関係者の親睦融和に役だつところ大なるものがあった．

＜昭和8年度＞

1.　対高商定期戦

野　球　6月 2．3．5日　1回戦1—7敗，2回戦8—7勝，3回戦0—5で敗，3連敗．

庭　球　5月28日　スコア記録なし　負

競　技　6月18日　高商トラック19—38で惨敗

柔　道　6月17日　本校道場 大将を残して勝

籠　球　6月18日　大岡小学校体育館で64—57で勝

弓　道　6月18日　元町道場63中—52中で6連勝

ラグビー　12月10日　30—0大勝

蹴　球　6月18日　本校グラウンド5—4定期戦開始以来6回目で初めて勝つ

2.　その他の対外試合

端艇部　6月25日　大岡川　横浜4専門大会　優勝

7月31日　瀬田川　全国高専大会　再度優勝

11月2日，3日　隅田川　神宮大会　優勝

水泳部　7月7日，8日　第6回横浜学生水上競技大会で優勝参加校5校

7月20日　大阪第4回全国高工水上大会で3度優勝

剣道部　7月13日～15日　東京工大主催第2回全国高工大会に優勝

3．工場陸上競技大会

本校主催第2回京浜工場対抗競技　11月19日保土ケ谷グラウンドで開催，富士電機が優勝

＜昭和9年度＞

1．対高商定期戦

野　球　6月2日第1回　1—5A負　6月4日第2回　5A—3勝　6月6日第3回　8—0勝　3連敗の後ようやく　勝

庭　球　5月27日　高商コート3—6　負　2連敗

競　技　5月17日　23—35負　通算3勝4敗1引分となる

柔　道　6月17日　高商道場5人を残して大勝3連勝

蹴　球　6月24日　高商グラウンド2—0　2連勝通算2勝2敗3引分となる

籠　球　6月24日　高商コート38—33　5連勝成る

弓　道　11月11日　元町道場83中—43中　7連勝

ラグビー　12月9日　26—6　勝（専門リーグ戦を兼ねる）

対高商野球戦は，3連敗を喫したあとの久しぶりの快勝とて，応援団はブラスバンドを先頭に意気揚々とがい歌をあげて学校へ引きかえした．大岡の全町民は熱狂してこれを迎え，職員，生徒，先輩は大講堂にあふれ，野球部のために祝杯をあげた．

2．その他の対校試合

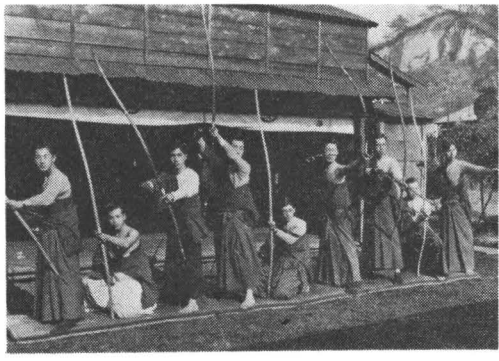
端　艇　6月24日　大岡川筋　市内専門競漕に優勝

7月28，29日　瀬田川全国専門学校競漕大会3年連勝

水　泳　8月6日　元町プール第7回市内5専門水上競技大会に5度優勝

乗馬クラブ（昭和6年）

弓道部（昭和9年）



① 高工 61, ② Y専 36, ③ 横専 27, ④ 関東 26, ⑤ 高商 8

7月22日 宝塚プール全国高工水上大会4度連勝 ① 本校 84, ② 京都工芸 34 以下略

ラグビー 第2回県下4専門ラグビー 11月24日本校グラウンドで26—6でY専を，11月29日本校グラウンドで 22—3 で横専を，12月9日本校グラウンドで 26—6 で高商を破り，昨年につづき連勝した.

昭和9年懸賞当選応援歌

応援歌 機2 木暮正夫 作詞

1. みなぎる力 黒鉄の腕
   高鳴る血潮 若き腕
   烈！ 烈！ 相搏つ
   熱また力
   制覇の剣高らかに
   かざせよ男子 立てよ今

2. 溢るる正気 自由の叫び
   湧き立ついぶき 若き魂
   烈！ 烈！ 相搏つ
   熱また力
   理想の旗高らかに
   ふるへよ男子 立てよ今

応援歌 機2 天野浩平 作詞

1. 見よ鉄腕に漲る力
   聞け我胸に 高鳴る血潮
   今し火を吐く殲滅の球
   戞然空に長打の響

2. あゝ青春の感激の時
   自由の誉 覇業を遂げて
   五百の健児声高らかに
   揚げよ歌へよ我等の凱歌
   高工！ 高工！ 横浜高工

第1章　第5節　鈴木校長の退任と冨山校長の就任

昭和10年2月，鈴木校長は突然退任し，二代校長として冨山保が就任した．鈴木校長の退任のあいさつに学生たちはおいおいと声を上げて泣いた．自由教育の父鈴木達治は在任15年で自ら学園を去ったが，その後も本校名誉教授として，永く本校のために尽力し，何時までも暖かく学園を見守っていた．

本節では鈴木校長の退任と冨山校長の就任について述べる．

1.　鈴木校長の退任

本校創立以来，終始一貫自由主義の信念のもとに教育にまい進してきた本校校長鈴木達治は，後進に道を開き新風を学園に吹き入れるため，学校創立満15周年でもありまた学校長として勤続満15周年の日に当たる昭和10年1月19日退職を決意し，諸般の手続きを完了，2月13日依願免本官の発令があった．なお同時に新校長に電化講師冨山保が発令された．

また同時に橋本重隆，渡辺義勝，山下誠太郎3教授は校長と進退を共にし同日付けで辞任した．

大正9年本校創立以来自由啓発主義の旗幟を高く掲げ，ざん新な教育指導原理を身をもって実践し，機械的職業教育の風潮の中にき然として立ち，この横浜の一角に自由教育の父鈴木達治ありとうたわしめた教育界の巨人は，全校生徒に惜しまれつつここに突如として自ら退任したのであった．

2月13日前校長鈴木達治，新校長冨山保はそれぞれ次の通り語った．

鈴木校長 挨拶

今回突然辞職を決行したのであるが吾輩の心境は既に創立当時から定まつてゐたものであつて何等他の事情に依るものではない．即ち公人としての，出処進退は一点の暗影なく明らかなものでなければならぬ．吾輩は創立以来10年或は15年勤めたならば必ず後進に道を譲り校内の気分一新をせねばならぬとの考へから老軀を提げて何時迄も恋々として職に嚙りつき老ひぼれた醜態を曝したくなかつたのである．今回の此挙に対して世間では種々なるデマを飛ばす向きもあるが，吾輩の心境には一点の邪なく不純な動機は毛頭も無く官吏として出処進退の正道を行つたものと心得てゐる……．

吾輩と進退を共にして勇退してくれた三教授は皆学校の経済的行詰りを打開せんが為に犠牲になつて頂いたので，感激して居る次第である……．

後任の冨山先生はその人格に於ても見識に於ても吾輩の後を襲ふてしかも尚ほ吾輩以上の手腕を発揮される所の真に，変り栄えある人と云えるのである．吾輩が云ふ迄もなく諸君が何れ冨山新校長と親しく膝を交へて見れば判る事であるが実に気持ちの好い人格者で天稟の風格と云ふものには

只管敬服の外はない．吾輩は決して冨山先生に吾輩の主義主張を踏襲せよとか云ふ様な事は一切云はない．唯冨山先生の総てを信頼し切つてゐるのである．吾輩はこの六川山上に隠居はしても横浜高工の発展には大いに期待を持つてゐるのである……．

冨山新校長 談

甚だ突発的に任命せられましたので未だ之と云つて申上げられませんが，一言にして申すならば前校長鈴木先生の方針を踏襲して更に之をより徹底させると云ふ考へを持つて居ります．

私は水戸の出身ですが先祖から一つの掛字を持つて居るのです．それは「元気」と書いた有名な人の書です．この掛字は私が書生時代から座右にかけて総ての仕事に対してこの精神で当つて来たのです．即ち私の，処生上のモツトーとして総て元気でやると云ふ事を第一にして居るのであります．しかし元気と申しましても猛虎馮河の勇を振ふと云ふ事では決してありません．表面消極的で見えぬ様な事でも静かに隠忍してやると云ふ事も非常な元気を要するものです．

人間的道義に逆行する事なく総ての事に対し元気を以て当ると云ふ事は必要な事です．世の中の事は総て元気なくしては出来ません．本校としても最も尊ばねばならぬ事は青年の意気です．私が高等工業教育を礼讃するのはこの点です．即ち29や30になつて大学を出たとてそこには既に20や21の旺盛なる意気は消えてしまつて大きな仕事に取掛る元気はなくなつて居ります．昔より大事業をなしたものは元気ある青年時代を最も有効に活用した人であります．其処に於て本校を卒業する方々に大きな期待がかけられるのでありまして私が生徒諸君に望む第一のものは青年の士気を消耗せぬ様にして頂きたいと云ふ事です．之は私が昔から考へて居つた事柄です．

元来実業教育と云ふものは直ちに職業と云ふ事を念頭に置く関係から幾分早く娑婆臭くなつて元気を喪失する嫌ひがあるが，私としては飽く迄士気を振ひ起して青年の意気を高めて頂きたいと思ひます．若くして出られる本校生は元気良く世の中でも活躍して頂きたいと思つて居ります……．

なお鈴木前校長は２月14日午前11時から，講堂で全校職員生徒に対し，次のような悲壮な訣別（けつべつ）の辞を述べた．職員生徒一同は皆涙にむせび，各新聞社のフラッシュに映じ出された光景は悲痛の極であった．前述の言葉と重複するところがあるが煩をいとわず，今これを記しておく．

鈴木前校長 袂別の辞

多年私は此の講壇から諸君に見えて居りました．今日校長として去り行きまするに際して，諸君が斯く多数集つて見送つて下さることは私の衷心より有難く感謝致す所であります……．

学校創立の時分には私は10年学校をやつたら後進に譲らなければならぬと考へて居りました．ところが10年やつて見ますと云ふと，やはりそこには人間としての色々な煩悩や未練や執着と云ふものがあつて当時兼任して居つた商工実習校長だけを今の山本君に譲つて，本校だけは更に続けて来たのであります．今度は15年が来ました，是が私の辞するところの，絶好の機会であると思つて居つたのである．さうして昨冬以来此の正月19日を只すら待つて居つたのであります．其前日の18日には私は此の講堂で校長として最終の講演をしたのであります．其の時，明19日は学校の創立満15年に当ると云ふことを申上げた．其の時には既に私は辞表を書いて持つて居り，翌日之を文部省へ提出したのであります．

通常の辞表の体裁と云ふものは，病気に因つて職に耐へないから辞職を願ふと云ふので，官吏は勝手に辞職することは出来ないのであります．併しながら私は形式に拘泥せず自分の心境を最も率直に書きあらわした辞表を提出した．辞表の文句はかうである．即ち，「私儀本年を以て齢65の春を迎へ，且つ当１月19日を以て本校創立満15ヶ年に相達し申候につき此の機会を以て退職仕度云々」かう云う文句であつた．ところが文部省の方でも突然のことで，私のことを惜しまれました．

私は甚だそれは辱けない次第であります．併し，辞意を決したる上は仕方がないからとて聴許となりました．又辞表の文句も型破りでありましたが

文部省に於て其のまゝで差支ないとして其まゝ採用せられました．此点私は実に平身低頭して文部当局にお礼を申さなければならぬ心持ちが致されます．而して其の辞表は当分お預りを願ひたい．当分と雖も極めて短い間である．私が学校を出るにしても唯自分だけ無事に去つて行けば宜いと云う訳には行かない．それで尚ほ少々工作することがあるからそれが終るまでお待を願ひたいと云つて置いた．さうして私は帰りまして，数氏の教授の方々に，我輩は辞表を提出した．学校も最早15年経つたので，其の間に色々な行詰りが生じて居る．殊に，経済上の行詰り，教授定員の行詰り等を来して居るのであるからして，玆に更始一新を期して私も勇退をするのであるから，一つ私に同情し共に勇退をして学校の局面を新に開く途を講じて貰ひたいと一々お話を進めて行きました．昨日勅任待遇を以て依願免官になりました三教授は，全く私に同意せられて，それならば一緒に退かうと云ふので退職して下さつたのであつて，此の三人の教授の方々に対して何と申して宜いか，私に対するところの，義理人情友愛には，私は何ともお礼の申しやうがない．其の態度の立派なこと，何時までも私は有難く感謝する次第であります．尚ほ他に2名の教授のお方も私と進退を共にして下さると云ふことで辞表をお出しになりました．併し是は又色々都合に依りまして私が之を保留致しました．もう少し御尽力に与らなければならないので，或る時期まで待つて戴くことに致してあります．更に他に両三氏も進んで私と進退を共にしたいとの事で辞表を御提出になつた方があります．辱知の真情には洵に有難く感謝いたして居る次第です……．

私は何等学校を去ると云ふことに対しては，他意はありませぬ．多少のデマも世の中にはないではありませぬ．即ち私が実業界に出て働くと云ふやうな噂もありますが，もしその気分があるならば，無論此処に留つて又3年5年と勤めたい考へであります．他の学校に出て教育に従事すると云ふやうな気分があるなら，やはり同様此処に留ります．其の他の職に就く気分があるなら矢張り同様であります．

第2の天地を開拓せんとの野心は毛頭ないのでありまして，本校こそは私の教育生活終焉の地と定めた所であります．無論私は隠居をする積りである．しかしまだ自分が老耄れたとは考へて居ないが，他に職に就く考は毛頭持つて居りませぬ……．

偖て然らば後任はどうかと云ふことに対しましては，私は昨日任命せられたところの冨山博士を推薦致しました．私が理由を附して推薦致しましたところが，本省に於ても何等異議なくして，冨山先生を後任に任ぜられました．冨山先生は諸君の一部の方は御承知であらうと思ふ．我が学校が大正9年に創立をしました時以来学校の講師になつて居られる．本職は東神奈川にありました横浜舎密研究所の主任で，其の経営に当られて居つた．舎密研究所と云ふのは工業に関する化学の研究をする所で，出資者は原三渓先生，並に中村房次郎氏であつた．東北帝大の小川正孝総長が老年に及んで大学を辞する時に，其の後任として冨山先生を聘しようと致しました．屢々人を以て私にも照会があり，又冨山先生にも直接交渉がありました．遂には小川総長御自身が横浜まで出張されて是非に冨山氏を後任にしたいと云ふ御希望がありました．猶それが為には只今大阪の大学に居られるところの理学部長の真島利行博士，東京帝大の片山正夫博士も交々勧誘せられたのでありました．併し冨山先生はそれを辞されたのであります．何故辞したかと云へば，自分は研究所の柱石となつて経営して居るのである．其の大黒柱である自分が去れば，多大の資金を投じたあの研究所のあとはどうなるか分らないと云ふので，義の為に終に其の東北帝大の地位を捨てたのであります．若し冨山先生にして東北帝大に赴任して居つたならば，何時かは総長たる身分であることは吾々疑のないところである．それを捨てゝ小さな私立の研究所を守り立てたと云ふことは，其処に名節を貴んだ偉大なる人格の現れがあると考へざるを得ない．「責任を重んずる人，名節を尚ぶ人，彼は頼もしき人，彼は苦節を共にするに足る人云々」の文字は私の書き残して置いた「自由教育の片鱗」の中にありますが，其の文句の対象こそは我が冨山新校長のことであると云ふことを諸君に御承知を願ひたいのである．其の研究所は昭和4年でありましたか5年でありましたか其の時分まで続いて居りましたが，色々な関係からして解散を致しました．其の間又我が冨山新校長は，或は三井から，或は住友から招聘勧誘を受けました．併し此の横浜の孤城を守つて其の招聘に応ぜられなかつた．最近に於きましては日本揮発油会社と

云ふ大会社の成立に色々と尽力せられて，さうして其の会社の重役として正月の中旬頃でありましたか就任せられました．その初めての重役会議が昨日開かれ冨山新校長も取締役として会合せられたのであります．併し突然の私の懇望に依つて，少からず其の進退に迷はれたことであると思ふ．それは再三学校長就任をお断りになつたことに依つても判るのであります．尚ほ其の外にも重役として他の会社にも御関係がありますが一旦官吏となれば一切其れらのものを抛たなければならない．そこに色々なるところの面倒なことはあつたであらうと私は思ひます．而して遂に是等のものとは悉く縁故を断つて，御承諾下さつたのであります．

私の辞表を出して以来今日まで相当の時間が経つて居りますが諸君には何等其の事を知らさず，職員の方にも又同様何等お知らせをせずして，実に疾風の如く辞表を提出し又疾風の如く発令となつたのであります．

昔の兵法に疾きこと風の如く，静なること林の如しと云ふことがあります．諸君は此の私の退職に伴ふ総ての事に，無条件で以て御賛成を願ひたい．支援を願ひたい．而して同時に又諸君の態度，我が全校の態度と云ふものは「林の如く静なり」かう云ふやうにやつて貰ひたい．疾きこと風の如く，静かなること林の如しとは古今名将の用兵の術である．我が学校小なりと雖も名将の用兵の方策に則り疾きこと風の如く，静なること林の如しでありたい．是が実現出来たならば我が横浜高工の威風は実に天下に堂々たるものであると私は堅く信ずる．願くは私自身が疾風の如く去つたのであるから，諸君は林の如く静に此後を守つて貰ひたい．又此の瞬間に於て特にかく行動して貰ひたいと思ふのであります…….

なお鈴木前校長の別れの言葉のあと冨山新校長は立って，伝統的校風をますます宣揚し，自由教育達成にまい進したいと力強く就任のあいさつを述べた．これと13日の言葉と重複するが，新校長初のあいさつとして記すこととする．

冨山新校長 就任挨拶

私は今回本校々長の任を受けまして鈴木達治先生の後を襲ふことになりました．私は洵に不徳不才でありまして，殊に閲歴に乏しく大校長たる鈴木先生の後を継ぐには洵に不適任の者であると云ふことを自覚して居る者でありまして先生の御推薦を得ました時に其の理由を縷々述べまして再三固辞致したのでありまするが遂に許されず此の任命を見るやうになりました．併しながら一度此の大任をお受け致しました以上は自己の全力を挙げて其の任を全うするに近からしめんことを誓ふ者であります．

大凡教育なる仕事は有ゆる仕事の中に於きまして，之を真面目に考へますならばその遂行は難事中の難事でありまして又同時に若し其の成果に於て見るべきものがある時には男子の本懐として之に過ぎるものはないものと考へて居ります．現在の日本は万人が認識し，さうして唱へて居るやうに，重大な時機に際会して居ります…….我が国運の躍進を期せねばならない．是が為には工業の健全なるところの発達隆盛と云ふことが一大条件であると云ふことは現在に於きましては争へぬ事実であります．

新校長　冨山　保

此の工業の第一線に立つて其の指揮に任ずる役割を演ぜねばならないのは吾々高等工業学校の卒業生でなければならない．即ち国家が今日有ゆる教育機関に於きまして最も大なる期待を懸けて居るものは，此の高等工業教育であると云ふことを申しましても敢て過言でないと私は信じて居ります．

本校は大正９年に創立されまして今日まで満15年の歳月を閲しました．其の間吾々の恩師鈴木達治先生は自由啓発の主義をば高く翳されまして創立忽々彼の大震火災の厄に遭ひましたが，焦土の中に立たれて毅然として満身の勇気と熱意を以て今日まで導かれました．多数の職員は之を翼賛されまして漸次其の効果が現はれて，過去に於きまして千幾百の卒業生をば社会に送り出しまして，幾多の貢献を我が工業界に寄与しつゝあることは洵に快心の極みであります．

此の自由教育主義なるものは一歩誤るならば放縦に流れ易い虞がないとも言へない．是が完成に付きましては職員は通常の学校に於けるところの厳罰主義と云ふ武器を持つて居りまするところのそれに比較するならば数倍の努力を要する．又学生々徒諸君は通常の強制試験を課せられるところのそれに比するならば幾段の自己反省の努力を要することは言ふを俟たないところと思ひます．私は此の機会に鈴木先生の樹てられました此の自由主義を完成する為には職員も学生も更に数倍の努力と覚悟を要求するものであります。勿論将来此の主義をば完成する為には幾多の盤根錯節があることは覚悟せなければならないと思ひます。之に対しましては断乎たる勇気を有つて削除致しまして先生が満15年の間苦心扶植されました此の我が光輝ある学風をば永へに栄えしむると云ふことが吾々に与へられて居るところの最も大なる任務であると考へて居ります．……簡単でございますが之を以て就任の御挨拶に致します．……

2. ３教授の辞任

応化 橋本重隆，機械 山下誠太郎，数学 渡辺義勝の３教授は，２月13日鈴木校長と進退を共にして本官を辞任，同日付けでいずれも本校講師を嘱託された．

３教授の辞任は，学校の経済上の行詰まりを打開し，後進抜擢（ばってき）の道を開拓するためで，その辞任は各方面から惜しまれた．

橋本教授　昭和３年６月東京高等工業学校より転任，本校応用化学科教授として名声があり，温厚な学究として徳望が高かった．

山下教授　大正11年５月より本校機械工学科教授として尽力，悟道に徹した人格者として，かつ典型的教育者として敬慕されていた．

渡辺教授　大正10年５月本校数学教授として来任，人間味と学究心は独自の風格があった．

3. 横浜工業会主催　新旧母校校長迎送会

横浜工業会では10年２月27日夕，ホテルニューグランドで鈴木前校長と冨山新校長の迎送会を開催した．当日は京浜間在住者はもちろん，遠く大阪支部からも代表者が参加，出席会員170名余の多数であった．

定刻工業会理事長石井文雄のあいさつ，旧新校長の辞任，就任の辞，有志の迎送の辞があり，午後９時ごろ母校々歌「希望の光うららかの」を合唱して閉会した．当日の鈴木前校長のあいさつは学生に対する辞任のことば，後述の横浜市有志の感謝会でのあいさつと重複するところがあるが，あえて抜粋して記すこととする．

鈴木前校長 挨拶

……私は突然辞職致しました．皆様に突然であつたのみならず，私の家族にもさうでありました．私の家族も新聞記者がやつて来，又学校からして報知を齎して行くまでも全然知らなかつた．全く寝耳に水でありました．其の位でありますから，私は外へ知らすやうなことはない．けれども私は15年経つたら辞職をしようと云ふことは，もう夙の昔からさう考へて居つた．10年の時に将に辞職をしかけた．ところがどうも10年経つて罷めるには，まだ私も若いのでありますから多少の煩悩もあり，未練もあります．其の時は尚ほ商工実習学校も持つて居ります．まあ半分だけは止さう．半分だけで未練を少し残して置かうと云ふので，商工実習学校を罷めて今の山本君に譲つて後はもう5年，何ぼやつても後はもう5年．其の時に私は考へて居つた．罷めよう罷めようと思つて学校を勤めて居ては甚だ怠慢になりますから，それは暫くの間，頭から消して居りました．ところが丁度此の昭和10年と云ふものが来ると満15年になる．何時辞職したら宜いか．辞職の時機と云ふものを三つ私は考へた．一つは正月の19日，是は学校創立の勅令の出た日，同時に又私が学校長として辞令を貰つた日であります．此の日で本当の満15年だから此の日を以て辞職をしよう．まだ外にある．3月の15日が卒業式だから此の卒業式が済んだ後で辞職をしよう．それには3月10日前後に辞表を出して卒業式後に発令をして貰はふ．かう云ふ事も考へた．もう一つの時機は誰も居らない夏休みの時こつそりとやろう．此の3つが私の選んだ時機であつた．段々に考へて見ると云ふと，教育的には3月の卒業式後が宜いが，どうもあの時期がいけない．気に喰はない．夏休みにこつそりも気に入らぬ．創立満15年の日を以てやると云ふことは，是は私の主義嗜好から考へて，又私の心境から考へて是が一番宜い．かう決定した．そんなことを決定しても人に話せば出して呉れたら宜いと思つて居る人も，まあお止しなさいと言はれる．誰も出して呉れと云ふ人はない．どうも人に話す訳にはいかない．家族に話しても又どんなことで人に言ふかも知れぬ．由井の正雪でも陰謀が洩れて，静岡であゝ云う酷い目に遭つた．私もひよつとすると由井の正雪みたいな酷い目に遭ふんぢやないか．是は成べくぢやない厳重に秘密にしよう．家族にも誰にも言ふことは出来ぬと云ふので，自分1人で決めて居つた．正月の18日，学校で全校の学生を集めて，毎月一度づゝの講演をやりました．其の時此の19日で満15年になるのぢやと云ふことを話しました．併し私が罷めると云ふことは言はなかつた．けれども辞表は書いて持つて居つた．それで翌19日文部省へ持つて行きました．さうして私は斯の如く辞職をすると言つて出した．文部省の局長に出したのですが局長も驚かれて，どうもそれは惜しい君に罷められやうとは思はなかつた．かう云ふ訳でありました．併し私は決心して居る．どうぞお取次を願ひたい．併し是は局長以外の方にはお漏らしになつては困る．若しそれが漏れると又どう云ふ面倒が出るかも分りませぬから，それだけは一つ宜しくお願ひ致しますと言つて辞表を提出した．其の前16日か17日か忘れましたが私は冨山先生に会つて，実は私は19日を以て辞表を出すから，後をどうかお頼み申しますとお願ひした．ところが冨山先生も洵に喫驚されて，私は実は日本揮発油会社の重役にならなければならぬ義理合があつて，それになることになつて居る．今登記中であると云ふことであつて，それは洵に困る．かう云ふお話でありました．まあさう言はずに是非あなたに頼まなければならぬのだからお成りなさいと言つたが承知をして呉れない．承知して呉れなかつたけれどもどうしても是は承知して貰はなければならぬと云ふので，文部省へ辞表を出すと同時に，かう云ふ後任者があるからどうぞ其の人を校長に立てゝ下さいと言つた．自分が罷めることは易いが，冨山先生を校長にすると云ふことを果して文部省が承知するかどうかと云ふことに付て，私は多大の疑念を有つて居つた．何と言つても冨山先生は偉い人であるけれども，官に就いた人ではない．所謂無官の大夫である．此の無官の大夫を直に勅任官にすると云ふことは，どうも官僚主義である政府に於ては難儀とするところであらうと私は考へた．それで冨山先生を後任に立てると云ふことは，是は多少の面倒があるに違ひない．愈々私の言ふことを聞かない時は，第2の手段がある．第2の手段でいかぬ時は第3の手段がある．何処までも第2第3の手段を用ひても文部省に聞いて貰はねばならぬと云ふ私は固い決心を有つてそれに当つて行つた．と

ころが履歴書を出して見て呉れと云ふことであった．それから21日でしたか22日でしたか，冨山先生に日本倶楽部まで履歴書を持つて来て下さいと云ふことでありました．ところが日本倶楽部へお出でになったが履歴書は持つて来て居らない．文部省の方でも急いで欲しいからと云ふので冨山先生に其の時能くお話して，やつと渋々ながら御承諾になつて翌日か翌々日でありましたか持つて来ると云ふことであつた．其の履歴書に又私が副書ぢやないけれども，冨山先生の履歴上に付て註釈を加へてそれを文部省に差出したのであります．ところが意外にも私の言ふことを諒解して下さつて第2の手段も第3の手段も用ひずして通過したと云ふことに対しては，私は洵に安心を致しました．

それから本省の方に申しました．もう少し私の発令は待つて戴きたい．まだ私が少し工作をしなければならぬことがあるからと言ふと，工作と云ふのは何かと言ひますから，何人かの教授に相談して，此の際私と一緒に罷めて貰はふと思ふ．さう云ふことをやつて宜いかと言ふから，それはもう何等文部省の方には御迷惑は掛けませぬ．私にお委せを願ひたいと言つて帰りました．さうして実はかうかう云ふ訳で私は満15年を期して辞職をしたいと思つて辞表を出した．学校も15年も経つと色々な所に行詰りが出来る．教授の定員にも行詰つて是れ以上増すことは出来ない．俸給も行詰つて昇給も中々むづかしい．年末の手当も出し難い．かう云う窮状であり，私も罷めるからあなたも一緒に罷めて貰へないか．後は講師にでも何でも御便利を計らふからと言つたところ，宜しいやめませう．洵に簡単に片付けて，話した時間と云ふものは10分掛つたことはありませぬ，或る人の如きは椅子に腰掛けて話したのではありませぬ，立話です．立話で談笑の間に之を決してしまつた．それは私非常に有難く思ひます．中にはかう言はれた方もある．学校がさう云ふことであつたならば，自ら進んで辞表を出さなければならないのに，先生からさう言はれて却てどうも恐縮である，手遅れをしたと言はれた人も中にはありました．私生徒への訣別の時にも，是等の方々は洵に能く人情友愛と云ふやうなことをお示し下さつたと云ふことに付きまして，非常に私は感謝をすると言つた所以はそこにあります．尚ほ愈々辞退をしたと云ふことが分つた後に，何等私がさう云ふ請求をしないのに2名の方が，それぢやあ私も罷めませうと言つて辞表を出された人もあります．それは私の怠慢でまだ其の辞表を持つて居ります．是は無論其の方々にお返ししようと思つて居ります．

世間には教授が3人も揃つて校長と一緒に辞したから，何か底の方に見つともない喧嘩でもして，所謂喧嘩両成敗で文部省から双方が首になつたと云ふやうな想像をして居る人があるかも知れないし，又あるやうにも私聞いて居りますが，併しそれは斯くの如くで全然違つて居る．之を皆さん能く承知して戴きたいと思ひます．

尚ほ私は12日に大分辞令が遅れるので密使を立てゝ向ふの様子を探りに行きました．さうしたら今日決すると云ふことであつた．それで13日の11時前後には発表すると云ふ報知を齎して来ました．それで漸く其の時に胸を撫で下した．さう云ふやうに遅れたのは本省で私の叙位のことに関して都合の好いやうに図つてやらうと云ふやうなところから幾分延びたものと私は推察をして居るのであります．

愈々13日の11時前後に発表すると云ふことでありました．丁度其の日は水曜日で10時から11時まで3年生への私の講演がありますので，それをやつて居ました．併し私は罷めると云ふやうな嫌なことは言ひませぬ．卒業して後にも色々道楽はある．釣，撞球，将棋，何でも人間は一つでも余計知つて居ればそれだけ偉いのだと云ふやうなことを話した．さうして11時に出て来て，12時までの間又外にぶらぶらして，12時に饂飩を一杯教務の連中と食べて，約1時頃まで話をして居りました．もう愚図々々して居ると横浜へニュースが入つて来ると思つたから，超然として誰にも言はず銀行集会所へ行つて居りました．果して2時前後になりまして大勢の新聞記者連中が詰かけて来たが，学校の方ぢや何のことか様子はさつぱり分らぬ．ところが校長は罷めたと云ふ．そんなことは知らぬ，呆けたことを言ふなと云ふ訳で初めは学校の連中に剣突を喰つた．併し段々聞いて見ると事実が分つて，どうも其の晩私の家にも沢山の人が来ました．其の時私は熟々感じた．私は結構なことを経験した．私が死んだら矢張りかう云ふ風に皆寄つて来るのだろう．死んだ経験をしたわいなと思つた（笑声）．私の家は淋しい所なので，夜遅くあちこちと人が出入りしたので，近所の人は何事か起つたのではないかと噂して居つたさうです．そんな訳で翌日学校へ行つて話をするやうに，前

の晩から演題を送つて置きました．「退職の経緯を語る」と云ふ題で，少し想を練つて行かうと思つたが，何しろ翌日の11時まで人があちこちしたので話を練る間もなかつた．11時を選んだのは，朝11時まで授業をやつて貰つて，11時から私が話をしてさうして昼飯でも食べて又昼から授業をやつて貰ふ積りであつた．話を9時から始めたのでは後の授業が滅茶々々になるだらうと思つたからです．併し実事は1時まで掛つて，午後は休んだ．其の休みをやるのも私がやるのではない，新校長に願つてやらなければならぬと云ふ訳であつた．

11時に私は講堂へ行つて壇の上へ上つたところが，学生の中から声を出して泣く者がある．それには私は面喰らつた．私のは円満辞退で，又私に殉じて辞退して呉れる人があつたと言つて喜んで演壇へ上つた訳であります．学生の或る者が私のところに来て，校長が15年間の在職中一番愉快だつたのは何かと言ふから，罷めて皆を喫驚さしたのが一番愉快だと冗談を言つた位ですから，私はさう思はなかつた．ところが演壇へ上ると学生の中に声を上げて泣く者が出来て来た．私は其の時にはつくづく思ひました．かうまで皆が私のことを思つて呉れるものであつたならば15年間にもう少し勉強したら宜かつた，少し勉強が足りなかつたと云ふことを切実に感じました．併し訣れる時である．そんなに私も涙を流して物の言へぬやうなことがあつては甚だ訣れ悪いと，何様勇を鼓してやれと云ふ訳で，大いに勇を鼓してやりました．兵法に謂ふ疾きこと風の如くに罷めた．後は静なること林の如くに諸君はやつて呉れ，さうでなければ兵法の平仄が合はないと云ふので，孫子の兵法を以て一心に説いた．冨山先生を推薦したことに付ては，所謂蘇老泉の管仲論を出した．蘇老泉が管仲を論じて，管仲が斉の国に相となつて居つた時代は国が治つたが，管仲が死んで後には斉の国が乱れた．それは管仲が後継者を推薦しなかつたのが悪い．それを蘇老泉が大いに罵倒して居る．「吾観るに，史鰌は遽伯玉を進めて弥子瑕を退くる能はざるを以ての故に，身後の諫あり，粛何は日に死せんとし曹参を挙げて以て自ら代る．大臣の心を用ふる，固より宜しく此の如くあるべきなり．夫れ国は一人を以て興り一人を以て亡ぶ．賢者は其身の死するを悲しまずして，其国の衰ふるを憂ふ．故に必ず復た賢者ありて，而る後以て死すべし．彼の管仲は何を以て死するや」管仲は自身の後継者を推薦せずして死んだ．蘇老泉は彼は何を以て死するやと言つて難じて居る．それで私は諸君の中には文豪蘇老泉の如く論鋒の鋭い人は居るであらう．さう云ふ人は幾らあつても，彼鈴木校長は何を以て死するやと責められる者は居るか．私は詰将棋で王様を雪隠詰か都攻にしたやうに攻めて居る．是でもう私は訣れも惜しからず，皆静にして居れと云ふ言葉を以て訣別の辞にした．其の為か何であるか，どつちやんごつちやんの乱雑の間に新内閣は成立せずして，静かなること林の如く，大森林の静けさを以て新内閣が成立致しました．さうして翌日から平生の通り授業をやりました．私も冨山君も洵に是で安心した訳です．

それから中1日置いて2人連れ立つて文部省へ出て，各局に辞任と就任の挨拶を致しました．又染井の墓地に参りまして，吾々2人が師事したところの元の蔵前の手島校長の墓に詣つて，私の辞任と冨山先生は就任したと云ふ挨拶を墓前に致して置きました．それから次には横浜の学校及県庁市役所等の官庁に2人で丁度親子連のやうに，私は年を取つて隠居したから，倅が跡を継ぎました，宜しくお願ひ申しますと云ふやうな体裁で，親子と言つたら冨山先生は怒るかも知れませぬが，そんな風で挨拶して廻つた．洵に都合好く新時代に移つた．

15年もしますと学校も黴が生へる．だからかう云ふ若い第2世が出て学校全体を更新しようと云ふ積りでやつたが，其の通りに行きました．必ず是からは又元気発剌として，効果が大いに挙がると思ひます．再びゐらい勢を以て新芽を出して来ると思つて居ります．横浜東京に居らつしやる有力な方，又地方に散つて居るところの出身者諸君どうぞ吾々の学校と何時までも関係を保つて，見守つて呉れんことを希望致します．私も亦学校を罷めてから色々なデマが飛びますけれども，私は是から公職には就きませぬ．あの六ツ川の岡の上に隠居して，さうして諸君の行先がどう御発展にるなか，如何に国家の為にお尽しになるかと云ふことを見て居れば，是が一番私の満足するところである．かう思ひます．彼奴も隠居をして居るから，時には端書の1本もやれと云ふ位にして戴いたならば，私も安心して彼処で大往生が出来るとつ思て居ります．今晩は斯の如き盛大に会をお催し下さつて，重ねて皆さんに有難くお礼を申上げます．

4. 鈴木前校長　感謝会

鈴木校長は大正9年横浜高等工業学校長に就任以来，実業学校として「横浜の発展のために尽さねばならぬ．本校の設立されたのも，神奈川県並に横浜市の有志の尽力と寄付によることが多大であったことを忘れてはならぬ」とし，県市に対してできるだけその発展に努力をしてきたことはすでに各処で述べたところである．昭和10年3月13日夕，横浜ホテルニューグランドで横浜市民を代表する人々300余名が出席して，鈴木前校長に対する一大感謝会が行なわれた．

鈴木前校長に対する感謝の招待状は次の文面であった．

謹啓　時下愈々御清福の段奉慶賀候

陳者貴台には横浜高等工業学校創立以来多年育英に御尽瘁相成多数の人材を養成せられ候のみならず直接間接横浜工業界のため寄与せられたる多大の御貢献に対しては深く感佩罷在候．今般遽に御勇退の趣承り洵に感慨無量に有之候．就ては聊か感謝の意を表し度下名等発企仕り同志と共に粗宴相催し候間，洵に恐縮ながら三月十三日（水曜）午后五時半ホテルニューグランド迄御賁臨の栄を得度乍略儀以書中御案内申上候　　敬　具

昭和十年三月

発　企　人

井坂　孝　　原　富太郎　　大西　一郎　　中村房次郎
野村　洋三　　野口　能敬　　近藤　賢二　　秋山　岩吉
渋沢　義一　　上申　信弘

鈴木　達治　様

侍　史

なお当夜の鈴木先生の謝辞は横浜と自分のことについてふれ，次に今回の校長辞任の心境を語り，一代の名演説として聞く者を感動させたものである．次にその全文を掲げ当夜の情景をしのぶこととする．

本夕は当市多数のお歴々各位の御招待を蒙りまして洵に身に余る光栄であります．殊に感謝会と名付けられましたのは微力の私としまして汗顔の至りでございますし，実に恐縮千万であります．

回顧いたしますと私が当市に御厄介になりましたのは大正9年の1月19日でありますが，その以前私は学生時代に熊本に3年，東京に3年間居たのであります．又社会に出ましてからは仙台に5年，広島に3年，外国に3年居まして，帰朝の後は東京高工に9年居ました後に当市へ参つたような次第であります．この間可なり処々を転々した訳でございます．

当市に参りました時は，私も齢既に50年に近づいてゐましたので，この地は最早私にとつては終焉の地であると決心致しました．そうしてどうかこゝで首尾よく公生涯を終りたいものであると考へたのであります．そう覚悟してゐる矢先きに彼の大震火災に遭遇しました．この時には更に私の決心を固めまして，この上は如何なることがあつても横浜市民として余生を終始したい．自分の土となるのはこの横浜であると言ふことを深く決意したのであります．

この深い決意をしたのでありますが私は自分の学校を墳墓の地であるとは決して考へてゐたのではありません．自分の成すべきこと，努むべきことを遂げたならば適当な機会に学校を去りたい．その去るべき適当な機会を心待ちに待つてゐたのであります．それは一度職に就いた者は又必ず何時かはその職を辞せねばならぬのであります．然してこの出所進退と言ふことは人間の最も大切な決算であるからであります．

斯く覚悟を極めましたので私は横浜での在職15

年の間に両度他に転ずべき機会があつたのでありますが，自分の信念を枉げることなく今日に至つたのであります．

さてその退職の適当な時機に就きましては創立10年を以つて一つの機会であると考へたのでありますが，その時はまだ未練や執着と言つた煩悩に迷ひまして断乎たる決意を表明するには至りませんでした．只だ県立商工実習校が同じく満10年に達しましたので，その方の兼任校長の方を退きました．従つて更にその後5年を勤めまして恰度今年で65歳を迎へ，殊にこの1月19日が学校の創立並に私の就任日に当りますので，この日を辞表提出日としました．そうして2月13日付を以て依願免官となつたのであります．

私の横浜に参りました意義は甚だ不満足の状態ではありますが，先づこれで結了したのであります．然るに計らずも今夕各位よりこの御手厚き御会合をお催し下さいまして，望外の御賛辞を賜りましたことは長い公生涯から去りまする私にとつて洵に忘れることの出来ない恰好の記念として如何に有難いか，如何に嬉しいか私は到底私の口を以つて言ひ表すことが出来ません．どうか私の胸中の歓喜は御察しに任せるより外はありません．

爰に私の満腔のお礼を申上げまする機会に御迷惑とは存じますが，只今の私の心境を一寸語らせて戴きたいと思ひます．どうかお許しを願ひます．

元来私は幼にして実業界に出て巨万の富を獲たいと志したのであります．そうした考へから未だ学生の身である頃から当時住友家の大御所であつた広瀬宰平翁を訪れたり，又三菱の大御所であつた荘田平五郎翁に接近せんとしたこともあります．然し学校を出て見ますと仲々就職難で思ふようには参りません．そこで一時の方便として学校へ勤めることにしたのであります．この腰掛けにと思つた学校へ一生腰を据へることになるとは夢にも思はなかつたのであります．私は又官吏と言ふものが一体嫌ひであります．その嫌ひな官吏として一生政府の飯を食ひ，今後また細々ながら恩給と言ふ形式で政府の禄を喰むことゝなつたのであります．思へば人生は神の悪戯だと言ふことが一面に於て真理であると申さねばならないと思ひます．

回顧しますと30有余年の私の教育界生活は其結果より申しますとお恥しいほど微力なものでありまするが，私自身の立場から申しますと一生の事業でありました．その一生の事業が爰に終つたのであります．即ち私の成すべき事は完結したのであります．今更世に求めんとする何物もありません．私は兼て斯くあるべきを予期して余生を送るべき地を弘明寺裏の山の上に定め猫額大の土地を卜して隠居所を建てゝ置きました．その地所内には昨年建立しました東郷神社を祀つてあります．私はこゝで所謂晴耕雨読を致します．そうして東郷神社の堂守として奉仕する考へであります．

私は老齢隠居したのであります．然し友人の中にはまだ何か一と仕事してはどうかと言ふ友情を示して呉れる人もあります．そのお志は洵に有難い次第でありますが，私はこの際一切の野心を捨てゝゐるのでありますから所謂光風霽月の心境を以つてこれに応へるより外はありません．只だ私情を申上げますると心掛りのことが二つ残つて居ります．

その一つは私と進退を共にして呉れました数名の教授の方々のことであります．何れの方々も有為な人達でありますし，又年齢も私に較べて10年以上も若い人達であります．私はこれ等の人々を始め全校の職員諸氏とは常々一蓮托生と言ふ信念を持つてゐました．これは別にそうゆう申合せをした訳でもなければ，打合せをした訳でもありませんから職員諸氏個々の考へはどうであつたかは判りません．然し少くも私自身はそう考へてゐたのであります．

若しこれが私立の学校でありますれば在職の年限は或程度まで無限と言ふようなことも出来るでありましようが官立の学校ではそうゆう訳には参りません．或時期になりますと人員や俸給其他の関係で更始一新をせねばならぬのであります．故にその善後策として恩給が制定せられてゐるのであります．

然しこの所謂整理は理論上は当然のことであり，一見容易になし得べきようでありますが，人事上の事柄はそう簡単に参るものではありません．この容易ならざる問題を容易ならしむる為めに私と行動を共にして呉れました教授諸氏には最高の謝意を表せねばなりません．この意味に於きまして，これ等の人々をよそにして私自身が自分の糊口の為めに途を求めると言ふことは情に於て実に忍びざるところであります．

心残りの第二は学校の卒業生に対する私情であります．

高工に15年，工業専修に13年，商工実習に10年の間の卒業生を合算致しますとその総数は 5,000 人に近い数字に上ります．この 5,000 人の諸君に対しては，私は自分自身の生みの子供のように考へてゐます．卒業生諸君の個人の意志はどうであるかは知りませんが私は自らそう信じてゐるのであります．

この 5,000 人の子供を残して，私が隠退したことは，例へば多くの子供を抱へて亭主に先立たれた後家さんのようなものでありましよう．世の譬に30後家は立つが，40後家は立たぬと申します．私の後家は60後家でありますからこの譬へは除外例のもので，或は問題にならぬかも知れませんが，それでもまだお茶呑み友達とか，破れ鍋にもとじ蓋とか言ふ諺のあります通り，良縁があり，再縁が出来ないとも限らないのであります．

そこで楽隠居さんでも見付て偕老の結びを契るとしたとします．そうした場合に子供達は果してどう考へるでありましようか．浮気なお母さんだ，色気の抜けないお母さんだと考へるでありましようが，決してそれは好い意味に考へられ，良い影響を与へるであらうとは考へられないのであります．

私はそうかと言つて別に貞操とか節操とか言ふ六ヅケ敷い論理の下にそう言ふ考へ方をするものではありませんが，兎に角細々でも後家を守つて子供達の行末を見極はめることを楽しみにしたいと言ふ考で頭が一杯になつてゐるのであります．惚気のようですが私の亭主も決してお粗末なものであつたとは考へませんし，親の眼から見ますれば馬鹿な子供も決して馬鹿には見へない可愛いゝものであります．

謂んやこの 5,000 人のうちには人並は愚か国家棟梁の材を得る多くの人々があると言ふことを堅く信じてゐるのであります．

以上は私の心境を率直に申述べたものであります．私はこの信念，この心境の下に私の今後の余生を送りたいと考へてゐます．然し私は生を此世に承けてゐる間はどうか皆様の変らぬ懇情に浴したいと偏に御願ひ致します．こゝに皆様の御健康と御多幸を祝福致しまして謝辞に代へる次第であります．

5. 鈴木前校長　名誉教授に

昭和10年３月25日付けで鈴木前校長は内閣より次のごとく名誉教授の発令をみた．

「正３位勲２等鈴木達治　横浜高等工業学校名誉教授の名称を授く」

第1章　第6節　名教自然碑

名教自然碑

横浜高工（横浜国立大学工学部）の正門をはいると，玄関正面に「名教自然　煙洲鈴木達治」と刻された高く大きな大理石の碑（ひ）がある．これこそ，長い間幾多学生に親しまれ敬われてきた本校の象徴である．

この碑は，昭和12年11月落成したものであるが，今ここにその由来を述べ，あわせて鈴木初代校長の偉業をしのぶこととする．

1.　設立までの経過

本校初代校長鈴木達治は，横浜高工創立15周年を機として昭和10年２月，校長の職を辞し，本校に近い横浜市六ツ川の丘に悠々自適（ゆうゆうじてき）の生活にはいった．

教育界にあって力を尽くすこと実に40有余年，その間第二高等学校，広島高等師範学校，および東京高等工業学校等の教授を歴任，ついで大正９年本校初代校長として就任，また，神奈川県立商工実習学校長および横浜市立工業専修学校長を兼任した．校長在任中終始一貫三校にいわゆる自由啓発の校風を樹立し，懇切の教導よく幾千の偉材を世に送った．また開港都市横浜を愛するの思い強く，その工業的発展を念願として横浜工業懇話会を起こし，あるいは文政審議会，および体育運動審議会委員として枢機に参画し，邦家教育の根本策確立に献身するなど，多大の功績があった．

その辞任後，幾ばくもなくして門弟知己の間に，この偉業を長く称えたいとの議が翕然（きゅうぜん）として起こり10年７月２日，横浜高等工業学校職員代表，横浜工業会代表，神奈川県立商工実習学校，および横浜市立工業専修学校代表，蔵前工業会，尚志会，および第二高等学校関係者等により，鈴木達治先生記念事業会が設立され，実行委員長に横浜高等工業学校二代校長冨山 保が推された．

当初の案はきょ出金予定額２万円，事業としては寿像建設および記念品贈呈となっていた．

しかしながら，寿像建設は鈴木前校長のいれるところとならず，先生の希望により記念碑建設と決定した．

その後計画は着々と進められ昭和12年２月，記念碑原石として茨城県真弓村に巨大な寒水石（茨城県久慈郡，多賀郡で掘り出している古生代の結晶質石灰岩，白色か青黒石，しばしばしま

鈴木先生肖像画

模様――広辞苑）を発見，碑表面　鈴木達治筆「名教自然」，碑裏面　徳富蘇峰　撰文，原三渓書，設計　中村順平，工事請負人　大日本銘石商会，基礎工事　宮内建築事務所と決定，工をいそぎ同年６月15日，地鎮祭を執行，10月20日記念碑が完成した．

2.　記念碑落成式

名教自然碑落成式は12年11月１日本校第17回開校記念式典後の午前10時から正面玄関で行なわれた．

この日，朝からの小雨も開式とともに晴れ，陽光が雲間より漏れ，涼風は張りめぐらされた注連（しめ）なわを揺り動かし，静粛の気がみなぎった．

式場には，本校，商工実習，工専の職員生徒ならびに卒業生，および徳富蘇峰，青木横浜市長，有吉貴族院議員，大幸勇吉京大名誉教授をはじめとして多数の来賓知己総数2,000余人が参列した．

式は委員菅要助の開式の辞，本校音楽部の国歌吹奏，修祓（しゅうばつ）の後冨山校長により記念碑の除幕が行なわれた．紅白の幕がするすると降ろされ，「名教自然」と書かれた１丈２尺（約 3.7 m）の純白の碑が厳然として現われ，満場いっせいに拍手を送って鈴木前校長の徳を称えた．奉告祭についで冨山校長，青木市長，各学校総代の玉串奉奠（たまぐしほうてん），委員長冨山校長の本事業に関する報告ならびにあいさつ，委員阿部滋弘，斎藤輝治の事務ならびに会計報告があり，つづいて記念品の贈呈があった．（この記念品は，松岡寿画伯揮ごうの鈴木先生油絵肖像画で，現在本校応接室に掲げられている）記念品贈呈後来賓青木市長，有吉前市長，徳富蘇峰の祝辞があり，最後に鈴木前校長のあいさつののち委員石川等の閉式の辞をもって正午すぎ無事式典を終わった．

当日発表された会計報告は次の通りである．

収入の部　28,362円　據金　口数 1,829口
687.45 利子
計 29,049.45

支出の部　7,673.95　記念碑，肖像画費
1,695.00　記念出版費六ツ川夜話，絵葉書
17,020.07　鈴木先生へ敬呈
1,014.35　除幕式費
1,646.08　事務費
計 29,049.45

（なおこの後若干きょ金の追加があった）

式後祝賀会にはいり一同鈴木前校長の健康を祝し，席上冨山校長，大幸勇吉，近藤賢二，田尻常雄，安川数太郎，日野義一等のあいさつがあった．

3. 当日の祝辞

(1) 委員長 報告（冨山委員長）

鈴木達治先生並に御臨席の閣下各位不肖本日委員を代表致しまして甚だ僭越でありますが一言述べることを御許し願ひたいと考へます．

鈴木達治先生は明治33年に東京帝国大学を御卒業後，直ちに第二高等学校，広島高等師範学校．東京高等工業学校等の教授を歴任されまして，大正9年横浜高等工業学校が設立されるに当りまして，初代校長として就任されまして一昨年校長を御辞任されるまで満35ヶ年間尚ほ大学御入学前に教鞭を取られたことを通算致しますと実に40有余年の間教育界に身を入れられまして，幾千の顕才を薫陶されました．是等の顕才は各方面に活躍貢献せられまして，其の功績は洵に甚大なるものがあると考へます．

大正9年に横浜高等工業学校に御就任の時，先生は我国工業教育界の偉人であり，先覚者である故手島精一先生の門弟を以て自ら任ぜられまして，蔵前御在職10有余年の御経験と，先生本来の犀利なる観察眼を以て，将来の我国工業界の状態を洞察され，開校と同時に確乎不抜の信念を以て，「名教自然」の標語を以て代表せらるゝところの自学自発の教育主義を宣言されました．是は生徒各自天与の才徳をば阻害せらるゝことなく，自由に伸暢せしむることを本旨と致しまして，終始一貫全校の職員を率ゐられ，是が実行教育をせられました．而して此の学校より顕才約2千をば世の中に送り出しのであります．是等多数の卒業生は各方面に天空濶達の活躍しまして，自由に其の翼足を伸ばし，現下最も重要なるところの我国工業界に多大の貢献をなしつつあります．是等の者の大多数は工業界の第一線に立つて，実際上の中堅として重きを成して居りますが，其の才能の赴くところ，或る者は研究者となり，或る者は工業教育者となり，又或る者は工業商品の商業家となつて居る者も少くないのであります．是等は全体と致しまして比較的に年歯未だ若くして，将来更に一層大なるところの期待をなし得るものでありまするが，既に是等の者の中には大工場の主脳責任者となつて居る者もあり，或は研究の結果学位を獲得致しました者も数名あるやうな実状であります．

先生は尚ほ矍鑠として益々御壮健に永く学校長として貢献せられることをば広く期待されて居たのでありましたが，一昨年2月校長の職をば満15年を以て突如辞任されました．

先生には既に以前から此のお企てがあったことと存じますが，周囲の者に取りましては全く青天の霹靂でありまして，殊に卒業生，生徒は慈父を失つたやうな激動を与へられました．其の辞任告辞の式の際に於きましては，六百の生徒満堂涕泣致しまして，中には声を放つ者もあつたやうな，全く劇的の光景を呈しました．

先生は単に学校内に於けるところの教育のみならず，曾ては文政審議会委員とされまして，或は横浜市に於ける市民各方面の方々を以て組織されて居りまする工業懇話会に於きまして，其の知識向上を目的とされて今日に至るまで多年非常な努力御指導をされました．是等の御功績も洵に甚大なるものがございます．

学校長御辞任後，門弟の間に於きまして記念事業会を起し，先生の偉功を永く記念すべきところのものを建造し並に先生に記念品を贈呈せんとするところの議が起りました．之に先生の知己，御友人の方々の多数の御熱心なる御賛同がありまして，昭和10年7月鈴木達治先生記念事業会をば設立致しました．

先生の高風威徳をば慕ひまして，多数の門弟は皆欣然として其の分に応じて之に参じました．又知己各位の方々も先生の功績を認められまして，多数の御醵金を賜はりました．殊に横浜市に於けるところの有力者の方々は，先生多年の教育界に於けるところの功績並に横浜の一般産業界に対して直接間接に寄与貢献せられたるところの功績を慮られまして，多額の御醵金を寄せられました．是等を通算致しまするといふと，総計2万8千円を突破致しまして，此の種計画としては稀に見る

成功を示したことは，是は全く先生の徳行の大なる証左と見ることが出来るものと信じます．

右醵金の一部を以ちまして，只今除幕致しましたところの「名教自然」の記念碑を建立致し，又先生の肖像画一面を作成致しまして，先生が最も心血を注がれ，又最も関係の深い此の横浜高等工業学校に寄附致して，其の徳行を永久後世に及ぼすことゝ致しました．尚ほ其の他の経費を控除致しまして，残額全部を先生に贈呈することに致しました．

本記念碑は表面は先生御自身の「名教自然」の御執筆であります．裏面は徳富蘇峰先生が最も愉快なる義務なりと言はれまして，其の撰文を御快諾下さいました．又三渓原富太郎先生は色々家庭の御事情で御疲れのところをば亦欣んで御執筆下さいました．尚ほ肖像画は松岡寿先生が御老齢にして而も最近非常に御多忙なるにも拘らず，欣んで御揮毫をして下さいました．鈴木先生が最も尊敬せられ，且つ最も御親交の深い是等の諸先生を煩はし得たことは，先生も定めし御本懐のことゝ御拝察致します．又本記念事業をして一層其の意義を深からしめたものと確信致します．

本日は御繁忙中のところ鈴木先生並に御家族の方々の御臨席を辱けなうし又閣下各位の御臨席を得まして，玆に記念碑の除幕並に記念品贈呈式をば挙行致すことが出来ましたことは，洵に欣快とするところであります．

玆に委員一同を代表致しまして深く謝意を申述べます．

尚ほ式場万端等は時局を考へまして洵に簡素に致しましたので，此の点も御諒承を願ひたいと思ひます．洵に簡単でありまするが，之を以て私の式辞と致します．

(2)　徳富蘇峰 祝辞

私も亦本日の儀式に参加致しまして，一言祝辞を述ぶることを得ますることは洵に光栄の至りに存じます．

私の申し上げて見たいと思ふことは委員長の御話しで七，八分どころは尽して居ります．其の後は横浜市長，又有吉先生の只今の御話で尽して居るやうなことであって，詰り結果は違つた人の言葉で同じことを言ふに過ぎぬといふやうなことになります．

併し鈴木先生と私とは容易ならぬ交際でありまして，斯ういふ席で私が一言するといふことは，私に取っては単に欣ばしき義務であるばかりでなく，全く本望で，何か申上げなければ済まないやうな気持が致します．それで御話しすることは殆ど前の御方の御話と重複するに拘らず，一言だけ申上げて見たいと思ひます．

既に唯今除幕式が行はれました此の記念碑の裏に，不肖私が文を綴りました．其の冒頭に「大夫自有衝天気，不向如来行処行」といふ文句を書出してあります．

是が即ち鈴木先生を殆ど言ひ尽くして居る．鈴木先生はお釈迦さんであらうが孔子様であらうが，阿弥陀さんであらうが，此方へ来いと言つても，はいと言つて容易に行くやうな人ではない．一寸自分で考へて見て，どうもお釈迦様の行く方の道は自分の考へと違ふなら失敬して自身の道を歩く．孔子様とても自分が考へて行きたい時には道連れをするが，どうも自分の腑に落ちぬ時には失敬して別の道を行く．

孔子様が右と言ふから是非自分は左と言はねばならぬといふ程の旋毛の曲つた人ではありませぬけれども少くとも自分は自分の行く道といふものをちやんと自分一人の料簡で決めて行く人であります．何人が来ても決して附和雷同する人ではありませぬ．それで所謂

「士之特立独行．適二於義一而已．　不レ顧二人之是非一．皆豪傑之士．信レ道篤而自知明者也．」

といふことがありますが，「道ヲ信ズル篤クシテ自ラ知ル明カナルモノナリ」とは，全く鈴木先生のことであります．

斯ういふ人が若し万一誤つた事でも信じてやつて行つたならば，それは非常に世の中の不幸である．斯ういふ個性の強い人，斯ういふ自信力の厚い人，斯ういふ人が邪な道を信じて行かれては，堪るものではない．自分は人から引摺られないけれども，人は必らず引摺られて行く．

否でも応でもどうしてもさういふ人の後から附いて行く者が沢山出来て来る．万一斯ういふ人が共産主義でも信じたならば，日本に取つて大変不幸である．

然るに仕合せにも，此の自ら信ずる事篤くして誰にも雷同せないところの鈴木先生は皇室中心主

義者である．先生は皇室中心主義といふことを高く掲げた．

世の中には工業若しくは商業其の他の所謂形而下の学術に骨を折る人は非常に多い，皆それぞれ立派なことをして居られる．併ながら今日ではありませぬけれどもが，明治時代から流行を考へて見ますれば，凡そ物質的の学問，物質的の研究といふ方に全力を注いだところの人は，動もすれば功利主義に流れました．是は已むを得ないことである．

然るに鈴木先生はさういふことに超脱して，一方には有ゆる力を尽して工業の学問，工業の研究，工業の知識，又其の応用，実行等に付て骨を折られたに拘らず，それを指導するところの指導的精神は実に国家のため，皇室中心主義を奉じて我が国体を明徴ならしむる為にあるといふ事に大旆を掲げられて居つたといふことは，特に私が敬服して已まぬところであり，又国家の為に大いに賀するところであります．

私は鈴木先生の教育家としてやられた事に付て，何も殊更今此処に申すことはない，唯一言私は敬服して已まないところは真に人を教育するの道を知つて居る．

人を教育するの道といふものは，人をして自ら教育せしむるといふことである．己自ら己を教育せしむるといふところの道を知つて，それを其の通りちやんと行ふことを得しめて居る．そこに先生の教育家として実に卓越せるところの見識，又卓越したるところの手腕を認めることが出来ると思ひます．

まだ色々言ひたいことがありますけれども，此処には先生が坐つて居られるから，どうも先生の前では言はれない．他日先生の聴かない所に於てどうぞ此のやうな機会を与へて下されば，また詳しく皆さんの腑に落ちるやうに私は申上げて見たいと思い，それで私は話を是で切つてしまひますが，一寸もう一言申して見たい．

それは鈴木先生にばかり感心しては今日の式が纏まらない．併せて皆様に感心しなければならぬと思ふ．

世の中に恩を知るといふやうなことは今日極めて流行しないことであります．もうさういふことは旧くて誰も相手にしないやうになつて居る．併しながら凡そ人間として一番美はしいところのものは何であるかと言へば，恩を知るといふことである．忠といふことは何か．やはり恩を知ることである．孝といふのは何か．やはり恩を知ることである．君恩，父恩，師恩，総てそれ等の恩を知るところのものが或は忠で現はされ，或は孝で現はされ，或は悌の言葉で現はされて来て居る．唯人間は十のものを貰つたから十のものを以て報ゆるといふ，所謂貿易，売買といふことで行つたならば，世の中の事は極めて興味索然たるものである．

恩を知るといふことであつて初めて人間の美しさがある．施したるものは忘れ，施されたるものは報ゆる．

斯の如くにして人間の美しさがある．恩を知ることも難いが，恩に報ゆることは尚更難い．

私は今此処に諸先生方，又卒業生の諸君方が鈴木先生の為めに立派な記念碑を設けられて，多数なる金を集められ，あらゆるところの力を以て先生に報恩の万一を表せんとした．其金額よりも其の記念碑よりも，其の恩に感ずるといふ其の心が洵に麗はしいと思ふ．斯の如くして初めて人間の本当なる道といふものに諸君は第一歩を踏込んで居られたといふ事が訳ると思ふ．実に此の点は感心に堪へない．

併し此の点も諸君をして斯の如く善い立派な心持を起さしめたといふことは，竟畢先生の徳であるといふことになれば，又鈴木先生に向つて頌徳の言葉を奉らねばならぬことになります．是は奉つてもあなた方には恐らくは異存はないと思ひます．

謹で玆に一言祝辞を申上げて置きます．

(3) 鈴木達治 挨拶

一言御挨拶を申し上げます．

本日は私の為に洵に盛大なる此の記念碑除幕式を挙行せられまして，態々御遠方から御来臨を恭なうした御方もあり，洵に光栄且恐縮の至りに堪へない次第であります．

又斯の如き式を挙げるまでには，委員長を始め委員のお方が非常な御努力になったこと丶存じまして，厚く御礼を申し上げます．

尚ほ又此の記念事業に御同情御協賛下さいました方々に対しては洵に御礼の申しようがありませ

ぬ．総ては私に取つて洵に光栄至極であります．是は此に幾時間立つて御礼を申上げても足りませぬ．晩まで掛つても迚も足りませぬ．それ故に是は私が死んで墓に行くまで，其の間私は御礼申し続けて居らねばならぬと存じて居ります．どうぞ其の点御諒承願ひます．

又只今は青木市長，有吉閣下，徳富先生，此のお三方からして洵に過分の御讃辞を頂戴致しまして聴いて居りますると何処か穴でもあれば入つてしまひたいやうな気も致しました．洵に当らないことであります．

殊に徳富先生には，あの日野の墓地に先年私は墓を拵へましたが，先生は其の墓の石にちやんと私の名を刻して下さつて居ります．私は先生のお書きになつた墓の中へ入つて行かうと思つて居るのでありますが，只今亦先生からして過分の讃辞を戴いたのでありますが，是はもう私に対しての読経の様な積りで喜んで私は拝聴致しました．お礼は幾ら申上げても尽きませぬ．

斯ういふ場合には御礼を申上げたら此処を引退るのが礼であると存じまするが，折角のことでありますからして，長いことはお話し致しませぬが，一寸だけ私の感じて居るところを申述べさして戴き度いと存じます．

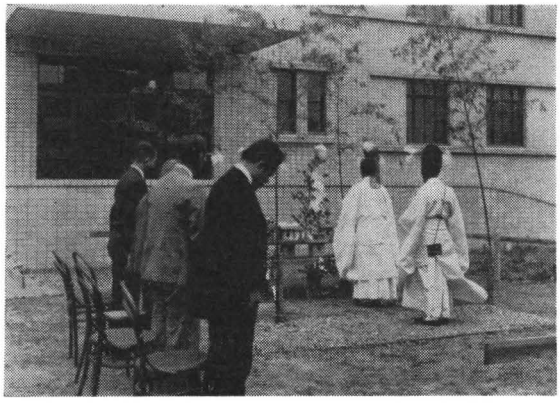
教育の指針とする処は，明治大帝の下し賜つたところの教育勅語其のものより外に何一物もありませぬ．吾々教育家が此の教育勅語を奉戴致し，之を味つて，さうして教育に従事をするのであります．併ながら教育家自身としては何等かの主義主張，又信念といふやうなものを持つて，此の教育勅語と云ふものを信奉致す次第であります．私はその自身の主張或は信念と云ふやうなものに付きましては，青少年学生の自覚自発といふものを根底に考へたのであります．自覚自発といふものをもう少し偉さうな言葉で言つたならば，それは自由啓発主義，斯ういふところのものであつた．

古の書物の中を見ますと，「不厳而整」といふ言葉がある．是は学生の控室に今も此の額が懸つて居りますが「厳ナラズシテ而シテ整フ」とは喧しく言はずとも整つて行くといふことで，若し自由啓発主義といふものが徹底して行はれるならば，此の言葉は必ず実現せられる．それを私は目標にして居つた．それ故に理窟なしに，議論なしに，文句なしにやつて行かう．出来るならばさういふやうにやつて行かう．難かしい規則は拵へぬ．厳しい命令は発せない．若し自由啓発主義といふものが徹底したならばそこまで行くであらうといふ事を念慮に致したのであります．

而して信頼するところの同僚諸君の援けに依り，多くの前途有望なる青年学生の中に伍して勉強するが如く，又せざるが如く，ぐずぐずと私は学校長としての15年を送つた．けれども二六時中忘れずに念慮とするところは只今申したところにあつたのであります．……．

それと同様に青年学生に適切な情理を持つて行つて斯うせよ，ああせよ，と言つても，中々言ふことを聴くものではない．人間といふものは其の時代に依り，環境に依り，頗る自我的であるから中々言ふことを聴かない．

孔子の仁義礼智信を如何に説いても，又経世憂国に口角泡を飛ばしても，中々其の人々の環境や職業などに依つて容易に頭に入るものではない．説かないよりも効があるといふことは無論であるが，さう思つたやうに効能は認められない．如何



名教自然碑地鎮祭

に吾々教育家がさういふ事に対して朝から晩まで，学生の顔を見れば仁義礼智信或は経世済民を説いても，どれだけそれが徹底するかといふことを考へますと，実に教育者といふものゝ無力を感ぜざるを得ないのであります．

ところが私考へまするのに道徳とか知識とかいふものは是は人間の拵へたものである．人間の拵へたものならば，其の道徳や知識を超越したもう一つ上に何物かあるのではないかといふ事が思へる．人間の道徳や知識を超えた一段高いところに何かあるのではないか．さうして一種の電波が其のところから出て居るのではないかと思はれる．其の電波といふものを感ずることに依つて，即ち天来の福音に依つて人間といふものに何等かの違ひが出て来る．

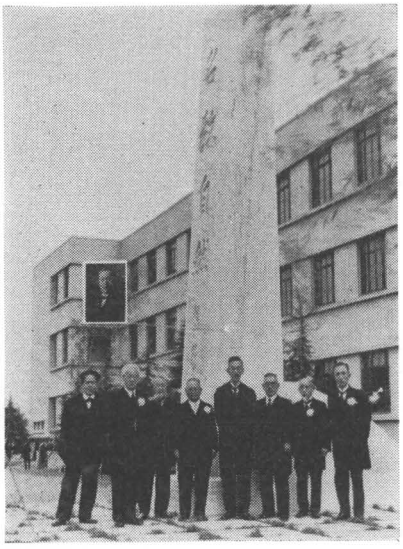
人間の作つた道徳や智識きりならそれは矢張り人間，其の上にある何物かに感ずることに依つて初めて人間より少し偉いところの超人，神様だとか仏様とかいふものになるのではなからうか．

東郷元帥，高橋是清翁の如きは一人は神様で一人は仏様．さういふ人は生きて居る時から人間の作つた道徳や知識の上にある何物かを幾分感じて居たのではなからうか．斯ういふ感じが致します．そういふ点から考へて見ますといふと，孔孟の教へだけに凝り固まると如何にも人間らしくはなりませう．

併し神様のやうな人格が出来るものでせうか．それにはどうしても此の孔孟の教へに加ふるに，老子や荘子所謂老荘の考へといふものをそこに持つて行かなければ駄目な様な気がしてならない．世の中には所謂八宗兼学と云ふ事があります．一つところに凝り固まらず，四方八方を見てそれを自分で考へて行く．斯ういふ事が宜いのではないかと思ふ．「名教自然」の四字の中には孔孟の教へもあれば，老荘の思想も入つて居ると私の頭に浮び出てた文句である．私の今まで考へて居たところの教育上の考へは，名教自然の四字に落着くやうに考へる，此の四字の中には猶何処から来るか分らない彼の不思議の霊光をも受取り得る或るものが存在するのではないかと思はれる．

此の考への下に青年学生を教育し，国家の進運，文化の発展に寄与し，一旦緩急あれば義勇公に奉じ，所謂君の馬前に一死報国の国士といふものを輩出したい．是が私の念願であり，又私の教育の理想であつた．抑々教師と学生の間は恰も親と子のやうなものであります．それであるから親が時々外に出て行けば帰りにはお土産を買うて来て子供を喜ばすといふことも忘れてはならない．お土産一つも買うて来ない親ならば，如何に親子の間でも情愛が移らない．

又仮令買うて来ても帰る度に煎餅ばかりでも子供は喜ぶまい．それならば時にはチヨコレート，チヨコレートもよいが帰る度にチヨコレートではやはり子供は親の親切に感じない．



名教自然碑前で記念撮影
（右より）
冨山　保，松岡　寿，青木周三，有吉忠一，
鈴木逸治，大幸勇吉，徳富蘇峰，中村順平，
（上）原富太郎

当日の来賓
（右より）有吉忠一，青木周三，
徳富蘇峰，鈴木逸治

校長は親であるからよく子供の心中を察して珍しいお土産を買うて来なければならない．食ふ物も買うて来れば頑具も買うて来て子供を喜ばしてやらなければならぬ．「名教自然」は是は沢山のお土産の卸しどころ，東京で言へば三越とか横浜で言へば野沢屋とかいふ様なところぢやと思ふ．此処に入つて行けば色々なお土産を売つて居る．食ふ物も頑具も，何でもデパートだからある．私は斯ういふデパートのあるところを見付け出して喜んだのであります．併しながら，どうも私の巾着の中には鐚一文もないとは申しませんが，どうも三越や野沢屋の前を再三あちこち通つたが，私の財布は軽い．そこでお土産を買出すことは出来なかつた．

是は如何にも残念に考へて居る次第．もう一遍校長になりましたところでやはり財布は軽いからデパートで売つて居るところは見出したけれども矢張り買ふことが出来ないといふことを今でも残念に思ふ．けれども私の後に此のデパートから沢山のお土産を買へるやうな金持の方々が揃つて居られることであらうと私は安心してゐる．併しながら子供の土産をあゝいふデパートから買うて来るのは子供の躾の為に悪い．斯ういふことであるならばどうぞ此の名教自然のデパートを何でなりと打壊して戴きたい．私は決して苦情は申しませぬ．其の御考へで居て貰ひたい．

終りに一言附加へて置きますことは，名教自然の此の四字は中々大きな字であります．私は生れて初めて斯ういふ大きな字を書きました．是はもう精一杯．それに悪筆ぢや．

当世流行の言葉に「心臓が強い」といふ言葉がある．如何にも之を書くには書きましたが，心臓の強かつたことは私自身に全く自覚して居ります．其の点どうかお汲取りを願ひたい．然るに一代の文豪蘇峰徳富先生が御撰文になつた文章と，横浜の巨人三渓原先生が名筆を揮はれたものと私は同居することになつて居ります．洵に光栄の至りではありますが，同時に洵に恐縮に堪へませぬ．恐れ入つて居る次第であります．

玆に両先生に厚く御礼申上げる次第であります．

洵に今日は皆さんより多大の御厚遇を蒙つた光栄に対し重ねて厚く御礼を申上げて御挨拶と致します．

(4) 大幸勇吉（京都帝大名誉教授）**祝辞**

私は鈴木君とは40年以上親しく交つて居りまして，普通の交際以上の親密な間であります．鈴木君の御栄進，又御名誉のある事柄につきましては衷心喜んで来た者であります．此の度鈴木君の記念碑の除幕式があるといふ御案内を受けて喜んで，京都から今朝此処に到着した次第であります．

鈴木君の御性格につきましては，普通の人とは大分違つたところがあります．それ等の事柄に付きましては先刻色々の方面の御方から十分に御話がありましたので訥弁な私が之を繰返すことは差控へます．

鈴木君が創立以来15年間特別の教育行政を以て此の学校を管理されて以来一回も文部省に御迷惑を掛けたことはない．所謂学校騒動が起つたことがないといふことは，是は鈴木君の人格，徳望の然らしむるところであると信じます．鈴木君は学校の為に御尽力になりましたのみならず，此の横浜市の為に非常に御尽力になつたのでありまして私の友人などは鈴木君は横浜の事ばかり考へて居て困ると話して居るのを聴いたことがあります．

今日の如き此の盛大なる除幕式の行はれた事は勿論偶然ではありませぬ．

是は当然の結果であります．私にもテーブル・スピーチを何かやれといふ事がありますが，私は元来テーブル・スピーチは大嫌ひ随つて下手であります．併し鈴木君に祝意を表する為に此の訥弁を以て一言申上げた次第であります．

(5) 青木周三（横浜市長）祝辞

本日茲に本校副校長鈴木達治先生の記念碑除幕式を挙行せらるゝに当り，一言挨拶を申述べる機会を得ましたことは甚だ欣快と存ずる次第であります．

先生が横浜に於ける知名の士でありますことは，今更私が改めて申上げる迄もないことでございますが，それも本市最高の学府の校長であつたといふことの外に，極めて懐しまれる人格を有たれた一横浜人として，市民の間に親しまれて居るのであります．

本校生徒も卒業生も，先生を校長として尊敬する以上に，お父さんといふやうな感じで先生を慕つて居たし，今も相変らずさうした気持で御交際を願つて居るやうに思つて居ります．

是は先生の常に唱へて居られる自由教育といふやうな主義の結果ではなくして，先生の持つて居られる徳望の結果なのであります．

本日茲に先生を偲ぶ記念碑が建てられるに至りましたことも，此の人柄を慕ふ気持が相集つて昔の教へ子や今の職員生徒，先生の知人等が一団となつて自然の結果生れ出たものと考へられるのであります．

皆は頌徳碑といふやうなものにしたかつたと承ります．やはり先生の徳の現れであると申すことが出来ませう．

先生の影響を受けました幾多の卒業生が，今や全国の工業界の第一線に立つて活動して居られるのでありますが是等の卒業生は学校で教へて貰つた学科を役立たしめて居ることは勿論でせうが，それと共に先生を中心として作り出された極めて明朗なる学風を自分の生活の指針として活動して居ることであります．

先生の学校生活を外部から見て居りますと，極めて楽しんでやつて居られる，職務を勤めるといふよりは寧ろ楽しみにやつて居るやうに思はれたのであります．此の楽しんでやるといふことは苦楽を超越し，熱心とか親切とかいふ徳をも超越しまして，謂はゞ宗教的のものであるといふことが出来ると思ひます．

先生の教育は極めて熱心であり，能く生徒や卒業生の面倒を見て居られたかと考へますが，やはり斯うした気持の発露であると信ずるものであります．職務を持つ者は斯ういふ気持でやらねばならぬと私は常に考へて居りますが特に学校の先生の斯うした影響は修身道徳の講義より遙に価値あり，影響するところ亦頗る大なるものがあると思ひます．

先生が本市に参られましたのは大正９年ですから，昭和10年２月御退官になるまで15年間になりますが，此の15年間は洵に奮闘努力の継続であります．

尤も先生は自然に従つただけだと御考へになるかも知られませぬが，創立日尚ほ浅きに大正12年の大震災にて全校挙つて焼土となり，剰へ名古屋市へ移転の運命に遭遇せられまして，先生は百方奔走の結果現場に復興の目的を達し，御退官に至るまで復興事業に尽されて居つたのであります．

尚ほ此の間或は建築学科，或は造船工学科を増設し，或は教員養成所を附設し，内容の充実，工業教育の振興に努められたのであります．

本市として特に感謝すべきは，高工卒業生が本市工業界の中堅的幹部として活動して居られる外に，生先は県立商工実習学校長，市立工業専修学校長として本市市民の子弟の訓育に当たられて，極めて優秀なる商工実務者を出し，以て本市工業教育に寄与せられたことは頗る大なるものがありますが，更に横浜工業懇話会を組織せられて，個人として本市工業の進歩発達に力を致されたことであります．

本市工業が今日の隆盛を見たのも，先生の御尽力を藉らねばならぬ事も沢山あることゝ信じ此の機会に於て御願ひを申し上げて置く次第であります．

今や時局は急を告げて居ります．然れども工業日本の威力は世界を脅威せしめて居ります．工業知識，工業技術だけでなく，工業日本の精神の力が世界を脅威せしめて居るのであります．

先生の如き学徳高き教育者の力を以て，今日の日本工業界を築き上げることに至つたことゝ信ずるのであります．

今日此処に出来致しました記念碑に刻み込まれた「名教自然」の教は，先生の風丰を伝へると共に永く本校教育の師表として，若き学徒の憧れとなることでありませう．

洵に意義深き事業として欣びに堪へぬ次第であります．

茲に先生の御健在と本校の隆昌を祈つて，本日の祝詞と致します．

(6) 有吉忠一（貴族院議員）祝辞

私は本校の創立に与りました縁故から，何となく此の横浜高等工業学校は自分が育て上げた子供のやうな考へを持つのでございます．

私は先年本県の知事を拝命して横浜に参りました時には，男子を教育する学校はたつた三つよりございませぬでした．県立第一中学校と第二中学校と横浜に最も古い通称Y校，此3つよりありませぬ．

女子に関する教育機関は非常に沢山にありました．女子師範学校，県立高等女学校，フエリス，紅蘭，共立，英和，捜真の各女学校に横浜高等女学校，神奈川高等女学校と随分沢山ありました．

そこでどうしても横浜には男子を教育する機関がもつとあつて欲しいと思つておりまする際に，丁度大正5年大隈内閣の方針として，我国に高等なる工業教育機関を新に施設するといふ議があることを，只今も本校の商議員をして居ります中村房次郎君が聞き込まれまして，其の当時の知事たる私のところに，之を招致するに付ての尽力を求められましたので，文部省に付て聴き及びまするといふと，建設費及び敷地を提供するならば考へようといふことでありました．

其の時に文部省が定めました一校の敷地の標準は7千乃至1万坪であります．さうして創立費は約80万円から100万円までの間といふことでありました．

帰りまして色々と各方面に此の交渉を致しまして，横浜の如き有力なる都市にはどうしても工業教育の機関が必要であることを痛感致しまして，之を施設するの決心を致し，遂に市は其の敷地を後日の拡張を考へまして，其の当時は3科より施設をされぬといふことでありましたが，横浜の現勢に顧みて，後日大いに之を増設して貰ふ必要があると考へて，其の敷地は慥か2万坪を抱含して居ると存じます．さうして神奈川県が70万円を提供致し，尚ほ横浜市が其の上に不足を補つたことゝ考へて居ります．さうして此の議が纏まり，議会も通過して愈々施設に決定致しまして其の準備中に私は本県を去ります時分に承りましたところに依ると，此の度高等工業学校には洵に立派な適材が校長として来られる．それは即ち鈴木達治先生であるといふことを承りました．

私は其の当時鈴木先生とは一面識も有つて居りませぬでした．遂に鈴木先生には御目に掛る機会なくして本県を去りましたが，6，7年後再び私は茲に横浜市長として就任致しました．其の時初めて鈴木先生の御風丰に接したのでございます．

それから此の学校と私とは右申しまするやうな因縁がございますので，屢々鈴木先生ともお目に掛り御話を致す機会を持つて居りましたが，鈴木先生が教育上に持つて居られるところの主義と申しますか，理論は，先程祝詞の中に神官が述べられました三無主義，即ち無試験主義，無採点主義，無賞罰主義で，之を折々鈴木先生から承りました．

併し私は有体のところを白状致しまするが，鈴木先生の此の理論には私は一つも感服を致さぬのであります．併しながら鈴木先生が此の学校を実際に統理して居られる其の実績に付いては私は実に感服を致して居るのであります．

其の最も私が感服を致す一つの事は即ち本校を卒業せられたところの卒業生諸君の自主独往の精神が激刺として居られることであります．

此の学校の卒業生諸君の成績を聞きますと，如何なるところに行つても碌々として甘んじて居る人はない．各々其の仕事は忠実に，熱心に働かれるがそれと共に銘々其の独自の考へを以つて自己の事業を進め開拓して行くといふ熱烈なる精神を持つて働いて居られるといふことであります．

斯の如き気魄を此の多数の卒業生の中に打込まれた其の精神といふものは是は実に偉大なるものと私は考へまして，是は全く鈴木先生の教育の結果が茲に現れたものと思ひまして，実に敬服をして居るのであります．

而も其の卒業生諸君が斯の如き立派なる成績を挙げらるゝのは，固より鈴木先生の御力もありまするが，又鈴木先生を援けて行かれるところの先生方の努力も大いに力があると信ずるのであります．

然るに其の先生方の中からも，私が最も感心することは，鈴木先生の校長時代に論文を提出して博士になられた方が8人もあるといふことであります．

斯の如き事は普通の高等工業学校程度のところでは非常に稀な事であります．此の事に付ては私共先般横浜市民の一人として御祝の会を開いてお喜びを申し上げたこともございまするが，斯の如く諸先生が講義を続けながら論文を提出し，自分

の力に依つて博士を贏ち得られたといふが如きことは，やはり校長として思料せられる鈴木先生の誘導捉撫の力が之を致したのであらうと考へまして，先生が生徒を養成せらるゝに就て力を致されたことを感謝すると共に，又先生自身が鈴木先生の思料に依つて斯くも活潑極まる進歩を常に続けて居られることに就て，私は非常な敬意を払つて居るものでございます．

玆に本日鈴木先生の其の威徳を記念する為に此の立派なる記念碑が建設されまして，之を見て学校の諸君は定めし喜んで居られることであらうと思ひます．吾々も亦此の学校に関係を持つ一人として，深く之を欣ぶ者でございます．

併ながら私はどうか鈴木先生が此の学校に残されたるところの自主独往の考へを以て，学校といふやうな名前に隠れ，其の強い力の下に自分の仕事をするといふやうな依頼心を持つことなく，全く自己の力に依つて自己の事業を開拓して行く．其の独立したる精神を持つて進んで行くといふ其の気魄と，それから時代に遅れずに常に自ら研鑽して進歩発達して行くといふ，即ち諸先生の中から8人も博士が出られたといふやうな其の自由なる研究の下に自己を開拓して行かれる其の気風を，此の記念碑と同じく将来も続けて行かれるといふことを切望して已まぬ次第であります．

此の精神を持続して行かれてこそ，私は鈴木先生も自分が此の学校に働かれたことに就て満足を表せられることであらうと存じます．此の記念碑が建つた事よりも，其の精神を続けて行くことの方がより多く鈴木先生を満足せしむるのではないかと考へる次第であります．

私は本日爰に此の麗しき記念式を挙行せられるに当りまして，鈴木先生に就て平素考へて居りますことを申述べまして，私の本日の御挨拶と致します．

(7) **近藤賢二**（日本カーボン会社々長）**祝辞**

私は鈴木先生の同学の後輩であることを申上げますことは洵にお恥しくもありますが，又光栄にも存じます．先生と初めに御目に掛りましてからかれこれ50年になりますので，非常に儼が生えて居る時代であります．恐らく当時独逸から帰られた先生でありまして，色々独逸の工業の話などがありましたので鈴木先生はサイエンスの方に御入りになつたものだとも私共思ひます．ところで今日のやうに大教育家であり，或る点に於ては思想家になられたといふことは当時に於ては考へられませぬでした．

先生は今と同じやうに背も余り高くなく，今よりも少々痩せて居つた位で，学校でも演説会に入る事でもなければ，雑誌に論文を書くといふ方でありませぬ．

無論当時は徳富先生の崇拝者ではなかつたやうに記憶して居ります．後輩の私は今日に至るまで工業上のこと，其の他のことで相変らず個人として鈴木先生に御指導願つて居りますが，報ゆるところはないのであります．唯先刻横浜市長の御挨拶になりました震災直後の高等工業学校の復興に就きまして，一寸したエピソードがありますので，それを申上げてみたいと思ひます．当時名古屋に移転説がありましたものか，文部省は高等工業学校の復興予算に付ては非常に出し渋つたのであります．

或る時鈴木先生が私の行つて居る倶楽部におみえになりまして，文部省で又予算を断られてしまつた．どうにも仕方がないといふことであつた．そこで私は先生に一策を奉つて，私が一つ大いにやつてみやう，といふのは其時の文部大臣は岡野敬次郎さんでありました．それで岡野さんが食卓に就くのをみて，私は鈴木先生を御紹介する為に右左りに坐りまして，文部大臣はまた親しく御承知ないといふので，是は横浜高等工業の校長先生ですと私は御紹介しました．

ところが岡野さんは学校の復活は何時出来るかと云はれたので，実は今も行つて参りましたが色々御説がありましてといふ様なことで，出来るだけ早くやりたいと思ひますと云つたところが岡野さんは出来るだけ早くやるが宜い．何とか時期があるだらうから，それまでにやつて貰ひたいと云はれた．それから鈴木先生は大急ぎで属僚の方に会つて，大臣から許しを得たから何でも承知して貰ひたいといふことを云つたら宜からうといふので文部省に駈け付けましたが，其作戦が功を奏して，局長以下の人も大臣の許しを得たならばと承知をして呉れたと喜んで居られました．其の後又

文部大臣が迭つて江木千之といふ方になりました．

是は老人で中々頑強な人だ．今度は君どうしたら宜いかといつて鈴木先生が見えました．私は岡野さんのやうに背広ではいかぬ．先生は其の時フロツクを着ないことになつて居たが，江木さんにはフロツクでないといかぬといふのでそれも宜からうとフロツクの古い奴を一着に及んで行きました．

其の結果はどうであつたかといふと，君の云ふ通り江木さんはフロツクを着て長靴を履いて居た．入つて行くと此方もフロツクで大いに敬意を表されたので都合が好かつた．そこで江木さんのお許しも出たので，高工の復興予算も割合順調に整うたやうなこともありました．それで今日のやうなことになつたのでありますが，さういふ詰らぬお話を申上げて今日の祝辞に代へたいと存じます．

(8) 安川数太郎（横浜高工教授）祝辞

当校職員の一人と致しまして，私が一言申述べることの御許しを得ましたことは，洵に光栄と存ずる次第であります．先程からも度々御祝辞の中にありました通り，鈴木先生は教育に対する御信念の極めて堅い方でございます．皇室中心主義を以て一貫せられ又人格主義——学問よりも人格を大事とするといふ主義でやつてお居でになりました．御承知の通り三無主義と申し，無試験，無採点，無賞罰を主義とせられましたが是はいふに易く，行ふは難しいことは申す迄も御座いませんが，之を実行するに付ては先生は実に涙ぐましい奮闘をなさいました．

この主義に就きましても先生程の徹底した信念もない私共は時には先生に喰つてかゝつたこともあります．其度毎に先生の御指導に依りまして，成程先生の御信念は固いといふことを感じたのでございます．

又無処罰主義に就きましても，私は深く感じた事が御座居ますが，其の一例として曾て数年前学生社会におきまして赤化思想が非常に猖獗を極めた当時，本校の学生にも将に赤く染まらうといふ虞のある一人の学生が警察へ連れて行かれた事が御座居ました．其の時先生は自ら警察まで御出でになりまして，諄々と其の生徒に御諭しになり，之を正道に還らしめて，元の通り学業を続けさして，立派に卒業させたことがあります．当時大抵の学校は赤の嫌疑位でも之を退学とか放校に処したのでありますが，先生はさういふ無処罰の精神を発揮せられたことをみて私共は大いに感心致しました．又先生は非常に将来を見透すところの見識の高い方であるといふ事に就きましても私共は色々と感じて居ります．例へば震災直後に於きまして建築科を新設せられるとか，又当校には学科の新設として電気工学科が配置せられて居つた事でありますが，神戸高工の方では自校に配当せられた造船工学科を喜ばずして電気工学科を熱望する状態でありましたので，先生は横浜港の使命といふ事を御考になりまして，当校は造船科を希望しようといふので，造船科を設置せられました．

全国高工中造船科のあるのは当校だけでございます．其の上に造船科を設置すると共に，其の造船科の一部に航空部を設け是が基になりまして今日航空学科が設置せられることに確定致しましたといふ風で，何時でも将来のことを見透される先見の明がお有りになつたといふことは，到る処に其の実例を持つて居るのであります．

尚ほ先生は先程御話のありました通り，「厳ならずして整ふ」といふ実に広大なる包容力を持つてお居でになります．小言を云はずして自然に皆が治つて参ります．吾々職員も皆喜んで先生の下で一致協力して行かれたのも全く先生の御徳の然らしむるところでございます．先生は斯様に太つ腹であられる反面に於て洵に器用な方でございまして，園芸の趣味をお持ちになります．又私は先生から化学を御習ひ致しましたが先生の講義，実験といふものは実に吾々の感心する程注意周到なものでございました．

承ります所によりますれば先生は工業懇話会の幹事として毎月講演者を依頼せられるには必ず御自身で先方へ御出張になりまして御懇請になり，当日は親しく駅まで御出迎へになり，後日また御自分で御礼に行つて下さるとの事で御座ゐます．

尚ほ先生の御徳に付きましては余り細々申しましては時間が長くなりますから是だけにして置きますが，終りに臨み先生の御健康を祈ります．

(9) **日野義一**（横浜高工第２回卒業生）**祝辞**

本日の嘉き日を卜して鈴木前校長の記念碑除幕式を御挙行するに当り聊か所懐を述ぶる機会を得たのは私の最も欣幸とするところであります．

抑々私が鈴木先生を御知り申したのは明治44年東京高等工業学校に入学して有機化学の教へを受けた事に始り，其の後大正11年再び本校に入学し３年間御薫陶を受け今日に至りたるものにして，恐らく本校卒業生数多しと雖も40年間の長期に亘る御薫陶に浸り居る関係，並に最年長者たる点に於て本校の第一人者であり従つて鈴木先生としても，私に対しては非常に印象深いものと自負し居る次第であります．

大正11年私が本校に入学しました最初の動機といふものは校長が鈴木先生でありしこと，並に其の以前に私が明治44年東京高等工業学校に在学中深く印象付けられた同先生の教育方針に共鳴するところが大なるものがあつた為めであります．今玆に聊か先生の教育方針を述べんと致します．

先生が明治44年東京高工在職中に常に自由啓発主義の教育方針を持つて居られたので，当時試験制度の最も厳粛に行はれた東京高工に於て，此の制度に孤立してフリーパスに類するが如き採点方針を支持せられ居た事は，如何に当時の学生に好印象を与へたるものか想像するに余りあるのであります．さりとて先生の科目を学生が放棄するかといふと決してさうではありません．元来有機化学は無機化学と異つて教室に於ける実験も少いし，学生に取つては無趣味な学科であります．けれども当時の先生の講義振りには最も共鳴をし，又難かしい学科の一つでありましたので，一言一句も漏らさぬやうにしてノートに筆記して勉強を自発的に余儀なくせしめられたるのは自由啓発主義の反映でありました．

最近教育方針として事新しく詰込試験制度撤廃を叫ばれて居る今日と比較して，先生は既に数年前に此の考を持たれ，又其の実践者であられた．さうして今日に及んだ此の一事を以つて見ましても，如何に先生が卓越せる教育方針の堅持者であつたかを感知せしめられるのであります．自由教育を奨められる一方，政治家或は実業家等の第一人者を本校に召聘せられて，我等学生の為に講演をなして下さつたので此の点に付ては，当横浜が地の利を占めたることが其の機会を恵まれた第一の原因でありませうが，先生があらゆる方面に御懇意の方が多くて，又時には同じく先生の徳を敬慕せられた方もあつた為であります．

将来の大成を期せんとする希望に燃えたる者に指針と後援とを与へられたのであります．斯ういふ方針の下に私は本校に入学した当時既に30歳でありました．ところが他の学生は皆20前後でありまして，全く懸隔があつたにも拘らず入学を許された此の一事を以てしても，学生の年齢或は職業に拘泥せず，所謂好学に燃える青年を希望し，新に其の道を開かれたことに依つても，それは自由啓発の抱負の一つの現れと私は信じて居ります．其の他先生の見識の点に就ても，文部当局に対しての先生の純理的な意思表示は全く鞏固なものがあつて，本校が創立最初は機械，応化，電化の僅か３科に過ぎませぬでしたが，其の後尚２科を増して即ち建築，造船科，最近は航空科のやうな新しい科を見るに至つたのであります．是等は何れも日本の最も重要なる科でありまして，私等は大いに心強く思ふ次第であります．是れ偏に先生の賜ものであります．又彼の大正12年度の大震災に於て本校も不幸にして一塊の焼土と化しました．

文部当局も其の最善の収拾策として，本校を名古屋に移して学生を教育せんものと懇談せられましたが，先生は強硬に反対せられ，苟も昆虫すら自分の棲家は知つてゐて，たとへ壊されても更に戻つて来るといふのに，一時にもせよ横浜の地を去ることは昆虫にも劣るものであるのみならず，本校の再建を遅延せしむる一大障害となるものであると反対せられました．さうして害こそあれ利益することはないと説いて気焔万丈，時の文部大臣も其の見幕に辟易されて，遂に先生の意思を尊重せられ，漸く本校の復興を固く約されたさうです．此の信念たるや最近皇軍が支那事変に於て活躍し，将来何物かを獲得せん，建設せんとして勇往邁進しつゝあると全く同一信念に基くものでありまして，震災当時の是等の高等政策には非常な苦心をされたことゝ想像せられるのであります．此の時の何物かを目指して強く躍進せられたことが今日の此の完備せる立派な校舎を見るに至つた次第であります．此の種の事を論じ始めると尽きるところがないので，実に感慨無量なのであります．

今日此の偉大なる鈴木先生の記念碑除幕式を挙行せられるに当りまして私は遠く九州から今朝駈

けつけました．

今玆に鈴木先生の面前に於て聊か所懐を述べて我が心中の欣びを披瀝し，併せて先生の御長命を祝つて祝辞と致します．

(10) 田尻常雄（横浜高商校長）祝辞

私は横浜に於ける同じ直轄学校の姉妹学校に関係して居る一人と致しまして，只今御指名を受けましたので一言祝辞を述べまることを甚だ光栄と存じます．鈴木先生の人格，其の他多大の御功績に付ては先程式場に於て青木市長，有吉前市長閣下，徳富蘇峰先生等に依つて云ひ尽されて居りますので，何も私が附加へる必要はないと考へられます．

教育といふものは古今東西を問はず同じやうな型の人が多いのであります．併ながら鈴木先生は常に型破りの人である．型破りにも良い意味のと悪い意味のと二通りありますが，鈴木先生は非常に良い意味の型破りの方であります．本校のモツトーであるところの自由啓発主義，三無主義の如きは，是は余程自信があり，又スピリテーがない限り其の実行は不可能であります．此の世の中に於て最も難かしい三無主義を先生御在任中に十分やつてのけられたといふ事は，其型破りが非常に良い型破りであつて，先生の御人格スピリテーの然らしむるところと，吾々は敬服する次第であります．で教育といふものは最も地味な事業であり，又時を要するのであります．即ち教育は百年の大計を要するのでありますが，鈴木先生の本校に於て為された事業は僅かに10年に過ぎませぬ．然るに今日其の成績，其の効果といふものは相当に現はれ，我国の産業に本校の卒業生が多大の貢献を尽されたといふことは，先生の御徳の然らしむるところである．又先生の御努力の結果であると申して宜からうと思ひます．私は先生が名実共に洵に立派な後継者を得られて，さうして非常に優秀なる教職員を持たれて安心して校長の職を退かれましたが，尚ほ将来に於て先生に俟つところが多いと思ひます．

それは単に学校ばかりでなく，社会的方面に於て，我国の産業方面に於て尽さるべき点が多く，又吾々が要望するところも非常に多いと感じられます．

願はくば先生が一層自重自愛されて益々御健康に，さうして我国産業界其の他社会方面等にも今後共に十分の御貢献あらんことを希望致します．斯ういふ所で長話は禁物でありますので，私は先生の光栄を称へると共に，先生の益々御健勝ならん事を祝賀しまして御祝の言葉と致す次第であります．

4. 徳富蘇峰選文（碑裏面）

丈夫自有衝天気，不向如来行処行*，煙洲鈴木君達治ノ如キハ，ソノ人歟，君初メ京都ノ同志社ニ学ビ更ニ東京帝国大学ニ入リ，理科ヲ修ム．大正９年１月19日政府勅令ヲ以テ横浜高等工業学校ヲ設立スルヤ，君即日選バレテ其校長ニ任ゼラル．創立経営ノ業，専ラ君ノ努力ニ俟ツモノ多シ．然ルニ大正12年９月１日大震火災ノ起ルヤ，横浜最モ其厄ニ罹リ，全校ヲ挙ゲテ殆ンド焦土ニ帰セシメタリ．

此時ニ当リ，青天霹靂，命令一下，愛知県名古屋市ニ移転セシム．君慨然トシテ起チ勇奮自カラ禁ゼズ，或ハ市ノ有力者ニ懇ヘ，或ハ当局者ニ抗議シ，奔走周旋寧処スルニ遑アラズ．遂ニ現場ニ於テ漸ク該校復興ノ目的ヲ達スルコトヲ得タリ．

君ハ夙ニ皇室中心主義ヲ奉ジ，躬行実践一ニ自発ノ力ニ頼ルヲ旨トシ，特ニ学生ヲシテ各自ノ人格ノ尊重スベキヲ自覚セシメ，学生ヲシテ天賦ノ才能ニ応ジテ，其所長ヲ発揮セシムルコトヲ教育ノ主眼トシ，而シテ自ラ三無主義ヲ標榜ス．曰ク無試験，曰ク無採点，曰ク無賞罰，君ヲ知ラザル者，皆ナ其言ヲ異トセザルハナシ．

然モ其ノ効果ハ頗ル著明ナルモノアリ．コレ職トシテ君ノ誠意ノ学生ニ感孚スルトコロタラズンバ非ズ．而シテ横浜高等工業学校ガ特殊ノ学風ヲ陶冶シ，我教育界ニ於テ一種ノ異彩ヲ発シ，超然独歩ノ観ヲ呈スルモノ寔ニ偶然ニアラザルナリ．

此ニ於テ君ハ創立満15年ヲ期シ，自ラ選抜シタル後任者ヲ推薦シ，悠然トシテ去レリ．君ノ如キハ進退出処実ニ其道ヲ得タルモノト謂フベシ．

比ロ故旧門人碑ヲ校庭ニ建テ，君ノ徳ヲ頌セント欲シ，文ヲ予ニ徴ス．予君ト相得ル浅キニ非ラズ，欣然ソノ知ル所ヲ鏤シテ以テ後ノ君子ニ諗グ，然モコレ未ダ君ノ全面ヲ罄スニ足ラザルナリ．

昭和12年11月１日

蘇峰　徳富猪一郎撰

（注）不向如来行処行，如来行く処に向って行かず

なお鈴木達治は，第72回「六ツ川夜話」にこの時のことを次の通り述べているので，しめくくりとして書き添えておく．

此一日に名教自然碑の除幕式が挙行せられた．此の碑を建設する事に就いては一昨年の夏頃より学校関係並に学校出身者の方々に依り委員会が設けられ，長い間の御苦労で出来上ったものである．そうして之が私の退職したに就いての記念として発起せられた事であるので，私としては之等諸君の好意に対して言葉でも又文字でも言ひ尽し又表す事の出来ない深き感謝をしているのである．

＊　　＊

除幕式の当日の前後は天候が甚だ険悪で其の日も危ぶまれて居ったのであったが，幸にして朝迄微雨であったものが晴れ上って，除幕式の終る正午頃にはかすかながらも陽日を仰ぐ事の出来る様な幸を見たのであった．多数の人々が各方面から殊に又遠方から来て下さったという事に対しては真に感激に堪えない次第である．又蘇峯徳富先生がわざわざ来て下さつて，臨場を辱うしたのみならず，私にとつて光栄至極の祝辞を賜った．

先生が壇上に立たれた時には端なくも私が最も尊敬する新島先生が来場せられた様な感を催した．又京都帝大の名誉教授である大幸勇吉先生がわざわざ京都からおいでになったといふ事は，私の青年時代の師として仰いだ方であるので一層の感謝に堪えなかった．猶祝辞を辱うした貴族院議員有吉忠一氏は，横浜高工の創立と不可分の関係ある一人として有難き光臨であつたといはねばならぬ．

＊　　＊

有吉氏の祝辞の中に私と始めて会ふたのは，氏が横浜市長として来られた其後であると云はれたが，之は玆に訂正をして置さ度い．大正９年に横浜高工が開校した秋に，私は今も会計主任をしてゐる大山春翠氏と同道して，伊勢の大廟と桃山御陵に参詣をして学校創立の御報告をした．同時に足を神戸に向けて当時の兵庫県知事であつた有吉氏に県庁に於て面会して，親しく学校開校の状況を報告し，且創立当時の神奈川県知事であつた同氏に謝意を表したので，之が初対面であつたのである．猶青木市長は縷々其の祝辞の中に私の心情に対して懇切な讃辞を賜つたので，あたらざる事であるが其の褒状に対しては感謝に堪えないのである．

又出身者の中に於ては，日野義一君の如きは九州大牟田の如き遠方からわざわざおいで下さって，長文の祝辞を寄せられた事は同様に感謝に堪えないのである．其他大阪方面各処からわざわざおいでになつた校友諸君に対しては，一々其の名を列挙致しませんが，私の銘記して忘れられぬ感謝である．

＊　　＊

もともと此の記念碑は発起人諸君に於ては私の胸像若しくは銅像を建設してやらうといふ目論見であつたのであるが，之を断つて辞退したのであつた．さうして私の希望を入れて此の名教自然碑となつたのである．何故に私は之を辞退したかといふ事は，はつきりと説明が出来ない．何も遠慮をして説明をしないのではなく事実出来ないのである．只何となく胸像若しくは銅像よりも「名教自然碑」が欲しかつたといふに過ぎないのである．発起人諸君に於ては枉げて此の記念碑にせられたといふ事に対しては只々感謝するのみである．

＊　　＊

而して中村順平先生の意匠に依つて新建築を背景として吾が高工の玄関前に鉄筋コンクリートの構造物と相応しく出来上つて，校庭の美観に添へる事の出来る様になつた事に就いては，中村順平先生に深甚の謝意を呈するのである．唯表面の文字が悪筆である事は気掛りである．蘇峯先生は私に告げて「お前の学校の庭に立つ石にお前が書くのであるから如何に悪筆でも何人も文句を言ふ筋合ではない」と鼓舞せられたので，意を強ふして

生れて始めて大文字を揮毫したのである．

＊　　＊

学校の附近に住居し，たえず校門の前を通り又門に入り此の碑を眺める事を得るのは私も真に幸せ者であると此碑の建設に努力せられ又協讃をして下さつた方々に永遠に感謝する次第である．

第2章　冨山校長時代　（昭和10年～昭和24年）

序

冨山校長就任の年の昭和10年はいわゆる非常時第1年であり，それが12年日支事変に進展，さらに16年末大東亜戦争に突入，自由の学園も大いなる国家目的達成のために挙げてまい進した．学園のすべての動きは，この国家目的の線に沿って進んだ．学問すること自体がこの目的達成の手段となった．終戦後とかくのことがいわれたが，日本全体が，いわゆる聖戦達成のためあらゆるものを犠牲にしてつき進んだのが事実である．わが自由の学園も全校あげて必死となって勝つための努力をしたのである．

昭和20年8月15日遂に終戦，それからの数年は戦時にもまさる苦闘の連続で，国民は食うことでせい一杯であった．その中でわが学園は，冨山校長を中心に創立時からの自由啓発，名教自然の校是を生かし，日本再建のための努力をつづけた．本章では，昭和10年より24年までの苦難の時代の本校について述べる．

第２章　第１節　非常時から日支事変ぼっ発へ（昭和10年～昭和12年）

昭和10年は非常時第１年といわれた．満州事変から日支事変へと進みつつあった．軍需産業が盛んとなり，長らく不況をかこっていた経済界，工業界は活気をとりもどしてきた．軍国日本，工業日本の名が世界に警戒心と恐怖心を与えるにいたった．

本校にとっては，昭和10年は大きな年となった．それは前述のように鈴木校長の突然の退任であった．そして冨山新校長の就任第１年で，新校長の手腕が校の内外から注目された．

この年，学園で問題になったのは，運動場の問題と，記念祭をやるかどうかであった．前者は，新校長の奔走で無事確保でき，後者は，学生の熱意によって開催された．なおこの年から第３期復興工事が始まった．

昭和11年初頭，日本は軍縮会議を脱退，２月天皇機関説の美濃部達吉博士が右翼に襲われ負傷，つづいて２・26事件がおこり斎藤内大臣，高橋蔵相らが殺されるなど，物情騒然として，非常時の波がひたひたと襲ってきた．学園もその圏外ではなかった．しかし，ハマの早慶戦では３連勝，競艇では百戦百勝をあげ，寮祭は盛会であったし，学生生活は楽しかった．一方軍事教練も盛んであったが，まだまだ暢気（のんき）な面も多かった．特筆すべきは７月第３期工事が完了したことと，鈴木前校長の記念事業案がまとまったことである．

12年７月７日，日支事変ぼっ発，12年10月国民精神総動員運動展開，学園も戦時色が一段と濃くなってきた．御真影の奉戴，特設防護団の設置等々，この年特筆すべきことは，かねて待望の航空工学科の設置が本決まりとなったこと，鈴木先生記念事業の名教自然碑が完成したことである．恒例の記念祭は事変下開催すべきかどうかはげしく議論されたが，結局開催と決定した．催し物など軍事色が濃厚であった．

なおこの年４月，創立時から勤続の遠藤，堀江両教授が辞任した．

1.　運動場確保される

冨山校長就任後間もなく運動場問題が起こった．隣接の大運動場は，前は横浜の財閥茂木家の所有であった．その後大正８，９年のパニックで茂木家は倒産した．そのため同家所有の土地は別に不動産会社を設立して経営された．鈴木校長は学校隣接の土地を，その会社から無償で運動場として借り受け，その代わり会社が必要な時はいつでも無条件で返却することとなっていた．冨山校長が就任したちょうどその時に，不動産会社から運動場はマーケットおよび民家に解放す

ることに決まったから，即時返却せよとの要求がきた．冨山校長は，当校創立時に尽力し，かつ商議委員である中村房次郎が，その会社の役員であったので，早速善処方を依頼した．種々折衝の結果，会社の役員会で土地は学校に優先的に売却することに変更決定された．

しかしながら事は年度の半ばに起こったので，予算がなかった．幸いにも学校は学校から２キロ余り離れた上大岡最戸町に１万坪（33,000㎡）余の土地を持っており，雑草のはえるにまかせ，放置してあったので，この土地を日本揮発油株式会社（社長実吉雅郎）に売却して金策した．しかしこれでもなお不足であったので，残りは中村房次郎に立替えてもらい，また一部は隣接の商工実習学校に支出してもらい，ようやく冨山校長の努力と人々の好意により，運動場全部を最低価格で買い取ることができた．

後のことになるがこの土地は，そのため航空機格納庫の用地ともなり，戦後は大学の教員養成所敷地として利用することができた．

2. 図書館蔵書数

本校の図書館については，さきに述べた通りであるが，以来自由啓発主義に則り，オーナーシステム（自由閲覧）をつづけており，紛失ということがほとんどなく，わが国学校図書館では他に全く例のない制度として，見学者なども驚きをもって見るのが常であった．

昭和10年３月末の蔵書冊数は和書8,682冊，洋書18,626冊（雑誌を除く），価格総計215,000円でその充実していることは全国高専随一と称せられた．

3. 第13回卒業式

本校第13回卒業式および横浜市立工業専修学校第12回卒業式は，昭和10年３月15日本校講堂で開催された．今回は特にわが国産業界において特異的存在として知られた三井鉱山株式会社取締役会長牧田環工学博士の来場を願い，その他卒業生父兄在学生等多数の参列のもとに行なわれた．

式は午後３時15分から国歌合唱で始められ，卒業生に証書を授与し，ついで冨山新校長切々たる慈父の愛をもって語る式辞に卒業生一同深い感銘をうけた．

このステートメントは，冨山校長の校長となって初めての卒業式式辞で記念すべきものであった．

学校長 式辞

……本校は鈴木校長が創立以来満15年間終始一貫して唱導且実践し，又教職員一同も協賛扶翼し来れる自由啓発の教育主義に依りて進んで参りました．大正10年本校開校式に於て鈴木前校長が宣言いたされました如く，此教育主義は明治大帝の下し賜ひたる教育勅語の一滴に過ぎ無いのでありますが，要は従来の採点に重きを置く試験により学生に強制的勉学を為さしむる事無く，特に指導に当る教職員は数倍の懇篤なる努力と又学生には一層の自覚自発の勉学を促し，各個人に宿つて居る天賦天稟の才能徳性を阻害する事無く自由に発達せしむる事とし，特に品性の陶冶に於ては監視無き自由の環境に自ら反省して責任を重んじ，名節を尚ぶ態の国士を生む事を主眼として居ります．

勿論右は之を論じ或は喧伝するは容易くして実

行の甚だ困難なる物あり，一度是を誤るなれば放縦に堕するの危険あるを慮り夙夜是が達成に一同奮励努力の道程にあるのであります．

過去12回の卒業生に就て是が結果を観察いたしますと，幸にして随所に此教育法の良き意味の特異性を発揮いたしまして世の称讃を博した顕著の例も多々見聞いたしまして密に安堵し，且欣んで居る次第であります．御臨席の閣下各位何卒本校10余年来の苦心努力いたして来ました微衷を御汲み取り頂きまして，更に御同情御後援給はらん事を懇願いたします．唯今証書を授与いたした卒業生も先輩の把持せる信頼を一層宣揚せんとする決心覚悟を有する者で是を各位に御紹介申上げて各方面に於ける御引立を特に御願申上げます．

本年は最近工業界の殷盛に恵まれて本校卒業生は大部分就職いたす事が出来ました．是は一つは各位の特に本校に御同情御賛助下されました御芳志にも因る事で深く感謝いたして居る次第であります．

教職員諸君，諸君は良く鈴木前校長の手足となられて試験採点てう鞭を捨て，赤裸々の人として，時に血のにじむが如き努力と熱意を以つて指導訓育の重きに任じ其丹精の尋常一様ならざる物ありて，今日又新に数百の有為なる国士の苗木を世に送るを得たる事に対して私は諸君が絶大の満足を感ぜられたる事を御察しすると同時に満腔の感謝の意を表します．

卒業生諸君，諸君は各本校本科所定の学科を修了して本日芽出度卒業の栄誉を荷ひたる事は諸君の満足は元より諸君の家庭に於かれて父母兄弟の安心と欣悦は嘸かしと信じます．

凡我国専門学校中，高等工業学校生徒程国費の支弁を多く受くるのは無いのでありまして，特に欧米の此種学校に比較して彼に於ては実験費の重なるは皆大部分自弁せるに比すれば雲泥の差があるのであって，諸君は国家の保護を受くる事の洵に大なる物があります．又個人に就ても，父兄或は他の方面より長年月に渉りて多大の扶翼を仰いだのでありまして，今日の栄誉の反面には是等の恩誼の有りし事を忘れてはならないのであります．又諸君は「名教は自然にあり」と観破せられ唯麗なる春の日光と恵風慈雨を注いで天賦の才徳を自由に発達するの自由啓発教育主義を奉じて一校を率いられたる鈴木達治先生の学校長としての最後の教育を受けたる幸福を享受したる我国青年学徒として最も恵まれたる環境に置かれたのでありまして，必ずや諸君は此発育の勢を永く延長して所謂国家棟梁の材とならねばならぬのであります．

今や我国は内外共に洵に重大時期に遭遇いたして居りまして前途逆睹し難き物があると思ひます．而して和戦何れの方向を取るとしても国運の消長は工業の盛衰が最重要なる鍵の一たる事は敢て贅言を要しません．而して諸君は此工業の第一線に活躍すべき重任を双肩に荷へる者にして，国家の諸君に期待する処大なる物があります．

我国工業は近年顕著なる進歩発達を遂げ例へば紡績人絹等の繊維工業乃至は造船技術の如きは欧米の塁を摩すと云ふよりは時に之を凌駕し，特に数年前の金再禁止に因る円為替安を契機として我工業製品は世界到る処に進出し各国の心胆を寒からしめたる反面に，関税障壁輸入制限等の防備により其進展を阻止せんとする傾向が漸次濃厚となり，必ずしも将来楽観するを許さぬ形勢とも考えられます．即ち今後は今迄の模倣主義を捨て，自主的独創の工業を確立するの要に迫られて居ります．日本人は独創の才堅忍不抜の力に於て必ずしも仏独国民に優るとも劣らぬ実例は少からず吾々の先輩により示されし処でありまして，諸君は自ら国士を以つて任じ，真摯たる態度を以つて努力一番，才能の全部を挙げて精進し，国運の進展に寄与され国恩に報ひられん事を熱望して止まぬのであります．

諸君は学窓を出でて社会の１年生に入学するので元より最初は低い位置に就くのは当然であります．今日の大工業は一つのチームワークで如何なる位置にある人も仕事全体の完成には欠く可らざる役割を演ずるのでありまして一見小事に思はる事の欠陥が全体の失敗を招く例が多々あります．諸君は先づ与へられし最低の位置の仕事を最も完全に遂行する事が必要でありまして夫が同時に各個人将来栄達への階程となるのであります．尚健康は凡ての仕事の源泉たる事は無論の事で，特に此点に留意して進まれんことを希望いたします……．

本日親しく牧田博士の御声容に接し得たるは特に卒業生一同に取りて無上の餞けであると信じて居ります．此処に博士に対し一同に代りて深甚の感謝の意を申述べ以つて式辞といたします．

合格発表（昭和11年）

4. 入学検定合格者発表

昭和10年度の入学志願者は総計2,574名で，このうちわずか200名余が入学を許可され，末曾有（みぞう）の難関であった．

すなわち，機械20，応化9.5，電化10.9，建築6.5，造船13.9平均12.6倍という本校始まって以来の競争率を示した．

検定試験は3月24日から28日まで行なわれ，翌29日午後1時に合格者が発表された．

5. 入 学 式

昭和10年度の入学式は春雨煙る4月9日午後1時から本校講堂で行なわれた．式は校長の教育勅語奉読についで下記のように本校の自由啓発主義についての詳細な説明があった．これは新入生に対する初めての校長の言葉でもあるので，次に記しておく．これに述べられたことは鈴木校長の自由啓発主義を敷衍（ふえん）したもので，校長は変わっても15年間校是としてきた主義は少しも変わっていないことを示した．

学校長 挨拶

諸君は今回多数の志願者の中から選抜され，本校へ入学許可になったが，これは諸君が多年の奮励努力と立派な健康を持って居られた賜物で心からお喜び申上げます．

諸君が今まで受けられた中等学校教育は諸君の智徳錬磨となったものであるが，これから本校で3年間学修することは諸君の一生の基礎となることで，この3年間に諸君が充分勉強さるるか否かは将来諸君が国家棟領の才となり得るか否かの分岐点とも言える．この入学式に当り入学の満足と幸福を感ずると同時に，充分努力する事を決心せねばなりません．本校の教育方針は勅語の「学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ」によって居ります．

本校は創立以来15年間，自由啓発の教育主義を行って来ましたが，これは各人の持った天賦天稟の才能を阻害することなく自由に発達させることを本旨として居ります．

すなはち学校は諸君に日光と慈雨とを充分に注ぎ，将来諸君が天を摩する様な亭々たる喬木になり得る様な苗木として，世の中に送り出すことを目的として居ります．さらに具体的に申すならば試験採点に重きを置いて強制的に勉強させず，専ら各自の自覚と自発をまって自由に各自の能力を発揮する様に勉めるのであります．これは言ふに易く実行は困難なことで，一歩誤れば放縦に流れる危険がないでもありません．

諸君の先輩は本校の自由啓発主義の真髄を納得し，充分特色を発揮して立派な校風を形作り，社会へ出てもなお好評を受けて居ります．諸君は本校の歴史を発揮しさらに大成されんことを希望致します．国運の消長は工業の盛衰に重大な関係が

あります．諸君の将来はこの国運発展の第一線に起って働く光栄ある役割を担って居ります．諸君はあくまで堂々たる態度を持ち，一歩一歩確実に専心邁進されんことを望みます．

本校の自由啓発主義を確立して，これが中心として大いに啓発されましたのは，最近まで本校の校長で現在名誉教授の鈴木達治先生でありまして，本校は長く先生の大精神を汲んでこれを校是として職員生徒が打って一丸となり進みたいと思います．

身体の大切なことは私が何も御注意申上げるまでもないことでありますが，毎年本校は厳重な体格検査を行って許可するに拘らず相当多数の休学者のあるのは諸君のみならず国家の為に大なる損害でありまして，諸君は特に健康に留意されることを要します．

6. 横浜工人クラブ誕生

横浜工人クラブ創立第1回総会は昭和10年4月3日神武天皇祭のよき日を卜（ぼく）して開催された．

本クラブについては本校校誌の本筋とは少しくそれるとは思うが，鈴木初代校長の従来からの主張である横浜市と工業人とを結びつけたい，とのかねてからの念願の現われであるので，ここに簡単に記しておく．

すなわち横浜工業会（横浜高工出身者の集り）ではかねてから，全国各高工の出身者で横浜市に在住あるいは勤務している人々をもって一大団結を作り，躍進工業日本に貢献し，あわせて相互の親睦をはかりたいとの考えを持っていた．昭和9年11月初旬，全国各地の高工卒業生団体に趣意書を発送，賛同を求めたところ，続々賛成があり11月下旬各校代表が集まり，その決議に基づき，第1回幹事会を召集規約を制定，横浜工人クラブと命名した．会長には本校初代校長鈴木達治が推薦された．

規約によれば本会は工業専門学校出身者で横浜市に在住勤する者を以て主体とし相互の懇親を旨とし併せて工業の向上発展に資するなどとなっている．役員は次の通りであった．

会長　鈴木達治（横浜）当番幹事　秋山岩吉（蔵前）石井文雄（横浜）尾川岸太（名古屋）山岡祐朝（大阪）代表幹事　田中次郎（徳島）宇野良平（金沢）広川季一（宮城）大野　陽（仙台）松岡正久（米沢）樅山　甫（福井）安藤良弘（芝浦）早川光二（桐生）水野太郎（山梨）中元藤英（京都）江田精（熊本）高橋清輔（札幌）津田信良（蔵前本部）清水平治（神戸）

第1回総会は前述のように4月3日午前10時から会場である横浜桟橋食堂で，日本工業の中枢を握る京浜工場の第一線に立つ若きエンジニア150有余名を集めて開催された．

鈴木会長はまず本会の必要性を説き「この様にして皆が集れば和気靄々のうちに国家に奉仕することができる．本会は何ら政治的な考えを持っているものではない．お互い集ってこの地方延いては日本工業の為に尽したいと衷心から思うのみである．」とあいさつした．

また顧問として出席した山梨高工清水校長は「東京から六郷川を渡ってきて，その左右に並ぶ工場を見ますとまことに工業日本の鮮かな発達に驚く．この工業界の第一線に立って働く者が一堂に会し相ともに語ることを得たことは邦家の為に喜びにたえない」．

また安川東京高等工芸校長は「全国の高工出身者が自派の他派のと言う考えを撤廃して一堂に集ったということだけで実に朗かな会であります．総ての学校の出身者が相寄って手を握りあうということは実に有意義なことであります．どうかこの会が，横浜だけに止まらず全国に及び，数万の者が力をそろえて一つの会を作ることになれば非常に有力であろう」と述べた．

一同はおりから開催中の横浜復興博覧会をバルコニーから眺めながら，立食パーティーに移り，第一班はランチに乗り鶴見川崎方面の工業地帯を視察，第2班は博覧会に入場，盛会裏に総会を終わった．

7. 昭和10年学園人事

鈴木校長退任，冨山校長就任に伴い学園の人事移動がかなりはげしかったので，次に発令順に記しておく．

10年2月13日	教　授	橋本　重隆	依願免本官
	〃	渡辺　義勝	〃
	〃	山下誠太郎	〃
3月25日		鈴木　達治	名誉教授の称号を授く
4月1日	助　手	森川幾久雄	任助教授
4月4日	教　授	藤川　利常	任広島高師教授兼広島文理大学生主事
4月10日	助教授	斎藤　輝治	任　教　授
	〃	阿部　滋弘	〃
4月22日	教　授	小山　亮清	依願免本官
		草間　時蕃	任　教　授
7月1日		友成　忠雄	任助教授
8月31日			
	広島高工教授	佐藤　正能	任　教　授

岡　実講師 去る

岡実講師は大正11年以来毎学期一回経済問題を中心とした時局の動向について，とかく視野の狭いエンジニア学生に対して課外講義を行なってきたが，先般東京日日新聞社取締役会長に就任以来多忙のため昭和10年3月講師を辞した．

藤村教授　母校へ栄転

電化教授藤村利常は昭和10年4月4日付けで母校である広島文理大生徒主事兼広島高等師範学校教授に任ぜられた．

藤村教授

同教授は大正9年本校創立と同時にドイツに留学大正12年帰朝，爾来電気化学科教授として本校のために尽すい，学生より電化の親爺（おやじ）として親しまれてきた．新聞部初代部長，音楽部長時代にはベヒシュタインピアノを購入，野球部長時代には対高商戦を復活するなど，校友会のためにも尽くすところ大であった．

小山教授の辞任と草間博士の再任

昭和3年以来応用化学科教授として本校のため尽くしてきた小山亮清は10年4月22日付けで辞任した．同教授は本校就任以来脂肪酸の研究をつづけていたが，今回，理科学研究所真島研究室へ移り，さらに研究を継続することとなったものである．学園融和の功労者であり校友会アルコ

一会の創立者でもあった.

なお同日付けで草間時蕃博士が再び応化教授に任ぜられた.

8. 本校出身の最初の教授生れる

昭和10年4月1日，助教授斎藤輝治，同阿部滋弘は，それぞれ教授に任命された.

斎藤教授は本校機械工学科第1回卒業，阿部教授は応用化学科第1回卒業で，本校出身の最初の本校教授である．両教授とも卒業と同時に本校に奉職，12年の長い間専門学科に研さん，後輩の指導に尽すいし今日の昇進をみたものである．なおこのことは，鈴木前校長とともに，橋本，山下，渡辺3教授が勇退し，教授定員に欠員が生じたことによるものであった.

9. 第3期復興工事

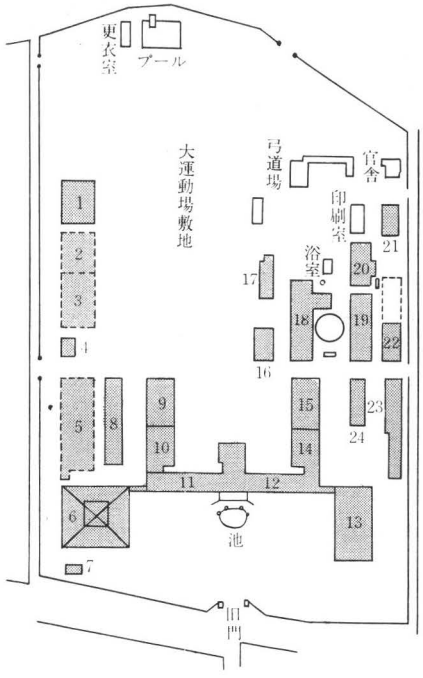
予算の関係上，一部建ては停頓し，また一部できては休憩していた本校校舎新築工事は，10年1月10日，松田文相の視察などもあり，ようやく第3期工事にとりかかることとなった.

すなわち同年5月下旬，入札の結果30万5,000円で戸田組が請負うことにきまった.

今回の建築は本館3階建て，応化，電化実験実習工場3階建て延450余坪(1,480余㎡)であり，本館は中央，基礎学科教室，応化教室一部，造船工学教室，小使室，食堂等を含んでいた．ただし今回の入札は主体構造と外装のみで，内装は予算の都合ではいっていなかった.

なお建築学科と講堂はあと回しとなった.

本工事はその後予定通り進捗し，11年9月末完工した．ただし内装が完備し，全面使用可能に



1 柔剣道場
2 体育部室
3 雨天体操場
4 銃器室
5 人絹工場
6 建築科
7 車庫
8 電化応化実験室
9 電化科
10 応化科
11 中央其他
12 基礎学科
13 講堂及図書館
14 造船科
15 機械科
16 配電室
17 貯炭室
18 機械科実習工場
19 機械工場
20 鍛造鋳造工場
21 電水力実験室
22 造船
23 船体抵抗実験室及機械室
24 航空実験室

学校校舎等配置図
(高工時報 10年6月8日より)

なったのは，昭和13年７月であった．

なお，この工事のため正面広場は機械置場，工事場等にあてられ，出入口は学校両側の小門だけとなった．

10.　夏季実習

学生生活夏の思い出の一つは夏季実習であろう．３年生が学生生活最後の夏休みを額に汗して実社会見学を兼ねて実習をする．

しかし，この夏季実習も世間が不景気であった昭和初めから６年ごろまでは，受入れ先がほとんどなかった．昭和９年ごろから景気回復にともない，ようやく歓迎されるようになり，10年に至り非常時を反映し，受入れ側も多数の学生を迎えることとなった．ただ軍需工場では機密関係から受入れをこばまれた．

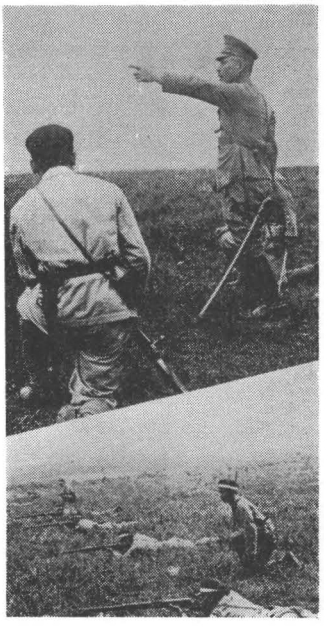
本校ではこの夏季実習のトップは造船科で各一流造船所，飛行場などへ多数が出かけた．また機械，応化，電化，建築各科も，それぞれ官庁，工場で熱心に実習し，受入れ先ではさすが横浜高工だと評判がよかった．社会へ出てからも忘れられぬ思い出の一つであろう．

高工時報昭和10年夏季特別号には「握るハンドルに思う　未来の活躍，理研液体窒素工場　応化内山正次」「待遠しい交替時間，窓辺の爽快味，明治製菓川崎工場　応化小栗山善彦」「国際列車に乗って感ずる甘い旅愁，南満鉄道　機械松井高士」「しみじみ感ずる職工生活と労資問題，三井玉造船　造船斎藤竜」「汽艇に乗って30分間の避暑，横浜ドック　機械平田俊夫」などの夏季実習の楽しい思い出の話が載っている．

11.　野外演習

夏季実習が夏の思い出であれば，毎年２学期始めに行なわれる野外演習も思い出のアルバムを

野外演習風景（昭和12年）



飾る一つであろう．これについてはさきに学校教練の項で触れたが，今昭和10年の例を次に記しておく．

昭和10年９月11日から14日にわたり，１，２年生の野外演習が例年のように富士の裾野で好天に恵まれて行なわれた．

第１日　午前８時校庭に集合，校長の訓示の後湘南電車（現京浜急行）で横浜駅へ，11時20分横浜駅発午後１時過ぎ御殿場駅着，直ちに行軍，演習をつづけながら，午後４時滝河原の廠舎に入り夕食，再び９時過ぎまで野外演習を行ない就寝．　第２日　午前午後にわたり，南北両軍対抗遭遇戦，夕食後再び８時半まで夜間戦闘．　第３日　往復６里の籠坂峠への行軍，午後４時帰着，夜に入り冨山校長来廠に学生の意気上る．　第４日　午前２時非常呼集．裾野最後の払暁戦を展開，冨山校長自ら最前線で統轄，午前６時半　廠舎出発三島重砲連隊見学．午後２時横浜駅着，学校まで行軍，４時帰校．校長および教官国方中佐の講評あって解散した．

３年生の野外演習は10月10日より４日まで，富士板妻廠舎で行なわれ，　第１日　夜間戦闘　第２日中隊，大隊の戦闘教練および三島重砲兵連隊の射撃演習見学，この行を共にした冨山校長は，同日夜やむを得ぬ校務のため帰校した．　第３日　午前２時より払暁戦．三島，箱根間６里の行軍の後，附近温泉に一泊．　第４日　湯本まで２里半行軍，電車にて帰校，講評の後解散した．

なお両演習とも新聞部員で編成された通信班が号外を発行し好評を博した．

なお昭和11年に至り過去３年つづいた富士裾野を変更し，千葉県習志野練兵場を演習地とした．これは地勢その他状況の変わった土地を使用することにより，訓練の幅を持たすためで，以後裾野と習志野と交互に行なわれるようになった．

12.　開校15周年記念式

昭和10年は開校15周年に当たったが，鈴木前校長の趣旨により特に盛大な記念式典は行なわれなかった．

11月１日午前10時講堂で記念式典が例年のように行なわれ，別項のように１日から３日まで記念祭が催された．

学校長 挨拶

本年度の記念祭はちょうど開校15周年に当っていますが，去る１月19日前校長鈴木先生が言われたように，他校のような盛大な祝賀式は行なわず，質素な記念祭を開催します．記念祝典は全校本建築が完成した時か，或は満25周年に行なおうと思います…….

学校も創立当時から見ますと質的にも量的にも飛躍を続けて当初その成果は外界の一部から疑問視されていた「自由啓発主義」が成果を挙げ，又外部よりも認められつつあることは甚だ意を強うしています．創立当時から見ますと現在は５科を有し，近き将来に於て航空学科の新設も有力化しておりますので，約２倍の規模となります．

本年はこの発展の原動力となられた鈴木先生の御挂冠という大変化があったのですから記念祭を契機として，職員，学生打って一丸となり一層の結束を堅くし，先生が基礎を確立せられた教育主義の完璧を期することが我々に与えられた任務であると信じます．本年の記念祭は質素ではありますが，ここに精神的な大きな意義が含まれています…….

我々はこの佳き日に当り更に全校一致高工第２の躍進へと第１歩を踏み出そうと思います．

開校15周年記念祭

本校開校15周年記念祭は恒例のように11月１日，２日，３日の３日間にわたり開催された．当

初今年の記念祭は第3期工事のため場所的に開催は無理であろうとして取やめの声も出ていたが，全校友の押しの一手で開催ときまったものである．

とにかく本校の記念祭はハマの名物となっており，校内開放，工業の常識普及，市内大行進などハマの行事の一つとなっておるので，万難を排してもやろうということとなったもので，今年の記念祭は難産の記念祭といわれた．しかしいざ開催と決定するや，各科の張りきり方は格別で，それぞれ特色ある催し物がくり広げられた．3日間の行事を概観すると

〔11月1日〕 △祝賀式（午前10時）校内開放（正午～午後4時）△電気化学科音頭大会（午後6時校庭）△建築学科　芸術行進（午後2時出門）△応用化学科狸囃行進（午後6時出門）△高工時報号外発行

〔11月2日〕 校内開放（午前9時—午後4時）△電気化学科音頭大会（午後6時校庭）△3曲演奏（午後6時講堂）高工時報号外発行．

〔11月3日〕 校内開放（午前9時～午後4時）△関東中等学校柔道大会（午前9時道場）△県下中等学校庭球大会△県下中等学校野球大会△電気化学科音頭大会（午後6時校庭）△祝賀音楽会（午後6時講堂）△建築学科芸術行進（午後2時出門）△高工時報号外発行△時報クラブ発会式（午後2時教官食堂）．△航空研究会空中メッセージ △絵画展（アトリエ）△写真展（工専教室）△山岳展（ヒユツテ）△華道研究会・園芸クラブ（4教室）．

なおこの諸行事の中でも圧巻は毎年建築学科により催される芸術大行進で，ハマの人気をさらった．今年のテーマは「日本文化の独立」で行進の中心の山車は長さ5間，高さ2間，幅1間半のギリシャ風の舟であった．この行進は（1日）校門—若宮八幡—坂東橋—長者町—尾上町—本町—県庁—音楽堂—市役所—尾上町—伊勢佐木町—吉野町—帰校，（3日）校門—若宮町—伊勢佐木町—馬車道—本町—ニューグランド—谷戸橋—花園橋—公園—市役所—伊勢佐木町—帰校　であった．

なおこれは松竹トーキーニュースで全国に紹介された．

13.　新艇3隻進水

端艇部では昭和11年3月3日午後2時，横浜市本牧岡本造船所で，新艇3隻の進水式を挙行した．

端艇部はこれまで連戦連勝実に99回をなしとげ100回連勝を目前にして，さらに新艇3隻を得て意気大いに上がった．

この日は桃の節句に当たり春風ほおをなで絶好の進水日よりであった．式は鈴木名誉教授を迎え教授近藤政一端艇部長により第2パナマ第2マゼラン第2スエズとそれぞれ命名され，命名式後3艇は勇躍して八幡橋の艇庫に向かった．なお新艇は全長45フィート，幅員4フィートの見るからにスマートなものであった．

14.　第14回卒業式

第14回卒業式は昭和11年3月14日午後3時から例年のごとく横浜工業専修学校と合同で本校講堂で挙行された．

まず式は国歌合唱，冨山校長の熱あり情ある訓示，横浜市長の祝辞（代読）があり，つづいて東北帝大総長本多光太郎博士の「鉄と文明」と題する講演があり，最後に卒業生の答辞，校歌合

唱あって閉式となった．当日は幾多の優勝カップ，優勝旗，優勝楯が壇上に飾られ，去り行く卒業生の過去3年の楽しかった学生生活の思い出を語っていた．なお式辞中に横浜工業専修学校が青年学校となったことに言及しているので，あえてこれを省略せず載せた．

学校長 式辞

……大正12年初めて第1回卒業生を，世に送つて以来数年間は，世界大戦後の財界恐慌時代であり，続いて関東大震災に遭遇し産業界極めて不況状態を続け，加ふるに本校歴史日尚浅くして汎く世に知られず，自然当時の卒業生就職に就ては，学校は相当の努力苦心を要したのでありましたが，逐次改善せられ又本校の教育主義も漸く其実体を認められ，且過去数年来の我国工業界の殷盛に恵まれて，一昨年来俄然卒業生の就職率は激増し逐年新記録を生むに至り，特に昨年より本年に亘りては，大正7，8年当時の盛況を彷彿たるの観ありまして，昨年第1学期劈頭既に採用申込ありて以来陸続いたし其数実に卒業予定者数の約4倍に達し，自然就職決定を見る者相次ぎ，第2学期末よりは大部分御辞退申上ぐる事となり，極少数の目下交渉中の者を除く外は，全部本日卒業と同時に就職し得るの状態であります．

是勿論時勢の力に依る事と存じますが，同時に各位の本校に対する特別なる御同情御支援の賜なりと信じ，此機会に於て厚く御礼申上ぐる次第であります．然し現況は必しも永く続行するものとは期待致して居りません，学校は無論の事，卒業生に於ても徒に今日の盛況に眩惑されず又此高潮に乗じて気驕る事無く互に相誡めて健実なる地歩を築く様鋭意努力致して居ります．

本校の教育は我国民のみが有する，千古不磨の聖典たる教育勅語及教育に関する御沙汰書の聖旨を奉体し之を文字通り実践躬行する事を以て根源と致して居ります事は勿論でありますが又鈴木前校長により樹立されたる「自由啓発」或は「名教自然」の標語を以て表はるゝ教育主義に依りて進んで居ります．

本日証書を授与致しました本校卒業生は約11倍の志願者中より選抜入学許可せし逸足でありまして，3年間前述の教育主義により鍛錬修養せし，将来必ずや自由に其驥足を延し得る丈けの基礎を与へ且年齢平均21年9ヶ月の若人にして，又良く産業界の第一線に馳駆して其任を遂行し得る気魄と実行力を併有せる精鋭でありまして，今日是を各位に御紹介申上ぐるは不肖の洵に本懐とする処で又同時に今後の御指導御誘掖を懇願致す次第であります．

尚工業専修学校に就て一言させて頂き度いのであります，同校は大正10年開設された横浜市の経営による夜間授業の学校でありまして，高等工業の設備と職員を総動員して拮据全力を挙げて授業の任に当つて居ります．現在生徒総員687名に達し志願者も逐年激増し昨年の如きは許可人員の2，3倍に達し，昨年より青年学校令に拠る事となり，公立青年学校神奈川県横浜市横浜工業専修学校となりましたが，恐らく我国最大最盛の青年学校なりと自負して居ります．

生徒の大部分は昼間各業務に鞅掌し，疲労せる身心を以て夜間学業に傾倒せる特志者のみでありまして其日々に於ける熱誠は実に感激に値する物があります．世間よりも良く其真価を認められ近時卒業生の御採用申込多く本日の卒業生は引続き従来の職を続けるか又新に位置を得て全部習得せし智識を活用し得る幸にあります．而して我が高等工業が設置に際し神奈川県及び横浜市より受けたる恩顧に対し其万分一に酬ひ得る事と存じ洵に欣懐とする処であります．

卒業生諸君，本日此に本校規定の課程を首尾よく修了せられたる諸君に卒業証書を授与するに際し，諸君の社会への第一歩を印する始業の首途を祝福して一言惜別の辞を述ぶるは私の愉快なる義務と考へて居ります．

諸君は多年螢雪の功空しからず今日の栄誉を贏て自らの歓喜大なる事は勿論，諸子の父兄弟妹に於かれても門に倚つて諸子の錦衣帰郷を迎へらるゝ事と考へ定めし満足なる事と衷心御欣び申上ぐる次第であります．其に就けても先第一に諸子は此際感謝感恩と云ふ事を銘記され度いと思ひます．今日此栄誉を担はれる迄に父兄尊族の長年月間の哺育苦労の尋常一様ならざりし事，又諸先生，先輩，友人の恩，更に面識なき古今東西の賢哲より受けたる恩恵，或は本校が県市よりの巨額の寄附と国家巨万の資を投じ設立されたる此の完美なる設備の下，年々多額の国帑を費して教育されたる，絶大なる国家社会よりの恩，是は取りも

直さず，上皇室より享けたる鴻恩にして特に感謝し奉る可きと信じます．

又諸君は明日より習得したる智識を基礎として夫々自己の全力を挙げて働き得る職を与へられしことは国家社会よりの一大恩恵に非ずして何ぞやであります．人苟も心の内に感謝感恩の念生々として存するなれば不平不満の邪心乗ずる機会絶無にして唯身の為め国の為め誠心誠意努力奮励常に現況を改善せんとする一大勇猛心に燃えるのであります．

又諸君の是より就かるゝ職業は単に衣食の途を得る方法に非ずして国家社会に対する奉仕の手段と考ふ可き事であります．又一度職務を決定したる以上は其種類を問はず，地位の高下を論ぜず諸君学生生活の永き準備時代に獲得せし基礎的能力を十二分に発揮して忠実に職責を尽し以て徐ろに初志の貫徹と最後の理想への邁進に努力されんことを希望致します．喩へ如何に位地の低き仕事と雖も夫れ自身既に其所属団体延いては国家社会に対して重要なる役割を演じつゝある事を自覚すべきであります．尚特に節操の重んずべきを忘れず誠の志を以て人として最も貴き又価値ある生活に終始されん事を熱望して止まないのであります．

諸君の与へられたる職業の専門的智識に就ては学校に於ては其基礎と端緒とを得たるに過ぎ無いのでありまして，今後の自発的学得に多大の努力を為し其完成を期せねばなりません．又常に外国語等の利用により其方面の浸々乎たる進歩を知るを怠らず，且常に思索研究を続け斯界の権威者たらんとするの気概を持ち続けるべきであります．

仕事は極めて実際的なる事を主眼といたしますが同時に理論に就ても是を重要する事を忘れてはなりません．理論とは実際的経験を系統的に整理排列したる結果生れたる物にして，正しき理論は常に実際を指導すべき筈でありまして，諸君は，理論的思考により実際に当る科学者的態度を持することは肝要なりと信じます．

更に附言致しますことは，自己の職務及生活に追はれて其眼界が余りに専門化し，其考へ狭隘固定することは，完成したる人とは申されません．宜しく余暇に専門外の良書を友とし，深淵なる思想の涵養に務め健全なる常識を得られんことを希望致します．

思ふに我国は満洲事変を契機として，其対外関係は逐年複雑化し益々困難を極め又内に於ては思想安定せず憂慮すべき事件頻発し殆ど帰趨する処を知らざるの感あり，洵に未曾有の国難に直面するの思ひがあります．然し一面之は我国が軍事産業等凡ゆる方面に於て漸く実力充実し真に世界に其覇を称へんとする完成への悩みとも見られます．今此で押し切るか否かによりて其成否を決定せんとする重大時機にして我大和民族が永へに栄へるかの重責は，我国民現在活動圏内に生を享くる者の等しく担へる処にして，国民の一人一人が其支柱になつて居るのであります．殊に産業界の第一線に働く可き諸君有為の青年に待つ事甚大なるものがあります．諸君頑健なる体軀と錬磨されたる才能智識と而して崇高なる人格を堅持して進んで此光栄ある重責に任じ以て国恩の万分一に報ぜられんことを熱望して止まぬのであります．

今日諸君の芽出度き門出に東北帝国大学総長本多光太郎博士に一場の御講演を御願ひ申上げたる処，年度末特に大学事務御多端の処を，不肖門弟の一人たる誼を諒とせられ特に遠路仙台より御来臨の栄を得たる事は真に感激に堪えぬ次第であります……．

15. 渡辺義勝講師　本校10人目の博士に

渡辺義勝講師は昭和11年４月，「級数及び積分における任意次のチエザロ及びヘルダア求和法及びその応用」の学位論文により理学博士となった．本校研究団の栄えある10人目の博士である．

ついで４月23日付けで再び本校教授に復帰した．

16. 百戦百勝　弘陵漕艇史に刻む不滅の歴史

昭和11年６月28日，横浜全専門学校漕艇連盟主催の第11回４専門端艇大会で本校端艇部は百戦

百勝の弘陵運動部史に不滅の歴史を記録した.

この日午後，横浜公園傍大岡川で本校対横専戦で，本校は3艇身半の差をもって勝ち，ここに百戦百勝の名誉ある記録を樹立した．つづいての対Y専との優勝戦で横なぐりの雨の中を橋上や川沿いに陣取る両校応援団の声援裏に1艇身半の差をもって連勝し百一戦全勝をなしとげた.

17. 第3期復興工事成る

第3期復興工事は前述の通り10年6月基礎工事を開始，その後予定通り進み，11年9月外装タイル張りまでを終わった．しかし内装工事については予算の関係上当分着手されないので，可及的速かに予算を獲得しその完成が待たれた.

これによって外郭だけとはいえ，外見上弘陵学園の威容が整った.

18. オリンピック（ベルリン）視察

石川房治助教授（体育），本間淳治助教授（体育）は，昭和11年夏ドイツ，ベルリンで開かれた第11回万国オリンピック大会に，わが国視察団一行と共に7月15日出発，両助教授はオリンピック見学の後，欧州各地の学校体育および体育館などを視察，9月4日無事使命を果たして帰朝した.

石川助教授は東京市の，本間助教授は横浜市の嘱託として出張したもので，この時は次回第12回オリンピック大会開催地は東京ときまっていたので，そのため両市から視察を託されたものであった.

19. 入試に全科筆記試験を実施と発表

昭和3年の項で述べたように，本校では昭和3年度より入試に無試験制度を採用し，口頭試問のみで，入学志願者の選抜をしてきた．しかし，昭和8年に至り，機械科のみ一部有試験制（筆記試験を希望する者には筆記試験を行ない，これをパスした者と口頭試問のみを希望する者をあわせて口頭試問する）としたが，翌9年には機械，応化の2科が，10年には機械，応化，建築の3科，11年には同じく機械，応化，建築の3科が有試験制度とした.

たとえば，11年度の機械科は数学，国語（作文），物理，応化科は数学，物理，英語，化学，建築科は数学，国語（作文）について希望者のみ筆記試験を行なった．したがって口頭試問のみの科は，電化科と造船科の2科であった．そして毎年の入試志願者の内訳は筆記試験希望者の方が無試験（口答試問のみ）希望者よりもはるかに多数であった.

ところが昭和11年11月21日付けで，明年よりは一般受験生に対し全部筆記試験を実施する旨学校側より発表した.

すなわち，これは各科とも全員に筆記試験を施行し，これに合格した者に対し体格検査を行ない，さらにこの合格者に対し口頭試問を行なうことに変更したのである.

これに対し一般ではどう受けとったか．11年10月25日の横浜貿易新報では「三無主義全く崩壊，高工

入試に4課目，秋わびし自由教育の殿堂」という見出しで大略次のように記している「切迫した時潮に抗し得ず，入学試験制度を実施することに16日の教授会で決定，20日文部省の了解を得て22日実施を発表した．試験課目は英，数，物理，化学の4種目である．この4課目を入学試験に採用することは横浜高工も本年から専門学校協定に加入しているので当然と言える」．

本件につき学校では次の通り述べ世間の誤解に答えた．すなわち筆記試験制にふみきった理由として次の3項目をあげた．

1. 受験生が増えたので，従来のように全員に対して，最初から，口頭試問を行なうことは定められた期間中に於ては，相当な困難を見るに至ったこと．
2. 将来工業に従事する者は身体の強健は欠く可らざるものである．従来の試験方法ではこの身体の不適当な者が再度受験するというような甚だ不親切なことがおこる．かかることの全滅を期し将来の職業指導の精神に立脚したこと．
3. 身体および学科に於て適当なる者に対しさらに，人物考査と，学科の口頭試問を行ない，十分な時間によってあらゆる方面から観察し最も適当な人物に対し入学を許可すること．

以上のようにして最も本校に適当な人物を集めようとするものである．

このことについて，横浜工業会誌11巻11号（昭和11年12月1日発行）では次のようにみている．

「筆記試験の実施については世に種々の誤解を生み，あるいは三無主義の廃頽などと種々取沙汰され，又受験界にも多大のセンセーションを捲きおこしているが，これに関しては学生も，慎重の態度をとり，いささかも動ずる事なく却って自由啓発，三無主義の再検討をなし，開校以来の校是に向って一層の自覚をなし，今回のこの改正は只に本校発展途上の一階梯に於て生じた必然的現象である．」

20. 第16回記念祭

昭和10年度の記念祭は工事のため開催するかしないか大分議論となったが，11年度は工事も終わったので，何の議論もなく開催と決定，ただし，新校舎は内装がまだできないため，使用できなかった．記念祭当日のプログラムを次に記しておく．

11月1日（日曜日）○県下中学校軟式庭球（前8・校内コート） ○記念祭祝賀式（前9） ○校内開放（前11〜後4） ○建築科芸術行進（後3・校門出発） ○電化科音頭大会（後6・玄関前広場） ○応化科桃太郎行進（後6・校門出発） ○邦楽演奏大会(後6・講堂)

11月2日（月） ○校内開放（前9〜後4） ○電化科音頭大会（同前日） ○洋楽演奏会（後6.30・講堂）

11月3日（火） ○明治節祝賀式（前9） ○校内開放（前10〜後4） ○第6回関東中等学校柔道大会（前9・道場） ○県下中等学校籠球大会（前1.30・本校コート） ○県下中等学校野球大会（後1.30・本校グラウンド） ○電化科音頭大会（同前日） ○建築科芸術行進（後4・校門出発） ○工専主催演芸大会（後7・講堂）

21. グライダー「そよかぜ」号

本校航空研究会（昭和5年の項参照）の誇る新造グライダー「そよかぜ」号の命名式は11年11月28日本校校庭で挙行された．当日は冨山校長，鈴木前校長，川原会長（造船教授），近藤教授，大岡署長，豊久教官などが臨席，冨山校長によって機は「そよかぜ」と命名された．その後，青木委員長の試乗，製作者吉原清治の模範滑空があった．当日は横浜市の航空ファン500余名の見学があり盛会であった．

22. 山田教授辞任

機械工学科山田嘉久教授は昭和11年12月28日をもって本校を辞任した．山田教授は大正7年三重県立津中学卒八高を経て，同13年東大工学部機械工学科卒，同年本校講師，昭和3年教授となった．自ら風来居士と号し，老孟の教えを説き特異な風姿で学生に親しまれた．辞任後望まれて小松製作所へ入所した．蒸気機関工学の権威で著書および論文多数がある．

23. 体育研究会発足

時局がら学生の体育，健康管理，選手制度等が問題となっていたが，本校では本問題に関し，体育研究会を設立することとなり，昭和11年12月18日本校講堂で，安川，竹内，佐藤，横山，三井，大木，石川，豊久，遠藤，寺沢，長尾，山田の諸教官，職員生徒30名出席して発会式を行なった．式後第1回体育座談会を開催，今後の運営その他を協議した．

会則によれば本会設立の目的は「体育の理論及び実際を研究し本校体育の振興に資せんとす」となっているが，発起人体育教室の石川助教授の説明によれば体育のよろず相談係りであり，明朗健康学校の建設に努力したいと．なお会長に冨山校長，顧問に校友会各運動部長が推薦された．

24. 12年度入学志願者

12年度の受験願書の受付けは2月28日で締切ったが，数において前年よりやや減少を示した．応化，電化は増加しているが，機械が200名以上減じている．また造船が100名以上増加しているのは，本校に航空科が近く増設せられるのを見込んだ結果であろう．時局を反映してか，内地

		募集人員	応募人員	競争率	昭和11年度競争率
機械	本科	40	500	12.50	17.1
	教養	6	42	7.00	14.4
応化	本科	40	395	9.88	9.5
	教養	6	50	8.33	10.8
電化	本科	40	360	9.00	7.8
	教養	2	18	9.00	11.0
建築	本科	35	175	5.00	5.5
	教養	6	14	2.33	4.8
造船	本科	30	428	14.27	10.5

人外の受験生が18人あった.

なお本年からは全員に筆記試験が課せられたことは前述した通りであった.

25. 第15回卒業式

昭和12年3月15日第15回卒業式が挙行された. 当日は長岡半太郎博士の講演があった.

学校長 式辞

……現時世界を通じて教育界の弊は, 余りに教授する処多くして, 教育する事の少なきにあるのであります. 殊に輓近工業の進歩発達は顕著にして其質に於ても, 又量に於ても殆ど迎接するに遑なしと云ふも過言に非ざるものあり. 喩へ在学年限を2倍3倍に延長するも, 到底其全貌を教授する事は不可能にして, 又仮に夫に近きものとなし得るとしても, 徒に貴重なる青年期の精力を消耗して, 工業に於て最も必要とする工場第一線に立ちて実際を体験するを得ざらしむるのであります. 是等を考慮して本校は試験, 採点, 賞罰に依る強制的教育を廃して, 専ら自覚を促す教育を以て, 過去3年諸君に相対して来つたのであります. 其目的は諸君の心内に宿る才徳を十二分に発揚せしめて将来天空をも摩する大厦高楼たらしむ為に充分なる基礎工作を施した心算であります. 諸君は此礎の上に一石又一石と積み上げて, 将来揺なき立派なる建築物となし得る事を念願し, 且確信して居るのであります. 今後の諸君は自ら寒風灼熱と戦ひ暴風雨, 大地震等の試練にも堪へて, 有ゆる困難を克服しつゝ, 営々として進み所期の目的を達成せんとする心構へを持たれ度いのであります.

思ふに現下世界の情勢は到る処不安の渦巻中に在り, 殊に我国は外, 国際的にも, 内思想的にも非常なる難局に立ち, 所謂一触即発の危機に直面し, 今にして其の処する処に誤りあれば過去70年間に渉りて, 発展に次ぐに発展を以つて, 進み来りし騰勢を挫折し, 終には萎微退嬰の危険を醸し, 畏くも明治大帝の御偉業も, 祖先先輩の功績も遂に失墜の悲運無しとは保せないのであります. 洵に万民等しく緊褌して協力一致此難局を突破するの秋であります.

是は軍人政治家外交家のみの有する任務に非ずして, 工業家も当然負ふべき点又甚大なるを信ずるのであります. 今日の所謂遂行すべき国策を見るに, 国防の高度科学化より, 農村の工業化に至る迄苟も工業に重要なる関係を有せざるは無しの状況であります. 即ち工業家の寄与すべき責務又甚大なるものありと信じます…….

我国工業界は特に近年の飛躍洵に顕著にして, 昭和5年に於ける工業製産全額約54億円, 昭和9年86億円, 最近に於ては100億円を突破せるものと思はるゝ趨勢にして, 目覚ましきものあるも, 尚未だ自動車工業, 航空機工業等の如きに於ては, 一流国に比し著しき遜色を逃れざるものあるのみならず, 1日の偸安を貪るあれば, 忽ち其国際的競争場裡に於て, 一敗地に塗る虞ありて, 今後一層の努力を要すべき点あり, 将来の完成は, 全く明日の青年工業家の双肩に懸るもので特に諸君に期待する処洵に大なるものがあります.

諸君はよく此光栄ある責任を自覚し其従事する職務に渾身の全精力を集中して, 是に当るべきでありまして, 現在の仕事の完全なる遂行は, 又以て直に国家社会に寄与する所以なるのみならず, 是れ聾て自己の向上進展をなす欠く可からざる段階となり, 将来必ずや棟梁の士として, 大事業を指揮実行して国家の為め大なる貢献をなす前提となるのであります. 「責任は自重を生み自重は人格を造る」と此壇上より諸君に送られし, 本多光太郎先生の言は真に味ふ可きにして終生牢記せられんことを熱望致して止みません. 而して私は, 衷心諸君の立身栄達を待望して止みません. 然し是は決して名利のみの謂ひでは無いので, 寧ろ主として, 敬虔なる精神的の意味であります. 冀くば天稟の本質を錬磨鍛錬して, 全人格を築き上げ以て天授の大使命を完ふされ真に意義ある一生を送られんことを熱望して止みません.

幸ひ諸君が心の内に於て計画の仕事が, 遂次思ひの儘に成功せりと考へても, 決して慢心を生じ

てはなりません．自惚は己れを欺き人を欺き結局人に欺かるゝ事となり，挫折失敗の原因となります．人生為す可き仕事は真に多くあります．小事に満足せず更により以上の事業に進む可きであります．セシルローヅがあの大事業をなして尚死を前にして "So little done, so much to do" と云つた事は男子として洵に壮快なる意義であります……．

卒業後の就職に就ては当人等将来の運命に関しても，又国家社会に対する寄与貢献に関しても重大なる関係を有するものなれば学校としては，従来最善の努力を致して参りましたが，本年は各位の特別なる御援助と又昨今の工業躍進時代に恵まれて各科を通じて，平均高等工業の方は人員の約5倍強，963の採用御申込を受け，又工業専修に於ても同様の傾向で全員明日より直に各専門の仕事に携る事になつて居ります．然して今日の盛況に眩惑し気驕る事無き様充分に戒めて居ります．又何時再び不況の風に襲はれんとも保証出来ざる訳でありますから唯今より将来に就ては充分の心構へを致して居ります．今後共引続き御後援を御願ひ致度いのであります．本校の教育方針に就ては唯今卒業生に対して申ました言葉の内に述べた通りでありますが，本日の卒業生は何れも元気旺盛に，弾力豊かな将来充分に其羽翼を延し得る丈の素質を有する者ではありますが，然し経験なき年少者でありますので，今後は一に各位の各方面の御指導により，一歩其進路を開拓し国家有用の材となり得るので特に御志に俟つものであります．

次に本校は大正9年開設の当時は，機械，応用化学，電気化学の三学科でありましたが，其後建築，造船の二学科増設せられ殊に前校長は将来航空技術家の必然的要望さるゝを考へられて他校に率先し造船の一部に航空工学の講座を設けられ，其方面に人材を出し相当の貢献を致して参りましたが，然し現時例へば米国の航空機技術者の年々千数百名を出すに比し，我国に於ては東京帝国大学と本校造船工学科の一部よりして僅に年20数名の卒業生を出すのみにして，今日我国航空界の要望とは甚しき懸隔あるのみならず，他列強に比し著しき遜色あるを逃れず是非此際航空工学科の独立完成を見る事が国家焦眉の急なるを信じ，本年来其実現を計画して居りましたが，漸く当局の認むる処となり，是が独立の予算も認められ本年より之に要する設備建築に着手し得る様になりました事は，国家の為め大に慶賀に堪へぬ事で，此機会を利用して各位に是を御報告し，且其健全なる発達に積極的御支持を御願ひ致度いと存じます……．

26. 運動選手の体位

昭和11年4月に実施した身体検査を基として石川助教授が苦心してまとめた本校運動選手の体位表は次の通りで，当時の代表的学生の体位を知る上に非常に興味ある資料であるので，参考までに次に記しておく．

運動部	身長 cm	体重 km	胸囲 cm	栄養	近視 100分比	検査人員
野球	166.8	59.1	85.7	甲 15 乙 6	33.3	21
庭球	165.9	57.1	84.1	甲 10 乙 8	38.9	18
競技	167.2	57.8	85.3	甲 11 乙 6	29.4	17
剣道	163.9	55.9	84.6	甲 17 乙 8	64.0	25
柔道	164.1	59.9	87.6	甲 20 乙 3	47.8	23
水泳	166.0	56.5	85.0	甲 15 乙 2	82.4	17

端　艇	168.2	61.8	87.9	甲　6 乙　1	71.4	7
弓　道	163.7	53.6	81.6	甲　7 乙　9	43.8	16
ラ　式	166.6	58.7	85.6	甲　13 乙　5	33.3	18
籠　球	166.1	57.1	83.1	甲　7 乙　8	53.3	15
山　岳	165.2	56.9	85.3	甲　9 乙　5	35.7	14
蹴　球	163.8	55.6	82.8	甲　8 乙　10 丙　1	31.6	19
排　球	164.0	57.0	84.9	甲　7 乙　7	28.6	14

27.　特設防護団設置

昭和12年７月７日，日支事変ぼっ発，防空が切実な問題として真剣に取り上げられるようになった．本校においても，12年９月14日全校友出席のもとに講堂で特設防護団の結成式が行なわれた．

本防護団は本部，警報班，警護班，防空班，搬出班，防毒班，避難所管理班，救護班，工作班，予備班よりなり，防火等に関しては，概ね消防団の活動に準じ，今後は平時の火災の場合も防護団が消火に当たることになり，したがって，従来の消防団は事実上解散，本校の一切の防空防火は本防護団が任ずることとなった．

28.　工業技術員養成科設置

時局にかんがみ工業技術員の早期養成が望まれるに至り，本校でも昭和12年10月１日をもって工業技術員養成科（機械のみ）を設置することとなった．

入学者は９月中旬検定を受け30名が入学，10月１日より６カ月の短期授業をうけ翌年３月末卒業．

なお毎週の授業時間は修身１，体育１，数学２，応用力学６，原動機２，機械設計製図10，金属材料１，工作法２，電気工学２，実験および実習12時間であった．

10月１日の入学式に当たり冨山校長は次の訓示を行なった．

> 先般文部省に於て全国の高工に短期技術員養成科を設立する事に定められ，本校でも機械科に設置する事になり希望者を全国に求めたところ30名に対し200人以上も受験，その中から人格，学業，体格ともにすぐれた諸君ら30名がこの栄冠を得られたわけであり，私は心から諸君の入学をお祝いする．
>
> 現今わが国は非常時局に直面しているが，戦争は国力の戦である．その国力の中心となる工業の技術者が今回の事変と軍需工業の異常なる発展に伴って著しく不足を来し，為にこの科が設立せられたわけである．
>
> 又この科は期間が短いので必要なるすべてを修めることは或いは不可能かもしれぬが，教授が献身的

に努力されるのであるから，諸君らも，本校の自覚自治の校是を守って，これらの学課を修めて，初期の目的を達成し例え短期間と雖も専門学校，大学の卒業生に負けない様な人物になることを希望する．

29. 事変下記念祭開催

日支事変下，記念祭を開催すべきかどうかについては校友間で議論ふっとうしたが12年９月27日開かれた評議員会で，断然挙行すべしと意見がまとまった．ただしその実行については事変下のこととて十分考慮することとなった．

第17回創立記念式典は11月１日午前８時挙行．職員生徒一同講堂に集合，国歌斉唱，冨山校長の祝辞，校歌斉唱をもって終わり，鈴木前校長記念碑除幕式（前述）後，一同伊勢山太神宮に行軍，戦勝を祈願した．こうして第１日は校内開放はせず，記念式典のみで終わった．第２，３日は恒例のように校内を開放したが，両日とも雨天のため参観人は昨年よりもはるかに少なかったことは遺憾であった．

しかし科学と国防というテーマで，各科ではそれぞれ時局色を盛り，軍事関係のものが多く参観者の注目をひいた．

たとえば応化では，毒ガスおよび爆薬製品，電化では毒ガスおよび爆薬の製造過程，機械は支那事変パノラマ，造船は軍艦，航空機に関するものなどが展示された．建築は日本大通の商工奨励館で作品の展示会を行なった．ただ建築の芸術市内行進がなかったことは市民に大きな失望を与えた．

30. 御真影奉戴

従来本校では祝祭日の祝賀式がなく，また御真影がなかったが，11年度から祝賀式を挙行し，さらに今回は，御真影を奉戴することとなり，12年10月25日午後零時40分本校講堂で職員生徒ら全員出席して奉戴式を挙行した．

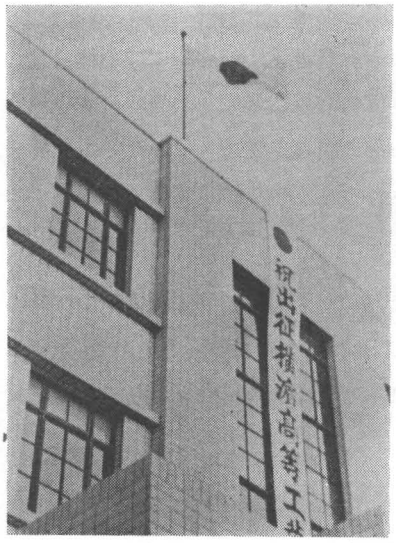
31. 出征会員の慰問　本校関係者相ついで出征

昭和12年７月７日支事変がぼっ発．横浜工業会（理事長電化２期菅要助）では直ちに理事会を招集，出征会員慰問実行委員会を設立，河村文一，森川幾久雄，吉岡勲，矢田部庄栄，松原襄，小田代恆正の６人が実行委員に任命された．

慰問事業としてはせんべつならびに記念品贈呈で，この資金としては一般会員より募集してこれにあてることとした．直ちに全会員に慰問事業資金募集（一口１円何口でも可）の檄（げき）を飛ばした．また，全会員の兵役名簿作成に着手した．

一方本校においても工業会と協力し，出征同窓の激励慰問を実行することとなった．

出征会員に対しては，鈴木前校長の筆になる「護国の友」と大書した手ぬぐい，伊勢山太神宮および鶴岡八幡宮の武運長久の護符をそれぞれ贈った．この護符はクロームメッキした優美な金属箱にはいっており，表に祈武運長久として横浜高等工業学校，横浜工業会と併記してあり．裏に本校の徽（き）章と出征会員氏名が彫ってあった．



祝出征　垂れ幕（昭和12年）

大木，本間両教官出征(昭和12年)

昭和12年10月初めの調べでは，本校先輩の応召者は早くも70名に達していた．

また昭和14年初頭の調べでは，卒業生総数2,600名中出征者は 1/13（200名）で，そのうち1/30が名誉の戦死を遂げている．

本間，大木両教官も出征

事変発生後４カ月，昭和12年10月25日本校教授陣最初の出征者として本間淳治助教授（体育，生徒主事補）大木波之輔（教練，嘱託）の２人が応召した．学校では25日午後３時歓送会を挙行し壮途を祝った．

32.　井上助教授　逝去

本校基礎学教室講師井上清は病気のため，昭和12年７月19日永眠した．行年32歳の若さでその早逝（せい）を惜しまれた．死の直前横浜高工助教授に任ぜられた．同助教授は明治39年生れ，慶大文学部哲学科卒，昭和８年，本校ドイツ語講師を委嘱され，その真しな学究ぶりは大いに将来を嘱望されていた．

33.　そのころの人事

遠藤，堀江両教授辞任

機械教授遠藤政直は12年４月30日付け，応化教授堀江不器雄は同年同月28日付けでいずれも本校教授を辞任した．

遠藤教授は明治37年東京高工（蔵前）卒業後直ちに芝浦製作所（東芝の前身）に入所，２年にして同所を辞任し，ボストンのマサチューセッツ大学に学ぶこと３年，帰朝後早大理工学部，九州帝大を経て本校創立と同時に本校機械工学科教授として赴任，以来17年間専心同科のために尽力，全国一と称された機械科育ての親であった．また日本機械学会副会長の要職にあった．同教

授は辞任後荏原製作所へ入所したが，本校では引きつづき講師を委嘱した．

堀江不器雄教授は東京高工（蔵前）出身，本校創立当時蔵前より赴任，創立時には小林，大山両事務官と共に鈴木前校長を助けた．以来20年にわたって本校のために尽すい，当時の本校隆盛の基を作った．同教授は油脂化学，熱帯特産物工業および石油の講義を受持っていた．本校辞任後は日本揮発油株式会社に招へいされた．なお同教授もひきつづき本校講師を委嘱された．

河村助教授 教授に

電気化学科助教授河村文一は12年10月1日付けで教授に栄進した．同教授は本校電化第2回の卒業で，以来ひきつづき本校電化教室に留まって研究，後輩の教育に専心していたもので，本校卒業生3人目の教授である．オゾンの研究をもって知られ，11年度には学術奨励金を受けている．

箕作講師解嘱，山本助教授来校

昭和10年以来電気化学科講師として冨山校長の後を受けて，理論化学を担当の箕作新六博士はこのたび辞任した．その温厚な人柄と篤実な学風は学生に親しまれていた．

同講師の後任として本校電化第9回卒業の山本一夫が工大より助教授として着任した．同教授は本校を経て工大卒，その後同校田丸研究室で学究の生活をつづけていた新進学徒である．

34. 本校卒業生初の工博，理博生れる

本校第3回電気化学科卒業の仲田旭は，昭和12年6月6日付けで工学博士の学位を授けられた．博士論文は「亜鉛の電解精錬について」であった．新博士は本校選科卒後直ちに京大採鉱冶金学科選科に入学，同校修了後細倉鉱山に入社，傍ら京大採鉱冶金学科渡辺教授について研究をつづけて，この栄誉を得たものである．

また応用化学科第1回卒業の横山稔はかねて「セレンの接触作用」の論文を大阪帝大に提出中のところ同12年7月同大学教授会を通り，理学博士の学位を授与された．横山新博士は本校卒後理科学研究所に入所，さらに京大農学部に入学，農芸化学を専攻，同学部卒後塩野義商店製薬部に入社，さらに同会社より京大大学院に入学，同大学理学部化学教室で有機化学の研究に従事していた．

35. ようやく内装工事に着手

前述のように本校第3期工事（新館）は昭和10年夏より着手され，11年9月主体工事と外装工事を終えたが，その後予算のないまま，約1カ年間使用できず，徒らに黄白タイルの瀟洒（しょうしゃ）な威容を空しくさらしていたが，12年12月に至り予算がとれ，いよいよ内装工事にとりかかった．

この工事は入札の結果9万7,000円で横浜三木組に落札，13年7月中旬完成予定であった．

なお航空科の独立をひかえ，機械科教室と水槽実験室との間の旧機械工場跡に造船工場が同じく三木組の手で建設され，これは54坪（178㎡）鉄筋コンクリート平屋建てで，1万6,000円で落

札した．同じく13年７月完成予定であった．

36. 校友会各部の活躍

冨山新校長を迎え，学園は新風さわやかに吹き学問に，文化，体育に一段の充実ぶりを示し，学生は青春をおう歌した．

運動部の活動は大きく分けると対内的なものと対外的なものに分けることができる．

(1) 対内的なもの

これは何といっても春のハマの名物といわれたクラス対抗駅伝競走と，秋の山下公園海岸にくり広げられたボートレースの二大行事であろう．

【駅伝競走】 毎年４月終わりか５月初めに行なわれ，新入生をまじえ各クラス５人12組が継走するもので，コースは毎年多少の相違はあったが，学校前―弘明寺―吉野町―日の出町―高島町―学校（11年），あるいは学校―吉野町３丁目―吉田橋―ニューグランド前．往復（12年）などとなっていた．10年は１着電３，２着電２，３着機２，11年は１着電３，２着機３，３着建２，12年は１着電２，２着造２，３着建３であった．各級応援団は応援旗を先頭に，ダットサンや，自転車に乗り，選手のあとから先からと声援に声をからし，新聞部は総動員で速報と記事収集に大わらわ，ゴール前は学生はもちろん弘明寺の人達で人山をきずく盛観であった．

【端艇クラスマッチ】 毎年秋９月末か10月半ばごろに行なわれ，歴史も古く昭和10年には第10回を算えた．金港内山下公園岸700メートルコースで行なわれ，クラス応援団は水に岸に応援旗を打振り，山下公園一帯は終日弘陵色一色となった．

10年は対級は１位電３，２位電２，対科決勝は１位建築，２位応化，11年記録欠，12年は対級は１位応化３，２位建１，対科１位応化，２位建築であった．

【寒中水泳】 毎年寒中に，本牧海岸で行なわれる寒中水泳大会も浜の名物の一つであった．これには他校からの参加もあわせ毎回60名以上が参加，寒波も物かは海に飛びこみ泳ぎまくった．本大会は歴史も古く昭和12年度をもって第11回を数えた．

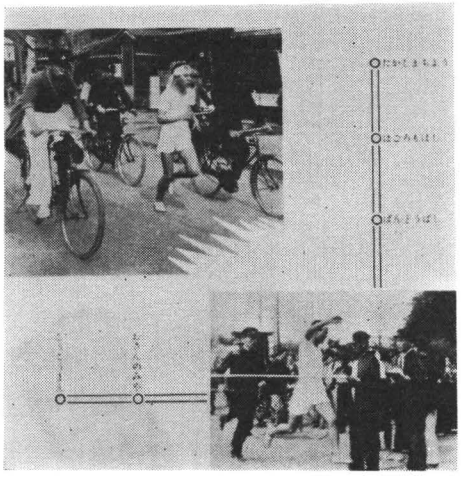
このほか陸上，水泳，柔，剣，弓道，野球，籠球等々運動部主催のクラスマッチが春秋，道場にグラウンドにコートにと展開され若人の血をわかした．

(2) 対外的な活躍

対外試合では，各部とも高商定期戦をはじめ，その他の試合にめざましい勝利を得，若人たちの「烈々の意気草を焼き」熱血に胸をおどらせた．次に各年ごとにその優勝の跡をしるすこととする．

〔昭10〕 **対高商定期戦**

野　球　横浜公園球場で挙行，６月１日第１回戦４―３で勝，翌２日２回戦は３Ａ―１で勝，見事ストレート勝で昨年に引きつづき２連勝，新聞部ではいち早くこの勝報を号外にして，５人の学生売子がハッピ姿で，鈴の音も勇ましく球場から伊勢佐木町辺まで勝った



駅伝競走（昭11年）

勝ったとつっ走ったのもこの時であった.

庭　球　5月26日本校コートで行なわれ，2－7で3年連敗.

競　技　6月16日本校グラウンドで行なわれ，36—21で勝，通算4勝4敗1引分けとなる.

柔　道　6月19日本校講堂で開催，大将を残して勝，5連勝成る.

蹴　球　6月23日本校グラウンド6－5で3年連勝.

籠　球　6月30日大岡小学校で39—56で敗れ6連勝ならず.

水　上　今年第1回を6月9日二中プールで開催77—52で大勝.

排　球　復活第1回定期戦，10月26—27日行なわれ，第1回戦2－1，第2回戦2－0で勝.

弓　道　11月24日元町道場で行なわれ，67中—63中で8連勝.

ラグビー　12月8日本校グラウンドで9－5で勝，5連勝.

その他の試合

剣道部　6月16日本校道場に山梨高工を迎え4人を残して勝．7月14，15日東京工大での第4回全国高工剣道大会には神戸高工に敗れた.

ラグビー部　6月19日本校グラウンドでY専を19—0で敗る.

端艇部　6月23日大岡川での横浜全専門学校競漕に優勝，さらに7月27，28両日の瀬田川で行なわれた第5回全国専門学校競漕には優勝戦で，同志社大予科を破り，4年連勝をとげ，これで創立以来連続97連勝記録を立てた.

水泳部　7月4日元町プールで行なわれた第8回横浜5専門大会に，関東学院に善戦空しく1位をゆずり，6連勝を果たし得なかった．9月6，7両日の神宮プール，関東学生大会第2部では第2位を獲得した.

競技部　10月12，13両日川崎市日吉台グラウンドでの第11回全国高工陸上大会では，浜松高工1位，本校2位となる.

弓道部　10月13日桐生高工に遠征81中—53中で勝つ.

〔昭11〕 **対高商定期戦**

野　球　6月6，7両日横浜公園球場，第1回戦4A－1，第2回戦9－4勝，3連勝成る．3年振りに JOAK は第1日松隈アナ，第2日松内アナにより放送．

庭　球　6月14日高商コート，6－3で勝，3連敗のあと4年目にして勝．

競　技　6月21日高商トラック，第10回，39—18　2年連勝．

柔　道　6月17日高商道場，大将1人を残し高商の勝，6連勝成らず．

蹴　球　第9回6月28日高商グラウンド，5－3　4連勝．

籠　球　第10回6月28日山下町コート，2－0で勝，昨年の復仇成る．

水　上　6月14日二中プール，66—42で再び勝つ．

排　球　復活第2回11月21，22日第1回23—21，第2回21—17で再び勝つ．

弓　道　（記録なし）9連勝．

ラクビー　12月13日高商グラウンド，11—14　敗　6連勝成らず．

その他の試合

庭球部　第6回全国高工大会　7月20，23日，阪大コート，昭和7年の第2回大会以来ひさびさ優勝，（決勝戦本校3－2神戸高工）

籠球部　第2回全国高工大会7月18，19日駿台明大コート，決勝は本校46—19で東京高芸に勝，昨年にひきつづき再度優勝．

端艇部　（100勝　別記）

陸上部　全国高工大会9月26日大阪市立運動場，第2位となる．①　明専97.5　②　本校　82.5　③　福井　79　以下略．

〔昭12〕 **対高商定期戦**

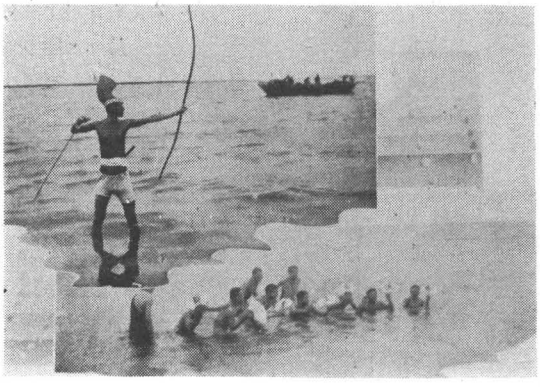
野　球　第11回6月2日，3日第1回3－4A敗，第2回3—11敗，4連勝の夢空し．

庭　球　6月13日本校コート，6－4で勝　2年連勝

競　技　6月20日本校グラウンド，36—21で勝　3年連勝

柔　道　6月19日本校講堂，高商側3人を残して勝つ　2連敗

蹴　球　6月27日本校グラウンド，2－4で敗　5連勝成らず



寒中水泳（昭和11年）

籠　球　6月27日高商コート，39—29で勝　2連勝

水　上　6月20日新設の高商プール，51—57で敗

排　球　11月28日本校グラウンド，2—1で勝

弓　道　11月23日元町道場，68中—56中で勝　10連勝

ラグビー　12月14日本校グラウンド，26—3で勝

その他の試合

端艇部　102連勝ならず，創立以来，まだ敗れたことのない101連勝という輝く歴史を有する端艇部は，7月4日大岡川で行なわれた第12回4専門端艇大会においてY専端艇部に遂に敗れ，連勝記録はここに終わった．

競技部　7月17，18日大阪市立運動場で行なわれた大阪帝大主催全国高工陸上競技大会において本校は，堂堂は権を握った．①本校83点　②明専69.5　③浜松50　④福井43　⑤広島40　⑥桐生24.5　⑦名古屋20　⑧神戸17　⑨京都12　⑩金沢10　⑪徳島8

籠球部　7月17，18日浜松で行なわれた第3回全国高工大会で，本校は金沢，浜松，名古屋を破り，3連勝をなしとげた．出場校は，浜松，山梨，名古屋，金沢，本校の各高工および，東京工芸の6校であった．

庭球部　7月21，22，23日行なわれた全国高工大会で，本校は，名古屋，浜松，京都工芸を破り，2年連勝をした．

蹴球部　市内5専門リーグ戦はY専グラウンドで12月1日開催されたが，本校およびY専は共に得点5で1位を分けあった．

剣道部　11月28日横浜公園武道館で開催の第1回武徳祭武道大会，剣道の部で本校菊地3段は9人抜きを果たし優勝した．

新応援歌

対校試合に必ず歌われた「聴けや我らが雄々しき叫びを」についてはすでに述べたが，昭和12年，新しく次の2つの応援歌が作られた．2作とも懸賞募集当選作で，ハマの早慶戦(対高商戦)の始まる前の12年5月23日にNHKからラジオ放送で全国に紹介された．

応援歌　川久保翠作詞 (不明)

1　炎熱の風砂を嚙み
　弘陵木々に秋(とき)伝ふ
　烈々の意気草を焼き
　熱血胸に鳴り響く

2　若き男子(おのこ)春を恋ひ
　赫々と照るグランドに
　必勝を神誓ひてし
　鉄腕今ぞ邪を払ふ

3　大空に澄む富士の嶺
　怒濤巌うつ金港に
　歓喜の春を踏みしめつ
　高らに唱(うた)はむ勝鬨を

応援歌　平岩真澄作詞 (昭14応化卒)

1　水無月さかる春の宵
　幾多重ねし日の下に
　鍛えし我ら鉄腕の
　勲(いさお)し寿(ことほ)ぐ今日なるぞ
　戦はむ哉時至る

2　白旗進むる原頭や
　絶えて敵なき伝統の
　燦たる光輝いたゞきて
　集ひし健児あゝ五百
　戦はむ哉時至る

3　一閃健打する処
　見よ高天の雲衝きて
　さし出づ光に燦(きらめ)きつ
　遙か飛びたり大長打
　戦はむ哉時至る

4　それ大岡の頂(いただき)の
　真紅の色に染みし時
　乱れて舞はむ夕霧に
　勝鬨の歌唱いつゝ
　戦はむ哉時至る

第2章　第2節　日支事変より宣戦布告まで（昭和13年～昭和16年）

満洲事変はついに日支事変（当時はこのように称した）に進展した．昭和13年1月16日，近衛首相は「国民政府相手にせず」と声明，2月11日政府は「戦面不拡大長期持久」策を決定，3月24日国家総動員法案議会を通過，11月3日近衛首相「東亜新秩序建設」を声明，11月26日武漢三鎮を占領，12月16日興亜院設置と，事変はいよいよ拡大し長期戦の様相を呈してきた．

学園も戦時色がいよいよ濃くなる．4月待望の航空工学科開設，海軍省から実習用飛行機5台下付，全国実業専門学校生徒主事による思想問題懇談会の開催，卒業生および在校生の相つぐ応召，卒業生の就職割当制の実施，恒例のハマ名物校内開放記念祭はついに中止と決定したことなどがそれである．

14年1月平沼内閣成立，2月海南島上陸，3月独逸（ドイツ）チェコスロバキアを併合，5月ノモンハン事件，7月日米通商条約破棄，8月独ソ不可侵条約締結，阿部内閣成立，9月第2次世界大戦始まる．価格停止令公布（9.18 ストップ令）10月地代家賃統制令，賃金臨時措置法公布，日支事変はこうして泥沼的様相を呈してきた．

学園では，技術員増補の国家の要請に基づき募集人員を増加，日本精神発揚週間の実施，本校関係戦没7柱の慰霊祭など戦時色がいっぱいであった．また8月には本校の恩人商議委員原富太郎の死去という悲しいことがあった．

15年1月米内内閣成立，7月17日第2次近衛内閣成立，9月11日隣組，町内会，部落会の整備強化方針発表(内務省訓令)，9月27日日独伊三国同盟調印，10月大政翼賛会結成，11月大日本産業報国団結成，12月7日経済新体制確立要綱閣議で決定，いわゆる新体制が各面で敷かれるようになった．

この年皇紀2,600年に当たり記念祝典が国をあげて行なわれた．

本校は開校20周年を迎えたが，事変下特に盛大な行事はなかった．

新体制運動が学園にも押しよせてきて，12月には20年の伝統を誇った校友会は解散し，報国団が結成された．

技術者養成で定員は増加し，教室は狭くなり，物資は欠乏し，教職員は多忙をきわめた．生徒も軍事教練，勅語奉読式，各種講演，訓示，勤労奉仕等々に学問外のことが余りにも多くなってきた．

16年3月治安維持法改正，4月1日生活必需物資統制令公布（ぜいたくは敵だ），4月13日日ソ中立条約調印，7月2日御前会議で帝国国策要綱決定，7月第3次近衛内閣成立，10月17日東

条内閣成立，こうして12月８日大東亜戦争突入となった．

学園では卒業が３カ月繰上げられて12月に挙行，人事関係では津田教授の辞任，鈴木京平教授の転任，大山会計主任の退任，遠藤元教授の死去などがあった．

12月24日生徒主事会議で戦時学徒自戒５訓が制定された．

1. 航空工学科独立をひかえ海軍機など下付

従来本校造船工学科航空専修生は，発動機分解組立ての実習，および機体構造実習をそれぞれ，イスパノスイザ200馬力，および87式軽爆撃機を使って半数ずつに分かれて行なっていたが，機材はいずれも旧式に属していたので，実習に不便を感じていた．ところが昭和13年１月18日航空工学科独立を間近にして，海軍軍需部より待望の海軍機５台（３式戦闘機　１台，ジュピター６型　３台，神風120馬力１台，および用具が下付された．

また仁丹本舗より帝国飛行協会へ寄贈のグライダー15台のうちの１台が，１月22日当校に寄贈され，本校では“はまかぜ号”と命名した．

以上により航空工学科独立を前にしてその陣容にいよいよ光彩を添えるにいたった．

2. 志願者数激減

13年度入学志願者の願書受付けは，13年２月末日をもって締め切られたが，意外にも各科とも激減をみせた．競争率，志願者数は別表の通りである．

この原因としては，今年度試験期日が一般高等学校と同日であったこと，数年来持続してきた本校のはげしい入学難による敬遠，工業界活況のため，中卒後直ちに就職する者が増大したこと，昨年度よりの筆記試験実施によることなどが考えられた．（航空工学科については後述）

科		13年度 募集人員	志願者数	競争率	12年度 競争率
機械	本	75	587	7.8	12.5
	教	6	44	7.3	7.0
応化	本	40	281	7.0	9.9
	教	6	50	8.3	8.3
電化	本	40	275	6.9	9.0
	教	2	18	9.0	9.0
建築	本	35	140	4.0	5.0
	教	6	36	6.0	2.3
造船	本	30	136	4.5	14.3
航空	本	40	286	7.2	—

3. 第16回卒業式

本校第16回卒業式は，昭和13年３月15日午後３時より，横浜工業専修学校第13回卒業式と合同で，本校講堂において挙行された．王子製紙社長貴族院議員藤原銀次郎，県知事，他多数臨席盛大をきわめた．

これによって本校卒業生は，本科2,262名，教員養成所134名，計2,396名に上った．

学校長 告辞

……唯今証書を授与いたしました卒業生は高等工業学校に於ては各方面から御採用申込実に10倍以上に達し，内二，三の特別の事情ある者の外は全部就職決定し又工業専修学校に於ても御採用申込殺到し同様の状態であります．是れ直接軍需工業の勃興に依る事と思はれますが，一面一般の我国工業力の最近顕著なる増大発達に基くものと思はるる理由もあり，洵に慶賀いたすべき事と考へて居ります．右の如く工業技術員の要望著しきものがありますが，教育は一朝一夕にして真に其の要求に応ずる能はず，殊に戦後満洲，北支等の資源開発の計を建つる為もあり当局に於かれても今日より其準備に著手する要あるを慮られて，其の機関の拡充新設の案を建てられ，本73議会に是に要する予算を要求せられ，本校も又今回機械科の生徒募集約倍加及航空学科の独立も略々決定いたした次第であります．殊に後者に就ては先年特に各方面よりの多大なる御支援を受け，同種の学校に於ては，今回は当校のみ認められ且計画も拡大されたのでありまして是全く各位の深き御理解に基くものとして此機会を利用して厚く感謝の意を表し同時に国費多端の折柄特に多額の費を割かれてその活用を負托されし事は関係者一同の荷ふ責任の重大なるを痛感いたして居る次第であります．

卒業者諸君……先私は諸君に餞する言葉として最も平凡にして而も実行の必ずしも易々たらざる健康の増進，智識技術の進歩，人格の向上の三点を申したいのであります．凡ての事業，凡ゆる貢献も全く強健なる体軀を有する人にして初めて達成し得るのでありまして，是が為には今後常に強固なる意志を以て健康の保持増進を計る事に留意せねばなりません．次に智識，技術に就ては学校に於ては僅かに其基礎的能力を得たのに過ぎ無いのでありまして，実際に斯界の為め引いては国家人類の為めに貢献せんとするの必要なる実力は諸君今後の修養努力に俟つのであります．世往々にして学校卒業を以て学習の終りとなし，その時が智識の最高となり，其後は只便々として無為に人生を終り，晩年鄙巷に呻吟する徒無きにしもあらず，深く戒むべきであります．勉学修養は寧ろ永き卒業後の行路に於て自ら進んでなさるべきであります．本校が自覚自発の勉学を促し来るも，其習性を涵養し以て各自の才能を将来更に十二分に発揮せしめんとする目的に外なら無いのであります．即諸君の従事する職務に就ては熱心に体験習得し同時に常に研究的態度を以て臨み，思考思索の習慣を養ひ又専門の読書を怠らず，一生を通じて学ばん哉の意気を捨てず，小成に安ずる事無く仮令現在力の足りぬを感じても決して悲観憂慮する事無く不断の努力を以て修養学得せば必ずや其方面の権威者たり得るの確信を持つて誤り無しと断言し得るのであります．物を自分のものとして真剣に考ふれば，必ず道開けて目的を達すると言ふ事は幾多の大工業家，大発明家共通に懐いた信念であります．

第３の人格の向上は最重要なる事にして，人としての価値は単に智的能力の多少を以てのみ決定されるのでは無いのでありまして，如何に博識聡明でありましても若し人格に於て欠く処あれば社会人として価値無きのみならず却て害毒を流す例少くないのであります．偉大なる事業は必ず之を為す人の人格の反映ありてこそ始めて其真価を顕はすもので，実に一国の興廃は其国民の性格如何に懸ると申しても過言でないのであります．如何なる観点より申しても，人格の修養向上が第一義なりとして諸君に要望して止まない次第であります．

……最も肝要なる事は心の「誠」であると思ひます．差し当り諸君が明日より職に就かるるに当りては唯誠を以て是に従ひ，職は単に衣食の途を得

る方法に非ずして是により国家社会に奉仕する考を第一とし，即一旦決定したる以上は其職の何たるを問はず，其地位の高下を論ぜず，全力を傾倒して是に当り其処に自ら己れと職と同化をなし真の事業の完成を誘致し以て奉仕貢献の理想の実現を期し得るのであります．

現下我国は実に未曾有の国難に直面し，今後更に幾何の障礙に遭遇し，又如何に是が長期に渉るとも堅忍持久飽迄是を撃破して進まねばならぬ立場に置かれ居ります．是或る意味に於ては国家的の宿命とも見らるるので，吾々祖先先輩が赫々たる績を残して以て続けられたる国家的大事業の完成仕上げの秋でありまして，現代に生を享げたる我国民の等しく与へられたる解決すべき一大課題であります．即国民は公正無私の精神を以て奉公の赤誠を尽し，又国民の全能力を綜合統一して真に一国一体となり，万難を排して国家的大使命を遂行すべき秋であります．かくの如き時代こそ真に有為なる青年人才の輩出を待望さる可きかと信じます．現時国策遂行の一枢軸として工業の拡充進展を期せらるる時，諸君青年技術家の責任たるや洵に重大且光栄たるものであります．諸君須らく愛国精神に燃えて奮起是に答へるの決意を堅くせられんことを切望して止みません．…….

4. 飯島中尉戦死　本校卒で初めて

電化11期卒飯島醇一陸軍中尉は，13年３月31日北支邯鄲付近で名誉の戦死を遂げた．本校出身者で今次事変最初の戦死者であった．

飯島中尉は本校卒業後，名古屋の大同電気製鋼所に入社，４カ年余にして今回の弔報となった．

なお，この時点で本校卒業生で応召した者は，すでに百名を越えていた．

5. 煙洲翁 前線を慰問

名誉教授煙洲鈴木達治は野村洋一郎（元本校助教授）を帯同，13年４月７日横浜発で全満支，北支視察，慰問の旅に出発した．いつも愛用している身長より長い竹づえにトランクひとつという悠々（ゆうゆう）たるいでたちで，68歳とは思えぬかくしゃくたるものであった．

主なる訪問先は，京城，奉天，大連，新京，哈爾賓（ハルビン），黒河，白城子，鄭家屯，大虎山，錦縣，承徳，北京，張河口，大同，天津，山海関，吉林，羅津，元山などであった．

煙洲先生来たるの報に横浜工業会大連支部，新京支部，朝鮮支部などでは大歓迎会を開催した．煙洲翁は終始元気で現地各部隊をも慰問し５月15日無事帰校した．

いま今次慰問について煙洲翁が工業会誌に寄稿した一節を次に載せて，そのときの模様の一端を知るよすがとする．

北満，北支旅行談（横浜工業会誌 13—6）

実は今度の旅行は観光の目的ではありませんで，高工，実習学校，専修学校この３校の人々の中で，応召して戦地にある者を見舞ふこと．もう一つは出身者で大陸に発展して職に就いている者があります．さういふ方々を見舞ふのが目的でありましたから，大連に於ても奉天に於ても哈爾賓に於ても，それぞれさういふ方々の会合に出席して様子もきいたり，久濶を叙して彼らを慰問したのであります．そこで哈爾賓から東の方へ４つ目の停留場に阿城といふのがあります．そこに部隊がありまして高工職員の１人である上野三郎君が居ります．……阿城というのは相当な町でありますけれども，兵営のある所は町から可なり隔って居ります．阿城の駅から１里か１里たらずといふ所で，その間を馬車に乗って行きました．その道がまた非常な悪路で……．そして兵営で首尾よく本人に会ふことが出来ました．しかし本人は私の顔を見ても一言も，ものを言わないでじっとして

いる．私も言葉が出なかった．言葉より涙が先に出るような気持がするので無言で居った．番兵の世話で一室を借り一時間半ばかり色々のお話をした．それから別れる時分に門まで送って来て別れた．私から受取った多少の土産を側に抱へて下を向いてそろりそろりと自分の営所の方へ戻って行きます．……広漠たる所で，どちらを見ても空野じゃ．遙か向ふの方に阿城の町が小さく見えるだけであります．……そこへ自分の古い友達が訪ねて行ったらものが言へなかったといふことは無理がない．寂漠たるところに居て思はぬ人に出会ったのでさうなったと思へる．

万里空原万里情　胡塵磧上訪君行
相遭相対同無語　老涙滂沱洒塞城

6. 航空工学科の設置

本校に航究工学科を設置すべしとの願望は，さきにもしばしば述べたように，昭和4年造船工学科設置の時から芽ばえていた．すなわち造船工学科の中に航空力学等航空関係の講義を設け，造船工学科卒業生のうち若干名の航空関係を専攻した者があった．これを航空専修生と称した．文部省の一部ではこれを私生児視しており，鈴木校長時代には，再三の独立運動も当局の認めるところとならず，いわばこれが認知されないままであった．冨山校長はこの航空工学科独立の鈴木前校長の素志を受けつぎ，当局に対してできる限りのあらゆる手を打った．

昭和11年初頭，冨山校長は畑陸軍航空本部長に面接，航空科設置の急務なるゆえんを力説，つづいて陸軍航空関係者に同趣旨を説明した．11年5月には文部省田中高工教育課長が来校，校長および近藤教授らと重要協議を行なった．

こうして昭和11年11月大蔵省の査定を通過した．すなわち，本校航空工学科独立予算として450千円が査定された．なおこの時直轄学校特別会計として，東大150千円，九大400千円，名古屋高工450千円が査定，本議会に上程された．昭和12年の71議会では本校のみが予算通過をした．つづく72議会（12年9月）には収容学生倍加（20人を40人に）の予算増加が認められた．なお航空科の予算決定は本校のみで他高工はまだ決定せず，全国高工のトップを切ったもので，本校の初志がここに貫徹された．

通過予算の内訳は，建築費300千円，設備費300千円，経常費45千円で予定としては航空工学科本館は4月早々着工，ほかに風洞実験室，強度実験室，機械および発動機実習室，飛行性実験室，水槽実験室，発動機実験室を逐次増設，教授陣は近藤教授，池田教授，松川教授，小川講師，田島嘱託が当たり，将来は教授6名，助教授3名の予定であった．

こうして，昭和13年3月航空工学科としては初めての生徒を募集した．このとき募集人員40名に対し，志願者は286名で，実に7.2倍の競争率であった．（前述）

昭和13年3月23日の高工時報には，この新しい航空工学科の新入生に対し，次のような忠告を与えている．

「今度初めて出来た科でどこの高工よりも早くできた科です．今までになかっただけに今度の人らが，この科の伝統を作りあげてゆく基礎になるのだ．しかし，造船科の中に航空専修生としての兄貴分がいるのだから安心はできません．…….

しかし御承知のように，飛行士のように決して華やかな仕事ではありません．華やかな夢にあこがれて入ったんなら，そんな人は今からでもいいから出て行って下さい．ここに入る人は皆『縁の下の力持ち』の覚悟がなくてはだめです．」

昭和13年３月29日　文部省令第７号を以て本校規程中を改正し航空工学科を増設同時に学科課程を制定した.

航空工学科　学科課程

学科目＼学年	第１学年毎週教授時数			第２学年毎週教授時数			第３学年毎週教授時数		
	第１学期	第２学期	第３学期	第１学期	第２学期	第３学期	第１学期	第２学期	第３学期
修身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体育	4	4	4	4	4	4	4	4	4
外国語	5	5	5	5	5	5	2	2	2
数学	5	5	5	4	4	4			
物理学	4	4	4						
物理実験	3	3	3						
電気工学				1	1	1			
応用力学	2	2	2	1	1	1			
飛行機力学				2	2	2	2	2	2
空気力学							2	2	2
航空機械学	2	2	2						
航空用造船学	3	3	3						
航空原動機				2	2	2			
飛行機強度学				3	3	3	2	2	2
飛行機構造法	2	2	2	2	2	2			
飛行機製造法				2	2	2			
飛行機設計法				2	2	2	2	2	2
風行機設計演習				2	2	2	2	2	2
航空学演習				2	2	2	2	2	2
航空学実習	3	3	3						
航空学実験				3	3	3	3	3	3
航空機械製図	2	2	2						
飛行機構造製図	5	5	5	5	5	5			
飛行機設計製図							17	17	17
法制及経済							2	2	2
合計	41	41	41	41	41	41	41	41	41

創設時の航空工学科教授陣は次の通りであった.

教授（学科事務取扱）	飛行機力学，航空学演習，飛行機，設計製図，航空学実習，航空学実験	工学士	近藤政市
教授	飛行機強度学，飛行機構造製図，飛行機設計製図，航空学実験	工学士	池田健
教授	応用力学，空気力学，航空学演習 航空学実験	理学士	松川昌蔵
教授	航空機械工学，飛行機構造法，航空機械製図，飛行機構造製図	工学士	広津万里
教授	航空原動機，航空学実習，応用力学		柴田浩
講師	飛行機設計法，同演習，飛行機設計製図	工学士	小川太一郎
講師	航空用造船学，航行機設計法，同演習	工学士	福田秀雄
講師	空気力学，航空学演習	工学士	広田守道
講師	飛行機工作法		小林喜通
講師	応用力学	工学士	阿曾真一郎
助教授	空気力学，航空学演習，航空学実験	理学士	鈴木勝
嘱託	航空学実験		尾上伍市

以上のように本校に航空工学科が生まれるまでには，鈴木初代校長，その後を受けた冨山２代校長の全く血のにじむような努力があったのである．今から考えてみると全く当局の先を見る明のなかったことが，おかしいようである．飛行機搭上員の養成には，陸海軍とも力を入れて米英に負けぬくらいの技量を有するパイロットを作り上げたが，肝心の飛行機そのものを作る人を忘却していたように思える．

昭和13年ここにはじめて航空工学科設置が認められたのは余りに遅過ぎた．戦争が始まろうとしてようやく神輿（みこし）をあげた感が深い．戦後冨山校長は次のように語っている．

冨山校長の追想

私が就任後直ちに考えざるを得なかったことは，航空工学科の独立新設のことであった．鈴木校長時代に既設の造船工学科の一部に航空専修生の制度を設け，航空技術者の養成をいたしており，これを航空工学科として独立せしめんとする計画を連年試みられたが，ついに政府当局の容るるところとならず，私が校長就任後間もなく，その意を継いで，その独立を文部省に対し強硬に申出で働きかけたが，当局は，横浜の学校の航空専修制度は学校が勝手に設けたもので，言わば私生児であり，その独立は認め難いとのことであった．よって私はこれに対してその私生児と言われる専修生が立派に育って今や相当数ここを巣立って航空工学界に大きな貢献をしつつあるので，その私生児も公認して然るべきである．文部省は大蔵省が容易に首を縦に振らないので実現できないということであったので，私は何としても実現したい決心であるので大蔵省が諾するよう運動したいと思うが如何と主張し，当時の所管局長であられた菊池豊三郎氏がこれに承認を与えられた．よってある知人の紹介で時の陸軍航空本部長であられた畑俊六氏（後の元帥畑大将）に面会した．同氏は私の出身校府立一中の大先輩であられたので特によく好意を以て私の主張を聴取された．その際私の論旨は「私は第１次世界大戦直後欧洲及び米国に滞在しておったが，仏における米国の戦時施設と又米本国における諸般の軍事関係工業の壮大にして，その国力の偉大なるを見学して驚嘆したが，この米国と今の日本とが干戈相見ゆることは吾々の眼の黒い内は絶対に避けなければならないと信ずるがと前提し，然るに最近の実情は日米ついに砲火交える危険が増大しつつあるように見

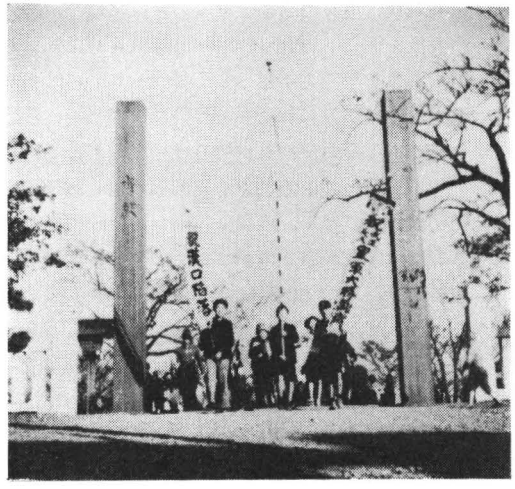
えるは甚だ憂慮に堪えない．万一不幸かくの如きことになれば，航空戦が主力となるよう想像されるが，わが陸海軍は航空機操縦者の養成には可成力をそそいでおるが，その源となる航空機の製造技術者の養成を閑却しておるように思われるのは甚だ遺憾である．米国に於て大学の航空工学科卒業の技術者は年々 1,500 名に達しておるのに対し，わが国にては東京大学の航空科と横浜高工の私生児と言われる航空専修生を加えて僅かに年20名足らずしか卒業生を出していない．これでは戦にならない」と熱心に説明した．昭和11年２月25日のあの2.26事件の突発した前日であった．畑氏はこれに対しよく言ってくれたと感動され，早速陸軍の航空関係者を集めるから同様のことを直接にまた説明してくれとのことであった．その直後陸軍の航空に関係深い将星約10名くらい集められた．南次郎大将，又畑氏に次いで航空本部長になられた古荘中将等であった．この席で前記と同様のことを力説した．南大将は特に感動され早速寺内陸相に伝えると約束され間もなく閣議において陸相より横浜高工に航空科を設置すべしと提案され速座に閣議決定して，開会中の第71帝国議会に追加予算として，横浜高工航空科設置が協賛され，急転直下わが航空工学科が設置されるに至り，直ちに学校としては設備に着手するに至った．航空専修生時代より，独立した航空科より輩出した多数の有為なる卒業者は戦時中は勿論，戦後今日に至るまで，我国航空機製作工業に貢献したこと大なるものがあった．然るに終戦時占領下ＧＨＱの指令により航空科廃止の悲運となったことは返す返すも遺憾千万のことである．

（昭和45年横浜国大工学部機械同窓会　会員名簿　弘明寺学園創立当時等の懐古　冨山保より）

このようにして本校の航空工学科は難産の末，ついに誕生したが，以上縷々（るる）として述べたことは，一科を増設するにも校長はじめ学校当事者がいかに骨身をけずる労苦を重ねたかを述べたいためにほかならない．

13年４月航空工学科はめでたく誕生したが，予算その他の関係で，諸設備については遺憾な点が多かった．しかし同年秋に至り，造船工学科および物理教室の新館移転にともない，その旧建物を譲り受け，航空新館ができるまで利用することとなった．

すなわす航空１年は，旧物理教室および図書室を製図室に，航空２年は旧第３教室および教授室を利用した．旧造船２年および３年の製図室は格納庫として海軍より下付の水上機を入れた．また航空図書室には造船図書室にあった航空関係図書を移したが，新しく多数の図書も購入した．また機体および発動機実習用具等も続々購入し設備を充実した．



伊勢山太神宮参拝（13年10月28日漢口陥落）

7. 校内洪水で休講

13年6月27日，夜来関東一円を襲った豪雨は次第に猛威をふるい，29日には本校も10数センチの浸水を見，校庭は池のようになった．30日は鉄道も各所不通となり，登校者も少なく各科とも休講となり，翌7月1日も鉄道は復旧せず，つづいて休講となった．

8. 集団勤労作業　プール造り

非常時下夏休みを有意義に利用してはとの議が，昭和13年6月の全国直轄学校長会議で提示されたが，本校においても学校，学生側両者の会合で種種論議された結果，プールを掘鑿（さく）することに決定，中島教授，鈴木(秀)助教授設計で，14m×25m，深さ1m20～2mが計画された．そして7月10日より14日までの5日間で，生徒200有余名，職員30名が出動し工事に従事した．

その後費用の点で行きづまり，掘ったままとなっていたが，11月に至り冨山校長からセメント代2,500円の寄付があり，鈴木助教授監督のもとに厚さ10cmのコンクリートで固め，仕上げ工事を行ない12月初めようやく完成した．

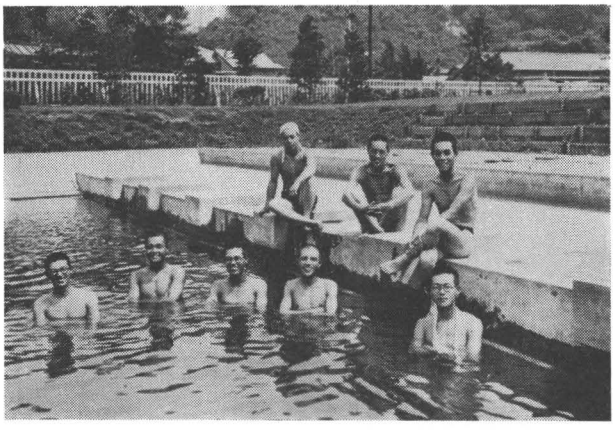
勤労奉仕として最初の鍬（くわ）を入れてから5カ月余，校友の尊い勤労と校長の親心と関係者一同の努力が実り，ここに待望のプールが完成，12月10日プール引渡式を行なった．

なお校長の寄付は，同校長が東京工大の加藤与五郎教授と共同でとったパテントが売れた金額の半分ということであった．プール開きは昭和14年3月15日卒業式のあと行なわれた．

9. 第4期工事成る　新館で授業開始

新館第3期工事は11年9月外郭工事を終わったが，しかしその後予算の都合上黄白タイルの蕭洒（しょうしゃ）な威容をいたずらにさらしたまま全く顧みられなかった．そして昭和12年末に至りようやく予算がとれ，内装工事に着手したことはすでに述べた．この工事は予定の通り進ちょくし，13年の夏休み中に完成，同年9月の新学期から，この新館で待望の授業が開始された．

新館の正面1階は学校関係室，2階は数学教室，大教室，教授室，3階は2階同様教授室，教室，両翼は，機械，造船，応化，電化各科となっている．図書室は玄関つき当たりであった．屋上には大サイレンを設け，一里四方に号令することができるくらいで，防空演習に威力を発揮し



新設プール

た．また造船実験室も同時に落成した．

これで今後に残されたものとしては，建築学科の建設と大講堂および航空工学科の増設工事であった．

10. 第3学年 授業繰上げ

別項就職状況の項でもちょっとふれたが，昭和13年度卒（14年3月卒業予定）の3年生は，授業を繰上げ．第2学期（12月末）をもって終了することとなった．

時局下軍需産業が多忙となり，技術者不足となったため，1日も早く1人でも多く技術者を現場に欲しいという要請にこたえるためであった．

この授業繰上げは，平和産業を除く軍需工業向けの工業科学生が対象で，本校では機械工学科42名，応用化学科45名，電気化学科42名，造船工学科17名，航空工学科12名であった．

これら学生は授業は12月いっぱいで打切り，1月より各就職決定の官庁，会社で実務に従事，3月15日の卒業式には各職場よりはせ参じて列席した．時局はついにここまで切迫してきたのであった．

なお航空，建築の一部，および教養の3年は普通どおり3学期の授業を受けた．

本件につき，冨山校長は13年10月学生に対し次のように告げた．

学校長 談

今回は国家総動員法* の第6条を適用されたもので今後も必要あれば第4条が適用されることになるかも知れない．

この具体的方策としては，9月末日までに使用予定人員を提出させ，又一方学校からも就職予定人員を申告させ，その総人員より陸海軍の必要人員を除外して残りを各工場に割当てるのである．

故に自分の不向な会社に就職したからと云ってそこをやめて，他の会社に勤めるということはできない．諸君は一個人の適不適ということを捨て，国家の為に自分の不自由等は敢然犠牲にせねばならぬ．

又授業は第2学期で打切るが，これは第3学期になったら1日も早くという会社側の要望に沿って，学校から実習に派遣するのであるから，その点深く考え，この重大時局に際し，適切な処置をとられんことを希望する．

（高工時報284号）

（注） 昭和13年4月1日公布の国家総動員法

第1条 本法に於て国家総動員とは戦時（戦争に準ずべき事変の場合を含む，以下之に同じ）に際し国防目的達成の為，国の全力を最も有効に発揮せしむる様，人的及物的資源を統制運用するをいう

第4条 政府は戦時に際し国家総動員上必要ある時は勅令の定むる所に依り，帝国臣民を徴用して，総動員業務に従事せしむることを得，但し兵役法の適用を妨げず

第6条 政府は戦時に際し国家総動員上必要ある時は勅令に定むる所に依り，従業員の使用，雇入，若は解雇又は賃金其他の労働条件に付必要なる命令を為すこと得

11. 第18回開校記念式

本校第18回開校記念式は11月1日午前9時20分より小雨そぼ降る中で，講堂において挙行された．国歌斉唱，宮城遙拝，冨山校長祝辞，鈴木名誉教授の昔の記念祭の回顧談，校歌斉唱，万歳三唱あって式を終わった．冨山校長式辞の概略は次の通りであった．

遠藤政直先生 胸像

学校長 式辞

ここに第18回開校記念日を迎えた事は誠に欣快とする所である．開校以来送り出した卒業生は2,400 名余で，内地は勿論，南米，印度支那大陸に於て，わが国工業界の為に多大の貢献をなしつつある．当初本校は3科より出発したのであるが現在では倍の6科となり校運誠に隆昌しつつあることは慶祝おく能わざる所である．昨年名教自然碑が除幕されて本校校是たる名教自然の趣旨を永遠に存して基礎をかたくし，さらに新設の航空科等過去数年間の発展は目覚しいものがある．…….

12. 本年度記念祭は中止

時局下記念祭を行ない校内開放をするか否かについては，10月中旬から再度にわたり評議員会で論議されたが，結局出席者70名中校内開放賛成16，不賛成54で，本年は校内開放とりやめと決した．

13年10月19日の高工時報では3面トップ記事として「記念祭校内開放中止と決定，伝統空しく地に落つ!!」として，このことを校友に告げている．

13. 遠藤先生胸像除幕式

わが遠藤政直先生記念事業は昭和12年9月26日，校友クラブで実行を決議され，直ちにきょ金募集に着手，先生の恩徳を慕う校友ら陸続として応募し，たちまち予算額を突破した．

おりから銅制限の適用近しということで，胸像建設の実現をいそぎ，冨山校長の了解をとり，田中文部省技師の選定により位置を定め，大和作内に製作を依頼，かくて昭和13年7月15日には本館正面右寄りに胸像を設置することができた．

昭和13年11月3日明治節のよき日を卜（ぼく）し，除幕式を挙行，この日正午ごろから冷雨を吹きつける悪天候となったが，主賓遠藤先生ならびに家族，鈴木前校長，冨山校長代理他400名余の出席者があり，用意の天幕外に雨中を佇立（ちょりつ）する人もたくさんあった．

式は修祓についで，先生令嬢の除幕あり，先生の胸像厳として現われ，一同の拍手鳴りやまず，つづいて玉串奉奠，代表村上泰助（機械1期）の事業報告，冨山校長代理・安川教授，鈴木前校長らの祝辞があり，最後に遠藤先生立って謝辞を述べ式を終わった．

この胸像は，大和作内制作，正面の題字は金子賢太郎伯爵，碑文金田一京助・橋野正精筆であった．（石膏型は大内芳，鋳造仕上げは伊藤忠雄）

なお胸像のほかに先生の肖像画を上野広一画伯に依頼，同時に贈呈した．

14. 準戦時下の就職状況

本校卒業生の就職状況については前節で述べたように，永らく就職難時代を味わってきたが，昭和8，9年ごろからようやく好況を呈し，昭和10年度にはインフレ時代の波に乗り，前年末に全部就職決定というううれしい開校以来の成績を示した．

さらにこれが10年以降になると準戦時体制下工業界の大発展にともない求人が殺到，学校当局側が断わるのに一苦労というううれしい悲鳴となり，13年度になると時局はいよいよ重大な様相を呈し就職にもついにきびしい統制がとられ厚生省の割当てとなるに至った．

いま年を追ってその状況を述べてみよう．

＜昭和11年度＞は．前年の1学期末，すなわち3年生がまだ夏休みも迎えぬ前から，申込みがあり，2学期始めには，すでに就職決定者が数十名出，2学期後半には，その申込み数は，卒業者数の3倍に達し，就職もほとんど全部決定をみるに至った．したがって，初任給も最高150円から160円という想像以上の額であった．

これは大正6，7年ごろの第1次世界大戦後の好況時代以上といえる．

冨山校長は，横浜工業会誌（昭和11年1月号）上で，好況に酔うことなかれと大要次のように卒業生をいましめている．

> 第1次好況時代のわが国の学校卒業者は，いづれも婿8人の引っぱり凧であった．従って卒業者は自ら気驕りて人間的修養と事業的工夫を怠り，為に最も大切な社会的試練時代を空費するに至ったのである．されば少しの待遇の高下によって自己の出処進退を転々し，又は眼前の小利に眩惑せられて節義を欠く等の結果は，一度整理時代にはいるや一葉落ちて天下の秋を知るの類となり忽ち馬脚を現し一つの例外もなく凋落を極むるに至ったのである．
>
> 現下の好況時代に恵まれた吾々はその余りの幸福さに酔う前に，先ず過去に於ける黄金時代の偽らざる真の姿を凝視して前車の戒めとなさねばならぬと考へる．若し今吾々がこの尊い反省を忘れて軽々しく事を処したならば，それは恐らく過去の苦い経験を再びくり返すこととならう．
>
> 鈴木前校長はこの意味で『名節を尚ぶべし』と説かれたのである．吾々は常にこの一句を肝に銘じ，仕事の上には能率の増進，経費の節減，生産費の低減等を常に工夫精進して，所謂治にいて乱を忘れざる心がけさへあれば如何に突如として反動の襲来に遇っても，大磐石の如き位置を保ち，微動だもなすべき筈はない．

＜昭和12年度＞になるとますます求人が多く，3年生になったばかりの陽春4月，早くも採用申込みが殺到し，学校当局および各科事務取扱を面食らわせた．12年4月21日号の高工時報で非公式だがと某科教授談として次のように述べ，学生の注意をうながした．

> こういう年は学生間で気も浮き立ち勉学に身も入らず，早く就職がきまると，その専門学科だけに専念して他学科を放念する様な人がないでもありません．不必要な科目は何ひとつとしてないわけですから，今やっておかねばやる時がないのですから不心得のないように．とに角まだ早や過ぎるのですから，就職してから横浜高工卒業生としてはずかしからぬ人格，学識，技能，体格の持主となるべく自重専念さるる様，特に3年生に御注意申しあげたいと思っている次第です．

このように12年度は前年以上の求人難を現出した．

＜昭和13年度＞は就職戦線大異状，大混乱を呈した．すなわち，13年度の求人申込みは，すでに前年の11月ごろから始まり，求人数も13年３月末で218口という数字を示した．この３月というのはまだ当の３年生が生まれていない時であるからすごい．その後13年11月初旬には実に2,301口という口数となった．満鉄が各科計155名，日本理化工業が応化100名．陸軍気象部が何科でもよいから100名，陸軍航空本部からは何百名でもよいという大口のものから40名～50名の会社官庁は多数に上った．このようなものすごい求人に対し，一方13年３月議会を通過した国家総動員法に基づく工業技術員使用制限令により，就職は個人の選択が許されず（ただし，建築は別）すべて厚生省の割当てによって決められることとなった．しかしこの割当制もはじめてのこととて11月になってもなかなか決まらず，その上この年から３年生は12月一杯で授業はうち切られ，１月からは就職先の官庁，会社で実習することとなったので，12月中には割当てを決めねばならなかった．昨年までは自分の好きな好条件のところへ７月の夏休みまでにはすでに本決まりとなり，２学期，３学期は安心して勉学に励むことかできたのに，この年は，前述のように12月末終業というのに11月になってもまだどこへ行くか五里霧中の有様であった．

13年11月16日の高工時報では「好況の金波銀波　卒業迫れど就職未だし　学生も狼狽気味」という見出しでこのことを報じ，さらに，12月７日号では「卒業迫る機，応，電の就職　響く厚生省の割当」として，厚生省の割当て決定を待つばかりと書いている．12月21日号では「将来の課題多し　就職陣未曾有の混乱　学校当局の指針如何」として卒業生の不安を述べ，厚生省の割当ての一日も早からんことを切望している．しかしながら結局，厚生省と学校当局の間で折衝の末，12月中には何とか割当てが決定した．14年５月17日の時報には，この間の事情を次のように述べている．

「昨年度は厚生省の割当制実施により，例年のごとく３年生の採用申込みは一学期に於て相当数に上り殆んど全部が卒業後進むべき会社決定に春そのものの日を送りつつあったにも拘らず，終には最適の会社を捨て思わぬ会社に椅子を据え慌ただしく12月を以て実社会へ巣立った」と．13年度はこのように卒業生にとっては何ともあわただしい，はっきりせぬ，不安な就職戦線であった．

＜昭和14年度＞となると別な意味で就職戦線異状ありといえる．例年ならば春ともなれば，就職の申込みが陸続として殺到し，会社の選択に心をくだくのであるが，厚生省の割当てが決まらぬ以上はどうにもならないので，５月末になっても採用申込みは皆無の状態であった．なお６月２日付け文部次官通牒(ちょう)で，早く就職を決定しないようにとの通知が学校長あてにきた．10月になると厚生省の割当て近しとの声に，中旬ごろ求人申込みがにわかに殺到，口数300以上人員千数百名を突破するに至った．14年10月18日の高工時報では「就職決定間近に　３年生の態度慎重　統制２度目の就職戦線」として大略次のように述べている．

> 学校当局はこの有難い採用申込みに深刻な顔をしながら，申込みが殖えれば，殖える程不義理が殖えるかと思うと毎日束になって来る申込み書を披くのがつらい，と語っている．一方各科の出方は，配当決定前に交渉して，抜きさしならぬ羽目に落ち入っては大変であるし，とに角厚生省からは10月には推薦さし支えなしとの公式通牒がきていても，なお慎重の態度に出て前年のようなあ

せりの様子は見られない．学生にしても口は必ずあるという自信があり，そうがつがつしないゆっくりよい口を狙ってという心理が働いているようだ．

就職戦線も14年度は笛吹けども卒業生踊らずといった状況で，12月末にはある者は不本意ながら希望しない会社へ配置された者もあったが，それぞれ新天地に向かって羽ばたいて行った．

＜昭和15年度＞は事変はますます拡大し，工業技術者の不足が叫ばれた．厚生省では，工業学校卒業生の公平な配給を期するため(高工時報の当時の表現)，15年度はいっそう技術者の使用制限令を強化することとなった．15年５月28日付けで「来春の卒業生に対する就職申込のあったものは９月以後に学生に発表せよ，学校から会社への推薦は10月以後にせよ」との厳重な文部次官通牒があった．しかし会社側から学校へは４月早早から陸続と申込みがあり，５月末には，来春卒業予定者255名（機械69，応化44，電化41，建築35，造船31，航空35）に対し早くも1.5倍の申込みがあった．

15年度はくり上げ卒業はなかったので，厚生省の割当ても相当遅れた関係上，年末になっても就職先未決定の者が少なくなかった．しかし卒業生間には需要は物すごい状態だからいずれは，どこかに落着けるということで，不安やあせりの様子は少しも見られなかった．

ただ15年度は，就職後の待遇は割当制確立後の当然の理として，２，３年前の自由競争時代のような高額は望めなく，月65円から70円という程度であった．

また建築科は15年度も使用制限令の外に置かれたので，建築本来の職場からでないところからの需要が多かった．結局工業出身者なら専門外でもよいという切羽つまった需要関係であった．

こうした種種の就職戦線を乗り越え，16年３月14日，６科270名の若人は弘陵をあとに，世紀のあらしの中に，好む職場，好まざる職場を問うことなく，雄々しく第一歩をふみ出して行った．

＜昭和16年度＞の就職戦線はどうか．割当制には学校当局も学生側も慣れ，前年の例に徴すれば，割当数さえ許せば，本校生なら大体希望する会社へ入社できるという安心感もあって，高工時報16年10月１日号になってやっとわずか２段見出しで「慌しき就職戦線　ようやく活気を呈す」と報じている有様で，学校も卒業生も楽観的態度をとっていた．ところが10月16日果然卒業は繰り上げて12月末と決定，就職戦線はが然多忙となり，忙しい中にそれぞれ就職先は短期間に決まり，16年12月26日大東亜戦争に沸き返る職場へと思い出多い弘陵をあとにスタートした．まことにあわただしい年の瀬であった．

15.　13年学園人事

三井教授辞任　川田助教授来校

三井透教授（基礎学教室英語，独語）は13年４月本校を辞任，川崎市長より懇望され，川崎市立工業学校長に転じた．大正13年東大心理学科卒，ただちに本校に奉職，辞任時には校友会新聞部部長として令名があった．

後任として川田正斎助教授が５月６日付けで就任した．同助教授は昭和７年東大文学部卒，同10年東大法学部卒，文部省実業学務局勤務であった．

中島助教授　教授に栄進

本校電気化学科助教授は13年５月15日付けで教授に栄進した．同教授は本校電化４期卒業生で学生間の信望あつく，校友会ラクビー部部長として運動方面にも理解を有していた．

河合教授辞任　津村教授着任

機械工学科河合匡教授は13年10月27日付けで辞任した．

同教授は東京高等工業学校付設教員養成所を明治40年３月卒業，同校助教授となり，大正６年４月教授，同９年９月より２カ年欧米留学，大正９年12月留学中本校教授に任ぜられ，12年７月帰朝後は本校で金属材料，材料強弱学を担当，遠藤教授と共に本校機械科の建設，充実に尽力した．この間教職にあること32年教育界，学界に残した足跡は大きい．

なお後任として津村利光教授が着任した．同教授は東京高工卒業，同校助教授より教授となり13年８月11日付けで本校教授に任ぜられた．

寺沢教授辞任　後任に木原教授

造船工学科寺沢一雄教授は13年11月30日付けで本校を去り，大阪帝大工学部造船工学科助教授に転任した．同教授は諏訪中学卒，八高を経て昭和４年東大卒，ただちに本校助教授同６年教授として９年９カ月材料強弱，船体強弱を担当した．なお校友会庭球部部長でもあった．

寺沢教授の後任として13年12月19日付けで木原博教授が着任した．木原教授は昭和９年東大工学部船舶工学科卒，東京航空研究所嘱託であった．船舶抵抗などを担当した．なお野球は高知高校時代よりつづけている明朗なスポーツマンであった．

16.　建築学科前進の歌

建築学科では，かねてより建築学科前進の歌を募集中であったが，14年１月末一等当選歌として次の歌が選ばれた．

久遠に尽きぬ芸術の流　大部友之（昭和13年卒）

1

久遠に尽きぬ　芸術（たくみ）の流れ
溢れて止まぬ　泉を汲みて
培（つちか）ふ力　明日こそ振へ
吾等は若き　文化の戦士
おゝ吾等は若き芸術の戦士

2

かたどる象徴（しるし）　若き檜の
伸びゆくかなた　風こそ薫れ
旗の生命ぞ　建国日本
吾等は強き　文化の戦士
おゝ吾等は強き芸術の戦士

3

この旗の下　吾等は行かん
たぎる情熱（こころ）を　コンパにこめて
祖国の土に　亜細亜の土に
吾等は日本の　文化の戦士
おゝ吾等は日本の芸術の戦士

17.　14年度入試

昭和14年度入学願書受付けは２月１日より開始された．本年度は高校，高工，高農等官立諸学校の受験日が重なったため，本校受験者の競争率は昨年度を下回ったが，それでも全国高専一の競争率であった．すなわち募集人員360名に対し応募人員2,100余名で本科5.72　教養6.8の競争率であった．

なお本年度は，応用化学科，電気化学科はそれぞれ35名増員があった．

本年度募集人員

機械 {本 75 / 教 15}　応化 {本 75 / 教 8}　電化 {本 75 / 教 4}　建築 {本 35 / 教 3}　造船 30　航空 30

18. 第17回卒業式

本校ならびに横浜工業専修学校卒業式は，14年3月15日午前10時より講堂で，来賓父兄多数参列のもとに盛大に挙行された．第17回卒業者186名で，本校開校以来2,380名の卒業生を出したことになる．

なお当日は本校生みの親ともいうべき有吉忠一（創立時神奈川県知事，後横浜市長）の本校設立の経緯，本校の他校に比してすぐれている諸点，卒業生の今後の進み方等についての講話があった．

学校長 式辞

……貴族院議員有吉忠一閣下には折柄議会開会中御多端の際特に卒業生一同の為に一場の御訓辞を賜はる事を御快諾下されましたことは我々感激措く能はざる処であります．閣下が多年横浜とは特別の御関係深き事は申す迄も無い事でありますが，本校に対しても創立以来殊に直接間接絶大の御支援を賜はりましたのであります．

即大正5年本校創立決定の時神奈川県知事の任にあられ，閣下は本校将来の発展を予見せられ当時同時に設立決定の同種他校の一定学校敷地よりも5千坪増加して寄附するの発議をせられそれの実現に御尽瘁せられ，而して今日閣下の先見はよく的中して，創立当時3学科のが，今日二倍の6学科に拡張せられ，現時，我国一流規模の学校となりし事は時代の進運に依る事とは申せ閣下の設立当時及その後，今日に到る迄商議員として，種々御指導御尽瘁賜はりし事に負ふ処尠からざるものにして，今日閣下より御言葉を賜ります事は一層意義深きものと考へて居ります．只今証書を授与いたしました者は本校168名，工業教員養成所18名，工業専修学校128名でありまして，此に，現下我国産業界に於て最も要望せる工業技術員の新鋭多数を送り出し得る事は大なる心強さを感ずる処でありまして，是等は何れもよく現時の国家重大期に於て負ふべき実務を自覚して国士的意気に燃えて真に工業第一線に立ちて各々与へられたる任務を全力を挙げて完ふして必ずや国家の期待に副ふの決心覚悟ある事を確信して疑はぬものであります．本年は特に各工場に於ける新卒業生の要望急でありまして，旧臘国家総動員法により工業技術員使用制限法による厚生省よりの（新卒業生の重要工業）割当許可せられたる工場に就職決定，此1月より学生として実務に従事，本日は皆各職場より此式に馳せ参じ来つた次第であります．第3学期に於て課す可く予定されし学科も1，2学期に於て或は土曜の半休を廃し又は毎日の授業時間を延長して是を了して早々学窓より送り出したのでありますが，その成績は常時に比し優るとも劣る事無く且各工場より直接に来りし作業成績報告に徴するに何れも勤勉努力優秀なりしもの大多数でありました．時局が如何に青年の愛国的精神を鼓舞激励せるかを認むる一証左として国家の為め真に慶賀に堪えぬ事と考へて居ります．

尚私は此機会を利用して学校の実情の二，三を御報告申上げ度いと存じます．御承知の通り本校は10年以前昭和4年造船学科新設と同時にその一部に於て航空専修科を設けてその卒業生は現在全国多数の航空機工場の殆ど全部に於て技術員として重要なる役割を演じて居りますが，曩に17議会の協賛を得て航空学科独立の予算廻付を受けて又72議会に於て更に収容学生倍加の予算増加を認められ，それ等の結果として漸く昨年4月より我国高工としては最初の航空学科を開設し，少壮有為の教授陣容も整ひ学生入学を許可し，只今それに要する建物設備の完成を鋭意努力進行中であります．又機械工学科より最近特に機械技術者の要求激増採用申込が卒業者の10数倍に与ふ現状に鑑み昨年より入学許可人員を約倍加し，本年よりは更

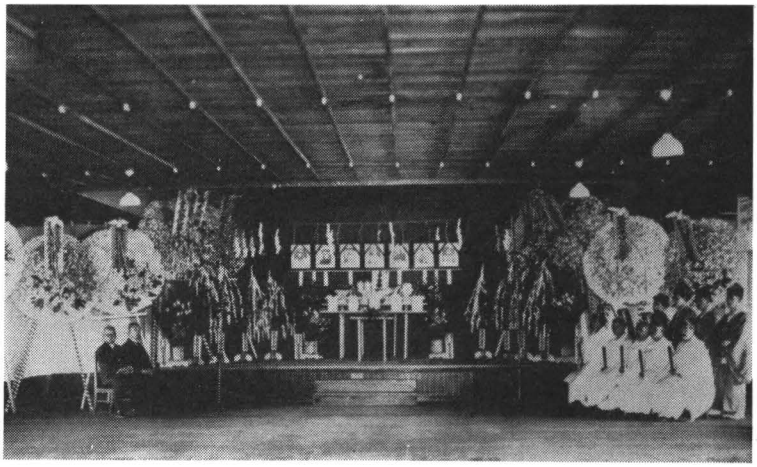
に応用化学，電気化学の二科も同様約倍加の事となり，学校も人と物の総動員をなし国家の急に応ずるの努力を致さんといたして居るのであります．

学校に於ける教授は単に学生の人格学習の直接指導誘掖に任ずる外に，又自ら進んで自己の属する専門的部門に就て研究を進むる事は学界，業界に対する直接の貢献を為すのみならず是により生々不息の潑溂たる意気を示し，無言裡に学生に対して，大なる示唆活力を与へ其影響大なるものがあるのでありますが，従来兎角その研究に要する経費が思ふに任せざるの憾ありましたが，一昨年は東京市，安井治兵衛氏は約壱万円を又昨年は王子製紙会社は弐万円を尚横浜帆布株式会社は元社長石塚彦輔氏の功労を記念する為に壱万円を，何れも教授の研究費として本校に寄附せられ，それより既に各有為なる教授より研究開始せられ着々その成績を挙げつゝあり，私は是等の特志家に対して満腔の敬意と謝意を表すると同時に又教授諸君が益々多数に学生指導の余暇を利用して，愈々活潑たる研究に専念せられ，是等篤志家の厚意に応へ以て国家の為貢献する処あらんことを期待して止まぬのであります．

尚一言申上げたい事は，横浜工業専修学校でありますが，是は横浜市の経営でありまして，本校の教授，助教授等が総動員して夜間，本校の教室，実験室を利用して4年修了の現時青年学校令による工業教育機関でありますが，約800の学生を収容し学生の多くは昼間業務に服して，更に夜間勉学篤学の者にして其習学の態度熱心なる事，実に感激に値するもの多くその成績真に見るべきもの多くして卒業後各方面によく実績を挙げ賞讃を博しつゝあります．主事を始め高工本校職員が本校学生の倍加と夜間学校と所謂三交代式に技術員養成に当り国家総動員の主旨に格遵して，精励辛苦せられるゝ事に対し深甚の敬意を表するものであります……．

諸君が学校に於て，習得したる知識は僅かに是等専門的領域に於て欠く可らざる最少限度の基礎的のものに過ぎないので決して完成されたものではありません．其の仕上完成は優秀なる素質を有する諸君が今後に於て自発的に修養，切瑳，琢磨することにあるのであります．それが為には諸君の従事せんとする仕事の最も下級の部門より出発し自ら進んで是を体得して逐次段階又段階各部門を一貫して，その工業全部に及ぼしその各段階に於て其体験に学術的考案を加え改良すべき点は工夫考案し，各部門の全体に対する関係を技術的経済的等各方面より緻密なる研究をなして進む可きと信じます．かくしてこそ真の意味に於けるその方面に於ける第一人者となり指導者たり得るので，地位の高下，給与の多寡等を論ずることなく，終始一貫して一路邁進してこそ是に到達し得るのであります．而して是を為し得るのは諸君の如き年少気鋭元気潑溂たる時代の学窓を終へたる人に於てのみ望み得らるゝのでありまして，私は諸君が此の特権を放棄せぬ様希望して止まぬのであります．人格の陶冶に就ては一層の修養鍛錬を必要といたします．如何に知識，経験に長ずると雖も若し人格に於て欠くる処あれば其の人としての価値無きのみならず，却て社会に害毒を及ぼし又其個人も社会的生命を失ひ，終に破滅に終るの例は少からず深く留意すべきであります．公明正大堂々として，天下の正道に進み因循姑息陰謀策動は飽く迄是を排斥し正義を死守するの覚悟を以て所信に邁進するの勇気を涵養せねばなりません，と同時に一面常に反省熟慮して他人の善言を容るゝの雅量を有し常時春風駘蕩周囲と協調一致の核心となり多くの人力を総合してこそ，より大なる仕事を達成し得るものと確信いたします．

現下我国が曠古の重大時局に際会し，外幾十百万の皇軍を支那大陸に有史以来，未曾有の蜒々たる長大戦線を張りあらゆる困苦を克服しつゝ，君国に身命を捧げて善戦し内国民の上下は物心を挙げて，総動員一致協力聖戦目的に邁進し，国家的大使命たる東亜永遠の安定と大和民族当然の権利たる大陸への平和的発展の基礎確立なる大事業完全の途上に在るのであります．是が為めに国民の全部一人一人が皆此難局を支える柱となり，その総力によりて突破せねばならぬ時であります．殊に諸君が明日より担任すべき職場は直接皇軍将士に供給する軍需品の製産に或は現下最重要とせらるゝ国際収支の上に寄与すべき海外輸出品の製産に或は銃後国民生活に欠く可からざる物資の製産等に当る処にして，諸君の努力如何は国運の消長に重大なる影響ありと言ふも，過言では無いのであります．平時に比し一層の緊張一段の努力至誠事に当らねばなりません．……．諸君は此重大にして光栄ある責務を自覚し，国士的志を以てし勇敢に，明朗闊達に滅私奉公の精神を以て邁進されんことを熱望して止みません……．



慰 霊 祭
(昭和14年)

19. 慰霊祭挙行

14年4月25日，靖国神社で臨時大祭が行なわれた．当校ではこの日午前10時30分より講堂でしめやかに慰霊祭を挙行した．正面に戦死した先輩七柱の写真を安置，遺族，職員，生徒一同参列，修祓，祭辞奏上，冨山校長の祭文奏上，工業会会長弔辞，生徒代表の弔辞等あって厳粛裏に式を閉じた．

七柱の略歴

◇吉田一雄（陸軍歩兵曹長）大正14年3月機械工学科卒，芝浦マツダ工業(株)勤務，昭和13年5月15日中支河南省にて戦死

◇長渡成功（陸軍歩兵中尉）昭和9年3月機械工学科卒，日本鉱業(株)尾小屋鉱山勤務，昭和13年9月27日黄泥湖西方にて戦死

◇松尾元重（陸軍航空兵中尉）昭和7年3月機械工学科卒，日立製作所亀戸工場勤務，昭和14年2月20日第2回蘭州空襲に参加戦死

◇飯島醇一（陸軍輜重兵中尉）昭和8年3月電気化学科卒，名古市大同電気製鋼所勤務，昭和13年3月31日邯鄲付近にて戦死

◇川辺盛次（陸軍特務上等兵）昭和11年3月電気化学科卒，日本曹達(株)会津工場勤務，昭和12年出征以来北支，中支に転戦，漢口攻略目ざして進撃中病気となり昭和13年12月4日戦病死

◇松本　才（陸軍工兵中尉）昭和7年3月建築学科卒，警視庁勤務，昭和12年12月杭州攻略戦に参加，大銭江塘江渡河作業中病気となり，昭和14年3月31日戦病死

◇横溝　俊（陸軍輜重兵上等兵）昭和13年3月工業教員養成所建築学科卒，大蔵省専売局勤務，昭和13年7月上海および杭州方面の戦闘に参加中病気となり13年7月14日内地送還，翌15日広島陸軍病院にて戦病死．

20. 高工時報300号を迎う

わが高工時報は大正14年1月15日創刊発行以来，昭和14年6月7日号をもってここに300号を刻んだ．

新聞部部長橋本重隆教授は，300号にあいさつとして次のように述べているが，これは自画自

讃ではなく，学校新聞が300号を刊行し得たことと，その内容が学生新聞として真に価値あるものであったことは，世の有識者のだれもが認めたところであった．あいさつの概略次の通り．

……10数年に亘る部員の努力，ことにその後半に於て高工時報は出版法により供託金を積んで定期刊行物として発行せられ，第3種郵便物認可を受けて居るのであるから，校内のみではなく学校から離れた社会的の一存在となったのである．

しかも新聞部は1年毎に事実上の責任者となる学生委員が入れ替りつつあるにも関らず未だ1回も粗相がないというのは驚くべきことである．

号数300に達したのは全国専門学校新聞としては異数であると言わねばならぬ．定期刊行物を永年に亘って続けるのは如何に難事業であるかということは局に当る者のみの知るところであるが，高工時報は見事にこれをやってのけたのである．

勿論前校長及び現校長の理解と校友会，横浜工業会，工業懇談会等の後援に負うところ多大であるが，先輩から現在まで歴代部員の撓まざる努力の賜に外ならぬと思う．敢えて某年度の委員長とか編集部長とかいうのではない．本校学生が立派に此の種のことをやって行けるのを300号という数字で如実に示しているものである．否広く言えば，全国高工学生を代表して工業学生必ずしも技術や学問の末梢に拘泥しておらぬ．余暇を善用してこれだけの仕事ができるということを示して万丈の気焔を吐いているものと言えまいか．…….

21. 天皇御親閲

陸軍現役将校学校配属令が施行されて15年，これを記念して，天皇の親閲式が，昭和14年5月22日午前10時より宮城前広場において盛大に挙行された．当校よりは，代表生徒10名と校長および配属将校豊久大佐ほか職員数名が参列した．親閲式には横浜高等工業学校と黒く染めぬいた校旗を先頭として分列行進に参加した．

なお本校では5月30日午後2時，5月22日に「青少年学徒に下し賜りたる勅語」奉読式を，本校グラウンドにおいて挙行した．

22. 大陸会の復活

久しい間沈黙を守っていた本校大陸会は時局を反映してここに復興の機運を迎え，昭和14年4月18日工業会館において復活第1回総会を開いた．

当日は，本会創立者である鈴木前校長をはじめ安川，川田両教授ならびに創立当時先頭に立って大活躍をした斎藤興次先輩（電化大正15年4期卒）を迎え，大陸会幹事友成助教授司会のもとに開催された．

当日の決議事項は次の通り

1. 内外事情の調査研究
1. 大陸との密接なる連絡
1. 大陸講演会の開催
1. 支那語研究
1. 満支視察見学旅行の援助
1. 大陸へ夏季実習の実施

なお冨山校長が会長に鈴木前校長が名誉会長に推された．

この際創立以後の大陸会の足跡を簡単に述べておく．

◇大正15年夏　大陸視察を募り参加者30名を得て約1カ月にわたる実地見学を行なう．

◇昭和2年　台湾旅行団19名渡台．

◇〃　5年　大陸見学団30名実地視察．

◇〃　6年　満洲事変ぼっ発に際し国際連盟の雲行きが険悪となったので，芳沢代表に激励電報をおくる．また満蒙問題批判会を開き，駐屯兵士慰問金を募集する．さらに代表4学生が慰問文3,000通，慰問袋700個を携行し現地を慰問する．

この年の暮，国際連盟芳沢，松平，吉田大使に重ねて激励電報を打つ．代表10名が若槻首相に決議文を渡し激励する．

◇〃　7年　県市後援のもとに，満洲国協和会日本派遣使節団を迎え，開港記念会館で歓迎会を開催，団員20名を募り第3回大陸視察を行なう．

その後いつとなく沈滞衰微し，やがて有名無実となっていたものが今回復活したのであった．

23.　航空工学科新館落成

かねてから工事中であった航空工学科新館は物資統制等の影響で多少遅延したが，昭和14年夏完成し，休暇中に移転を完了した．

この新館は造船本館横に建てられ，航空工学科本館および教授室にあてられた．

24.　木炭自動車使用

昭和14年ごろになると物資がだんだんと窮屈となってきて，いわゆる代用品時代となった．ガソリン節約のための木炭自動車なども町に現われてきた．

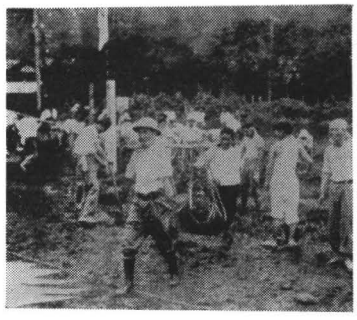
本校でも14年6月，2台ある自動車のうちのセダン1台を改造して木炭車とした．これは全国学校に先鞭（せんべん）をつけたものである．

ちなみにこのころの本校へのガソリン配給量は月27ガロンで，そのうちの10ガロンは各科の実験用で自動車用は残り17ガロンであった．

25.　夏季勤労奉仕

昭和14年度の勤労奉仕は校庭整理を行なうこととなり，7月8日より14日にかけ行なわれた．

まず7月8日午前11時勤労奉仕作業始めの式が「名教自然碑」の前で行なわれ，午後からは．



勤労奉仕（昭和14年）

機械，応化両科３年生が校庭に集合，大太鼓が鳴り響くや，冨山校長が最初の一鍬（ひとくわ）を入れ，つづいて一斉に作業が開始された．

７月８日午後より14日午後までの６日間，３年２年１年の順序で各自２日間，正味４時間20分の勤労奉仕で小使室横の土を掘り上げ，講堂前バレー・コート付近へ運び整備した．この埋立ての上には電化の建物と銃器室を建てるためであった．

なおこの奉仕には昨年同様校長はじめ，教職員多数が参加し，学生に交って汗を流した．

26. 電化満州鉱工業調査隊

横浜高工電気化学科３年生満洲鉱工業調査隊は，昭和14年８月の夏休みを利用して，満州の鉱工業調査研究旅行を行なった．一行は顧問　横山教授，石川，鶴岡両助教授，隊長桜井静夫ほか電化３年生26名で，８月１日神戸出港の熱河丸に乗船，同４日大連着，同16日釜山発，17日無事神戸着帰校した．この間満鉄中央試験所，日清油房（４日），満洲化学工業㈱，満洲石油㈱（５日），昭和製鋼所（７日），満洲軽金属製造㈱，満洲化学工業所（８日），大同酒精（９日），吉林松花江発電所（12日），奉天造兵廠（13日），金鉱精練所（14日），京城帝大，京城高工（15日）などを視察した．また各地で横浜工業会会員の歓迎をうけた．

隊長　桜井　静夫

第１班	新井　士郎	和泉　正一	内田　義行	小原　清明
第２班	大塚　暢	菊池　芳郎	北村　達三	草場　郁郎	黒田　和
第３班	斎藤　義治	須賀　健治	鈴木　俊雄	鈴木　政良	田中　儀平
第４班	高梨　秀雄	谷沢　良直	鳥井喜久雄	永井　幸二	西野　稔
第５班	西野　幸男	三宅　道夫	金親　輝夫	橋本　四郎	山添　尚三
	川井　一男			

27. 興亜青年勤労報国隊に参加

昭和14年夏休みを利用して文部省教学局では，第１回興亜青年勤労報国隊北支および蒙疆派遣団を募集した．本校ではきん然これに参加を表明，各科で希望者を募ったところ30数名の応募者があった．教務課では身体検査その他で厳重選考の結果，20名を選び竹内教授，友成助教授を教官として参加させた．

○本科

教官　竹内秀雄教授

生徒（分隊長）　菅沼貞三（機３）

（衛生主任）　中村　修（航３）　金井治郎（応３）　瀬戸洋三（応３）　青木　栄（建３）宮坂信行（機３）　別府健次（電２）　岩崎康弥（建２）　松瀬隆国（造３）　弓削田正明（航２）

○教員養成所

教官　友成忠雄助教授

生徒（分隊長）松島雅治（応３）

（衛生主任）長島新喜治（応３）伊藤吉次（機２）大木茂松（機２）黒田信一（機２）竹内　浩

（機２）守清治郎（機２）杉崎孝之（応２）畠山滝男（応２）笹平覚衛（電１）

全国からの参加者は７月中旬内原訓練所で１週間の訓練をうけ，第１，第２班に分かれて外地へ向け勇躍出発した．本校は第２班に属し７月19日内原発，20日神戸出港25日塘沽へ上陸，それより北京西苑兵舎に入舎，杉山北支派遣軍指揮官の配下にはいり，北京で道路建設作業等を行ない，８月２日本科生と教養生は一時別行動をとり，本科生は八達嶺，張家口，包頭等で皇軍慰問，視察，勤労作業に従事，教養生一行は，保定，満城，天津で飛行場整備等の勤労奉仕，皇軍慰問，視察等をなし，８月20日太原で本科生と合し，いずれも大陸焼けした元気な顔で８月30日無事帰校した．

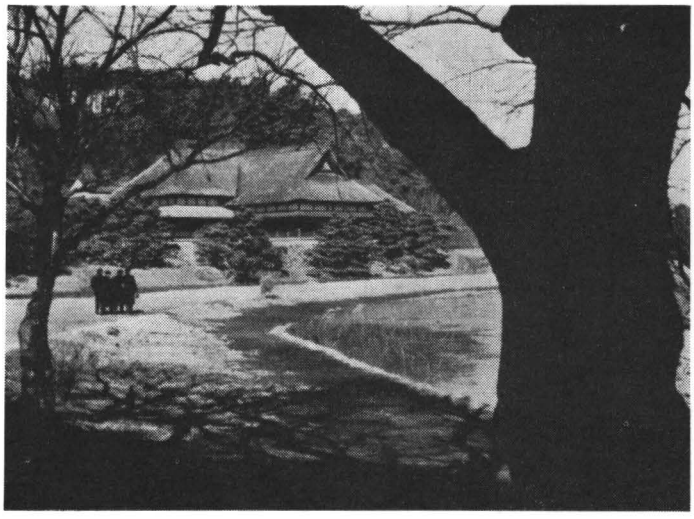
28. 原 富太郎 逝く

本校商議委員　三渓原富太郎は，昭和14年８月16日72歳で病気のため死去した．氏は横浜の恩人であり，また本校創設以来の恩人でもあった．

本校設立に際し氏は，時の県知事有吉忠一，中村房次郎，井上準之助らと協力して奔走し，大正９年学校設立と同時に最初の商議委員となり，以来死去の日まで20年にわたり本校のために尽力するところ大であった．ことに震災に遭遇してはその復興に力を致し，また震災後本校に土木および建築の両科を増設せんとするに当たり，自ら文部省，大蔵省などに出頭し，これが実現のために当局を説得した．また造船工学科の増設，その他本校の重大事件に際しては常に協力を惜しまず，真に本校のよき理解者であり，庇護(ひご)者であった．氏の他界に際しては鈴木前校長，冨山校長はじめ学園関係者一同深く哀悼の意をささげ，その遺徳をしのんだ．有名な本牧の三渓園はその住居であった．また本校生徒たちの逍遙（しょうよう）の地でもあった．

原三渓先生記念碑 成る

本校関係者一同は原富太郎の遺徳を長くしのび，その高潔なる人格を後世に伝えるため記念碑設立を計画したが，ようやく工成り３周忌を迎えた昭和16年８月16日，久保山の原家の墓地においてその除幕式を行なった．



三 渓 園

記念碑の設計は，本校建築科生徒より募集，中村教授これを選し，撰文（せんぶん）は生前交友深かった鈴木前校長の筆に成る．碑の設計および撰文はいずれも簡にして明，よく三渓原富太郎をしのぶに足るものといわれている．

撰　文

関東大震災は我横浜市を挙げて灰燼に帰せしめたり．

三渓先生勇猛心を鼓し身を挺して市民の先頭に立ち能く復興の大業を成就したり　我横浜高等工業学校亦其恩沢に浴すること多し　冨山校長その偉勲を記念し玆に此の碑を建つ

昭和16年８月

煙洲鈴木達治撰并書

29.　第19回開校記念式

本校第19回開校記念式は昭和14年11月１日午前８時30分より，講堂において挙行された．

式は君が代斉唱，宮城遙拝，皇軍将士に対する黙とうあってのち，冨山校長の祝辞があった．

ついで校友会を代表して池内講師，池田教授，森川助教授，友成助教授，鈴木助教授らの祝辞，生徒代表祝辞ののち，校歌斉唱，万歳三唱をもって式を終わった．

冨山校長はこの時の祝辞の中に次のように「自覚自治」ということを述べいる．

……前校長鈴木先生は創立以来，名教自然の主義を標榜せられたのであります．然らば名教自然とは何かと言えば，人材は創造することは出来ない．各人にはそれぞれの才能がある．その才能に対して恰かも草木が春光慈雨に浴するが如く，良い肥料や水分，日光等を与えて立派な苗として社会に送り出すのが学校なのである．即ち名教は自然でなければならぬ，というのがその教えなのであります．これは決して放縦を意味するものではないのであります．

今や産業は工業を中心とし，一方大陸に於ても工業方面の技術者を熱望しておるのであります．どうか諸君に於かれましても名教自然の真意義を体せられて，自覚自治以って一層の奮励を望む次第であります．

記念祭　校内開放

昭和13年度は前述のようにとうとう横浜名物の校内開放の記念祭を行なわず，学校も一般市民もがっかりしたが，昭和14年度は，何としても開催すべしとの校友の声が実を結び，11月１日，２日の両日校内開放記念祭が開催された．

今年は時局がら，全国各高専はいずれも記念祭を中止したので，本校記念祭は全国の注目するところとなった．

今年の記念祭の特徴はいわゆるお祭りさわぎを排し，真に時局にふさわしい有意義なものということで各科とも時局色豊かなもの，すなわち廃品利用，消費節約や国防をテーマとしたものが多かった．なお当日は傷痍（い）軍人が招待された．一般入場者は延べ１万5,000人であった．

なお14年11月15日の高工時報では，今年の記念祭は全般的には成功したとして次のように述べている．

今回の記念祭が聖戦下特に消費節約が高称される時，全国高工の中止を尻目に堂々断行し多大の成果を収め戦時下記念祭への新たなる伝統を築いたという点において単に形式上のみならず，

精神的に本年の記念祭は成功したりというべきで　ある.

また冨山校長は記念祭に先だち10月18日号の高工時報で「記念祭の新意義」として大略次のように述べている.

> 今年の記念祭には特に重大な使命と責務がある.今年の記念祭は所謂学校のお祭ではない.況やお祭騒ぎのごときはその片鱗だに存在することを許されないのである.
>
> 今年の記念祭は飽くまで本校の特殊性より出発する校外教育であり,授業の街頭進出であり,汎社会教育である意味を具現する為二つの題目を選んだのである.即ちその一つは消費節約であり他の一つは国防科学である…….
>
> この意味に於て今年の記念祭は,事成らんか万人環視の中にフラッシュの斉射を浴びるの誇りを感ずるであろうし,事破れんか鼎の軽重を問わるるに至るや必至である.諸君の自戒自奮を要望してやまぬ次第である.

30.　繰上げ就職　校友会送別会

昭和14年度も昨年同様,厚生省の割当てによって就職のきまった学生は,２学期をもって学業を打切り,それぞれの就職決定先へ実習名目で勤務した.ただし建築,航空,教養その他大学受験者等は居残って３学期の授業を受けた.

このため昭和14年12月15日午後１時より講堂で,校友会送別会ならびに応援団解団式が行なわれた.

31.　14年学園人事

柴田教授 着任

航空研究所技手柴田浩が,14年８月２日付けで本校航空工学科教授に任命された.

同教授は金沢高工機械科出身,大正14年より10余年間東大航空研究所に勤務し,航空原動機,特に過給器について研究していた.当校で応用力学,原動機を担当した.これによって独立２年を迎えて航空科教授陣はさらに充実した.

鈴木助教授　ハルビン工業大学へ

建築学科助教授鈴木秀一は14年10月31日で本校を辞任し,ハルビン工業大学教授として栄転した.

鈴木教授は本校建築第２回卒業生で,建築科生のよき理解者として親しまれていた.昭和13年勤労奉仕のプールの設計,監督者であった.

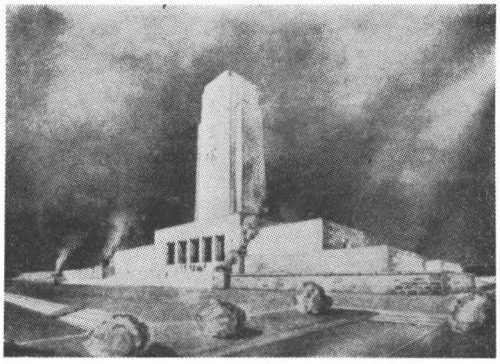
森川正助教授の入営　後任に木村講師

数学担任森川正助教授は14年12月10日入営した.同助教授は14年京大数学科卒,ただちに本校へ赴任した新進学究であった.12月７日名教自然碑前で壮行会を行なった.

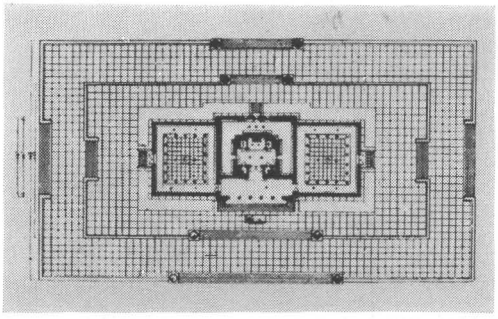
その後任として,日大予科講師木村欣三が嘱託として14年12月８日着任した.木村講師は,昭和５年東北大数学科卒,解析幾何学の研究家であった.

32.　本校建築学科の真価を発揮

大日本忠霊顕彰会では先般来忠霊塔懸賞図案を広く一般から募集中のところ,このほどこの方



忠霊塔透視図（第１種１等作品）



忠霊塔平面図 （同左）

の権威伊東忠太博士を審査長として厳正な審査の結果，応募図案1,700余点中より入選者47名を決定，15年１月６日陸軍省情報部より発表した．その結果第１種１等椋原正則をはじめ12名の本校建築科卒業生が入選の栄をかち得た．まことに全国唯一の芸術建築を標榜（ぼう）する本校建築学科の本領を発揮したものといえる．

作品は第１種（支那大陸に建設するもの）第２種（内地大都市向け）第３種（内地市町村向け）の３種に分かれ各１等１名，２等２名，３等３名，佳作31名となっている．本校関係当選者次の通り．

◇第１種　１等　椋原正則（２期）２等２席蒲生久敏（７期）

選外佳作　荒井竜三（２期）　大部友之（11期）　高橋芳雄（２期）安井善次郎（８期）天野貫一（９期）

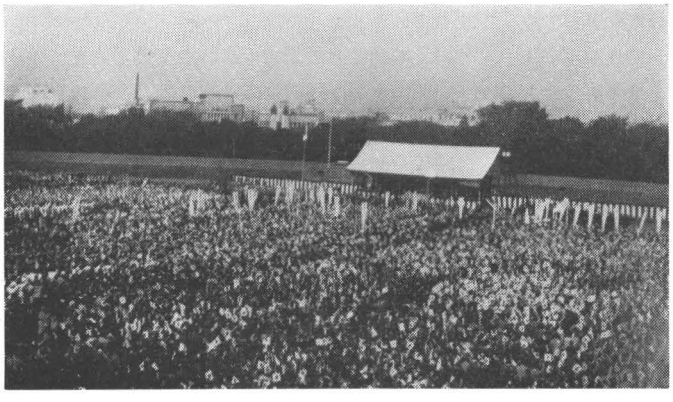
◇第２種　３等１席　荒井竜三（２期）　大部友之（11期）　選外佳作　林　三郎（６期）

◇第３種　２等１席　羽石渡（３期）選外佳作　長沢　博（１期）

なおこのしらせに喜びを味わいながら本校建築科生みの親の中村順平教授は「１等が１人とは情けない」といったというが，まことに中村教授らしいことばであった．

鈴木前校長は「私はこのことをもって本校建築科は偉いものだと自慢しない．又喜びもしない．ただ，わが高工は大なる特色を持っておるということに於て大なる誇りを感ぜざるを得ない，これは建築科の教職員諸君の平素の努力と見なければならぬが特に中村順平先生にこの機会に感謝と敬意を表したい．……悠久なる芸術の信念に自分が先頭に立って門下と共に精進して行こうというその至誠のあらわれが10幾年を経て今回の忠霊塔設計に表れてきたものと思う．」とこの喜びを語った．（六ツ川夜話による）

33.　皇紀2,600年 紀元節式典



奉祝式典 （横浜公園野球場）

昭和15年は日本紀元2,600年に当たるので，２月11日の紀元節には国をあげて奉祝の意を表したが，本校でも午前８時50分より講堂において，式典を挙行した．冨山校長は参内したため，大西教授は代理として祝辞を述べた．式後一同は横浜公園野球場における奉祝式典に参列した．

34.　第18回卒業式

本校第18回ならびに横浜工業専修学校合同卒業式は，15年３月15日午後３時より本校講堂において挙行された．

式は国歌奉唱，勅語奉読の後，冨山校長より，本校各科総代，付設工業教員養成所代表，工業専修学校代表に卒業証書授与，冨山校長の式辞があり，つづいて本校商議委員，日本工業クラブ会長　井坂孝の講演，卒業生の答辞，校歌合唱をもって終わった．

学校長　式辞

……高等工業学校に於ては，世の要望急にして学校に於ける教育は去る12月を以て打切り，１月より各就職すべき工場に於て校外実習することゝなり，本日の卒業式には皆職場より帰り来りて此光栄を得且過去２ヶ月余に於て，実社会に於て得たる尊き体験を報告いたしたのでありますが，何れも実際上，技術的の事項は元よりその他社会万般の点に於て甚だ有益なる資料を提供し時局に対応する為の今後の工業教育上稗益する処少からず本制度をよく活用せるものと思はれます。御承知の通り昨年より国家総動員法による工業技術に関する学校卒業者使用制限令により許可されたる工場にのみ就職し得る事となりましたが，本校への卒業者要望甚だ多数にして自然大部分は，最初より希望せる方面に決定し適所適材の配置をなし得た事は洵に幸とする処であります．卒業生自身もよく現下の重大時局と此秋に於ける工業青年としての負荷されたる責務を自覚し進んで国家の命ずる重要なる工業部門に貢献せんとする意気を以て各一生を托する職場を決定致したのであります．

尚此機会に各位に御報告申し上げ度いと存じますことは，今次聖戦目的遂行及新東亜建設に於て最も重要なる生産力拡充の為め工業技術者の一層多数を要望せらるゝのでありますが，是に応ずる為に本校に於ても一昨年より逐次機械，応用化学，電気化学科の三科は入学者を約倍加し更に本年より建築科も同様入学者倍加いたすことになりまして，本校創立当時三学科なりしが現在六学科となり又大部分の科が学生数当時に比し約倍加せる為学生総数は三倍以上に激増することゝなりました．然れども職員，設備，建物等必ずしも是に応じて増加拡張されず，又一面生徒の数の増加と同時にその質の向上も計らざるべからざるのでありますが，職員一同は凡ゆる困難を排除してその使命達成の為に日夜最善の努力を致して至誠奉公の心を以つて事に当つて居ります．

工業専修学校は本校の人的，物的要素を総動員して夜間工業専門の教育を施す横浜市の経営に属する学校であります．現在約900名の生徒を包擁せる此種学校としては規模に於ても又質に於ても我国屈指のものであります．生徒の大多数は昼間各職務に従事して夜間就学して居るのでありますが，その勉学修養態度たるや実に涙ぐましき程の真摯なるものあり従つて，その実蹟よく挙り既に3,000 に垂んとする卒業生は京浜間は勿論，我国到る処工業界各方面に実務者として顕著なる功績を顕はし内には工場の首脳者としてより高級学校卒業者を遙に凌駕して名を成せる者もあります．今回の卒業生も自然全部数ヶ月前に就職決定した状況であります．又近く甲種工業学校に昇格するの運となり同校専有の施設も大拡張をなすの気運に到達いたしました．

扨て本日は井坂孝先生が特に多数工業青年の世への門出を御激励の為に非常に御繁多の処を御来臨御講演を賜はる事を枉げて御承諾被下ました事は学校一同の最も光栄といたす事であります．

先生が我国経済界財界の重鎮，指導者であらせられ，殊に東京瓦斯，日本アルミニユーム等の大会社以下多数の工業会社を統率せられ斯界に顕著なる御貢献せられ，又先生を前にして申し上ぐることを甚だ憚るのでありますが，公正無私国家社会を念とせられ剛毅濶達たる御人格は一世の師表

と仰がれて居ります事は私が申上ぐる迄も無い事でありますが，私は先生の御言行を数次学生にも伝へて，吾々後進の範といたして居りますが，今日親しくその御声咳に接します事は，卒業生が一生を通じて残る感銘を得る事と確信いたします．尚先生には本校創立以来商議委員として本校の為直接間接御支援御指導を賜はり今日の発展に御資し下されたのでありまして，私は此機会を利用して併せて深甚なる感謝の意を申し述べ度いと思ひます．

卒業生諸君，諸君は本日光栄ある卒業式に列し永き学窓生活より離れて社会人への船出をなさんとする時に真に感慨無量なるものと信じます．殊に諸君は本校に入学後数ヶ月ならずして今次事変が勃発して今日に及び，国家は真に曠古未曾有の重大時局に直面し，皇国の消長は懸りて此事変解決の如何にありますが，此の間に於て諸君は眷族先輩同僚友等より多数の将士を歓呼を以て前線に送り，又幾多白衣の勇士護国の英霊を迎へて実に一生を通じて忘るべからざる感激を受け又他面国内万般の事相は日を追ふて国家総動員の態勢を調へ来り日常生活凡ての点に於て個人個人の私を捨て，国家総力協和に捧ぐるを見聞又実行し心内に燃ゆる愛国の志一層旺なるを信ずるのであります．

此の国家多難なる秋に関らず，諸君は本校在学中，殆ど平時と変り無く安穏に勉学して今日国家有用の材たるの基礎を得たる事を深く考へねばならぬと思ふのであります．かの第1次欧洲大戦に於て独逸各大学生の平均7割3分が応召出征し，又英国牛津，剣橋両大学生が共に宣戦初頭に於て各1,000名の者が軍に投ずるの要ありたる等の如きに比較する時我国学生が如何に幸福なるかを感ずべきかと思ふのでありますが，又同時に学窓を終へたる時の責務が一層大なるを考ふべきであります．直接戦争に要する各種軍需品は勿論国民生活各般に欠くべからざる多くの器材の円滑なる供給は国家総力戦に於て最重要なるもの丶一つでありますが，是は挙げて吾等工業人の責任に於て達成を期せねばなりません．

今後更に長期に亘りて国力を傾倒して遂行すべき新東亜の建設なる大事業は実に諸君青年技術者の努力奮闘に俟つべきもの甚大なるものがあります．真に諸君は永き歴史を通じて選ばれたる戦士と言はざるを得ないのであります．須らく此無上なる光栄を感得し，又同時にその責任の大なるを稽へて今後襲ひ来るべき如何なる国難にも屈する事なく愈々切磋琢磨，自己の完成に邁進し，全能力を挙げて職務の万全なる遂行するの覚悟を今日茲に強化することを要望するものであります．徒らなる大言壮語或は一時的の興奮のみにては，到底此の重大なる責務を全うし得るものではありません．確固たる基礎の上に一歩一歩営々として地歩を進めて後初めて為し得るのであります．学校は単に其の基礎的端緒を与へたるに過ぎないのでありまして，その完成は諸君自身今後に於ける修養勉学に寄らねばなりません．

凡そ凡ゆる工業に於てその成否は主として是に当る工業技術者の各方面に対する能力如何に依り決せらるゝのであります．技術者は直接多数の労務者を統率して彼等をして各その任務を自覚欣然職に当らしめ又全体として，一糸乱れざる統制の下に最高統率の総力を挙げしめざるべからず是が為めには己れ自ら私心を去りて国に報ずるの至誠を堅持し，又寛大なる抱擁力を以て同情理解により常に労務者に接し且事業経営者より万幅の信頼を得て労資一体の中心として進まざるべからず，是れ諸君が愈々修養錬磨をなし人格の完成により達し得るのであります．又他面技術上の進歩発達は技術者が自ら親しく労務者に伍してその仕事を体験且透徹せる観察をなし，常に内外の此方面に於ける情勢を調査渉猟して学理的研究を怠らず斯界の最高峯に位せしむるの責務も技術者の負ふべきであります．

斯くの如きは決して一朝一夕に成し得るのではないのでありまして，強健なる体軀と燃ゆるが如き意気，何物にも屈せざる忍耐により長年月一貫一事業に終始して始めて期し得るのであります．

唯来凡ゆる方面に此に到達し得る有能の士必しも多からず，而も是れ最も要望せらるゝのであります．私は諸君が恰も此光輝ある二千六百年国家重大の秋に学窓を出で，与へられたる職を以て天授のものとなし，一路邁進左顧右眄することなく此一途より最高の目標に到達，国家有用の材たらんことを熱望期待いたすものであります．

尚一二附言致し度いと思ひます．

昨年より工業技術に関する学校卒業者が使用制限令により其就職を律せらるゝ事となりましたが，世往々是を以て各個人の自由を束縛し恰も物の如くに取扱ひ人格を軽視せるもの丶如く評する

もの無しとせず是れ全く思はざるの甚しきものでありまして，既に申し述べた如く工業技術学校卒業者は現下並に今後国家の最も期待要望せらるゝ至宝と考へ各種学校卒業者中此重大時局担任の第一任務となして最も要用の方面に寄与貢献せしめんとする精神に外ならないのでありまして，諸君は寧ろ此国家よりの大なる期待をなされたるを光栄となし，一層の緊張を以て国の命じたる職場に参じ最善の努力を為す可きと信じます．

次に過去に於て学校卒業者が其の要望大にして競つて職に迎へらるゝ時代学窓を出づる者が動もすれば心を慢じて，修養努力を怠り終に無為に終りたる例少しとせず，今日特に戒心すべきことでありまして，諸君は現下皇国の正に大飛躍祖先先輩の遺したる功績の完成をなす国家的大事業に参加する光栄を思ひ，全力を挙げて事に当られんことを念願して止みません．…….

35. 15年度入学式

昭和15年4月9日午後1時より本校講堂で400有余名の新入生を迎え，入学式が挙行された．

式は国歌奉唱，宮城遙拝，教育勅語，青少年学徒に賜わりたる勅語の奉読の後，冨山校長より懇篤な訓示があった．

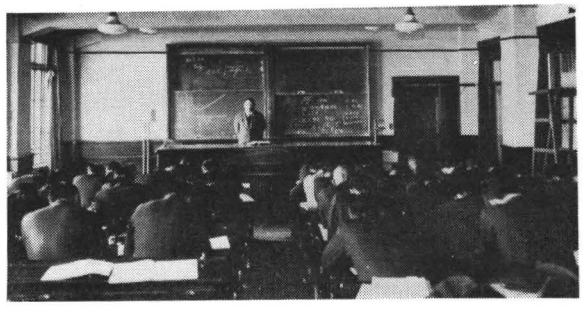
36. 学級の増加と教授陣の多忙

昭和15年度は時局がら募集人員は次の通りとなった．なお本年度は競争率が相当減少した．これは各高工の増科増員，受験期の統一等が原因と考えられる．

		募集人員	応募人員	比率	昨年度応募人員			募集人員	応募人員	比率	昨年度応募人員
機械	本	75	343	4.6	534	建築	本	75	156	2.1	142
	教	15	88	5.8	112		教	3	14	4.7	16
応化	本	75	294	3.9	337	造船	本	30	143	4.8	241
	教	8	49	6.1	55		教				
電化	本	75	280	3.7	347	航空	本	40	210	5.3	289
	教	4	24	6.0	21		教				

この新入生の増員のため昭和15年4月の新学期現在で，あらゆる方面に不足をきたしてきた．そのため，実験室，製図室，講義室は粗末ながら応急増設をし，寄宿寮も第三寮を増設した．講堂は，1，2年生で一杯となり，3年生の入る余地がない．不足の面は建物だけではなく，最も困ったのは人の面，すなわち教授陣の手不足である．14年度に比して増加学級4を数え，3年前に比して8学級増加のため，従来の2倍近くの講義を受持たねばならぬ教授もあった．

時局がら教授陣の増員は急に望み得べくもなく，各教授，助教授，講師は貴重な研究時間を割いて，若き学徒養成のため日夜努力をつづけた．



授業風景（昭和16年）

37. 中野正剛の講演

このころ学園では時局向きの各種講演が相ついで開催されたが，そのうち最も若き学徒の血を沸かしたのは，15年６月27日本校講堂で開かれた大陸会主催の中野正剛の「世界を直視せよ」という講演であった．

同氏は日支事変の本質を論じ，介入の第３国を駆逐せよと午後１時半から約２時間にわたり熱弁をふるい聴衆を魅了したが．興奮した学徒は，食堂で夕食をとっていた中野正剛をとり囲み，さらに講演の延長にはいったほどであった．

38. 高工初の女生徒

昭和15年度天下の難関を突破して本校初の女生徒があっぱれ入学した．

建築学科選科　石川末子で市立横浜高女出身．15年４月17日の高工時報には「高工初の女生徒として男ばかりの高工へ飛び込んできた意気は正に興亜女性の面目躍如たり」と紹介されていた．

なお同嬢は昭和17年９月見事学業を終え卒業した．

39. 夏季集団勤労奉仕

昭和15年度の夏季集団勤労奉仕は７月６日より開始された．

しゃく熱の太陽の照る正午，校庭に全校教職員生徒が集合，国歌奉唱裏に国旗掲揚，皇軍将士の武運長久，戦没将兵の霊に１分間の黙とう，冨山校長の訓示あって後，太鼓の音を合図にいっせいに作業開始，今年は昨年同様校庭の整理を行なった．

この勤労奉仕は一昨年のプール作り，昨年の校庭整理につづいて３年目であった．

40. 第２回興亜勤労報国隊

15年度興亜勤労報国隊の本校割当ては昨年の20名をはるかに減じ，わずか５名ときまった．希望者25名中下記のものが選ばれた．なお指導教官も１名ときまった．

教官　阿部滋弘（応化教授）

生徒　薬袋文雄（建２）　釘貫祐雄（電２）　杉山富保（航２）　藤井正一（応２）
　　安藤　勇（造２）

この横浜高工班は７月19日，横浜駅発神戸港より北支に渡り，８月下旬まで北京，太原，寧武等で勤労奉仕をし，無事８月28日神戸港へ帰った．

41. 渡辺勝三郎 逝く

元本校商議委員，宮中顧問官，第９代横浜市長，大震災復興の際の本校復興の恩人であった渡辺勝三郎は昭和15年９月24日，病気のため死去した．

右につき15年10月20日号の高工時報で前校長鈴木達治は往事をかえりみ，故人をしのんで次の

ように弔している.

渡辺顧問官は曾つて横浜市長であって同時に我校の商議委員として多大の尽力に預った．大正12年の関東大震災に際しての横浜市長の労苦というものは，筆舌に絶するものであったらうと思ふ．我々の学校も復興までの間，名古屋に移転せよとの文部省の命令を受けて厄介千万の時であった．9月25日の私の日記を繙いて見ると次の様な文句がある.

『午後市役所に行き市長渡辺勝三郎氏に面会し高工復興につき文部省の意向を開陳す．市長曰く「若し本省が強硬に移転を命令せば如何にするや」と余曰く「辞職あるのみ」と．市長曰く，「然らば市会に提出して移転反対を議決し本省に陳情せん」と．夕方市役所を去る．中秋の名月皓々として焦土を照す．徒歩にて帰る.』

42. 開校20周年記念式典および記念祭

大正9年横浜の一角，弘明寺に呱々（ここ）の声をあげてからここに星霜20年，この間卒業生を出すこと2,652名，学界に産業界に大きな足跡をしるし，これら先人の努力により全国に横浜高工の名を遺憾なく高めた.

この栄えある開校20周年記念式は昭和15年11月1日午前7時30分挙行の興亜奉公日式典後，同8時30分より本校講堂で行なわれた.

ひきつづき正午より4時まで校内開放記念祭が行なわれ，第2日の11月2日は9時より4時まで，第3日の11月3日は8時30分より明治節祝賀式，9時30分より4時まで校内開放．以上3日間にわたり記念祭が行なわれ，昨年同様各科とも技術報国，国防，消費節約等時局色豊かな催し物が多かった.

冨山校長はこのよき日に当たり大略次の通り述べた.

回顧すれば大正9年本校が開校された翌年最初の記念祭が行なわれた．当時の生徒は一人残らず熱意に燃えていた．私もまだ若く，この張り切った雰囲気の裡に包まれて，全く一身一体となって室々の飾り付けや準備に秋の日の暮れるのを忘れたものである．……第一回の卒業生を出したのは大正12年で，山手の日光屋敷（テンプルコート）で謝恩会があり，実に盛会を極めた．しかし間もなくこの会場も母校も大震災のため灰燼に帰した．その後本校は建築科の増設を皮切りに造船，航空の新設となり，急激な生徒数の増員となり，新校舎はあいついで増築せられ校運は日の出の勢を示すに至った.

かく言うとこの20年の校史は極めて坦々たるものの如くであるが，これは畢竟するに鈴木前校長が高邁なる校是を定められ，その実践に腐心せられた賜にほかならないのである.

当時わが経済界は欧洲大戦後の大不況時代に際会し，又思想界は大正の民主々義華かなりし頃の影響を多分に吸収していた．従って学校の経営上にも特異の努力を必要としたのであったが，その間に処し，先生はよく時潮に先行し，所期の成果を収められ本校の今日あるを得られたのである．爾来わが国内外の情勢は刻々と変革され就中今次聖戦を契機として……三国同盟の締結となり……この度の新体制を生むに至ったのである.

されば本校としても徒らに過去の社会態勢に恋着することなく……挙校一致時代の流に棹して行くべきだと確信する.

私は諸君がよく今日の姿を見極めて惑わず時代本来の使命を達成し……不朽の光輝ある業績を千載に残されんことを熱望する.

43. 輝く永年勤続者

開校ここに20年，このよき日をだれよりもいっそう感慨深く迎えた者は，開校以来学校と運命を共にしてきた人々であろう．喜びも悲しみも幾年月，かえりみれば幾多の思い出が胸中を去来したことであろう．

まず学内の最古参は会計課主任大山春翠で，大正９年１月19日，鈴木前校長と共に草創時代の着任で勤続20年10カ月，つづいて堀江不器雄講師（大正９年１月31日）遠藤政直講師（大正９年３月３日）安川数太郎教授（大正９年３月15日）池内本講師(大正９年５月）冨山校長(大正９年６月）草間時蕃講師（大正９年９月）の順でいずれも満20年以上，次が藤川由太郎（大正９年12月７日)(19年11カ月）津田幹夫教授（大正10年５月）横山盛彰教授（大正10年５月）今井行雄教授（大正10年５月）でいずれも勤続19年６カ月となっていた．

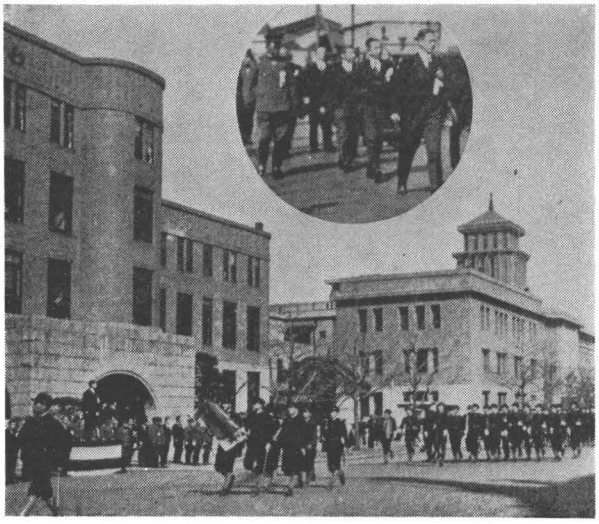
なおこのほかに15年以上勤続の教授は，（機械）岡村幸雄（16年７カ月），（同）斎藤輝治(17年８カ月)，(電化）飯沼義雄（16年７カ月），（同）河村文一（15年７カ月），（建築）中村順平(15年４カ月)，(基礎）大西友太（17年５カ月），（同）加藤述之（17年６カ月)，(同）木戸　潔（17年８カ月）となっていた．

（昭和15年11月１日現在）

44. 校友会の解散と報国団の結成

(1) 校友会解散までの経過

昭和15年７月22日，第２次近衛内閣が成立し，いわゆる新体制が強力におし進められた．新内閣成立に当たり政府は所信を述べたがそのうちに，「外交，経済が時勢に対応して大きく転換されようとしている時，教育のみが旧態のままであってはならない．真に国体に徹し，国家を荷うべき第二の国民を養成する見地から教育の刷新をはかりたい」とあった．



報国団結団式（昭和15年）

文部省では15年8月2日，橋田文相談として

1. 国体の本義を明かにし，国体の精華発揚を期すること
2. 自我功利の思想を絶対に排し，国家奉仕を第一義とする国民道徳の確立を期すること
3. 科学の真諦を普及発展せしめ，国家奉仕実現の実践的基礎を確立すること

の3点を強調した．

つづいて8月29日，全国高等学校長会議では，学校新体制の趣旨に則り，校友会の改組統合を決定し，なるべく速かに改組を実行することを申合わせた．それによると

1. 校友会は一旦解散し，校長を会長(団長)とし，教職員全部を役員(指導者)とし，生徒全部を加入した新団体を設ける
2. 在来の団体の予算は学校長の手に収め，役員の決定は教授，生徒とも選挙によることを排し，学校長の任命制とする

という従来の生徒の自由自治を排し，学校の統制の下においたものとすることにあった

全国高等学校につづいて実業専門学校でも10月1日，文部省に全国106校の校長を集め，全国専門学校長会議を開催，新修練体制確立の具体案を協議した．その結論は大体前記高等学校のそれに準じ，名称は報国会とし，11月中に規則予算等を作成し，文部省に提出，承認を得ることを決定した

本校においては10月9日本件に関する準備起草委員を任命し，つづいて調査委員会を設けるなどして準備を進めた．10月28日決定案を文部省に提出，即日認可となった．この間の学校当局の苦心は次の冨山校長のあいさつに詳しいので省略する．

(2) 報国団の結成と校友会の解散

15年12月2日，数カ月の胎動を終えてここにわが横浜高工報国団は，校友会いっさいの事業を統合して新しい第一歩をふみ出した．この日午前7時30分，全校生徒は南側運動場に集合，冨山校長は報国団結成宣言書を朗読，つづいて旧校内団体いっさいの解散宣言書を朗読，生徒代表の宣誓があった．つづいて冨山校長より報国団の使命についての講話があった．

学校長 挨拶

本校においては先づ起草委員を任命，次に調査委員会を作り，なお評議委員会をも加えて，屢々討議し回を重ねること10数回に及んだ．

その間文部省案を骨子とし生徒総代の意見を聴取し，或は本省に問い，学校全体にはかり修正に修正を加え，研究に研究を重ねてきた．

いよいよ決定案ができ10月28日本省に赴き旧校友会の予算書決算書などと共にこれを提示し即日無修正で認可せられた．

思うに今日の学園新体系は，国家全体が大政翼賛，総て心を一にし，従来の自我功利の思想があったとすればこれを清算し国家奉仕第一に改め，高度国防国家形成という大方針に則ったもので，この方向に向って諸種の校内団体を一元化し新組織を行うこととなった訳である．

本校もこの趣旨に則りできたもので，学校即ち教師が生徒と一体となり国家の大方針に従い，倶学倶進という気持ちで，一度決まった以上は全生徒の練成に向って進まうという様にならねばならぬものと考える．……

さらに特に本校としては学校の伝統的精神と今日の新体制とを別々なものだと考える者があれば，それは非常な誤りで，その間には少しの矛盾もないということこれが最も重要なことと思ふ．

この点は兎角誤解する者があり世間よりの注視も或はこの点にかかっているのかと考へられるので事実により身を以て誤解を一掃したいと思ふ．…….

今日の新体制については種々の意見も見方もあらうが，私としては今はも早や議論すべき時ではないと考へる．…….

このようにして校友会は解消し報国団が結成されたが，校友会構成各部はそのまま報国団の各

班として継承された．昭和18年に至り戦時学徒体育訓練実施要綱が発表され，報国団の各班が再検討されたがこれについては18年の項で述べる．

次に解散直前の本校校友会について述べておく．

(3) 解散時の校友会

本校の校友会についてはすでに各節で記してきたが，この光輝ある組織も前述のように15年12月2日をもって解散のやむなきに至った．思えば大正9年10月9日呱々の声をあげて以来，幾多の変遷はあったが文化部，運動部ともに全国学生間に横浜高工の名を高からしめ，学生自治の模範としてうたわれていたわが校友会も，いまここに20年にして発展的解消といわれたが，事実上解散となったのである．若人の感慨はいかばかりであったろうか．

次に解散直前の校友会の全ぼうとその歴史を簡単にながめてみよう．

校友会は文化部と運動部とに分かれ両者合わせて18の部と，他に準校友会として17のクラブがあった．

校友会各部

文化部

1. 総務部　各クラスから互選された委員各1名より組織され，予算編成，校友会歓迎会，送別会，記念祭，応召校友の歓送迎，応援団等を主な事業としていた
2. 新聞部　高工時報を発行，全国学生新聞の雄として自他ともに許していたところ．昭和15年12月末で332号を発刊した．弘陵世論の核心であり唯一の報道機関であった
3. 講演部　文化講演，講座等を行なっていた
4. 音楽部　洋楽，邦楽の2つに分かれ各々年数回音楽会を開催していた
5. 絵画部　年数回，校内展，校外展を開き，また高商との合同展も行なっていた．年6，7回モデル写生，2，3回のスケッチ旅行を行なった

運動部

1.	蹴球部	昭和2年ナイキクラブとして誕生，昭和4年校友会蹴球部となる，昭和8年対高商戦4連勝の栄冠を獲得．昭和15年再び2連勝．
2.	籠球部	対高商戦8勝3敗，対浜松高工戦9勝1敗，全国高工大会昭和10年より5連勝，横浜市内5専門リーグ戦昭和5年以来3度優勝．
3.	庭球部	始め軟球後大正13年硬球に改める．大正10年県下中等学校庭球大会主催．以後この年まで19回に及ぶ．大正15年より対高商戦開始，昭和15年度5連勝成る．全国高工大会4回優勝．
4.	ラグビー部	創設以来18年関東ラクビー協会甲種会員．
5.	水泳部	開校と同時に創設，昭和13年本校内にプール設置，県下中等学校水泳大会を主催，毎年本牧沖の寒中水泳は有名．
6.	陸上競技部	対高商戦9勝5敗1分，全国高工大会昭和12，13年連続優勝．神奈川県青年団マラソン大会，関東中等学校大会等を主催．
7.	排球部	昭和4年創立対高商戦不敗の歴史を誇る．全関東男子中学校排球大会主催．
8.	山岳部	始め山岳スキークラブとして誕生，昭和3年校友会山岳部となる．
9.	野球部	開校と同時に創設，大正14年対高商商戦開始ハマの早慶戦として有名7勝7敗の成績．
10.	弓道部	大正15年創立対商高戦13年連勝の歴史あり．
11.	柔道部	全国高工大会対高商戦等に出場．
12.	剣道部	全国高工大会対高商戦等に出場，全国工場対抗剣道大会主催．
13.	端艇部	大正12年創設100戦100勝の歴史を有する．

準校友会諸団体

1. 航空研究会	4. 園芸クラブ	7. 国防研究会
2. 英語会	5. 射撃クラブ	8. 書道研究会
3. ドイツ語会	6. アルコー会	9. 高工基督教青年会

10. 写真クラブ　13. 緑星会（エスペラント語会）　16. 演劇研究会
11. 朗吟会　14. 馬術クラブ
12. 航研自動車部　15. 映画研究会

他に本校特設4機関として次の4つがあった

1. 大陸会　2. 横浜工業懇話会　3. 十銭会　4. 横浜工業会

なお昭和15年度各部予算は次の通りであった

円

籠球部	809.83	剣道部	751.99	端艇部	914.29	ラグビー部	1,039.68
排球部	636.10	柔道部	701.80	庭球部	872,68	弓道部	606.99
講演部	503.29	競技部	751.99	蹴球部	866.35	山岳部	373.10
総務部	1,278.70	絵画部	300.42	水泳部	971.76	野球部	1,044.22
音楽部	764.16	新聞部	865.47			計	14,200.00

(4) 横浜高等工業学校報国団規則

第1章　名称及目的

第1条　本団ハ横浜高等工業学校報国団ト称ス

第2条　本団ハ国体ノ本義ヲ体シ全団員一致協力心身ノ修練ニ努メ以テ報国ノ誠ヲ效サンコトヲ期ス

第2章　組　織

第3条　本団ハ本校並附設工業教員養成所全職員全生徒ヲ以テ之ヲ組織ス

第4条　本団ニ左ノ6部ヲ置ク

1. 総務部
2. 鍛練部
3. 国防部
4. 文化部
5. 生活部
6. 科学部

第5条　総務部ハ各部ノ事業ノ統制，企画，指導及経理ノ事務ニ当リ且他ノ部ニ属セザル事項ヲ掌ル総務部ニ企画，情報，庶務，会計ノ班ヲ置ク

鍛練部ニ作業，剛健旅行，合宿訓練，剣道，柔道，弓道，相撲，陸上競技，水泳，野球，庭球，ラグビー，蹴球，籠球，排球ノ班ヲ置ク

国防部ニ警防，射撃，馬術，海事，航空，科学兵器ノ班ヲ置ク

文化部ニ講演，映画，音楽，書画ノ班ヲ置ク

生活部ニ保健，共済，購買，寄宿ノ班ヲ置ク

科学部ニ機械工学，応用化学，電気化学，建築学，造船工学，航空工学，大陸ノ班ヲ置ク

第6条　団員ハ総テ集団勤労作業及警防演習ニ参加シ且鍛錬部又ハ国防部ノ一以上ノ班ニ加入スルモノトス

第3章　役　員

第7条　本団ニ左ノ役員ヲ置ク

団長
副団長
部長
班長
理事
幹事

第8条　団長ハ校長之ニ当ル

副団長以下ノ役員ハ団長之ヲ命免ス

副団長，部長，班長，理事ハ職員ヲ以テ之ニ充テ幹事ハ生徒ヲ以テ之ニ充ツ

副団長ハ総務部長ヲ兼ヌルコトヲ得

第9条　役員ノ職務左ノ如シ

団長ハ本団ヲ総理ス

副団長ハ団長ヲ補佐シ団長事故アルトキハ其ノ事務ヲ代理ス

部長ハ団長ノ指揮ヲ承ケ其ノ部ヲ統括シ部務ヲ掌理ス

班長ハ部長ヲ補佐シ班務ヲ掌理ス

理事ハ部ニ所属シ部長又ハ班長ヲ補佐シ部務又ハ班務ニ参画ス

幹事ハ班ニ所属シ班長ヲ補佐シ事務ニ従事ス

第4章　会　議

第10条　団長，副団長，部長及職員タル役員ニシテ団長ノ指名シタルモノ若干名ヲ以テ評議員会ヲ組織ス評議員会ハ団長之ヲ招集ス

第11条　評議員会ハ団長ノ諮問ニ応ジテ各部事業ノ統制企画及指導ニ関スル事項ヲ調査審議ス

第12条　職員タル役員ヲ以テ役員会ヲ組織ス

役員会ハ団長之ヲ招集ス

第13条　役員会ハ団長ノ諮問ニ応ジテ規則ノ改廃予算決算其ノ他本団ニ関スル重要ノ事項ヲ審議ス

第5章　会　　計

第14条　本団ノ経費ハ団費，寄附金其ノ他ノ収入ヲ以テ之ヲ支弁ス

第15条　新入生徒団員ハ入団ノ際入団金トシテ金5円ヲ納入スルモノトス

第16条　団員ノ団費左ノ如シ

1．職員団員ハ団費トシテ毎月月俸ノ120分ノ1又ハ160分ノ1ヲ納入スルモノトス

2．生徒団員ハ団費ハ1ケ年金12円トシ第1学期始金7円，第2学期始金5円ヲ納入スルモノトス

第17条　本団ニ基本金ヲ設ク

基本金ハ入団金，毎年度ノ決算剰余金，寄附金其ノ他ノ収入ヲ以テ之ニ充ツ

基本金ノ使途ハ別ニ之ヲ定ム

第18条　情報，購買，寄宿，機械工学，応用化学，電気化学，建築学，造船工学及航空工学ノ各班ニ関スル経費ハ之ヲ特別会計トス

第19条　本団ノ会計年度ハ毎年4月ニ始マリ翌年3月ニ終ル

(5) 横浜高等工業学校報国団役員（昭和16年度）

団　長　冨山　保

副団長　安川数太郎

評議員　冨山　保　安川数太部　津村　利光
今井　行雄　横山　盛彰　中村　順平
川原　五郎　池田　健　川田　正斉
豊久　達郎　林　豪蔵　竹内　秀雄
木戸　潔　大西　友太　佐藤　房蔵

総務部長　今井　行雄

企画班長　阿部　滋弘　　情報班長　佐藤　正能
庶務班長　鈴木　快市　　会計班長　寺沢　亀吉

理　事　大西　友太(企)　竹内　秀雄(企)
工藤　進(企)　川田　正斉(企)
佐藤　房蔵(本)　池内　本(企)
橋本　重隆(企)　豊田　勝蔵(会)

総務部附　上原　文芳(庶)　今井　圭三(庶)
角谷　啓蔵(会)　鈴木幾太郎(情)
松林みつぎ(庶)　田島キネ子(庶)
井上恵美子(庶)　飯田マサ子(庶)

鍛錬部長　横山　盛彰

作業班長　本間　淳治　剛健旅行班長　加藤　述之
合宿訓練班長　山本　一夫　剣道班長　広津　万里
柔道班長　佐藤　正能　弓道班長　伊藤　三郎
相撲班長　黒川　恒勝　陸上競技班長　石川　房治
水泳班長　吉岡　勲　野球班長　鈴木　正次
代　理　内田　綱紀
庭球班長　津村　利光　ラグビー班長　中島　正巳
蹴球班長　駒井　艦治　籠球班長　森川幾久雄
排球班長　山梨　進一

理　事　遠藤　重郎(剣)　池田　健(柔)
木原　博(野)　川口　正斉(合)
木下　恭二(相)　友成　忠雄(作)
鈴木　勝(蹴)　鈴木　洋二(陸)
藤野　節儀(弓)　荒井　文治(剛)
鶴岡　武(庭)　神戸　蕃(ラ)
井奈　薫次(籠)　内田　綱紀(野)
堂畑　辰蔵(水)　菊地　清二(本)
渡辺　尚道(本)　矢部　庄作(柔)
飯島四男之介(剣)　浦上　栄(弓)
林　参郎(排)　立川　栄(本)

鍛錬部附　松尾　力(陸)　柄沢　徳義(本)

国防部長　豊久　達郎

警防班長　本間　淳治　射撃班長　桜井　房松
代理　本間　淳治
馬術班長　石川　房治　海事班長　木原　博
航空班長　池田　健　科学兵器班長　斎藤　輝治

理　事　藤川由太郎(科)　林豪　蔵(警)
伊藤　三郎(警)　池田　健(航)
木下　恭二(科)　石川　房治(警射)
本間　淳治(馬射)　松橋清三郎(海)
藤野　節儀(警)　荒井　文治(科)
井奈　薫次(科)　内田　綱紀(科)
寺沢　亀吉(本)　上原　文芳(本)
仲川　与作(本)　桜井　房松(警馬)
小林重次郎(警射)

国防部附　上野　三郎(本)　樋口　正義(馬)
高橋　八郎(科)　飯田　一雄(科)

文化部長　林　豪蔵

講演班長　宮島　肇　映画班長　山野　健郎
音楽班長　柴田　浩　書画班長　森川幾久雄

理　事　大西　友太(本)　中村　順平(本)
藤川由太郎(映)　飯沼　義雄(本)

川田　正斉(講)　藤野　節儀(映)
小泉　勝也(映)　神戸　蓁(音)
長尾和肥盾(本)　鈴木　快市(本)
立川　栄(本)　工藤　進(講)
文化部附　関　進(本)

生活部長　竹　内　秀　雄
保健班長　河村　文一　共済班長　川田　正斉
購買班長　今井　圭三　寄宿班長　工藤　進
理　事　安川数太郎(本)　川原　五郎(本)
中村　順平(本)　今井　行雄(本)
横山　盛彰(本)　近藤　政市(本)
津村　利光(本)　石川　房治(保)
渡辺　義勝(保)　本間　淳治(寄)
寺沢　亀吉(本)　菊地　清二(本)
渡辺　尚道(本)
生活部附　佐久田良英(本)　片柳義三郎(本)
上川内マツ(本)　佐藤　志げ(本)

科学部長　木　戸　潔
機械工学班長　岡村　幸雄　応用化学班長　木下　恭二
電気化学班長　飯沼　義雄　建築学班長　伊藤　三郎
造船工学班長　遠藤　重郎　航空工学班長　池田　健

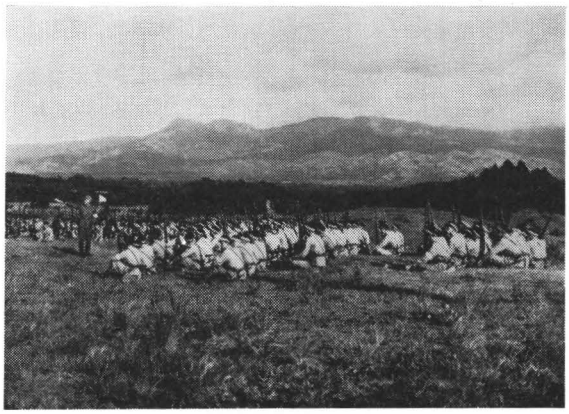
大陸班　友成　忠雄
理　事　安川数太郎(本)　川原　五郎(造)
中村　順平(建)　今井　行雄(応)
横山　盛彰(電)　近藤　政市(航)
津村　利光(機)　池内　本(本)
駒井　艦治(大)　荒井　文治(本)
長尾和肥盾(本)　寺沢　亀吉(本)
鈴木　洋二(応)　鈴木　快市(本)
井奈　薫次(応)　堂畑　辰蔵(建)
科学部附　太田　音矢(本)　山口辰之助(機)
江原　俊雄(機)　日浦要之丞(機)
広田市太郎(機)　武田　常二(機)
大島　政喜(機)　二宮　四郎(機)
菱倉　義治(機)　富山　正雄(応)
松尾　力(応)　寺田　正男(応)
柿沢　晋(電)　藤野　智(電)
前田　正男(電)　元広　友三(建)
今井　泉(造)　深沢左紫朗(造)
西原　渡(造)　根本　禎二(航)
渡辺　辰夫(航)　池田　精一(航)
中村　源次(航)　奥津　利男(航)
松田　益助(航)

45.　15年度査閲　査閲官賀陽宮殿下

15年度教練査閲は12月20日本校南側運動場において，賀陽宮恒憲王殿下を査閲官として行なわれ，校友1,100余名が査閲を受けた．成績きわめて優秀との講評があった．当日，文部省関口実業専門学務局長，松村県知事，鈴木前校長ほか東京府，神奈川県各学校より多数の参列があった．

賀陽宮恒憲王殿下の教練査閲．左　冨山校長

野外演習（昭和15年）



なお軍事教練，野外演習も準戦時下一段と強化された．

46. 紀元2,600年奉祝

〔奉祝運動会〕

紀元2,600年奉祝行事は11月10日より4日間全国的に行なわれたが，本校においては，11日奉祝運動会を挙行した．

〔建築科の芸術行進〕

本校建築科の芸術行進は従来本校開校記念日に行なわれハマの名物となっていたが，事変勃発以来自粛中止となっていた．今回特に紀元2,600年奉祝として久々で復活，堂々帝都へ進出した．

時局柄従来の華麗なものではなく，端正雄渾（こん）を旨とし，時局を象徴した新日本行進ともいうべきもので，先頭は色とりどりの建築の旗を手にした歩兵隊，白ズボン姿の音楽隊，最後が，丈余（じょうよ）に及ぶ日の丸の旗をおし立てた豪華船．この行進は10日横浜市民奉祝行進に参加して市中を行進したが，さらに14日には帝都に進出，数寄屋橋から二重橋前に到り靖国神社まで行進した．

47. 生徒課新設

昭和15年末本校に新たに生徒課が新設された．従来とかく教務課と生徒主事との取扱事項についてはっきりしない点があったが，生徒課新設により担当事項を明らかにし，事務を円滑に処理できることとなった．

初代生徒課長に竹内秀雄生徒主事が任命された．

48. 15年学園人事

津村教授　博士に

機械科津村利光教授は15年1月18日東大工学部より博士号を授与された．津村教授は明治31年生まれ，和歌山県人，大正8年東京高工機械科卒，川崎造船所，東京高工助教授，東京工大付属専門学校教授等を経て，昭和13年9月本校教授として来任，材料強弱学専攻で博士論文は「剪断応力を受ける軸の強さ」についてであった．

なおこれにより本校では博士号を有する教授は6名となった．

紀元2,600年奉祝 建築科の芸術行進

川井助教授 応召

森川正助教授の応召につづいて，機械科川井邦平助教授が15年３月応召した．その壮行会が３学期最後の日である３月９日午前講堂で，冨山校長ほか教職員学生多数出席して行なわれた．

高橋教授辞任　山野教授着任

機械科高橋安人教授は15年４月１日付けで本校を去り，名古屋帝大助教授に転じた．同教授は昭和10年東大機械科卒，鉄道省に勤めたが昭和12年４月望まれて本校講師として来任，13年教授となった．卓越した知識と温厚な人柄で学生間に親しまれていた．

なお同教授の後任として日大専門部工科教授山野健郎が４月１日付けで本校教授として来任した．同教授は昭和６年東大機械科卒で高橋教授の先輩であった．

木下教授着任　草間教授 講師に

15年６月10日付けで木下恭二が本校教授に任ぜられた．同教授は，府立五中，静岡高校を経て東大理学部化学科卒，豊田蓄電装置研究室に勤務すること１年，後航空幹部生となり，除隊後は帝国発明協会で研究に従事，再び応召したが14年解除となり，帝国発明協会にもどり，本校応化教授に任ぜられたもので，陸軍航空中尉であった．

なお教授定員の関係上草間教授は教授を辞任し講師となった．

木下教授　博士に

15年６月応化教授として着任した木下恭二は，15年７月29日「蓄電池に関する物理化学的研究」の論文により東大理学部から理学博士を授与された．

友成助教授　教授に昇進

電気化学科友成忠雄助教授は15年９月３日付けで本校教授に任命された．同教授は本校電化10回卒業で，昭和10年東京工大卒，ただちに本校に着任した．

三原金吾 博士に

本校機械工学科第２期卒業三原金吾は15年３月，工学博士の学位を授与された．新博士は大正13年本校卒，ただちに大阪ガス会社に入社，昭和元年東北大金属工学科に入学，卒業後古河理化学研究所に入社，その後磁気研究に従事．「ニッケル—Fe 系新高導磁率合金に関する実験的研究」の論文が東北大を通ったものであった．これによりさきの電化３期卒の仲田旭，応化１期卒横山稔につぎ３人目の本校卒の博士が誕生したこととなった．

49.　報国団団歌成る

本校報国団団歌は，かねてより一般から募集中のところ，16年２月28日応募作品９編中より，機械科２年田中秀太作を入選と発表した．

本歌詞は特に鈴木前校長をわずらわし，詩壇の大家であり，また本校校歌の作詞者でもある土井晩翠に添削を依頼し，晩翠翁が数カ所手を入れて，なかなかの佳作であると推奨したものである．本歌詞の作曲は文化部長林豪蔵教授をわずらわし同年５月にでき上がった．なお２等は機械１年豊田登であった．

横浜高等工業学校報国団団歌　田中秀太作詞

1．清く明るき一千の　健児挙りて今結ぶ
こゝ弘陵のあさぼらけ　その名も誓ふ尽忠の
横浜高工報国団　我らぞ高工報国団

2．悠久こゝに数千年　栄ある文化受けつぎて
学徒が任務いや重し　金剛堅き意志をもて
勉め励まん学の道　我らぞ高工報国団

3．西に東に海山に　空に鍛へしこの身こそ
君の御楯と誇らまし　若き我らの血を凝らし
世界に示す大和魂　我らぞ高工報国団

4．鍛へ磨きておのがじし　工業技術報国の
誠を効す秋は来ぬ　躍進日本のさきがけは
常に我らの使命なれ　我らぞ高工報国団

5．太平洋の波高く　支那大陸の風荒び
試練の悩み続くとも　我らが固めいや増して
東亜の大地踏みしめん　我らぞ高工報国団

6．やがて世界の草に木に　歓喜の春の訪れん
高き理想の旗印　示すは我ら青年の
意気と力と熱とこそ　我らぞ高工報国団

50.　報国団予算（16年度）

16年3月7日午後教官食堂で報国団役員会を開催，安川副団長司会で16年度予算を審議，満場一致で次の通り決定した．参考のため15年度校友会予算と対比した．

昭和16年度報国団予算

	円
〔総務部〕	2,400
企画班	625
庶務班	80
会計班	20
情報班	1,675
〔鍛錬部〕	10,300
作業班	350
剛健旅行班	500
合宿訓練班	450
剣道班	800
柔道班	750
弓道班	660
相撲班	610
陸上競技班	550
水泳班	900
野球班	960
庭球班	1,160
ラグビー班	750
蹴球班	700
籠球班	610
排球班	550
〔国防部〕	6,940
警防班	300
射撃班	350
馬術班	3,700
海事班	1,140
航空班	550
科学兵器班	950

昭和15年度校友会予算

	円
総務部	1,278.70
——	
——	
——	
新聞部（含購読料）	2,466.24
——	
——	
——	
剣道部	751.99
柔道部	701.80
弓道部	606.99
——	
陸上競技部	751.99
水泳部	971.76
野球部	1,044.22
庭球部	872.68
ラグビー部	1,039.68
蹴球部	866.35
籠球部	809.83
排球部	636.10
——	
——	
——	
端艇部	914.29
——	
——	

〔文化部〕	1,099		
講演班	390	講演部	503.29
映画班	60	——	
音楽班	470	音楽部	470.00
書画班	180	絵画部	300.42
〔生活部〕	440		
保健班	80	——	
共済班	140	——	
寄宿班	220	——	
〔科学部〕	350		
大陸班	350	——	
計	21,520	計	14,200
内訳団費	15,957.80		
基本金	5,562.20		
その他			

51. 第19回卒業式

第19回本校卒業式は横浜工業学校合同で，春雨けぶる16年３月14日午前10時より本校講堂において挙行された．

国歌奉唱，勅語奉読についで新卒業生に冨山校長より卒業証書を授与，冨山校長の式辞，元内務大臣貴族院議員後藤文夫の祝辞ならびに特別講演があり，卒業生総代の答辞，最後に校歌を合唱してなつかしの母校に決別，式を終わった．

本年度卒業生は本科 255 名（内選科13名修業４名）教養20名総計 275 名であった．

校長式辞概略次の通りで，

> まづ卒業生の今日に至った経過を述べ，次に先般の厚生省の使用制限令に言及，「生徒個人の長所能力を参酌，選択して それぞれ 適材適所に 配し，その実力を十分発揮出来るようにした．卒業生は皆応召の心を以て工業報国に一意専心努める覚悟であるから来賓各位の御協力御指導をお願いする」と学校当局の就職についての苦心を述べ，
>
> 「教授諸君にはその専門知識をあげて教育に尽瘁せられ，資材の不足，学生の増加にも拘らず工業報国者の責務を全うせられた事に対し深甚の敬意を表する．卒業生諸子もこの御苦心をよく身に体し，且つ御養育に腐心せられた父兄母や師，先輩の御努力を無にしてはならぬ．今や欧洲の情勢予断を許さず，日米関係は日々に緊迫を告げる現在，第一線技術者の要望は今日より大なる時はない．諸子は教育勅語の精神を体得し，これを実践し，我国工業の他国に比し，些かの遜色もないよう努力せられたい」

と切々たる言葉で最後の訓示を述べた．

52. 16年度合格者発表

昭和16年度本校募集人員は15年末，次のごとく決定した．それによると，造船工学科が40名（前年度30名）のほかは昨年度と変わりがない．ただ入試課目中に国史が加えられていることが時局を反映していた．

以上の通り決定されていたが，16年２月にはいり，文部省では航空工業界の技術者不足にかん

がみ，航空工学科はさらに40名追加募集することとなった．そのため同科に限り願書締切り日を延長した．

〈昭和16年度合格者発表〉

本年度の合格者発表は３月22日午後１時本校において行なわれた．

志願者1,787名合格者420名であった．前年との対比は次の通りである．

			募集人員	応募人員	比　率				募集人員	応募人員	比　率
昭和15年度	機　械	本科	75	343	4.6	昭和16年度	機　械	本	75	448	5.97
		教養	15	88	5.8			教	15	74	4.93
	応　化	本	75	294	3.9		応　化	本	75	260	3.47
		教	8	49	6.1			教	8	33	4.12
	電　化	本	75	280	3.7		電　化	本	75	203	2.71
		教	4	24	6.0			教	4	23	5.75
	建　築	本	75	156	2.1		建築 (1)	本	35	122	3.49
		教	3	14	4.7		建築 (2)	本	40	136	3.40
								教	3	6	2.00
	造　船	本	30	143	4.8		造　船	本	40	172	4.30
	航　空	本	40	210	5.3		航　空	本	80	310	3.88

53.　準戦時下の学生生活

物資が不足し，消費節約が叫ばれ，「ぜいたくは敵だ」といわれたこの準戦時下，学生生活もおいおいと窮屈になってきた．

〔制服は国民服〕

国民服奨励のおりから本校でも昭和16年４月入学する新入生から国民服を制服とすることとなった．４月入学する者で新しく洋服を作る者はなるべくカーキ色乙型の国民服を作るようにとの通達を出した．

このごろになると物資は一段と不足を告げ，16年３月には生活必需物資統制令公布，８月配給統制令，金属回収令公布，12月物資統制令公布，17年２月衣料配給に点数切符制実施となった．したがって制服も文部省へ申請して配給をうけるようになり，これを学校（当校消費組合）が仕立屋に工賃を出して厳重な監督のもとに仕立てさせ，学生に供給することとなった．大体定価50円ぐらいのものを消費組合では35円で売っていた（昭和16年４月消費組合調べ）．

〔住居〕

学校直属のいわゆる寄宿寮は，興風館（第一寮）復興館（第二寮）第三寮（新寮）の三寮あって，あわせて45人ぐらい収容できた．寮費は月２円50銭，食費月20円となっていた．

下宿は物資不足のおりから数が減少してきた．下宿代も値上がりし，大体２食付きで１月28円くらい．

他に同潤会住宅という自治寮があり，30人ぐらいの大世帯で高工クラブと称していた．木造2階建て4軒長屋式になっており，2人1室，入会金1円50銭，家賃6畳3畳で1カ月5円20銭，食費15円となっていた．

〔食堂〕

昭和15年9月の新学期からは食堂でも配給米だけでは足りなくなり朝，夕は米飯だが昼食は代用食（うどん，すいとんなど）となった．また米の7割は外米混入となった．

〔生活刷新〕

15年7月第2次近衛内閣の新体制により，文部省では学生新生活指導方針を確立，本校においても15年9月11日次のような告示を出した．

記

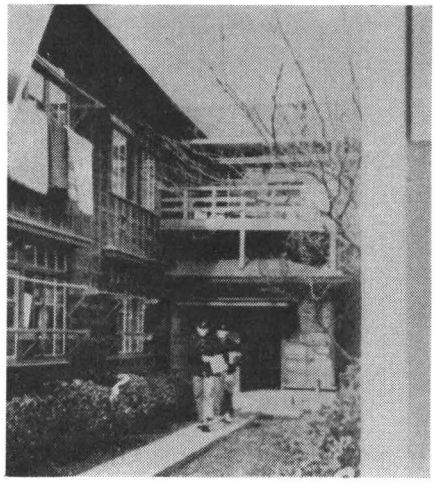
1. 乗物の使用制限　病気その他特別の事情ある者を除き，学校より2キロ以内の通学は徒歩によること
2. 興行場への入場制限　映画その他興行場への入場は下記の場合の他土曜，日曜，祝祭日，休暇等の外入場することを得ず
   (1) 教職員の指導する場合
   (2) 映画にありては文化映画，ニュース映画のみ上映する場合及び文部大臣の推薦映画を上映する場合
3. 遊戯場への入場禁止　麻雀，撞球，半弓及び射的等の遊戯場へ入場することを禁ず
4. 享楽的飲食店への出入禁止　カフェー，バー，その他婦女が客席に侍し，飲食物を供する享楽的飲食店へ入ることを禁ず

54.　相つぐ朗報　建築科出身者当選

さきに忠霊塔設計募集で気を吐いた本校建築科は，さらに国民住居図案一等当選者を出し，横浜高工の名を高くした．

昭和16年6月，住宅営団ならびに東京日日新聞社主催で住居実施図案を広く一般から募集した

ぐみやうじ（昭和15年）



第二寮（昭和15年）

ところ1,000通以上の応募があったが，厚生省と慎重検討の結果，本校建築科昭和4年卒大林組社員菅野滋紀が見事一等当選の栄を獲得した．

55. 第3回興亜青年勤労報国隊に参加

第3回興亜青年勤労報国隊には本校では，昨年同様5名が参加した．同訓練は昨年，一昨年と異なり16年度は海軍が指導することとなり，7月22日より5日間，佐世保鎮守府で準備訓練をうけ，26日佐世保より海王丸で上海着，上海海軍特別陸戦隊その他で訓練，勤労奉仕，見学を行ない8月25日上海出港，28日佐世保着，無事本校に帰った．

本校よりの参加者は次の5名で16年度は指導教官は参加せず丸岡勝美が長となった．

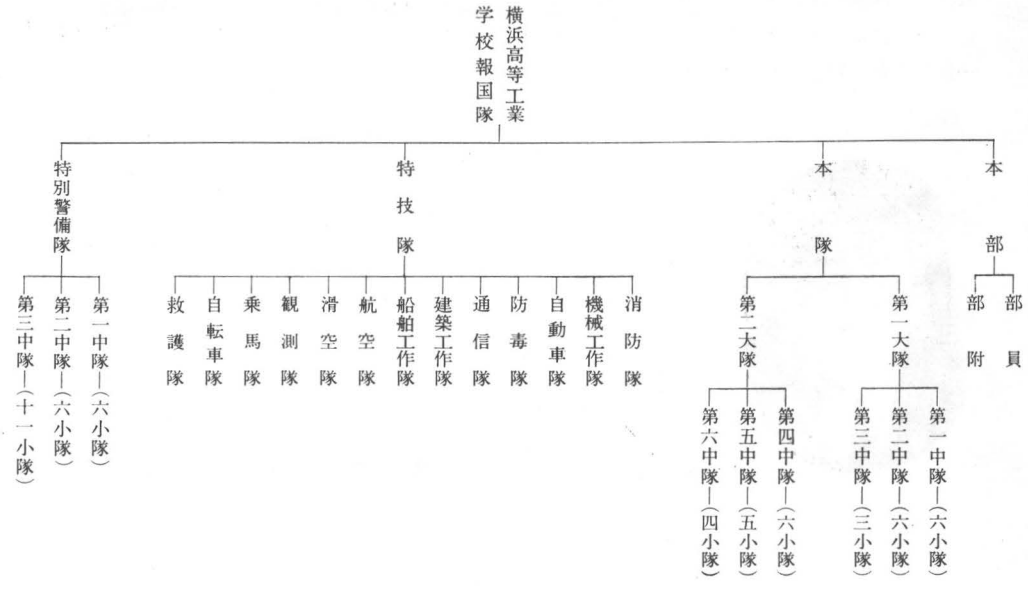
☆ 本校派遣生（長）丸岡勝美（電3），朝日保（建2），春日元枝(航2），済田洋文(造2），山崎弘（応2）．

56. 学校報国団を再編成　学校報国隊生れる

文部省では前述のように昨秋以来各大学，高専，中等学校に報国団を結成せしめ，学徒練成の強化をはかってきたが，内外の情勢いよいよ緊迫してきて，学徒の練成も一段と積極果敢の態勢を必要とするに至った．ここにおいて新たに指揮命令系統を確立した全校編隊の組織を樹立し，臨戦態勢をとることとなり16年8月8日，地方長官，直轄学校長，公私立大学高専校長に対し右に関する訓令を発した．

本校においてもこの訓令に基づき，夏季休暇中にもかかわらず，冨山校長以下各教授参集して，慎重協議の結果，8月26日次のような報国隊要綱を決定した．

横浜高等工業学校報国隊編成図



それによると学校長を隊長とする報国隊の下に本部，本隊，特技隊，特別警備隊の4つがあり，隊長の統制の下，一糸乱れぬ行動をとることができるよう組織された．

右につき冨山校長は訓示を述べているが，そのうちに次のような一節がある．

「今や国の内外情勢は日一日と緊迫し来り，寸時と雖も偸安（とうあん）をゆるさず，学徒の訓練も亦更に徹底強化し，且つ国家的要請ある時は直ちに出動，各種要務に服し，有効敏速なる活動をなし得るよう積極的態勢を整う要ある為，今回当局の命により学校報国団の中に，指揮系統の確立せる全校編隊の組織を樹つることとなりたり．これを学校報国隊となす．」

57. 第21回創立記念式ならびに記念祭

第21回創立記念式は昭和16年11月1日挙行され，2日，3日の両日校内開放のハマの名物記念祭が開催された．

本年は特に時局がら，各科とも臨戦態勢にふさわしい催し物で，応化，電化の日常家庭化学，建築の住宅展，航空の模型飛行機展など，内容充実したものが多かった．

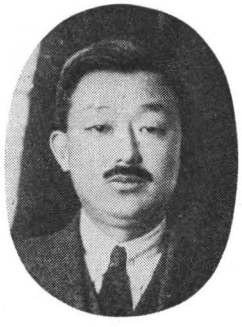
校内開放の2日，3日は日曜，祭日とつづいたため素晴らしい人気で，両日合計2万数千名の入場があり雑踏をきわめた．

58. 遠藤博士　逝く

本邦水力学界の泰斗（たいと）であり，本校機械科生みの親，育ての親であった遠藤政直博士は16年11月10日，病気のため卒然として亡くなった．明治16年盛岡に生れ，同37年東京高工を卒業，大正9年本校創立と同時に本校教授として赴任，昭和12年教授辞任後も講師として子弟育成につとめ，また本邦水力学界に重きをなし，日本機械学会副会長であった．

遠藤博士死去の報に鈴木前校長は次のように語り深く哀悼の意を述べた．

> 遠藤博士は私と共に横浜高工の創立にあたられ，真に因縁の深い間柄である．わが校のために尽された功績は私の讃辞を要しない所である．……仕事に余り熱心であったことが博士の生命を縮めたことと愛惜にたえぬ次第で謹んで哀悼の意を表する．
>
> （高工時報 16年11月19日号より抜粋）



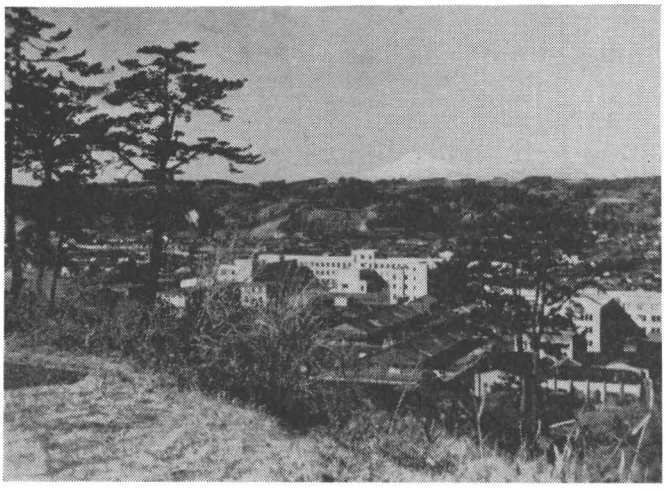
遠藤　正直

59. 大東亜戦争に突入　その日の学園

昭和16年12月８日午前６時「帝国陸海軍は本８日未明，西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」というごく短い大本営発表が行なわれた．この発表はただちに電波に乗って臨時ニュースとして国民に伝えられ，日米交渉の行詰まりで重苦しいふんい気におちいっていた国民に大きな衝撃を与えた．午前11時45分　宣戦の詔書が発せられ，正午全国に放送された．(中央公論社・日本の歴史)

この歴史的な日の学園はどうであったか．横浜高工時報第352号は「正義の御軍遂に立つ　歴史に刻む此の日此の朝」の見出しで次のように伝えている．

「この朝のラジオにより日米の開戦を知った校内は早くも感激の涙にくれる若き熱誠が漲り，午前11時半内庭に集合した全校生徒はいつにない熱烈なる安川教授の訓示を受け，続いてスピーカーを流れるハワイ奇襲の報にその興奮は絶頂に達した．午後ともなれば臨時ニュースの度にラジオの前に蝟集せる校友は去りもやらず，やがて本省より急遽帰校せる校長は決意の程を眉宇にひらめかせて，報国隊長としての決心を語れば，1,300 の情熱は校外に溢れ，遂に伊勢山太神宮へ戦勝祈願大行進となった．先頭颯爽たる隊長以下幹部，職員全校生は，若人の決意を益々ハマ市民に示しつつ薄暮の伊勢佐木町を抜けて伊勢山に到着，神灯ゆらぐ神前に隊長自ら全校を代表して，皇国の戦勝を祈願し殉国の赤心を固く固く誓えば，神域は暮色愈濃く，新聞社の焚くフラッシュのみ厳かにも力強き静寂を映し出す．学徒は学徒の使命を尽す．皇国万歳を心から三唱せる後，わが校歌をふり落つる涙を拭いもせず，高唱すれば，全校生徒は正に感激の坩堝に叩き込まれた．やがて夕靄深く垂れ込めた灯管下の街をわが家に急ぐ高工生の各々の胸に強く刻みつけられた歴史的の此の日は緊張と希望の中に静かに過ぎて行った．」



裏山より校舎を望む（昭和16年）

60. 16年度卒業は12月と決定

昭和16年10月16日，緊迫した国際情勢に対応して画期的な卒業期繰上げの勅令が公布された．すなわち

大学学部等の在学年限又は修業年限の臨時短縮に関する件

この勅令に基づき文部省では10月20日，文部省直轄の大学，専門学校及びこれに準ずる非直轄大学，専門学校等の学生の在学あるいは修業年限を6ヶ月以内短縮することに決定これを公布した．

以上により16年度は3カ月繰上げて12月卒業，17年度は6カ月繰上げて9月卒業と決定した．

61. 第20回卒業式　12月に繰上げ挙行

第20回卒業式は前項で述べたように例年より3カ月早く大東亜戦争突入の年の暮れ昭和16年12月26日午前10時より本校講堂で挙行された．

式は，国歌奉唱，宮城遙拝，黙禱，勅語奉読についで370余名の新卒業生に対し，冨山校長より卒業証書を授与，冨山校長の式辞，文部大臣訓示，知事，市長の祝辞代読の後，前台湾総督小林躋造海軍大将の祝辞ならびに特別講演があり，卒業生総代の答辞，校歌ならびに“海ゆかば”を合唱，式を閉じた．

学校長 式辞

……本校は大正12年第1回卒業生を出してから通計実に3,434名であるが，地の内外を問わず社会の中堅として現在最も重要な工業界に多大の貢献をなしている．今回の卒業生は生徒増員後第2回目であり，国家の要請にこたえて校舎，設備を増加することなしに修学を積み，その質においても将来の我国工業に禍根を残すことなきよう苦心した．

又教授諸君には，学校報国団員として，真摯な工夫を積まれ率先垂範して専門とする部門に顕著なる功績を残され，工業報国者としての責務を全うせられ，ここに350の有為なる工業青年を送り出すことを得た事に対し深甚の敬意を表する．卒業生諸子もこの御苦心を身に体し召集があれば喜んで銃を執り馳せ参ぜねばならない．かかる時にこそ鍛えに鍛えた教練の成果を発揮し，皇運扶翼に邁進すべきである．…….

なおこの時“螢の光”は外国の曲であるとして歌われなかった．このことにつき鈴木前校長は高工時報の一隅で次のように皮肉っている．

「螢の光」の演奏は何処の学校でも卒業式の付きものであった．特にわが高工では，式後来賓が管絃楽の演奏で螢の光をききながら退場するのが何よりも情緒豊かな床しき場面であった．それが外国の恋愛曲であるからとて今年から廃棄せられるようになった．

私はこの年になるまでこれが外国の曲であるということは知らなかった．これを抹殺したことは私に一種の淋しさを感ぜしめる．何と考えても螢の光の歌詞は傑作じゃ，抹殺するのが忍びない．八紘一宇の大国民はそれまで神経過敏にならなくてもよからう．それ程外国のものが気になるならピアノやオルガンを廃止して三味線や太鼓でやるべきであらう．大方の君子以て如何となす．

62. 学年暦　臨時措置

戦時下における学年暦が16年12月次のようにきまった.

1. 授業時間は従来１週42時間であったものを最高45時間とする. この増加時間は土曜日の午後を当てる.
2. 冬休は12月26日より１月７日まで, 春休は３月15日より31日まで（但し入学試験のため他に７日程の休がある）夏休は１週間ないし３週間（学校長に一任）

なおこれらは卒業繰上げによる授業時間不足を補うためのものであった.

63. 盛大な土俵開き

14年報国団が結成された際, はなばなしく名乗りをあげた相撲班は, その後活躍するにも肝心要（かんじんかなめ）の土俵がなく脾肉（ひにく）の嘆をかこっていたが, 部長, 班長らの奔走によりようやく食堂前に堂々たる四本柱の土俵ができ, 16年12月24日, 盛大な土俵開きが行なわれた.

この日相撲協会からは, 佐渡ケ嶽親方が力士多数を連れて来場, 土俵上花を添え, 班員一同熱心に初稽古（けいこ）を行なった.

64. 報国隊強化

12月８日ついに大戦に突入, さきに結成された報国隊の編成では, なお不意の事態発生の場合は即応し得ないうらみがあるので, 「いざ空襲」のための臨戦編成が焦眉（しょうび）の問題として取り上げられ, 学校長を中心に緊急審議の結果12月中旬大略次の通りきまった.

⑴従来の編成は全校生が在校の場合の組織で, 一旦緩急の場合果してその全機能を発揮し得るかどうか, 時機切迫した今日ではむしろ特別警備隊や特技隊のような形式的編成にこだわらず, 一律的行動をとることこそ必要である.

⑵休暇中の編成については, 県からの要請に鑑み　川崎方面に100名, 横須賀に100名, 浦賀に50名, 計250名を, 禁足命令によって備える. 但しこの禁足命令は交替制をとる.

⑶長期戦に備え１週間ごとに各科が防空の責任を持つ.

⑷外部との密接な連絡を保つため毎日職員２名と学生３名が学校に宿直する.

65. 16年学園人事

津田教授　辞任

応用化学科津田幹夫教授は昭和16年３月４日付けをもって半生をささげた本校を去った.

同教授は明治45年東大理学部卒, 大正９年本校設立と同時に鈴木前校長と共に来任, 以来25年の長い間本校のために尽くした. 酸アルカリの権威で, 磊落洒脱（らいらくしゃだつ）, 軽妙な話術で生徒間に親しまれ明朗快活な応化の伝統を築き上げた.

なお昭和14年来神奈川県立工業試験場長も兼ねていたが，今回両方とも辞任し，悠々自適の生活を送ることとなった．

会計課主任大山春翠　去る

本校開校以来，本校の財政をあずかっていた会計課主任大山春翠は16年３月29日をもって本校を去った．

大山事務官は，九大，満鉄鞍山病院事務長を歴任，大正９年１月本校開設に際し前校長鈴木達治の下に参じ，創立事務に当たり，以来今日まで23カ年間本校の大福帳をあずかって，鈴木，冨山両校長をして後顧の憂いなからしめた功績は大きい．本校退任後は，日本揮発油工業横浜研究所へ入所した．

小竹助教授　辞任

応化助教授小竹雄四郎は16年３月31日付けで本校を辞任し，尼崎の日本重化学㈱に転じた．

昭和６年本校卒，工大，阪大助手を歴任し14年本校に転じ，15年助教授に栄進していた．

鈴木京平教授　栄転

応化鈴木京平教授は16年３月31日付けで東京高等工芸学校長に栄転した．

静岡師範卒業後東京高工付属教員養成所に入学，同校卒後同高工に奉職教授となり，昭和２年３月本校教授として来任，そののち前後２回にわたり洋行，皮革工業の権威として本校のために尽すいするところ大なるものがあった．

また大正15年より横浜市立工業専修学校の主事を，また昭和15年よりは同校の校長を兼任した．

鈴木助教授　応召

機械科助教授鈴木正次は16年４月応召した．

昭和３年本校機械科卒，ただちに本校に奉職13年の間後輩の指導に当たっており，温厚篤実な学究であった．

鈴木，森川両助教授　教授に昇進

16年４月応召した鈴木正次（機械）助教授，および森川幾久雄（応化）助教授は16年５月９日付けで教授に任ぜられた．

森川教授は，宮城県出身，昭和４年本校応化卒，卒業後一時日本揮発油工業会社に勤務したが昭和７年本校に来任，昭和15年東工大に内地留学し，ガソリンの酸化防止剤の研究に従事した．その講義は懇切ていねいで学生の信頼厚きものがあった．

工藤教授着任　中野教授転出

生徒主事竹内教授は健康上の理由で16年６月30日付けで生徒主事を辞任，語学教授として専任することとなった．よって同教授の後任として元横専教授工藤進が同日付けで着任，生徒主事となった．

工藤教授は東大法科卒後約10年間横浜専門学校教授兼生徒主事を勤め，その後大陸の新民学校を経て本校生徒主事として来任した．

なお同日付けで中野豊教授（英語）が北海道帝大予科教授として転出した.

広田講師　教授に

航空工学科講師広田守道は16年９月27日付けで教授に任ぜられた.

昭和３年東大工学部卒業後，川西航空機会社を経てドイツに留学，帰朝後日大工学部教授，東京高工講師となり，昭和14年本校講師として着任，以来空気力学を担当，温厚な性格と該博なる専門講義は定評があった.

66.　校友会および報国団訓練部の活躍

別記のように昭和15年末，校友会は解散となり報国団となり，たとえば剣道部が剣道班に野球部は野球班と名前は変わったが，なお対外試合はつづけられていた.

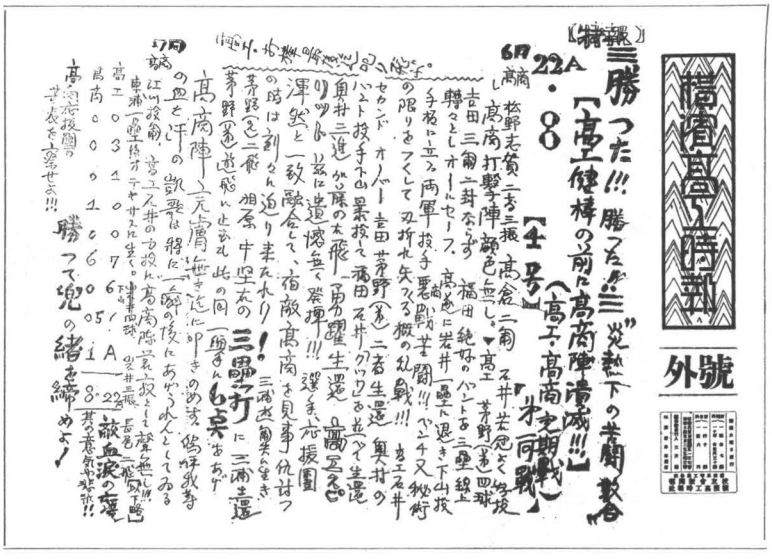
次に昭和13年より16年までの活躍ぶりを記しておく.

＜校友会（15年まで）および報国団鍛錬部（16年）の活躍＞

◇昭和13年

対高商定期戦

野球	６月４日～６日	① 22A—8 勝	② 2—3A 敗	③ 7—3A 勝
庭球	詳細記録なし			３連勝
競技	６月12日	高商グラウンド	42.5点—14.5点 勝	４連勝
柔道	６月18日	高商道場	敗	３連敗
蹴球	６月26日	高商グラウンド	3—2 敗	２連敗
籠球	６月26日	〃　コート	32—33 敗	通算７勝４敗
水上	６月19日	高商プール	敗	２連敗
排球	11月27日	本校グラウンド	2—0 勝	４連勝
弓道	11月30日	元町道場	69中—51中	11連勝



第1回戦号外（昭和13年）

ラクビー　11月12日　高商グラウンド　11—3　2連勝　2勝

その他

弓道部　6月12日　市内専門学校リーグ戦に優勝

（対高商 67中—59中　対Y専 84中—54中　対横専 69中—44中）

競技部　第15回全国高工戦　7月14日，15日　大阪市立運動場　優勝

（①本校 88点　②明専 57.5　③浜松 49　以下略）

庭球部　全国高工大会　7月20～23日　場所不明　決勝戦に神戸高工を 3—2 で破り　優勝

3連勝

籠球部　第4回高工大会　名古屋高工コート　決勝で　名古屋高工を 66—33 で破り　優勝

4連勝

9月11日より開催の関東専門リーグ戦に出場　府立一中及明大コート　商大専門部，大倉高商，日体をストレートで破り初優勝した．

野球部　7月12日より開催の実専野球関東予選で本校　優勝

① 本校 7A—6 横専　② 本校 9A—0 名古屋高工　③ 本校 3A—0 名古屋高商と勝ち，横浜高商と決勝を争い本校 11—2 勝つ　つづいて　7月20日実専大会に2位の高商と共に甲子園に出場したが，緒戦に関西学院高商部に1—2で敗れた．この時僚友横浜高商は松山高商を破って優勝した．

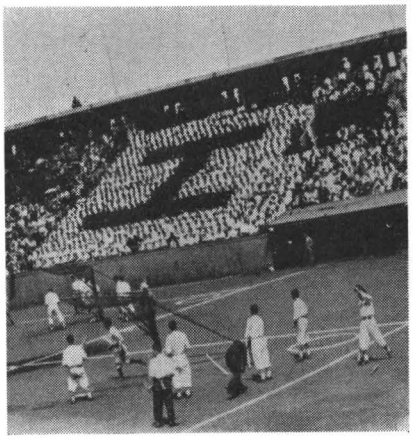
ラクビー部　12月11日より開催の市内5専門リーグ戦に優勝

◇昭和14年

対高商定期戦

昭和14年野球定期戦

昭和15年野球定期戦



野球　（6月2日　6—5,　3　4—15,　4　5—1）公団球場　2連勝　通算7勝6敗となる

庭球　6月　本校コート　6—3　3連勝

競技　6月18日　本校グラウンド　29—28　5連勝

柔道　6月19日　本校道場　引分　3連敗をまぬがれる

蹴球　6月25日　高商グラウンド　3—1 勝　雌伏2年にして勝つ

籠球　6月25日　高商コート　37—19　勝　通算8勝4敗

水上　6月18日　場所不明　45—63　3連敗

排球　11月26日　高商コート　2—0　勝　5連勝

弓道　11月26日　元町道場　76中—66中　勝　12勝連

ラクビー　11月24日　本校グラウンド　11—11　引分

その他

端艇部　第14回　横浜4専門ボートレースは6月25日大岡川で行なわれ，苦難の道2年にして決勝で宿敵Y専を降し久しぶりで優勝

籠球部　7月22〜23日第5回　全国高工大会　浜松高工コート　ついに5連勝をとげる

〔1回戦〕本校 37—10 浜松　（2）本校 43—18 金沢（3）本校 46—20 広島

〔決勝戦〕本校 43—19 福井

弓道部　12月30日　横浜学生弓道個人選手権戦　元町道場　1，2，3位を独占した

◇昭和15年

対高商定期戦

野球　6月1日〜3日　4—7, 4—8　敗　3連勝成らず

庭球　6月　高商コート　6—3　勝　5連勝

競技　6月16日　高商トラック　29—28　勝　6連勝

柔道　6月22日　高商道場　敵3人を残す　敗

蹴球　6月23日　高商グラウンド　7—0 大勝　2連勝

籠球　6月23日　高商コート　38—37　勝　2連勝

水上　6月17日　高商プール　44—64　敗

排球　11月16日　関東学院グラウンド　5—0　勝

弓道　11月23日　元町道場　77中—49中　勝　13 連勝

ラグビー　12月7日　高商グラウンド　31—0　圧勝

その他

弓道部　全国高工大会　7月13日　東京工大道場　次の成績で初優勝

①本校 48中　②名古屋 47中　③浜松 45中　以下略（5選士各16射）

◇昭和16年

対高商定期戦

野球　5月31日～6月1日　横浜公園球場で行なわれたが第1試合　3—11
第2試合　3—5A　で敗

庭球　6月8日　本校コート　7—2　で6連勝

競技　6月15日　本校グラウンド　47—10　で7年連勝

柔道　6月14日　本校道場　不戦2人で　勝

蹴球　6月22日　本校グラウンド　5—0　で3連勝

籠球　6月22日　高商コート　42—38　で3連勝

排球　不明　　敗

弓道　6月14日　元町道場　62—47　勝

ラクビー　11月30日　本校グラウンド　21—0　圧倒的大勝

その他

籠球班　6月1日　6月15日　東京高等商船学校コートで行なわれた関東高専大会に本校優勝　第1回戦　本校 58—28 商船　第2回戦本校 32—92 関東学院　第3回戦　本校 50—38 商大専　決勝戦　本校 56—42 横専

射撃班　第1回市内5専門射撃大会は6月某日引越射場で行なわれたが，次の成績で優勝
①本校 388 点　②専 275　③関 220　④商208　⑤横 190

剣道班　6月22日　開催の市内5専門リーグ戦において本校は6—4で高商を破り，雌伏10年にして初めて勝利に酔った．なおこのリーグ戦では横専に敗れ惜しくも3勝1敗で2位．

応援歌

13年5月応援歌2つを採用した．ただしこれは数年前募集したもの

応援歌　村井喜造作詞　(建8期卒)

1．みなぎる力　　潑溂と
高鳴る血潮　　若き胸
烈!!　烈!!　　相搏つ熱亦力
制覇の剣　　高らかに
かざせよ男の子　　立てよ今

2．あふるゝ正義　　渾然と
湧き立つ息吹　　若き魂
烈!!　烈!!　　相搏つ熱亦力
理想の理　　高らかに
ふるへよ男の子　　立てよ今

応援歌　木暮正夫作詞　(機14期卒)

1．待望一歳　　期は今熟す
自由の弘陵　　その名に誓ひ
何ぞ逡巡　　雌伏をせんや
高鳴る血潮　　不滅の力
覇業燦たり　　あゝ永遠に

2．烈日を浴び　　戦挑む
健児七百　　集る所
蒼空高く　　凱歌ぞ上げん
唸る鉄腕　　不屈の力
覇業燦たり　　あゝ永遠に

第２章　第３節　宣戦より終戦まで（昭和17年～昭和20年）

16年12月８日大東亜戦争* に突入した．開戦後，半年を出でないで東南アジアの要域のすべてが日本の占領下にはいった．日本が南太平洋の制空，制海権を握り軍艦マーチの前奏で，勝った，勝ったの大本営発表が矢つぎ早やに発表された．明治以来国民の気持ちの奥底にやきつけられていた「先進国」米英に対する劣等感は，米英軍に勝ったという相つぐ報道で一気に有頂天の優越感に裏がえしされた．しかし緒戦の相手は装備も悪く兵力も少ない植民地軍が主で，米英軍の主力ではなかった．政府や統帥部が「緒戦の勝利」に自らも酔ってしまい，彼我の戦力の正しい評価を見失い戦線を大きく広げ過ぎることとなった．昭和17年３月３日の大本営政府連絡会議では「長期戦完遂のため従来は守勢的戦略態勢を採るの止むなきを予期せしめたるに反し，今や攻勢的戦略態勢に転じ得るの機運となれり」と判断した（岩波新書・昭和史）．

（注）　昭和16年12月12日の閣議で正式に今次戦争を大東亜戦争と呼ぶことに決定した．いわゆる太平洋戦争を含めて大東亜戦争という名称が用いられた．本稿ではこの名称を用いておく．

昭和17年はこのように攻勢的作戦が成功し，華々しいニュースがもたらされ，国民だれもが大得意となって米英何するものぞの気概がみなぎった．

しかしながら，実際は17年５月の珊瑚海海戦までが限度で，６月５日のミッドウエー海戦で大敗を喫し，彼我のバランスは逆転していたのであるが，軍はこの敗戦を国民にかくし，あい変わらず，はなばなしい勝利の宣伝をつづけていたのである．

わが学園では，17年初頭別項のような校長の訓示があり，緊張した正月を迎えた．

しかしまだまだ学園は余裕たっぷりで，のんびりしたところがあり，このことは別項の学園の春に記されている通りである．

運動競技などもまだ例年の通り行なわれており，野球はこの年全国制覇(は)を遂げた．その他鍛錬部，国防部と名は変わったが，各種運動に本校はめざましい活躍を示し，横浜高工の名を高からしめた．

昭和18年２月わが軍はガダルカナル島を撤退した．各地で敵の反撃ははげしくなってきた．一方，欧州戦線でも２月スターリングラードで独軍はソ連軍に大敗北を喫した．４月18日山本連合艦隊司令長官が戦死した．これは５月21日発表されたが，国民に与えたショックは大きかった．５月末アッツ島で我軍は玉砕した．

９月イタリアが無条件降伏した．このころ南太平洋における制空制海権は完全に敵のものとな

り各地で苦戦があいついだ．９月30日御前会議で，千島，小笠原，内南洋，西部ニューギニア，スンダ，ビルマを結ぶ地域内を絶対確保すべき要域ときめ，「絶対国防圏」と称した（中央公論社・日本の歴史）．こうして戦線を縮小したが，この線も間もなく突破されるに至った．国内では言論の統制が極度にきびしさを増してきた．10月21日，かつて本校で講演し若き学徒を魅了した中野正剛が，倒閣容疑で逮捕され26日自殺を遂げた．物資は極度に不足し，配給制も満足に行なわれず，闇(やみ)が横行しだした．９月文科系学生の徴兵延期が停止され，10月21日，神宮外苑から多数の学徒が出陣した．

わが学園では18年１月元日，冨山校長は別項のごとく，技術学徒としての重大なる使命について述べた．

３月入学試験，本校はじまって以来の難関となった．試験問題はこの年文部省作成の全国同一問題となった．特にこの年の問題を別項に載せておいた．

入学式においては学校長は学問と同時に練成の必要を説き，軍事教練の強化を説いた．

前年まで夏季行なわれた各種体育行事は今年は中止となり，休暇を返上して勤労奉仕が行なわれた．11月恒例のハマの名物記念祭も文部省の通達で中止となった．

学内からは多数の生徒が学業半ばで入営し，またある者は海軍予備学生として卒業を待たずに入隊した．教職員にとっても学生にとっても，まことにあわただしい緊張の連続の年であった．

19年にはいるとドイツの敗勢は明らかとなった．６月にはソ連軍はドイツ軍をほとんど国境線外におしもどした．

日本軍の戦線も全面的瓦(が)解へ急速に進んでいった．２月マーシャル群島に米軍上陸，わが守備隊は玉砕した．６月「絶対国防圏」の要域のあるマリアナ群島のサイパン，テニアン島に米軍上陸，サイパンの守備隊は在留邦人もろとも玉砕した．７月18日東条内閣はついに総辞職した．

年末に至ると制空権を全く失った無抵抗の日本本土に対する大規模な空襲がはじまった．

学園では学校長の年頭の辞，１月８日の大詔奉戴日，紀元節式典等毎年の通りの行事が行なわれたが，緊迫した空気が立ちこめ，いよいよ本土決戦の気構えが横溢（いつ）してきた．物資不足はついに学校新聞の雄横浜高工時報の廃刊となった．紀元節に出た一杯のしるこに舌つづみを打ったことも今となっては悲しい思い出の一つであろう．

勤労奉仕，軍事教練，練成と学業の日も不足勝ちであった．土曜日もいっぱいつまった時間割(別項)で，学校のある日は勉学にいそしんだ．教授は生徒と同一行動をとって勤労奉仕にも出，工場で働いた残り時間に授業を行なった．その間，軍からの委託研究もやらねばならず教官の苦労はなみたいていではなかった．３月からは向こう１年間日曜日を返上して登校した．資材不足をおして新食堂は完成したが，配給米は不足するし維持してゆくのが困難であった．

４月，なつかしい横浜高等工業学校の名が消えて，横浜工業専門学校となった．また科の名前も変わった．

５月20日ついに神奈川県下に突如警戒警報が発せられ戦争がひしひしと身近にせまってきた．

９月20日，第23回卒業式が挙行された．勤労動員されていた３年生は各地より久々に学校へ集ま

り，晴れの卒業式に列した．名教自然碑の前で校歌と応援歌をのどもさけよと歌って，再び工場へともどって行った．11月１日開校記念日，この日初めて空襲警報が発せられた．11月末ごろから空襲は本格化してきた．こうして空襲に明け暮れて学園の19年は終わった．

昭和20年２月19日米軍硫黄島に上陸，３月27日ついに失陥，４月１日沖縄に上陸，４月５日，小磯内閣総辞職，鈴木貫太郎大将に大命が降下した．このころになってもまだ神風来を信じていた一部の国民は，一縷(る)の望みを抱いて天祐(ゆう)を待ち望んでいた．

たとえば，４月８日大詔奉戴日の大本営発表は，撃沈34隻，敵に多大の損害を与えたというもので，久しぶりに聞く軍艦マーチの前奏に国民は内閣一新のこともあり，幾分明朗な気分を取り返したのであった．しかしこの景気のよい報道も真実は，「鈴木内閣の成立前後，戦局は悪化の一途をたどっていた．沖縄に上陸した米軍に対して日本海軍の総力を結集した戦艦大和を中心とする海上特攻隊も４月７日米軍機300機の集中攻撃を受け，主力を失っていた（中央公論社・日本の歴史）」のであった．

５月７日，ドイツ無条件降伏，６月23日沖縄守備隊全滅，８月６日広島に原爆投下，８月９日ソ連参戦，同じく同日長崎に原爆投下，そしてついに８月15日の終戦となった．

学園では，警報下に昭和20年の元日を迎え，例年の通り拝賀式を挙行した．毎日毎日が空襲警報に明け暮れた．２月末防空頭巾とゲートルで身を固めた受験生で入学試験が行なわれた．４月２日入学式が挙行された．特筆すべきことは４月１日付けで電気通信科が増設されたことである．

３月18日，政府は，決戦教育措置要項を閣議で決定，20年４月１日から翌年３月31日まで１年間原則として授業を停止することとなった．

当校では，しかし，４月１日以降も何とか授業をつづけ，貴重な時間を学徒としての本分である勉学に当てた．

学校はしばしば，空襲下におかれ，校舎上を敵機が飛び去ったこともあった．５月29日の空襲が最もはげしく，爆撃寸前にまでさらされたが，幸いにまぬがれて，焼失することなく終戦を迎えることができたことは，せめてものしあわせであった．

終戦後の混乱は，日本全体がそうであったので，当学園も例外ではあり得なかった．終戦後しばらくは日本人全部がぼう然自失，その進むべき道がわからなかった．

９月占領軍が上陸，当校舎接収問題が起こったが，冨山校長の努力で沙汰(さた)やみとなったことは，その後の当校再建に大きな礎となった．

1.　17年の新春を迎える

昭和17年元日，国民は緊張した新年を迎えた．

本校では１月１日，午前８時40分より新年拝賀式を挙行した．

すでに昨秋卒業した３年生のいない学園へ在浜の２年生，１年生たちは，はりきって出校してきた．式は教職員，これら一部学生ら参列のもとにおごそかに行なわれた．

冨山校長は大戦初の新年に際し，大要次のように語った．

大御稜威の下，陸海将兵の忠勇奮戦と，一億国民の熱誠凝ってこの１ヶ月間における戦史上かつて類例を見ざる大戦果を挙げ，米英の主力艦を屠り，香港，マニラ等敵東亜侵略の拠点を陥れ，南西太平洋の制海制空権を収め，彼の金城湯池を誇るシンガポールも我皇軍指呼の裡に圧縮して，その攻略も遠からざるを思はしめつつここに皇紀2602年の新年を迎へたり．……今後戦争の進展に伴ひ，国民生活の逼迫は更に増加すべきも，斯くの如き皇国大使命遂行の為，当然甘受すべきものにして，一面物資の節約に努むると共に，他面増産計画を図り，国内自足経済の確定を期せざるべからず．これ産業技術者の一層重大なる任務なり．

諸君の学窓生活も，明日におけるその責務を全うするため万全の準備を要望する所以のものなり．……諸君の将来は我帝国の前途と共に洋々たるものあり．諸君一日の心身鍛練と研学は直ちに皇運扶翼の大業に参ずるの準備なるを思ひ，充実せる学窓生活を送りて遺憾なきを期せられたし．昭和17年新春を迎ふるに当り玆に諸君の決意を促して已まず．

2.　第１回大詔奉戴日

16年12月８日米英に戦を宣した．この日を記念して毎月８日を大詔奉戴日とし，国民の決意を新たにする日と決定した．

昭和17年１月８日，この第１回大詔奉戴日を迎え，本校においても午前９時，中庭に冨山校長以下全教職員生徒が集合し式典を行なった．

式後報国隊第１大隊，第２大隊の順で隊伍堂々日野に行軍，春日神社にもうで戦勝を祈願し正午帰校した．

3.　報国団予算成る

17年度本校報国団予算は２月５，６日の両日教官食堂で各班の幹事が出席して，約10時間熱心に討議，検討した結果予算案を決定，さらに評議員会にかけ最後決定をした．

昭和17年度報国団予算

	円
〔総務部〕	904.00
企画班	644.00
庶務班	250.00
会計班	10.00
情報班	特別会計
〔鍛錬部〕	7,294.59
作業班	120.00
剛健旅行班	514.90
合宿訓練班	295.00
剣道班	800.00
柔道班	389.55
弓道班	38.00
相撲班	117.50
陸上競技班	647.40
水泳班	335.00
野球班	1,000.00
庭球班	893.50
ラグビー班	853.74
蹴球班	650.00
籠球班	100.00
排球班	540.00
〔国防部〕	6,027.21
警防班	10.00
射撃班	235.00
馬術班	3,742.30
海事班	948.91
航空班	510.00
科学兵器班	581.00
〔文化部〕	1,315.00
講演班	410.00
映画班	20.00
音楽班	635.00
書画班	250.00
〔生活部〕	480.00

保健班	50.00	〔科学部〕	511.20
共済班	160.00	大陸班	511.20
寄宿班	270.00	計	21,131.00

4. 大東亜学徒大会

17年2月11日，紀元節を卜(ぼく)し，午前10時より横浜公園音楽堂で本校，高商，Y専，関学，横専の横浜5専門学校2,000名の学徒が参集し「大東亜学徒大会」を開いた．

式は国民儀礼による宮城遙拝，戦没将士および戦線の勇士に感謝の黙とうを捧げた後，田尻高商校長の「宣戦の大詔」奉読，「君が代」「海行かば」の斉唱，大宅海軍大佐の「大東亜戦争の意義」と題する講演があった．つづいて各校代表の演説あり，学生の本分完遂の決議文を朗読，冨山本校校長の発声で万歳3唱で式を終わり，ブラスバンドを先頭に全員市内を行進，伊勢山皇太神宮に参拝，午後1時散会した．

5. 第1次戦捷慶祝日　ハマの人気を奪う高工行進

昭和17年2月18日，戦捷(しょう)第1次祝賀の日，横浜では山下公園で5専門合同分列式が挙行された．

本校では当日午前7時50分，全員校庭に参集宮城遙拝，出征将兵の武運長久祈願の黙とう，国歌奉唱，勅語奉読の後祝大捷の巨旗を真っ先に，建築科の芸術行進ブラスバンド，騎馬隊，冨山校長はじめ各教授，弘陵健児1,000名のえんえんたる行列は，通町，宮本町，吉野町，伊勢佐木町とハマ市内を練って会場である山下公園に着いた．5専門学校合同大分列式後，再び大行列は伊勢佐木町から伊勢山皇太神宮に至り，聖戦完遂を祈願し午後3時散会した．

6. 教練査閲　成績優秀

延期に延期を重ねていた16年度教練査閲は2月25日，査閲官松本少将の下に施行された．前年度査閲以来，教官の更迭および出征相つぐこと6名に及び，その成果が危ぶまれていた．また一方当日は雨雪泥濘(でいねい)のため，講堂で査閲を実施するという重なる悪条件にもかかわらず「成績優秀」との講評を受け，弘陵健児の面目を発揮した．

7. 学生5訓

昭和16年12月24日，東京都下大学高専学生主事会議において学生5訓が制定された．

戦時学徒自戒5訓

1. 学業研鑽に精励し，国家の負荷に応ふべし
2. 質実剛健の風を養ひ，気節を尚ぶべし
3. 規律節制を重んじ，礼義を正しくすべし
4. 感謝奉公の念を持し，進んで勤労に服すべし

5. 保健摂生に留意し，勉めて身体の練磨に励むべし

右の条々常に陸海空に奮戦力闘する将兵を思ひ，率先躬行以て之を貫くべし

この学生５訓は文部省通達となった．本校では，17年２月14日午後１時から大教室で，工藤生徒主事首唱のもとに，各科代表３名ずつ約40名が集まって討論会を開催，この趣旨に自発的に沿うこととなり午後５時散会した．

8. 入学志願者願書受付け締切る

昭和17年度願書受付けは２月２日より開始，15日締切ったが，志願者は予想外に少なかった．この原因はいろいろあろうが，実専より高校希望者が多いのは兵役関係にあるのではないかともいわれた．

		募集人員	応募人員	比　率
機　械	本　科	75	313	4.17
	教　養	30	63	2.10
応　化	本	75	232	3.09
	教	8	32	4.00
電　化	本	75	188	2.50
	教	4	10	2.50
建　築	本	75	214	2.85
	教	3	15	5.00
造　船	本	40	260	6.50
航　空	本	80	424	5.30

以上のように受験生1,600余名に対する入試は，３月１日から５日間にわたり行なわれ，３月６日発表された．

9. そのころの授業料など

昭和17年ごろの授業料その他は次の通りであった．

第１学期分　計46円

内訳　1. 授業料　30円
　　1. 報国団費　7円
　　1. 報国団入団費　5円
　　1. 高工時報購読料　1円
　　1. 消費組合加入金　3円

第２学期　計　35円50銭

第３学期　計　20円

10. 入学式

入学式は昭和17年４月１日午後１時より講堂で行なわれた．国歌奉唱，宮城遙拝，黙とうの後，学校長の訓示，配属将校より学校教練は軍事教練である，教練は行(ぎょう)であると強調，注意するところがあった．学校長訓示の大略次の通り．

「今日皇軍が不敗の態勢を築いたのは独り皇軍が武力において優れていたのみでなく，工業技術家の不眠不休の努力とが渾然一体となった賜である．工業技術家の奮起は極めて重要な事であり，技術に一生を託して邁進するのは男子の本懐である．在学３年間諸君は知徳体の向上を図り，而して教育勅語を文字通り実践して３年後には負荷の大任を全くするだけの人になって，卒業せ

られん事を熱望して止まぬ次第である.」

11. 本校報国隊に初の出動命令下る

国民勤労報国協力令に基づく報国隊出動命令が17年3月12日付けで本校報国隊に下された. これは当校にとっての初めての出動命令であった. 春休みを利用しての勤労奉仕で3月23日応化を最初として機, 電, 建, 造, 航の順で追浜の海軍航空技術廠(しょう)へ各科教授を隊長として出動, 3月31日無事使命を達成して終了した.

12. 本校の台所 (昭和17年度)

昭和18年3月の横浜高工時報に「会計課の一隅より」として, 会計課書記渡辺尚達が本校の昭和17年度の歳入, 歳出についてわかりやすく解説しているので, ここに抄出する.

学校の大蔵省である会計課の職員として, 諸君の大多数が殆ど無関心と思はれる経理の一端をお話し申しあげる.

本校は学校長が機会あるごとに申されているようにその設備(広い意味の)に於ても, 職員組織に於ても, 全国20有5の高等工業学校中屈指であるばかりでなく, 予算方面に於ても一, 二を争ふ程である. 17年度の決算に就いて見るに, 本校本来の経費のみに於ても, 即ち一般会計より支払委任に係る震災復旧諸費並に科学研究費等を除いても, 経常部, 臨時部を合せて収入, 支出ともに55～56万円余の巨額に達するのである.

これを歳入予算の方面から見ると, 右の内政府支出金即ち国家から文部省を通して来る補助金は46万4,000余円に達し, その残りは授業料, 検定料, 維持資金収入等より成り立っている. 右諸収入中最大の授業料1ヶ年の全収入が僅か8万7,000余円に過ぎないのに比して如何に国家が横浜高工という一官立の直轄専門学校に対して多額の費用を支出し, 諸君らの教育に資しているかが, お判りの事と思はれる. 今仮りに右政府支出金を生徒1人に割り当ててみると, 約350円余の多額となる. これを私立学校の経営の主幹が, 授業料や検定料等によって賄っているのと比較すると雲泥の差であることが頷かれる.

次に支出方面であるが, 支出科目は俸給費(官吏並に講師の俸給約18万円余)と校館費(21万円余)及び養成費(13万円余)等に大別される. 俸給以外の分は嘱託以下の給料, 庁費(備品, 消耗品等)実験費, 維持費, 修繕費, 旅費等に細別される.

これを実際に運営するに当っては常に憲法の会計の条章から始まり……多数の法律, 勅令, 訓令等に拘束せられ, 且つ会計検査院という独立の官庁に厳重監督されている. ……

13. そのころの学園の春

横浜工業会誌17巻2号に「学園の春」と題して巻頭に次の文章が載っている. そのころの学園風景として紹介する. また17巻3号に煙洲先生の七言絶句が出ている. 戦時下桜咲く学園の思い出である. このころはまだ戦局の好進転によって学園はきびしい中にも, のんびりしたところがあった. "学園の春"もこのごろまでで翌18年には学生はもう春をおう歌することはできなかった.

学園の春

校庭に, 大岡川添ひに, 春の気を胸いっぱいに感じさせた桜花も, 何時しか若葉に包まれた. 白堊の殿堂, 学園は周辺の山との緑に覆はれて, くっきりとその威容を輝かせてゐる.

本館（白堊の殿堂）

朝の新鮮なる空気に弘陵の香も高い校門を入れば，正面に一段と高く「名教自然」の碑は燦然と輝き，20有余年の弘陵精神は無言の中に教へられ，此為に筆舌に尽し難き誇を感ずる．

昼餉の一時，校庭のクローバーには，日の光を一面に受けて，其処彼処に学徒の喜々とした姿，昨日をそして明日を，思ひ出に，希望に，語りは尽きない．

何処からか，弘陵緑し……の応援歌が風に流れて来る．ああ，あの熱と意気と力の感激，対高商定期野球戦間近しの感をいだかせる．

勉学の疲れもいとわず，尚身心の練磨に余念がない．あるいはバットに，あるいはラケットに心地よい響は春風と共に弘陵にこだまし，夕闇迫るまで続く．

弘陵健児はすくすくとして草木の新芽の如く延びる．　　—鶴岡生—

校庭桜花　煙洲

名教碑辺万蕚春　櫻花独有可相親　徜徉不去君休訝　二十年前種樹人

14. 敵機本土に初空襲

戦時下，のどかな春をうたっていた学園に，突如空襲警報が発せられ夢破られた感があった．すなわち，17年4月18日午後零時30分ごろ，わが警戒網をぬって敵機が初めて京浜地区上空に侵入し，数カ所に爆弾を落とした．

本校では空襲警報発令と同時に，大木教官指揮のもとに警備態勢を敷いた．

なお19日午前2時および午後1時にも警報が発せられた．

15. 躍進する本校科学研究陣

(1)　3教授に文部省奨励金

文部省の17年度奨励金は本校では次の3教授に交付された．

1.	工藤生徒主事兼教授　中華民国不動産法制の研究	500 円
1.	友成教授　マグネシウム合金の防蝕渡金の研究	700 円
1.	松尾助教授　各種物質の水蒸気吸着について	300 円

(2) 22研究に文部省科学研究費交付

また文部省では別に自然科学研究を助長するため研究費を各学校へ交付したが，本校では次の22研究が受けた．

1.	森川助教授　揮発油酸化防止に関する研究	650 円
1.	河村教授　オゾニドに関する研究	1,050 円
1.	安川教授，山梨教授，渡辺講師　確率曲線に関する研究	950 円
1.	斎藤教授　ラッピング仕上に関する研究	1,050 円
1.	吉岡助教授　波浪中に於ける船舶の運動に関する研究	1,350 円
1.	木原教授，池田教授，松橋助教授　薄板構造に於ける応力集中問題	1,600 円
1.	中島教授　カーボニル基を有する化合体の光化学還元反応	850 円
1.	加藤教授　X線による銅アマルガムの研究	500 円
1.	木戸教授　メタンガスによる酸化鉄の還元	1,050 円
1.	阿部教授　シネオール酸の研究	650 円
1.	木原教授，松橋助教授　過大繰返応力を時々受ける構造材の疲労の研究	1,050 円
1.	近藤教授，鈴木助教授　自由飛行風洞による安定操縦の研究	1,600 円
1.	柴田教授　高圧縮過給機の研究	1,050 円
1.	木原教授，池田教授，松橋助教授　強化木材の強度に関する研究	1,050 円
1.	木下教授　アルカリ蓄電池用酸化銀陽極板の充放電に伴う重量変化	600 円
1.	山下講師　ラマン効果と有機化合の反応性	950 円
1.	横山教授，鶴岡助教授　ケートン過酸化物の合成並にその特性について	1,050 円
1.	友成教授　高硬度材の研究	750 円
1.	友成教授他１名　アルミン酸曹達溶液の加水分解恒数の測定	900 円
1.	近藤，鈴木助教授　水上機模型による離着水性能及び水上旋回性能の研究	1,050 円
1.	柴田教授，尾上嘱託　航空用高速２サイクルガソリン機関の研究	1,050 円
1.	広津教授他１名　回転翼飛行機の研究	1,300 円

16. 図書課に課長を置く

オーナーシステムという本校独自の制度のもとで発展してきた本校図書課は，昭和17年ごろには蔵書10万冊（約25万円）を越え，全国専門学校随一と称された．17年６月１日付けで図書課の拡充のため新たに課長を置き，学校長の指示により同課の事務を掌握させ，専門，文化の両分野を包含する名実共に完備した本校図書館の運営に当たることとなった．なお別に評議員を置き書籍購入，読書調査その他の企画に参与させることとなった．

初代課長に大西友太教授，評議員に佐藤正能，竹内秀雄，工藤進，川田正斉各教授，および橋本重隆講師が任命された．

17. 野球班　全国制覇す

本校野球班は8月3日より開かれた第7回全国実業専門学校関東予選大会に出場，初日高千穂高商を8－0で，2回戦名古屋高商を11A—2で，準決勝横専を4－1で破り，5日目の決勝戦に横浜高商を7－0で圧倒的に破り，5月行なわれた定期戦の復しゅうを遂げ，ついに全関東を制覇(は)した．

これに勢いを得た本校野球班は8月9日より横浜公園野球場で開かれた全国大会に出場，第1回は東北学院を4－1で一蹴(しゅう)，準決勝に東北の雄桐生高工を10—0と零敗に打ちとり，決勝戦に再び好敵手横浜高商と対決した．両軍は本年4回戦って2対2の成績であり，全国制覇と伝統をかねた一戦とて，ハマの両軍ファンは早くより球場につめかけ盛んな声援をおくった．試合は9回4－4でついに延長となり，熱戦14回裏本校感激の1点をあげて5A—4で勝ち，ここに全国制覇を遂げ本校野球史の一ページを飾った．野球班としては以後終戦まで対外試合はなく，まさに最後の花を咲かせたというべきであった．

18. 卒業生送別各科対抗体育大会　機械科優勝

卒業生送別各科対抗体育大会は17年9月11日午前8時より本校校庭で開催された．（17年度は半年くり上げ9月末卒業，次項に詳しい）

片雲青空に浮かぶ秋晴れのこの日，学校長はじめ全員校庭に集合，国民儀礼の後，冨山校長立って，「本日この晴天の下職員生徒一同が相会合して新卒業生の行を盛んならしむるために本大会を開催することとなったが，今回卒業の栄を担う3年生諸君は2年有半，青少年学徒に賜りたる勅語の御主旨を奉戴し孜々とし精進努力を重ね，3ケ年の修業年限を半年短縮し，世の要望に応へつつ雄々しく旅立つこととなった．この非常の時局に新卒業生を光輝ある皇軍の一員として国防の第一線に，或は現下最も重要なる工業部門に，それぞれ身を挺して国難打開に邁進するのであるが，2年有半に亘る学校生活中で得た尊い体験を以て今後直面する苦難に有らん限りの力と熱を以て勉励突進して戴きたい」と卒業生に激励の辞を述べ，終わって競技に移った．

競技種目は100米，200米競走，砲丸投げ，銃剣術，障害物競走，パン食競走等で機械科が優勝，午後5時終了した．各科の得点数次の通り，

機械　112点，応化　64点，電化　82点，建築　28点，造船　15点，航空　28点．

19. 第21回卒業式

第21回卒業式は半年くりあげて，昭和17年9月21日午後2時より，新装成った講堂で挙行された．国民儀礼の後冨山校長より393名の卒業生に卒業証書を授与，ついで同じく同校長の式辞があり文部大臣，県知事，市長の祝辞，卒業生総代答辞の後，元商工大臣伍堂卓雄の講演があった．終わって校歌合唱，万歳三唱して式を閉じた．

学校長　告辞

9月21日，第21回卒業式を挙行し爰に393の名実共に精鋭なる工業戦士幹部を世に送り出し得ることは，本校の最も光栄，且欣幸とする処なり，諸君は，支那事変第4年即ち昭和15年春，多数の志願者中より，選抜せられて本校に入学，爾来2年有半，国家未曾有の多端なる秋，玆に工業学徒としての修練修学を一先づ終へ，今将に校門を去らんとす，盖し感慨無量なるものありと察せられる．

本校過去数年来，殆ど全学科を通じて，生徒数を倍加増員せるも，施設及び教官数は必ずしもこれに応ずる丈の増加を為さず，諸君の指導，教育には幾多の不便障害を感じたり，又殊に国家が諸君に要望する甚だ急なるものありたる為，臨時措置として修業年限6ヶ月の短縮をなすの余儀なきに至り，即ち明年3月なるを繰り上げて今回卒業せしむる事となり，更に修学上一層の困難を加へたるも，挙校全員克く時局下各責務の愈々重きを痛感し，奮励進んで各種の困難克服に努めたり．即ち授業時間の延長，土曜半休の廃止，長期休暇の短縮等により，出き得る限りその足らざるを補ひ，特に生徒諸君は全精力を傾注して，修学と心身鍛練に励み，共に逞しき力を得て，優に期待に応へ得るに足る準備根底が成りたると確信す．

今や御稜威の下，皇軍将兵の敢闘により，大東亜戦開始以来，僅か9ヶ月にして，南方広大なる地域は，わが制圧下に帰し，支那大陸に於けるものと共に，其処に蔵せらるる尨大なる天然資源，天産原料は挙げて，その開発利用をわが大和民族の手に委ねんとしつつあり，而してその大部分は，直接間接工業技術家の今後に於ける活動の分野に属すると称しても敢へて過言ならず．実に我々の先輩が夢に描きたる，自由濶達の天地が事実，今正に眼前に展開しつつあるものにして，この前途多幸多望の御代に，青年として生を享け，然も工業に志したる諸君に対し転々羨望の情を禁じ得ざるものあり．

工業力が国家総力戦の最も重要なる一根幹をなすは論を俟たざる処なるが，従来の欧米依存の工業技術より離脱し，今後我が国独自の科学技術確立の要，洵に急なるものあり．此により常に敵に優る最精鋭の兵器の製作は固より，その他一般軍需及び民需の供給，確保を期し，以て長期戦に最後の勝を制せざるべからず．而して今後に於けるその目的達成は諸君工業青年の奮起に俟つもの最も多し．諸君は卒業後，直ちに軍務に就くと，産業第一戦に就くとを問はず，自奮自励，この光栄ある大任を全うするに最善の努力をせられん事を期待てし已まぬ．（高工時報 366 号による）

20.　待望の講堂成る

昭和17年初め着工した講堂は，わずかに数カ月で資材難，労力難を克服して，昭和17年9月見事に完成し，辛うじて9月21日の卒業式に間にあうことができた．関係者の努力大なるものがあった．今まで本館に対して適当な講堂を持たなかった学校および校友にとって一大福音であった．

この新講堂は校門をはいるとすぐ左側に見え瓦ぶき，クリーム色のざん新な建物であった．

雪景色の講堂
（切妻面の黒い所は迷彩）

21. 開校22周年記念式および記念祭

開校22周年記念式典は恒例の通り，11月１日本校講堂で戦時下いと厳粛に挙行された．つづいて11月２，３の両日，戦時下における校内開放記念祭が開催された．両日とも晴天に恵まれ，どっと押しよせた人々は引きも切らず，ハマの名物の名に恥じぬものがあった．各科のテーマ次の通り．

◇機械	兵器と機械	◇情報班	新聞のできるまで
◇応化	国防と化学	◇大陸班	世界の現況と東亜共栄圏の資源分布，歴史と民族性
◇建築１組	戦争と城廓		
◇〃 2	南方の建築	◇音楽班	音楽会
◇造船	戦争と船	◇物理教室	物理実験
◇航空	飛行機の発達史と常識	◇数学教室	数学問題

22. 皇居前に戦勝祈願　学校から強行軍

昭和17年12月７日夜８時，職員生徒一同は，制服，制帽，巻きゲートルの武装に身をかため学校内庭に集合，冨山校長の力強いあいさつの後，渡辺教官の行軍の注意あって午後９時一同校門を出発，寒冷の暗夜をついて36キロの強行軍を決行した．

通町，伊勢佐木町，桜木町駅を経て市電に沿って横浜駅に達し，さらに凍(い)てついた国道をわれらが部隊はしずしずとして進んだ．寒気はなはだしく身を襲う道を生麦，鶴見，川崎と過ぎ六郷の大橋を渡り，多摩川を通れば，ようやく東京にはいる．蒲田，品川，芝増上寺前を経るころ薄明となり，田村町を過ぎ，朝日が大内山に照り初めた午前６時ごろ，一同元気いっぱいで，宮城二重橋前に到着した．

広場に整列した全員は必勝を祈願し，冨山校長開戦の詔書を奉読，万歳を三唱してこの意義ある強行軍を終わった．

23. 金属回収と鈴木前校長胸像応召

昭和17年末ごろから，原材料，特に金属類が極度に不足し出したため，民間の金属類を回収し軍需品の材料に当てることとなった．

鈴木前校長は工業懇話会が記念として贈った自分の胸像を真っ先に供出し，その趣旨に賛同の意を表した．

鈴木前校長は胸像贈り主の工業懇話会会員各位に謹告として次の文を高工時報に記した．

会員各位に謹告（抜粋）

……私の家に留めて，私を記念する子孫の為には此上なき宝物であった．……この胸像は金属としては少量ではあるが，私の形であり影である．しかしこれが敵を撃つ武器の一部となることを思うと，折角会員各位から寄せられた御好意を無にすることを忘れしめた．会員各位には必ず私の微意のあるところを御賢察あらんことを祈り，ここに胸像に籠れる御懇情を感謝しつつ胸像応召を謹んで御報告申上

げます.

昭和17年12月16日

鈴木達治　頓首

24.　17年学園人事

河村教授　博士に

電気化学科河村文一教授は，「オゾンと有機化合体との反応に関する研究」論文により17年2月27日付けで京大理学部より理学博士を授与された．河村教授は本校電化3回の卒業で，卒業後本校電化教室に留まって後輩の教育に専心，昭和12年10月本校卒3人目の教授となった．

津村教授　東工大へ

機械工学科津村利光教授は17年3月14日付けで東京工業大学教授に栄転した．同教授は昭和13年9月本校に来任，機械工学科事務取扱として同科発展につとめた．昭和15年博士となる．明朗円満，誠実な講義は定評があり，生徒間に信望があった．なお4月20日付けで再び東京工大教授兼任横浜高等工業学校教授の辞令が出た．

池田教授　東大へ

航空工学科池田健教授は17年4月1日付けで東大第2工学部助教授に転出した．同教授は昭和6年東大工学部航空科卒後愛知時計㈱に入社，昭和13年本校に航空科新設と共に来校した．なおその後は講師を委嘱された．

吉岡助教授　応召

造船工学科助教授吉岡勲は，17年7月応召した．同助教授は本校造船工学科第1回卒業生で，以来10年間黙々として後進の指導に当たってきた前途有為の学究であった．

山下博士　逝く

機械工学科講師山下誠太郎博士は，17年7月5日病気のため死去した．東京高工付属教員養成所卒業後，早大教授，小松製作所などを経て本校教授となり，昭和10年鈴木校長と共に教授を辞し，以来講師として後輩を指導，17年2月内燃機関に関し工学博士となった．温厚篤実，勤勉の人であった．

中島教授　博士に

電気化学科中島正巳教授は論文「アセトンの熱分解」により17年10月8日付けで京大理学部より理学博士を授与された．

大正15年本校電気化学科卒，在学中ラグビー部で活躍，卒業後ただちに本校電気化学教室に入り昭和13年教授に昇進した．

25.　17年鍛錬部　国防部の活躍

対高商定期戦

野球　　5月30日　3—5，5月31日　10—7，6月2日　4—13，横浜公園球場でまたまた敗る

庭球　　5月17日　本校コート　2—7　敗　7連勝の夢破れる
競技　　6月14日　高商グラウンド　31—26　8連勝成る
柔道　　6月14日　高商道場　高商2人を残す　敗
蹴球　　6月14日　高商グラウンド　8—0　勝
籠球　　6月14日　高商コート　38—37　勝　4連勝
排球　　7月5日　高商コート　2—1　勝
弓道　　7月12日　元町道場　81中—57中　勝　15連勝
ラグビー　6月21日　高商グラウンド　21—5　13連勝成る
水泳　　6月21日　高商プール　敗
剣道　　6月7日　高商道場　3—7　敗
その他
排球班　5月末行なわれた関東高専リーグ戦に第1戦　本校2—0成城　第2戦本校2—1Y専　第3戦本校2—0明学　第4戦本校2—0大倉と堂々二部で優勝，さらに第5戦で一部の浦高を2—0で破り一部に躍進した．
短艇班　5月27日行なわれた海軍記念日祝賀海洋競技大会に出場，決勝において横専，商大を破り優勝．
7月5日横浜公園前大岡川コースで行なわれた横浜4専門対抗レースに優勝，久々に100連勝の時の強さを示した．
水泳班　8月4日大阪真田山プールで行なわれた第12回全国高工水上競技大会決勝戦に浜松高工に敗れ2位となる．
庭球班　対桐生高工定期戦は3年連敗のあとをうけて，10月25日桐生高工コートで行なわれたが，5—4で辛勝した．
競技班　対桐生高工定期戦は10月25日高崎総合運動場で開かれ，36—27で勝つ．
射撃班　10月25日横浜5専門射撃大会が引越射場で行なわれ，①本校391点　②高商375　③横専324　④関東262　⑤Y専249で本校が優勝した．

26.　対高商定期戦すべて中止　成績一覧表

時局はいよいよきびしく，昭和17年には文部省は，大日本学徒体育振興会によって学校体育を統制し，18年には一部同好者による娯楽的意味の強い選手本位の対外試合，特に対抗定期戦は中止するよう通達した．特に野球は敵性競技であるとして高圧的に全面中止の命令が出た（次項参照）．文部省直轄学校である本校，ならびに横浜高商では18年，ついに野球部を解散した．またすべての定期戦も17年度をもって終止符が打たれた．ここに大正時代から長い間，互いに切磋琢磨（せっさたくま）しあってきた対横浜高商定期戦は，ハマの名物野球戦はじめ各種目とも中止となった．次に各種目の各年度ごとの成績一覧表を記しておく．

対横浜高商定期戦一覧表

	大正14	大正15	昭和2年	昭和3年	昭和4年
野球	(第1回)勝	負	勝	負	中止
庭球		(第1回) (6月)勝 (12月)勝	(6月)負(12月)勝	勝	勝
競技			(第1回)勝	負	引分
柔道	(第1回)勝	中止	負	負	負
蹴球				(第1回)引分	引分
籠球				(第1回)負	負
水上					
排球					
弓道				(第1回)勝	勝
ラグビー					

	昭和5年	昭和6年	昭和7年	昭和8年	昭和9年
野球	中止	負	負	負	勝
庭球	負	勝	勝	負	負
競技	勝	負	勝	負	負
柔道	引分	勝	勝	勝	勝
蹴球	引分	負	負	勝	勝
籠球	勝	勝	勝	勝	勝
水上					
排球					
弓道	勝	勝	勝	勝	勝
ラグビー	(第1回)勝	勝	勝	勝	勝

	昭和10年	昭和11年	昭和12年	昭和13年	昭和14年
野球	勝	勝	負	勝	勝
庭球	負	勝	勝	勝	勝
競技	勝	勝	勝	勝	勝
柔道	勝	負	負	負	引分
蹴球	勝	勝	負	負	勝
籠球	負	勝	勝	負	勝
水上	(第1回)勝	勝	負	負	負
排球	(第1回)勝	勝	勝	勝	勝
弓道	勝	勝	勝	勝	勝
ラグビー	勝	負	勝	勝	引分

	昭和15年	昭和16年	昭和17年
野球	負	負	負
庭球	勝	勝	負
競技	勝	勝	勝
柔道	負	勝	負
蹴球	勝	勝	勝
籠球	勝	勝	勝
水上	負	負	負
排球	勝	負	勝
弓道	勝	勝	×
ラグビー	勝	勝	×

対高商野球定期戦の今昔

野球定期戦中止となったことは前記の通りであるが，いま第1回戦からふりかえって，その熱と力の争覇の跡を見ることとする．(高工時報 360 号 昭和17年5月27日から抜粋)

毎年若葉の6月と共にめぐり来る対高商野球定期戦の感激だけはやはり我々の心を興奮の坩堝へと駆りたてずにはおかない．かつての華かなプレーから真摯敢闘の野球に一新され，また色彩と拍手と怒号

に渦巻いた応援団から，自粛一途の応援団と相貌を変じようとも，10数年の伝統を貫く唯一筋の若さと情熱だけは別ものであろう．正しく定期戦こそはわれわれ学生生活の最も大きな支えの一つに違いないし今後も永久にそうであろう．

大正９年本校設立と共に創設された野球部は，定期戦開始以前に既に５年の創業時代を閲していたが，当時は技術的水準においても試合においても見るべきものがなかった．

だから大正14年に第１回の対高商野球戦を行った事が，定期戦の皮切りであったと同時に事実上野球部の歴史が始まったと言えるだろう．当時高商はまだ本校の一部を借りて授業していた頃だったから，勿論両校生徒同志の深い対立などはあるはずもなく極めて和気靄々のうちに行なわれたようである．

しかしその後回を重ねるに従ってファンの色もはっきりと二分され，さらに新聞の報道が拍車をかけるに至って，初めて両校の対抗意識が表面におし出されたのもけだしやむを得なかった．

昭和４年第５回目を迎えた時，こうした対立傾向は頂点に達し遂に定期戦は中絶する破目となった．これは高商側からの試合日の７月１日を６月１日に，１回戦を３回戦に改めようという提議に端を発し，ほかに感情的な行きがかりも手伝って遂に物別れになったからだった．

しかし定期戦の中絶は当時隆盛を極めていた６大学リーグに刺戟された上，流石に空虚な満ち足りない気持ちを与えたものであろう．６年に至るや双方に再び復活の気運が動き伝統の定期戦は６月１日の横浜市復興記念日を記念して復活する事となったのである．この折衝で定期戦は６月１，２，３日の３回戦とし，応援方法も今までの無規律な手段をやめて６大学リーグにならった即ち最近の応援団に近いものと変った．

さて昭和７，８年となるや高工陣は全く高商陣の名投手五十嵐に牛耳られ共に３回戦まで追いこみながらも，何れも敗戦した為に遂に高商は４連覇という新記録をうち樹てるに至ったのである．

この頃すでに高工対高商野球定期戦は，いわゆるハマの早慶戦として全国的に名高く，ＡＫでも松内アナウンサーの声で全国に向け実況放送を開始した程だったから，如何に当時の真摯な，しかも熱の溢れたこの戦いが世評にのぼったかがわかるであろう．

かくして雌伏４年，昭和９年必死の攻勢は遂に高商の堅陣を抜いた．そればかりでなく10年，11年と稲田，川口投手の努力と緊密した稀にみる好守好打を以て相ついで連覇の偉業をうち立てたのだから当時の喜びがどんなに烈しかったか想像に難くない．昭和12年は高商は前投手を擁し善戦，われは連覇の夢を破られた．13，14年と連勝したが15年高商戸来投手の出現により，その癖玉に逆に２連敗を喫し，17年を迎えたのである．(この記事の記載後行なわれた17年度定期戦でも敗れ通算７勝９敗となった．)

野球定期戦戦績

回	年度	スコア	勝負
1	大14年	4A—3	○
2	15	5—4	×
3	昭 2	1—0	○
4	3	4—2	×
	4，5	（中絶）	
5	6	12A—5 ×	×
		6 —3 ×	
6	7	3A—2 ×	×
		4 —1 ○	
		10A—1 ×	
7	8	7A—1 ×	×
		8A—7 ○	
		5A—0 ×	
8	9	5A—1 ×	○
		5A—3 ○	
		8 —0 ○	
9	10	4 —3 ○	○
		3A—1 ○	
10	11	4A—1 ○	○
		9 —4 ○	

回	年度	スコア	勝負
11	昭12	4A—3 ×	×
		11 —3 ×	
12	13	22A—8 ○	○
13	14	3A—2 ×	○
		8A—3 ○	
14	15	7 —4 ×	×
		8 —4 ×	
15	16	11 —8 ×	×
		5A—3 ×	
16	17	5 —3 ×	×
		10 —7 ○	
		4 —13 ×	

○印高工勝　×印負

27. 決戦２年の春を迎える

18年１月１日午前８時40分より，本校講堂で拝賀式を挙行した．大東亜戦争２年目の春を迎え，冨山校長は大略次のように述べ，学徒の奮起を要望した．

……本年こそは国民全部が全面的に，戦争生活に徹して，その有する物全部を戦争目的に結集し，その有し得る生産能力を挙げて軍需生産力に集中し，その増産を計り，最精鋭の兵器弾薬と糧食を潤沢に，且確実に遠き第一線に補給し，苟も遺憾なきを期せざる可からず．此処に技術人の重大なる使命が存す．

敵米がその学者技術家を総動員して各種兵器の急速なる改良，進歩，創造に傾倒，わが意表に出づる新鋭兵器を以って我を圧せんとしつつある実例2.3に止まらずと聞く．

時将に我科学技術陣総てが蹶起，その全知能を動員すべき秋なり．……是に対処せんが為に諸君技術青年学徒に俟つもの最大なるものあり．……在学期間短縮，一定設備に対する生徒数倍加，修学用資材の欠乏等あらゆる勉学上不利な条件の下，而も平時に比し何倍かの実力練成を期する事こそ戦に勝たんがために成し遂げざる可らざる事なり．昭和18年発足に際し全校生徒の奮起を促して止まざる所以なり．

28. 大詔奉戴日

18年１月８日冬晴れの好天気，午前８時詔書奉読式後，職員生徒一同行軍，保土ケ谷より旧東海道を抜け，東西両軍に分かれ，岸根，山崎に向かう．昼食後戦闘状態に入り両軍行動開始，遭遇戦を展開し，午後３時30分演習を終わり，学校まで急行軍，約１時間30分で帰校，全員健脚ぶりを発揮した．帰校後閲兵分列式を行ない午後５時全行事を終わり解散した．

以後この年も毎月８日を大詔奉戴日として式後行軍をおこなった．

29. 冬季鍛練

大戦下２年目の冬を迎え本校では，報国団鍛練部および国防部が中心となって１月18日より２月８日まで22日間を，冬季鍛練期間と定め，次の通り冬季鍛練を行なった．

柔剣道	１月18日～27日	強歩競走	１月23日
弓　道	１月18日～24日	寒中水泳	１月24日（本牧海岸）
	２月１日～７日	スキー訓練	１月31日
銃剣道	１月25日～２月３日	射　撃	２月１日～６日
相　撲	１日18日～23日	対寒行軍	２月８日
騎　道	１月18日～２月８日	全校体操	全期間

なおこの期間中は薄着を奨励，マフラー，外套(がいとう)などの廃止，早朝の乾布摩擦，または冷水摩擦の励行などを奨励した．

30. 入営者壮行会

18年３月10日午前10時内庭で，われらが学園より学業半ばの８名の学徒を第一線へ送る壮行会を挙行した．

国民儀礼の後，冨山校長の壮行の辞があり，入営者代表の「入営後はペンを銃にかえ，弘陵精

神を十二分に発揮する覚悟である」とのあいさつがあった．入営者は次の８名であった．

中島　寛（機２）　鈴木　達雄（機２）　猪野　瀬計（機２）
相川　潔（機１）　乙津　年雄（応２）　佐藤　紀男（電２）
清水勢津男（建２）　金内　治郎（航２）

31.　遠藤教授胸像も応召

さきに金属回収に応じて鈴木達治前校長の胸像が供出されたが，今また故遠藤政直教授の胸像もこれにつづいて応召した．

前機械科事務取扱として全国に冠たる大機械科を建設し，また水力界では世界的に光彩を放ち，幾多の功績を残した遠藤教授の胸像は，校友クラブが発起して校内に建設され，昭和13年除幕式が行なわれたことはさきに述べた．大東亜戦争ぼっ発以来，銅像もこぞって戦場への声が全国に澎湃(ほうはい)として起こるや，18年３月６日教授の胸像もこれに応じ供出されることとなり，遺族，鈴木前校長，教授職員多数参列のもとにおごそかに応召式が挙行された．

32.　本校に勤労動員令下る

大東亜戦争完遂のため，銃後生産面の積極的協力を目的として，学徒に動員令が下ったが，本校では18年３月１日より５日間機械，応化，建築，造船，電化，航空の順で○○工場へ出動，兵器生産作業を行なった．（工場名不明，防諜の関係上記録には伏せ字となっている）

33.　18年度入学試験

＜願書受付け＞

２月15日をもって18年度入試願書の受付けを終了した．今年は高等学校と試験日が違う関係もあり，本校始まって以来の難関となった．なお機械，応化は２部各40名を募集した．

													2部	
	機械	（教養）	応化	（教養）	電化	（教養）	建築1	建築2	（教養）	造船	航空		機械	応化
募集数	75	30	75	8	75	4	35	40	3	40	80		40	40
志願数	709	61	602	17	417	11	199	157	8	543	934		608	492
比　率	9.32	2.00	8.03	2.00	5.55	2.90	5.69	3.93	2.90	13.53	11.68		15.2	12.3

＜入学試験＞

学校の授業は３月20日で終了，23日よりいよいよ入学試験が始まった．

第１日（23日）は筆記試験，午前数学，午後国史，国史はなかなか難解であったといわれた．

第２日（24日）同じく筆記試験，午前 理科，物象，午後 国語，作文

第３日（25日）口頭試問

第４日（26日）　〃

第５日（27日）　〃

この間担当の各教授は毎夜遅くまで成績を査定，28日午前校長の判定があって，同日午後発表された．

今年の試験について特筆すべきことは，新教授要目に即応して本年度からは試験問題は文部省

昭和十八年入學者選拔筆答試問問題

數　　學　（總點百五十點）

❶ 風ガ平板ニ垂直ニ當ルトキ、ソノ板ノ受ケル壓力Pハ板ノ面積Aト風速Vノ二乘トニ比例スルトイフ。毎秒15米ノ風ガ1平方米ノ板ニ及ボス壓力ハ18瓲重ニ等シイトスレバ、P, A, Vノ間ニハ如何ナル關係式ガ成立ツカマタ毎時90粁ノ暴風ガ12平方米ノ板面ヲ壓スル力ハ幾瓲重カ。

❷ 或ル平原上5粁ノ距離ニアル二點A, Bノ探照燈ガ同時ニ一ツノ飛行機ヲ照射シタ。Aカラハ正西ニ當リ仰角37°, Bカラハ正北ニ當リ仰角18°デアツタトイフ。飛行機ノ高サヲ米ノ位マデ計算セヨ。但シ

tan53° = 1.327,　tan72° = 3.078

トスル

❸ 一平面上ニ於テ一邊ノ長サ4糎ナル正三角形ABCノ邊BCガ直線XX'上ニ在ル。コノ平面上ニ於テ頂點Cヲ中心トシテコノ三角形ヲ回轉シ邊CAヲ直線XX'上ニ來ラシメ、次ニ頂點Aヲ中心トシテコノ三角形ヲ同ジ向キニ回轉シ邊ABヲ直線XX'上ニ來ラシメ、更ニ頂點Bヲ中心トシテコノ三角形ヲ同ジ向キニ回轉シ再ビ邊BCヲ直線XX'上ニ來ラシメル。コノトキコノ三角形ノ通過シタ部分ノ面積ヲ求メヨ。

❹ 甲列車ハ9時10分ニA驛ヲ發シ、乙列車ハ10時40分ニ同驛ヲ發シテ甲列車ノ後ヨリ進行シタ。甲列車ハ11時40分ニ丙列車ト出會ヒ、乙列車ハ13時20分ニ丙列車ト出會ツタ。甲、乙列車ノ速サハ夫々毎時64粁、30粁デアル。各列車ノ運行ヲ示ス圖表ヲ畫キ、コレニヨツテ丙列車ガ甲乙兩列車ノ丁度眞中ニ在ツタ時刻ヲ圖示セヨ。尙ソノ時刻ヲ圖ニヨツテ讀取レ。

國　　史　（總點百點）

❶ 氏族制度の有する道德的意義を記せ。

❷ 建武中興・吉野時代の忠臣の事蹟が江戸時代の尊皇思想の發達に與へた影響を述べよ。

❸ 江戸幕府の鎖國以後明治の末に至る我が國海運の發達情況を述べよ。

理科物象　（總點百五十點）

❶ 約10瓦ノ物體ガアル。コレヲ天秤デ正確ニハカル手順ヲ箇條ガキニセヨ。

❷ 木片ヲ火ノ中ニ入レルトキ、ドンナ變化ガ次々ニオコルカ。ソノ變化ニツイテ說明セヨ。

❸ アルミニウム製ノ藥罐ニ水ガ入レテアル。コレヲ電熱器デ攝氏15度カラ60度マデ温メルノニ、熱ハ他ニ少シモ失ハレナイモノトシテ、何程ノ時間ガカカルカヲ計算セヨ。

但シ、藥罐ノ質量ハ　205瓦,
水ノ質量ハ　675瓦,
アルミニウム　ノ比熱ハ　0.2,
電熱器ノ抵抗ハ　20 オーム
電熱器ノ電壓ハ　100 ボルト トシ
1 ジュール ハ 0.24 カロリー ニ當ルモノトスル

❹ 鐵ノ主ナル鑛石ノ種類トソノ外觀及ビ成分ニツイテ述ベコレヨリ鐵ヲ得ルニ要スル他ノ原料トソノハタラキニツイテ簡單ニ說明セヨ。

國　　語　（六十點）

次ノ文ヲ解釋セヨ。

❶ 學問といへばただ外國の學びをする者のみありて皇朝の上古の事などをばもはらと學び候者のこれなきことを光圀痛深くうれたみなげかせ給ひ皇朝の學問を第一としてあまたの學士を御招きなされ候てあらゆる古書はもとより古文書のたぐひをばいささかのものをも集めそれを明細にしらべさせられ給ひ大日本史といふふみを御作りなされ候

❷ 人間の心中に大文章あり。筆を把り机に對する時に於てよりも、默居瞑坐する時に於て燦爛たる光明を發する事多し。心中の文章によりて心外の文章を觀るは善し、心外の文章を以て心中の文章を裝はんとするは文字の賊なるべし。

作 文 文 題　（四十點）

❸ 「戰ひ抜く力」

昭和18年入学試験問題（一部）
（文部省作成 全国高工同一問題）

で作成され，全国一様に同一問題が出されたことであった．この試験問題が全国一つに統制されたことについてはいろいろな見方，論議があったことは当然であった．次にその問題を記しておく．

＜合格者発表と学校長談＞

3月28日午後2時，465名の合格者（受験者 3,561名）が発表され，晴れの入学式が4月8日午後1時より新講堂で行なわれた．

これについて冨山校長は大略次のように語った．

「本年の入学志願者は空前の多数で全国に冠たるものがあり，一部，二部及び教員養成所を合計すると4,800名を突破するに至った．この難関を突破して栄冠を荷われた諸君に対し満腔の敬意と祝意を表する．同時に本校としては選ばれたる有為なる諸君を今後3ケ年間預り真に国家有用の材に仕上げるまでの甚大なる責任のあることを痛感し，挙校一致練成指導に当る決心である．諸君を入学せしめたる後は学徳の修練と共に特に軍事教練を一層強化して文武一如の教養を全うせしめたき決意を有するものである．

本校の如き科学技術をその目標とする学校の使命は今後益々重加する．本校在学中全精力を学徳修練に傾倒して精進，必ずその大成を期し，国家の要請に応へられんことを要望する．」

34. 昇格問題起こる

横浜市は6大都市の中で大学をもたない唯一の都市として取残されており，県民の間ではかねてから全国有数の工業県である面目にかけても，横浜高工を大学に昇格させるべきであるとの声が高まっていた．

昭和18年初頭，横浜市政翼賛会では，その問題を取り上げ種々検討を行なった．横浜高工は全国高工中でも，教授陣容，学校の設備，学生の収容能力などの点で最も整備されており，資材，労力の逼迫(ひっぱく)している今の情勢から見て，大学に昇格するのに最も適している．以上の見地に立ち，18年2月5日委員をあげて半井市長に昇格運動展開方を具申した．市長も高工の昇格はまさに時宜に適したものとして欣然(きんぜん)この運動の中心に立つことを誓った．

なお高工の大学昇格運動は各地でも展開されており，たとえば金沢高工，広島高工などでも同時期にそれぞれ猛運動を始めた．

金沢では，17年9月26日，財団法人科学動員協会北陸支部金岡支部長より，金沢高工を工科大学に昇格の儀を，文部大臣および総理大臣あてに建白した．広島では，18年1月13日，広島工業大学設置期成同盟会の発会式を行なった．

しかし，これらの運動も戦局の緊迫するにしたがい，いつかそのままになってしまった．大学昇格が実現したのは戦後のことである．

35. 努力会誕生

昭和18年4月新学期を迎え，戦局を憂うる本校一部有志によって「努力会」が誕生した．

われわれの周囲を見回すとき，まだまだ安穏な学生生活に甘え，時局に対する真剣味が足りな

い者がある．戦時下の学生らしい努力をせよという趣旨であった．

この努力会の運動の一つとしてこの年から卒業記念アルバムの作成を止め，この節約した金を積立て国防献金を行なった．

36. 報国団組織および予算

18年度報国団組織および予算は次の通りであった．

18年5月報国団組織

- 総務部
  - 企画班
  - 情報班
  - 会計班
  - 庶務班
- 鍛錬部
  - 作業班
  - 行軍山岳班
  - 剣道班
  - 柔道班
  - 弓道班
  - 相撲班
  - 陸上競技班
  - 水泳班
  - 野球班
  - 庭球班
  - 闘球班
  - 籠球班
  - 排球班
  - 蹴球班
- 国防部
  - 射撃班
  - 騎道班
  - 航空班
  - 科学兵器班
  - 海洋班
  - 銃剣道班
- 文化部
  - 講演班
  - 書画班
  - 音楽班
- 生活部
  - 共済班
  - 寄宿班
  - 購買班
  - 大陸班
- 科学部
  - 機械工学班
  - 応用化学班
  - 電気化学班
  - 建築学班
  - 造船工学班
  - 航空工学班

昭和18年度横浜高工報国団一般会計

歳入予算

科目	金額
第一項 報国団費	18,070.00
第一目職員団費	1,218.00
第二目生徒団費	16,212.00
第三目寄附金	2.00
第四目預金利子	137.00
第五目雑収入	1.00
第六目文部省補助	500.00
学校補助	3,676.00

歳出予算

班名	金額
企画	518.00
庶務	300.00
会計	10.00
作業	131.50
合宿	200.00
行軍 山	410.00
行軍 ア	76.34
剣道	1,522.25
柔道	787.00
弓道	601.00
相撲	160.00
陸上	889.30
水泳	1,003.20
野球	2,064.00
庭球	870.40
闘球	824.80
蹴球	774.00
籠球	641.00
排球	584.50
射撃	351.50
海洋	946.11
航空	600.00
騎道	3,720.00
科兵	1,119.58
銃剣	334.00
講演	420.00
音楽	820.55
書画	356.00
保健共済	160.00
寄宿	225.00
大陸	326.00
合計	21,746.33

37. 戦没会員慰霊祭

本校先輩戦没者の慰霊祭は本校および工業会合同で18年5月22日午後，本校新講堂できわめておごそかにとり行なわれた．

式は伊勢山皇太神宮宮司斎主となり，冨山校長，工業会理事長河村文一，生徒代表の各慰霊の詞があり，ついで校長，遺族，鈴木前校長ほか一同の玉串奉奠あって終わった．鈴木前校長の霊前に進む姿に遺族一同殊に思いを新たにしたようであった．6時より夕食会に移り，夜おそくまで追憶談にふけった．

38. 臨時全国専門学校長会議　同高等専門学校長会議

18年4月17日文部省では全国専門学校長を招集して，全国専門学校長臨時会議を開催した．これは今年4月1日より実施にはいった学制改革（18年1月15日の閣議で決定）にのっとり，専門学校としてはいかにすべきか，すなわち本会議の主目的は，学制改革の趣旨であるところの知育偏重教育を脱却し，学科と修練の一体化による実践的教育の実現を期するための具体方策の検討にあった．

これに対し各学校長より活発な意見の開陳があり，たとえば学科内容の改革，すなわち現在高工が保有している学科について時局に間接的な縁遠きものは，この際改廃を断行してはどうか（例：工芸科，染色科等），その他に工場実習の再検討，健康問題等等が論議された．

つづいて18年5月24日から26日までの3日間にわたり，全国高等専門学校長会議が文部省で開かれた．第1日午前，官公私立の高等専門学校長ら300余名が，特に宮中に召されて天皇陛下に拝謁(はいえつ)，午後岡部文部大臣の訓示があった．

高工関係については第3日目，熱心な論議が行なわれた．現下の生産力増強は，工業技術にまつもの非常に大で，若しも生産力が皇軍の戦力に十分応じ得ないということがあってはならず，生産力即戦力の時代においては，その中心は人物の問題にあるので，高工教育はその点において国が最大の犠牲を払い，最重視している旨，文部省は強調するところがあった．また明年度より教授要目の改革が実現されるが，特に高工は十分な検討が必要なので，各学校長よりこの点に関し種々意見が述べられた．

冨山校長は本会議に出席して帰校後次のように大略述べている．

「本校では教授要目の改正という点については現在6科あるが，何れの科も時局に必要な学科ばかりであるので廃止する科はないと思う．

修練の重視という点については現在本校は1週1時間であるが，当局の方針は3時間であるので，各科毎に種々立案したい．修練は勿論正課であるので放課後に行うことはない．なお文相は学問は自発的でなければならならないと言っておられる．この事は本校校是の名教自然と通ずるものである．」

39. 新入生の野営　画期的壮挙

18年度新入生500名に対し，4月12日より15日まで4日間，千葉県下志津栗山廠舎(しょうしゃ)で宿営練成を行なった．新入生をただちに数日間宿営させ，練成を行なったのは，全国初めての試みであった．

40. 総合鍛練大会

毎年6月ともなれば，若人の情熱は対高商野球定期戦に向けられるのであるが，戦時下ますます苛烈(かれつ)をきわめる時，野球定期戦は前記のように中止となったので，本校報国団では校内総合鍛練会を開催することに急きょ決定し，6月3日，4日の両日にわたり，各科対抗戦がくり広げられた．まず初日柔道，剣道，弓道，相撲，排球，野球，ラグビー，蹴球が，2日目は射撃，銃剣道，強歩，庭球，籠球とつづけられた．なおボートは中1日置いて行なわれた．結局総合では機，応，電3科接戦であったが，優勝は応化と決定した．

41. 校内建設進む

17年秋講堂の新築成り，18年初頭図書館完成し，「名教自然」の大理石の碑と共に学校正面は堂々として，日本の科学工業育成の殿堂としての風格を備えるに至った．しかし裏側はまだ関東大震災のなごりをとどめるバラック建てや建て物の土台が残っているところもあった．

18年度にはいり，これらも着々と整備され，新練成道場，食堂等も建設された．

新練成道場はプールの南寄りに新築され，総工費37,700円で17年1月着工，18年7月落成した．柔，剣道場とも縦15間幅6間で，他に訓練場，部室，シャワー室等がついていた．

42. 就職早くも決定

決戦下工業技術者の需要はいよいよその必要度を加えてきたが，18年9月卒業をひかえ，厚生省の就職割当てが発表された．本校では，関係先とそれぞれ折衝中であったが，全国高工中の白眉(はくび)をもって自他共に許す本校卒業生は，各人ともきわめて有利な条件で，7月15日には早くも全員就職先が決定した．

43. 高専体育大会無期延期　文部省通達

18年7月10日文部省より大学，高専，中等学校の各種体育大会は無期延期する旨通達された．

これにより毎年夏，はなばなしく展開された各種体育行事は，すべて中止となった．

本校各運動班では，4月以来懸命に練習をつづけてきたが，この発表によりこの夏は各自実習に，あるいは勤労奉仕にはげんだ．(本節26項参照)

44. 夏休みも返上　実習に練成に

18年度夏季休暇は，8月1日から22日までの3週間ときまった．ただし夏季鍛練期と銘打って，

休暇とは名目のみ，苛烈な戦局の推移に学徒動員令により会社，工場へ実習に出動した．すなわち18年度夏の学徒勤労動員は，さきに決定をみた学徒戦時動員体制確立要綱の線にそって行なわれ，動員された全国専門学校以上の学徒は延べ人員100万人と称された．本校動員は次の通りであった．

〔機械工学科〕 ○○造船所，マツダランプ，○○特殊製鋼，○○鉄工所，8月6日～20日
〔応用化学科〕 日本揮発油，マツダランプ，満鉄，○○研究所（月日不明）
〔建築学科〕 第2国道建設作業，8月21日～31日
〔航空工学科〕 日本飛行機，○○製作所，日本小型飛行機，中央航研横浜研究所（月日不明）
〔造船工学科〕 各地造船所，8月2日～21日

右につき学校長は大要次のように語った．

「諸君が夏季休業を迎えるに当り，痛感する事は，高工生の夏季鍛練期間中の任務は他校に比した場合，非常に重大であるという事である．

諸君は工場実習に勤労奉仕に行き，直接戦力増強の一翼を担って働くことになっているが，持場，持場に於て充分に各自の力を発揮して貰いたい．

何をするにも体力が基となるから夏に身体を十二分に鍛えておいてほしい．さらに工業学徒には，技術の練磨という重要な事が負荷されている．多忙な夏休ではあるが余暇を見ては足らざるを補ない勉学につとめねばならぬ．以上の事を充分留意してこの夏を有意義に送って貰いたい．」

教授陣も夏休み返上

夏休み，教授陣も安閑としてはいられなかった．勤労奉仕の学生たちと一緒に工場へ出かけたり，平常たまっている事務を整理したり，そして一方当然のことながら，本務である専門の研究に寸暇を惜しみ，夏休みを返上し三伏の猛暑も何のその意気ごみであった．

45. 海軍予備学生入隊者壮行式

18年8月27日本校講堂で，海軍予備学生入隊者壮行式が校長，教職員生徒ら出席のもとに挙行された．式後校歌を一同で斉唱，校長の発声で万歳を三唱した．

46. 第22回卒業式

昭和18年9月21日午後2時より，本校第22回卒業式が大講堂において挙行された．

顧みれば，昭和16年大学高専の修業年限短縮の発表があり，つづいて17年度より3カ年の課業を2年半に短縮し，速やかに国家の要員に充当されることとなったが，本校においては18年度も半年の短縮にもかかわらず，なんら質的の低下はなく，むしろ往年以上の成績をもってここに400有余名の精鋭を第一線に送り出すことができた．

式は国歌奉唱，宮城遙拝，黙とう，教育勅語奉読あって後卒業証書授与，学校長告辞があり，ついで文部大臣，神奈川県知事，横浜市長の祝辞，来賓来栖三郎前駐米大使の講話があり，卒業

生総代の答辞の後，最後の校歌を声を限りに歌い「海行かば」を斉唱，ここに感激の式を終わった．

学校長 式辞

「諸君が入学した当時は恰も日米交渉が開始されんとした時であり，それ以来アメリカの我に対する圧迫が日に日に積り来り，所謂ＡＢＣＤ包囲陣の形成等息詰るやうな形勢となり，その打開策の為，来栖大使の急遽渡米というやうな事となり，風雲まことに急なる時であった．

そして遂に吾は自衛上剣を執って立つの止むなきに到り，12月８日米英に対し宣戦の大詔渙発となり，１億国民は均しく感激，……一大決意を固めたのである．

以来緒戦に於て皇軍は赫々たる大戦果を挙げ得て，さらに昨年後半期に至り，ようやく敵の総反攻が激烈となって，南太平洋に於ける苛烈なる戦闘が限りなく展開していくに至り，今や真に国運を賭する未曾有の重大決戦期に直面するに至った．

即ち諸君２年有半の在学期間中はわが学徒として嘗て無き若き血潮を沸かす時に際会し，此間諸君は本校課程を勉学せられ，且つ各種修練に精進せられて明日の科学技術人としての重責を荷うべき準備を孜々としてなされた．

諸君を国家が要請すること頗る急なるものがある為，平時に比し６ケ月も短縮して今回卒業せられるに至った．今次卒業する諸君の中より，多数の人々は現下直面する国家の危急に挺身赴く為に進んで陸海軍飛行機の操縦者として志願せられ，卒業をまたずして入隊せられ，又その大部分の諸君は卒業後直ちに皇軍の一員として入隊し，近き将来の幹部として第一線に活躍せんとしている．

在学中特に心魂を打ち込んで従はれた軍教訓練の精華と，練磨せられたる各専門に関する叡智は，必ずや祖先，先輩に恥じざる勲功を立つるの覚悟あるを確信期待して諸君を送る言葉とする．」

47. 海軍より計算を依頼

18年９月，海軍より本校に対し科学戦に必要なる兵器に関する磁気係数の計算の依頼があった．

この計算は電子計算機のない当時では，１人の専門家が毎日１分の休みもなくつづけても，満６カ年を要するというぼう大なもので，軍ではこれを短時間に完成したいとの希望であった．

本校では９月27日，緊急教授会を開き安川，木戸両教授はじめ数，物，電関係全教授協議を行ない成案を得たので，10月11日全校生徒を講堂に集合，宣誓式を行ない完成までいっさいの授業を停止し，教職員生徒一同結集して計算報国に着手することとした．

開始に際し冨山校長の訓示の後，安川委員長の次のようなあいさつがあった．

「学校に於ては与えられたる計算式を数，物の教授合同して工夫の結果，最も計算に簡易にして而かも確実なる如く運算出来る様式を分解整理して基礎表を作成，以下目的の数値を全員動員のもとに算出表にまとめることにした．これは数が多く間違い易い計算であるが絶対に正確を期

さねばその用を為さず，又一日も早くその完成を急がねばならぬ性質のものである.」

全校生の努力によって，さしもの難事業も10月11日着手10月18日予定よりも数日早く完成した，しかも検算さえすませ完ぺきのできであった．ただちにこれを海軍当局に上納し，翌19日は慰労のため全校休校とした.

48. 教育に関する戦時非常措置方策決まる

昭和18年末に至り戦局はますます苛烈となり，ここに教育に対する非常措置がとられることとなった．すなわち，18年10月12日の閣議で「教育に関する戦時非常措置方策」が付議決定された．その要項は

1. 徴兵適齢までに専門教育を終了せしめる様中等学校の4年制施行期を昭和20年3月より繰上げ実施する.
1. 高等学校の文科入学定員を3分の1に減じ理科を拡充する.
1. 学徒の勤労動員を1年につき約3分の1相当期間実施する.
1. 教員の確保を期する為教員資格緩和の方途を講ずる.

などであった.

49. 開校記念式典挙行　記念祭は中止

従来本校開校記念日は11月1日と定められており，記念式典のあと1日より3日まで開校記念祭を挙行し，ハマの名物として多数の人々を集めていたが，今年よりは開校記念日を教育勅語発布の10月30日と改め，記念祭は時局がら文部省の通達もあり，中止することとした.

第23回開校記念式典は上記決定のように10月30日，午前8時より本校講堂で挙行された．君が代斉唱，宮城遙拝，黙とう，教育勅語奉読の後，記念式典に移ったが，学校長は大略次のように述べた.

「本校の開校記念日は以前は10月29日となっていたが，近年11月1日に変更し，ひきつづき2～3日間，記念祭を挙行してきた．しかし本年はそれも許されないので，10月30日の教育勅語発布の日を本校の記念日とし，同時に体育大会を開くこととなったのである．本校は当時としては巨額の35万円の資金と2万坪の土地を神奈川県の好意により寄付を受け，また横浜市よりも45万円の資金を頂いて創設されたのである．即ち本校は全く神奈川県と横浜市との好意により出きたものであり，我々は永く，又深くその好意に感謝しているのである．その一つの表れとして，夜間の工業学校を開設し，又商工実習学校を援助して貢献するところあり，この上とも永くその恩に報いて行くつもりである．本校は既に4,000名に上る卒業生をあらゆる部門に送り，現今中堅指導者として何れの学校にも劣らぬ業績を挙げているのである．神奈川県や横浜市が示してくれた好意には十分に応え得たものと信じている．諸君らも是ら先輩に負けぬよう更に本校23年の歴史と伝統を誇る本校生徒たるの自覚を以て大いに頑張って頂きたい.」

50. 練成大会

10月30日，記念式典終了後9時30分より，南運動場で練成大会を挙行した．

まず一同そろって体操を行ない，それより真し敢闘の鍛練競技に半日を送り，午後4時校歌を高らかに歌い万歳三唱の後，大会を終わり散会した．

51. 連合演習

18年10月23，24日両日，神奈川県下専門学校，中等学校連合大演習が行なわれ，本校も東軍独立第一大隊としてこれに参加した．23日午前7時半学校を出発，東軍の集合地たる星川に到着，休む間もなく東軍最前列となり高尾山丘陵地帯占拠のため，秋色濃き相模原を西進，午後1時西軍と遭遇，勇壮な肉弾戦を展開，3時退却の西軍を追って強行軍を行ない，演習場付近で相対峙(じ)したまま夜営，翌24日は早朝6時半より総攻撃を開始，白兵戦を展開し午前9時演習を終了．近藤知事7,000名の学徒を閲兵，担当将校竹下大佐の講評があった．本校は日ごろの練成の成果を発揮，1人の落ご者もなく諸学校の先頭となって活躍した．

52. 報国団改組

本校校友会は前述のように昭和15年時局の要請するところにより，発展的解消を遂げ報国団となり，従来の学生自治にかわり教授が班長となり，その指導のもと非常時学徒としての練成を積み重ねてきたが，以来満3カ年，時局はさらにきびしさを増してきたので，18年11月1日役員会を開き次の通り改組することとなった．

すなわち鍛練部の弓道，野球，庭球，蹴球，籠球，排球，合宿訓練の7班を解消，また陸上競技を陸上運動と改称，寄宿班も報国団を離れ，学校の援助で充実を期することとなった．そして人心を刷新するため各部長，班長を更迭した．また廃班のため予算編成替えを行なった．

報国団新組織

総務部長	阿部滋弘	騎道班長	中山皖市
企画班長	友成忠雄	代理	須藤務基
情報〃	渾大坊小平	科学兵器班長	樋口正義
鍛錬部長	石川房治	文化部長	佐藤正能
剣道班長	宮島肇	講演班長	藤井耕一
柔道〃	豊田浩七	生活部長	河村文一
陸上運動〃	須藤務基	保健共済班長	荒井文治
闘球班長	森川幾久雄	科学部長	藤川由太郎
国防部長		航空班長	広津万里
射撃班長	斎藤輝治		

なお廃班となった7班と寄宿班の残り予算金額（返上予算）は練成部，国防部という時局下喫緊の班に振りむけられた．

○返上予算

鍛練部	
弓道班	36.65
合宿訓練班	200.00
庭球班	870.40
蹴球班	28.02
排球班	258.50
野球班	796.40
籠球班	53.00
計	2,242.97
生活部	
寄宿班	225.00
計	225.00
総計	2,467.97

○追加予算

収入	2,467.97
支出	2,467.97
鍛錬部	1,041.00
柔道班	70.00
作業班	160.00
闘球班	71.00
行軍班	400.00
相撲班	100.00
水泳班	40.00
剣道班	200.00
国防部	1,426.97
海洋班	105.00
科学兵器班	1,321.97

53. 渾大防小平　新情報班長に

18年11月1日付けで，佐藤正能教授は情報班長を辞し，新たに生徒課長渾大防小平が情報班長となった．

佐藤班長は昭和15年校友会が報国団となり，新聞部が報国団情報班となったとき，班長に就任，以来戦時中の用紙不足，検閲問題，班員の不在（長期勤労動員等のため）などの悪条件の下，よく高工時報の発行をつづけてきた．その労苦を多とせねばならぬ．

54. 18年学園人事

山本教授 逝く

電気化学科山本一夫助教授は18年1月25日病気のため死去した．危篤の報に1月23日付けで教授に昇進した．同教授は明治43年富山県に生れ，昭和6年本校電気化学科卒，ただちに電化助手となり後東京工大染料化学科に入学，同12年東工大卒，同年11月本校助教授として来任，16年京大に内地留学中，病を得て京大付属病院に入院，ついに不幸死去した．享年34歳の若さであった．

なお死去前提出中の「分子内のエネルギーの分布」なる論文が通り，理学博士号を授与された．資性温厚，篤実の若き学究でその死を惜しまれた．

新学年を迎え　教授陣異動

昭和18年4月　新学年を迎え教授陣営に若干の異動があった．

山梨進一教授	18年1月25日付	任海軍大学教授
豊田　浩七	18年3月24日付	任本校教授
佐野　朝男	3月24日付	任　〃
川田正斉教授	18年3月31日付	任東大学生主事
工藤　進教授	〃	任陸軍司政官
藤井　耕一	〃	任本校助教授

移動教授略歴次の通り．

◇川田教授

昭和13年３月本校来任，英語担当，また教養生徒の主事として尽力した．東大学生主事に栄転

◇工藤教授

昭和16年６月本校生徒主事として着任，独語担当，陸軍司政官に栄転

◇山梨教授

基礎学科数学担当，海軍大学教授に栄転

◇豊田教授

ハルビン工大より転任，数学担当

◇佐野教授

大使館調査官より着任，英語担当，横浜高商と兼任

◇藤井助教授

桐生高工より転任，独語担当

遠藤教授　京城大へ

造船工学科遠藤重郎教授は18年４月28日付けで京城帝国大学教授に栄転した．

同教授は昭和４年造船工学科設立と同時に同科助教授として着任，数学，力学を担当，14年の長い間生徒の薫陶に尽くした．

田口講師　教授に

田口武一講師は18年６月25日付けで本校教授に任ぜられた．同教授は，本校建築学科昭和７年卒業後，東工大建築学科へ進み，10年卒，後ただちに横須賀海軍建築部に勤務，16年９月より本校建築学科に専任講師として勤務していた．

阿部教授 博士に

阿部滋弘教授は大阪帝大理学部へ提出中の「精油成分の化学的研究」が教授会を通り，18年７月７日付けで理学博士号を授与された．

同教授は千葉中卒，本校応化第１回卒業，学生時代野球部選手としてならした．卒業後，応化助手として残り，また理研真島研究室に通い，有機化学を専攻した．

中島教授　急逝

18年10月23日電気化学科中島正巳教授死去，享年40歳の若さであった．

大正15年本校電化卒，北斗電球㈱に就職，昭和３年助教授として本校に赴任，13年３月教授，「アセトンの熱分解」の論文を京都帝大に提出，17年８月理学博士号が授与された．

明朗高潔なる人柄は学生の信頼があつかった．

横山教授 金沢高工校長に栄転

18年10月30日付けで，電気化学科事務取扱横山盛彰教授は金沢高工校長に栄転した．

同教授は大正10年４月本校に来任，同年５月助教授，大正11年４月教授，以来20数年の長きにわたり，本校および同科発展のため尽すいした．

本邦における電気化学の権威で，教室では「電気化学理論」「物理化学」を担当．明朗真しな

講義ぶりは教授陣の一異彩で，学生の信望を集めていた．なお転任後も本校講師を委嘱された．

金沢高工校長として戦時中よくその激務に耐え，戦後同校が金沢大学工学部となるや，初代工学部長となり30年３月退官した．

本間教官　帰還

本間助教授（体育）は前述の通り応召中であったが，18年末赫々の武勲を立て無事帰校した．

なお，12月31日付けで大正15年以来長らく弓道講師を嘱託されていた浦上栄が弓道班廃止にともない解嘱された．

55.　昭和19年を迎える

昭和19年元日午前９時から，恒例により教職員および残留生徒一同講堂に集まり，拝賀式を挙行し校長の訓示があった（残念ながらその内容については資料が残っていない）．

１月４日は御用始めで，午前９時より「軍人に賜りたる勅諭」奉読式があり，生徒も多数出席した．校長の訓示および配属将校の講話があった．なおこの日官吏戦時服務規律が公布された．

56.　１月８日大詔奉戴日

決戦の新春を迎え１月８日朝詔書奉読式後，ただちに恒例の行軍に移った．

この日は全校生徒を東西両軍に分け，西軍は，鎌倉街道を南進，野庭口より戸塚街道へと山道を抜け，一方東軍は吉野口より保土ケ谷へ出，両軍昼食後再び行動を開始，保土ケ谷遊園地付近で遭遇戦となり，午後２時30分休戦となった．帰校後，安川教授の閲兵，分列式後５時解散した．

なお19年も毎月８日に式があり，終わって行軍が行なわれた．ただし，12月８日は行軍はせず消防演習が行なわれた（後記）．

57.　紀元節におしるこの配給

19年２月11日午前８時30分より講堂で紀元節の式典が挙行された．終わって神奈川県の好意で，生徒に対しおしるこ２杯分の材料が配給されたので，早速おしるこを作り久しぶりの甘いものに舌つづみをうって紀元節を祝った．

58.　血液型

戦時中は国民は皆防空服装に身をかため，いつ何時（なんどき）空襲があっても随所に対応できるように強要された．そして国民服の胸には氏名，生年月日，血液型を明記した布切れが縫いつけられていた．爆弾や焼夷弾で負傷した場合，応急措置として輸血するため血液型を明記することが必要とされた．

本校においては昭和19年２月10日より25日までの10日間に，各科別に血液検査を行ない，各人の型を明らかにした．

これは報国団保健共済班　荒井文治班長の努力によるもので，大雄山病院（本校委嘱病院）な

らびに校医の協力を得て，学生756名（受診率77%）の血液型検査を実施することができた．

59. 本年度入学者増員募集

大東亜戦争がぼう大な兵器弾薬の消耗戦と化した今日，その国の生産能力がただちに前戦の戦況に影響するという現段階においては，技術者の増員が緊急のこととなってきた．

そのため18年度以降全国高等工業学校の整備拡充強化が行なわれてきたが，このほど細目が決定し文部省から発表された．

本校ではいずれの学科も緊急必要なため，改廃の変化は見られず，一層の拡充が望まれた．

すなわち造船科は従来の40名を80名とした．また昨年機械，応化の2科に設置された二部制（夜間修業年限4年）は本年より電化，造船，航空にも新設され，それぞれ40名募集することとなった．なお付設工業教員養成所も，造船，航空の2科が新設された．これにより本校は1部，2部，教員養成所をあわせると1,900名の多数に上ることとなって，昼，夜間連続で技術者養成に突進することとなった．現状のままの教職員数でかつ，現設備でこれだけの生徒を教育する教職員の労苦は非常なものであった．

志願者数

	機械			応化			電化			建築		造船			航空		
	1	2	教養	1	2	教養	1	2	教養	1	教養	1	2	教養	1	2	教養
募集数	75	40	30	75	40	5	75	40	6	75	5	80	40	5	80	40	5
志願者	903	187	85	752	180	21	532	162	39	421	20	952	166	40	980	194	33
比率	12.0	4.6	2.8	10.0	4.5	4.0	7.0	4.0	6.0	5.6	4.0	11.9	4.0	8.0	12.5	4.9	6.6

入学者発表

19年度の入学試験は3月17日より開始された．17，18日は筆記試験，21～24日は口頭試問，25，26日は2部の口頭試問と，前後10日間にわたって行なわれた．試験科目は数学，歴史，化学，鉱物等で英語はなかった．そして3月27日午後3時発表された．戦時下のこととて，空襲に備えて受験生は皆防空頭巾(ずきん)ゲートルに身をかためていた．試験問題も万一をおもんばかり2，3通り用意されていた．受験者総数5,865名という空前の多数で，このうち合格の栄を得たものは716名であった．

冨山校長は大略次のように述べて，この栄えある新入生を迎えた．

> 大東亜戦争もいよいよ決戦期にはいり，日々苛酷となる科学戦は一層の深刻さを以て前線，国内に於て戦はれているのである．この時に当り明日の日本技術陣の先端に立たんとする若き俊秀の新人を迎えたことは，誠に喜ぶべき事である．が併しその反面合格者の何倍という不運の人のあった事を思い，合格者は自惚れる事なく，今後将に展開される2年有半の高工生活に於て愈々卓抜せる頭脳と頑健な身体と清新なる精神の一層の練磨に努め，学徒即学兵，学校即戦場の気分を持ち，重き国家の要望に応えると同時に，輝かしい弘陵20有余年の歴史を弥が上にも発展させねばならぬ．

受験者の体力

時局下食糧事情その他から19年度受験者の体力については，各方面からかなり憂慮されていたが，本校受験者に関する限り，まずまずの成績であった．

体育課の石川教授によれば，「食糧事情などから受験生の体格については相当心配していたが，検査の結果は全般として例年より良いようだ．殊に一部生より二部生の方がよい，これは二部生が職場で働き且勉学するために自分の体力ということに自覚を持っているからではないかと思う」．

60. 学徒勤労動員について

昭和19年８月23日，決戦体制下の方策として「学徒勤労令」および「女子挺身隊令」が公布された．

今学生の勤労奉仕についてさかのぼってまとめて述べると次の通りである．

①13年６月，文部省は，集団的勤労作業運動実施に関する通牒を中等学校以上に発し，農事，軍用品等に関する簡単な作業に年間３日から５日間を標準として従事することを定めた．勤労奉仕の始まりである．本校では前述の通り，プール作りが行なわれた．

②14年３月，文部省は，中等学校以上における集団勤労作業を漸次恒久化し，正課に準じて取り扱うこととした．

③15年，「基本国策」が閣議決定され，大政翼賛会が結成されるや，１年のうち30日以内の日数を授業を廃して作業に充当するよう強化した．

④16年８月，文部省は，学校報国隊の編成を命じ，学徒を労務動員するための準備を整えた．

⑤16年12月労務需要の激増に伴い「国民勤労報国協力令」が公布され，学徒もこの適用を受けたが，学生に対してはまだ教育的配慮が加えられていた．

⑥18年になると大東亜戦争の戦局悪化にともない，労働需要が倍加したため，学徒は労働供給源として急激に注目されるに至り「学徒戦時動員体制確立要綱」が決定され，学校報国隊の待機姿勢が強化された．

⑦同年（18年）政府は当時の情勢下における国政運営要綱を発表し，続いて教育に関する戦時非常措置方策を決定し，学校の修業年限の短縮や戦時勤労動員等の強化措置を決定した．勤労動員は教育実践の一環として，在学期間中一年につき概ね1/3に相当する期間実施することとなった．

⑧19年１月「緊急学徒勤労動員方策要綱」が閣議決定をみて，勤労即教育の本旨に徹して動員がよりいっそう強化され，１年につき概ね４カ月を標準として継続して勤労につくたてまえとなった．

⑨19年３月戦局いよいよ急を告げるに従い，中等学校以上の学徒の通年動員が決定され，詳細な学校別動員基準が指令され，全国の学徒は続々と軍需工場へ動員された．４月にはいると勤務時間中，工場，事業場内において軍事教育，教授訓育のため１週間６時間を原則とする授業時間を設けることが指示された．

⑩19年８月このような経過の後，この「学徒勤労令」が公布されるに至った．これは「国家総動員法」に基づくもので，学徒勤労については“勤労即教育”と規定し，学校報国隊の組織によって勤労期間を１カ年とし，その出動に関する主務大臣を文部大臣とした．これはすでに行なわれてきていた動員に法的措置を与えたものであった．（主として学制90年史による）

次に本校における昭和19年内の動員について述べる．ただし資料不十分のためもれているものがあると思われる．

(1) 春休みの勤労動員

19年の春休み，本校機械，応化，電化に勤労動員令が下り，若き学徒は情熱を傾けてそれぞれ専門分野の工場に出動した．

なおこのため，学科課程，実験等には従来の方式をやめて真に重要な基礎的なものに重点を置くようにし，土曜，日曜を返上して，ひたすら最後の学業研さんに努力することとなった．

◇機械工学科

機械１年は３月11日より25日まで約半月間，芝浦工作機械，および石川島タービンで朝７時45分より夜６時15分まで，戦時下最も重要なある種の製図に携った．１日10時間30分の長時間，設備の不完全な場所で器具を用いて虫眼鏡で見るような細かい図面を画くことは実に容易ならぬ労働であった．しかし勤労学徒の意気と熱をもって期間中に大いなる成果をあげ，会社側の期待にこたえた．

◇応用化学科

応化１年生は３月９日より10日間，全員新子安の昭和電工へ出動，戦時下その生産が戦局に及ぼすところまことに大なるものがあるとして，短日数ながら，大いに奮闘し成果を挙げた．

◇電気化学科

電化１年生はまず先発隊16名が３月22日から，主力部隊は24日から，それぞれ住友通信工業へ進発し作業にてい身，４月３日予定の作業を終えた．

◇建築学科

全員２月，日本飛行機(株)杉田工場へ出動した．また１年生第１班は３月13日から19日まで，第２班は21日から27日まで横須賀海軍工廠に出動，全員大倉土木の現場宿舎に宿営，各々１週間筋肉労働を行なって熱汗に報国学徒の真面目を発揮した．

◇造船工学科

他の科と趣を異にし，この春休みは例年のように自習に励んだ．

◇航空工学科

航空科全員170名は日本飛行機(株)へ３月12日より14日間出動した．

(2) 新学期の勤労動員

新学期を迎え本校は，関係各省と打合わせの上，，２年生は次の通り各科ごとに出動した．なお19年９月卒業予定の３年生は，４月いっぱいでそれぞれ就職先がきまったので，５月早々就職先の官庁，工場に出動した．

◇機械科　日野重工業，石川島航空工業，芝浦共同工業，東京機器工業，日本鋼管川崎造船所，日産自動車
◇化学工業科　古河理科研究所，東京瓦斯，富士写真フィルム，大日本化学工業
◇電気化学科　昭和電工，古河電気工業
◇建築学科　神奈川県庁
◇造船工学科　浦賀船渠，日本鋼管○○造船所
◇航空工学科　陸軍航空本部勤務班，海軍航空技術廠，日本国際空航○○工場

冨山校長は次のごとく語った．

今回の学徒に対する非常措置は国家が戦争目的遂行の為に，真に緊急必要あってなされた事で，学徒の本分たる学業を離れ，或は放棄するが如き事があってはならない．まして今年より学科課程に於て従来に見られない劃期的強化が行なわれ，決戦下に工業学徒の受け持つ課業というものは，非常に重くなってきているのに，学校を離れ勤労に励むということは並々ならぬ事で，諸君らが校是たる名教自然の真意を体し，自ら勉学し，学徒の本分たる行学一如の理想達成に邁進することとなったのである．二，三年生が通年動員されることになっても，各々の職場は学校の延長であって，全く学校というものから離れてしまうものではない．この意味に於て職員の方には学生のみに作業場に働かせて置かず，常に工場に於て生徒と起居を共にし，接触を保って，学校内に於けると同様の教育的効果を挙げ得るよう折角

努力して貰いたいものである．学生自身も特に政府が工鉱方面の学徒にその専門を以て，国家の要請に応える如く考慮されている事を思い，諸君らが，今日まで日夜学び来った知識が，今直接お役に立つ時が来たのであるからして，同僚の文科系学徒が前線に立っている心持ちと同じく，滅私奉公，一意専心，自己の職場に於て働いて貰いたい．三年生はそれぞれ就職先に於てその天分を十分発揮し，今年度の戦力の飛躍的増強の原動力となって貰いたい．又若き情熱を只管国家に棒げた学徒の気魄が全国工員奮起の本となっていることを考えても指揮者として間接的に，工員の能率増大の中核となって貰いたい．国家に於ても現下の逼迫せる食糧事情下にもかかわらず特に動員学徒に対し食糧の増配並びに衣料の供給をしてくれる趣旨を体して，一意国家の多大なる期待に背かぬよう働いてほしい．

（高工時報399号　昭和19年4月28日）

(3) 夏休から秋への勤労動員

◇吉岡教授談（造船7年卒）

19年7月から8月にかけて造船科では全員勝浦の旭造船所へ木造船建造の勤労動員に行った．宿舎は養成工の寮やお寺であった．移動証明書持参で米が1日1.3合位補助された．職員は移動証明書が不要だった．作業時間は工員と全く同じ，ただし残業はなかった．なお被服自弁で手当は食事付で日当1円20～1円30，旅費支給．寝具持参という条件であった．1年生は勤労作業，2，3年生が工場実習であった．

◇豊倉教授談（機械22年卒）

機械科では19年秋，農業動員で山北の奥の清水村へ1カ月ばかり，機械科全員が行き，稲刈や整地などの農作業を農家へ泊りこんでやった．

白米がたべられ，ドブロクがのめた．また19年9月21日～10月16日藤沢へ海軍航空隊飛行場建設に行き毎日モッコかつぎをやった．現地で講義があった．

◇なお，建築科でも全員9月から10月にかけて飛行場建設に出動した．

(4) 勤労動員に対する批判

以上の勤労奉仕作業については，概ね良好の成績を挙げ得たとしているが，高工時報398号（19年4月5日附）には次のような疑問を載せ，今後の学徒勤労の在り方についてさらに一段の検討を要する旨を警告している．

以上各科各々その専門とする部門の工場等に進出し，造船に，電波兵器に，設営に大いに理工科学徒の面目にかけての力闘に，勤労期間を終始したのであるが，現在の戦局の重要性或は産業危機の重要性よりして，亦科学戦の要求より来る技術の不足等より見て，その作業内容は決して当を得たものではなく，殊に機器の使用等に於ては，学徒に対し信用が置かれておらず，いくつかの会社に於ては僅か10日そこそこのお客扱いの如き受入れをする等，遺憾の点多く，「貴重な科学技術の授業を止めてまで行う作業がこれでは」と慨歎せしむる事屢々であり，今後に幾多の問題を残したことは大いに検討の要があろう．

以上のように，高工時報では非常に控えめに勤労動員についての受入れ側に対する不満を述べているが，いっさいの批判を許さなかった当時としては，よくこれが検閲をパスしたものだと思う．受入れ側と学生との間のトラブルは実際しばしば起こっており，要は純真な若人の国家のためとはり切って，学業をなげうって出動した出先で，軽くあしらわれ，お客様扱い，あるいは足手まといのように遇せられては，不満が出るのも当然であったであろう．こういう場合会社と生徒の間に立って引率の教授の苦労は大変なものであった．

61. 新食堂完成

馬場跡に18年以来建築工事中であった食堂は，資材，労力の極度の窮迫にもかかわらず，関係当局の努力により18年末建物ができ，19年春に至り水道，窓の設備等の内装を終わりようやく完成した．

新食堂は木造平屋建て，教官食堂と学生食堂と並立，もったいないくらい明るいなごやかな建物であった．4月より新入学生を迎えて開店，代用食をやめ決戦食と称する雑炊が出された．

なお一般通学生でこの雑炊の昼食を希望する向きは米5合を持参すると，これに県，市の絶大なる援助で不足分を足して25回券が渡されることとなっていた．なお従来の米食者はそのまま続けられた．しかしこの自慢の雑炊も物資不足で長つづきしなかった．

62. 教職員 日曜日返上

決戦非常措置要綱に基づく，官吏の休暇全廃にともない，本校では教職員一同3月5日より向こう1年間，日曜を返上して研究の一日も早く完成するよう，また学務が速やかに処理できるよう努めることとなった．

63. 昭和19年ごろのカリキュラム

戦争もいよいよ苛烈を加えてきた昭和19年ごろの学生の勉学ぶりはどうであったか．1学期は3年生はいなく，2年生は勤労動員されて留守で，1年生ばかりであった．電化22年卒（19年4月入学）小泉 仰は「高工時代の思い出」としてDENKA 6（43年12月発行）に次のように述べて，当時のカリキュラム（Curriculum）を紹介している．

「私の学生時代は戦中から戦後の混乱期にわたっていたので，満足な教育は受けられなかった．弘明寺の裏から急に爆撃機が現れて二宮付近に爆弾が落ちたこともあった．戦争が激しくなって2年以上になると授業ができなくなる恐れがあり猛烈なカリキュラムが組まれた．たまたま昭和19年に使用していた数学のテキスト（渡辺孫一郎著，初等解析幾何学三訂版¥2.00）の表紙に昭和19年4月より前期の時間割が書いてあったので紹介する．

	1	2	3	4	5	6	7	8
月	独語	解析	〃	物理化学（柴崎）	実験	実験	実験	
火	無機化学	〃	体操	数学	独語	化学英語	実験	実験
水	電気工学	道徳	物理化学（友成）	〃	軍事教練	有機化学	〃	
木	機械工学	〃	分析（河村）	〃	実験	〃	〃	〃
金	物理学	〃	化学工業	数学	体操	実験	〃	〃
土	電解（鶴岡）	人文	物理学	〃	軍事教練	〃	〃	〃

また機械科19年4月入学の豊倉富太郎（現本学教授）は次のように述べている．

「9月頃まで授業があった．二宮先生ばかりが出てこられ，図学と機構学の講義があり，あと

斎藤教授と山野教授がおられ，他の教官は出征して留守だった．教練は渡辺大佐でガッチリしぼられた．」

64. 新入生野営訓練

18年から実施された新入生の野営訓練は，19年度も実施された．すなわち19年4月8日の大詔奉戴日を期し，富士山ろく板妻廠舎で3泊4日の野営をし，入学と同時に中学生気分を脱却し，本校生徒としての矜持（きんじ）を一日も早く持たすよう特に内務訓練，仕付け教育に主眼を置き教育された．

65. 名称変更　横浜工業専門学校となる

時局の緊迫化にともない昭和19年4月「教育に関する非常措置策」がとられた．

戦争の長期化に対処するためには，何よりも現場技術者の必要性が叫ばれ，現場技術者を養成するための機関である実業専門学校は，大学とは自ら異なる性格を持たねばならぬ．すなわち大学は基礎，応用科学の研究方面に携わるのに対し，専門学校は，工場における直接生産陣に役立つ人物を養成するという，両者それぞれの方面の最高学府であるという見地から，19年度より専門学校の学科課程の全面的改正を行ない．学年短縮にともなう学力低下を防ぐため，技術者として必要な重要学科修得に努めることとなった．そのため学校そのものの名称も変更して従来の高等工業学校は工業専門学校と改められた．したがって本校も「横浜工業専門学校」と改められ，専門学校であることを明らかにした．なお各科の名称も次のごとく改めた．

（旧）	機械工学科	（新）	機　械　科
〃	応用化学科	〃	化学工業科
〃	電気化学科	〃	電気化学科
〃	建築学科	〃	建　築　科
〃	造船工学科	〃	造　船　科
〃	航空工学科	〃	航空機科

なお，この横浜工業専門学校なる名称は生徒間には受けが悪く，横浜高工という旧名がいつまでも愛され使用された．

（注）**官立工業専門学校規程**　（昭和19年4月28日）文部省令第28号

官立工業専門学校規程左の通定ム

昭和19年4月24日

文部大臣　　子爵　岡部長景

官立工業専門学校規程

第1条　官立工業専門学校ニ於テハ専門学校令第1条の本旨ニ基キ工業ニ関スル高等ノ教育ヲ施ス

第2条　官立工業専門学校ノ修業年限ハ3年トス

第3条　官立工業専門学校，授業ハ教授及修練トス

教授要綱及修練要綱ハ別ニ之ヲ定ム

第4条　官立工業専門学校並ニ其ノ科及学科ハ第1号表ニ依ル

（以下略）

66.　報国団規則一部改正　（19年4月）

名称　横浜工業専門学校報国団

第1条　本団は横浜工業専門学校報国団と称す

第5条　総務部は各部の事業の統制，企画指導及経理の事務に当り且他の部に属せざる事項を掌る

〔総務部〕に企画，情報，庶務，会計の班を置く

〔鍛錬部〕に作業，行軍，山岳，剣道，柔道，相撲，陸上運動，水泳，闘球の班を置く

〔国防部〕に射撃，騎道，海洋，航空，科学兵器，銃剣道の班を置く

〔文化部〕に講演，音楽，書画の班を置く

〔生活部〕に保健，共済，購買の班を置く

〔科学部〕に機械，化学工業，電気化学，建築，造船，航空機，大陸の班を置く

第6条　団員の総ては鍛錬部又は国防の一以上の班に加入するものとす

第18条　情報，購買，機械，化学工業，電気化学，建築，造船及航空機の各班に関する経費は之を特別会計とす

19年度報国団予算

部	班	経常費	特別支出
総務	企画	785.00	50.00
	庶務	400.00	200.00
	会計	15.00	
鍛錬	作業	450.00	537.00
	行軍山岳	1,003.10	
	剣道	844.00	845.00
	柔道	435.00	350.00
	相撲	550.00	400.00
	陸上運動	734.00	100.00
	水泳	818.00	230.00
	闘球	708.00	400.00
国防	射撃	280.00	180.00
	海洋	941.00	
	航空	530.00	2,940.00
	騎道	4,000.00	
	科学兵器	3,181.00	3,750.00
	銃剣道	325.00	1,120.00
文化	講演	405.00	
	音楽	747.40	50.00
	書画(絵)	217.50	
	〃（書）	97.00	
	生活	195.00	
	科学大陸	326.00	
	部予備金	400.00	
	計	18,199.00	9,170.00

67.　六ツ川夜話 擱筆

煙洲鈴木前校長が高工時報に毎号必ず執筆して，慈父のごとき愛をもって学生に示していた六ツ川夜話は，用紙制限等のため397号をもって中絶のやむなきに至った．

68.　横浜高工時報　廃刊となる

高工時報は用紙の配給減，その他の事情から第392号をもって従来の新聞の形式を打切り，第

393号より大きさを縮小し，かつ謄写版ずりとした．

すなわち昭和19年1月5日の第393号に班告として次のように記している．

班　告

さる12月8日（18年）総合戦力増強のため政府は出版関係に対する出版事業整備要綱を発表し，熾烈なる現政局下に不急不要と目される出版印刷物は極力整備する方針をとるに至った．その第一は官庁関係出版物の廃統合で，第二は日本出版会々員に非ざるものの行なう出版事業の整備である．この後者の対象となるものは同人雑誌，学校関係出版物等で，本校の高工時報も従来出版会会員に非ずして地方庁特定出版物用紙の割当てにより，印刷発行を続けてきたのであるが，今回の整備要綱によりその継続が非常に困難に立ちいたった．昨年後半期より，用紙配給減の為定期発行も出来ず休刊もしたが，右の様な次第につき読者の御諒承をお願い致す次第です．我々は創刊以来幾多先輩の築いた高工時報の学生新聞界に於ける名声を維持し尚一層の発展を期する為，折角努力してきたのであるが，国家の目的により用紙配給の再調整及び印刷業者の整備の為，ここ暫く従前の如き新聞の発行が不可能と思はれここに謄写版印刷を以て，縮小版をとりあえず発行いたすことになりました．尚次号の発行期日も未定です．我々は各方面と折衝をし，本校の如き分科せる学校の横の連絡及び先輩，父兄との連絡機関として諸君の御期待にそい得る学生新聞の発行に一層の努力を続けて行く覚悟でおります．

こうして班員一同の涙ぐましい努力により，わが高工時報はがり版ずりではあったが，19年4月28日付け第399号まで継続することができた．しかし時局はますます熾烈(しれつ)となり，ここに第399号をもって，歴史ある学校新聞の雄「横浜高工時報」は廃刊の辞を述べるに至った．

廃刊の辞

今年初頭以来用紙の減配並びに，印刷工員不足等の為に活字印刷を続けることが出来ず，謄写印刷を以て発行を続け，その間凡ゆる方面と折衝を行って来たが今回，内務当局より「学生新聞」発行禁止の命を受け，本校の「横浜高工時報」も当399号を以て廃刊することとなりました．班員一同万難を排し，従来の形式を備えた新聞を発行せんと忙しい学業の余暇を見ては昨年より東京横浜の関係方面を訪ねて種々交渉を続けてきたのであります．併しながら現戦局下国力の全部を挙げて戦争目的達成の為に向けている時，学生指導の第一線たる学生新聞の使命も愈々大切であるが重要物資輸送の為に用紙の配給はより重点的となり一応学生新聞は中止し，学業と勤労に専心する事となった．大正以来此処に400号を数えんとし専門学校第一の名声を得てきた「横浜高工時報」も発行中止に至りました事を御諒察下さい．

尚情報班としては今後一年生を主体として，益々動員先の校友と学校との連絡の必要性を生ずるので何らかの形を以て連絡機関となるべきものを考慮中であります．

弘陵雑報 発行

前述のように，高工時報は政府の禁止令により，399号をもって廃刊のやむなきにいたったが，学生と学校間の何らかの連絡機関が必要であったので，情報班（班長渾大防小平）では，月1回発行の予定で「弘陵雑報」を発行することとなり，19年5月がり版刷りの第1号を発行した．情報班のこの時の幹事は委員長山田信夫（航2）丸野隆二（機2）吉本実（化2）中川博司（機2）島村博（化2）古賀余一（建2）であった．

しかし，この弘陵雑報は1号のみでその後担当学生は全部勤労に出てしまい，残るは1年生のみとなり，あとが続かなかった模様である．詳しくは不明である．

69.　中等学校教員練成講習会

6月3日より9日まで本校主催で，関東地方中等学校理科教官に対し，科学技術練成講習会を

開催した．本校教授が各専門について講義をした．

70. 初の警戒警報発令

19年5月20日午後6時30分ごろ，神奈川県下に突如警戒警報が発令された．この警報は実に44時間の長きにわたり，翌々日の22日午後2時解除となった．戦争初期昭和17年4月18日にすでに空襲の洗礼をうけてはいたが，これがこれから終戦に至るまでつづいたあのいまわしい思い出の空襲の第1号であった．

応化森川教授の日記によると

◇5月20日土　5時頃一応帰宅，夕食をすまし，6時半頃子供を連れて散歩せんとする時，突然警戒警報のサイレン鳴りひびく，直ちに防空服装にて学校に馳せ参ず，7分かかる．生徒数名を指揮して配備をなし，其夜は学校に泊る．椅子上にて3時間半位寝る．12時頃猛烈な雨，真暗な中に一夜を明かす．

◇5月21日　前夜に引きつづき警戒す．午前9時頃交替一旦家に帰りて休み午後7時にまた出校す．9時頃までいて家に帰る．松尾氏宿直す．各科職員1名生徒10名の割にて宿することとせり．今日は星明りにて幾分明るい．

◇5月22日　8時出校，一年生徒大分集り先づ応一教室にて待機せしめる．ポンプの修理を行なう．10時青少年に賜りたる勅語奉読式あり．1時半新編成による編成を行なふ．余は警備班長なり．

渾大防氏と共に巡視し出席を調査す．この間警戒警報解除の報あり（2時頃）．2時半校庭に集合す．校長の訓示あり．3時解散す．4時半帰宅．

（注）大本営発表によるとこの長時間の警報は敵機動部隊が大鳥島に空襲したためのものであった．なおこの森川日記には空襲のことが克明に記されており以後6月15日69時間の警報，6月18日19時間，7月4日20時間とつづく．これらはいずれもサイパン島上陸作戦によるもので，九州地方も相当の爆撃をうけた．こうして7月9日サイパン島は陥落した．

71. サイパン島陥落　東条内閣総辞職

東条首相が「難攻不落」と豪語していたサイパン島も19年7月9日ついに陥落した．3万余の兵士と1万の市民が死んだ．米軍はただちに4トンの爆弾を積んで，日本本土を爆撃できる新式戦略爆撃機の基地建設を機械力にものをいわせて開始した．（中央公論社・日本歴史）

学園では7月17日の教授会で

1. 決戦体制の為職員の大半は工場へ動員
2. 1年生も勤労動員
3. 軍事教官応召の場合は体操教師あるいは職員中有資格者軍事教官となる．

などが校長より示達された．

7月18日夕，政府はサイパン島失陥を発表した．翌19日学園では，校長より訓話があり，一同黙とうをささげた．この日東条内閣は総辞職し，小磯，米内内閣が成立した．

72. 第23回卒業式

9月20日午前9時20分より講堂において第23回卒業式が挙行された．（記録なし）

この時の卒業式について鳥飼直親（応化19年９月卒現本学助教授）は次のように語っている．

19年５月，３年生は就職予定会社，工場へ動員という形で出され，陸海軍の依託生達は，それぞれの燃料廠，航空廠へと配属されていった．実質２年と少しの教育を受けただけだった．

19年９月の卒業式には，久しぶりで，これらの連中が，日本各地から集ってきて顔を合わせた．この時すでに何人かは軍隊にとられていた．

学校当局の心づくしで，しるこ（当時は貴重品であった）が，学生食堂で配給された．そして名教自然碑の前で，校歌と応援歌を歌って別れていった．

このあと10月１日ほとんどすべての学生は，陸海軍の技術将校，予備学生，特別幹部候補生などになって軍隊にはいった．明日という日のない青春であった．

73. 開校記念日に初の空襲警報

19年11月１日，午前８時50分より講堂で例年の通り開校記念式が行なわれた．式後10時より，校庭で運動会（尚武祭と称した）開催，12時昼食のため一旦休憩中１時ごろ突然サイレンが鳴り，始めは警戒警報であったが，ただちに空襲警報となった．敵機大型機数機京浜地区に侵入せりとの報あり，４時30分ごろ解除となった．これが空襲警報発令の初めであった．

こうして空襲が本格化し，爆弾が京浜地区に投下されだしたのは11月末ごろからであった．

74. 12月８日大詔奉戴日 開戦３周年を迎える

このごろになると敵機の来襲はひんぴんとし，敗戦の色が濃くなってきた．大本営発表の赫々（かくかく）たる戦果を信ずる者も少なくなってきた．

12月７日には，その筋よりの通知として学校へ７，８，９の３日間は，情勢危険のため休校して防空に従事せよとの報があった．果たしてこの７日から連日空襲があり，年末までほとんど毎日空襲警報のサイレンが鳴りひびいた．

12月８日開戦３周年記念日を迎え，本校では警報下の間隙（かんげき）をぬって午前８時より大詔奉戴日記念式典を挙行，その後消防演習を行ない10時解散した．この日は午前２時ごろと正午ごろ２回警報が発令された．

なお，12月７日遠州灘に相当の地震があり，静岡地方にかなりの被害があったが，言論統制で新聞には一語も報道されなかった．

75. 空襲はげしく 年暮れる

森川日記により，19年末の防空に追われた師走の学園をふりかえってみる．

◇12月９日(土)晴　午前２時15分頃警戒警報，学校に赴く，１機帝都上空に侵入，東方に焼夷弾落下せりと，３時頃解除．この頃はほとんど対空生活に追われて無為に暮しているようだ．午後８時警戒警報．９時解除．

◇12月10日(日)晴　隣組防空壕掘る．午前８時警戒警報，８時30分空襲９時頃解除．

◇12月11日(月)晴　午前３時警戒警報発令３時20分頃空襲，川崎方面焼夷弾落下，高射砲の音殷々，３時40分解除，連日の空襲神経戦なり．

◇12月12日(火)晴後曇　0時10分警戒警報，1時10分解除，3時警戒警報，4時解除，とうとう洋服のまま寝る．7時30分警戒警報，直ちに空襲警報10分後すぐ解除，8時50分頃再び警戒，空襲，退避，9時30分解除，新聞来ぬ．

◇(中　略)

◇12月25日曇　大正天皇祭3時警戒警報5時解除，神奈川方面焼夷弾落下．

◇12月26日晴　今朝は久し振りにて敵機来らず．

◇12月27日晴　11時58分警戒警報，12時7分空襲警報2時解除，情報によると敵機編隊帝都空襲，夜9時警戒警報2時間．

◇12月28日晴　3時30分警戒警報3時40分空襲警報4時30分解除，今日は化工教室を警備す．

◇12月29日晴　この朝東北地方空襲警報ありたる由．

◇12月30日晴　12時半頃警戒警報，再3時半頃警戒警報．

◇12月31日晴　今年はお正月の用意もせず，多事なりし今年も終れり，22時頃警報24時頃再び警戒警報．

76.　19年学園人事

19年1月10日		臼井　亨一	任教授（兼横浜高商教授）
1月10日	教　授	佐野　朝男	依願免本官
2月12日		鈴木　　勝	任東工大助教授
〃		本間　淳治	任教授
〃		石川　房治	〃
2月29日		和田　正三	任助教授
3月31日		山田　大十	〃
〃	助教授	羽田　義雄	依願免本官
〃		小田代恒正	任助教授兼文部技手
4月28日	教　授	本間　淳治	依願免本官
5月1日		生野　　昇	任助教授

77.　昭和20年を迎える

元日午前零時警戒警報発令．昭和20年は警報で迎えられた．午前4時ごろ再び警報発令，今年の多事多難を思わしめた．午前9時講堂で拝賀式挙行．

この大晦日（おおみそか）に宿直に当たった木下教授は忘れられない日として次の通り述べている．

機械の二宮さんと宿直していたら夜10時，12時，元日の朝5時とつづけざまに警報が出た．元日の朝は木戸先生のお宅でお雑煮を頂いて帰った．

78.　在郷軍人横浜工専分会発会式

20年1月8日午前8時，大詔奉戴日に在郷軍人会横浜工業専門学校分会発会式が挙行された．

竹内分会長のあいさつがあり，渡辺教官の音頭で在郷軍人会会歌を合唱，ついで10時より伊勢山皇太神宮へ行軍，武運長久を祈願した．

79. 勤労動員と授業

今後の勤労動員については２月５日の教授会で次のように決まった．

(1) 新入学生は６月末日まで中学時代の勤労先で勤労

(2) 目下動員中の２年生はこのまま４月，３年生に進級し，そのまま勤労をつづけ，６月末日を以て勤労を終り，７，８，９の３ケ月間学校で授業（重点授業，仕上）

(3) 目下勤労中の１年生は３月末日を以て勤労を終り，４月より６月まで学校で授業，又目下学校で授業を受けているものは４月より動員（前者と交替の意味あり）而して何れも２年に進級

以上のように決まったが，各科の動員状況については資料がなくほとんどわかっていない．ただ建築科の動員先が比較的よくわかったので，次に記しておく．機械科の分は卒業生からの聞き書きである．

◇建築学科２年生（昭和22年卒予定者）

20年５月～８月	陸軍航空本部（のちの航空総軍）経理部	20名
	運輸通信省建設課	20名
	軍需省航空兵器総局	10名

（注） (1) 陸軍航空本部経理部の20名はさらに次の各部隊にそれぞれ配属された．経理本部，松本総工事隊本部，宇都宮総工事隊本部，同黒磯分遣隊，同壬生分遣隊，西筑波工事隊本部，同竜ヶ崎分遣隊，同下館分遣隊，第一特設作業隊

(2) 運輸通信省建築課はさらに次の機関に配置された．運輸通信省建築課，同橋本自動車工機部，同東京施設部，同技術研究所

◇機械科２年生は４月初め勤労動員で，東京航空計器（新丸子）へ動員されたが同工場が３月に全焼したので，５月日産，石川島航空発動機などへ動員され，そこで終戦を迎えた．

この時の動員について木藤広太郎（建築２年）は次のように語った．

> われわれ（木藤，石坂貞夫，荒井光男他３名）は５月20日頃千葉県東葛飾郡田中村十余二の第一特設作業隊に配属された．そして特攻機“秋水”の基地建設工事に従事，主として測量などを行なった．山をくりぬいて地下に燃料貯蔵タンクを建設する工事であった．７月になると６名のうち３名は東京戸山ヶ原の地下大本営建設現場へ転属した．８月16日動員解除となった．

80. 電気通信科の増設

昭和20年４月電気通信科が増設された．そもそも本校に電気科増設の話が出たのは昭和４年のことであった．この時本校では造船工学科をひき受け，電気工学科を取りやめたことについてはすでに「造船工学科の新設」の項で述べた通りである．その後鈴木校長は，果たしてこの交換が当を得たかどうか，その衝に当たった私としては絶えず責任を感じていると語った（昭和７年卒業式の校長式辞参照）．本校ではそれ以後再三にわたり，電気科増設の申請をくりかえししていたが，なかなか実現にはいたらなかった．ところが戦争も終戦近い昭和20年冨山校長，藤川由太

電気通信科開設当時の本館

郎教授（電気工学，実験担当）内田綱記（電気実験）などの熱心な増設要求が実を結び，電気通信科として増設が実現するに至った．これは従来共通基礎及び配電監理をしていた電気部門が中心となって推進されたが，設立当時は人も物も何もかも不足勝ちであった．しかし，まがりなりにも発足した．教官としては新しく高瀬光蔵，竹前一男を，少しおくれて同年7月に武田進を迎えた．教室としては機械科が以前に使用していた木造の建物をあてた．20年4月には，40名の第1回生が入学してきたが，当時学校内に東芝の工場* が疎開してきていたので，午前中は授業，午後はこの疎開工場で働いた．その点は他科の学徒動員に比べて恵まれていたといえる．（本項主として電気工学科同窓会報20周年特集号　横浜工業高校副校長竹前一男記による）．

なお終戦後電気通信科は電気科と改められた．

（注）　昭和20年4月，東京芝浦電気(株)電子工業研究所（所長浜田成徳）は横浜高工（横浜工専）に疎開工場を置き横浜分室（分室長今井春蔵）と称した．同年4月入学した電気通信科の学生は全部この分室に勤労動員された．

分室長今井春蔵は後年次の通り語った．

「会社の従業員は約100名でうち20人位は女子挺身隊であった．高工の電気通信科の学生はそのままここで勤労動員された．今の本館の下が事務所で上が工場だった．学校の近くの民家を二軒借りて寮にした．空襲があるとうしろの弘明寺の山の防空壕へはいった．私はその縁で終戦後3年間ばかり高工電気科の講師を委嘱された．」

81.　決戦下の入学試験と入学式

戦争はいよいよ熾烈となり，本土空襲は絶え間なく続いた．しかし入学試験は例年の通り2月に行なわれた．2月5日，6日が一次選考試験，9日一次発表，21日筆答試問，22日口答試問，25日2部口答試問とつづけられ，3月1日発表された．この間受験生は鉄かぶと防空頭巾，巻脚絆（きゃはん）に身をかためて学校へ集まったきた．学校側も大変であった．万一に備え試験問題なども甲乙丙3通り用意して金庫に入れたりした．

4月2日入学式が挙行されたが，授業は当分ないので，今までの会社，工場で勤労奉仕をつづけ，何分の通知あるまで自宅待機を命ぜられた．このころになると空襲はますますはげしく交通

機関が乱れてきた.

この日の森川日記によると

「4月2日午前2時頃警報，間もなく空襲警報，一同起き出て準備，B29約40機帝都西方地区に侵入照明弾，焼夷弾，時限爆弾を混用投下．午後1時より入学式，今日は機械科と化工科のみ，式終って生徒並に父兄を校内案内す．4時半頃終了」

82. 横浜初空襲　4月4日

この入学式後一日おいた4月4日，横浜市は初の爆撃を受けた．この日未明3時から4時にかけて戸部，高島町駅方面，ビクター，横浜ゴム，川崎市京町，大師方面に爆弾，焼夷弾，照明弾が落下，各地に火災がおきてその方面の交通が不通となった．学校では登校の生徒15，6名でガス，水道が一時とまり授業はなかった.

83. 学校疎開案と冨山校長の反対

戦争末期に文部省首脳部の間で，横浜高工が音頭を取ってその施設の一部と教官を山梨に疎開して，全国の官立専門学校から学生の代表を選んで集め，工業教育を行なったらどうか，という案が立てられ，冨山校長などにも内相談があった.

冨山校長は関東大震災のとき鈴木校長が断固，焦土残留復興の英断に出たことを想起し，疎開等に反対し，弘陵の学園を守った.

幸いにして戦災の危うきをまぬがれたことは本校にとって仕合せであった．すなわちこのため多年蓄積した施設，特に永年にわたり苦心して収集した貴重な図書，文献を喪失しないで保有し得たことは本校，さらには学界にとっての幸いというべきであった.

84. 学制の変遷　学校の教育的玉砕

昭和16年以降日支事変が大東亜戦争となり，年ごとに戦時体制が強化され，学校に対する文部省の考え方も戦争という至上命令によって苛烈をきわめ，終戦間近には，ついに軍教一如と称し，学業を放棄せざるを得ない状態となった．今その移り変わりを記してみる.

昭和16年戦時体制となり，国防上多くの要員が必要とされ「国家総動員法」「国民徴用令」が公布された．昭和16年10月勅令をもって，大学学部の在学年限，大学予科，高等学校，専門学校，実業専門学校の修業年限を当分6カ月以内短縮することが決められた．文部省はこの勅令に基づいて，大学，専門学校，実業専門学校の修業年限を3カ月短縮し，昭和17年3月卒業予定の学生を同16年12月に卒業させることとした.

さらに昭和17年度からは，修業年限を6カ月短縮して9月に卒業させることとした.

つぎに18年1月，大学令および高等学校令を改正し，大学予科および高等学校の修業年限をそれぞれ短縮して2年とし同年中等学校令をも改正してその修業年限を4年とした.

このような年限短縮をするため，諸学校令の改正が行なわれた際に，教科の刷新，教授力の充実，訓育の徹底，教育者の確保などが行なわれ，教育機関の戦時体制を整えることとなった.

戦争の局面はいよいよ急を告げ本土決戦が叫ばれた．昭和20年３月18日，政府は決戦教育措置要綱を閣議で決定，国民学校初等科を除き，学校の授業を昭和20年４月１日から翌年３月31日まで１カ年間，原則として停止することとした．

20年５月22日，勅令をもって戦時教育令が公布され，同日戦時教育令施行規則が省令を以て示された．それによると，学徒の本分は尽忠報国の精神を以て，戦時の緊要な勤労に従事し，かつ知識修得に努めることであるとし，教職員は率先垂範，学徒と共に戦時の緊要な業務に従事し，学徒の薫化啓導の任を全うすべきであると規定されている．決戦体制下において，学徒を食糧増産，軍需生産，防空防衛などの要務につかせると共に，戦時に必要な教育訓練をするため，学徒隊を各学校ごとに組織し，地域ごとには，その連合隊を組織することとした．

この戦時教育令が公布されて，実際に学校は授業を停止したのであるから，学校教育はこれを実施することができなくなり，教育はその機能を全く失ったものといわなければならない．この意味で戦時教育令はまさに学校の教育的玉砕を指示したものであったといえよう．(学制90年史)

本校はもとより文部省直轄の高等専門学校であったので，本校の戦時中たどった道もこの道以外ではあり得なかったことは，その都度各項で述べた通りである．

85.　授業を１年間停止　ただし本校では継続

前項（学制の変遷）でも述べたように20年４月１日から向こう１年間(国民学校初等科を除き)学校の授業を停止することとなった．当校では４月９日の定例教授会で，当分何分の指令あるまで，授業はできるだけ継続することに決め，４月９日ともかくも授業を開始した．

86.　戦時研究依頼　白樺油

20年５月政府は本校に対し，白樺油の研究を命じた．

森川教授（化工）は代表として５月９日技術院へ出頭，小山第４課長と打合わせた．本校では阿部，木下，森川教授らが協力して研究に従事した．しかし間もなく終戦となり，研究の完成をみなかったことは遺憾であった．

87.　神奈川県と空襲

「空襲警報発令，空襲警報発令，相模湾より進入せる敵機の編隊は北上して……」とラジオ（当時はまだテレビはなかった）が報ずると，きまったように横浜，川崎に火の手があがったものだ．神奈川県がB29の本格的な空襲を受けたのは，昭和19年11月からであった．

県の調査によると本県では終戦までに計70回の空襲があり，県内の死者は5,931人，負傷者16,185人，被災者587,071人にのぼった．この70回の空襲の内わけは，横浜25回，川崎18回，横須賀８回，藤沢７回，平塚５回，小田原４回，鎌倉３回であった．

横浜25回のうち特にはげしかったのは20年４月15日，５月29日，８月12日の３回であった．４，５月は現在の中区，西区，南区，神奈川区，保土ケ谷区などが被爆，８月12日は鶴見，川崎の臨

海工業地帯が中心であった．この結果，横浜の被災面積は全市の48%に上った．

なお終戦直前に県が調査したところによると，19年暮れ以来県下に投下された爆弾は5,943個，焼夷弾510,983個となっている．（読売新聞社横浜支局編・神奈川の歴史による）

88. 空襲と本校　5月29日の大空襲

5月29日の大空襲は正に本校に爆弾の雨が降るかと思わせる寸前で，不思議にストップしたが，それ以前にも数回本校上空に敵機が飛来した．前記森川日記を再び借用しておもな空襲を記してみる．

◇4月7日(土)晴後曇　午前7時30分警戒警報　8時出校，9時頃空襲警報，B29（中にP51若干）約100機，本校上空を経て関東北部を爆撃．

◇4月16日(月)晴

15日午後11時半空襲警報

午前1時半頃　堀ノ内火災，同じく学校南側民家火災生ず，学校へ駆けつける．自宅防空壕に高射砲破片落下す．知人および学生に被害者数名あり．

◇4月19日(木)雨　10時空襲警報　P51．50機，B29．3機，中P51．数機は本校上空に機銃掃射，食堂に落下，通町一丁目火災発生す．

◇5月24日(木)曇　午前1時空襲　直ちに登校整備す．

◇5月28日(月)晴　9時1年生招集　体操分列，校長の訓話あり．この間P51，30機来襲につき一旦警備，午後各教室に於て教授の説話．

◇5月29日(火)晴若干曇　朝出勤前警報出づ，9時空襲B29．500機以上P51．100機以上主として横浜を襲う．地下室防空本部に於て，警備中愈形勢悪く，市内各所に火災発生，蒔田方面も火の手上る．

校長に注意され，初めて宅を検分（注 森川教授宅は蒔田）南側の数軒先の処が3軒ばかり燃えたるも隣組の人敢闘遂に消火し49組助かる．10分間ばかり様子を見て再び学校に引き返す．校長に報告．

5時帰宅．隣の組の稲葉氏宅に時限爆弾落下の由にて河向うは立退き，10時就床すれどもなかなか寝つかれず，焼けあとはまだ火気盛んであった．

かく大量日中来襲は初めてなり．

なお5月29日の空襲については冨山校長が後になって次のように語っているので，参考までに記しておく．

5月29日の空襲　冨山校長

空襲時には私は学校本館の屋上に4，5名の同僚と共に佇立してB29がその猛威を恣にする模様を，残念の歯をくいしばりながら，仰ぎ見ておった．海岸方面から逐次山手に向って焼夷弾が落下し火災の起る模様が手にとるように見え，遂には我校もその餌食となるかと観念しておったが，その寸前通町3丁目近くで急に焼夷弾落下が中止された．実に幸に空襲をまぬがれて蘇生の思いをした．

横浜空襲の思い出　古賀基夫（電化23年卒）（DENKA No. 6 りよ）

横浜の空襲のはじまったのは午前10時ごろからであったろうか，轟々たる爆音，500機のB29がところきらわず爆弾，焼夷弾，機関銃弾の雨，空は忽ち夕闇と化し時々高射砲の音が聞こえる．まさに生きながらの地獄図であった．学生はごく少数各研究室で研究に従事し，他はすべて学徒動員令により軍需工場で生産につとめていた．空襲は約1時間で終ったが通町3丁目，弘明寺を残して横浜は焼けた．市電のレールも飴のように曲っていた．僕は弘明寺の河村教授宅に一泊し，翌朝出発して夕方6時ごろ東京品川の家にたどりついた．

89. 吉田嘱託一家戦災死

この5月29日の大空襲の時，本校教務課勤務の吉田昌興はその妻および長女と本牧の自宅で焼夷弾を受け死亡した．本校多数の職員中不幸爆死の災を被ったのは，この一家のみでまことに悲惨のきわみであった．

同氏は横浜貿易新聞から本校に転じ，長く高工時報発行にその新聞記者時代の才能を生かし，のち図書室勤務となった．

90. 8月15日終戦

20年8月にはいると戦局は全く絶望的となり，8月6日広島に原爆投下，つづいて9日ソ連対日参戦，長崎に原爆投下となった．本土決戦間近しの声が充満し，一方いろいろのうわさが流れた．

◇8月13日　朝より空襲，艦載機わが上空にも数度飛来，5時半頃空襲警報解除さる．約10時間なり．
◇8月14日　愈々時局まさに危機にして種々の噂あり．加藤教授休講の為補講をやらんとすれども生徒集らず，二部化工生同様，11時頃空襲，B29各地に来襲す．登校警備す．明日重大発表ある由，（森川日記）

そしてついに8月15日となった．午前6時30分ごろ，またまた横浜へ空襲，機銃掃射があった．森川日記によるとこの横浜への最後の空襲は第184次となっている．これは日記にのっている警戒，空襲両警報を数えあげた数字であった．

正午には重大放送がある旨前日よりラジオは報じていたので，学校内庭に冨山校長以下職員，生徒一同は国民服のえりを正して，備付けのラジオの前に並んで玉音放送を待った．

12時の時報，君が代奏楽ののち，天皇自らの終戦の詔書の朗読，つづいて内閣告諭があった．放送は雑音が多くよく聞きとれなかったがポッダム宣言受諾，日本ついに敗れたりということはどうやらわかった．一同はしばらくは茫然自失，そのうちすすり泣きの声があちこちに起こった．

翌8月16日午後3時，職員生徒一同講堂に集合，動員学徒もぞくぞく学校に集まってきた．冨山校長の詔書奉読ののち訓示があり，ついで鈴木前校長の訓示があった．（いずれも内容の記録が残っていない）

こうして勤労学徒は職場をそれぞれ解除となり，故郷へ帰るべきものは早々に帰郷した．この終戦前後のことについては20年入学，23年卒建築の佐藤仁（現本学助教授）が次のように述べている．

終戦前後のこと　佐藤　仁

7月上旬になって登校通知がきた．新子安の日産自動車工場に集合寝具を持参せよということであった．そこへ勤労動員として入所した．山手のフェリス前の外人住宅が寮で建築科の新入生全員が入寮した．これは8月中旬から栃木県の矢板の車体工場へ動員されるための約1カ月間の準備教育であった．

当時建築科は大岡小学校に疎開していた．寮の食事は豆粕に米少量，汁，ひものなどであった．蠅が一杯たかり下痢や疑似赤痢に罹る者が続出，帰省する者も出た．全員栄養失調でフェリスの横の220段の階段を登れず途中休み休み寮にたどり着いた．

階段の横に海軍（当時フェリスは海軍鎮守府）の厨房があり残飯が捨てられているのに腹がたった．

横浜港には小舟は一隻もなく，ただ対岸（瑞穂埠頭か）に傾いた航空母艦が繋留されていた．

校門には衛兵所があり，本館の一部が陸軍に使われていたらしい．

8月15日正午，教職員および登校していた全学生が天皇陛下の玉音放送があるというので中庭（現在図書館のあるところ）に集合した．しかし放送は全く聞きとれず，決戦か終戦か分らなかった．終戦と知ったのは数時間後であった．

冨山校長から訓示があり帰省して自宅待機せよとのことであった．

当日夜寮生は悲憤慷慨（こうがい）やるところを知らずであった．海軍鎮守府から食糧の配給を受け，荷物を整理して全員寮を引きあげた．

当夜の市内は大混乱で市電はストップ，女，子供は米軍の進駐をおそれ横浜から脱出した．

そのうち米軍が進駐，伊勢佐木町に飛行場ができ，市内の大部分が米軍施設と化し，米軍のトラックやジープが走り廻っていた．

91. 必勝懇談会と首相官邸襲撃事件 （終戦悲話）

終戦の日8月15日未明，日本全面降伏を知った一部陸軍将兵（約40名），および学生数名が首相暗殺を目的として，永田町の首相官邸を襲撃した．この学生達の中に本校生徒数名がはいっていた．生徒たちは鈴木前校長が主宰していた必勝懇談会の幹部であった．

この事件については，鈴木前校長が自ら煙洲残筆に「必勝懇談会と首相官邸等襲撃焼打事件」として書いているもの，および第三者が記したものをここに載せておく．

この襲撃事件は後に「日本の最も長い日」として映画にもとられており，終戦前後に起きたいくつかの終戦悲話の一つであった．

(1) **必勝懇話会と首相官邸等襲撃焼打事件** 煙洲残筆 鈴木達治（抜粋）

……そこで私は必勝懇談会を作り，私が会長となってこれを総括することとした．この会は戦争を有利に導くため，戦意の向上と生産の増強を目的としたもので，会員の多くは高工の学生や市の有志の人達であった．事務所は若尾ビルにおいたが，事務員と電話位を持っていたに過ぎない．それでも多少の経費が要るので，学生外の会員有志の寄附に依ったのであった．

依頼に応じて，私は時局に対する講演会や座談会の席に列し，盛んな頃は毎日の如く出掛け，時には一日に2ヶ所の会合に出席した事もあった．そして終戦までに諸種の催しに参会すること200回に及んだのであった．

……切角銅鉄の徴発をしても，そのまま放置され，闇取引や横流しは半公然と行なわれる状況で，これら戦争妨害の事件を捉えて問題にしても，大きい反応のなかったことに，私は些かがっかりせざるを得なかった．……必勝懇談会は又時々ビラを撒いて目的達成に努めたが，そのビラが当局の意に触れ，それが為禁止されたり，召換を受けたり，警告を喰ったりした事もあった．我々はその文句の中に，決して嘘は述べていない．ただ時局の真相を具体的に伝えた廉々によって警告を喰い禁止に逢うたのである．

かれこれするうちに，終戦の時期は近づき，不穏の沙汰が我々の耳にも入るようになり，8月14日に至ると世間は息づまるような状態にまでなった．午後4時過ぎ事務所へ一寸立寄ってみた．ところが会員の幹部である高工の学生3，4名と平生あまり出入りしない2，3の連中が居り，不穏のポスターを沢山持って，将に市中に貼り歩いて広告しようとする一歩手前であった．ポスターに必勝懇談会の名があるのをみた私は思わず怒鳴った．「誰が必勝懇談会の名を用いたのか，私は会長である．一体誰が許可したのか．」と平生は殆ど怒声を発したことのない私もこの時ばかりは繰り返し叫んだのであった．連中一同は恐縮して直ちに中止することとしたのであった．

翌15日は，正午に陛下の御放送があるという日である．御放送の趣旨は大体想像されていた．朝の10

時頃，県の刑事と憲兵が数名私宅に押し掛けてきたので，私は何事であろうと驚いた．彼らの話によると，今朝早く必勝懇談会の連中が隊をなして，首相官邸を襲ったが目的を果さず，鈴木首相の私邸と，平沼枢密院議長の私宅を襲撃し両家を焼き払い，そして一部の者は捕えられ，他の者は逃げた．ということで「あなたは，この連中の属する必勝懇談会の会長であるから，詳しく事情を承りたいと」糺すのであった．私は大いに驚いた．と同時に初めて昨夕宣伝ポスターを貼ろうとした意味が読めたのである．若し私が昨日激怒する前に，彼らとその間の事情を問答していたならば，或いは未然に防ぎ得たのではないだろうかと，立腹の余り叱り飛ばした昨日の自分を悔んだのであった．私は「直接にも間接にも，焼打ちには全然関係はないが，道義上の責任は総て負う覚悟をして居ります」と答えたのであった．そのうち午近くなったので，刑事と憲兵に，陛下の御放送の時刻であることを告げ，ラジオの前に集り起立して聴いたのである．この御放送を涙なくして聞いた者はなかったであろう．我々も粛然として一語もなく，ただ低頭し沈黙するのみであった．そして彼らは別れを告げ，そのまま帰って行った．

昼食後，私は山下町の憲兵屯所に行こうと家を出た．学校の前に出る途中で2組の学生が，私宅を訪問しようとするのに出会ったのであるが，彼らの中には路上で声をあげて泣く者もあって，敗戦が如何に大きい衝動を与えるものかを，しみじみ感じたのであった．憲兵屯所では，知っている限りの事実と心境を述べたが，留め置く様子もないので，私はそのまま帰宅した．

翌日になると焼打ちに参加して逃げた者の一人が私宅に来たので，諄々と話し，彼は大岡署に自首して留置せられた．私は又東京警視庁にも出かけて憲兵隊と同様に申し出たのであったが，この件に関しては何の音沙汰もなきまま数日が経過した．ところが20日過ぎになって，首相となられた東久邇宮殿下から，この事件をそのままにして置けないので調査せよとの命があって，東京から刑事が2名面会を求めて私宅を訪れた．そして逃亡した事件関係者の一部を私が保護している疑が濃厚であるとして，訊ねたり尾行したりするのであった……．

逮捕された連中は，その後何れも5年の刑を申し渡され服役したが，2年半で特赦となり出所した．その中，学生が4人居り何れも卒業期の者であったので，私は卒業証書を貰ってやろうと種々骨を折ったが容易に果し得なかった．種々努力の結果彼らが出所後2年有余で再入学の手続きを経て卒業証書は下附され，この問題は一段落となったのである．

(2) 鈴木首相襲撃の一隊 （読売新聞社編・日本終戦史上巻より）

“終戦”が波紋を巻き起こしたのは，もちろん中枢部の陸軍省ばかりではなかった．8月15日，全国各地の軍隊で，大小さまざまな渦が巻き起こった．

近衛連隊が皇居を占拠していたころ，永田町の首相官邸は，東京警備軍第3旅団に所属する旭部隊横浜隊の佐々木大尉が率いる一隊によって，襲撃されていた．彼らは，佐々木大尉の部下将兵約40名と横浜工業専門学校，東京工業大学の学生数名とで，学生はいずれも前横浜工専校長の鈴木達治の指導する必勝懇談会の幹部たちであった．

彼らは鈴木首相を暗殺する目的で，横浜から軍用トラックで上京，機関銃3丁を官邸の表門に据えて，激しい機銃掃射を行なった．だが鈴木首相が官邸にいないと見ると，その小隊は小石川区丸山町の首相私邸に向かった．

その間に首相は，官邸からの連絡で私邸を脱け出て，いち早く本郷西片町の実妹の家に着いた．この時，同行した秘書官が首相の行く先を一応連絡しておこうと私邸に電話をかけたが，電話口に出てきたのは，すでに私邸を占領していた暴徒の一人だった．秘書官はそれと知らず「首相は西片町におりますから」と穏れ家を告げてしまった．「なにっ！」という荒々しい返事に，電話口の相手が暴徒だと気づいた秘書官は，あわててまた，芝白金にある実弟鈴木孝雄陸軍大将の家に首相を避難させた．私邸でも首相を発見できなかった彼らは，重油をにじませたボロ切れに火をつけて，邸宅を全焼させた．一隊はさらに，平沼騏一郎枢密院議長邸をも襲って，屋敷を焼いた．

(注) ただし，会長の鈴木達治は，この官邸襲撃の計画を全く知らなかった．あとで焼き打ちに参加した学生の一人が逃げてきたとき，自首を勧め，また，会長としての責任上，首相あてに謝罪文を出し

たりしたくらいだ．逮捕された学生たちは，いずれも5年の刑を課されたが，特赦で2年半で出所した．首謀者の佐々木大尉は逮捕をまぬがれ，ついに捜査を打ち切られた．

これについて阿部滋弘教授（応化）は昭和41年の応化会雑誌カタリストに次のように述べている．

痛ましい記録　阿部　滋弘

もう一つの痛ましい記録は終戦の時，無条件降伏に反対する数名の応用化学科の学生と一分隊とが機関銃を持ってトラックに乗り鈴木貫太郎首相の官邸を襲撃したことである．首相は裏口から逃れてわづかの違いで無事だったが，官邸に放火してかえり自首した．「戦時放火」で皆死刑になるところ，一人が獄死した外は数年の刑務所生活の後ゆるされて出所，今それぞれの仕事をしている．

戦時中のあの国内情勢の中で育った学生の命をかけてのひたむきな主張はこれを責めるのが無理であった．これは昭和秘史として公表されていなかったが1年ほど前に初めて公開された．

第2章　第4節　終戦から新制大学となるまで（昭和20年～昭和24年）

本節では終戦後から新制大学に移るまでの期間を述べるが，戦後の混迷のため，学校に残された資料はほとんどないので，わずかに先人の記しておいた残簡や，思い出話などをもととしてできるだけ正確を期したが，なお脱落した件や不十分な点は免れないことをおそれる．

一般概況

降伏と同時に，日本は連合国の支配下に置かれたが，事実上はアメリカ軍の単独占領であった．

20年9月22日「アメリカ合衆国の対日占領の初期の基本政策」が発表された．降伏の時から21年4月ごろまでは，GHQ（占領軍総司令部）はポツダム宣言にしたがって，日本の民主化，非軍事化に熱中した．日本軍事機構の解体，戦争犯罪容疑者の逮捕，政治犯人の釈放，男女の平等同権，労働者の団結権，争議権，罷業権，教育の自由主義化，財閥解体，農地改革，天皇の神格化の禁止等々の指令が矢つぎ早やに20年末までに発せられた．

21年1月1日，天皇の人間宣言，同月4日，戦時中の軍国主義指導者および旧職業軍人をいっせいに公職から追放（この追放は21年中を通じて拡大され政治，経済，教育，言論，労働その他各界の指導者8万6,000人に達した）が指令された．

終戦と同時に生産は極度に低下し，20年末は工鉱業生産数量指数は，戦前平均の13%，21年4月に至っても20%しかなかった．生産の荒廃，兵士の復員，海外からの引揚げで，21年春には失業者600万人，半失業者を加えると1,000万人を越えた．インフレーションは日ごとに悪化し，労働者の実質賃金は戦前の1/4～1/5に低下した．20年秋の産米は戦前平年作の6割，3,913万石と称せられ，主食の配給もとだえがちであった．21年春から夏にかけては，餓死者も少なくなかった．人々は1日中空腹を抱え，ボロをまとい，バラックの中でようやく雨露をしのいだ．

21年4月10日，新選挙法による第1回総選挙が行なわれ，464人のうち39人の婦人議員が誕生し，5月22日第1次吉田茂内閣が成立した．なお5月1日戦後初のメーデーが行なわれ，東京では50万人が人民広場（皇居前広場）に集まった．また5月19日食糧メーデーが行なわれた．

21年8月民主的な教育理念と，学校制度をつくるための教育刷新委員会が設置され，11月3日日本国憲法が公布された．（施行22年5月3日）

22年2月1日突入予定のゼネストは，その直前の1月31日午後，マッカーサーの直接の禁止命

令で中止された．4月1日6•3制教育が始まった．4月25日には旧憲法最後の総選挙が行なわれ5月24日片山哲内閣が成立した．

23年3月芦田均内閣，同年10月第2次吉田茂内閣と移り，24年2月第3次吉田内閣が成立した．このころからアメリカの対日政策は大きく転換した．吉田内閣はアメリカの新しい対日政策の線にそって国内の経済政策をおしすすめた．すなわち経済9原則，いわゆる「ドッジ・ライン」の強行などがそれであった．（主として岩波新書・日本の歴史から抜粋）

教育関係の概況

(1) 文部省の応急措置

文部省では敗戦後の応急措置として，20年8月22日，国民学校から大学までの授業は，大体戦前の状態に復し，各校とも9月中旬から授業を行なうよう通牒（ちょう）した．

つづいて9月14日には「新日本建設の教育方針」を発表した．これはもちろん百年の大計を述べたものではなく，これまでの軍国調を教育界からなくしようという応急的対策と見るべきものであった．すなわち「国体の護持に努むると共に，軍国的思想および施策を払拭し，平和国家の建設を目途として謙虚反省，ひたすら国民の教養を深め，科学的思考力を養い，平和愛好の念を篤くし，智徳の一般水準を昂めて世界の進運に貢献する」というものであった．

(2) 連合軍総司令部指令

20年10月22日，連合軍総司令部は，日本政府に対して占領軍の教育の目標ならびに政策を明示した指令を発し，日本人の民主主義的思想を助長するための再教育方針に関して，初めて公式の措置をとった．

> この指令の全般的な目標は，軍国主義的かつ極端な国家主義的な思想の流布を防止するにあり，軍事的教育ならびに訓練を禁止し，国際平和ならびに個人の尊厳に関する教育の実施を規定しており，その内容の主なるものは次の通りであった．
>
> (1) 軍事教育および訓練の禁止
>
> (2) 略
>
> (3) 職業軍人，軍国主義および極端なる国家主義の主唱者の罷免
>
> (4) 教師および教育関係官吏で，自由主義あるいは反軍国主義の思想，活動の故を以て休職あるいは辞職させられた者は再任命してよい．（以下略）

(3) アメリカ使節団来朝

21年3月，アメリカ教育使節団（ジョージ D. ストッダード博士を団長とする27名）が来朝，3月いっぱいを費やして，日本の教育全般の調査を完了，マッカーサー元帥に報告書を提出した．この報告書は，日本教育の今後のあり方を明示した．

(4) 教育刷新委員会の発足

21年8月9日，教育刷新委員会成立，これはアメリカ教育使節団の日本側委員会が拡充強化されたもので，教育制度につき内閣総理大臣に報告ならびにその諮問に答えるもので，委員長安倍能成前文相以下38名の委員からできていた．

本委員会は22年８月までに総会を開くこと39回，９部の特別委員会を設け慎重な研究と討議を重ねて24回にわたり内閣総理大臣に建議した．

(5)　教育勅語の問題

21年10月８日，各学校長にあて「勅語および詔書の取扱について」の文部次官通牒が発せられた．

このうちには，式日等には教育勅語を読まないこと，また勅語を神格化しないこととなっていた．

(6)　教育基本法の制定

22年３月31日，教育基本法が公布施行された（昭和22年法律第25号）．これにより新しい時代にふさわしい教育理念ならびに根本方針が確立明示された．

(7)　学校教育法と新学制

学校教育法は22年３月31日公布，４月１日施行された（昭和22年法律第26号）．これはアメリカ教育使節団の報告書の線に沿い，教育刷新委員会の建議に基づいたもので，いわゆる６，３，３，４の新学制を定めていて，従来の学校制度を根本的に改変したものであった．これによって新制大学の設置となるのであるが，これについては後述する．

(8)　陸海軍諸学校生徒転学

陸海軍諸学校出身者または在学者で，復員してきた者のために，政府は文部省管下の諸学校を開放することとなり，転学あるいは入学の許可を閣議決定し，20年９月６日その要領を発表した．

高専の臨時の入学期は９月15日で，学科試験は行なわず口頭試問と身体検査のみであった．なお在学中入団，入営，応召したものは再入学の手続きをとらせることとなった．（以上主として朝日年鑑および学制90年史による）

1.　終戦直後の苦難　校舎接収命令

顧みれば，昭和20年は日本にとってまことに大きな年であった．終戦直後の冨山校長，鈴木前校長の肺腑（ふ）をえぐる終戦の辞は忘れることができない．誰も彼もが茫（ぼう）然自失の数日であった．

森川日記（森川幾久雄　応化教授　前出）によれば「８月16日，動員学徒三々五々来り将来を問うも国の方針確定するに至らず，午後３時職員生徒，講堂に於て詔書奉読，校長および煙洲翁の

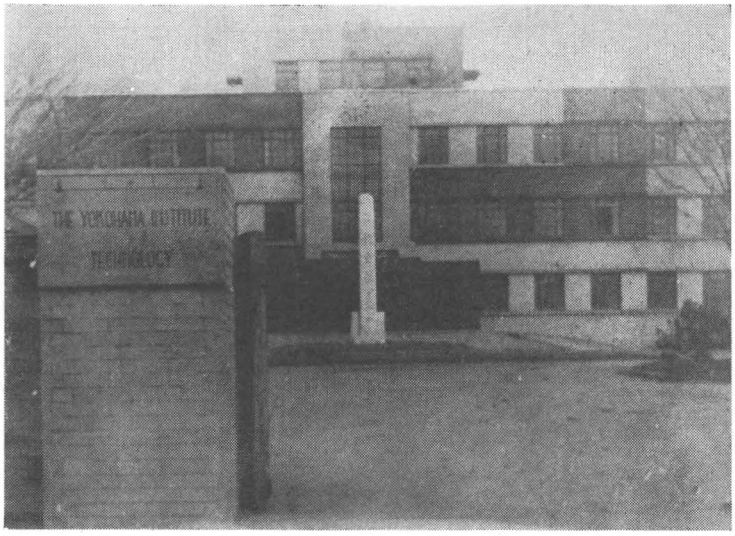
戦後の冨山先生

訓話あり」とあり，以後引きつづき各地からの勤労動員学徒が学校へ帰ってきた．そして田舎（いなか）のあるものは田舎へひとまず帰省した．

20年9月2日，この日は横浜沖米艦ミズーリ号上で休戦条約調印式が行なわれた日であったが，米軍将校数名が突然学校へきた．そして学校を検分したのち「校舎を米軍宿舎とする予定だから48時間以内に明け渡すべし」と命令して立ち去った．冨山校長はちょうどこの日文部省へうち合わせのため上京しており，帰路久しぶりに東京の自宅にたちより夕食中であったが，学校よりの緊急電話でこのことを知り，がく然として夕食もそこそこにして学校に帰ってきた．「学校に帰るや直ちに付近在住の教職員を非常招集してその善後策を議した．その結果まず御真影を近くの大岡小学校に奉遷し，重要書類いっさいは上大岡最戸町の日本揮発油会社工場に移動することを決め，それをそれぞれ実施し，帰宅したのは12時を過ぎていた．翌日起床するや直ちに登校，万端の処理用意を完了した後，接収解除を努力する目的にて，県庁内に臨時に設けられた外務省の終戦処理局に行くことにした．佐久間孝義君の運転する木炭自動車に乗り県庁に向かったが，いずれの主要道路にも米兵が剣付銃を持って警衛しており，車の通行を許さず，やむなく八幡橋から根岸海岸に沿って県庁方向に進んだが，ここも米衛兵にさえぎられた．危げな英語で事情を説明して，強硬に通過をたのみこみ辛うじて許されて県庁に到着，直ちに外務省役人に面会して『弘明寺付近は横浜唯一の戦火災を免れた地域で，学校に米兵の進駐することは人心を一層不安に陥れる惧れ大なること，第二に敗戦日本の復興は工業の再建が唯一の途であり，その工業の幹部指導者を養成するわが高工の重要性は一層大となった訳で，ここが接収され，その機能が停止することは到底忍び得ない』と力説した．役人もこれを了承してくれてただちに米軍将校に紹介してくれた．その将校はおよそ畳2畳分ぐらいある横浜市の大地図を持ち出してきて，『汝の学校はどれだ』と質問してきた．この地図たるや実に精密きわまるもので全部英文で記され，われわれの学校も航空写真に非ざる線書きで各むね詳細に記され，戦前に作成されたもので，いかに今次戦争の準備が整っておったかを物語っていた．その将校いわく『汝の学校には何部隊の兵士何名を収容するかは軍艦上で協議決定したもので今更変更することはできない』と当方の要求をしりぞけた．以上将校の拒絶にもかかわらず当方も執拗に反復繰り返して主張懇談した結果，辛うじて了解を得て，それでは他の残存建物に振り替えようと，ようやく接収解除を認めてくれ初めて深い愁眉（しゅうび）を開くことができ，意気揚々として帰校し，早速一同に安心と歓びを分ち得た．」(工学部機械同窓会名簿昭和45年冨山校長談より）こうして学校長の努力で学校は奇跡的に接収を免れたが，当時としてはまことにまれなことであって，冨山校長の学校を愛する一途なねばりに頭が下がる思いがする．

2. 授業再開

ここにおいて学校は至急開校することとなり，翌9月4日午前9時講堂で，集まった生徒約200名に対し，校長より至急開校の意義を述べ，とりあえず2，3年生の授業を開始した．つづいて9月15日より1年生および2部の授業が開始された．しかしこのごろは停電がちであり，またガスもこないことが多く，授業や実験も中止されることが多かった．



そのころの学校門標
THE YOKOHAMA INSTITUTE OF TECHNOLOGY

また長い間の戦争の傷手（いたで）で，震災後建てられたままの老朽したバラック教室は床ははがれ，窓ガラスは大半が破れ，天井板ははがれ，建物全体が傾き，むねが波打っていた．

それでもこうして校舎は残り，本校が誇る多数の図書，文献は健在であったことを喜ばねばならなかった．

3. 第24回卒業式

20年9月27日は3年生最後の授業があり，午後は3年生送別野球試合がグラウンドで行なわれ，1対0で3年生が職員クラブを破った．

9月29日午前10時より講堂で戦後はじめての平和な卒業式が行なわれた．国民服の者が多かった．このときの校長式辞その他詳細は残念ながら記録がないのでわからない．ただいえることは，卒業はしたけれどもということであった．本校生でさえ，戦時中すでにきまっていた会社からは採用中止の申し出が続出していた．こうして若人たちは戦中戦後の苦難に満ちた思い出深い弘明寺の校舎に別れを告げて，前途暗たんたる社会に飛び立って行った．行く先のあてのない者約半数は，戦時中の勉強不足を補う意味もあって研究生と称して学校に居残った．ただ建築科の卒業生は今後の復興は建物からということで，他科よりも明るい見透しを持っていた．

4. 航空機科の廃止

昭和20年9月GHQの指令により航空機科廃止と決定した．さきに述べたように本校に同科が設けられたのは昭和13年で，わずか10年に満たない期間であったが，その間400有余名の優秀な卒業生を社会に送り出し，横浜高工航空機科の名を高からしめた．廃止後の同科在学の生徒は機械科その他へそれぞれ転科した．10年間の航空機科卒業生数は次の通りであった．

航空機科卒業生数

期	年次(昭和)	卒業者	修業者	期	年次(昭和)	卒業者	修業者
1	16. 3	33		6	20. 9	77	2
2	16.12	43	3	7	22	62	
3	17. 9	37	4	7	22(2)	22	
4	18. 9	74	8	計		425	19
5	19. 9	77	2				

(注) 1. 昭和19年3月まで 横浜高等工業学校航空工学科
以後横浜工業専門学校航空機科
2. 22(2)の(2)は2部

5. 食糧難のため休校

10月にはいると，復員者，転入者がぞくぞくと入学してきて，生徒の数はふくれ上がった．

10月30日午前9時より講堂で開校記念式が挙行され，勅語奉読，校長訓話があった．もちろん戦前のような校内開放記念祭は行なわれなかった．

このようにして停電や物資不足に悩まされながらも，ともかく授業はつづけられたのであったが，12月10日食糧難のため．ついに休校せざるを得なくなった．予定としては21年2月1日再開となっていたが，その時点で生徒が集まって来るかどうか．校長，教官の心配は生徒の上にあった．こうして，わが国にとってはまことに大きな年であった昭和20年は前途に何の光明もなく暮れていった．

6. 昭和21年を迎える

昨年の元日は警報で始まったが，今年は平穏なサイレンのない正月の朝を迎えた．学校では午前11時から恒例の年始あいさつがあり，学校長，教職員一同が学校に集まった．冷酒にするめ，みかんなどでささやかに新生日本を祝った．乏しい簡素な式ではあったが，そこには平和があった．12時半ごろ会は終わった．「一面に廃墟と化した横浜の街中で焼け残った弘明寺の一角には緑もあり，生気が残っていた．校舎の壁には寒々と迷彩の黒い影があったが，図書館には本も雑誌もぎっしりとつまっていた．(中村康治 DENKA No.6 より)

7. 授業再開

20年12月10日から食糧難のため休校となっていたが，予定通り21年2月1日，授業が再び開かれた．しかし集まる生徒の数はまだ少なかった．

なお二部は生徒の登校が少なく休講がちではあったが，なんとか授業はつづけられていた．停電や教室の寒さの関係上通常午後5時始業のところを2月4日から4月1日までは午後3時始業とした．

8. 公職追放と鈴木前校長

昭和21年1月4日総司令部は軍国主義者の公職追放を指令した．鈴木達治前校長は公職追放を

まぬがれたが，これに関し「煙洲残筆」に次のように述べている．

> 戦後占領政策が実施されると多数の人が追放に遇った．私も必勝懇談会（前出）の会長として働き，しかもこの会は公に許されていたので，その間における私の行動及び講演の回数と内容等について詳細に報告せよとの命を受けた．そこで私は至って率直に書いて差出したのである．これで私の追放は民間人として，いの一番に決まるものと覚悟していたのであるが，どうした訳かその厄を免がれていたのであって，我も人も不思議に思ったものである．

9. 戦後初めての入学試験

昭和21年度本校入学試験は，4月15，16日学科試験，19，20，21日身体検査および口頭試問と行なわれ4月23日発表された．

応募者3,000名に対し，入学許可された者は240名でまことに狭い門であった．昨年度新設の電気科が定員30名に対し志願者は実に20倍以上に達し，化工，建築，機械が15倍前後，従来最も志願者の多かった造船科が時局を反映して5倍と最低率であった．なお今年度のもう一つの特徴は，合格者240名に対して合格者出身学校数130校で，1名合格中等学校数83校であった．まさに本校始まって以来の小党群立であった．

なお入学式は5月13日午後1時より講堂で挙行されたが，戦前に比し来校の父兄は少なかった．

10. 電気通信科を電気科と改める

終戦直前の昭和20年4月，新しく作られた電気通信科は，21年4月1日付けで電気科と改称した．これは，電気通信だけでなく広く強電部門を含む電気工学一般を対象としたものであり，かつ占領軍から日本は電波兵器（レーダ）に関連する研究，製造を一切禁止されたことによるものであった．

なお本科は発足時わずかな予算で設立され，ひきつづき終戦後のどさくさで，本来必要な実験設備も整わず，教室も戦時中急造された木造平屋建てを使用しており，窓ガラスは破れっぱなしであった．したがって，冬期はもちろん暖房なしで，教授も学生も寒さに震えながら授業をつづけた．このことは他科にもいえることであったが特に当科はひどかった．

11. 横浜高工時報復刊　第1号

戦前学校新聞の雄と称された横浜高工時報は終戦時廃刊となったことは，さきに述べたが，昭和21年，新学期を迎え復刊されることとなり，その第1号（通算400号）は21年5月15日付けで発行された．

発行所　横浜工専新聞部，編集発行人　渾大防小平，印刷所　神奈川新聞社となっており，大きさは新聞紙と同じで4ページであった．しかし部員一同の努力にもかかわらず遅刊がちであった．24年3月第419号に至り，高工時報は終わりを告げ，24年5月本校が大学に移行以後は大学新聞 No. 1 に引きつがれた．

12. 校内に清新の気

昭和21年5月，新学期を迎え学園に新風を吹きこむべく各科事務取扱を更迭した．各科の事務取扱は次の通りで，本校出身者が多かった．

△山野　健郎（機械）　東大機械卒　（昭 6 ）　本校就任（昭15.2）
△阿部　滋弘（化工）　本校卒　（大12.3）　同　（昭 2.3）
△河村　文一（電化）　本校卒　（大14.3）　同　（昭 2.3）
△田口　武一（建築）　東工大卒　（昭10.3）　同　（昭16.9）
△吉岡　　勲（造船）　本校卒　（昭 7.3）　同　（昭 9.6）
△竹前　一男（電気）　東京高工卒　（昭 6.3）　同　（昭14.4）
△船戸川善哉（物理）　北大卒　（昭10.3）　同　（昭20.2）
△豊田　浩七（数学）　東北大卒　（昭 6.3）　同　（昭18.3）
△竹内　秀雄（語学）　早大卒　（大 7.7）　同　（昭 4,9）

13. 教務課一本建てとなる

戦時中執務の繁雑を緩和するため生徒，体練の2課が教務課より分離していたが，終戦後の新学期から再び教務課一本建てとなった．新教務課長は，化学工業科今井教授が教授会より推薦された．課は旧教練科跡に移転，生徒のための教務課として新発足した．（高工時報戦後 No. 1）

14. 鈴木前校長の講演

鈴木前校長は21年3月中旬，本校講堂で講演を行ない，of the Student by the Student, for the Student と名教自然を強調し，教授学生間の緊密化を強調した．（高工時報戦後 No. 1）

15. 出席率低下　夏休み早まる

新学期は5月13日より始まり，また新入生も5月15日より登校してきて，学園もようやく活気づいてきたが，おしよせる食糧難，住宅難，インフレの嵐（あらし）にはいかんともする術（すべ）もなく，出席率は低下の一途をたどり，高工時報復刊第1号では「学業はなおざりには出来ぬ．しかし本が得られなくては本を読むことは出来ないし，食物を摂らなくては学生と雖も生きて行けないのである．」と悲痛な叫びをあげて国民学校から大学まで1年間学校を閉鎖すべきではないかと論じている．

また同じ新聞で「本年2月に新設された第四寮は5月に入るや米の配給遅配などにより，食糧危機となり，5月4日には，パン1食分を余すのみとなり，17名の寮生は1時帰省のやむなきに立ちいたった」と述べ，このほかにも登校不能の生徒が増加しつつあることを報じている．

以上のような事情にかんがみ21年度は5月13日，授業開始後わずか1カ月の6月10日から8月20日まで2カ月以上の夏休みとすることに決定した．

朝日年鑑には次のように記している.

食糧危機によって東京以東の地域では20年10月下旬から，全国的には21年の6月から，正規の学校授業を継続することが不可能となった．6月上旬文部省は欠配の甚だしい大消費都市の大学，高専に対し夏期休暇をくり上げるよう通牒した．その時期は多くは6月中旬から9月中旬までの3カ月間にわたる未曾有の長期休暇制をとった.

16. 体育館改装

終戦後航空機科が廃止されたので，飛行機の格納庫も不必要となった．20年9月この格納庫を体育館に転用したが，21年秋約15万円の予算でこれを改装した.

17. 校内人事委員会設立

21年12月，校内人事委員会が設立され，教授，助教授，専任講師の任免および各科事務取扱，課長の任免は同委員会で審議されることとなった．なお委員会は，委員長 学校長，委員 理事* および当該事務取扱で構成された.

（注） 理事 20年11月15日の教授会で理事を置くことを決め11月21日選挙を行なった結果，阿部，宮島，豊田，林，玉田の5教授が選ばれた.

従来校内の人事その他の重要事項は，教授会で審議し決定権は学校長にあったのを改めて，理事会に大幅に権限をゆだねた.

18. 校友会の復活

戦後食糧難にあえぎ物資も不足がちではあったが，若人の情熱はいち早く各種運動部の復活となって現われた.

横浜5専門学校排球大会，同6専門学校水泳大会，対高商野球戦（ハマの早慶戦），関東地区専門学校体育大会，全国高専バスケット大会など次々と開催された.

本校校友会も21年10月31日に正式に発会式を行なった．次に名物の対高商野球戦および籠球部の活躍について述べる.

ハマの早慶戦再開からその終りまで

戦前横浜の野球ファンを二分して熱狂させたハマの早慶戦，対高商野球定期戦はいよいよ21年9月18日ゲーリック球場* で行なわれることとなった．何しろ昭和17年以来4年ぶりのこととて両校生徒関係者や戦後娯楽の乏しい市民の間で待ちに待たれたが，あいにく当日は雨天のため中止，翌19日午後3時開催，両軍応援団をくりだし若人の情熱をぶっつけたが，5—5で日没のため引き分けとなった.

当校の応援団長は建築科中川靖雄で，8月29日結成式が行なわれた．生徒は半強制的に応援にかり出された．両校とも試合当日の応援団は，食糧不足，物資不足にもめげず，大いに気勢をあげ市中行進には米軍から苦情が出たほどであった.

（注） 昭和4年に建設され横浜公園野球場は，進駐軍の管理下におかれルー・ゲーリック球場と命名された．なお明治神宮球場はベーブルース球場と呼ばれた.

なお，22年の第18回定期戦は，6月18，19，23日の3日間にわたり同球場で行なわれ，7—6，

3－8，0－9で連敗，翌23年の第19回戦は6月4，5日と同球場で行なわれ，4－5，1－3Aと3連敗した．以後同じ大学となったので，この名物の定期戦も自然消滅した．

ハマの早慶戦の思い出　小泉　仰（電化22年卒）((DENKA No. 6)

21年の試合は何しろ両軍とも打てなくて4球ばかりであった．ユニホームなどなかったし，皆ワイシャツやら思い思いの服装であった．両校の生徒を一言で言えば高工はバンカラ，高商はスマートということになろうか．また両校は伊勢佐木町で取っ組み合いをやった．血の気が多かったのだろう．

籠球部強し

本校バスケット部（部長森川幾久雄教授）は21年10月19日より始まったバスケット・インタカレージ戦に，まず関東学院を破り，20日行なわれた決勝では高等商船に勝ち優勝した．

11月行なわれたバスケット全国大会では，決勝戦で京都工専を破り全国制覇（は）を遂げた．

19.　昭和22年を迎える

1月1日午前11時より学校で恒例の年頭挨拶会を挙行，冷酒で新年を祝い，有志の余興などもあり，午後1時半ごろ終わった．

1月16日より授業開始，翌17日の初教授会で冨山校長より6．3．3．4制の話があった．

20.　事務取扱更迭ならびに新理事

新学年にあたり各科事務取扱を次の通り変更した．

		出身校		本校就任
機械科	山野　健郎	東大工	(昭6)	昭15.2
化工科	木下　恭二	東大理	(昭5)	昭15.6
電化科	友成　忠雄	東工大電化	(昭10)	昭10.7
建築科	藤野　節儀	本校建築	(昭9)	昭11.6
造船科	沢村　鶴松	大阪大工	(昭10)	昭21.5
電気科	武田　　進	京大工	(昭16)	昭20.7
数学教室	森川　　正	京大理	(昭14)	昭14.4
物理教室	船戸川善哉	北大理	(昭10)	昭20.2
語学教室	佐藤　正能	東大法	(大14)	昭10.9

理事改選

1月21日理事改選の結果次の5教授に決定した．

阿部滋弘，木下恭二，田口武一，宮島肇，佐藤正能各教授

21.　校友会規則改正

終戦以後校友会総務部の性格，応援団のあり方，級代表の役員会参加など種々討議されてきたが，昭和22年1月31日，校友会役員会で，新しい校友会規則を決定した．

改正された校友会規則をみると，これまで各部長は会長から委任されていたのを改め，各部の部員によって選出決定すること，応援団を校友会内に包含させること，役員に級代表２名（合計36名）を加え，各部幹事25名に対立させることなどであった．級代表を役員に加えたことは，従来予算の消費者ともいうべき各部幹事および総務が，役員会を構成し，予算の出費者である一般校友会員の声をとり入れていなかった欠点を是正したものであった．

横浜工業専門学校校友会規則

第１章　名称及び目的

第１条　本会は横浜工業専門学校校友会と称する

第２条　本会は自治的活動に依り会員の心身練磨と会員相互の親睦を図り自治精神を昂揚し校風を振起させる事をその目的とする

第２章　組　織

第３条　本会は本校の職員及び生徒を以て組織する，職員の範囲は別に定める

第４条　本会に左の部を設ける

野球，庭球，ラグビー，蹴球，籠球，排球，卓球，陸競，水泳，山岳，文芸，美術，講演，音楽，無線，写真，農芸，自動車，演劇，社研，宗数，気象，保健，共済，新聞，購買

第５条　本会に応援団を附属させる

第３章　役　員

第６条　本会に左の役員を置く，会長，総務，部長，幹事，級代表

第７条　(1)会長は学校長が当る．(2)総務委員は教職員より５名と，各科より選ばれた生徒各１名，公選せられた応援団長及び本会幹事中より互選せられたもの２名とよりなる．(3)部長は教職員を以て当て部員が選出する．(4)幹事は生徒を以て当て部員が選出する

第８条　役員の任期は１年とする．但し再選出を妨げない

第９条　役員の職務を左の如く定める

(1)会長は本会を総理す．(2)総務は会長を補佐し本会の活動の中枢機関として会員の連絡協調をはかり会全般に関する企画立案並びに各部に属さない部の掌理立案に当る．(3)部長は部の指導に当る．(4)幹事は部を掌理する

第４章　会　議

第10条　総務及各部は幹事会を組織する，幹事会は生徒側総務が招集し，各部幹事の協議連絡予算決算その他校友会に関する重要なる事項を調査審議する

第11条　本会の役員を以て役員会を構成する

役員会は規則の改正，予算の決定決算の承認その他校友会に関する最も重要な事項を審議決定する

その他の事項については前条の幹事会が決議し，教職員側総務委員長の承諾を得ればよい，但し役員会は幹事会が決議した事項に付て質問しその責任を問う事が出来る

第12条　総会は少なくとも毎年１回開き必要ある時は臨時に開く事が出来る，総会は会長が招集する

第５章　会　計

第13条　本会の経費は会員の会費，入会金，寄附金その他の収入を以て支弁する

第14条　会員は入会金として金20円を納入しなければならない

第15条　会員の会費を左の如く定める，職員会費は本俸の 120 分の１，生徒会費は年額80円とす，会費は別に定める所に依り分納する事が出来る

第16条　本会に基金を設ける，基金は入会金，寄附金，毎年度の決算剰余金，その他の収入を以て充てる，基金の使途は別に定める

第17条　新聞部，購買部は特別会計とす

第18条　本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終る

補　　則

第19条　将来本規定の改正を必要とする時は総務は議案を作製して役員会の議に附する事を要す．此の場合は出席人員の3分の2以上の多数を得なければ改正の決議をすることは出来ない

附　　則

第15条　中の「生徒会費年額80円」は新総務による役員会に於て，再審査する

22.　第25回卒業式

第25回卒業式は3月15日午前10時より行なわれ11時30分終了した．進駐軍将校の祝辞があった．

23.　22年度入学式

22年4月21日全国高専中の最難関を突破して本校へ入学した250名の入学式が大講堂で挙行された．男女同権の精神に基づく紅3点が注目を引いた．

学校長 訓示

新憲法発布を前にして連合軍最高司令官はメッセージを発し「日本新憲法は世界に於て最も自由な且つ進歩的な国家憲章の一つにして且つ人類の偉大なる精神的革命の反映なり．是が実効化することは極東に新時代を画すると共に世界文明の将来に一大活力を与ふることを期待せられ，此に日本は民族的再起，世界文化貢献への機会を与へられたるものにして，日本はこの新しき義務の遂行に遺憾なきことを信ず」と示されたことは，暗たんたる敗戦後の我国現状のうちにも，前途に一黎明を見出し得たるの悦を感ずると共に，日本人全部が協力，眼前に累積せる精神的，物質的困難の諸問題を削除，解放し，更に進んで世界永遠の平和を理想として，人類の文化，福祉に寄与貢献するの域に到達せんことを図り，以てその期待に背かざらんことを銘記すべき時なりと信ず．恰もこの時に当り我校新学年を開始せんとす．その意義特に深きを思はざるを得ず．国家的民族的思想の理想の実現がその根元とする所は数育に存することは論を俟たざる所にして，殊に俊秀青年の集る我学園が各自民族再興の至情に燃え，新憲法の示す大道に則り，衆庶の先駆として，明日の重き使命を全うするの修養に完つたからんことを期す可きなるを思ふ．

今や教育の目標とするところは，各個人の人間性に内在する道義的，知的総ての価値を開発且つ実現せしむるにありとせられ，その方法として個人の人格の尊敬を重んじ，その価値を承認することを前提とし，常に自由探求の精神を以て得られたる智識を十二分に活用することを要求せられ，特に各個人の自発的活動により，絶えず生気を与へるを必要とするを高調せられるに至れり．

本校が多年唱導し来れる教育の理念は今日何ら矛盾を来すことなく，正にその真価を発揮すべき機会到来の感深し，然りと雖もその実効を挙ぐるは容易の業に非ず，指導の任に当る教師は常に研鑽怠らず，不動の権威を堅持し生徒各人の能力資質又は環境に順応して自由に躍足を延し得るように指導し，学習者は常に積極的に学び取るの態度を以て十分に理解，的確に凡ての智識を自己の物とするの心状を持続し，両者一体となりてこそ初めて其目的を達し得べし．

本校が殊に試験採点の形式に重点を置かざる制度を以て而も全体が放縦に堕しめず，常に自彊不息の生気に充満してその成果を収むる為には挙校格段の努力自奮を要す．学校は学科それぞれに専門する学問技術の訓練と研究に専念すると共に更に一般的教養を高めるに努め同時に健全なる学生々活を送る事それ自身も重要なる目的とする所なり．此に学校教育と併行して，校友会の自治的活動に俟つもの重大なるものあり．

さきに教育基本法の制定せられるあり，以て平和的文化的国家再建の基本たるべき教育の根元理念を明確にせられたり．即ち教育の眼目として人間性の開発を目指し，民主的平和的国家及び社会

の形成者として真理と正義とを愛し，個人の尊厳を尊び，勤労と協和を重んずる心身共に健全なる国民の育成を期し，特に教育の自律性と学問の自由を尊重し，自発的精神の涵養を要望せられるあり，これ正にわが弘陵学園が創業以来堅持し来れる，自覚，自発の教育精神と合致せる所にして大悟その昂揚をなすべき時運到来せりと言はざるべからず．挙校一体，その力を傾け弊あるは去り，その実効を挙げ以て国家再建民族再起の先駆たらんことを祈念して止まず（高工時報 406 号昭和22年5月2日）．

狭き門女子に開く

昭和22年度から本校においても本科への女子入学が許可された．男女共学については現在では普通のこととして見られているが，当時としては画期的な出来事でいろいろと議論された．

しかし当校ではすでに試験ずみとして受けとられた．すなわち本校創立以来の女子入学者をみると，航空機科に第4期生（昭和18年修了）として1名，建築科に昭和18年前後して2名，応化にこの時点で1名在学中で計4名がすでに卒業あるいは在学中であった．ただし，これらは皆選科で2年修了が原則であったが，たいてい3年間本科生と共に講義を受けたようであった．

なお22年度入試の結果，女子3名（応化1部2名，2部1名）が一千数百名中から選ばれて入学の栄冠を得た．

24. 進学適正検査の実施

昭和22年12月22日付けで文部省より進学適正検査の実施が通達された．

これは大学，専門学校へ入学志願する者について，まず，全国いっせいに，上級学校へ進学する能力を有するかどうかのテストを行ない，能力ありと認められた者のみが入学試験を受ける資格ありとする制度であった．この制度が実施されるに至るまでの経緯について当時文部省主催の入学試験に関する会議の委員であった本校校長冨山保が次のように後年語っている．GHQ と当局の関係がよくわかるので抜粋する．

昭和21年後半期頃から，日本占領連合軍総司令部（GHQ）の教育に関する指令が具体的にひんぱんになってきた．その一つの現れとして同年11月21日，文部省に於て GHQ 側は教育部のエドマイヤー女史を首班とし，日本側は文部省の幹部，大学及び専門学校の代表者12～13名で入学試験に関する会議があった．この会議でエ女史は全国一斉に進学適正検査を明年より実施せよと主張した．これに対し各委員は甲論乙ばくしたが容易に結論に達しなかった．私は「日本の現状は交通困難であり，またあらゆる資材が不足している現状では全国同時にテストを行なうことは困難である．この際十分研究，検討を重ねることが必要である．明年からというのは無理である」とあえて発言した．

エ女史は言下に強い口調で「明日，明日と言って結局実行しないことは，日本人の通弊である」と逆襲し，この案を実行するよう押し切られた．……

なおこのようにして行なわれた進学適性検査も後に述べるように30年度からは廃止となった．

25. 昭和23年を迎える

昨年までは恒例の元日の年頭の挨拶会があったがこの年からは中止となり，学校教職員はのんびりと自宅で元日を送った．1月9日臨時教授会開催，電力制限，西牧事件*，研究所設置の件

（後の横浜貿易科学研究所）などが議題となった．1月12日より授業開始，同日の教授会では校長より新制大学に関する件などの話があった．

（注）西牧事件　学校近くにマーケット様のものが開設される計画があり，その反対運動．

26.　第26回卒業式

第26回卒業式は23年3月15日本校講堂で行なわれた．今回の卒業生は，昭和20年3月空襲たけなわの時に入学し，ただちに勤労学徒として工場に動員され，終戦後の激動の日日の中を学問をつづけ，今日の卒業式を迎えた人々であり，感無量のものがあった．次の冨山校長の式辞は烈々の憂国の熱意と若き工業人の心構えを述べたものとして全文を掲載しておく．

学校長 告辞

諸君らは昭和20年，戦争末期空襲酣なる時熾烈なる爆弾下に入学試験を受け入学許可せられて後直ちに引き続き学徒勤労動員に出動し，数ヶ月にして終戦となり，本校は幸にも戦災を免れて逸早く授業開始となりたるも，その後に於ける世相の一大変革に際会しその激浪は滔々として諸君の身辺にも迫り来り，諸君の本校3ヶ年の在学期間中は勉学の目的に対しては甚だしき不利なる条件の下に終止したることは真に遺憾とせられたことと思われる．然し諸君はあらゆる辛苦と艱難を克服，最善を尽されて今日卒業の栄冠をかち得られたことは，大なる誇りを感ずると共に来し方を回想してあらゆる意味に於て感慨無量なるものありと察せられる．

国土荒廃，疲弊その極に達せる我国の現状を前にして諸君今後の行路は実に多難，累々たる障害山積することと思われるも更にこれらを撃破して新日本建設の重責を全うせんとするの勇猛心に燃え希望の光明に輝くことと信ずる．

旧来の陋習を総て一擲して新しき構想の下，あらゆる方面に自由の建設の気運みなぎるの今日は寧ろ情熱ほとばしる青年としては，先人の望み得ざりし好機に際会せるものとも言うことができる．

我国現在直面せる困難は実に多岐多様であるが，その大部分が主として国家経済面の危局に付帯しているといわれている．経済力の速かなる復興とその培養こそ今日国民全部が協力して進むべき一大目標であり，且つ進むべき大道なりと確信する．然るに今日我国各層に於ける動向たるや，必ずしもこれに合致せず唯眼前周囲の苦難に圧せられて右往左往しその目標を失い，時に逆行の観あるはその遺憾とするところなり，この時に当りて国家経済力の根幹をなす生産，就中工業の一大振興を強調実行する事は国家を破たんより救い，その再建を促す中枢なりと断ずるも過言ではないと思う．世界工業は過去の大戦を契機として各方面共に画期的一大転換と躍進をなしつつあり，他面我国工業は今後その種類に於て，その規模に於て又その原料資源に於て，従来夢想だにせざりし各種の制約を受くるの止むを得ざるに到り，これらの間に処して我工業の振興を図り，その確立を期することはここに我国独自の研究工夫と甚大なる努力を要するものにして，その事たるや容易ならざる大業なり．これ今日我工業技術人に負はされたる大きな課題なり．而してこの問題の解決は全く純科学的知見に基づく技術力，工業力の発揚によってのみ達せられるものなり．偉大なる努力により基本的科学研究の結果と多年に基づく工業技術力の融合により初めて期し得られることなり．

諸君明日の使命は以上述べたる意味に於て我国新工業の確立により，国家再建の根幹を築きあげ，さらに進んでは世界文化に貢献，新日本の理想実現に寄与せんとするにあり．我々はこれに則り自由かつ達，各自技倆を伸長するの機会は諸君の面前に展開されつつあり，大なる困難は予想されるも，より大なる光明がその前途に輝けるを確信す．而してその実現の鍵は諸君の手中に在り，最善の努力を期待して諸君の門出のはなむけとする．（高工時報　昭和23年3月10日）

27. 23年卒業生の就職状況

23年3月卒業の本校生の就職状況は昨年度にくらべるとやや好転してきた．大学受験者は昨年同様多くて全体の4割を占めた．大部分は当然のことながら東大，工大，京大などの工学部，理学部へ進学したが，中には専門を異にする法，商，文，経へ進学した者も数名あった．

〔機械科〕 卒業生1部125名，2部46名合計171名のうち50名近くが進学，就職の方は卒業までに大部分きまった．大口申込みはなかったが化工方面からの求人が多く，精密工業，せん維工業，農器具製造などがこれにつぐものであった．

〔化工科〕 卒業生1部103名，2部40名で大学進学者50名弱，他は卒業までに大部分就職がきまった．

〔電化科〕 卒業生1部90名，2部40名，約40名が進学，卒業生は三月迄に殆んど全部きまった．

〔建築科〕 卒業生113名，進学30名，民間会社が多く官庁方面は非常に少なかった．これまた3月末までには大体行先がきまった．

〔造船科〕 卒業生1部67名，2部26名のうち進学20名，各科中もっとも就職率がわるく卒業までに約半数位がきまった程度であった．

〔電気科〕 卒業生65名，進学は20名前後，就職状況は時代の寵児であるだけにきわめて良好，倍以上の求人があった．強電が圧倒的で弱電は割合少なかった．

大体以上の通りであるが，23年度は卒業生数が多かったので就職斡旋の教授職員の努力は非常なものであった．(主として高工時報より)

28. 23年度入学志願者　工専最後の入学者

横浜工専入学願書受付けは2月末日をもって締め切られたが，志願者総数2,363名で，昨年より90名増であった．そのうち女子6名が含まれていて，昨年の3名の2倍ということになっていたが，このごろは女子の工科への志望はまだまだというところであった．

なお志願者を地域別にみると，地元横浜が最も多く約30%強，東京30%弱，その他山梨，長野，千葉，埼玉等の近県が割合い多かった．

各科別志願者数

				(内女子)						(内女子)	
	1部	2部	教養	1部	2部		1部	2部	教養	1部	2部
機械	355	182	29	—	—	建築	267	—	14	1	—
化工	456	199	19	1	2	造船	138	—	—	—	—
電化	265	—	18	1	—	電気	421	—	—	1	—

(注) 1部，2部共定員30名，教養9名

3月21日合格者が発表された．なお24年度よりは大学に移行するので，これが工専としては最後の入学者であった．(26年3月卒業予定)

29. 横浜工業会総会

横浜工業会は，戦前は内地はもちろん海外にまでも各支部を有し，縦，横の連絡を互いにとり，会員5,000名を擁していたが，戦後は半数以上が住所不明となり，会の運営不能となっていた．

昭和23年に至り，母校の大学移行問題を機として復興のきざしが見え，同年4月29日評議員会を開催，そのとき集まった関係者一同で母校昇格後援会設立を決議した．ついで同年11月3日，工業会館で戦後初の工業会総会を開催した．

まず鈴木前校長のあいさつの後，阿部教授より大学昇格問題，河村教授より横浜貿易産業科学研究所について，また幹事より大学工学部設立後援会の報告があった．なお工業会としての工学部設立援助資金目標額は700万円であった．

30. 横浜貿易産業科学研究所

昭和23年5月21日付けで，かねて当校が払い下げを希望していた旧海軍第一燃料廠第3試験場跡が大蔵省国有財産局から使用を認可された．

所在　横浜市戸塚区小菅谷町　敷地　2,000坪（6,600 m²）　建物　鉄筋コンクリート1階建　397坪（1,310 m²）

昭和23年7月8日当校では，ここに横浜貿易産業科学研究所を置いた．設立趣意書にいわく，

「敗戦下の時局，新日本文化の水準を高め国際平和に寄与する為には須く各般産業特に貿易産業の発達を促すことが最も緊急要務であって，これが根本対策は一に貿易産業科学に関する研究の振興に俟たなくてはならない．この要請に応える為，幸い横浜工業専門学校は本邦最大の貿易港を有し，かつ京浜商工業一大中心をなす横浜に在るので，今般横浜貿易産業科学研究所を設置し，貿易産業に関する工業試験並に学術研究をなし，以て文化の向上並に我国産業の研究に寄与貢献せんとするものである」

当時神奈川県および横浜市には工業試験所または，これに類似する官公立研究所がなかったので，これにかわる中小工業の発展を図るための工業研究指導機関であった。

組織としては次の6部を置いた．

(1) 化学部（3課）	(2) 物理部（2課）	化学部長	教授 木下恭二
(3) 機械部（3課）	(4) 電気部（2課）	物理 〃	〃 船戸川善哉
(5) 工芸部（3課）	(6) 技術指導部	機械 〃	〃 中村康治
本所の役員は次の通り		電気 〃	〃 中島好忠
所長	校長 冨山保	工芸 〃	〃 友成忠雄
次長	教授 河村文一	技術指導 〃	〃 阿部滋弘

なお，その後，昭和31年1月23日東洋高圧工業株式会社の強い要請があり，これを会社に譲渡し，その代替として横浜国立大学工学部構内に鉄筋コンクリート2階建て延べ147坪（485m²）の建物寄付を受け，31年4月1日付けでこれを横浜国大工学部付属カーバイド化学研究施設とした．

設立当時のことを中村康治教授は次のように語った．

大船の思い出　中村康治（DENKA No. 6）

当時はすべてが不足，窮乏のときであり，こわれた機械一つも欲しいというような，一種の飢餓状態であった．軍施設の放出，米軍接収解除といったことがあると，いち早く聞きつけて貰いに出かけた．当時大船の海軍燃料廠の図書館にある本を放出するということで，これは河村先生が先頭で努力をされたと思う．最後にはたしか東大と競争になって半分宛分けるようになったと記憶する．

大船と言えば当時燃料廠27万坪（89万 m²），将来工学部が移転するならばと夢を託したこともあったが，当時は弘明寺から大船へ行くことが容易でなかった．第3研という「コ」の字型一階建の建物（3階になる予定が1階まで建てた時終戦になりそのままとなった）の半分をやっと手に入れて，そこに横浜貿易産業科学研究所を開設し将

来大学付属研究所にしようというのであった．この研究所の半分は「鎌倉アカデミヤ」と称する進歩的学園が借り受けており，三枝博音氏が学園長であったと思う．

それから20年，大船への国大移転統合案が出た昭和39年には27万坪が11万坪を残すだけになっていた．

31. 講堂焼失　ベヒシュタイン・ピアノは無事

23年7月16日午前6時，講堂天井裏より出火，付近消防署よりもかけつけ消火につとめたが早朝のことでもあり，ついに講堂は焼失した．さいわい他に燃え移ることなく，午前8時に至り鎮火した．原因は漏電．なおこの際，ベヒシュタイン・ピアノは一同の努力によりかろうじて取り出すことができたが，その際脚部が少しく破損した．

このピアノは前にも述べた通り本校の誇りであったが，終戦時本校にこのピアノがあることを知った進駐軍は半ば強制的にこれを接収した．進駐軍では最初これを横浜市内の進駐軍クラブに置いたがその後行方がわからなくなった．当校音楽班では，昭和22年始めころからこれが返還運動を起こしたがなかなか見つからなかった．22年3月15日の卒業式にはとうとう建築科製図室にあったアップライト・ピアノで間に合わせた．

音楽班の熱心なベヒシュタイン・ピアノ追跡の結果，とうとう東京丸ノ内の米軍将校クラブにあることをつきとめGHQの返還承諾を得，クラブの2階から苦労しておろし，学校の自動車班のトラックで学校講堂まで運んだ．こうしてなつかしいピアノがようやく本校へ戻ったのであった．

32. 陸上優勝

県下陸上インターカレッジは23年11月15日県営藤沢競技場で行なわれ，本校は総得点94点で優勝した．2位横専61点，3位鎌師63点，4位Y専56点であった．

33. そのころの学生生活

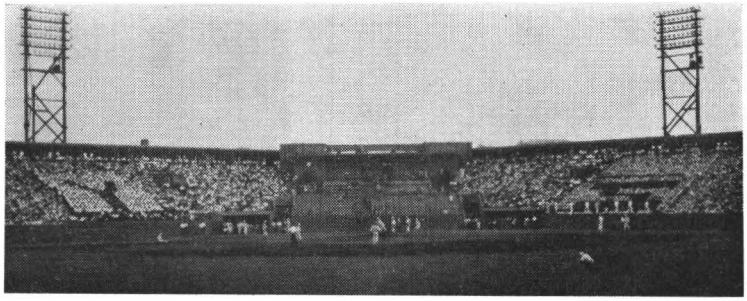
昭和21年から24，5年にかけては物資は極度に不足し，特に食糧事情は言語に絶するほどひどかった．しかしそれにもめげず学生はアルバイトをしながら寒い教室で学問にはげんだ．

卒業生は当時を思いだして次の通り語っている．

戦後の学生生活　川田輝明　（電気昭和24年卒）　（電気同窓会報20周年特集号）

このころ（昭和22，23年）は終戦後の物資欠乏，住宅難，食糧難が重なりあっており，とくに食糧の確保には，だれもかれもが懸命になっていたときです．また勉強に必要な参考書類は出版されても発行部数が少なく，理工科系の本などは定価以上の値段で購入するとか，食糧をさし出さなければ入手出来ない状態にありました．さらに就職難時代でしたから，新卒者にも門戸はとざされており，電気科一回の卒業生が学校から巣立っていった時も，あくる年私ら二回生が卒業した時もやはり同じような世相でした．当時の先生方は卒業生を就職させるために非常な努力をなされ，その御苦労は並み大ていのことではなかったと思われます．

御世話になった先生方を囲んでのお別れの会は，強電実験室（変電室）の裏手に面した木造の教室で行なわれ，級の連中が近在の農家から手分けしてあつめた「さつまいも」だけの，しかも2本程度しかゆきわたらなかった謝恩会でしたが，先生方はとても喜んでくださり，なつかしい思い出の一つになっています．



昭和22年復活した定期
戦7回裏高工投手交代

そのころの学生生活　松沼厚士　（電化昭和25年卒）　(DENKA No. 6)

入学（昭和22年）してからすぐ授業がはじまったわけですが，時代が時代なのですから，学生はアルバイトを強制され，正直言って先生方も食べるのに精いっぱいというところで，先生とわれわれ学生との授業外の接触というものはほとんどありませんでした．まだ三無主義（無試験，無賞罰，無採点）が残っていましたが，よほど出席率が悪いと学年の終わりに先生に呼び出しをくって注意されました．前にも述べたとおり当時は何しろ食糧事情が今では想像できぬほど悪く，学生はほとんどアルバイトに精出していましたので出席率はよいはずがありませんでした．

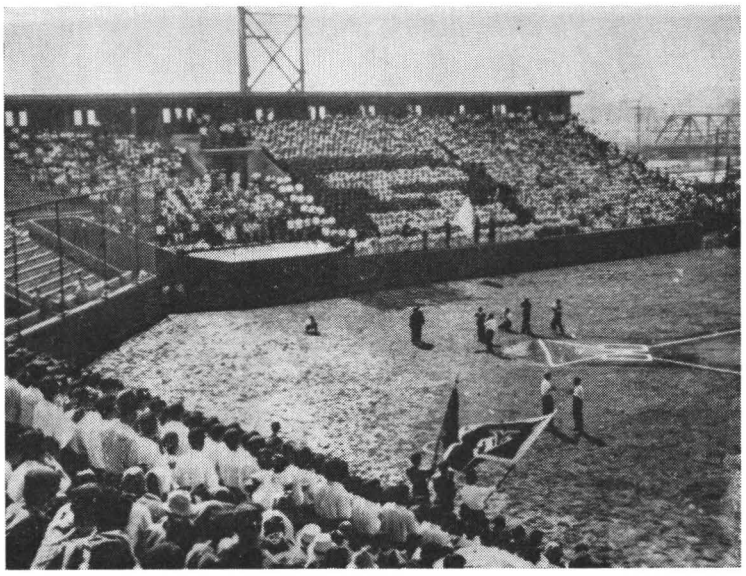
野球戦と記念祭　（前出）松沼厚士

6月に行なわれる横浜高商との野球戦，11月の記念祭の二大行事にはよくまとまって参加しました．当時の学生生活はこの2大行事でもっていたようなもので，4月に入学すると6月の対高商戦のためにすぐ応援団が結成され，応援歌の練習がはじまり，それと共に11月の記念祭の準備にとりかかったものです．

そのころの思い出　吉田　孝　（電気2期　昭和24年卒）

食糧事情の悪いそんなときでも私たちは結構よく運動もしたものだ．戦時中敵性スポーツというので禁止されていた反動もあってか，野球が盛んであったが，現在の学生たちの野球をやるのとはちょっと趣がちがっていた．「今朝穀粒を食ってきた奴は外野をやれ，イモだった奴は内野だ，何も食わなかった奴はキャッチャーだ」という具合にポジションをきめたものだ．

記念祭や対高商野球戦など忘れられない思い出だ．



昭和22年定期野球戦

戦後の学生生活　北島宣光　(電化昭和25年卒)　(DENKA No. 6)

学生時代の思い出といっても，よく遊んだということしか思い浮びません．特に金のある人もいませんでしたが，楽しかったという記憶が強く残っています．

記念祭と言えば，サッカリンを作って売ったり，電池を先輩の会社からもらってきて売ったり，写真屋をやって儲けたりしました．ですが学校前の盛光堂であんみつを皆でたべただけで儲けがすっかりなくなってしまった始末でした．またクラスの友人とよく山へ行ったことなども覚えています．

それからいろいろな競技会に引っ張り出され，インターカレッジ二部の400メートル・リレーで優勝したというようなこともありました．

第一寮の思い出　小暮　陽三　(機械昭和22年卒)

第一寮興風館は岸ヶ谷の丘にあった．つづら折の坂道を上ると民家が絶え，かなり広々とした畠を前にして，庭にはかなり古い桜が毎年春を告げていた．背後には成美女学校，畠を隔てて森木立にかこまれた寺があった．夜陰，寺を訪問して不用の塔婆を燃料に頂戴したのもなつかしい想い出である．

部屋数は16，全くの自治寮で舎監もなく寮生の選考から会計に至るまで互選で運営していた．別棟にまかない夫婦が住み，食事が出きると，チリン，チリンとかねを振って知らせたものである．遅くなると味噌汁の実がなくなり，盛りの少ない丼が残るために，大多数の寮生は疾風のように食堂へ飛びこんだ．戦後はその食事すら出なくなり，一人一人で自炊をする他なくなってしまった．

寮費は昭和19年まで1ヶ月20円をやや上廻るくらいであった．

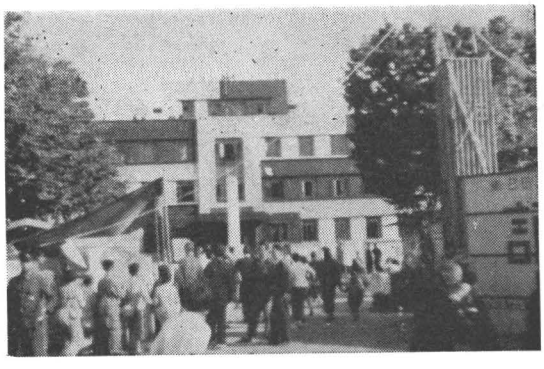
このように当時の学生生活は苦闘に満ちたものではあったが，若人は若人らしく対高商野球戦に，記念祭に，スポーツに，寮のストームに等等青春の情熱を傾けて結構楽しい弘陵3カ年の学生生活を送った．

34.　自治会の誕生

24年2月1日横浜工業専門学校学生自治会の発会式が行なわれた．

23年11月27日校友会が解散されてから3カ月余，この間幾多の難関を越えて，ここに自治会が誕生したのであった．すなわち，24年1月24日自治会発足準備委員会を開催，自治会規約の原案を作成，同月27日全校生によって原案可決，翌28日教授会の承認を得，2月1日発会式の運びとなったものである，

役員組織は，委員長，副委員長，企画，渉外，会計，執行，調査となっていた．



記念祭（昭和22年）

本自治会の規約によると「本会は学生の自治により本校の学風を昂揚し，学生相互の親睦と発展向上に努め併せて全学生の総意を実現することを以てその目的とする。」となっていた．

従来の校友会は学生と教職員との合体で組織されており，教授が各部の部長となってその責任を負っていたが本自治会では，学生のみによって組織され，各部の部長も学生がなり，各部は全く学生の責任により運営されることとなっていた．

35. 第27回卒業式

第27回卒業式は24年３月11日午前10時より，体育館で挙行された．前年講堂が焼失したため式場の選定について種々の論議もあったが，是非とも学校内で挙行したいとの意向が強かったので，設備不十分ではあるが体育館と決定したものであった．

以上をもって前編，高工（工専）時代を終わることとする．実際は工専の最終卒業式は昭和26年３月20日行なわれ，同月31日横浜工業専門学校は廃止されたのであるが，後編で述べるように24年５月横浜国立大学工学部が誕生したので，記述の都合上24年３月までを前編とした次第である．

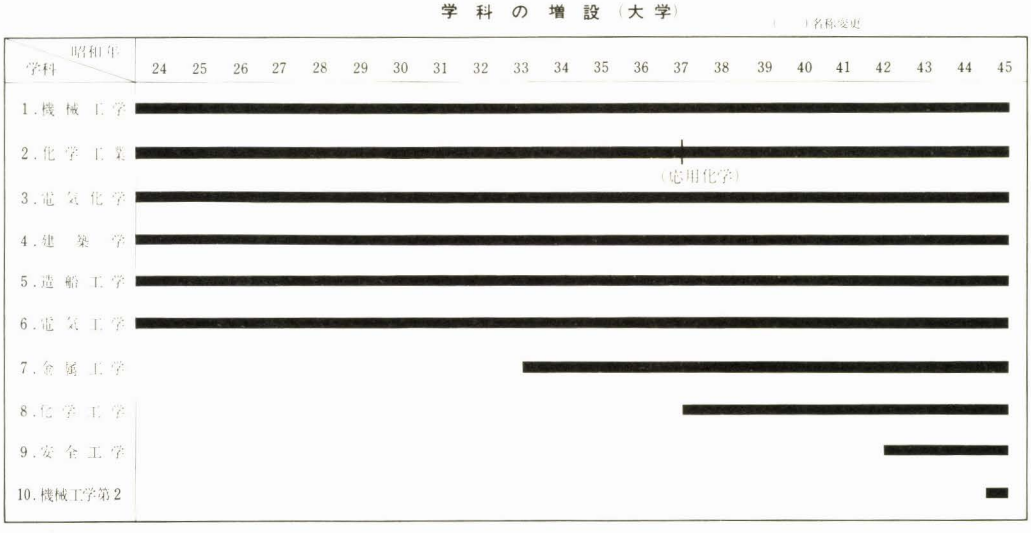
後　　編

昭和24年～昭和45年

昭和24年5月、横浜工業専門学校は学制改革により横浜国立大学工学部としての第一歩を踏み出した.

後編では、この時期より昭和45年、横浜高等工業学校発足から満50周年を迎えた時までを述べる. この間、日本はいわゆる竹の子生活時代から、世界GNP第2位の経済国にまで発展した. わが工学部も幾多の困難に遭遇したが、国力の伸張と共に、めざましい発展をとげた.

学科の増設（大学）


（　）名称変更
昭和年
学科
24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45
1. 機械工学
2. 化学工業
（応用化学）
3. 電気化学
4. 建築学
5. 造船工学
6. 電気工学
7. 冶金工学
8. 化学工学
9. 安全工学
10. 機械工学第2

第1章　横浜国立大学工学部の誕生

序

終戦後の学制改革によりわが横浜工業専門学校（横浜高等工業学校）の大学移行問題は，識者により議論され1日も早く実現することが望まれた．当初は横浜工業専門学校だけの単科大学案であったが，当局の一県一総合大学の方針により，総合大学のうちの工学部として進むことに決定，諸般の準備が進められ，昭和24年5月横浜国立大学工学部として新しい出発をすることとなった．本章では大学工学部が生まれるまでの経緯について述べる．

第1章　第1節　新制大学へ

1.　新制大学設置への準備

昭和22年3月31日，教育基本法，学校教育法が公布されたことは前述した通りである．これによってわが国の学制制度は画期的な一大改革がなされ，旧来の国民学校令，中等学校令，高等学校令，専門学校令，大学令は全部廃止され，いわゆる6．3．3．4制の学校体系が定められ，22年度には中学までが実施され，つづいて高等学校，大学の新制度に移行した．

旧制大学令では「大学は国家に須要（しゅよう）なる学術，理論及応用を教授し並にその蘊奥（うんのう）を攻究するを目的とし」とあり，また専門学校令は「高等の学術，技芸を教授する」と規定されていたが，新しい学校教育法では「大学は学術を中心として広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授し研究し，知的，道徳的及応用的能力を展開させることを目的とする」と明示されている．なお旧制の大学は修業年限3カ年であったのを新制では4年とした．

2.　大学設置委員会

従来の大学設立については文部大臣のみの認可となっていたのを新制大学では，大学設置委員会によって審査され，その答申によって初めて文部大臣が認可し得るようになった．

文部省では21年10月，大学設置基準設定協議会を設け大体の成案を得たが，一方現制度の大学（旧制）だけで22年7月8日，大学基準協会を設立し，大学設置基準設定協議会を同会の中に包含した．そして大学基準協会は23年7月，4年制大学（新制大学）の最低基準としての「大学基準」を作成発表した．

23年1月15日，「大学設置委員会官制」が公布された．これは定員45名で，このうちの22名は大学基準協会会員であった．（委員長は東京工大学長和田小六で，常任委員に横浜経済専門学校長糸魚川祐三郎がはいっていた）．

23年2月21日総会を開き，設置基準，申請書の形式，審査方法等を決定した．23年7月大学設置委員会は大学設置審議会と改称した．

3.　単科大学案

本校においては冨山校長が，大学設置準備委員会および設立委員会の委員を任命されており，早くから大学移行を申請すべく準備を進めていた．

すなわち22年5月19日の教授会で冨山校長の説明の後，大学移行の準備として，まず理事会で

基本方針を作り，後各科で検討をすることを決めた．22年８月25日の教授会では大学設立準備委員会を設置することとなり，各科より２名，基礎教室１名，事務１名，計16名の委員を置くことを決めた．こうして大学設立準備委員会は，しばしば開催されたが，22年12月19日会名を大学準備委員会と改めた．

なお，ちょうどこのころ，すなわち22年12月16日，中央では第１回大学設置委員会が政令公布（23．１．15大学設置委員会官制）の１カ月前に開催されており，本校では中央と並行して話が進められていたわけである．

このころの当校大学準備委員会の案は，単科大学案で仮称横浜工業大学（あるいは横浜工科大学）となっており，現在のような総合大学案は考えられていなかった．

4. 大学人事委員会の設置

冨山校長は大学移行問題が起こるや，大学としての最重要事のひとつは教授陣のいかんにあるとして，情実に捕われることなく公平に人選しなければならないと考え，横浜工業専門学校に人事委員会を設け，有識者，学内教授，卒業生代表から次の15名を選び人事委員を委嘱し，大学人事委員会を設置した．委員は次の通りであった．

大学人事委員会

〔有 識 者〕	片山　正夫（東大名誉教授）	鈴木　達治（初代校長）
	阿部美樹志（戦災復興院総裁）	野口　尚一（東大教授）
	真島　正市（東大名誉教授 東京理科大学長）	李家　　孝（三菱横浜造船所長）
〔学内教授〕	阿部　滋弘（応化）	木下　恭二（応化）
	豊田　浩七（数学）	中島　好忠（電気）
	佐藤　正能（独語）	
〔卒 業 生〕	鳥谷　寅雄（機械２期）	石井　文夫（応化２期）
	菅　　要助（電化２期）	吉原慎一郎（建築２期）

5. 後援会の活動

本校の大学移行問題が起こるや，卒業生をもって組織されている横浜工業会では，23年４月29日総会を開き，母校の移行のための準備資金を募集すべく，大学昇格後援会を組織することを決めたことについては前述した通りである．

同年５月26日県下の有志および工業会代表が発起人となり，本校において発起人会を開催した．

当日の発起人依頼状および趣意書は次の通りであった．なお会長に横浜商工会議所会頭野村洋三が推され就任した．

本趣意書にもある通り，このころまでは，あくまで横浜工業専門学校だけの単科大学を希望しており，名前も仮称横浜工業大学となっている．しかし次に述べるごとく５月19日には，文部省

より県下一本の総合大学設立の指令がきて，単科大学は断念せざるを得なくなったが，後援会は横浜国立大学工学部後援会としてつづけられた．

なお本後援会の寄付金募集金額は3,000万円で使用目的は次の通りであった．

収入予定

3,000 万円

1. 対外関係（会社，工場等） 2,000
2. 学校関係 1,000

内 工業会 700
高工 150
横工 150
商工実習 若干

（注） 高工150万円の内在校生から100万円1人当たり1,000円

支出予定

1. 校内整備費 1,000万円

内訳 A 設備費 340 （電子顕微鏡 130，オシログラフ40，超高速度写真機 100，X線発生装置70）
B 施設費 260 （中央印刷所 100，硝子細工工場60，講堂整備50，防火消防50）
C 各科施設改善充実費8科 400

2. 横浜貿易産業科学研究所設備 2,000万円

内訳 A	化学局	684	F	工作部	45
B	物理局	157	G	営繕部	150
C	機械及電気局	675	H	図書室	50
D	工芸部	170	I	財団法人基金	100
E	技術指導部	10	J	事務部	200

発起人依頼状

横浜工業大学設立後援会発起人御依頼の件

拝啓 時下益御多祥の段大慶の至りに存じます．

扨て終戦直後の混とんとした我国産業界も貿易再開の好条件の下に明るい見透しがついて来ましたことは誠に御同慶の至りに耐えません．然し乍ら申す迄もなく之が発展を期するためには遺憾の点が多く，殊に新らしい構想の下に我国産業が進まねばならぬ今日におきましては，進歩的な産業指導並に其研究機関特に貿易産業に主体をおいた綜合研究所の必要が各方面から強く要望されまして，其設立は目下の一大急務となっている現況であります．

折しも本邦最大の貿易港で且つ京浜商工業の一大中心をなす横浜に所在する横浜工業専門学校が今般の学制改革に伴って近く大学に移行する機会に，将来之に附属せらるべき貿易産業研究所の設立が学校当局関係に於て企劃され，具体的発足の運びとなって居りますので，此の新大学及研究所実現の暁には各位が之を充分御利用されることに依って，叙上の我国産業の復活向上の途はあえて困難ではないものと信じます．この意味をもちまして横浜工業大学設立後援会を組織して，右新大学並に貿易産業研究所設立を強力に促進さしてはとの議が有志の間に起り，就ては横浜工専に多大の関心を有せられる貴殿に其の発起人たる労を仰ぎ得ますならば望外の幸と存じ，別紙趣意書案御参照の上御快諾賜らん事を懇願いたす次第であります．

追つて発起人諾否の御返事のない場合は御承諾を得ましたものと拝承し，来る 月 日午 時横浜市南区大岡町横浜工専校内に於て第一回発起人会を開催いたしますから御多忙中誠に恐縮に存じますが，御臨席相成り度く御案内申上げます． 敬白

昭和23年5月 日

横浜商工会議所会頭	野村洋三	社団法人横浜工業会	斎藤輝治
横浜興信銀行頭取 横浜商工会議所副会頭	柳沢鉱一	仝	阿部滋弘
三菱重工横浜造船所長 横浜商工会議所副会頭	李家孝	仝	佐藤五郎
神奈川県知事	内山岩太郎	仝	石井文雄
横浜市長	石河京市	仝	菅要助
神奈川県々会議長	堀内万吉	仝	河村文一
横浜市々会議長	小沢二郎	仝	仲田旭
前横浜高等工業学校長	鈴木達治	仝	梶谷忠吉
日産重工株式会社取締役	前田利一	仝	森川幾久雄
味の素工業株式会社川崎工場長	前川信太郎	仝	吉原慎一郎
保土ヶ谷化学工業株式会社 取締役	青山跡治郎	仝	友成忠雄
古河電線製造所技術部長	池田敬三	仝	田口武一
三菱電機株式会社大船工場長	河合登	仝	吉岡勲
日本鋼管株式会社鶴見造船所長	東道生	仝	斎木雅夫
三菱重工横浜造船所副所長	秀島喜人	仝	鈴木洋二

横浜工業大学設立後援会趣意書

新しい構想の下に再出発した新日本が国民文化の水準を高め国際平和に寄与するためには一般の産業殊に貿易産業に全力をあげ国状に相応した新しい行き方で進まなければ遠からず再び行きつまらざるを得ない状態にあります.

この健全な産業発達は経営と学問技術との完全な協力によって始めて促進されるものでありまして,殊に本邦最大貿易港を有し且つ京浜商工業の一大中心をなす横浜に於ては切実に其必要を痛感されるのであります.この問題を解決すべき研究所,試験所は終戦後の建物難,資材難等によつて其の活動は殆んど閉塞されていましたが,今や各産業が漸く曙光を見出すにつれて之等機関,特に貿易産業に重点をおいた綜合的研究・試験機関の設置が各方面から強く要望されるに至りました.

折しも創立二十有九年,卓越した教授陣と優秀な設備とにより約6,000名の技術者を出し,又各教授の研究が只に学界のみならず実業界に直接,間接に成果が結ばれつゝある横浜工業専門学校が,今般の学制改革に伴い大学に移行しようとする機会に,右に述べた様な性格の貿易産業研究所設立が全校内に設けられてある大学設立準備委員会によって計劃され,具体化を待つ運びとなっています.

この計劃は一般商工業の指導及其研究に主眼点を置き現に小規模乍ら市の依托による横浜市工芸指導所と提携し関係各位が充分に之を利用して其の目的を達成されることを念願とするもので,将来は右新大学の附属研究所として更に一層其の性格を高度化する理想を持つものでありまして,幸い既に国家から横浜市戸塚区所在の元海軍大船燃料廠跡の建造物が貸与され,今や研究員,設備内容を充実すべき段階に達している状態であります.併し乍ら何分にも大学移行のみに就て丈けでも多額の費用を要しますこととて,右研究所の設立費用の国庫補助は今の処到底望み難く大方各位の絶大な御後援により之を社団法人組織として発足せしめる外はない次第であります.

之と同時に横浜工専の大学移行も亦叙上の趣旨から見て其の実現は識者の均しく期待する処でありますが,現在保有する設備内容のみにては日進月歩の学問技術の研究並に教育達成には充分とは申し難く,此の上更に一層の内容の充実を計らない限り所期の目的に副うた大学に移行することは困難でありますので,之亦各位の御後援を御願い致さねばならぬ次第であります.

この二大事業完成は必須のものでありまして,其達成のためにはどうしても地元各位並びに横浜工専関係各位の絶大なる御支援による外はなく玆に各位の御賛同を得て横浜工業大学設立後援会を結成し,貿易産業研究所及横浜工専の大学移行の実現を強力に後援いたし度く各位の御賛同御協力を期するものであります.

6. 総合大学を指令

従来の官立大学，高専，師範を24年度から新制大学に切替える文部省の方針は，23年３月15日の国立総合大学事務局長会議，５月の大学総長，大学長，各種学校長会議で明らかにされた．それは，「国立総合大学の所在地以外の地方では１県１大学案を原則とし，それらの大学には必ず教員養成機関を設けること．設備は現在のままで可能な程度」というものであった．

これよりさき，各地の諸高等専門学校では独自の計画をそれぞれ進め，各方面に新制大学設置運動を始めていたが，文部省案が明らかにされると両者の間には食い違いがかなりあることがわかったので，両者間で折衝が重ねられた．

本校においてもさきに述べたように本校だけの単科大学案を考えていたが，昭和23年５月19日，文部省は横浜工業専門学校長冨山保，横浜経済専門学校長糸魚川祐三郎，神奈川師範学校長三田主市，神奈川青年師範学校長富樫浩吉を同省に招集し，さきに大学設置基準委員会で制定された基準に則り，かつ適格なる教員組織をもって，学芸，経済，工学の３学部より成る総合大学をつくることを指令した，

本校では５月24日教授会を開き冨山校長より以上の文部省指令は至上命令である旨を伝え，ここにおいて本校だけの大学移行は不可であるとして今後は，単科大学案を捨て，総合大学の中の工学部として進むことを確認した．

第1章　第2節　横浜国立大学の生まれるまで

1.　審　査

本校および他の3校では文部省の指令にもとづきただちに，すでに用意されていた資料に従って調書を作成し，これを統合一括して7月末当局に提出した．

大学設置委員会ではこの調書を十分に審議し，また9月25，26日の2日間にわたり実地審査を行なった．この時の審査委員は主査上原專祿（元一橋大学長），日高第四郎（元文部次官），小池敬事（千葉大学長），鈴木桃太郎（東京都立大学教授），臨時委員として武田憲治（千葉大学教授），山田良之助（東京工大教授）の6人であった．

2.　学校名決定　横浜国立大学

この調書および実際の施設調査は厳格に審査されたが，この際大学の名称も審査対象となった．

大体各府県に新設される国立大学の名称は，原則的にその所在府県名を冠するように指示されていた．それによるとわが新制大学は当然神奈川大学とすべきであったが，横浜はわが国近代文化の導入，発祥の地として世界的に著名であり，その点からでも学園の冠称として最も適当であり，一方旧校名とも縁があるので，横浜大学として申請したのである．

ところが期せずして，市立の横浜経済専門学校と医学専門学校および私立の横浜専門学校が，いずれも横浜大学として申請していた．そこで審査員は三大学の首脳者を集め，相互に協議の上あらためてそれぞれの名称を決めて再申請するよう勧告した．

この勧告に基づき23年10月4日横浜市立経済専門学校長前田幸太郎，横浜専門学校長米田吉盛，横浜工業専門学校長冨山保の3者が会談を重ね名称問題につき協議した．

各校ともそれぞれ主張があり，当初は互いにゆずらぬ情勢で，特に市立は当然のことながら強硬な態度であった．そこで冨山校長より国立と市立を名称中に挿入してはいかんと提案したところ，前田校長はこれに同意し，米田校長はそれでは自校は神奈川大学としようということで，ようやく協議がまとまった．

こうして23年10月8日大学設置委員会に付議され一部保留付きで承認された．つづいて翌24年3月15日は主として名称の問題が付議された．それは国立としたことに問題があった．すなわち，元の東京女子高等師範学校が大学となる場合，東京女子大学の名称を当初考慮したが，すでに私立東京女子大学があったので，それと区別するため，東京国立女子大学として申請した．しかし

審議会は名称中ことさら国立を挿入することは適当でないとして，これを否決した．そして結局お茶の水女子大学として再申請した前例があった．これに準じて横浜も名称中に「国立」を入れることは承認しがたいとのことであった．これに対し冨山校長は，横浜の特殊事情をいろいろと説明し，ようやく委員一同の了承をとりつけた．これが全国官立大学では唯一の「国立」という字を挿入しているわが横浜国立大学の名称の生まれたゆえんである．

3. 横浜国立大学ここに誕生

以上述べたように新制大学の名称も横浜国立大学と決まり，審査も終わり，昭和24年5月31日法律第150号国立学校設置法により，本大学は学芸学部，経済学部，工学部の3学部を持つ新制大学としてここに誕生した．

冨山校長の苦労

本校が大学に移行するに際しては，神奈川県の識者，教授や職員一同，工業会の先輩らが打って一丸となって運動した結果であるが，その中心となった冨山校長の苦心はなみなみならぬものがあった．これについては，冨山校長の先達である初代校長鈴木達治が次のように記している．

> 高工が大学と進化するには，さまざまな準備が必要であった．その教授陣容を整えることは最急務のことであつたであろう．冨山君はその為に東京大学の有力な教授達をはじめ，実業界の有力者，高工の一部の教授，横浜工業会の先輩から私までも駆り集めて，準備委員会を組織して着々その歩を進めた．一方新制大学のため，寄附金募集の目的を以て，各方面の有力者を集めて厖大なる委員会を作り，募集運動に従事した．衆望を集めた冨山君の一方ならぬ奮励努力により昭和24年われわれの新制大学が堂々たる発足をしたのであった．
>
> 新制国大学長の推挙に際し，冨山君は第1候補として学校外の人を，第2候補として私を挙げたとの噂を聞くと，私は直ちに書を時の文部次官に送り，内外の情勢を陳述して冨山君を最適任者として勧告した．兎に角学長問題は何らの波らんも問題もなく，至って自然に冨山君は初代学長の椅子に納まった．
>
> 文部省当局が70有余の国立大学と，それ以上の私立大学を許可設立することは，慥かに大事業であつた．これが為幾つかの調査委員会が設立された．ぼんやりの私はその委員会の名称は今記憶しないが，いずれの委員会にも冨山君は委員長として，また委員として列席して居つた．これが調査の為，全国を東奔西走して所謂文字通り，席暖まるいとまはなかったであろう．これは冨山君に対して甚だご苦労の次第で，又多少の迷惑のことであったかも知れないが，文部当局の君に対する信用の発露であって，自然の成行であったであろう．これが為国大は多分に留守にされ，蒙りたるマイナスは，文部当局が学長に対する信用をそのまま国大に移し得て，償って余りあるプラスとなったと私は信じている．
>
> （横浜工業会報　昭和28年3月号）

国立学校設置法（抄）　（昭和24年5月31日法律第150号）

第1章　総　則

（設置及び所轄）

第1条　この法律により国立学校を設置する．

2　国立学校は，文部大臣の所轄に属する．

（定義）

第2条　この法律で「国立学校」とは，学校教育法(昭和22年法律第26号)第1条に定める学校のうち，国立の大学及び高等学校並びに同法第83条に定める各種学校で国立のものをいう．

第２章　国立大学

（名称及び位置等）

第３条　国立大学の名称，位置，学部及びその国立大学に包括される学校は，次表に掲げる通りとする．

国立大学の名称	位　　置	学　　部	学校教育法第98条の規定による学校で上欄の国立大学に包括されるもの
横浜国立大学	神奈川県	学芸学部 経済学部 工学部	横浜経済専門学校 横浜工業専門学校 神奈川師範学校 神奈川青年師範学校

（附属図書館）

第６条　国立大学に，附属図書館を置く．

第５章　職員及び職

（国立学校の職員の定員）

第12条　国立学校に置かれる職員の定員は別表第１から第３までによる．

（国立学校の職）

第13条　各国立学校（附則第３項及び第５項に規定する学校を含む）に置かれる職員の種類及び定員については文部省令で定める．

（国立学校に置かれる職員の任免等）

第14条　国立学校に置かれる職員の任免，懲戒その他人事管理に関する事項については，国家公務員法（昭和22年法律第120号及び教育公務員特例法第１号）の定めるところによる．

第６章　雑　則

（命令への委任）

第15条　この法律又は他の法律に別段の定めのあるものを除く外，国立学校の組織及び運営の細目については文部省令で定める．

附　　則

1　この法律は，公布の日から施行する．但し，第１条の規定は，学校の修業年限及び学年の進行に関しては，昭和24年４月１日から適用があるものとする．

2　左に掲げる勅令は，廃止する．

官立専門学校官制（昭和21年勅令第210号）

3　第３条に規定する大学はそれぞれその包括する学校の課程を存置するものとし，それらの課程の履修，卒業及びそれらの課程を担当する教職員の身分等に関する本項並びに第３条に規定する大学に包括する学校に附置される学校については，なお，従前の例により取り扱うものとする．

4　前項の規定の実施に関し必要な事項は，文部省令で定める．

（別表第１）

国立大学の名称	大学に置かれる職員の定員
横浜国立大学	632 人

国立学校設置法施行規則（抄）　（昭和24年６月22日文部省令23号）

第１章　国立大学

第１条　国立学校設置法（昭和24年法律第150号以下法という．）第３条に規定する各国立大学に学長，学部長，主事，教授，助教授，講師，助手，附属学校の長及び教員並びに教務員，技術員及び事務職員を置き，その定員は別表第１による．

第２条　学長，教授，助教授及び助手は，学校教育法（昭和22年法律第26号）第58条に規定する職務に

従事する．

2　講師は教授又は助教授に準ずる職務に従事する．

3　教務職員は，大学で定める職にある者とし，教授研究の補助，その他教務に関する職務に従事する．

4　技術職員は，この規則に定めるものを除く外，大学で定める職にある者とし，技術に関する職務に従事する．

5　事務職員は，この規則に定めるものを除く外，大学で定める職にある者とし，庶務，会計等の事務に従事する．

第3条　国立大学の各学部の長は，学部長とし，その大学の教授である者をもって充てる．但し，単に1箇の学部を置く大学にあっては，学部長を置かないことができる．

第4条　教授上又は管理上必要がある場合には，国立大学又はその学部に分校を置くことができる．

2　分校の長は，主事とし，その大学の教授である者をもって充てる．

第9条　大学において必要がある場合は，法第6条の規定する図書館に分館を置くことができる．

2　図書館及び図書館分館の長は，それぞれ館長及び分館長とする．

3　館長は，その大学の教授である者をもって，分館長はその大学の教授又は助教授である者をもって充てる．但し必要がある場合は，館長又は分館長は事務職員をもって充てることができる．

第10条　国立大学の各学部，分校，附置の研究所，学部附属の研究施設及び図書館には，その規模に応じてそれぞれ事務部又は事務室を置くことができる．

2　事務部及び事務室の長は，それぞれ事務長及び事務主任とする．

3　事務長，及び事務主任は，それぞれ事務職員をもって充てる．

第11条　法又はこの規則に定めたものを除く外，国立大学の内部組織に関してはそれぞれの大学の定めるところによる．

附　則

1　この省令は，公布の日から施行し，昭和24年5月31日から適用する．

2　国立大学の学部長及び分校主事は第3条及び第4条第2項の規定にかかわらず，当分の間教授でない者をもって充てることができる．

3　法附則第3項に規定する各国立大学に包括される学校の課程の長はその大学の学長，学部長又は分校の主事である者をもって充てる．但し，昭和24年7月31日まではなお従前の例による．

（別表第1）

国立大学名称	学長	学部長及び主事	教授	助教授	講師	助手	附属学校の長及び職員	教務職員 技術職員 事務職員	計
横浜国立大学	1	3	118	82	19	4	44	361	632

4.　各地の新制大学

なお文部省では24年度から発足するものの設置申請を7月末で締切ったところ，文部省直轄学校69，逓信省立1，農林省立2，公立24，私立123の新制大学案が出されたので，書類を大学設置委員会に送付した．審査の結果，24年2月と3月の総会で，24年度からの大学開校を適当と認めたもの，国立69校，公立17校，私立81校を文部大臣に答申した．この結果，公私立大学は24年4月から国立大学68校（商船大学が開校を中止したため1校減）は6月開校された（授業は7月から開始）．（朝日年鑑による）

なお参考までに文部省統計によれば，昭和23年から27年までの新制大学数は次の通りであった．

	新制大学			
	国立	公立	私立	計
23年度	—	1	11	12
24	68	18	92	178
25	70	26	105	201
26	71	26	106	203
27	71	33	116	220
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
36	72	33	145	250

（学制90年史より）

第2章　創設期の横浜国立大学工学部

序

昭和24年2月第3次吉田内閣成立，下山事件，松川事件など不可解な事件が連続して起こり，生活は依然として苦しく，いわゆる竹の子生活がつづいた．11月湯川博士が日本で初めてのノーベル賞を受賞して，われわれに明るい話題を提供してくれた．このころから日本経済は戦後の混乱期からようやく脱却する機運に向かい，25年6月の朝鮮動乱を境にして少しずつ好況に向かってきた．

わが学園では昭和24年5月，横浜工業専門学校が横浜国立大学工学部として，新しい発足をすることとなった．一方横浜工業専門学校は昭和26年3月最後の卒業生を送り出すまで残っており，24年度は新制大学1年生と工専2，3年生が，25年度は大学1，2年生と工専3年生が，同校内に共に勉学にはげんでいたのであった．26年3月工専としては最後の卒業生を送り出し，ここに横浜工専（横浜高工）は23年の歴史を閉じ，完全に新制大学一本となったのである（よって27年3月の卒業生は両方ともなかった）．したがって本章では大学，工専が同時に記述されることがある．本史ではできるだけ編年体を用いたので両者入り混じり，あるいは読みにくいことのあるのをおそれるが了解されたい．そして27年夏完全に大学に移行した姿を見て冨山学長は，鈴木前校長の前例にならい65歳をもって長い学園生活を自ら退いた．

第2章　第1節　発足時の工学部

1.　横浜国立大学の発足

前述のように昭和24年5月31日法律第150号が公布され，ここにわが横浜国立大学は第一歩を踏み出した．本大学はさきにも述べたように横浜経済専門学校，横浜工業専門学校，神奈川師範学校，神奈川青年師範学校の4校を包括して，学芸学部，経済学部，工学部の3部をもって新制大学として誕生した．

5月31日付けで横浜工業専門学校長冨山保が初代学長兼工学部長に，横浜経済専門学校教授徳増栄太郎が経済学部長に，文部省社会教育局芸術課長檜垣良一が事務局長にそれぞれ補された．

ついで6月13日熊本師範校長銅直勇が学芸学部長に補された．

いま簡単に包括された各校の沿革，組織，および工学部の職員，諸規則，施設などについて述べる．

包括学校の沿革

○横浜経済専門学校

大正12年12月横浜高等商業学校として創設され，同13年4月から横浜市中区大岡町横浜高等工業学校の一部を使用して授業を開始し，大正14年4月1日同市南太田町の現位置に移転し，現在の本館は大正15年3月に完成した．昭和4年5月に貿易別科を設置し，昭和19年3月戦時学制改革に基づいて横浜工業経営専門学校と改称され，同時に貿易別科を廃止した．同20年4月及び5月の二回に亘り戦災をうけ，建物のおよそ40%を焼失した．同年8月終戦により再度の学制改革があり工業経営専門学校は3月末をもつて廃止し，横浜経済専門学校として復活された．

○横浜工業専門学校（略）

○神奈川師範学校

A　神奈川県師範学校は，明治9年横浜市花咲町に師範学校として発足し，同12年横浜市老松町に移転し，神奈川師範学校と改称した．その後明治23年校舎を焼失したので現位置の鎌倉に変更することにし，同15年新校舎が竣工したが大正12年震災で全校舎が倒壊したので同14年同位置に本館を竣工した．

B　神奈川県女子師範学校は，明治35年，神奈川県立高等女子学校（横浜市岡野町）内に附設された師範講習科として発足し，同40年神奈川県女子師範学校となり，附属小学校を附設したが，震災で校舎を失い，昭和2年4月横浜市中区立野に現在の校舎を完成し，同11年神奈川県立横浜第二高等女子学校を師範学校に併置した．昭和18年両校を廃止し，同時に専門学校に昇格し，文部省直轄となり，神奈川師範学校はその男子部に，同女子師範学校はその女子部となった．

○神奈川青年師範学校

大正10年神奈川県立実業補習学校として発足し，昭和10年神奈川県立青年学校教員養成所と改称し，

昭和19年文部省に移管し神奈川青年師範学校と改称された．ついで昭和20年4月神奈川県立青年学校女子教員養成所を附設し昭和20年6月神奈川県から校舎2棟，寄宿舎等の移譲を受けたが，同年7月16日空襲により校舎1棟（2階建木造122坪）を焼失し，平塚校舎が狭隘となつたので10月4日現在の横浜市保土ケ谷区権太坂100番地に移転した．

初期の横浜国立大学工学部概要（昭和27年度横浜国立大学要覧より）

1. 名称および所在地

名称	所在地
事務局	横浜市南区大岡町 702
学芸学部	鎌倉市雪ノ下 929
附属鎌倉中学校	同上
附属鎌倉小学校	同上
横浜分校	横浜市中区立野 64
附属横浜中学校	同上
附属横浜小学校	同上
農学教室	横浜市保土ケ谷区権太坂 100
経済学部	横浜市南区清水ケ丘 41
工学部	**横浜市南区大岡町 702**
附属図書館	工学部構内

2. 職員の定員（大学全部）

職名 / 年次	学長	学部長及び主事	教授	助教授	講師	助手	附属学校長及び教官	教務職員技術職員事務職員	計
昭和24年度	1	3	118	82	19	4	44	361	632
昭和25年度	1	3	100	92	23	18	46	349	632
昭和26年度	1		69	112	23	30	50	341	626
昭和27年度	1		72	113	21	31	52	318	608

備考　昭和24年度，25年度は主事の定員は教授定員に含まれ，昭和26年以降学部長及び主事の定員は教授定員に包含された．

3. 工学部学生の定員

学科別 ＼ 年度別		昭和24年度～昭和27年度
工学部	機械工学科	40
	化学工業科	35
	電気化学科	35
	建築学科	30
	造船工学科	28
	電気工学科	28
	計	196
工学部二部	機械工学科	30
	化学工業科	30
	計	60
合計		256

4. 工学部入学志願者状況

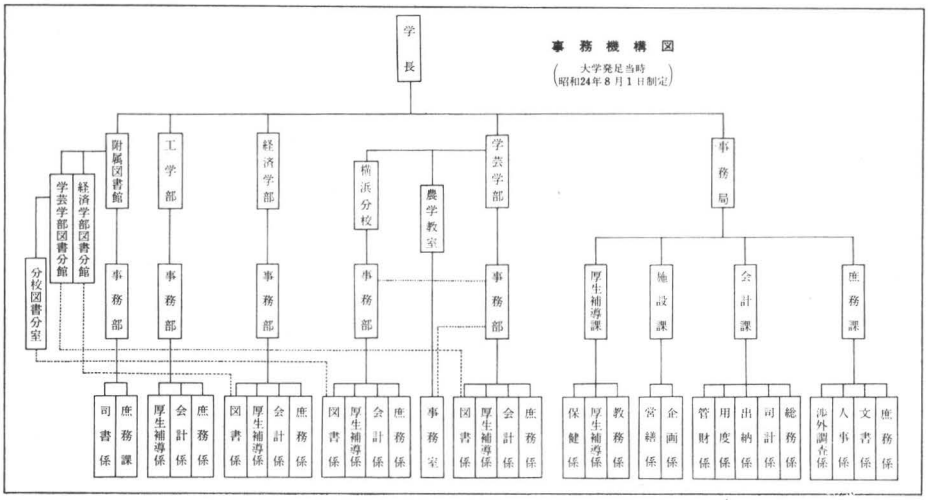
学科別		昭和24年度 定員	入学志願者数(A) 男	女	計	入学者数(B) 男	女	計	比率 (A/B)
工学部	機械工学科	40	103	0	103	41	0	41	2.6
	化学工業科	35	114	1	115	33	1	34	3.3
	電気化学科	35	85	1	86	36	0	36	2.5
	建築学科	30	56	0	56	25	0	25	1.9
	造船工学科	28	67	0	67	29	0	29	2.4
	電気工学科	28	78	0	78	29	0	29	2.8
	計	196	503	2	505	293	1	194	2.6
工学部2部	機械工学科	30	72	0	72	31	0	31	2.4
	化学工業科	30	65	1	66	29	1	30	2.2
	計	60	137	1	138	60	1	61	2.3
合計		256	640	3	643	353	2	255	—

学科別		昭和25年度 定員	入学志願者数(A) 男	女	計	入学者数(B) 男	女	計	比率 (A/B)
工学部	機械工学科	40	373	0	373	48	0	48	7.8
	化学工業科	35	461	3	464	36	1	37	12.5
	電気化学科	35	176	1	177	37	1	38	4.7
	建築学科	30	211	2	213	33	1	34	6.3
	造船工学科	28	227	0	227	33	0	33	6.9
	電気工学科	28	306	0	306	34	0	34	9.0
	計	196	1,754	6	1,760	221	3	224	7.9
工学部2部	機械工学科	30	138	0	138	35	0	35	3.9
	化学工業科	30	112	0	112	30	0	30	3.7
	計	60	250	0	250	65	0	65	3.8
合計		256	2,004	6	2,010	286	3	289	—

学科別		昭和26年度							
		定員	入学志願者数(A)			入学者数(B)			比率 (A/B)
			男	女	計	男	女	計	
工学部	機械工学科	40	540	0	540	40	0	40	13.5
	化学工業科	35	659	8	667	33	0	33	20.0
	電気化学科	35	224	2	226	34	1	35	6.5
	建築学科	30	266	0	266	27	0	27	9.9
	造船工学科	28	283	0	283	25	0	25	11.3
	電気工学科	28	379	1	380	29	0	29	13.1
	計	196	2,351	11	2,362	188	1	189	12.5
工学部2部	機械工学科	30	196	0	196	37	0	37	5.3
	化学工業科	30	148	4	152	29	1	30	5.1
	計	60	344	4	348	66	1	67	5.2
合計		256	2,695	15	2,710	254	2	256	—

		昭和27年度							
工学部	機械工学科	40	734	1	735	44	0	44	16.7
	化学工業科	35	737	8	745	36	0	36	20.7
	電気化学科	35	232	1	233	35	0	35	6.7
	建築学科	30	273	1	274	31	0	31	8.8
	造船工学科	28	418	1	419	32	0	32	13.1
	電気工学科	28	437	1	438	32	0	32	13.7
	計	196	2,831	13	2,844	200	0	200	14.3
工学部2部	機械工学科	30	249	0	249	30	0	30	8.3
	化学工業科	30	196	3	199	30	0	30	6.6
	計	60	445	3	448	60	0	60	7.4
合計		256	3,276	16	3,292	260	0	260	—

5. 事務機構図



6. 工学部職員

建築学第四	教授	工学博士	江国正義	
	学部長	工学士		
機械工学第五	教授	工学博士	山中直次郎	
		工学士		
機械工学第一	〃	工学博士	湯浅亀一	
		工学士		
化学工業第三	〃	理学博士	阿部滋弘	
造船工学第三	〃	工学士	成島秀	
化学工業第三	〃	理学博士	草間時蕃	
		理学士		
機械工学第三	〃	工学博士	柴田晴彦	
		工学士		
電気工学第二	〃	工学博士	後藤良	
		工学士		
化学工業第二	〃	工学士	多和田寛	
化学工学	〃	工学博士	野手悌士	
		工学士		
建築学第一	〃	工学博士	大岡実	
		工学士		
化学工業第一	〃	工学博士	大谷泰通	
		理学士		
建築学第二	〃	工学博士	佐藤鑑	
		工学士		
機械工学第三	〃	工学博士	三原金吾	
		工学士		
化学工業第四	〃	理学博士	木下恭二	
		理学士		
電気化学第三	〃	工学博士	北川徹三	
		理学博士		
		理学士		
分析化学	〃	理学博士	河村文一	
電気工学第三	〃	工学博士	中島好忠	
		工学士		
造船工学第二	〃	工学博士	南義夫	
		工学士		
機械工学第四	〃	工学士	黒川恒勝	
造船工学第四	〃	工学士	小山永敏	
電気工学第一	〃	理学博士	吉田梅次郎	
		理学士		
電気化学第二	〃	工学博士	友成忠雄	
		工学士		
化学工業第一	兼任教授	工学博士	永井彰一郎	
		工学士		
電気化学第一	〃	工学博士	岡俊平	
		工学士		
電気工学第三	〃	工学博士	福田節雄	
		工学士		
機械工学第二	助教授	工学士	山野健郎	
化学工業第二	〃		森川幾久雄	
造船工学第三	〃	工学士	沢村鶴松	
建築学第四	〃	工学士	田口武一	
造船工学第四	〃		吉岡勲	
化学工業第一	〃	工学士	高橋健太郎	
応用数学	〃	理学士	八田秀三郎	
機械工学第一	〃	工学士	中村康治	
電気化学第一	助教授	工学士	柴崎安一	
電気化学第三	〃	工学士	山田大十	
電気工学第四	〃	工学士	武田進	
電気化学第四	〃	工学士	松野武雄	
建築学第三	〃	工学士	飯塚五郎蔵	
建築学第一	〃	工学士	井上充夫	
電気工学第一	〃	工学士	中西邦雄	
建築学第二	〃	工学士	河合正一	
造船工学第一	〃	工学士	丸尾孟	
機械工学第五	〃	工学士	小栗達	
機械工学第三	〃	工学士	横山亨	
電気工学第二	〃	工学士	池田吉堯	
化学工業第四	〃	理学博士	田丸謙二	
		理学士		
電気化学第三	〃	工学士	塩谷繁雄	
化学工業第三	〃	工学士	佐藤菊正	
機械工学第三	〃	工学士	中山一雄	
建築学第三	講師	工学士	林豪蔵	
電気化学第二	〃		鶴岡武	
分析化学	〃	工学士	桃木弘三	
電気工学第一	〃	工学士	岡崎彰夫	
造船工学第二	〃	工学士	永井保	
化学工業第三	〃	工学士	横山金一	
	助手		日浦要之亟	
	〃		井奈薫次	
	〃		柿沢晋	
	〃		五島忠治	
	〃		門田稔	
	〃	工学士	小川忠彦	
	〃		高瀬光蔵	
	〃	工学士	高橋正雄	
	〃	工学士	宮本統	
	〃	工学士	石井東典	
	〃		鈴木繁喬	
	〃	工学士	松下寛	
	〃		飯田一雄	

機械工学第二	非常勤講師	工学士	横堀章一	
機械工学第三	〃	工学士	伊藤鎮	
造船工学第四	〃	工学士	米原令敏	
造船工学第四	〃	工学士	徳永勇	
機械工学第二	〃	工学士	増淵正美	
電気化学第四	〃	工学士	飯沼義雄	
電気工学第三	〃	工学士	弘山尚直	
化学工業第三	〃	農学士	高橋健	
電気工学第一	〃	工学博士 工学士	安宅彦三郎	
化学工学	〃	工学士	末沢慶忠	
特許法	〃	工学士	吉藤幸朔	
化学工業第四	〃	工学士	万木正	
建築学第二	〃	工学士	内藤亮一	
	非常勤医員	医学士	森豊明	
	非常勤看護婦		高橋つね	
事務長			菅野修三	
庶務係長事務取扱			松崎成一	
会計係長			田中源二	
教務係長			橋本仲蔵	
厚生係長			佐々木正雄	
図書係長			菅井正三	

	助手		川草善助	
	〃		野尹孝	
	〃	理学士	原佑禎	
	〃	工学士	倉富太郎	
	〃	理学士	田耕三	
	〃	理学士	賀秀人	
	〃		馬二郎	
	〃		田十三雄	
	〃		田三郎	
	〃		戸和男	
機械工学第二	非常勤講師	工学博士 工学士	中敬吉	
建築学第一	〃		島一郎	
保健学	〃	医学士	森豊明	
機械工学第二	〃	工学士	槇田博臣	
化学工業第三	〃	農学士	藤巻正生	
建築学第三	〃	工学士	山門明雄	
機械工学第二	〃	工学士	実吉金郎	
建築学第三	〃	工学士	大西亥輔	
電気化学第二	〃	工学士	入一二	
造船工学第四	〃	工学士	東条久雄	
建築学第二	〃	工学士	綾井九州彦	
電気工学第四	〃	工学博士 工学士	渡辺孝正	

横浜国立大学学則

第1章　総　則

（組織）

第1条　本学に，左の学部を置く．

学芸学部

経済学部

工学部

（修業年限，学年，学期，休業日）

第2条　各学部の修業年限は，4年とし，前期課程2年，後期課程2年に分ける．前期2年間に一般教養に関する授業科目を，後期2年間に専門教養に関する授業科目を履修させることを原則とする．

2　学芸学部に，教員養成のため修業年限2年の臨時履修制度を設ける．

3　工学部に，夜間において授業を行う修業年限5年の課程を設ける．

4　前2項に関する規程は，別に定める．

第3条　学年は，4月1日に始まり翌年3月31日に終る．

2　学年は，前学期後学期とする．

前学期，4月1日から10月15日まで

後学期，10月16日から翌年3月31日まで

第4条　休業日（授業を行わない日）は，次のとおりとする．

日曜日

国民の祝日

本学記念日　6月1日

春期休業　4月1日から同月7日まで

夏期休業　7月1日から8月31日まで

冬期休業　12月25日から翌年1月7日まで

その他臨時の休業日

第2章　学科課程，課程修了および卒

業に関する事項

第5条　学科課程，課程修了および卒業の認定は，学部規程で定める．

第6条　第2条に規定する期間学部に在学し，定められた科目および単位を修得し，卒業の認定を得た者に卒業証書を授与する．

第7条　卒業者は，学士と称することができる．

第3章　入学，退学，転学，休学に関する事項

（入学）

第8条　学生の入学時期は学年の初めとする．

第9条　本学に入学することができる者は次の各号の一に該当する者でなければならない．

1　高等学校を卒業した者．

2　通常の課程による12年の学校教育を修了した者，または通常の課程以外の課程によって，これに相当する学校教育を修了した者．

3　外国において12年の学校教育課程を修了した者．

4　文部大臣が指定した者．

5　学部において試験を行い，高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者．

第10条　本学に入学を志願する者の数が，その学部の収容定員を越える場合は，学部で選抜し，入学を許可すべき者を定める．ただし，収容定員に満たない場合においても適宜選考を行うことがある．

2　前項の選抜選考の方法は，学部で定める．

第11条　次の各号の1に該当する者については，前条の規定にかかわらず，入学を許可することができる．

1　本学の1学部を卒業し，さらに他の学部または，同一学部の他の学科に入学を志願する者．

2　本学の1学部を退学した後，さらにその学部に入学を志願する者．

第12条　本学の1学部の学生で，他の学部に転学を志願する者，または他の大学の学生で本学に転学を志願する者については，新たに入学を志願する者の例による．ただし，その学部において別段の定めがある場合はこの限りでない．

2　前項の規定によって転学を志願する者は，その際，在学する学部長または学長の許可証を願書に添えなければならない．

（退学）

第13条　学生は，学部長の許可を得て，退学することができる．

（転学）

第14条　学生は，学部長の許可を得て，他の大学に転学を志願することができる．

（休学）

第15条　疾病またはその他の事由のため，定められた科目または単位の修得ができない場合は，学部長の許可を得て，その学期の終りまで休学することができる．

第16条　疾病のため，修学が不適当と認められる学生に対しては，学部長は休学を命ずることができる．

第17条　休学期間中にその事由が消滅したときは，学部長の許可を得て就学することができる．

第18条　休学した期間は，在学期間に算入しない．

第19条　休学期間は，通計4年を越えてはならない．

第4章　除籍，懲戒に関する事項

（除籍）

第20条　在学8年を越えてもなお，定められた科目または単位を修得できない者は，学部長は，学長の承認を得てこれを除籍することができる．

第21条　事由なく授業料の納付を怠り，督促を受けてもなお納付しない時は，学部長は，学長の承認を得てこれを除籍することができる．

（懲戒）

第22条　学長は，教育上必要があると認めたときは，学生を懲戒する．懲戒は，学生の属する学部の教授会および補導協議会の同意を得て，学部長に行わせる．懲戒は，訓告，停学，および退学とする．ただし，退学は，次の場合に限る．

1　性行不良で改善の見込がないと認められる者．

2　学校の秩序を乱しその他学生としての本分に反した者．

第5章　検定料，試験手数料，入学料，授業料に関する事項

（検定料，試験手数料）

第23条　入学を志願する者は，検定料金400円を納入しなければならない．

第24条　第9条第5号の規定によって認定を受ける者は，試験手数料金400円を納入しなければならない．

（入学料，授業料）

第25条　入学または転学を許可された者は，入学料金400円を納付しなければならない．

第26条　授業料は年額金3,600円とし，次の2期に分けて，定められた期間内に納付させる．

前期　4月から9月まで　金1,800円

後期　10月から3月まで　金1,800円

2　授業料を月割で納付する場合には，その月割額は金300円とする．

第27条　学長は，学費の支弁が困難な学生に対しては，せん議の上で授業料を減免し，またはその徴収をその学年の終りまで猶予することができる．

2　前項の規定によって授業料減免または徴収猶予の願い出があったときは，学部長は，その事情を審査し，意見を添えて学長に申請しなければならない．

3　前項の規定による授業料の減免または徴収猶予は，学年ごとに定める．ただし，その事由が消滅したと認められるときは，その許可を取り消すことができる．

第28条　休学者に対しては，その期間中授業料を免除する．

第29条　前2条の規定による授業料の減免または徴収猶予は，特にその期間を指定しない場合は，次月分からこれを行う．ただし，授業料納付期限前に減免の決定をした場合は，当月分からこれを行う．

第30条　第27条第3項但書の規定によって，授業料の減免を取り消された者および休学中の学生で，期の半ばに復学した者の授業料は，その月分から月割によって徴収する．

第31条　退学または除籍の場合は，その期の授業料はこれを徴収する．

2　停学中の学生については，その期間中の授業料はこれを徴収する．

第32条　既納の検定料，試験手数料，入学料，授業料はこれを返付しない．

第6章　選科生，聴講生，専攻生および外国人特別学生に関する事項

（選科生）

第33条　学部で定めた科目のうち，1科目または数科目を選択して学修しようとする者は，選考のうえ選科生として入学を許可することができる．

第34条　選科生として入学を志願する者は，願書に学修しようとする科目を記載し，履歴書を添えて，学年の初めに当該学部長に差し出さなければならない．

第35条　選科生の入学資格その他は，学部規定で定める．

第36条　選科生は，その学修した科目について試験を受けることができる．

2　前項の試験に合格したときは，願いによって学長は，これに証明書を附与する．

第37条　選科生には，前4条の規定の外，本学則中学生に関する規定を準用する．

（聴講生）

第38条　学部で定めた科目のうち1科目または数科目を選んで聴講しようとする者は，選考のうえ聴講生として入学を許可することができる．

第39条　聴講生として入学を志願する者は，願書に聴講しようとする科目および期間を記載し，履歴書を添えて学期初めに当該学部長に差し出さなければならない．

第40条　聴講生の入学資格その他は，学部規程で定める．

第41条　聴講生に対しては試験を行わない．

第42条　聴講料は，毎学期1科目について金600円とし，前納させる．ただし，3科目以上聴講する場合にも，聴講料は毎学期金1,800円を越えない．

2　既納の聴講料は返付しない．

第43条　聴講生には，前5条の規定の外，本学則中学生に関する規定を準用する．

（専攻生）

第44条　学部において，特別の事項について攻究しようとする者は，選考のうえ専攻生として入学を許可することができる．

第45条　専攻生として，入学を志願する者は，願書に攻究事項を記載し，履歴書を添えて当該学部長に差し出さなければならない．

第46条　専攻生として入学することのできる者は，次の各号の一に該当する者とする．

(1)　大学を卒業した者．

(2)　外国において16年の学校教育課程を修了した者．

(3)　文部大臣が指定した者．

(4)　その他大学の専攻科（大学院を含む．）において，大学を卒業した者と同等以上の学力が

あると認めた者.

2　前項の規定によって認定を受ける者は，試験手数料金400円を納入しなければならない.

第47条　専攻生の在学期間は1年以上とする.

第48条　専攻生の入学期は，毎学期の初めとする.ただし，特別の事情のある者はこの限りでない.

第49条　専攻生として，入学を許可された者は，入学料金400円を納付しなければならない.

第50条　専攻生の指導教官は，当該学部教授会の議を経て学部長がこれを定める.

第51条　専攻生の攻究料は年額金3,600円とし，入学の際に，納付しなければならない．在学1年以上にわたる場合は，入学した学期に相当する学期の初めに納付しなければならない.

2　既納の入学料および攻究料は返付しない.

第52条　攻究に要する費用は，教室の設備に附帯するものの外はすべて自弁とする.

第53条　専攻生で，退学しようとするときは，指導教官を経て学部長に願いでて，その許可を受けなければならない.

第54条　専攻生で，その本分に反し，または攻究料納付の義務を怠り，もしくは疾病その他の事由によって攻究の目的を達することができないと認められた者は，学部長の許可を得て，これを除籍する.

（外国人特別学生）

第55条　外国人で，学部で定めた科目のうち1科目，または数科目を選択して学習しようとする者は，定員外として選考のうえ入学を許可する.

第56条　外国人特別学生で，学部で定めた試験に合格した者には，卒業証書を授与することができる.

第57条　学部長は，外国人特別学生の検定料，試験手数料，入学料および授業料を，学長の承認を得て，これを徴収しないことができる.

第58条　外国人特別学生には，前3条の外，本学則中学生に関する規定を準用する.

第7章　学寮に関する事項

第59条　本学に，学生の自治精神を養い，規律ある協同生活を営み，民主的平和的な社会の形成者を育成するため，学寮を設ける.

第60条　学寮は，各学部に分属し，当該学部長がこれを監理する.

第61条　寄宿料は，年額金600円とし，次の2期に分けて授業料と同時に納付させる.

前期　4月から9月まで　　金300円

後期　10月から翌年3月まで　　金300円

2　寄宿料を月割で分納する場合は，その月額を金50円とする.

第62条　前条の規定による期の半ばで入寮する者の寄宿料は，その月分から月割で徴収し，寄宿料納付期限前に退寮する者の寄宿料は，その月分までこれを徴収する.

2　既納の寄宿料は返付しない.

第63条　学寮の運営その他必要な事項は，別に定める.

附　則

この学則は，昭和24年5月31日から施行する.

横浜国立大学工学部規程

第1章　学科及び授業

第1条　本学部に次の学科を置く

機械工学科
化学工業科
電気化学科
建築学科
造船工学科
電気工学科

夜間において授業を行う課程に次の2学科を置く

機械工学科
化学工業科

第2条　授業学科目を分けて，必修科目及び選択科目とする．授業学科目及びその毎週授業時数は別表による.

第3条　学生はその履修しようとする学科目を定め予めその担任教官の承認を受けなければならない.

第4条　各学科において授業学科目の外に学科実習を課することがある.

第2章　入　学

第5条　横浜国立大学学則（以下「学則」と云う）第9条，第11条，第12条により本学部に入学しようとする者は，別に定める書式の入学願書を

差出さなければならない.

第6条　学則第10条による入学志願者は学科試験，身体検査，出身学校長の調査書及び進学適性検査の結果により選考して入学を許可する者を定める.

第7条　学則第11条第2号の規定は，学則第4章第20条乃至第22条の除籍及び退学者には適用しない.

第8条　学則第12条の規定による転学は本学部と同一と見做すことのできる学部の者に限り詮考の上許可することがある.

第3章　認　定

第9条　学則第5条による認定を分けて，学科目試験及び論文試験とする.

第10条　学科目試験は学生の申請によりその履修した科目について行う.

第11条　学科目試験はその学科目の授業が終了する学期末において行う．但し臨時に行うことがある.

第12条　学科目試験は担任教官が適宜の方法によって行う．担任教官に事故があるときは，他の教官が行うことがある.

第13条　学科目試験，論文試験の結果は合格，不合格で表わす.

第14条　論文試験は，論文・計画もしくは実験報告の審査及び口頭試問とする．但し口頭試問は省略することがある.

第15条　論文試験は，3年以上在学し，別に定める所の学科目試験に合格した者について行う.

第16条　論文試験を受けようとする者は，その旨を所属学科教室主任を経て学部長に申請しなければならない.

第17条　論文試験は，3月中に行うものとする．但し在学4年を超える者については，随時行うことができる.

第4章　選科生，聴講生，専攻生，及び外国人特別学生

第18条　学則第35条による選科生として入学を許可する者は品行方正，志望強固，年齢17年以上の者で次の各号の1に該当し且つ入学検定に合格した者に限る.

1　2箇年以上引続き志望学科目に関する工業に従事した者

2　高等学校を卒業した者

第19条　選科生の入学検定にはすべて本科生の規定を準用する.

第20条　学則第40条の規定による聴講生は聴講科目を理解するにたる者と教授会において認めた者に限り入学を許可する.

第21条　専攻生は学則第46条に規定する者の外教授会において適当と認めた者に限り入学を許可する.

第22条　専攻生で，攻究の必要により引続き在学しようとする者は，指導教官を経てその旨を学部長に願出で許可を得なければならない.

第23条　外国人特別学生は教授会において詮考の上入学を許可する.

第5章　委託生

第24条　本学部は，官公庁の委嘱ある場合には，教授会において詮考の上委託生を置くことができる.

第25条　委託生は，本科生もしくは選科生として入学させる.

第26条　委託生については特別の規定ある場合の外本学部規程を適用する.

第6章　学　寮

第27条　本学学生で，入寮しようとする者は，入寮願を学部長に提出許可を得なければならない.

第28条　寄宿料を月割で分納する場合は，毎月10日限り又は入寮後5日以内に納付しなければならない.

第29条　寄宿料を定められた日までに納付しない者には，退寮を命ずることができる.

第30条　寮生で退寮しようとするときは，その理由を附した願書を提出して許可を得なければならない.

第31条　寮生の心得は，別に定める.

附　則

この規程は，昭和24年5月31日から施行する.

I　一般教養科目

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	単位数 必修	単位数 選択
人文科学	101	論理	2									2
〃	102	倫理			2							2
〃	103	哲学			2	2						4
〃	104	心理		2								2
〃	105	歴史	2									2
〃	106	西洋文学					2					2
〃	107	国語		2								2
〃	108	英語	4	4	4	4	何レカ1ツ必修				8	
〃	109	独語	4	4	4	4						8
〃	110	仏語	4	4	4	4						8
〃	111	美学					2					2
社会科学	201	経済	2	2								4
〃	202	法律	2	2								4
〃	203	数理統計			2	2						4
〃	204	社会			2	2						4
〃	205	政治			2	2						4
〃	206	科学概論					2	2				4
自然科学	301	数学第1A	10	10	何レカ1ツ必修						10	
〃	302	数学第1B	6	6								6
〃	303	数学第2A			6	6					6	
〃	304	数学第2B			4	4						4
〃	305	数学特論					2	2				4
〃	306	物理学	4	4							5	
〃	307	力学			2	2					4	
〃	308	物理学実験		3							1	
〃	309	生物学	2	2								4
〃	310	地学			2							2
〃	311	化学	4	4								4
〃	312	化学A・B	2	2								4
〃	313	化学実験	3	3							2	
体育	401	実技	2	2	2	2					2	
〃	402	理論		2		2					2	

II　機械工学科

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	単位数 必修	単位数 選択
第1講座	1101	機械力学					4	4			6	
〃	1102	応用弾性学							2	2		4
〃	1103	塑性学								1		1
〃	1104	機械工学実験講義						2				2
〃	1105	荷役機械								2		2
〃	1106	機械工学実験第1						1.5	1.5		1	
〃	1107	機械工学実験第2								9	9	6
第2講座	1201	機構学	2	2							4	
〃	1202	機械力学					2	2				4
第2講座	1203	振動工学							2			2
〃	1204	自動制御理論								2		2
〃	1205	機械設計			1	1	2				4	
〃	1206	機械製図 第1			6	6					4	
〃	1207	機械製図 第2					6	6				4
第3講座	1301	工業材料			4						4	
〃	1302	機械工作法			2	2					4	
〃	1303	工作機械					2	2				4
〃	1304	金属理論							2	2		4
〃	1305	塑性加工							2	2		2
〃	1306	熔接								1		2
〃	1307	工作特論							2	2		4
〃	1308	工場実習 第1			3	3					2	
〃	1309	工場実習 第2					1.5	1.5			1	
第4講座	1401	流体力学 第1				2	2				4	
〃	1402	流体力学 第2						2				2
〃	1403	空気力学							2			2
〃	1404	水力機械					2	2				4
〃	1405	空気機械							2			2
〃	1406	化学工学							2	2		4
〃	1407	鉄道車輛							2			2
〃	1408	舶用機械								2		2
〃	1409	繊維工学							2			2
第5講座	1501	熱力学			2	2					4	
〃	1502	蒸汽罐 蒸汽原動機					2	2	2			6
〃	1503	内燃機関					2	2				4
〃	1504	熱機関特論							2			2
〃	1505	伝熱工学							2			2
〃	1506	冷凍工学							2			2
〃	1507	暖冷房								2		2
〃	1508	自動車工学							2			2
講座外	1001	機械工学概論		2								2
〃	1002	図学演習	2	2								3
		一般電気工学					2	2				4
		工場建設及経営								2		2
		電気工学実験										
		卒業論文・計画									10	

III　化学工業科

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	単位数 必修	単位数 選択
第1講座	2101	酸アルカリ						2	2		4	
〃	2102	肥料						2				2
〃	2103	硫酸塩工業						2	4			6
〃	2104	耐火材料						2				2

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数								単位数	
			1年		2年		3年		4年		必修	選択
			前	後	前	後	前	後	前	後		
第1講座	2105	非金属材料			2	2						4
〃	2106	工業薬品						2				2
〃	2107	実験	9	9							6	
第2講座	2201	燃焼理論					2	2			4	
〃	2202	燃料化学					2					2
〃	2203	石炭						2				2
〃	2204	石油					2					2
〃	2205	化学工業概説			2	2					4	
〃	2206	実験			6	6	3	3			6	
第3講座	2301	有機合成基礎反応			2	2					4	
〃	2302	染料					2					2
〃	2303	合成樹脂香料						2				2
〃	2304	油脂塗料			2	2						4
〃	2305	糖澱粉食品			2	2						4
〃	2306	醱酵			2							2
〃	2307	実験			9	9					6	
第4講座	2401	膠質学					2	2			4	
〃	2402	応用膠質学							2	2		4
〃	2403	繊維					2	2				4
〃	2404	理論有機化学							2	2		4
〃	2405	高分子構造学							2	2		4
〃	2406	実験					9	9			6	
無機化学	0101	無機化学特論					2					2
有機化学	0201	有機化学特論						2				2
物理化学	0401	物理化学			4	4					8	
〃	0402	化学熱力学					2	2				4
〃	0403	量子化学							2	2		4
〃	0404	物理化学特論							2			2
分析化学	0301	基礎分析化学	2								2	
〃	0302	分析化学理論		2							2	
〃	0303	工業分析			1	1						2
〃	0304	特殊分析				1	1					2
化学工学	0501	機械工学特論			2							2
〃	0502	化学工学					2	2			4	
〃	0503	化学機械				2						2
〃	0504	化学工学演習					2	2				2
〃	0505	製図			3	3						2

Ⅳ　電気化学科

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数								単位数	
			1年		2年		3年		4年		必修	選択
			前	後	前	後	前	後	前	後		
第1講座	3101	理論電気化学			2	2					2	
〃	3102	電解化学					2	2			3	
〃	3103	電池蓄電池							2			2
〃	3104	電解装置						1				1
講座	講座科目番号	教科名	毎週時数								単位数	
			1年		2年		3年		4年		必修	選択
			前	後	前	後	前	後	前	後		
第1講座	3105	湿式電気冶金						2				2
〃	3106	電鍍電鋳					2					2
〃	3107	有機電気化学					1	2				3
〃	3108	電気化学工業概論					2	2				4
〃	3109	実験										
第二講座	3201	電熱化学					2	2			3	
〃	3202	熔融塩電解工業						2				2
〃	3203	金相学			2						2	
〃	3204	伝熱論				2						2
〃	3205	高温度測定							1			1
〃	3206	電気炉構造							2			2
〃	3207	冶金学				2	2					4
〃	3208	実験					6				2	
第3講座	3301	工業物理化学					2	2			3	
〃	3302	気体電気化学					2				2	
〃	3303	界面電気化学					2					2
〃	3304	高圧化学							2			2
〃	3305	光化学				2						2
〃	3306	輻射化学					2	2				4
〃	3307	触媒化学							2			2
〃	3308	原子機化学							2			2
〃	3309	実験						6			2	
第4講座	3401	電気材料					2	1			3	
〃	3402	誘電体理論						2				2
〃	3403	金属材料					2				2	
〃	3404	腐蝕防蝕							2			2
〃	3405	磁気材料						1				1
〃	3406	半導体							2			2
〃	3407	実験						6			2	

Ⅴ　建築学科

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数								単位数	
			1年		2年		3年		4年		必修	選択
			前	後	前	後	前	後	前	後		
第1講座	4101	建築歴史					2	2			4	
〃	4102	美術史	2	2								4
〃	4103	建築意匠					2	2				4
〃	4104	庭園学							2	2		4
〃	4105	図学	2	2								4
〃	4106	自在画及彫塑	3	3								2
〃	4107	建築製図　第1			8	8					4	
第2講座	4201	建築計画　第1			3	3					6	
〃	4202	建築計画　第2					3	3			6	
〃	4203	都市計画及法規							2	2		4
〃	4204	建築学大意							2			2
〃	4205	測量及実習							2	2		4

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	単位数 必修	単位数 選択
第2講座	4206	建築製図 第2							12	12	6	
第3講座	4301	建築一般構造			3	3					6	
〃	4302	建築構造持論							2	2		4
〃	4303	建築材料			2	2					4	
〃	4304	建築設備							3	3		6
〃	4305	建築施工法							2	2		4
〃	4306	建築製図 第3							16	6	8	
第4講座	4401	構造力学 第1			2	2					4	
〃	4402	構造力学 第2					2	2			4	
〃	4403	構造力学特論							2	2		4
〃	4404	鋼構造学					2	2			4	
〃	4405	鉄筋コンクリート構造学					3	3		6		
〃	4406	木構造学				2					2	
〃	4407	構造学演習第1					3	3				3
〃	4408	構造学演習第2							4			2
		卒業論文及計画									10	

VI 造船工学科

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	単位数 必修	単位数 選択
第1講座	5101	船舶算法			1	1					2	
〃	5102	船舶復原性			1	1					2	
〃	5103	船体動揺					1	1			2	
〃	5104	船体抵抗推進旋回						2	2		4	
〃	5105	流体力学					2	2				4
〃	5106	応用流体力学							2	2		4
〃	5107	船舶理論演習第1			1	1	1	1	1	1	3	
〃	5108	船舶工学実験第1							3		1	
第2講座	5201	船体構造力学							2	2	4	
〃	5202	船体振動					2	2				4
〃	5203	応用力学				2	2				4	
〃	5204	(応用弾性学)							2			2
〃	5205	(塑性学)							1			1
〃	5206	船舶理論演習第2					1	1	1	1	2	
〃	5207	船舶工学実験第2					3				1	
第3講座	5301	船舶概論	2									2
〃	5302	商船設計					2				2	
〃	5303	鋼船構造			2	2	2				6	
〃	5304	木船							2			2
〃	5305	漁船							2			2
〃	5306	特殊船								2		2
〃	5307	設計及製図第1			6	6	2	2	5	5	5	
第4講座	5401	造船幾何			1	1					2	
〃	5402	商船艤装					3	3			6	
〃	5403	造船施工法					2	2			4	

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	単位数 必修	単位数 選択
第4講座	5402	船舶法規								2		2
〃	5405	船舶機関							2	2	4	
〃	5406	航海術運用術								2		2
〃	5407	設計及製図第2							10	10	5	
	5901	工場実習 夏季休暇中										
	5902	卒業設計及論文									10	
一般		熔接工学					2	2				4
		工業材料			2	2						4
		電気工学			2	2						4
		電気工学実験				3						1
		水力機械大要			2	2						4
		熱機械大要					2	2				4
		機械設計大要			2	2						4
		機械製図				3						1
		図学	2	2								3

VII 電気工学科

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	単位数 必修	単位数 選択
第1講座	6101	電気磁気学	4	4							6	
〃	6102	同演習	2	2								2
〃	6103	交流理論			1	1					2	
〃	6104	同演習			2	2						2
〃	6105	電気回路論					2	2			4	
〃	6106	過渡現象論					2	2			4	
〃	6107	計測			2	2					4	
〃	6108	電気工学実験第1			3	3					2	
〃	6109	電気磁気特論					2	2				6
第2講座	6201	電気機械器具第1			2	2					4	
〃	6202	電気機械器具第2					4	4			8	
〃	6203	電気機械設計					2	2				4
〃	6204	同製図					2	2	2	2		4
〃	6205	電気工学実験第2					6	6			4	
第3講座	6301	発送配電			2	2	2	2	2	2	6	
〃	6302	電気応用							4			4
〃	6303	電気法規							2			2
〃	6304	電気学大要										4
〃	6305	電気工学特論										3
〃	6306	一般電気学及実験大意					1.5	1.5				2
第4講座	6401	電子工学					2	2			4	
〃	6402	無線通信					2	2			4	
〃	6403	電気機械設計					2	2				4
〃	6404	有線通信							4			4
〃	6405	電気工学実験第3							6		4	
〃	6406	無線工学大要									2	

講座	講座科目番号	教科名	毎年時数								単位数	
			1年		2年		3年		4年		必修	選択
			前	後	前	後	前	後	前	後		
		卒業論文及計画									10	

I　第2部　一般教養科目

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数										単位数	
			1年		2年		3年		4年		5年		必修	選択
			前	後	前	後	前	後	前	後	前	後		
人文科学	101	論理	2											2
〃	102	倫理			2									2
〃	103	哲学					2	2	2					4
〃	104	心理		2										2
〃	105	歴史	2											2
〃	106	西洋文学				2								2
〃	107	国語		2										2
〃	108	英語	2	2	2	2	2	2	何レカ1ツ必修				12	
〃	109	独語	2	2	2	2	2	2					12	
〃	111	美学							2					2
○○学	201	経済	2	2										4
〃	202	法律			2	2								4
〃	203	統計												
〃	204	社会									2	2		4
〃	205	政治							2	2				4
〃	206	科学概論												
自然科学	301	数学A	6	6	6	6	4	4						14
〃	302	数学B	4	4	4	4	4	4						12
〃	305	数学特論							4	4				4
〃	306	物理学	4	2	2								4	
〃	307	力学	1	1	1	1							4	
〃	308	物理学実験		2									1	
〃	308	生物学	2	2										4
〃		地学												
〃	311	化学	4	4										4
〃	312	化学A・B	2	2										4
〃	313	化学実験	3	3									2	
体育	401	実技	1	1	1	1							2	
〃	402	講義		1			1						2	

II　第2部　機械工学科

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数										単位数	
			1年		2年		3年		4年		5年		必修	選択
			前	後	前	後	前	後	前	後	前	後		
第1講座	7101	材料力学					4	2					4	
〃	7102	弾性学							2	2				4
〃	7103	塑性学									2			2
〃	7104	荷役機械									2			2
〃	7105	機械工学実験講義						2					2	
〃	7106	機械工学実験1							4				1	
〃	7107	機械工学実験2									6	6	4	
第2講座	7201	機構学			2	2							4	
〃	7202	機械力学								2			2	
〃	7203	自動制御理論									2			2
〃	7204	機械設計							2	2			4	
〃	7205	振動工学										2		2
〃	7206	機械製図1							4	4			3	
〃	7207	機械製図2									4	4	3	
第3講座	7301	機械工作法			2	2							4	
〃	7302	計測工学								2				2
〃	7303	工作機械							2	2				4
〃	7304	熔接									2			2
〃	7305	塑性加工								2				2
〃	7306	金属理論								2	2			4
〃	7307	工業材料			2	2							4	
〃	7308	工場実習1			1.5	1.5							1	
〃	7309	工場実習2					1.5	1.5					1	
第4講座	7401	流体力学1					2	2					4	
〃	7402	流体力学2							2					2
〃	7403	水力機械							2	2				4
〃	7404	空気機械								2				2
〃	7405	化学工学									2	2		4
〃	7406	繊維工学										2		2
〃	7407	船用機械									2			2
〃	7408	鉄道車輛										2		2
第5講座	7501	熱力学					2	2			1	4		
〃	7502	蒸汽罐及蒸汽機関				2	2							4
〃	7503	蒸汽及ガスタービン							2	2				4
〃	7504	内燃機関1							2	2				4
〃	7505	内燃機関2									2			2
〃	7506	伝熱工学										2		2
〃	7507	冷凍工学									2			2
〃	7508	暖房及冷房										2		2
〃	7509	自動車										2		2

III　第2部　化学工業科

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数										単位数	
			1年		2年		3年		4年		5年		必修	選択
			前	後	前	後	前	後	前	後	前	後		
第1講座	8101	酸アルカリ					2	2					4	
〃	8102	肥料						2						2
〃	8103	硫酸塩工業						2	4					6
〃	8104	耐火材料							2				2	
〃	8105	非金属材料					2	2					4	
〃	8106	工業薬品							2					2
〃	8107	実験	4	4	4								4	

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	5年 前	5年 後	単位数 必修	単位数 選択
第2講座	8201	燃焼理論					2	2					4	
〃	8202	燃料化学						2						2
〃	8203	石炭							2					2
〃	8204	石油							2					2
〃	8205	化学工業概論			2	2							4	
〃	8206	実験					4	5	2				4	
第3講座	8301	有機合成基礎反応			2	2							4	
〃	8302	染料				2								2
〃	8303	合成樹脂香料					2							2
〃	8304	油脂・染料			2	2								4
〃	8305	糖澱粉食品				2	2							4
〃	8306	醱酵					2							2
〃	8307	実験				4	4	4					4	
第4講座	8401	膠質学					2	2					4	
〃	8402	応用膠質学							2	2				4
〃	8403	繊維					2	2						4
〃	8404	理論有機化学							2	2				4
〃	8405	高分子構造論								2	2			4
〃	8406	実験							4	4	4		4	
無機化学	0101	無機化学特論						2						2
有機化学	0201	有機化学特論							2					2
物理化学	0401	物理化学			2	4	2						8	

講座	講座科目番号	教科名	毎週時数 1年 前	1年 後	2年 前	2年 後	3年 前	3年 後	4年 前	4年 後	5年 前	5年 後	単位数 必修	単位数 選択
物理化学	0402	化学熱力学						2	2					4
〃	0403	量子化学								2	2			4
〃	0404	物理化学特論									2			2
合成化学	0501	機械工学総論				2								2
〃	0502	化学工学						2	2				4	
〃	0503	化学機械						2						2
〃	0504	化学工学演習							2	2			4	
〃	0505	製図				3	3							3
電気	0601	電気工学総論			2(実習は夏期休暇利用)									2
電化1	0701	電気化学工業概論			2(実習は夏期休暇利用)									2
〃	0702	電解化学工学				2	2							4
〃	0703	電池蓄電池				1	2							2
〃	0704	電鍍・電鋳						2						2
電化2	0705	金相学						2						2
〃	0706	冶金学			2	2								4
物理	0801	物理学特論(物理)							2	2				4
〃	0802	物理学特論(力学)						2	2					4
〃	0803	物理学特論 量子力学									2	2		4
分析化学	0301	基礎分析化学	2										2	
〃	0302	分析化学理論		2									2	
〃	0303	工業分析				1	1							2
〃	0304	特殊分析							2					2

施設

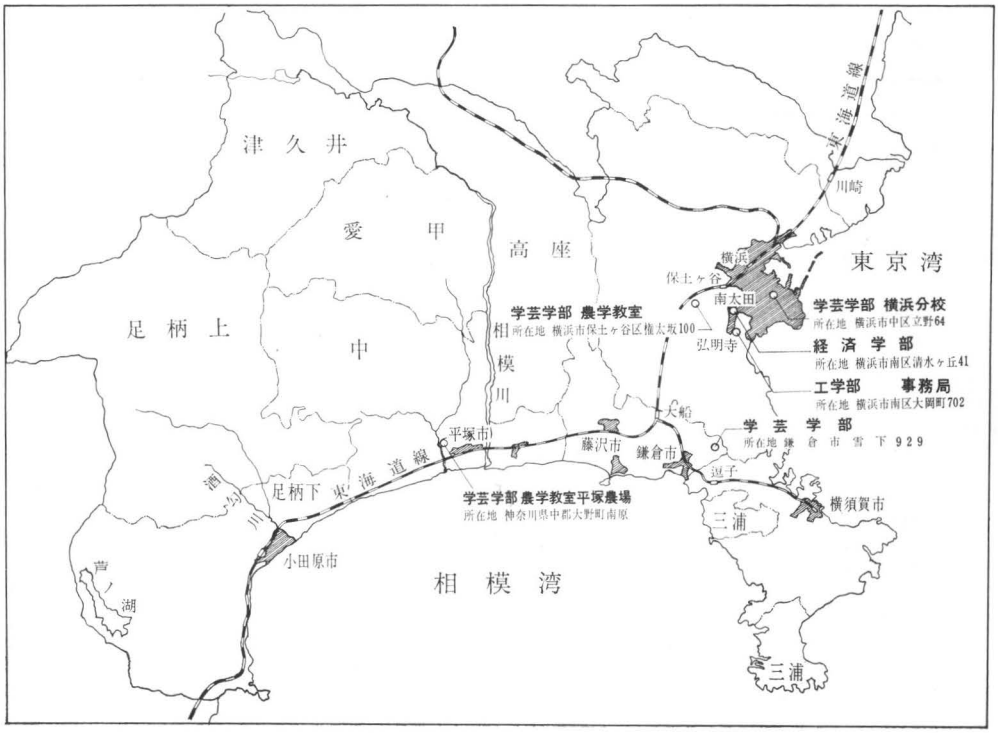
1. 敷地面積

区分	校舎	運動場	寄宿舎	農場	宿舎	計	備考
事務局	工学部構内	—	—	—	—	—	( )は借上地
学芸学部	14,489.45	3,345	630	—	225	18,689.45	単位は坪
横浜分校	3,055.96	2,886	—	—	40	5,981.96	
農学教室	3,965.00	2,199	—	13,398	—	19,562.00	
平塚農場	859.00	—	—	4,431	—	5,290.00	
経済学部	7,923.887	6,983	1,448	—	(406) 248	(406.00) 16,602.887	
工学部	**26,170.892**	**2,685**	**(1,532.89)**	—	**120**	**(1,532.89)** **28,975.892**	
計	56,464.189	18,098	(1,532.89) 2,078	17,829	(406) 633	(1,938.89) 95,102.189	

2. 建物面積

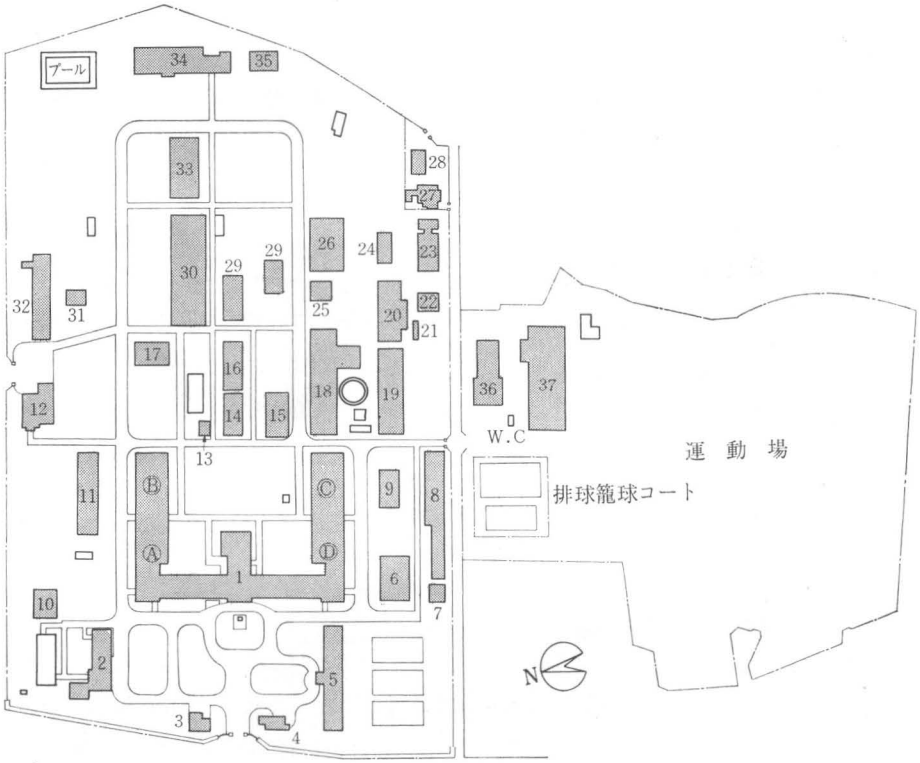
区分	校舎		寄宿舎		宿舎		計	
	建坪	延坪	建坪	延坪	建坪	延坪	建坪	延坪
事務局	172	252	—	—	—	—	172	252
学芸学部	3,278.82	5,177.32	210	420	76	76	3,564.82	5,673.32
横浜分校	853.562	2,046,08	—	—	11	11	864.562	2,057.08
農学教室	818.55	1,247.55	—	—	—	—	818.55	1,247.55
平塚農場	312.93	312.93	—	—	—	—	312.93	312.93
経済学部	898.931	1,980.481	220.20	314.20	171.635	193.050	1,290.766	2,487.731
工学部	**4,019.69**	**6,606.856**	**290.55**	**396.276**	**102.25**	**111.000**	**4,412.49**	**7,114.132**
計	10,354.483	17,623.217	720.75	1,130.476	360.885	391,050	11,436.118	19,144.743

横浜国立大学**位置図**



工学部配置図

所在地 横浜市南区大岡町702



1 本 館 Ⓐ化学工業科 Ⓒ機械工学科 Ⓑ電気化学科 Ⓓ造船工学科
2 事務局
3 車 庫
4 守衛所
5 図書館、建築学科製図室
6 建築学科本館
7 建築学科実験室
8 船体実験室
9 造船工学科船体模型製作室、機械室
10 化学工業科研究室
11 化学工業・電気化学科実験実習工場
12 横浜工業高校本館
13 薬品庫
14 強電弱電実験室
15 配電室、電気工学科本館
16 電気工学科実習室
17 電気化学科研究室
18 機械工学科水力実習工場及び汽罐室
19 機械工学科木型及び機械工場
20 機械工学科鍛造鋳造工場
21 砂置場
22 職工控室
23 横浜工業会
24 印刷室
25 石炭置場
26 生徒食堂
27 宿 舎 4号
28 宿 舎 1号
29 教 室
30 横浜工業高校教室
31 電気化学科研究室
32 横浜工業高校教室
33 電気工学科製図室
34 職員臨時宿舎
35 車 庫
36 電気工学科実習室
37 講堂兼体育館

2. 第1回入試および入学式

新制大学第1回の入学試験は，前期校が昭和24年6月8日より，後期校が6月15日よりときまり，その願書受付けは前，後期とも5月13日より5月26日までであった．

本校はこの時は前期校であった．本校の募集人員は，工学部196人（他に2部*60人）経済学部160人，学芸学部480人（4カ年課程160人，2カ年課程320人）で6月8，9日学科，11，12日，口頭試問および体格検査が行なわれた．

（注） 夜間工学部は全国で戸畑，金沢，京都，千葉，横浜の5校で修業年限5カ年，卒業資格は昼間と同等．

なお入学式は経済学部講堂で7月20日挙行され，来賓として総司令部よりマクマナスが出席祝辞を述べた．

3. 開学式

昭和24年11月3日経済学部講堂で，伊藤文部次官，内山神奈川県知事臨席して，本校開学式が挙行された．式後，仁科芳雄博士の講演があった．

冨山学長は大略次の通りあいさつした．

「わが横浜は明治時代においては欧米文化の我国導入の門戸であった．また明治末から大正初頭にかけては従来の貿易港一途であったのをさらに前進して，工業立市の大方針を立て多大の犠牲を払って横浜高工の誘致を策し，県市挙って敷地及び巨額の設備費を寄附した．われわれはその好意に応えて，工業技術の貢献を志して進む考えである．敗戦後の日本が武器を捨てて国の再建をするためには産業の復興により経済上の発展を図る以外に道はない．これがために我が大学の工学，経済両学部の負うべき責任は真に大なるものがある．又さらに重要なることは，日本の教育の堅実なる充実が基となることを強調せざるを得ない．学芸学部は初等中等教育担当者を育成する重責を担うものであり，3学部ともに日本再建に対して何れも甲乙なき重責を有するものである．挙学協力してこの期待に副うことを誓うものである．」

記念植樹

25年10月7日，大学移行を記念して工学部本館前庭（正門と正面玄関との間の北寄り）に記念植樹を行なった．この記念の楠は20年余を経た今日，目通り直径 30 cm にもなり亭々（ていてい）としてそびえている．

開学式

開学記念の楠

帽　章

横浜国立大学のバッジ

4.　徽章について

大学に移行して，まず新入生の服装は最も著しい変化を示した．当時の旧国立大学も，昭和24年からは本学と同じ新制大学に移行したわけである．したがって，服装も旧設の国立大学のものが，そっくりそのまま新設大学の制服となり，帽子は昔からの角帽で，帽章は「大学」という字をデザインした写真のようなものになった．制服は工専のものと変わるところはなかったが，ボタンは「大」の字の下に桜をあしらったもので，襟(えり)にも「T」の印をつけていた．

一方このような服装ではどこの大学の学生かわからないので，何か襟章のようなものを必要としていた．たまたま昭和24年８月初め，工学部建築学科彫塑アトリエよりの出火の際，本学関係者の識別が困難であったため，教職員にも用いられる学校の徽章を早く制定することが痛感され，学内でその図案を募集したところ，事務局の文書係長堀内浩の図案が当選した．

このデザインは，写真のように金文字の大学の帽章を中央におき，地を静海波にして周囲を角切(すみきり)の四角に形取りしたもので，静海波は旧高工時代にも用いられた徽（き）章の波に通じ，四角のバッジというのも珍しい形であり，これがなんとなく国立大学の「国」の字を連想することから，工学部では意外に評判がよかった．

最近は服装が全く自由になってしまったので，バッジとしてはほとんど用いられていないが，サークル活動等対外的な旗にはときどき用いられている．

5.　工学部長に阿部教授

昭和25年１月16日工学部長を兼務していた冨山学長が，兼職を解かれ工学部教授阿部滋弘理学博士が工学部長に補された．

また，同時に横浜工業専門校長も冨山保に替わり阿部教授が兼任した．その後昭和26年３月31日には，横浜工業専門学校長を免ぜられ，昭和27年２月15日まで満２カ年間工学部長を勤めた．

阿部　滋弘（あべ・しげひろ）理学博士　略歴

大正12．3.17　横浜高等工業学校応用化学科卒業
〃　14．4．4　横浜高等工業学校講師嘱託
昭和 2．3.31　横浜高等工業学校助教授
〃　10．4.10　横浜高等工業学校教授
〃　24．6.30　横浜国立大学教授工学部
昭和25．1.16～〃　27．1.15　横浜国立大学工学部長
〃　25．1.16～〃　26．3.31　横浜工業専門学校長兼任
〃　27．4.1～〃　29．7.20　横浜国立大学附属図

阿部遂弘 工学部長

書館長
昭和28.4.21～ 〃 30.3.31 横浜国立大学工学部長
〃 34.2. 1～ 〃 40.3.31 横浜国立大学工学部附属カーバイド化学研究施設長
昭和39.8.2～ 〃 39.9.12 横浜国立大学長事務代理
〃 42.4.1 停年退職
〃 横浜国立大学名誉教授

6. 本学工学部の教養基礎科目の充実

新制大学として発足した時一番懸念されたのは，旧制に比べ卒業生の実力が低くなるのではないかということであった．もしそんなことになれば，これはひいては将来の日本産業発展にとってゆゆしき問題となるわけである．

新制大学発足当時は図書館などの設備の不十分な大学で，講義時間の２倍の時間を学生自身で予習復習する裏付けを条件として単位を与えることは，ほとんど実行不可能なことであった．そこで本学工学部では，学部長，各科教室主任，各基礎科目担当代表が集まり，数回にわたる真摯(しんし)な協議を行ない，教師自らの犠牲で担当時間をふやし，学生の実力をつけることとした．これにより本学工学部学生の修得単位数の多いことは全国でも最上位に近いものとなった．

のち，時の推移と共に人が変わり，設備が整ってくるにつれて一般教養科目担当教室と工学部との間で，教官の負担過重がしばしば論議の対象となった．

このことについて当時の阿部工学部長は当時の学芸学部の協力について次の通り述べている．

「工学部卒業生が高い社会的評価をかち得た原因の一つとして立地条件，設立時の人事委員会による教官陣容の整備などのほかに，本大学発足時からの基礎科目に対する学芸学部の非常な協力があったことを忘れることはできない」

7. 科目の成績表示を決定

25年３月23日，第14回評議会で各学科課目単位の成績表示を次の通りに決定した．

100～80 優　　79～60 良　　59～50 可　　49以下 不可

8. イールズ旋風

ドクター・イールズ他１名が25年２月27，28日の両日来校，学校長，教授等を集め，共産主義的思想を持つ教授，学生は追放すべしと講演した．

ドクター・イールズは24年4月新潟大学を最初に全国20数校の大学，高専を回り講演をし，各方面で強い反発を買い，いわゆるイールズ旋風をまきおこした．本校については詳しい記録がないので来校したことのみを記しておく．

9. 自治会捜査される

25年7月13日未明，横浜地裁の捜査令状により警察捜査隊は3班に分かれ，本大学各部の自治会本部を急襲捜査した．

これは25年5月全学連がタス通信から抄出した「軍事基地化の実態」というリーフレットが占領目的に違反する疑いがあるとして，このリーフレット押収のため全国各校の自治会を一斉に捜査したものであった．横浜国立大学新聞では「官憲学園に侵入」とこのことを報じている．

同日，阿部工学部長は次の通り告示した．

「工学部自治会本部は，今暁職権による警官の捜査を受けたが現在のところ，直接本学関係者の非合法行動によるものではないと思われる．我々が学問および法の限界を越えて行動することは自ら学園の自由と名誉とを放棄するものであることを認識し，学徒としての行動の限界を厳守されんことを望む」

10. 第2次アメリカ教育使節団来校

第2次訪日アメリカ教育使節団一行は昭和25年9月14日，本校工学部を視察した．

この使節団はウイラード．E．ギヴンズを団長とする5名で，25年8月27日から約1カ月滞在，教育刷新審議会委員，文部省当局，衆参文部委員などとも会談を行なった．帰国にあたりマッカーサー元帥に報告書を提出し，種々の勧告を行なった．

当校視察は，総司令部神奈川県担当のマクマナスの進言によるもので，当日一行は工学部機械工学科を主として視察した．本件に対し冨山学長はずっと後に次のように語っている．

「設備，教授内容等については好評であったが，ただ残念なことに整理整頓が悪い．掃除が行きとどいておったら満点なのにとのことであった．私が29年アメリカの学校を視察した時，校内が実にきれいなことに感心し，あの時の講評が成程とうなずけたことである．」

第2章　第2節　工専から大学へ　冨山学長の退任

（昭和25年～昭和27年）

1.　開校ここに30年

昭和25年をもって横浜高工（工専）（国立大学工学部）はここに星霜30年を迎えた．この30年間には創設時の苦しみ，関東大震災後の復興の努力，戦中戦後の苦悩，新制大学への躍進など数え切れぬほどの先人の労苦の積み重ねがあった．

25年10月29日午前10時より工学部講堂で，この創立30周年記念式典が挙行された．

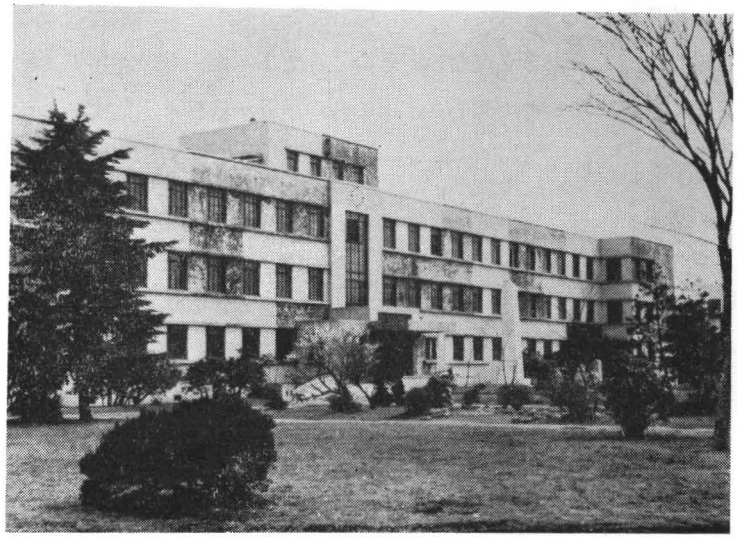
開式の辞ののち，冨山学長のあいさつ，阿部工学部長のあいさつ，鳥谷横浜工業会理事長の祝辞ののち25年以上勤続者の表彰，文部大臣，神奈川県知事，横浜市長の各祝辞等があり，校歌を斉唱して閉式した．

なおひきつづき11月2日から5日まで学内を開放して記念祭が開催された．

2.　昭和25年度の大学，工専

昭和25年度は別記のように新制大学は24年5月に開設され，3年生はまだなく1，2年生だけであり，一方工専は工専としての最後の3年生がまだ在学しているという，新旧入りまじった年であった．したがって学校としては，教職員その他すべていわば両立てであった．昭和25年の学校要覧に記されている次表を見ると両立ての模様がよくわかる．

（注）　なお本記述中，第2章第1節に述べた横浜国立大学概要と前後重複するところがあるが，ここでは工専を主として述べるので了解されたい．



そのころの工学部本館正面

昭和25年学校要覧抜粋

1．　横浜国立大学工学部職員表（昭和25年８月１日現在）

科名＼職名・講座名		教授		助教授		講師		助手		事務	技術	工員	その他	計
		定	現	定	現	定	現	定	現					
機械工学科	5	5	3	5	2	5	1	5	1	2	14			23
化学工業科	4	4	2	4	2	4		4	4	1	2		2	13
電気化学科	4	4	3	4	1	3		4	3	2	7		1	17
建築学科	4	4	1	4	2	3		4		3	1		1	8
造船工学科	4	4	2	4	2	3	1	4			3			8
電気工学科	4	4	2	4	1	3	1	4	1	1	6			12
分析化学	1	1		1				1						
化学工業	1	1		1				1						
応用物理	1	1		1				1						
応用数学	1	1		1		1								
計	29	29	13	29	10	22	3	28	9	9	33		4	81
二部　1．一般教養科目														
人文科学	4	1		2				2						
社会科学	4	1		3				1						
自然科学	4	3		1				3						
体育	1			1				1						
計	13	5		6				7						
2　専門講座														
機械工学科	5	4		4		2		4						
化学工業科	4	3	1	3		2		3						
分析化学	1			1				1						
化学工業	1			1				1						
電気工学	1							1						
図学	1							1						
計	13	7	1	9		4		11						
	26	12	1	15		4		18						

2．　工学部事務職員表

係名＼職名	事務官	技官	雇傭人						計	備考
			事務	技術	警備員	工員	作業員	その他		
事務長	1								1	その他は給仕
庶務係	2		2	2	6			1	13	技術雇はタイピスト
会計係	2		5				9		16	
教務係	1		3						4	
厚生係	1		3				5		9	
図書係	1		1						2	
二部	1								1	
	9		14	2	6		14	1	46	

3．　工学部教官表

官　職	兼　職	最終学歴	担任科目	学　位	氏　名	就職年月
学　長		東北大理		理　博	冨山　保	大正 9、 8、15
学部長 大学教授	工専校長 工専教授	横浜高工	化　学	理　博	阿部滋弘	大正12、 4、 1
事務長		中央大学専門部法科			蒲田新太郎	昭和24、 6、30
大学教授	工専教授	東大工	建　築	工　博	江国正義	昭和24、 6、30
同	同	東北大理	数　学	理　博	豊田浩七	昭和18、 3、24
同	同	東文理大	哲　学		宮島　肇	昭和13、 4、 7
同	同	東大工	電　気	工　博	中島好忠	昭和21、12、 9
同	同	京大理	電　気	工　博 理　博	北川徹三	昭和24、 8、31
同	同	東大工	機　械	工　博	柴田晴彦	昭和24、11、26
同	同	東大理	電　化	工　博	岡　俊平	昭和24、12、31
同	同	東京高工教養	電　気	米国学位	藤川由太郎	大正 9、12、 7
同	同	東大理	有機化学	理　博	草間時蕃	昭和24、 8、31
同	同	早稲田文	英　語		竹内秀雄	昭和 4、 9、11
同	同	東大工	機　械	工　博	野手悌士	昭和24、 8、31
同	同	東大理	化　学	理　博	木下恭二	昭和15、 6、10
同	同	横浜高工	分析化学	理　博	河村文一	大正14、 4、13
同	同	東北大工	機　械		黒川恒勝	昭和14、 3、29
同	同	東大工	造　船	工　博	南　義夫	昭和21、11、14
同	同	東大工	造　船		小山永敏	昭和24、 8、31
東京大学教授	横浜国大教授	東大工	化　学	工　博	永井彰一郎	昭和25、 6、30
大学助教授	工専講師	東北大工	数　学		八田秀三郎	昭和18、 6、 8
同	工専教授	大阪大工	造　船		沢村鶴松	昭和21、 5、11
同	同	東京高工	物　理		竹内　柾	昭和23、 6、14
同	同	東大工	化　学		高橋健太郎	昭和17、 6、27
同	同	東大工	機　械		中村康治	昭和21、10、29
同	同	京大工	電　気		武田　進	昭和20、 7、20
同	同	東大文	独　語		永野藤夫	昭和21、11、13
同	同	東大法	独　語		佐藤正能	昭和10、 9、11
同	同	東大工	機　械		山野健郎	昭和15、 4、 1
同	同	横浜高工	化　学		森川幾久雄	昭和 7、 3、31
同	同	北大理	物　理		船渡川善哉	昭和20、 2、28
同	同	東京工大	建　築		田口武一	昭和16、 9、24
同	同	横浜高工	造　船		吉岡　勲	昭和 7、 4、11
同	同	東北大理	数　学		徳田広太郎	昭和19、10、 4
同	同	東大文	倫　理		沼田滋夫	昭和23、 1、31
同	同	東京工大	電　化		柴崎安一	昭和19、 4、28
同	同	京．大理	数　学		森川　正	昭和14、 4、12
同	工専講師	東京工大	建　築		井上充夫	昭和24、 8、31
同		旅順工大	化　学		松野武雄	昭和25、 6、30

官　職	兼　職	最終学歴	担任科目	学　位	氏　名	就職年月
大学助教授		東　大　工	建　築		河合正一	昭和25、 9、30
大学講師		京　大　理	電　気	理　博	吉田梅次郎	昭和24、 8、31
同	工専講師	東　大　工	造　船		丸尾　孟	昭和22、 9、30
同		早稲田理	建　築		飯塚五郎蔵	昭和25、 5、31
同		京　大　工	分析化学		桃木弘三	昭和25、 6、15
大学助手	工専助教授	東京電気高工	電　気		高橋光蔵	昭和20、 5、21
同	工専助手	神奈川県立工補	機　械		日浦安之丞	大正10、 3、31
同	工専助教授	東京高工選	化　学		井奈薫次	大正13、 5、19
同	同	横浜市立工専	電　化		柿沢　晋	大正11、 3、31
同		東　大　工	化　学		松下　寛	昭和25、 4、15
同		京城高工応化	電　化		門田　稔	昭和25、 4、30
同		東　大　理	化　学		田丸謙二	昭和25、 5、15
同		東京工大	化　学		佐藤菊正	昭和25、 5、31
同	工専助教授	横浜高工	物　理		荒井文治	昭和14、 3、31
工専教授	大学教授	東北大理	化　学		今井行雄	大正10、 4、12
同		東　大　工	電　化		飯沼義雄	大正13、 4、30
同		東　大　工	建　築		林　豪蔵	昭和 6、 6、13
同		名古屋高工	建　築		伊藤三郎	大正15、 5、 2
同		東北大工	機　械	工　博	三原金吾	昭和24、 8、31
同	大学助教授	日本体育	体　育		石川房治	大正14、 3、31
同	大学教授	東京工大	電　化	工　博	友成忠雄	昭和10、 7、 1
同	大学助教授	東京工大	電　化		山田大十	昭和19、 3、31
同		横浜高工	電　化		鶴岡　武	昭和12、10、22
同		横浜高工	建　築		神戸　蕃	昭和12、 4、12
同		東北大理	物　理		黒田義輝	昭和20、 1、31
同	大学助教授	東　大　文	英　語		緑川伝作	昭和21、 1、31
同		東京商大	英　語		出合資文	昭和23、 4、20
工専助教授	大学講師	日本体育	体　育		須藤務基	昭和18、 6、 4
同		横浜高工教養	建　築		元広友三	昭和15、 4、 1
同		横浜高工教養	機　械		玉田邦平	昭和14、 3、31
同	大学助手	東京工大	機　械		小栗　達	昭和20、 9、29
同	同	東北大工	機　械		横山　亨	昭和20、11、15
同	同	横浜工専教養	機　械		兼坂忠次郎	昭和20、 9、29
同	大学講師	東北大理	数　学		笹井敏夫	昭和22、 1、10
同		横浜工専	化　学		箕作秋次	昭和21、 2、 1
同		東北大理	化　学		横山金一	昭和25、 1、31
同		横浜工専	建　築		芳野尹孝	昭和22、 4、 1
工専講師		東京工大	電　気		岡崎彰夫	昭和22、 8、31

4．　在学生徒現員表（昭和25年10月現在）

種別	学年	学科 / 性別	機械工学科 男	女	計	化学工業科 男	女	計	電気化学科 男	女	計	建築学科 男	女	計	造船工学科 男	女	計	電気工学科 男	女	計	合計 男	女	計
本科	1年		42		42	30	1	31	31	1	32	28	1	29	28		28	26		26	185	3	188
	2年		40		40	33	1	34	36		36	25		25	28		28	27		27	189	1	190
	計		82		82	63	2	65	67	1	68	53	1	54	56		56	53		53	374	4	378
選科	1年																						
	2年		1		1	1		1													2		2
	計		1		1	1		1													2		2
聴講生	1年																						
	2年																	1		1	1		1
	計																	1		1	1		1
合計			83		83	64	2	66	67	1	68	53	1	54	56		56	54		54	377	4	381
2部	1年		34		34	30		30													64		64
	2年		28		28	29	1	30													57	1	58
	計		62		62	59	1	60													121	1	122
2部選科	1年		2		2																2		2
	2年																						
	計		2		2																2		2
2部聴講生	1年		1		1	1	1	2													2	1	3
	2年																						
	計		1		1	1	1	2													2	1	3
2部合計			65		65	60	2	62													125	2	127
◎ 工学部総計			148		148	124	4	128	67	1	68	53	1	54	56		56	54		54	502	6	508
工専の部																							
工専3年			26		26	14	1	15	14	1	15	16		16	19		19	18		18	107	2	109
教養3年			7		7	9		9	7		7	8		8							31		31
選科3年			2		2	1	1	2	1		1	4		4	5		5	1		1	14	1	15
研究科												1		1							1		1
合計			35		35	24	2	26	22	1	23	29		29	24		24	19		19	153	3	156
2部工専3年			26		26	25		25													51		51
2部選科3年			3		3	5		5													8		8
2部合計			29		29	30		30													59		59
◎ 工専総計			64		64	54	2	56	22	1	23	29		29	24		24	19		19	212	3	215

5．　校　　地

種別	所在地	坪数	備考
校舎敷地	横浜市南区大岡町字中下及久能下	20,615坪022	内3,000坪は運動場として使用
校舎敷地	横浜市南区大岡町字岩井下	5,555坪000	
小計		26,170坪022	
運動場	横浜市南区大岡町字岩井下及三角田	1,901坪630	
運動場	横浜市南区大岡町字岩井下	784坪240	
小計		2,685坪870	
官舎敷地	横浜市南区大岡町久能下	120坪000	
合計		28,965坪892	

6．　校舎等建物

建物種別	建物様式	室数	建坪	延坪
本館（内造船科本館含）	鉄筋コンクリート造三階建	130（内造船21）	525.306（140）	1,449.383（420）
建築科本館	鉄筋コンクリート造2階建	17	88.299	193.413
配電室及電気実験室	鉄筋コンクリート造2階建	13	73.053	137.757
機械科実験室	鉄筋コンクリート造3階建	22	145.200	435.600
電気化学実験室	〃	26	145.200	435.600
化学工業科実験室	〃	26	120.697	362.091
化学工業科電気化学科実験実習工場	鉄筋コンクリート造平家建	6	124.000	160.971
造船科船体抵抗実験室	〃	3	139.410	139.410
中央図書閲覧室書庫並に教室事務室	木造2階建	6	135.000	265.000
生徒集会所	〃	10	60.000	120.000
教室及製図室	〃	4	91.245	175.525
電気科実験室	木造平家建	3	65.000	65.000
電気科教室製図室	〃	2	55.000	55.000
化学工業科実験室	〃	3	56.725	56.725
電気化学科実験室	〃	3	57.750	57.750
電気化学科研究室	〃	1	20.000	20.000
建築科製図室	〃	1	72.000	72.000
建築科教室製図室	〃	1	56.000	56.000
旧講堂及図書閲覧室並に書庫	〃	7	266.000	266.000
旧第三化学工業科実験室	〃	2	26.000	26.000
機械科実習工場及汽罐室	鉄筋コンクリート造平家（中2階建）	7	240.790	371.160
機械科鍛造鋳造工場	〃	4	105.118	151.703
機械科木型及機械工場	〃	4	165.165	280.417
造船科機械室及船体模型製作室	〃	2	54.510	64.129
発動機実験室	鉄筋平家建ギラリー付	1	25.500	28.500
電気科研究室実験室（旧風洞実験室）	木造平家建	4	112.000	112.000
講堂	鉄骨造平家建	7	286.189	286.189
印刷室	木造平家建	2	32.000	32.000
事務官官舎	木造2階建	6	31.250	40.00
第1号官舎	木造平家建	5	24.00	24.00
第2号官舎	〃	5	24.00	24.00
第3号官舎	〃	3	18.00	18.00
其他雑屋建23棟			389.402	389.402
計			4,485.240	7,131.882

7. 学生寮

1 寮——横浜市南区大岡町岸谷2233 工学部より1km 徒歩10分
2 寮——横浜市南区力者町1178 〃 0.5km 〃 5分
3 寮——横浜市南区井土谷仲町110 〃 1km 〃 10分
4 寮——横浜市金沢区谷津町235 〃 12km 電車30分

寮名	定員	現在員	寮員	食費	部費	1ヶ月1人計
1 寮	34名	33名	1人100円	月1,200円	200円	1,500円
2 寮	34名	29名	1人100円	月1,200円	200円	1,500円
3 寮	18名	18名	1人100円	月1,300円	50円	1,450円
4 寮	42名	37名	1人100円	月1,300円	100円	1,500円

8. 図書

部門別	種別	内国書冊数	外国書冊数	計
中央	一般教養書	5,451	2,297	7,748
	雑誌	181	358	539
	報告紀要	8,686		8,686
機械工学科	専門書・単行書	1,272	1,798	3,070
	報告紀要	204	2,261	2,465
化学工業科	専門書・単行書	597	849	1,446
	報告紀要	299	2,613	2,912
電気化学科	専門書・単行書	225	815	1,040
	雑誌	1,123	1,554	2,677
	報告紀要	496	161	657
建築学科	専門書・単行書	1,989	1,741	2,730
	雑誌	2,451	684	3,135
	報告紀要	259	79	338
造船工学科	専門書・単行書	974	1,021	2,005
	雑誌	17	391	408
	報告紀要	158	505	663
電気工学科	専門書・単行書	796	214	1,013
	報告紀要	1,016	237	1,253
数学	専門書・単行書	500	1,100	1,600
	報告紀要	280	1,650	1,930
物理	専門書・単行書	292	445	737
	雑誌	1,190	4,782	5,972
語学	単行書	641	1,519	2,260
	雑誌	80	170	250

単行書総計 24,536
雑誌総計 12,981 } 計56,421
報告紀要総計 18,904

9．標　本

標　種	点数	備　考
機械工学科	127	学術参考資料
化学工業科	4	〃
電気化学科	528	〃
建築学科	252	〃
造船工学科	12	〃
数学教室	15	〃
計	938	

10．機械器具

標　種	点数	備　考
機械工学科	280	教授研究並に生徒の実験実習
化学工業科	967	〃
電気化学科	1,306	〃
建築学科	135	〃
造船工学科	1,391	〃
電気工学科	787	〃
数学教室	48	〃
物理教室	211	〃
中央関係	71	〃
計	5,197	

11．貿易産業科学研究所

1．場所　横浜市戸塚区公田町　旧第一海軍燃料廠第三試験所
2．敷地　約2,000坪　建物　約400坪　鉄筋コンクリート一階建
3．機構　(1)目的　自然科学に関する特殊事項中貿易産業に須要なものの基礎的学理及その応用の研究をなし中小工場の発展指導

(イ) 化学部　第1課，第2課，第3課
(ロ) 物理部　第1課，第2課
(ハ) 機械部　第1課，第2課，試作課
(ニ) 電気部　第1課，第2課
(ホ) 工芸部
(ヘ) 技術相談部

4．役員

所長	工学部長	理学博士	阿部滋弘
次長	教授	理学博士	河村文一
監理部	文部事務官		蒲田新太郎
運営委員	教授	工学博士	野手悌二
	〃	工学博士	柴田晴彦
〃	〃	工学博士	木下恭二
	〃	理学博士	草間時蕃
	〃	理学博士 工学博士	北川徹三
	〃	理学博士	河村文一
	講師		加藤知夫
	教授	工学博士	江国正義
	〃	工学博士	中島好忠

12．工学部歳入歳出予算額

	昭和24年度	昭和25年度
歳入	2,652,277円	2,750,000円
歳出		
経常部	23,602,841円	28,041,492円
臨時部	1,370,692円	未定
計	24,973,523円	

3. 横浜工業専門学校　32年の歴史を閉じる

昭和26年３月31日，法律第84号，国立学校設置法の一部を改正する法律により，横浜工業専門学校は廃止され，新制横浜国立大学に完全にバトンを渡した．

思えば大正９年４月，横浜高等工業学校として，弘明寺の一角に呱々(ここ)の声をあげ，昭和19年，横浜工業専門学校と改称，戦中，戦後を通して幾多の変遷はあったが，鈴木，冨山二代の名校長の独特の教育方針により，幾多の有能な技術者を世に送り出し「横浜高工」（横浜工専）の名を高からしめたのであったが，ここに32年の歴史を残して「横浜工業専門学校」の校標が校門よりとりはずされたのであった．

この最後の卒業式は３月20日挙行された．

卒業式にあたり本校第１回の卒業生でもある阿部滋弘工学部長兼横浜工業専門学校長は，本校の創立後間もなく遭遇したあの関東大震とそれにともなう名古屋移転問題，今次大戦末期の甲府疎開提案，そのいずれをも拒否してこの横浜に踏みとどまり，日本の大都市である横浜と共に耐えてきた信念とそのための困難を感慨をこめて追想し，かつ創立以来一貫して変わらなかったいわゆる名教自然の教育理念を強調し，ついで「この世紀の変動期こそ諸君ら青年を必要とし今こそその活躍するよい機会である．学校の評価はその卒業生の社会的評価につながるものであり，本校が大学に移行してもこれまでの評価が多くの新制大学の中にあっても引きつづきかち得られるであろうことを信ずる」と述べた．

25年卒業生の思い出　下平欣一　（応化28期　昭和25年卒）（応化会会報 No. 2）

僕達卒業したのは昭和25年で１年下は旧制最後のクラスと，中二階みたいな具合に新制最初のクラスがあった．入学時は食糧難．物資は欠乏して，ろくに勉強もできず，卒業時はまたひどい就職難だった．

才気あふるる女性が２名いたし，満州から引揚げてきた人たちが多かった．

工専最後の卒業生　渡辺　隆　（応化二部　昭和26年卒）（応化会誌 No. 2）

吾々は昭和23年に入学し26年に卒業した工専２部の最後のトコロテン組である．

時代も悪く，食糧難の時代，それも昼間の勤務が終ってからの勉学に，悪童どもが全員無事卒業できたのも，種々の意味での先生方の御蔭であると思っている．

３年間の思い出はとに角食糧難と冬期の寒さであった．冬オーバーの襟を立ててきいた授業は印象的であったが，それだけ先生方の御苦労は大変であったと思う次第です．

その頃の思い出　N生（29期）（応化会報 No. 2）

26年卒業で旧制の最後です．三無主義の恩恵に浴したのも我々が最後というわけです．

在学当時はまだ終戦後の混乱が続き，経済状態も甚だ悪く，教室の片隅で煙管でキザミを吸い，焼酎でコンパをやったものです．どちらかと言えば暗く頽廃的な空気の時代のなかで，最後の定期戦を観たり，科内クラスマッチにはだしで飛び廻り，又，記念祭や麻雀と，応化の伝統的な明るい学生生活を送れたのは，ひとえに先生，先輩諸氏の賜と感謝しております．

4. 横浜高工（工専）の卒業生総数，分布状況

横浜高工は大正９年開設，同12年３月第１回卒業生として，機械，電化，応化３科あわせて92

名をはじめて世に送り出してから，昭和26年3月高工としての最後の卒業生149名までを合計すると卒業生総数7,398名の多数となった．その各科別内訳は次の通りである．

機械科	1,915名	造船科	761名
化学工業科（応化）	1,717	航空機科	349
電気化学科	1,451	電気科	157
建築科	1,048	計	7,398名

（25年学校要覧による）

なお昭和26年ごろの卒業生の地区分布を見ると推定ではあるが，大体次の通りで，やはり京浜地方在住が圧倒的に多い．

京浜地区	約 5,000名	九州	300名
中京 〃	300	北信越	300
阪神 〃	600	東北	300
山陽 〃	200	北海道	150
四国 〃	150		

5. 講堂跡に事務局庁舎完成

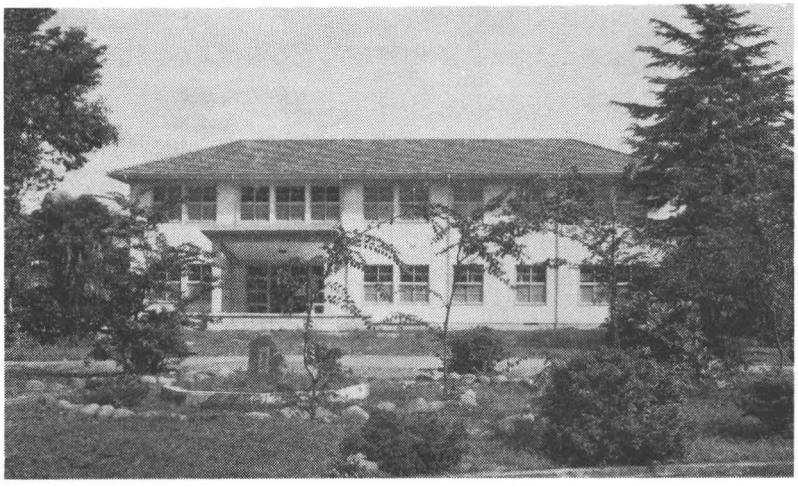
さきに焼失した講堂跡に26年12月3日大学事務局庁舎 760 m²（延230坪）が新しく建築され完成した．

これは，本学として庁舎建築を神奈川県に要請したところ，県財政の困難な時にもかかわらず，特に500万円を教育振興のため支出寄付されたものであった．

現在，安全工学科が使用している建物がこれである．

6. 工学部長に江国教授

阿部工学部長の任期（満2年）が27年1月16日をもって満了するので，教授会内規により26年



大学事務局庁舎 神奈川県寄付

江国正義工学部長

12月26日，後任選挙を行なった結果，投票数21票（内不在投票４）のうち建築学科教授江国正義工学博士が14票をもって次期学部長に選ばれ，ただちに推薦の手続きをとり，27年１月16日に就任した．

江国正義（えくに・まさよし）工学博士　略歴

大正8.7	東京帝国大学工学部建築科卒業	昭和27.1.16～〃28.4.21	横浜国立大学工学部長
〃 9.11.13～〃 14.5.31	東京帝国大学助教授		
〃 14.6.4～昭和 4.12	建築事務所勤務	〃 27.8.5 ～〃 28.4.20	横浜国立大学長事務取扱
昭和 4.12 ～〃 21.6	建築事務所自営		
〃 23.3.15～〃 24.6	法政工業専門学校教授	〃 28.4.21～〃 34.3.31	横浜国立大学長
〃 24.6.30	横浜国立大学教授	〃 34.4.1	横浜国立大学名誉教授

7.　27年度就職状況

横浜工業会報 No. 3（昭和27年11月15日）に「就職戦蹌路行記」として次のごとく記している．

「『赤い学生締め出し』の日経連声明は，大きな波紋をまき起こした．文部省は直ちに学生白書を発表して『赤はごく一部』と弁明にこれつとめ，学生の方も『まあまあやめておいた方がよい』と自治会活動にそっぽを向く連中がふえたようだ．しかし今日の就職難は決して『赤い運動』からもたらされたものではなく，軍需景気の中だるみによる一般的不況からきている．」

ともあれ27年度は，就職戦線やや異状ありというべきであった．日経連，教育特別委員会では27年10月16日岡野文相にあてて要望書を出したが，その中に「新制大学では産業人としての人間教育面に遺憾の点が少なくないので，これを強化すると共に専門教育，学術研究等の面に不徹底な画一制を排し，それぞれの特長を明確に発揮し得るよう検討されたい．」とある．

8.　27年度入学試験

27年度入学試験は次の通り行なわれた．

入学願書受付	２月５日～３月３日	第１次合格発表	３月28日午前
筆記試験	３月24日～３月25日	最終合格者発表	３月31日

体格検査　　3月28日～3月29日

なお本年度はまず書類選考（進学適正検査および内申書）が実施され，その合格者が筆記試験を受けた．

9. 授業料値上げ

27年度入学生より従来授業料年額4,500円であったものが6,000円に値上げと決定した．この値上げによる増収は全国立学校で12億円で，その内約5％は授業料免除に充当，他はもっぱら学生の厚生予算に振り当てられる．本件は大学協議会の評議を経たものであった．

なお，26年度までの調べでは，日本では国立学校の授業料は全経費の5％に過ぎない．米国の20％，私立の40％に比していかに国立が低いかがわかる．

10. 冨山学長の退任

昭和27年8月5日付けで，横浜国立大学長冨山保は退任した．大正9年8月15日横浜高工に職を奉じて以来，実に32年の長い間の教育生活であった．

ちょうど夏休み中であったので，教職員学生に対して退任の辞を述べることはできなかったが，そのときの心境を次のように語った．

「近時わが国の初等教育等において憂うべき状況が一部に存在することを聞知し，特に教育界において，この秋緊褌一番，国家百年の計に誤りなきを期するよう努力することを要望する．又新制大学の健全なる発展により，日本再建の要となることを期待する．近時，旧制大学から移行した大学が，他の新制大学と区別し超然たらんとする傾向があり，文部省またこれに同調せんとする風潮がある．若しかくの如きことがあれば，折角新しく生れた大学改正の主旨に反し，学生の心理に影響するところ少なしとせぬ．大学院問題などこの徴がある．私としてはこれに対し反対を表明し努力したが微力，終に目的を達し得ず，齢ここに65歳，昭和10年横浜高工校長に就任の時の前校長鈴木達治先生の年齢と同じとなり，この際任期中ではあるが退任して，有能なる後任に道を譲る決心をした次第である．今後は学外に在って及ぶ限りの声援を送りたいと思う」また昭和26年9月15日の横浜工業会報には次の通り述べている．

冨山学長退任の辞　回顧32年有半

私は今次退任発令後，天野文相に対して，32年有半の長きに亙つて，日本で最もよい学校に愉快に勤続して，教育の聖職に半生余を棒げ得た幸福と，国家より受けた高恩を，大臣を通じて心から感謝を棒げる旨挨拶をいたしました．

私の現在の心境は全くそれのみであります．煙洲鈴木達治先生が，我国教育界に大きな足跡を印し，功成り名遂げられて，昭和10年2月突如挂冠せられ，学校長の職を辞せられた事は当時真に当惑いたしました．凡そ教育者として徳，能力等総ての点において，不適な事を最もよく知っている自己としては，極力固辞しましたが，許されず，多年高恩に浴した身の抗する術もなく，終に心ならずも敢てお受けいたしました．果然，秕政百出，幾多の過誤を冒し，名校長により築かれた学園の歴史とその発展に，蹉跌を醸した事は一再に止まらず，真に慚愧に堪えない次第であります．

然るに煙洲先生の遺された磐石の力と，優秀な多数同僚各位の協力と，校友諸氏の寛容と，或は選ばれた天下の俊髦を網羅せる学生諸君の英智に

よって，是らの過誤も許され，或は修正されて，長い戦時中の難事も通過して，学校長として14年余を，又更に誤りて推されて学長として3年余を勤務し得たのであります．是れ全く煙洲先生を始め，上記各位により賜わった恩誼によるものであり，感謝の辞に窮するものであります．又同時に校外に在っては，故三渓原富太郎氏，故中村房次郎氏，故井坂孝氏，野村洋三氏を始め横浜市の有力なる方々より終始絶大なる援助指導を辱うして，不肖不徳微力にもかかわらず，校運の発展上大きな力を得た事も忘れることのできない高恩であります．

回顧致しますれば32年余の昔，大正9年4月欧米の視察勉学を終えて帰朝の直後，恰も我横浜高等工業学校が開設せられ，学校長鈴木達治先生より，講師として迎えられ，特に電気化学及びあわせて応用化学科の創設に尽力すべき旨の命を受け，特に電気化学科においては故小林鼎氏と共に，施設の全部につき設計及実施に没頭し，或は学科課程の編成に全力を尽しました．その後藤村教授及び横山教授等の就任を見て，同科の完成を致しました．大正12年第一回卒業生を送出して間もなくあの関東大震災に会し施設の全部を烏有に帰し，一時呆然自失，為す処を知らざる苦境に立ったが，鈴木先生の英断と指揮によって焦土に留まり，全市民に魁けて復興に着手し殊に両化学科の授業を旧横浜舎密研究所の施設を利用して，最も速かに開始し得た事はその労苦努力は報いられ成果を挙げ得た事は今尚忘れ得ない思い出であります．

昭和10年学校長を拝命して第一に自分として着手した事は，航空科の設立でありました．

当時我国航空界において航空機操縦に就ては，陸海軍及民間共に相当の域に達しておりましたが，航空機製作に関する専門技術者の養成においては，甚だしく等閑に附せられており，正式には東大に学生定員10名程度の航空科あるのみで，当時米国の大学航空科学生1,500名に達するに比し，雲泥の差がありました．鈴木先生は炯眼にも此点に着眼せられ，本校造船科の一部に航空専修部を設けられ，夙に其専門技術者養成に着手せられ，同時に再三文部当局に本校航空科独立創設の要を迫られておられましたが，本学航空専修制度は学校が公認を得ないで勝手に造った，言はば私生児の如きものであるとして採択されず，特に大蔵省が頑として，耳をかさなかったとの事であった様な事情が，特にその設立実現を先生が私に托されたという経緯があったわけです．若輩新米の校長であった私にとっては，過重の任務でありましたが，先生の御鞭撻により勇敢且執拗に，文部当局にその実現の必要を力説主張して，終にその諒解を得るに至りました．然し大蔵省は依然之に応ずる気色無しとの事であったので，特にその実現運動に自由行動をとることを，文部省より許可を得た後，種々の関係を辿って当時の政府首脳部に対して，航空機製作の技術者養成に力を至さざれば国危うしと力説し，遂に説得に功を収むるに到りました．確か昭和10年秋の第71議会に追加予算として本校航空科創設費が可決され，昭和13年其開設を見るに至った事は愉快な思い出であります．鈴木先生の蒔かれた種が実を結び，幾多の英才を我航空機製作工業界に送って，相当な貢献をなし得たと確信自負しております．然し，この新進優秀の航空科も終戦と共に廃止となり，私としては誕生と弔いを共に扱った運命となった事は洵に感慨無量であります．独立後の日本が，航空工業再開を認められる今日，近き将来次の学長学部長の方々の手によって，本校に航空科再生が一日も速かに実現されん事を念願するものであります．

戦時中の長期間に同僚各位及びその当時の学生諸君と苦難を共にした事も，尽きざる思いの一つであります．戦争末期において，文部省首脳部の案として，全国官立工業専門学校学生の代表を選出して，本校が主動となり施設の一部と教官とを山梨に疎開して，工業教育をなさんとする内相談がありましたが，関東震災の際の鈴木先生の焦土残留復興を想起して，之を否定し，弘陵に学園を守って却って戦災の危をまぬかれた事は，真に天佑と申す外ありません．

又終戦直後9月3日米兵上陸，早々兵舎として接収決定したのを，その解除申請に成功して事無きを得，授業の再開に支障を来たさなかった事も，真に幸福な思い出であります．

終戦後の劃期的学制改革に基き本校は，横浜経済専門学校，神奈川師範学校と三者一体，その編成校として新たに綜合大学転換に決定された時に，他の新設大学と同様に県名を冠する名称とすべく定められようとするのを，永き栄光ある歴史伝統を有つ2校の冠称と世界の横浜たる誇を結びつけんとして，冠称持続を主張して，特例を認め

しめ得た事も，悔なき回想の一つであります．

我校が奇しくも戦災を免かれ，多年鋭意蓄積した施設，就中特に留意収集した貴重豊富な図書文献を喪失せず保有し得た為に，旧設大学に対抗して遜色なく，近き将来一流大学工学部たり得る要素を具備し，教授陣も亦旧専門学校の儘にても他校に比し遙かに優れたものなりしに拘らず，全教員諒解の下に，他に類例を見ない様な大幅な充実強化を実施し今日見る様な最も強力な大学教授陣の実質を具備するに到りました．是が実行をいたすに当りましては，唯公の為に，私を捨てて多数の同僚が欣然としてその去就を決せられた事に対し，責任者であった私としては，実に限りなき敬意と感謝を表すものであります．而して去る者の最後として今次私の退陣となったものであります．

煙洲先生の樹立された，自由啓発名教自然の教育主義の校是は，今なお燦然として輝き，その真髄は永へに教育の中心をなし，不変の真理たる事は疑のないところであります．同志社大学学長田畑忍氏が，最近の「文芸春秋」誌への寄書において，鈴木先生の無処罰主義に言及されそれを礼讃された事は，真に快心な事であります．

制度は改革され方法は変更されても，この教育精神は永遠に一貫して，本学工学部の中心をなし，その進展の礎となり，我学園が特色ある第一流大学工学部として，我国産業の再建復興に寄与する人材を輩出し又その専門分野における幾多の優れた研究業績を生んで人類の福祉に貢献することを確信し，安んじて本学の将来に洋々たる希望を寄せながら，懐しい校門を去らんとするものであります．（機浜工業会会報 No. 1）

なおまた任期満了をまたず退任した当時の心境について，後年次のように記している．

自分の信ずるところによれば，新しい学制々度により生れる大学は，その組成学校が旧制の大学或はいずれの専門学校たるを問わず，それらの間に差別を附すれば到底新たに生れ出る大学の真の発達充実は期し得ないと．然るに昭和26年より27年の頃文部当局は旧制大学より移行した大学に限って，大学院を附設するという原則を樹てられた．これに対し不肖は上記の理由により強く反対の意を進言した．旧専門学校より移行する新制大学と雖も真にその価値ありと認められるものは同様に大学院を設置すべきを主張したが，微力，認められなかった．かくては，大学に移行するに当り，多年同僚として協力し来って学校を去るに至った人々，及びまた新たに大学移行後に迎えたる人々に対して，何の顔(かんばせ)あって見えんかと憂悶して，自身も退陣せざるを得ない窮地に陥らざるを得なかった．

（日本化学工業　45年3月）

冨山学長を最も知っている鈴木達治は昭和28年3月20日号の横浜工業会報に次のごとく記している．

昨年6月上旬の或日，冨山君は私の宅を訪れた．私は冨山君を迎えた瞬間に，辞職の相談に見えたと直感した．冨山君は辞職を欲する理由を述べて，今はその潮時であると考えると結論せられた．聞き終って一言の駁論を加えず，私の退任の時と同じ潮時論に賛意を表し，10分間に足るか足りないかの僅かの時間で相談は終った．しかし，感慨無量のものがあった．そうして8月上旬に初代学長の椅子を去った．

回顧すれば私が冨山君を実業界から教育界へ誘引してから，18年の長い歳月を経過した．そうして終始一貫して，有終の美を完うせられた．推薦者として，何の不足不満があろうか．君は八面玲瓏にして，又秀でたる手腕の人であるから，何ごとに当らしめても不可というものがないのである．学校を出でて，教育界に入り，更に最高学府を出て教育界に入り，去って研究家となり，再び実業界を経て，教育者となり，しかも至る所名声を残した．而してその出所進退は，冨山君自身の計画ではなくして総ては余人の懇請に応じたものであった．これを以てしても如何に冨山君が，世間に信頼があったかは，想像し得るであろう．

私が冨山君を18年間教育界に引き留めたことは，是であったか非であったか，確かな判断ができない．或は非であったかも知れないという感じがないでもないが，誰の人生にも，自己の能力のみで決せられるものではなかろう．大小の運命が伴うことはまぬがれないであろう．悪運であったなら，その一半の責任は，私が負うべきである．

第3章　工学部の発展（昭和27年～昭和45年）

序

この章では江国学長事務取扱就任の27年より工学部（高工，工専）が満50周年を迎えた45年までを述べる．

日本経済はこの間飛躍的な発展をとげたことは，ここに今さら喋々（ちょうちょう）するまでもないので，一般概況は述べない．わが大学は発足以来各学部とも順次充実し，特に工学部においては従来の6科のほかに4科を加え，また待望の大学院を設置し，真に工学部としての内容を完備した．

大学設立時からの願望であった各学部統合の問題は42年より具体化し，着々と実行に移り近く保土ケ谷に統合された新学舎ができることとなった．ただこの統合に端を発し，1年にわたる学園紛争が起こったが，44年末にいたり一応解決した．

第3章　第1節　工学部の拡充発展 (昭和27年～昭和43年)

本節では昭和27年8月江国学長就任の時から43年3月までを記すこととする．この間わが国の発展はめざましく，それにつれて横浜国大も名実共に大きな躍進をとげた．大学発足時工学部は6学科であったのが金属工学科，化学工学科，安全工学科の3科を加えて9学科となり，必要な施設も充実してきた．待望の大学院工学研究科も設置された．ここでは記すべきことがあまりにも多いが，誌面のつごうで割愛せざるを得ない事項が多かった．以下各項に分けて記述する．

1.　江国教授　学長に就任

昭和27年8月冨山保学長辞任後，何回も選挙の蒸し返しをつづけてきたが，28年3月23日各学部代議員によって選挙の結果，ようやく学長事務取扱，工学部長江国正義教授が学長に選出された．ただちに文部省に申達し，同省では4月10日大学設置委員会に諮り，4月21日2代学長の発令をみた(略歴前出)．なお江国工学部長の後任として阿部滋弘教授が再び工学部長に選出された．

2.　横浜国立大学学長候補者選挙規程

江国学長を選出した時の学長候補者選挙規程は昭和27年8月に規定されたものである．本規程は31年2月廃止となり新しい規程が制定された．次に新旧2つの規程を記載しておく．

横浜国立大学学長候補者選挙規程（旧）

第1条　学長候補者の選挙は，部局長（学部長，分校主事，附属図書館長及び事務局長）を以て組織する学長選挙協議会（以下協議会という）が管理機関となって，これを行う．

2　協議員が第9条により学長候補者に選出せられたときは，協議員を退き，その部局からこれを選出して補充しなければならない．

3　協議会は，協議員の互選によって委員長を定める．委員長は協議会を招集し，その議長となる．

第2条　学長候補者の選挙は次の場合にこれを行う．

(1)　学長の任期が満了するとき．

(2)　学長が辞任を申出たとき又は欠員となったとき．

2　学長候補者の選挙は，原則として前項第1号の場合は任期満了の1月以前に，第2号の場合は申出のあったとき又は欠員となったときから10日以内に，その事務を開始する．

第3条　協議会は，前条に基いて，学長候補者選挙の実施を全学に公示する．

2　学長候補者の選挙に関する事務は，協議会の委嘱を受けた事務職員が当るものとする．

第4条　学長候補者は，人格が高潔で，学識が優れ，且つ教育行政に関し識見を有する者のうちからこれを選挙する．

第5条　選挙資格を有する者は，選挙公示の日に，現に本学専任の教授，助教授又は講師である者

とする．（了解事項，遡及発令者は除く）

2　選挙公示の日に，選挙資格を有して居た者で，選挙の日までに前項の身分でなくなった者は，選挙資格を失う．

第６条　学長候補者の選挙は，学長候補推薦委員会（以下推薦委員会という）が推薦した候補者について，各学部選出の代議員がこれを行う．

2　代議員は各学部15名づつとし，各学部で選挙資格を有する者のうちから選出する．

第７条　推薦委員会は，各学部長及び各学部で選挙資格を有する者のうちから選出した５名づゝの推薦委員を以て構成する．

2　推薦委員会は，委員の互選によって委員長を定める．委員長は委員会を招集し，その議長となる．

3　推薦委員会は，委員総数の３分の２以上の出席がなければ開くことができない．

第８条　推薦委員又は代議員が，第９条により学長候補者に選出せられたとき又は選挙資格を失ったときは，これを退き，その学部は，欠員を補充しなければならない．

第９条　推薦委員会は，推薦委員の推薦した候補者について，委員の２名連記無記名投票によって，得票順に３名乃至５名を選出する．但し末位に得票同数の者がある場合は，その総てをとる．

2　推薦委員会は，第10条により推薦された者のうちより，適任者を前項の投票前の候補者に加えることができる．

3　選出された候補者は，これを50音順に略歴を添えて全学に公示する．但し，得票数及び順位は公表しない．

第10条　協議会は，学長選挙の公示の日から推薦委員会開催の前日までに，選挙資格を有する者以外の本学専任の教職員全員をして，学長の適任者を推薦させ，これを推薦委員会に提示する．

第11条　代議員は，指定の日時に指定の選挙場において単記無記名投票によって，第９条によって選出された候補者のうちから選挙する．（了解事項，選挙は全部１ヶ所で行う）

2　代議員は，選挙当日やむを得ない事故があるとき，協議会の承認を得て，不在投票を行うことができる．（了解事項，委任投票は認めない）

3　選挙は，代議員総数の３分の２以上が投票しなければ効力を生じない．

第12条　代議員による選挙において，有効投票の過半数を得た者を学長候補の当選者とする．

2　過半数の得票者がないときは，得票順第１位と第２位の者について決選投票を行い，得票多数の者を当選者とする．但し得票同数のときは，同数者について再投票を行い，なお決定しないときは，年長者を当選者とする．

第13条　学長候補当選者が，学長となることに同意しないときは，これを除く候補者について，前２条の規程によって再投票を行い，なお決定に至らないときは，この規程によって改めて選挙を行う．

第14条　協議会は，学長候補決定者を学長又はその代理者に報告すると共に，全学に公示する．

第15条　学長の任期は３年とし，再任を妨げない．但し引続き６年を超えることはできない．

第16条　この規程の実施に関する細則は，協議会がこれを決定する．

附　則

この規程は昭和27年８月５日から施行する．

横浜国立大学学長候補者選考規程（新）

（選考の根拠）

第１条　本学学長候補者（以下「学長候補者」という）の選考は，教育公務員特例法第４条第１項及び同法第25条第１項第２号の規程に基いて協議会が行う．

（選考の時期）

第２条　協議会は，次の各号の一に該当する場合に学長候補者の選考を行う．

一　学長の任期が満了するとき

二　学長の辞任を申出たとき

三　学長が欠員となったとき

2　前項の選考は，第１号に該当する場合においては任期満了の一月以前に，第２号又は第３号に該当する場合においてはすみやかに開始する．

（選考の方法）

第５条　協議会は，学長候補者を選考するため選挙を行う．

（学長候補適任者選定委員会）

第４条　協議会は学長候補者となるべき適任者を

選定するため，学長候補適任者選定委員会（以下「選定委員会」という）を置く．

2　選定委員会は，各学部長，分校主事及び各学部より選出された専任教授18名（各学部6名ずつ）の選定委員をもって組織する．

3　選定委員会は，その構成員の3分の2以上の出席がなければ開くことが出来ない．

（学長候補適任者の推薦及び選定）

第5条　選定委員は，選定委員会に学長候補適任者となるべき者2名以内を各自推薦するものとする．

2　選定委員会は，前項により推薦された者の中から出席委員の投票（2名連記，無記名）により学長候補となるべき適任者3名ないし5名を得票順に選定する．但し，末位に得票同数の者があるときは，その全てをとる．

（選挙の方法）

第6条　第3条の選挙は，前条の規定により選定された学長候補適任者について選挙資格者の単記無記名投票により，協議会の定める日時，場所においてこれを行い，即日開票する．

2　選挙は，有資格者の3分の2以上の投票をもって成立するものとし，投票数が定数に達していないときは，開票を行わず協議会の指定する日時，場所において再投票を行う．

3　不在投票は認めない．

（選挙資格者）

第7条　第3条の選挙を行う選挙資格者は，専任の教授，助教授及び講師とし，選挙公示の日に現に在職する者とする．

2　前項の資格を有する者が選挙の日までにその身分を失ったときは，選挙資格を失う．

（当選者の決定）

第8条　学長候補者選挙の当選者は，有効投票数の過半数を得た者とし，これに該当する者がないときは，得票多数の者2名（得票同数の者についてはその全てをとる）について決選投票を行い，得票多数の者を当選者とする．

2　前項の決選投票の結果，得票が同数となったとき又は第10条により決定された学長候補者が学長となることを辞退した場合は，第5条から第8条までの規定により再選挙を行う．

（選挙の管理）

第9条　選挙に関する事務は，協議会がこれを管理する．

（学長候補者の決定）

第10条　協議会は，選挙の結果に基いて学長候補者を決定し，学長に報告すると共に，全学に公示する．

（再選考）

第11条　協議会は，第8条の再選挙の結果により学長候補者が決定出来なかった場合には，改めてこの規程に基いて再選考を行う．

（学長の任期）

第12条　学長の任期は，3年とし，再任を妨げない．

（選考に関する細則等）

第13条　この規程の施行に当り必要な細則は，別に定める．

2　学長候補者選考に関する管理運営並びに規程の疑義については，協議会の決定するところによる．

附　則

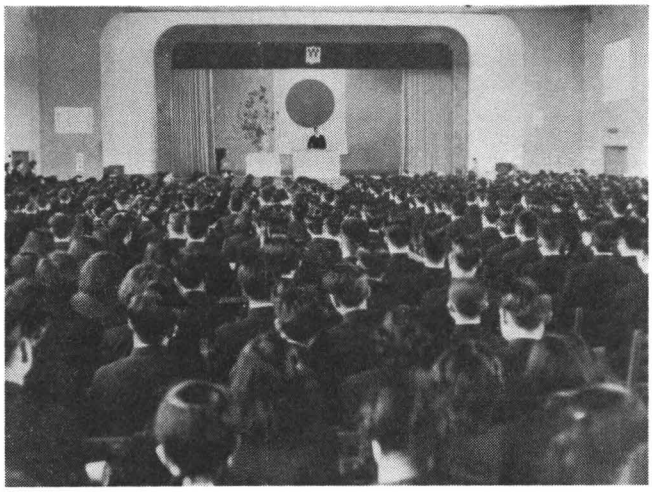
1. この規程は，昭和31年2月25日から施行する．
2. 従前の横浜国立大学学長候補者選挙規程及び同実施細則は，これを廃止する．

3. 入学試験および入学式

本学の28年度の入学試験は本年は第1期校となり，3月3日，数学，外国語，3月4日国語，理科，3月7日～10日面接，3月13日発表となった．

志願者は当初の予想に反し非常な増加を示し，経済学部10倍，工学部8倍，学芸学部2倍であった．

入学式は4月10日工学部講堂（今の体育館）で行なわれた．入学者は，工学部では機械47名，化学工業科35名，電気化学科35名，建築学科30名，造船工学科28名，電気工学科30名，計205名



昭和28年度入学式

で，他に２部機械工学科35名，化学工業科30名であった．

4. 冨山　保（初代学長）名誉教授に

27年８月辞任した冨山前学長に，28年３月１日付けで本学名誉教授の称号が授与された．本学最初の名誉教授であった．

冨山　保（とみやま・たもつ）理学博士　略歴

大正 3.7	東北帝国大学理科大学化学科卒業
〃 3.8　～大正 4.3	東北帝国大学理科大学教授補助
〃 4.4　～ 〃 5.3	私立明治専門学校教授
〃 9.8.15～ 〃 13.3	横浜高等工業学校講師
〃 13.4　～昭和10.2	会社役員
昭和10. 2.13	横浜高等工業学校長
	横浜市立横浜工業学校長（昭16.6.21併任）
昭和24. 5.31～昭和27.8.5	横浜国立大学長
〃 24.5.31～ 〃 25.1.16	横浜国立大学工学部長事務取扱
〃 27. 8. 5	辞職
〃 28. 3. 1	横浜国立大学名誉教授

5. 横浜国立大学名誉教授の称号授与規程（昭和27年12月15日制定）

第１条　学校教育法第68条の２の規定に基づき，横浜国立大学名誉教授の称号は，この規程の定めるところによって授与する．

第２条　本学に教授として，20年以上勤務した者について，選考するものとする．

２　前項のほか，本学に学長として功労が顕著であった者，若しくは，教育上又は学術上功績が顕著であった者は，特に20年未満の場合にも，選考することができる．

第３条　前条の勤続年数の計算は，月計算とし，次によるものとする．

(1)　教授としての勤務年数はその年数，助教授の勤続年数はその２分の１，講師はその３分の１を通算する．但し，そのうち教授としての勤務年数が10年以上なければならない．

(2)　本学に包括された旧専門学校の勤務年数は，校長又は教授としての勤務年数の２分の１を通算することができる．

第４条　第２条のほか，本学外国人教師にして，教育上又は学術上特に功績の顕著であった者は，特に名誉教授として選考することができ

る．

第５条　名誉教授の称号授与は，当該学部の教授会の，学部に所属しない者に対しては，学長の推薦に基づき評議会の議を経て大学がこれを行う．

附　則

この規程は，昭和27年12月15日から施行する．

6.　第１回横浜国立大学卒業式

第１回横浜国立大学卒業式は28年３月20日午前10時より工学部講堂で行なわれた．

開会の辞の後合唱（グリークラブ），卒業証書ならびに修業証書授与，学長式辞，来賓祝辞，冨山名誉教授送別の辞，在学生代表送辞，卒業生総代答辞，合唱螢の光（グリークラブ），閉会の辞をもって終わった．

冨山名誉教授は昨年８月大学を退任したまま，全学生へのあいさつが今までなかったので，この卒業式に送別の辞に兼ねて辞任のあいさつを述べた．（辞任のあいさつ，前述）

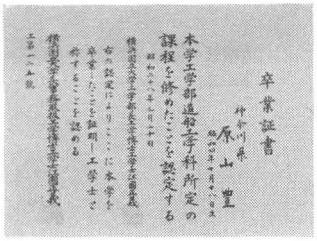
なお第１回卒業生内訳は次の通りで，ここに初の新学士が巣立った．

△学芸学部　　139 名（内女子３名）〔２年課程　135 名（内女子 105 名）〕

△経済学部　　157 名（内女子０）

△工学部　　164 名（内女子０）

内訳　機械工学科34名，化学工学科31名，電気化学科32名，建築16名，造船24名，電気27名，計 164 名


卒業証書

本学工学部造船学科所定の課程を修めたことを認定する

原山豊

第１回卒業生の卒業証書

第１回卒業式の式場正門

第一回横浜国立大学卒業式場

冨山名誉教授あいさつ

大学1期生の就職（松野武雄教授　DENKA 6 より）

大学の1期生といえば，卒業期当時の世相は安定しておらず，就職にも非常に困った時代である．たとえば，夏休み中に，電化の先生方がいろいろな会社を1日に何社となく廻って，就職をこちらから依頼にゆかれたところ，どこへ行っても夏の暑い頃で，氷水をその都度出されるので，のみ過ぎて下痢気味となったという笑えぬ話もあったし，また卒業式の当日，なお会社の面接試験が残っているという切迫していたこともあった時代である．

7. 電炉電解実験室完成

昭和28年3月25日工学部電気化学科の電炉電解実験室が完成した．

本校の電炉実験室の歴史は古く，横浜高工創立当時にさかのぼることができる．すなわち，冨山保が電気化学科事務取扱時代に建設されたが，間もなく震災により焼失した．（ただしその時の変圧器，ボールミル，ジョウクラッシャー，50トンプレスなどは残り，現在も使用されている）その後，急造のバラックが建造された．

昭和14，5年ごろ同じ校内のやや広いバラック建ての建物に移転，東北電化，日立製作所などの応援を得て設備の充実をはかった．しかしこれも終戦直前の昭和20年，強制建物疎開のためとり壊しを受けた．終戦後は航空工学科が廃止されたのでその一部を使用し，電炉の実験をつづけていた．

電炉電解実験実習は，電化の学生にとって，必修科目であり，第3学年後期（週3時間）第4学年（週9時間）行なう基礎授業であったので，冨山学長時代，学長および友成教授，平野事務局長らが奔走しようやく文部省の予算がとれ，28年に至り，本建築が完成した．

28年3月25日，開所式が行なわれたが，当日は多数の来賓を迎え盛会であった．

実験室は，総坪数121坪（400 m²），原料処理設備，各種電炉，溶融塩電解用設備，機械工作関係設備，製品試験関係設備等が完備された，なお東北電化工業からブスバー一式，日本鋼管から鋼材25トン，日本セメントからセメント800袋，旭ガラスから窓ガラス20箱，古河電線から配線用電線の寄贈を受けた．

なおその後，文部省より試験研究費（2回），科学研究費などを受け一層充実したものとなった．

8. 煙洲鈴木達治　横浜文化賞 No. 1

昭和28年3月29日，初の横浜文化賞が自由教育の父，本校名誉教授鈴木達治に贈られた．当日の受賞は他に次の3人であった．

俳句を通じて郷土史の研究者である飯田九一，日本古地図の研究家であり，また血清の研究家で知られた横浜市大医学部教授の中村拓，横浜の土を生かした陶器の作製者井上良斎で，当日の授賞式では，平沼市長から4名の功績をたたえて文化賞がそれぞれ贈られ，代表として鈴木達治が謝辞を述べた．

9. 評議会規則を制定

昭和28年10月1日，本学評議会規則が制定された．（昭和28年文部省令第11号，国立大学評議

会に関する暫定措置を定める規則）

この評議会は大学の運営に関する重要事項を審議する機関で，学長，各学部長，分校主事，各学部の教授３人よりなり，学長が議長となる．なお任期は２年となっている．

（注） なお本規則の付則３にあるように本学ではすでに横浜国立大学評議会規則というものが昭和24年８月１日付けで制定されていた．ここでは新，旧両規則を掲げておく．

横浜国立大学評議会規則（新）

（設置）

第１条　国立大学の評議会に関する暫定措置を定める規則（昭和28年文部省令第11号）に基き，本学の運営に関する重要事項を審議するため，評議会を置く．

（組織）

第２条　評議会は，左の各号に掲げる評議員をもって組織する．

1. 学長
2. 各学部長
3. 分校主事
4. 各学部の教授　３人

２　前項第４号の者は，各学部の教授会においてこれを選出する．

（任命）

第３条　評議員は，学長の上申に基いて文部大臣が任命する．

（補欠の評議員等）

第４条　教授であることによって評議員となった者が教授の地位を失った場合及び特定の職にあることによって評議員となった者がその職を失った場合には，当然評議員の職を退き，当該評議員に欠員を生じた場合には，前２条により評議員を補充する．

（任期）

第５条　教授であることによって評議員となった者の任期は，２年とする．但し，前条に規定する補欠の評議員の任期は，前任者の任期の残余の期間とする．

２　前項の評議員は，再任されることができる．

３　第１項の評議員は，任期が満了した場合においても，新たに評議員が任命されるまでは同項の規定にかかわらず，引き続きその職務を行う．

（権限）

第６条　評議会は，学長の諮問に応じて左の各号に掲げる事項を審議する．

(1) 学則その他重要な規則の制定改廃に関する事項
(2) 予算概算の方針に関する事項
(3) 学部，学科その他重要な施設の設置廃止に関する事項
(4) 人事の基準に関する事項
(5) 学生定員に関する事項
(6) 学生の厚生補導及びその身分に関する重要事項
(7) 学部その他の機関の連絡調整に関する事項
(8) その他大学の運営に関する重要事項

２　評議会は，前項に掲げる事項の外，教育公務員特例法（昭和24年法律第１号）の規定によりその権限に属せしめられた事項を取扱う．

（会議の招集及び議長）

第７条　学長は，評議会の会議を招集し，その議長となる．但し，学長事故あるときは，学長の指名する評議員がその職務を代行する．

２　学長は，評議員４人以上の請求があったときは，評議会を開かなければならない．

（会議の運営）

第８条　評議会は，選議員の過半数の出席によって議事を開く．但し，過半数の出席があっても各学部から評議員の出席がない場合は議事を開くことができない．

第９条　学長は，必要により部下の職員を評議会に出席させることができる．

第10条　議決は，出席評議員の過半数による．可否同数のときは議長がこれを決める．

附　則

1. この規則は，昭和28年10月１日から施行する．
2. この規則により初めて任命される評議員で，第２条第４号に該当する者の任期は，第

5条の規定にかかわらず，昭和30年3月31日までとする．

3. この規則の施行により，従前の横浜国立大学評議会規則は，昭和28年9月30日限り廃止する．

横浜国立大学評議会規則（旧）　（昭和24年8月1日制定）

第1条　本学に評議会を置き各学部長及び各学部の教授5人以内を以てこれを組織する．

2　学長は評議会を召集し其の議長となる．

第2条　教授で評議員となる者は各学部毎に教授の互選に依って学長がこれを命ずる．

2　前項の評議員の任期は1年とする．

第3条　評議会は左の事項を審議する．

(1) 学部に於ける学科の設置及び廃止
(2) 講座の設置及び廃止
(3) 大学部内の制規
(4) 各部新経費要求の決定
(5) 其の他重要と認めた事項

第4条　評議会に対する附議事項は召集の際通告する，重大でない事項又は急施を要する事項は通告をしないでこれを附議することが出来る．

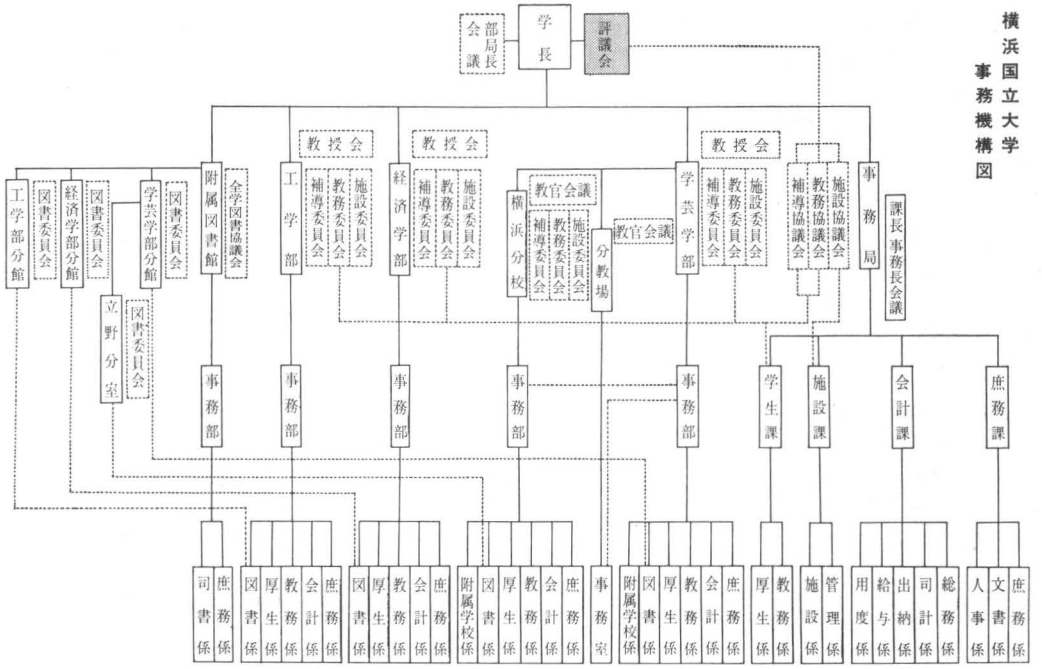
第5条　評議会は評議員半数以上の出席がなければ議事を開くことが出来ない．

2　学部の評議員全部が出席しない場合は半数以上の出席があっても議事を開くことが出来ない．

第6条　学長は必要により部下の職員を評議会に臨時出席せしむることが出来る．

第7条　学長止むを得ない事故がある時は学長の指名した評議員其の事務を代理する．

第8条　議決は出席議員の過半数による可否同数のときは議長が之れを決める．



10. 進学適性検査　廃止

進学適性検査は大学入学者の知的資質を客観的に検出して大学入学者選抜の資料とするため，大学入試の一要素として実施された．国立大学については，文部省で進学適性検査の問題を作成し，全国いっせいに実施したが，このことについては，冨山校長の本件についての思い出話も載せて前述した通りである．

この適正検査も22年度に始まり29年度まで実施され以後廃止された．廃止の理由としては，受験生の二重負担となること，大学側での利用が積極的でなかったことなどがあげられた．

11. 工学部に専攻科 設置

昭和29年4月1日，工学部専攻科設置が認可された．

従来本学工学部としては大学移行以来，大学院設置を希望しており，専攻科は置かない方針できたのであるが工学部教室主任会議や工学部教授総会で，せっかく文部省が好意的にいってくれるのであるからと，設置に踏みきったのであった．

定員は30名で，在学期間は2カ年であった．

定員30名の内訳は次の通り．

機械工学科	5名	電気工学科	4名
化学工業科	5	化学工学科	1
電気化学科	4	分析化学	1
建築学科	4	応用数学	1
造船工学科	4	応用物理	1

12. 工学部建築学科実験研究室の一部竣工

昭和29年7月20日，建築学科の実験研究室の一部が竣（しゅん）工した．これは建築学科として大正14年創設以来はじめての本建築であった．

そもそも建築学科は，高工時代，機械，応化，電化についで，大正14年第4番目の学科として誕生したものであったが，当時，校舎はいらないから是非新設してもらいたいといったといい伝えられており，これが長く文部当局に記憶されていて，どうしても本建築を建ててもらえなかったということであった．事実，設立順序からすれば，当然本館の一部に入るべきところを第5番目にできた造船工学科に先を越されてしまい，終戦時まで長く木造のバラックにはいっていた．まさに「紺屋の白袴」そのものであった．

終戦後航空機科が廃止され，その本館にようやくはいることができたが，非常に狭いものであり，昭和24年大学に移行してはじめて，文部省との古い約束が解消したためか，最初の本建築らしいものができたのである．しかしこれは第1期工事ともいうべきもので，構造，材料，環境工学関係の実験室と研究室2室のみの鉄骨造と鉄筋コンクリート造，合計174坪（575 m²）の手狭な平屋建てであった．

後に昭和35年2月25日403坪（1,330 m²）の増築工事が完成し，研究室棟（とう）は鉄筋コンクリート2階建てとなり，建築学科の臨時的本館（旧航空）とも接合され，さらに昭和36年5月19日工業教員養成所が設置されるに及び，これが臨時的なものであったためと，相互に製図室，実験室を利用するとして，370坪（1,219 m²）が増築され，合計947坪（3,125 m²）となって，現在の3階建て鉄筋コンクリート造一部鉄骨造のものが38年3月25日竣工したのであった．

13. 工学部長に山中直次郎教授就任

昭和30年4月1日，機械工学科教授山中直次郎工学博士は第5代工学部長に就任した．

山中直次郎（やまなか・なおじろう）工学博士　略歴

大正 3. 7	東京帝国大学工科大学機械工学科卒業	昭和27. 4.16	横浜国立大学教授工学部
〃 8. 9.18	東京帝国大学工学部講師嘱託	〃 27. 6. 3	東京大学名誉教授
〃 8.10.30	東京帝国大学助教授工学部	〃 30.4.1～〃 32.3.31	横浜国立大学工学部長
昭和16. 2. 1	東京帝国大学教授工学部	〃 33. 3.31	停年退職

14. 協議会規程

昭和24年1月12日に定められた教育公務員特例法に規定する教育公務員の任免，分限，懲戒，服務および研修についての事項を議するため，本学に協議会をおくことになり，昭和31年2月その規程が定められた．

横浜国立大学協議会規程

（設置）

第1条　教育公務員特例法に規定する事項を議するため，本学に協議会を置く．

（組織）

第2条　協議会は，部局長及び評議員をもって構成する．

（招集及び議長）

第3条　協議会に，その構成員の互選による議長を置き，議長がこれを招集する．但し，議長に事故あるときは，議長の指名する者がその職務を代行する．

（運営）

第4条　協議会の運営方法については，横浜国立大学評議会規則第8条以下の規定を準用する．

附　則

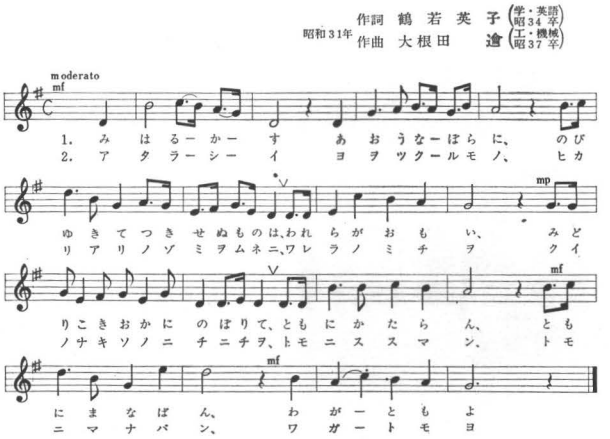
この規程は，昭和31年2月25日から施行する．

15. 学生歌「みはるかす」

昭和31年11月4日学生歌「みはるかす」が学生から募集されて当選した．作詞は鶴若英子（学芸学部英語科，昭和34年卒）作曲は大根田　逾（工学部機械工学科，昭和37年卒）でこの「みはるかす」は非常に好評をはくし，現在も全学生に愛唱されている．

学生歌としてはすでに昭和26年10月に，やはり一般学生から募集され，歌詞としてはA賞はなく，B賞として1席「紺碧の空」作詞広田三津男（機械工学科，昭和30年卒）作曲月岡教官（学芸学部），同2席「東雲のしらべ」作詞竹尾治男（機械工学科，昭和29年卒）が当選したが，これらの歌はあまり学生には歌われず，いつか忘れられてしまったようである．

横浜国立大学学生歌



1. 見遙かす青海原に
伸び行きて尽きせぬものは
われらが思い
緑濃き丘に登りて
共に語らん，共に学ばん
わが友よ

2. 新しい世を創る者
光あり望みを胸に
われらの道を
悔いのなきその日々を
共に進まん，共に学ばん
わが友よ

16. 横浜国立大学工学部付属カーバイド化学研究施設の設置から，材料基礎工学研究施設に発展するまで

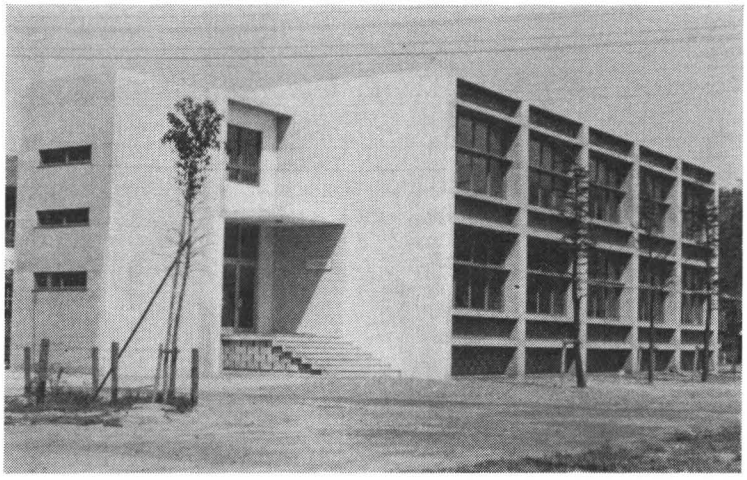
昭和31年1月23日カーバイド化学研究施設の建物が完成した．それは鉄筋コンクリート造2階建147.765坪（487 m²）で東洋高圧工業株式会社の寄付によるものであった．この建物はさきに本学が使用していた大船の貿易産業科学研究所の建物を，隣接の東洋高圧工業株式会社が是非譲り受けたいとの強い要請により，その代替建物としてできたものであった．同年4月1日付けで文部省から前記研究施設の設置が認められ，施設長に阿部滋弘教授が補された．

40年12月15日横浜国立大学施設拡充後援委員会（本節17項参照）により，**研究センター**（鉄筋コンクリート造5階建延738坪(2,438 m²)）が寄付されるにおよんで，41年4月1日付けでカーバイド化学研究施設は発展的解消をして，材料基礎工学研究施設が設置された．この研究施設はMaterial Science の研究を主とするもので，いわゆる「材料科学」の研究を目ざしており，個々の材料の性質や挙動を微視的にも巨視的にも統一的に掌握しようとする理学と工学にわたる広い領域を意味するが，このような観点に立つ研究施設としては本邦で最初のものであった．

この広い研究範囲を含む本施設は当然相当な規模を持つべきであり，将来は研究所に拡大すべく各方面に努力が重ねられている．

また分化した各部門に共通な問題を取り扱うのであるから，工学部各科をたて糸とすれば，これらを横につなぐよこ糸の役目を果たすもので，その点大学にある他の多くの研究施設にない特性を持ち，工学部におけるいわば「研究センター」の役割を担っているといえよう．

官制上は現在「材料物性」「材料合成」「材料設計」の3部門であるが，内部的にはさらに「複合材料」「材料計測」「反応工学」「材料安全」の兼任部門を定めて，専任3部門と共に計7部門が学科別にこだわらぬ研究活動の Forum としての運営が行なわれている．なお研究施設発足以来その紀要ともいうべき「材料基礎工学研究」を毎年発行しいる．



工学部カーバイド化学研究施設

なお研究センター建物内に電子計算機室を設置した．室長は設置時から昭和44年８月31日まで電気工学科国枝教授，44年９月１日から47年10月22日まで建築学科田口教授であった．

横浜国立大学工学部付属カーバイド化学研究所規程

（設置）

第１条　本学工学部に国立学校設置法第５条に基く附属研究施設として，横浜国立大学工学部附属カーバイド化学研究所（以下「研究所」という）を設置する．

（目的）

第２条　本研究所においては，カーバイド，石灰窒素及び其等の誘導体に関する研究，並に試験を行う．

（組織）

第３条　本研究所に次の研究部門並に分析実験室及び事務係を置く．

1. カーバイド部門
2. 石灰窒素部門
3. 有機合成化学部門
4. 分析実験室
5. 事務係

（職員）

第４条　本研究所に，次の職員を置く．

1. 所長
2. 所員
3. 研究補佐員
4. 事務職員

（所長）

第５条　所長は工学部教授会の議に基いて，所員の中から，学長がこれを任命する．

２　所長の任期は，２年とし，工学部長の指示を受け，所務を掌理する．

（所員）

第６条　所員は，工学部の教授，助教授，及び講師の中から，所員会議において選考のうえ，工学部教授会の議を経て，学長が任命する．

２　所員は，所長を補佐し，研究及び試験を行う．

（研究補佐員及び事務職員）

第７条　研究補佐員及び事務職員は，工学部教職員の中から，工学部長がこれを命ずる．

２　研究補佐員は，所員の指揮の下に，研究及び試験の補助に従事する．

３　事務職員は，工学部事務長の監督を受け，研究所の事務に従事する．

（所員会議）

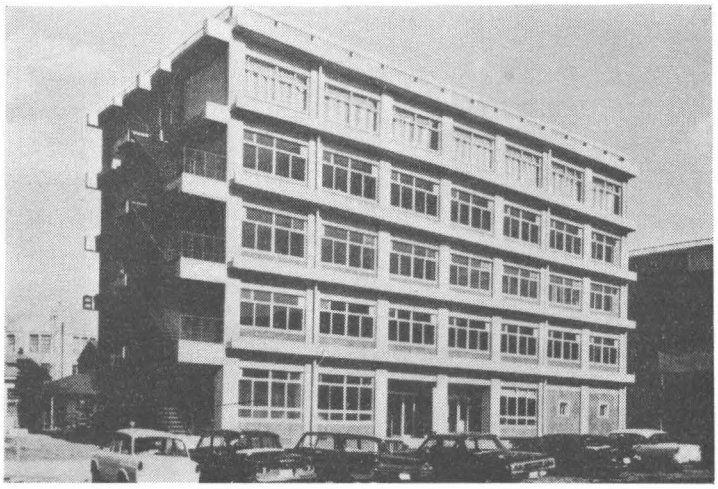
第８条　本研究所に，所員会議及び運営会議を置く．所員会議及び運営会議に関する規程は，別に定める．

（その他）

第９条　工学部長は，所長及び所員に，授業を担当させることができる．

附　則

この規則は，昭和32年１月１日から施行する．



研究センター
材料基礎工学研究施設

横浜国立大学工学部付属カーバイド化学研究施設規程（制定昭和37年3月20日）

（設置）

第1条　本学工学部に国立学校設置法第5条に基く付属研究施設として，横浜国立大学工学部付属カーバイド化学研究施設（以下「研究施設」という）を設置する．

（目的）

第2条　本研究施設において，カーバイド，石灰窒素，アセチレン及びそれらの誘導体に関する研究並びに試験を行う．

（組織）

第3条　本研究施設に次の部門，実験室を置く．

1. 基礎部門
2. 製造部門
3. 有機合成化学部門
4. 分析実験室

（職員）

第4条　本研究施設に次の職員を置く．

1. 施設長
2. 教授
3. 助教授
4. 講師
5. 助手
6. 技術職員
7. 事務職員

2　本研究施設に研究員並びに研究補佐員を置く．

（職員の任命）

第5条　施設長は工学部教授会の議に基づいて学長が選考する．

2　教授，助教授並びに講師は工学部教員資格審査内規に基づいて選考する．

3　研究員は工学部の教授，助教授及び講師の中から研究施設会議に於て選考し，工学部教授会の議を経て学長が任命する．

（職員の任期）

第6条　施設長及び研究員の任期は2年とする．但し，再任を妨げない．

（研究施設会議）

第7条　本研究施設に研究施設会議を置く．

研究施設会議に関する規程は工学部長が定める．

付　則

この規程は，昭和37年4月1日から施行する．

横浜国立大学工学部付属カーバイド化学研究所規程（昭和32年1月1日制定）はこれを廃止する．

横浜国立大学工学部付属材料基礎工学研究施設規程（昭和40年9月8日）

（設置）

第1条　本学工学部に国立学校設置法第5条に基づく付属研究施設として，横浜国立大学工学部付属材料基礎工学研究施設（以下「研究施設」という）を設置する．

（目的）

第2条　研究施設は，材料の諸性質の統一的な理解を進めて分化した専門分野の有機的なつながりを深め，新しい材料の開発とその工学的応用の研究を行う．

（組職）

第3条　研究施設に次の部門を置く．

一　材料物性工学部門
二　材料合成工学部門
三　材料安全工学部門
四　材料設計工学部門
五　材料計測工学部門
六　反応工学部門

（職員）

第4条　研究施設に次の職員を置く．

施設長
教授
助教授
講師
助手
技術職員
事務職員

2　研究施設に研究員ならびに研究補佐員を置く．

（職員の任命）

第5条　施設長は工学部教授会の議に基づいて学長が選考する．

2　研究員は工学部の教授，助教授および講師の中から研究施設長の推せんにより工学部教授会の議を経て学長が任命する．

（職員の任期）

第6条　施設長および研究員の任期は2年とする．但し，再任を妨げない．

（研究施設会議）

第7条　研究施設に研究施設会議を置く．

研究施設会議の組織運営については工学部長が定める．

付　則

この規程は昭和40年4月1日から適用する．

横浜国立大学工学部付属カーバイド化学研究施設規程（昭和37年3月30日制定）はこれを廃止する．

17.　横浜国立大学工学部施設拡充後援会

昭和36年12月，横浜国立大学工学部施設拡充後援会が発足した．当時の工学部の教育用ならびに研究用設備はすでに老朽化，あるいは旧式化したものが多かったので，教授会や識者の間で1日も早くこれらを改築，改善し設備の充実をはからねばならぬ．それには国家予算のみに頼ることはせず，自らの手で幾分でも有志から募金をし，これが費用に充当すべきであるとの議が鬱勃（うつぼつ）として起こってきたのであった．

本会の会長には特に横浜高工時代講師を委嘱した縁故もあり，元首相の石橋湛山を推し，顧問を藤山愛一郎ら，理事を関係官界，財界，産業界の有志に依頼した．その趣意書および発足時の役員は次の通りであった．なお後に会長代理として加賀美　勝が委嘱された．

会長　　石橋　湛山

顧問　　藤山愛一郎　内山岩太郎（神奈川県知事）半井　清（横浜市長）金刺不二太郎（川崎市長）田中省吾（横浜商工会議所会頭）　根本　茂（川崎商工会議所会頭）　箕浦多一（神奈川県経営者協会会長）李家　孝（生産性協議会会長）野村洋三（ニューグランドホテル会長）黒沢　清（横浜国立大学長）

理事　　（略）

監事　　（略）

趣　意　書

横浜国立大学工学部施設拡充後援会　趣意書

横浜国立大学工学部は，異色ある校風を誇った旧横浜高等工業学校を母体として，昭和24年新制大学

制度の発足と共に誕生したものであります．学園創立以来41年，この間約1万の卒業生を送り出し，我国産業界に大きく貢献しております．

さて，大学に於ける工業教育の目標は，いかなる専門分野に進むにしても，その基礎となるべき学問を身につけ，未開拓の問題を独創的に解決する能力を培うことであります．しかるに我国の大学では，従来ややもすれば独創の母体となる基礎学の修練よりも，過去の創造の遺産としての技能知識の詰込みに偏し，ことに戦後所謂技術導入の影響により大学におけるこの傾向は一層はげしくなりつつあるように観察されます．これではいつまでたっても諸外国に追随するのみでありますから，今後は従来のように技術導入のみに頼らず，独創的な技術の開発によって我国産業の基盤をつくり，更に進んでこれを海外にひろめる態勢を整えねばなりません．

この要求に対し，横浜国立大学工学部は，はやくより工学基礎教育の必要を痛感し，全国に先がけその実施を図り，幸い優秀な学生と，充実した教官陣の努力により着々としてその成果を挙げ，文部省をはじめ各方面の注目をあびるに至っております．このような教育を充実させるためには，更に高度の工学基礎教育を目標とした大学院課程を現在の工学部課程の上に設けることが必要欠くべからざることで，またこれが産業界の要望に応える途であると考えます．

我国有数の工業地帯の中心にある横浜国立大学工学部として大学院課程の設立は当然の義務であり，又学生の素質，教官陣の内容から申しましても充分な条件が整っていると信じます．遺憾ながら，国家予算のみによっては現在の工学部の設備充実でさえ不満足な現状にありますので，この際，ひろく各界の御援助を仰ぎ施設設備の拡充を図り，大学院の設立に備えたいと思います．

つきましては，以上の事情御賢察の上御支援の程お願い申し上げます．

横浜国立大学工学部施設拡充後援会　資金募集要項

横浜国立大学工学部の施設設備の整備充実のために，下記の要領によって資金を募集する．

1. 資金募集の方針
   募金のための後援会を設立して寄付金を募集する．
2. 募金後援会の名称
   横浜国立大学工学部施設拡充後援会
3. 募金の目的
   横浜国立大学工学部の研究実験用施設設備の充実および工学専門図書の拡充整備のため募金をし，研究，教育を助成すると共に大学院の工学研究科を設置する基盤をつくることを目的とする．
4. 募金後援会の趣意
   （別紙のとおり）
5. 募金の目標額
   総額　3億5千万円
   内訳　建物建設費　1億8千万円
   設備備品費　1億2千万円
   専門図書費　4千5百万円
   事　務　費　5百万円
6. 後援会の規約
   （別紙のとおり）
7. 後援会会長
   石橋湛山（旧職員）
8. 後援会役員
   （別紙のとおり）
9. 募金の使途
   イ　横浜国立大学（工学部）の研究・実験室および図書室として延1,500坪の建物を建設する．
   ロ　前項に必要な実験用機器備品を整備する．
   ハ　最新の工学専門図書を購入する．
10. 募金の要領
    寄付金総額を次の方法によって募金する．
    法人寄付金　2億2千万円
    個人寄付金　3千万円
    但し，法人からの寄付金については免税措置（損金算入）を受ける．
11. 募金の区域および範囲
    区域　全国一般
    範囲　各会社，各事業所並びに横浜高等工業学校，横浜工業専門学校，横浜国立大学工学部の各卒業生および横浜国立大学工学部の教職員
12. 募金の期間
    昭和36年12月1日より
    昭和37年11月30日まで

13. 募金の管理および処分方法

イ　募金の管理は，後援会理事会が当る．

ロ　募金した資金は，募金のための所要経費を差引き工学部の研究・実験室および図書室を建設すると共に教育・研究・実験用の機械器具備品，工学専門図書を購入して横浜国立大学に寄付する．

14. 寄付金の払込場所

イ　銀行払込（順序不同）

大和銀行，横浜銀行，三和銀行，第一銀行，住友銀行，三井銀行，三菱銀行，協和銀行，東京銀行，東海銀行，富士銀行，日本勧業銀行，三菱信託銀行，三井信託銀行，安田信託銀行等

ロ　郵便振替払込

後援会の口座を開設する．

ハ　直接払込

横浜国立大学工学部施設拡充後援会事務所に持参

15. 払込方法

一時払

随意分割払

16. 寄付金払込最終期限

昭和37年11月30日

17. 募金に要する経費

人件費

会議費

印刷費

消耗品費

通信費

旅費

雑費

18. 後援会事務所および代表者

横浜市南区大岡町 702

横浜国立大学工学部内（電話〔74〕3541—9）

横浜国立大学工学部施設拡充後援会

代表者　　石　橋　湛　山

横浜国立大学工学部施設拡充後援会　会則

第1条　本会は，横浜国立大学工学部施設拡充後援会と称する．

第2条　本会の事務所は，横浜国立大学工学部におく．

第3条　本会は，横浜国立大学工学部の施設および設備の拡充により大学院の工学研究科を設置する基盤をつくるために次の事業を行なうことを目的とする．

1. 研究，実験の施設設備および専門図書の充実
2. その他目的達成のための必要な事項

第4条　本会は，前条の目的達成のため，この事業の趣旨に賛同する広く各方面の有志から寄付金を募集する．

第5条　本会に次の役員をおく．

会　長	1　名
顧　問	若干名
理　事	若干名
評議員	若干名
監　事	若干名

第6条　会長は，理事会で推せんする．

2　会長は，会務を総理し本会を代表する．

第7条　顧問は，本会の趣旨に賛同する有志の中から，会長が委嘱する．

2　顧問は，本会の会務について，会長の諮問に応える．

第8条　理事は，評議員会で選出した者について会長が委嘱する．

2　理事は，会長とともに理事会を構成し，業務を議決し執行する．

3　理事のうち，若干名を常任理事とし会長が委嘱する．

第9条　評議員は，本会の趣旨に賛同する有志の中から会長が委嘱する．

2　評議員は，会長とともに評議員会を構成し，理事会の諮問に応じ，会長に対し必要と認める事項について助言する．

第10条　監事は，評議員会で選任したものについて，会長が委嘱する．

2　監事は，会計を監査する．

3　監事は，理事会に出席することが出来る．

第11条　理事会は，必要により会長が招集し議長となる．

第12条　評議員会は，必要により会長が招集し議長となる．

第13条　本会の経費は，寄付金およびその他の収入金をもってあてる．

第14条　本会は，理事会および評議員会が適当と認めたときは解散する．

第15条　本会の施設および設備等は，横浜国立大

学工学部に帰属させるものとする.

2　本会を解散する場合の財産は，本会の目的を達成するため，横浜国立大学工学部に指定寄付するものとする.

第16条　この会則の実施について必要な事項は，細則で定める.

付　則

1.　この会則は，昭和36年11月28日から施行する.

2.　本会設立当初の役員は，横浜国立大学工学部施設拡充後援会結成準備会の会長が委嘱する.

当初募集予算金額は3億5,000万円であったが，ちょうど経済界の不況に遭遇し神奈川県の5,000万円（図書館設立資金）のほかは会社関係および一般からの寄付が思うように得られなかった．しかし後に会長代理となった加賀美　勝および学校側理事その他熱心な協力者の努力により，締切り日の43年10月31日（のち締切り日を延長）までに2億1,600万円の巨額が集まった.

43年11月の報告書によれば収入支出は別表の通りで，残高3,200万円余は残金として，統合後の設備資金に充当することとなっている.

横浜国立大学工学部施設拡充後援会　**収支一覧表**

収　入　　昭和43年10月31日現在

区　分	寄付金額		備　考
	件　数	金　額	
寄付金　官庁関係	2	50,050,000円	（　）内の数字は現物寄付で外数
法　人	(3) 186	(1,250,000) 143,600,000	
一　般（個人）	5	600,000	
卒　業　生	2,143	13,957,350	
教　職　員	107	965,500	
小　計	2,443	209,172,850	
預金利子		7,499,907	
合　計		(1,250,000) 216,672,757	

支　出

区　分	金　額	備　考
工学部図書館新営工事費	50,695,868円	RC2,　1,608m²（486坪）
工学部研究センター新営工事費	128,822,000	RC5,　2.438m²（737坪）
事　務　費	4,687,283	
計	184,205,151	
差　引　残　高	32,467,606	

なお，この支出のうちの国書館および研究センターの工事概要は次の通りであった．後者については本節16項にすでに述べた通りであり，前者については同じく40項に記しておく.

図書館工事概要

○工事期間　自昭和38年８月　至昭和39年３月

○設計・監理　横浜国立大学事務局施設課

○請負者と契約金額

建築工事　安藤建設株式会社　45,700,000円
（基礎工事を含む）

電気工事　旭日電気工業株式会社　3,032,000円

衛生工事　第一設備工業株式会社　1,150,000円

ガス工事　東京ガス株式会社
横浜営業所　118,000円

計　50,000,000円

○構造規模

鉄筋コンクリート造２階建　但し書庫は４層となる

基礎コアードコンクリート杭（長18m）102本

打　径43cm

建坪　191坪479

延坪　486坪472（1,608.169m²）但し延坪の中133坪23は書庫坪数

○仕上概要

閲覧室　床ロンリウム貼　壁ハマウッド貼　一部ゾラコート吹付　天井アコーテックス，一部布張り

新聞閲覧室　床ソフトンタイル貼　壁ハマウッド貼　天井アコーテックス

事務室，館長室　床ロンタイル貼　壁ベニヤ板貼　天井アコーテックス

書庫　床防水モルタル塗　壁モルタル塗　天井石膏吸音板張

外装　柱梁打放しコンクリート仕上　腰二丁掛タイル張　一部モルタル塗ダイヤリシン吹付

屋上　防水モルタル塗

○図書収容部数　約100,000冊

研究センター工事概要

○工事期間

基礎杭打工事　自昭和39年９月
至昭和39年11月

建築工事　自昭和40年４月
至昭和40年10月
（設備工事を含む）

○設計・監理　横浜国立大学施設課

○請負者，契約金額

基礎杭打工事　安藤建設株式会社　9,500,000円

建築工事　大成建設株式会社
118,575,000円
（設備工事を含む）　128,075,000円

○構造規模

鉄筋コンクリート造５階建

基礎コアードコンクリート杭（長平均19m）
115本　径51cm

建坪　143坪022

延坪　737坪571（2438m²250）

○仕上概要

外装　柱梁庇打放しコンクリート打，腰二丁掛タイル張

屋上　アスファルト防水（３層）押えモルタル

内装

階数	室名	床	壁	天井
1	電子計算機室	モバフロアー	有孔ベニア貼	パラートン
1	ボイラー室	モルタル塗	トムレックス吹付	トムレックス吹付
1	管理室	フローリング，ブロック	モルタルペンキ塗	吸音テックス
2	共通会議室	ロンリウム貼	布貼	吸音テックス
2	研究実験室	小野田ＣＸモルタル	モルタル，ペンキ塗	石膏吸音板
2	電子顕微鏡室	小野田ＣＸモルタル	モルタル，ペンキ塗	石膏吸音板
3.4	研究室	ロンタイル貼	モルタル，ペンキ塗	吸音テックス
3.4	研究実験室	小野田ＣＸモルタル	モルタル，ペンキ塗	石膏吸音板
3.4	小会議室	ロンタイル貼	布貼	吸音テックス

3.4	宿泊室	カーペット	布貼	石膏吸音板
5	談話室	カーペット ロンタイル貼	布貼 一部和紙ブロック	ヘシヤンクロス貼
5	閲覧室	ロンリウム貼	布貼	ミネラートン
5	会議室	モザイクパーケット	ヘシヤンクロス	ミネラートン

当時の幹事役の一人とし多忙な教職のかたわら本会のために奔走した飯島健一教授は後年次のごとく記している．

正式に後援会が発足したのは岩崎先生が学部長の時であった．最初岩崎学部長は同窓会の先輩菅要助，佐藤興次の両氏と機械工学科の停年退職直後の中本守先生を招き，募金計画の可能性などについて下相談された．その後工学部内では各学科から1～2名の募金委員を出して募金委員会を結成した．一方岩崎学部長は，山口辰男同窓会長を訪ね同窓会が発起人となり，広く工学部に関係ある各界の代表を集め横浜国立大学工学部施設拡充後援会を設立することを依頼した．会長には阿部滋弘教授の奔走で石橋湛山先生にお願することとなった．

最初の大口の寄附は神奈川県からの5,000万円であったが，これには石橋先生夫妻が東京から内山知事に面会に見えて話をきめて頂いた．これは特に県からの要望により，現在の工学部図書館の建設費に充当した．

また後援会の発足にあたり趣意書の原稿を李家孝さんに見せたところ，その中に大学院のことが書いてなかったので「私はすでにロータリーの会合で皆さんに横浜国大の工学部で大学院をつくるために募金をするからよろしく頼むという話をしてしまった．神戸なんかに先を越されてたまるものか，堂々と大学院をつくるということで書き直したらどうだ」という有難い御忠告を頂いた．

さて県の大口寄附も決定し，卒業生及び教職員の個人寄附も少しずつ集りはじめたものの，一般会社からの寄附については，不況の波と，われわれ学校片手間の仕事であったからなかなか思うにまかせず，これは大変なことを始めたものだと思っていた矢先に，岩崎先生の自宅が，会社廻りから帰宅してみたら焼失していたという事故が起ったりして，一時は惨憺たるものであった．丁度その頃黒川教授の提案で煙洲先生の教え子で新菱冷熱株式会社社長の加賀美勝氏に援助を願ったらどうかという話が出て黒沢学長が四谷の会社を訪ね正式に援助をお願し，石橋会長の会長代理ということで協力を得ることとなった．その後の後援会における加賀美勝会長代理の活躍は驚くべきものであった．1,000万円以上の寄附額の決定はすべて加賀美会長代理のあっせんによって決まったもので，工学部はまるまる御世話になってしまったというのが実情である．研究センターの設立もさらにその中のカーバイド研究施設の改組拡充によ

工学部施設拡充後援会
研究センター落成式
あいさつ 加賀美会長代理

る材料基礎工学研究施設の設立も最大の功労者は加賀美会長代理であった.

大学の内外を通じて多くの方々の協力により募金事業も一応の成果をあげたわけであるが，この仕事について最も努力をされた岩崎，黒川の両先生が他界されたことは誠に残念なことである.(47年3月12日記)

18. 化学2号館竣工

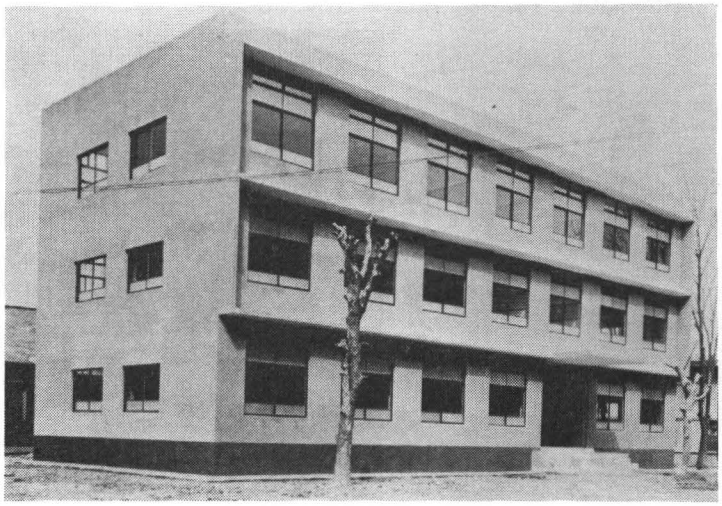
昭和32年3月31日化学2号館鉄筋コンクリート造3階建244坪（807 m²）が竣工した．本学工学部では第2部（夜間部）の施設が第1部と共用であったので，実験室関係で第1部の学生実験のために組立てられた装置が，第2部学生実験のために取りこわされたり，またその逆もあった．このことは特に化学実験における授業をきわめて困難とした．さらにまた本構内には横浜市立工業高等学校（夜間定時制）が設立されており，本学部の施設を共用していたので大学の第2部と同様に化学実験の授業をむずかしいものとしていた．このことを解消するには建物を増設することが必要とされた．この建物増設計画について工学部では，横江勝美横浜市教育委員会教育長に相談したところ，同教育長の尽力により，横浜市より建築費および設備費として800万円の寄付があり，国費1,200万円をあわせて，ここに化学2号館が竣工し実験室問題は解消した．

19. 工学部長に永井彰一郎教授就任

昭和32年4月1日，電気化学科教授永井彰一郎工学博士は，第6代工学部長に就任した．教授は，セメント等の窯業関係に造詣(ぞうけい)深く，斯(し)界の第一人者であった．

永井彰一郎（ながい・しょういちろう）工学博士　略歴

大正8.7.	東京帝国大学工科大学応用化学科卒業	昭和21.4.1	工学部 東京帝国大学教授工学部
〃 8.8.21	東京帝国大学工学部講師嘱託	〃 25.6.30	横浜国立大学教授（併任）
〃 9.8.7	東京帝国大学助教授		



工学部化学2号館

昭和30.4.1	横浜国立大学教授工学部	昭和32. 4.1〜〃 34.3.31	横浜国立大学工学部長
〃 30.5.31	東京大学名誉教授	〃 35.4.1	停年退職

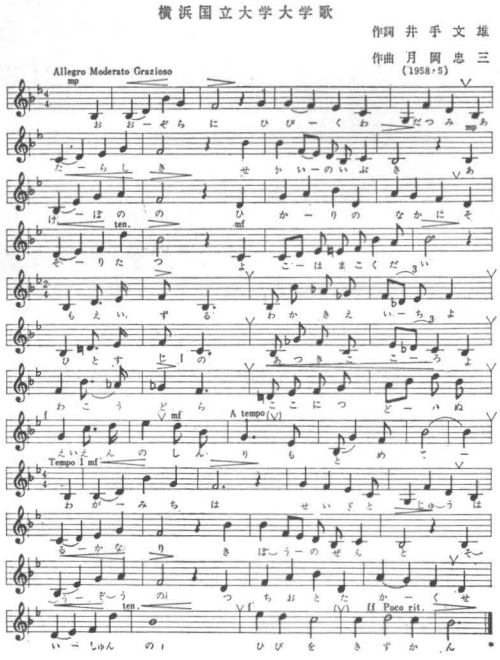
20. 校歌の制定

昭和27年2月14日の評議会で，校歌を制定することを認め，その募集方法等の実行方法は，学生と協議して定めることとし，これの経費は学校が負担することとした．

これについて作詞，作曲ともに外部の有名人に依頼する方法，また学内で公募する方法など種々の意見が出たが，開学10周年を期してぜひ作りたいとして，32年6月20日の評議会では，校歌の制定に関する選定委員会を設け，作詞者，作曲者の選考に当たることになった．

その後，委員会からの答申により，作詞を経済学部井手教授に依頼することが最も適当であると評議会で了承された．昭和32年12月19日の評議会では井手教授作詞の学生歌が決定され，学芸学部奥田，月岡両教官が作曲することもきまった．

昭和33年3月6日の評議会では，大学歌の作曲ができ上がってこれを了承し，その日の午後，工学部講堂で発表された．大学歌は次の通りである．



1. 大空に　ひびく海洋
　新しき　世界の息吹き
　あけぼのの　光のなかに
　そそり立つ　横浜国大

2. 崩え出ずる　嫩き叡智よ
　ひとすじの　熱き精神よ
　若人ら　ここに集いぬ
　永遠の　真理もとめて

3. わが道は　正義と自由
　はるかなり　希望の前途
　創造の　槌音たかく
　青春の　日日をきずかん

金属工学科
三原教授

この歌は，明るいよい歌であるが，比較的むずかしかったことと，学生の意見が反映されていないから歌ができ上がっても歌わないとの学生自治会からの抗議があったりして，その後の大学祭などにはかなり宣伝もされたが，現在では残念ながら全く歌われていない．

21. 金属工学科設置

昭和33年４月１日横浜国立大学工学部に金属工学科が新設された．これにより本学工学部は従来の機械工学科，化学工業科，電気化学科，建築学科，造船工学科，電気工学科の６科にさらに１科を加え７科となり，いっそう充実することとなった．

金属工学科は，申請書としては第１から第５までの５講座および講座外科目があり，教授は三原金吾，沖　進両博士で，33年度金属工学科学生定員は40名であった．

金属工学科設立の経過を次に述べる．

昭和32年，永井工学部長の時，当時機械工学科の教授であった三原金吾（横浜高工機械工学科第１回卒，東北帝国大学工学部金属工学科卒）が金属工学科設立の必要を教授会に提案，教授会では，昭和33年度工学部関係最重要事項として次の事由を付して文部省へ申請することとなった．

〔要求事由〕 かねてから京浜地区の重工業関係会社から当工学部に対して，金属工学科の新設の要望が頻りであったが，幸い当工学部はこの科目に必要な主要設備を既に有しており，設置がすぐにでも可能である．

授業科目については，他大学金属工学科とは主眼点を異にし，冶金の階程後における塑性加工材料学に重点を置く．わが国は諸外国に比しこの方面で立遅れているので，本学科新設によって機械部品や装置の製造技術の進歩に寄与せんとするものである．

この趣旨にそい講座としては金属組織学，冶金学，金属材料学，金属加工学，鋳造工学を設ける．

以上のようにして正式に文部省へ金属工学科新設を申請したが一方，三原金吾，中村康治，大谷泰通，友成忠雄の４教授が，金属工学科設立準備委員となり，諸般の準備をととのえた．特に人事が最重要と考え，三原教授らの奔走により，沖　進教授（当時日本車輛製造会社研究次長）和田良澄教授（当時北大教授）を最有力候補として交渉を進め，いずれも承諾を得た．

本省との交渉は正規のルートを通して行なわれたことは当然であるが，側面よりは友成教授，平野事務局長，桑原工学部事務長補佐らが，当局に働きかけその実現に努力した．

幸いにこの申請は，当時わが国の教育政策が工学部拡充の機運にあったこともあり，1回で文部省に認められ翌33年度より新設の運びとなった．

なお金属工学科設立にあたっては，本省予算だけでは十分な設備が整えられないので，三原金吾教授らは日本鉄鋼連盟に依頼し，金属工学科施設拡充後援会*を設立し，関係者より寄付を募ることとした．幸いにして目標額2,000万円に近い寄付が得られた．金属工学科設立にあたり三原教授その他多数の人々の努力と好意は銘記されねばならない．(注) 本後援については次項参照

三原金吾（みはら・きんご）工学博士　略歴

昭和 4. 3.　東北帝国大学工学部金属工学科卒業
〃 4.4.1〜〃 21.10.15　古河理化研究所勤務
〃 21.11.10〜〃 24.8　金属研究所自営
〃 24.8.31　横浜国立大学横浜工業専門学校教授
昭和26.3.31　横浜国立大学教授工学部
〃 42.3.16〜〃 42.8.31　横浜国立大学工業教員養成所教授
〃 42.8.31　辞職

金属工学科　学科目

学科	学科目	授業科目	単位数 必修	単位数 選択
金属工学科	金属工学第一	金属異相平衡	2.25	
		金属相平衡論		1.5
		金属組織学	3	
		X線結晶学	2.25	
		冶金表面処理工学		1.5
		金属組織学実験	2	
		金属物理実験	2	
		卒業計画及研究	10	
	金属工学第二	鉄冶金学	6	
		非鉄冶金学	3	
		電気冶金学	3	
		粉末冶金学		1.5
		特殊冶金学		2.25
		冶金実験	1	
		卒業計画及び研究	10	
	金属工学第三	金属材料学 I	3	
		金属材料学 II	3	
		耐熱金属材料学	1.5	
		特殊材料学		
		電磁気材料学		1.5
		原子炉材料学		1.5
		放射線並びに応用		2.25
		半導体		2.25
		金属材料学実験	4	
		卒業計画及び研究	10	
	金属工学第四	基礎塑性学	3	
		金属加工学 I	3	
		金属加工学 II	2.25	

		塑性加工力学		2.25
		金属加工機械学	4.5	
		加工実験並びに見学	3	
		卒業計画及び研究	10	
金	金属工学第五	鋳造学 I	3	
		鋳造学 II	3	
		鋳造機械学		1.5
		耐火物材料学	1.5	
		燃料学	1.5	
属		炉体構造学並びに設計		3
		鋳造学実験並びに見学	2	
		卒業計画及び研究	10	
	学科目外科目	一般力学	3	
工		材料力学	3	
		金属塑性力学		1.5
		分析化学	1.5	
		分析化学実験	2	
		理論化学	3	
学		熱力学（含む演習）		1.5
		熔接工学		1.5
		機械工作法	1.5	
		機械工学通論	3	
		電気工学通論	3	
科		無機化学工業	3	
		電気工学実験	2	
		設計製図	3	
		応用数学		1.5
		安全工学		3
		工業経営		3

学科目欄は暫定の学科目を示す.

22. 横浜国立大学工学部金属工学科施設拡充後援会

昭和39年初頭，工学部金属工学科施設拡充後援会が設立された．後援会長は別府英一（月島機械副社長，大正12年卒機械１期）で，募集予定額は2,000万円，募集期間は39年３月１日から41年３月31日までであった．期日までに18,640,000円が集まり試験器等一部を購入したが，大部分は，全学統合後に建築費に当てるため残された．募集の目的は趣旨書に次の通り述べられいる．

趣旨書（抜粋）

同学科の特色発揮に必要である材料加工機械，材料強度試験機，物理的解析機器等の設備ならびに製図室，教室の整備には未だ程遠い現状であります．この際広く鉄鋼業界の御援助を仰ぎ，建物と実験設備の充実を致すべく計画いたしました．

23. 多和田　寛教授の急逝

昭和33年８月16日，応用化学科教授多和田　寛工学博士は，心筋梗塞のため急逝(せい)した．

同教授は大正12年東京帝大工学部応用化学科を卒業し，逓信省電気試験所を経て，北大助教授，旅順工大教授を歴任の後，昭和27年4月本学教授となった．燃料化学，特に石炭に関する権威でカーバイド用コークスの研究に取り組み，カーバイド化学研究施設のスタッフの一人でもあった．

24. 第一寮移転改築

本寮（木造2階建延150坪（494 m²）収容人員34人）は大正13年に横浜市南区大岡町岸ケ谷2,233に建設，第一寄宿寮興風館と称し，多くの学生生徒が種々の思い出を秘めつつ起居を共にしてきたのであったが，戦争その他でその補修もできないまま老朽化し，きわめて危険な状態となった．たまたま第一寮の上に女子校成美学園があり，同学園から校舎拡張のためこの寮の移転方懇請があった．当大学では大蔵省関東財務部に用地の交渉をし，南区清水丘190に移改築工事を行ない，昭和33年9月30日竣工した．木造2階建延133坪（440 m²）収容人員36人である．

25. 黒沢学長（第3代）就任　江国前学長に名誉教授称号授与

昭和34年4月1日付けで横浜国立大学経済学部長黒沢　清経済学博士は，前学長江国正義のあとをうけて学長に就任した．黒沢学長は，昭和37年3月をもって，学長としての任期を一期勤め，再選されて昭和40年3月31日まで二期を勤めた．

昭和34年4月1日江国正義前学長は名誉教授の称号を授与された．（略歴前出）

黒沢　清（くろざわ・きよし）経営学博士　略歴

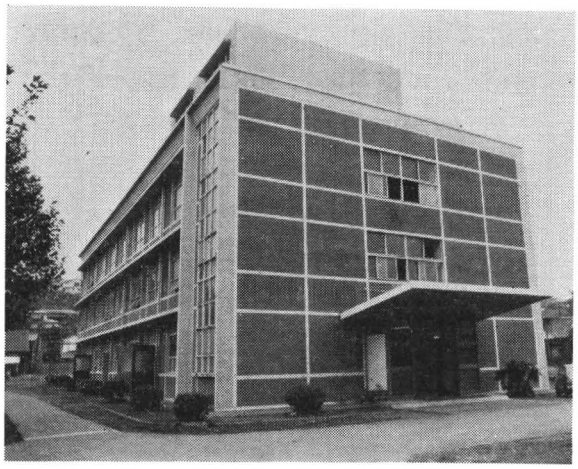
大正15.3	東京帝国大学文学部卒
昭和 3.6	東京帝国大学経済学部卒
〃 3.7.1〜〃 12.3.31	私立中央大学教授嘱託
〃 11.3.31	横浜高等商業学校講師嘱託
〃 12.3.31	横浜高等商業学校教授
〃 24.6.30	横浜国立大学教授経済学部
昭和30.4.21〜〃 34.3.31	横浜国立大学経済学部長
〃 34.4.1〜〃 40.4.1	横浜国立大学長
〃 40.4.1〜〃 43.3.31	横浜国立大学教授経済学部
〃 43.4.1	停年により退職 横浜国立大学名誉教授

26. 工学部長に大岡　実教授就任

昭和34年4月1日，建築学科教授大岡　実工学博士は，第7代工学部長に就任した．同博士は建築歴史学を専攻し，斯界の第一人者である．略歴は次の通りで，その後昭和36年3月31日に併任を解かれ，41年4月1日付けで停年退職した．

大岡　実（おおおか・みのる）工学博士　略歴

大正15.3	東京帝国大学工学部建築学科卒業
昭和2.4.26〜〃 27.6.5	文部省勤務
〃 27.6.16	横浜国立大学教授工学部
昭和34.41〜〃 36.3.31	横浜国立大学工学部長
〃 41.4.1	停年退職



金属工学科実験研究室

工業教員養成所標札

27. 工学部長に岩崎高雄教授就任

昭和36年４月１日，応用化学科教授岩崎高雄工学博士は第８代工学部長に就任した．

岩崎高雄（いわさき・たかお）工学博士　略歴

大正12.3	東北帝国大学工学部化学工学科卒業	昭和34.2.1	横浜国立大学教授工学部
〃 12.4.1～昭和3.11.30	東北帝国大学工学部副手・嘱託	〃 36.4.1～〃 39.3.31	横浜国立大学工学部長
		〃 39.4.1～〃 41.3.31	横浜国立大学工業教員養成所長
昭和3.12.1～〃 34.1.31	三井鉱山ＫＫ．三井化学ＫＫ．勤務	〃 41.3.31	辞職

28. 金属工学科実験研究室完成

昭和36年３月31日，金属工学科実験研究室が完成した．これは鉄筋コンクリート造３階建，延616坪（2,038 m²）で，施設課と建築学科との共同設計であった．

29. 横浜国立大学工業教員養成所開設から廃止まで

昭和36年５月横浜国立大学工業教員養成所が開設された．

わが国産業界の発展にともない，高等学校における工業教育の拡充が必要となったので，36年５月19日国立工業教員養成所の設置等に関する臨時措置法（法律第87号）が制定公布され，同日付けで，本学を含む国立９大学に工業教員養成所が設置されたものである．

本学の工業教員養成所は工学部の敷地内に機械工学科（入学定員40名），建築学科（入学定員40名）の２学科がおかれた．修業年限は３年であった．初代所長に工学部長岩崎高雄が併任され，工学部機械工学科から助教授山野健郎，建築学科から講師林豪蔵が，それぞれ専任教授として配置替えとなり，機械工学科の教授中村康治，建築学科の教授大岡実，同佐藤鑑は，それぞれ併任された．

岩崎所長は39年３月31日付けをもって工学部を停年退官したので，39年４月１日，当工業教員

養成所の専任所長となり，41年３月31日退官，同４月１日付けで林豪蔵が２代所長となった．

なお当工業教員養成所は44年４月１日をもって国立学校設置法の一部を改正する法律第３号により廃止された．よって林所長は44年３月31日付けで退官し，一部教官は工学部に配置替えとなり，他は転出あるいは退官した．

この時３年の学生１名が卒業延期となったので，廃止にともなう臨時措置* として，工学部長田口武一が所長を併任，工学部教官が養成所の教官を併任し，昭和45年３月この学生が卒業と共に実質的に廃止となった．なおその建物設備等は大部分工学部に移管された．

（注） 国立工業教員養成所は，昭和44年３月31日に当該養成所に在学する者がある時は，第３条の規定にかかわらず，その者が当該養成所に在学しなくなる日までの間，存続するものとする．（国立工業教員養成所の存続に関する経過措置）

横浜国立大学　工業教員養成所卒業生数

年＼科	機　械	建　築	計	年＼科	機　械	建　築	計
昭39	32	24	56	昭43	27	20	47
40	31	23	54	44	23	27	50
41	27	21	48	45	1	0	1
42	22	28	50	合計	163	143	306

煙洲先生88歳を迎う

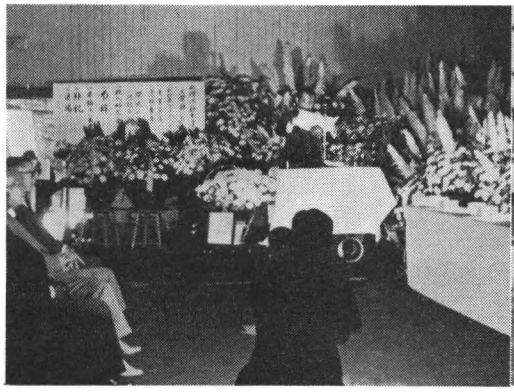
30.　煙洲鈴木達治　米寿祝賀会

昭和22年横浜高工初代校長鈴木達治は77歳を迎え，なお矍鑠(かくしゃく)としていた．門下生一同は喜寿の祝いを盛大にしたいと申し出たが先生いわく「77位で祝って貰いたくない，88にでもなったら盛大にやってくれ」と，その真意はどうせ88までは生きられないだろうから盛大にやってくれと言っておいても皆に迷惑はかけまいとのことであった．

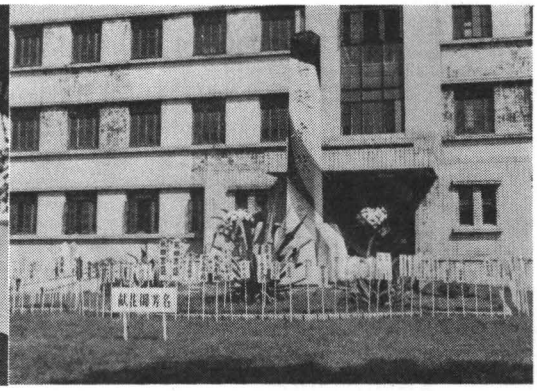
昭和33年，先生は元気で88歳を迎えた．

横浜工業会理事会で米寿祝賀会の計画が議題に上り，三位一体を標榜（ひょうぼう）してきた横浜高等工業学校（現横浜国立大学工学部）横浜工業専修学校（現横浜市立横浜工業高等学校）神奈川県立商工実習学校（現神奈川県立商工高等学校）の３校同窓会でこの祝賀会を主催することとなった．なお後に，東京高等工業学校（蔵前）門下生有志一同がこれに賛同した．

記念事業として「煙洲残筆」の出版，記念品の贈呈等５つが計画実行された．



鈴木達治先生の学部葬



同左

祝賀会は33年7月5日午後1時より3時まで県立音楽堂で催され，参加者450名に達した．

つづいて祝宴はホテルニューグランドで午後5時より行なわれ，参加者600名に達し盛会であった．席上，来賓として公私ともに古くから親交のあったニューグランド会長野村洋三89翁の力のこもった祝辞に一同大きな感銘を与えられた．

31. 煙洲鈴木達治　逝く

昭和36年8月29日午前5時26分，元横浜高等工業学校長 煙洲鈴木達治は91歳の天寿を全うして眠るがごとく逝(ゆ)く．

葬儀は翌30日．喪主長男博人（昭和28年応化卒），菅要助（電化大正13年卒）葬儀委員長となり，六ツ川の自宅で行なわれた．午前10時から告別式，ひきつづき午前11時出棺，棺（ひつぎ）は冨山二代校長，門下生の阿部滋弘，菅　要助，山田　功（電化大正13年卒）矢田部庄栄（応化昭和2年卒）大輪　勇（電化昭和4年卒）の肩にのせられて，昭和4年から30年間通いなれた坂道を下りて根岸の火葬場へ運ばれ，荼毗（だび）に付された．

越えて9月2日，工学部葬がなつかしの工学部講堂で執行された．遺骨は小汀浩一郎（機械昭和15年卒）が六ツ川まで迎えに行った．神奈川大学学長本田吉盛，横浜工業会理事長山口辰男（応化大正15年卒）神奈川県立商工高等学校同窓会長大須賀与喜三等の弔辞があった．

学部葬の後，遺骨は日野の墓地に葬られた．この日野の墓地は生前の昭和10年に作られてあったもので，徳富蘇峰筆「煙洲鈴木達治之墓」と刻まれており，中村順平指導のもとに当時の建築学科の生徒によって設計されたものであった．

煙洲会について

昭和14年6月29日広部俊十郎（電化1期）菅要助（電化2期）らが中心になって川崎在勤の卒業生が10数人集まり，恩師である煙洲鈴木達治を招き夕食を共にしながら話を聞く会を催した．これが煙洲会の始まりで，この会合は以後毎月例会が開かれ時局，教育，社会，歴史，文学等々にわたり恩師の話を中心に出席者が互いに談論風発した．戦時中も一，二度休会しただけで，昭和36年8月煙洲翁の亡くなる2月前までつづけられた．最後は第219回であった．実に満22年継

続したこととなる．なおこの会は翁の死後も翁の相互啓発の精神を生かし，嗣子博人を迎えて現在までつづけられている．まことに珍しいさわやかな会といわねばならぬ．初代幹事阿部元吾（電化昭和12年卒）2代幹事平田義雄（応化大正15年卒）3代幹事小汀浩一郎（機械昭和11年卒）4代現幹事村松四郎（電化昭和18年卒）である．

32. 第二，第三寮閉鎖問題

昭和37年10月12日岩崎工学部長は長島事務局長より次のような文書を受取った．

〔建物の耐力度調査の結果について〕

木造建物の耐力度調査の結果，貴部局管理にかかわる下記寄宿舎については別表のとおりとなりました．5,000点以下は老朽危険建物になりますので今後の寄宿舎管理に考慮せられるようお願いします．

記

大岡寄宿舎（第二寮）　155坪　4142点
井土ヶ谷寄宿舎（第三寮）92坪　4329点

ちなみに第二寮は大正13年に建築され，第三寮は少しく後，横浜高工が生徒用寄宿舎として買収したもので，高工，工専の期間を通じて使用され，横浜国立大学工学部に引継がれたもので，長年の間，在学生に親しまれ，また卒業生の思い出も深い建物であった．しかし，両寮とも建築後すでに40年近く経過して老朽著しく，ことに第二寮は2階建ての土台が腐朽してかなり危険な状態にあることは以前より当局者の頭痛の種であった．

そこで学部長は工学部補導委員長を呼んでこの旨を伝え，補導委員会においてその対策を協議するよう要請した．委員長は所管部局から詳細な事情を聴取した後，同年12月5日補導委員会が開催された．この席上，事務当局による建物調査の内容の説明があった後，応急補修による耐力度増強の意見も出たが，台風，地震等の災害，その他で寄宿生の人身に事故が起こった際の大学，特に管理責任者の負ふべき責任問題について強い意見が出て，種々討議の結果，在寮生の安全をまず第一に考慮すべきことが確認され，この事実を一刻も早く寮生に周知させると共に，在寮生を取りあえず他の安全な建物に移転させねばならぬことに意見の一致を見た．これにともなって次のような具体策が採択された．

1. 昭和38年3月末を以て第二寮を閉鎖
2. 第二寮在寮者は第一第三第四の各寮に分散して収容
3. 昭和39年3月末を以て第三寮を閉鎖
4. 在寮者は第一および第四寮に収容
5. これから2年間新規入寮者の募集を停止
6. 昭和39年度予算に新寮建設費を要求しその実現を強力に推進する

12月7日，以上の決定に基づき丸尾補導委員長は各寮の寮長を招き，寮の閉鎖に関する前記の案を示し，実情およびこれまでのいきさつを詳しく説明して寮生の了解と協力を求めたが，寮長はこぞって寮の閉鎖には絶対反対との意向を表明した．ここにおいて委員長は学部長，事務局の担当部課長と数回にわたって懇談を重ね，応急補修によって新寮の実現時期まで寮の閉鎖を延期す

る可能性について検討を求め，具体的に補修経費の算定，予算措置の方法の検討まで行なって討議したが，補修継続の可能性はついに見出すことができなかった．この間寮生側は学生集会を開き，重ねて閉鎖反対を表明し，寮閉鎖問題対策委員会をつくり，あるいは学生自治会（秋山委員長）に働きかけたりして反対運動をくり広げ，学内がやや騒然たるありさまになってきた．これに対し大学側は事務系担当者を含めた大学側関係者と寮生代表と会談を催し，また補導委員全員が各寮を次々訪問して寮生とひざを交えて懇談し，事情の説明と協力の要請を行なったが，寮生側の反対意向は強く議論は終始平行線をたどるのみであった．補導委員会側には，なお補修継続により閉鎖を避ける可能性を求めようとする空気があったので，委員長は学長，学部長および事務局長まで交えてこの可能性について再三にわたり検討をつくしたが，主として予算面の問題から最終的にこれが絶望的であるという結論に到達した．一方工学部長の意向も新寮の建設についてはある程度政府当局への働きかけをすでに行なっており，これについて明るい見通しもあるので，この際既定方針通り寮を閉鎖するのが妥当であるというものであり，また38年２月12日開催の主任会議においても閉鎖以外に方法がないという意見に一致したので，２月22日の補導委員会において，さきに定めた方針に従って第二および第三寮を閉鎖することを最終的に決定した．これに基づいて３月12日教授総会において芹沢副委員長より寮閉鎖の決定について報告がなされた．寮閉鎖に関する公示は掲示とともに寮生個人に対し，工学部長名の書簡の形式で通知を郵送し，また３月12日補導委員が寮生代表と会見してこの旨を伝えた．

このようにして大岡寄宿舎（第二寮）は昭和38年３月31日をもって閉鎖されたが，これにともなう宿舎明け渡しには，当初予想されたような混乱はなく平穏に行なわれた．

すでに記したように第二，第三寮の閉鎖はこれに代わるべき新寮の建設を前提として決定せられたものであり，新寮については建設予定地の選定，建物規模構造についてかなり検討が進んでいたのであるが，諸般の事情からこれが実現をみなかった．この新寮建設の挫折（ざせつ）によって昭和39年３月末に予定されていた第三寮の閉鎖は無期延期となり今日に至っている．

33. 化学工学科の新設

昭和37年４月１日，本学工学部に新たに化学工学科が設置された．なおこのとき従来の化学工業科を応用化学科と改称した．

化学工学科
野手教授

戦後，重化学工業の進展にともない，化工技術者の需要がふえ，昭和34，5年ごろから全国の新設国立大学に化学工学科が設置され始めた．本学工学部では昭和33年に金属工学科が設立され，当時学年進行中であった関係もあって35年になって初めて化学工学科の設置要求を出した．周辺を見回してもすでに静岡大学（33年），新潟大学（35年），群馬大学（36年）に化学工学科が設立されており，京浜工業地帯を控えた横浜国立大学に，化学工学科を設置するのは当然のなりゆきといえる状態であったから，その要求がすぐに認められ37年度に新入生を募集することになった．

化学工学技術者を，どちらかといえば機械に強い化学技術者という方面から求めていた工業界の情勢は，その適任者を得ることがむずかしく，多くの化学工場では機械出身の新社員を要望していた．本学の化学工学科設立者である野手教授は化学を理解した機械，建設技術者こそ我が化学工学科で養成すべきものであることを強調して，新入生の募集は特にこの方面，すなわちプラントの開発，設計，建設および運転の技術者になることを目的とする者をという募集を行なった．この構想・経緯については次の野手教授の文章にくわしい．

第1期生は試験と面接とあわせて厳選し，33名が合格になった．これは40名の定員に対して少ないという苦情が出たが，その当時の募集要項には定員約40名となっており抵触するものではなかった．

発足当初は野手教授，青木助教授，伊藤助手と教室職員1人で機械科の中の部屋住みであった．しかし新入生は，当時は一年間分校に所属して清水ケ丘キャンパスで教育を受けたから，その間に準備をすることができた．建物の設計，什（じゅう）器・器具等の購入計画に追われた多忙な準備期間であったが，夏休みが終わるころ，電気工学科の建物と一緒に建築工事が始まった．その年の秋には河東教授が加わり，年度末，すなわち翌年の3月には新築の建物へ入居準備の段取りとなったが，創立者野手教授は停年となり退職した．なお41年4月15日学年進行にともない大学院工学研究科に化学工学専攻が設置された．

化学工学科の新設を企図した理由とその構想　昭和36年7月　野手悌士　述

前言

この拙文に就ては，既に昨年度（35年）特に事務関係の人々に知って貰う為に，同じ題目に就て述者の率直な考えを書いたのであったが，それを広く学内その他に御頒けして読んで頂くにつれ，化学工学の内容と関係技術者養成の重要性もよく判ると言う声も聞くに至って述者も亦衷心忸怩の感なきを得なかったのである．

そこで本年は当学が化学工学科の新設を再度申請するに当って，幾分加筆し，これを参考資料として申請書類に添える事にし，また未読の方々には参考意見として読んで頂く事にしたのである……．

本文は題目に関し述者が予てから抱懐する構想を率直に且つ赤裸に書いて参考に供する事にした．勿論何処迄も述者個人の見解である事を含まれて，遠慮の無い批判を仰ぎ度いのである．

工業が発展するに連れて工学もそれに添って進歩し且つ分化して行くので，漸次に工学に数えられるものも多くなろうとする傾向がある．このような事は技術と言う実際面が特別の方向に発展する性質に基くものと考えられる．

技術が発展して或る綜合的な領域を形作るようになると，本来は分析的な科学や工学と言う学問の間にも便宜上の統合が行われて，大学と言う所ではこれが学科の新設になって現われて来る．そうなると，その技術の綜合領域に相応しいような

名称がその学科に付けられ，要求される技術者を特定方向に育成する負担を荷う事になる…….

化学工学に就ても全く同様で，各種類の生産工業（これには必しも化学工業に限る訳ではない）の広い範囲に化学工学の技術は活用されて来たのだが，取り分け機械部門と応用化学部門とに依存して来た工業が近年急速に発展して来た事は否み得ない事実である．その結果既存の機械工学部門と応用化学部門とでは充分手の行きとどき兼ねる処，換言すると，この両者の中間にある知識と素養とを持つ人材が技術界から要望されるようになった訳で，この事実は近年の事では無いのである．既に20余年前の事になるが東大第二工学部が設立された当時，この目的に添う後述する真に建設技術者たり得る化学工学技術者養成の為の化学工学の独立講座が設置されたが，大戦と言う国を挙げての大問題は遂にこの事を阻み，理想的学科型態も実現せずして第二工学部と運命を共にした経緯がある…….

化学工学と言うものが，どんな内容で如何なる目的を持つものであるかを知るには，最も発達して居る米国の化学工学々会の次の定義を知る事が手取り早い．

「化学工学とは材料の化学的又は物理的変化を持つ種々の生産工程を発展させる事と，この工程を実際に適用する事に就ての工学の一部門であって，これ等の各生産工程は必ず幾つかの単位になる化学変化の工程と物理変化の工程との二つの対等の系列に分けられるものである．

化学工学技術者が担当する仕事は主に装置と工場施設（Plants）に関する設計と建設並びにその運用とであって，それ等の内に単位になる化学変化と物理変化の各工程が適用されるのである．

化学工学の基礎になる主なる科学は物理学，化学，数学であって，経済学はその案内役になる」

この定義から判るように，化学工学技術者が負わねばならない任務は施設装置の設計建設運用等であって…….

化学工学が応用化学（特に混同を避ける為に化学工業の名称を用いない）の一部門として発展したこととその功績とは世人の等しく認めねばならない事である．併し乍ら，その技術界に於ける実態は化学工学技術者に依って行わる可き仕事が本邦では主に機械技術者の担当に依存して来た事実を否み得ないのであって，本邦に於けるプラントの設計建設の実質点弱点も玆にあった事を断言して憚らないのである……．

化学工学技術者（Chemical Engineers）は化学に理解ある所の今日の機械工学技術者（Mechanical Engineers）の如き施設の具現化の能力を持つ人材である事を必要とし，生産関係の装置や施設の設計者であり，建設を担当し得る人物で且つその運用の責任的位置につき得る人材でなければならないのである．

化学工学技術者は所謂Plant engineerであり，且つPlantの建設技術者(Construction engineer)であって，他のものではないのである．Plantと言うものは，或る特定のものを生産する工場施設の事であって，種々の製作品を出す機械工場等はPlantとは一般に言わない．生産されるものは必ずしも品物に限らない．Power PlantやBoiler Plantのようにエネルギーや蒸気の供給源になる場合もあるし，変った所ではRefrigeration Plant（冷凍施設）やAir Conditioning Plant（空気調和施設，煖冷房施設の如きもの）の如く，低温度を作ったり，又特定の温度環境を作ったりする施設もある．これ等は従来機械工学技術者に依って設計建設，運用が担当されて来たし，今後もそうであるに相違ない筈である，併しこれ等のものが所謂化学工業や一般産業の附帯施設となって直接他の或る製品を製造する過程に融合して生産目的の一端を荷うような場合には，一般にはやや，種類を異にするもので，化学工学技術者に依って設計，建設，運用等が担当される事になって然る可きである．併しこの場合でも何も厳密な境界がある訳ではなく，はっきりした境界をつける必要もないのである．

化学工業に属する事業は枚挙に遑ないが，その施設は殆んど大半がPlantであって，大きいPlantは小さい幾つかのPlantを持つ事もある．例えば精油工場施設（Refinery plant）は元々が蒸留施設（Distillation plant）が基本だが各種の分解装置（Cracking plant）や改質装置（Reforming plant）も附帯するし，Praffinの結晶分離の為には冷凍装置（Refrigeration plant）も必要とし，原油の種類に依っては特別の滑油製造施設（Lubrication Oil plant）も必要になって，これ等が附設集合して生産品が出されるのである．

広く見て窒素工業（Nitrogen Industry）の内でも特に硫安の合成施設（Synthetic plant）は

大きい事業だし，曹達灰工業施設（Soda ash plant）Rayon その他特に最近発達した合成繊維工業（Synthetic Fiber Industries）の各々の施設燃料瓦斯工業（Fuel Gas Industries）から最近は天然瓦斯やアセチレンの合成工業に亘る工業瓦斯工業（Industrial Gas Industries）があり……ペニシリンからストレプトマイシンその他迄を作る所の醱酵工業（Fermentation Industries）又製紙及びパルプの工業（Paper and Pulp Industries）は包装紙や新聞紙ばかりでなく，繊維（Rayon や stable fiber 等）の原料を作って呉れる．天然及合成ゴム工業(Natural and Synthetic Rubber Industries）や各種の樹脂の塑剤工業（Plastic Industries）は我々の生活環境を変貌しようとして居り，本邦では伝統的な陶磁工業（Ceramic Industries）から硝子工業（Glass Industries）も重要工業である．戦後の国造りには大切な役割を演じて居るものにセメント工業（Cement Industries）があり，食料に関聯して大きい所を拾うと製粉工業(Flour Industries)や精糖及澱紛工業（Sugar and Sterch Industries）がある．アルミニュームや金属マグネシウムの生産は今後の本邦でも重要だがその電解やその他カーバイド炉と各種の Ferro alloy の製造にこれも数万 KVA を使う Smelting furnace を持つ所の各種の電気化学関係工業（Electro Chemical Industries）その他写真工業（Photographic Industries）塗料染料顔料に関する工業から製菓製薬の各工業等大別しただけでも数多いこれ等の化学工業は施設として Plant ならざるはないのである．

これ等の Plant の内，大きいものは小さい plants に分けられる訳だが，この Plant の内容が Unit processes, Unit operation の名で呼ばれる所の単位に要約した化学変化と物理変化の各工程に分析されて化学工学で述べられる訳である…….

……学科目としての化学工学に就て次の点を予め了解しておいて貰う必要がある．それは別に添附した化学工学の緒論にも述べておいたように，工業の複雑多岐な工程の内から単位の物理変化に属する作業を抽出して化学工学の Unit operations を分類したのは Arther D. Little 氏（M. I.T. 報告 1913）の功績であって随分古い事になる訳だが，それ以来化学工学と言えば，この単位の物理的変化の操作(Unit physical operations, 簡単に Unit Operations と言う）だけを対象にした狭義の内容のものであって，単位の化学的変化の操作（Unit chemial processes, 簡単に Unit Operations と呼ぶ）が含まれて居ない事である…….

この Unit chemical processes は米国の大学でも一つの纏った講義にして居る処もあり，依然として有機無機の講義内で講述して居る所もあって，両々相半ばして居る有様だが，当学でも，纏った講義になって居ないから，機械の学生で卒業後数多く化学工業方面に就職し，将来化学工学技術者になるであろう人には聴講の機会が無い．これを纏った講義にして是非聞かせて置く必要は多年痛感して来た処なのである．現在の状態は聞かせようにも聞かせ得ない有様になって居るのである．この事は化学工学を一つの学科として創設しようとした一つの理由でもある．

要之，化学工学技術者と言うものは Plant engineer であってそれに相応しい技術的教養を持たねばならない．さりとて，それは決して或る特定の化学工業固有の技術ではないのである．数種の Plant の建設の経験を積むと一応の技術的教養（知識と経験とから生れる技術的力倆）を持つ事になり，全然未知の Plant の建設も結構独創的にやってのけられるものである．この事は丁度学的教養を積む事で新奇の学的問題を独創的に解決出来るようになるのと全く同様である．

……Know How と言う言葉は多くは Plant design に関する事で常に有償を意味するが，著書や報文では知る事の出来ない技術的教養それ自体であり，これなくして Plant を求めるのは木に縁り魚を求めるより六ケ敷い事だ．本邦に今後本邦独自の原子炉が出来る場合にはそれは決して大学と言う所からではなく，必ず関係の会社が建設して出来る事になる筈だ．学校では真の Plant engineer を育成出来ないからである．育成出来るのはたゞその卵だけの話である．米国での実状が何辺にあるかを見ればよく解る事で，人は簡単に科学技術と言うが科学と技術とは全く範疇の異なる世界である事が一般に知られて居ないようである．原子炉に限らず凡ての Plant は技術即ち技術的教養の結集から生れるものであるから科学のように個人的名誉は決して現われないものである．それが又本筋でもあって，これを逸脱するの

は技術者の所謂むさぼりになる…….

…… Plantの設計監督の立場にある者は常に施設の計画者側の立場を取らなければならないものであって，これは必ずしも，Consultant engineerであるを要しないが，少く共 Plant design が出来ると共に Construction design の引ける Construction engineer である事を要する．丁度建築にすると Shop design が出来る Shop engineer のようなものである…….

実際問題を顧みて Plant enginees の欠けて居る所では施設の計画がどのように行われどのようにして施設の建設が行われて来ただろう．多くの場合に計画者は Flow sheet を手にして先ず広く設計（Design）と仕様（Specifications）とが蒐集され，この内から計画者の選択による自己の設計と仕様書とが作成される事になり，これが反転して Maker なり建設業者なりに出されて見積られ，建設が具体化される．Flow sheet も明確でないような新しい施設になると Know How を払って Plan が買いとられる．これには Licence や Royalty を含む場合もあり然らざる場合もあり，主要機器の設計製作を含む場合もあり然らざる場合もあって雑多だが，何れの場合でも共通して技術のトンネルがほられる事は事実である．凡ての Risk は Guarantee の蔭に蔽われるから計画者は恬然として建設者で居る事が出来る，と言う次第になる…….

……新しい技術が勃興する事になるとその関係装置や施設も亦化学工学で論じられねばならない事になる．例えば原子力工学（Nuclear Engineering）等も最近は Unit operation の内に入れられるようになって来たのである．

化学工学技術者は化学工学特有の特殊の機器の設計が出来，生産施設の planning が出来るのみでなく，機械工業にて担当製作される各種の装置を選択採用して Plant に綜合する事が出来る建設技術者であって，要するに装置や施設に就て明確な Specification が書ける技術者でなければならない．Specification と言うものは装置なり全施設なりの詳細の設計が頭に這入って居るのでなければ書けないものであって，装置も施設もこれなくして設計図だけで出来るものではないのである．又その関係領域は広く一般の産業に渉るものであって化学工学は単に化学工業関係領域に限られた工学でない事も知っておいて貰う必要がある．

これに対し応用化学（又は工業化学）出身の技術者が担当する実際技術の領域は，化学工業に於ける Flow sheet を作る事，換言すると Process design 迄の大切な基本部分であって，如何なる原料を使用し如何なる生産品を出すかの基礎資料を作る事であって，これを正しい Material Balance と Energy Balance の Balance sheet も必要であり，施設の建設が一度び済んで生産が行われるようになった後は Process の改善や製品の向上に対し研究を進める事が任務になる．

これに対し化学工学技術者は応用化学技術者が作った Flow sheet や Balance sheet を基礎にして具体的に機器を設計選択し，工場建設迄を担当し其の後は施設の改善補修及び運用等が任務になる．

この点に応用化学と化学工学との人材養成の方針と講述すべき工学の内容とに就て概略の一線を画しておく点があると思う．勿論この両者の境は画然とすべきものではなく，化学工学技術者も基本となる Process design に関する深い理解を持ち Balance sheet を検討出来，場合によっては設計返上の責任を択り得るだけの力倆を持たねばならないし，応用化学専攻の技術者も具現化の難易や経済的成果を度外視した Process design が成功する筈のものではないのであるから，特に化学工学に関する理解を持つ必要がある訳である…….

学課目としての化学工学の内容は上記の定義にも見られたように，作業の単位になる化学反応と，物理的操作とを学生に理解させる事であり，他面に，学科としての化学工学はこれ等を具体的には Plant の設計建設，運用に結びつけ，将来 Plant engineer として技術的力倆を発揮出来る人材の養成に目的が置かる可きものと思う．併し乍ら化学工学という工学も単に Unit processes や Unit operation を講述する事だけでは工学としての教育にはならないと思う．これ等の工学で解析される単位の反応や操作を綜合して本邦に必要である工業を論ずる所に学問としての締めくくりがあると思う．

科学には普遍性があるが，これに反して技術には普遍性が無い．教育も亦技術と同様に普遍性が無いのは人間のする事だからである．それ故化学工学の締めくくりとして論ぜらる可き工業も本邦

の将来を考えて選択されねばならないし，本邦には本邦独自の化学工学教育があって然る可きものと考える．

当学では他の何れの工科系大学にも先鞭して“Engineering Sciences”を採用した．教育は学校の専業でないと言う理念に立脚し，Engineering Sciences が技術界に真に将来役立つ人材の養成には最適の手段と考えたからである．

当学が新設を企図した化学工学の学科も亦“Engineering Sciences”の基盤の上に据えられるものであって，Engineering Sciences の中に新なる学問として新設された移動及び速度論（Transfer and Rate Processes）は外ならぬ化学工学の基礎になるものである．

数年前迄，当学の機械工学科出身者の50乃至60％は化学工学関係工場に就職し，機械工業方面に就職する者が却って少なかったのであるが，其の後は機械関係工業の求人会社数は増々増大し，機械科卒業生1名当りの全求人会社数は30社の多きに及び，化学工学関係会社に充当し得る数は漸次に減少して来た．昭和35年度卒業生に於ては38％，昭和36年度卒業生に就ては30％に減じつつある．これに対し要望する化学工学関係会社数は益々増加の一途にある．

斯る事情下にあって，猶お且つ優秀な多数の入学希望学生数（約30倍）を持つ当学が，この機会に於て担当すべき事柄は何であるだろうか？

述者等は上述の構想の下に当学に化学工学々科を新設して工業界広くは産業界の要望に答える事が教育担当の当事者として最大緊急の責務なるを感じ，玆に多数関係教授の支援の下に立案した訳である……．

最後に化学工学が漸次に応用化学から分離して独立して行くこの実状は両者が全く範疇を異にする内容のものである事に依る自然の趨勢であって外に理由はない筈である．化学工学が応用化学の内容の一部であるように考えるのは時代錯誤である．自然というものは決して無理のある方向には動かない．述者は只管に化学工学のある可き内容と方向とを本当に知って貰いたい為に本文を書いた．（抄）

化学工学科　学科目（昭和37年4月1日）

学科名	学科目	授業科目	単位数 必修	単位数 選択
化学工学科		一般力学		3
		材料力学		3
		計測		1.5
		電気工学原論		3
		工学基礎実験 I		1
		工学基礎実験 II		1
	化学工学基礎	移動及び速度論		6
		流体力学		1.5
		熱力学		3
		化学工学熱力学		3
		化学反応速度論		1.5
		卒業研究	10	
	化学工学用装置	単位操作 I（拡散過程）		3
		化学工業単位装置設計		6
		反応工学(反応装置設計)	1.5	
		化学工学実験		2
		卒業研究	10	
	プラント設計 化学工業装置制御	単位操作 II（機械的分離混合） 工業力学(機構学，機械力学)	3	4.5

		機械設計		3
		流体機械	3	
		化学工学演習		2
		化学機械製図		4
		プロセス制御	3	
		卒業研究	10	
	単位化学変化 物理化学	化学工業Ⅰ（個々のユニットプロセス）		3
		化学工業Ⅱ		6
		単位反応	3	
		生産施設設計Ⅰ	1.5	
		生産施設設計Ⅱ	1.5	
		物理化学	4.5	
		物理化学演習	1.5	
		物理化学実験	2	
化		卒業研究	10	
学	学科目外	原子力工学	3	
		工業材料		3
工		化学工学用材料		1.5
		材料力学（化学工学用）		1.5
学		材料力学演習	1.5	
		材料力学特論	1.5	
科		機械工作Ⅰ	1.5	
		機械工作Ⅱ	3	
		原動機概論	3	
		有機化学（高分子を含む）	4.5	
		計装	1.5	
		品質管理	1.5	
		工業経営	1.5	
		工場建築	1.5	
		電気工学演習	2	
		機器分析	1.5	
		機器分析実験	1	
		応用物理実験	1	
		図学		3
		非破壊検査法	1.5	
		機械工場実習		1

野手悌士（のて・もとお）　工学博士　略歴

昭和2.3　東京帝国大学工学部機械科卒業

〃 2.10～〃 23.7　南満洲鉄道株式会社勤務

昭和25.4.1～〃 38.3.31 横浜国立大学教授工学部

〃 38.4.1～〃 46.3.31 高知工業高等専門学校長

34.　工業教員養成所のいっせい授業放棄

昭和37年4月に全国工教学友会が結成され，工業教員養成所制度改善に関する統一行動をとる動きが示された．その当時すでに本学では授業放棄の気配もあったのがこの紛争のそもそもの発端であった．

昭和40年6月29日には，全国工教学生による「工業教員養成所改革要求デモ」が東京で行なわれた．その後，本学工教学生自治会委員長等が選出され，他学部自治会の応援も得て，9月29日から10月1日の間には，所長と何回かの話合いもあったが，折合いがつかず，ついに10月2日には養成所学生大会で，いわゆる「無期限スト」を決議し，京大，東工大工教の支援を得て，完全なスト態勢に入った．

その際の学生側要求事項は

① 工教制度即時廃止

② 工学部無条件編入

③ 来年度新入生の募集を止めよ

④ 工学部内に工業教育講座を設ける

⑤ 単科大学反対，工業教員養成学部反対

その他就職，身分保証，教育内容等であった．

10月4日には，機械，建築の両学科玄関にバリケードを構築し，工学部正門，名教自然碑近くに「無期限スト決行中」の大看板を出したりした．その後，学長との会談の計画があったが，学生側の約束不履行のため実施されず，工学部会議室の不法占拠，所長軟禁等の事態もあった．

しかし，期末試験の延期，来春の卒業，進級が不可能になる等の事態を生ずる旨の警告，保証人あての学生のスト解除方の協力要望，全国所長会議の結果の説明，学生の要求に対する養成所教官の来年度学生募集方法，編入学，身分保証，就職についての見解発表等を実施し，10月31日に無期限ストは解除され，11月6日より後期の授業が開始された．

また，11月15日には無期停学を含む11名の懲戒処分が発表された．

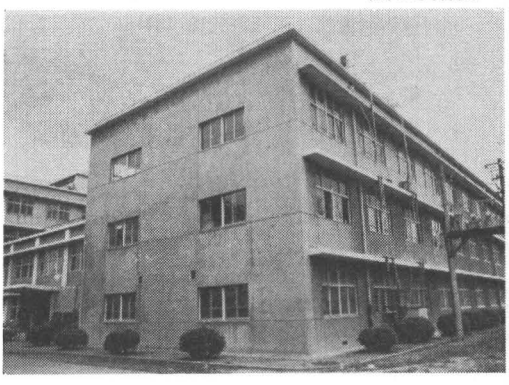
このときの工教の無期限ストは，後に発生する昭和44年2月の全学の無期限スト，バリケード封鎖の縮小版のようなものであった．

35. 工学部電気工学科，化学工学科実験研究室完成

昭和38年3月26日，工学部電気工学科と化学工学科の実験研究室が完成した．この両科の建物は，正面出入口を共用し，左翼が電気工学科．右翼が化学工学科となっており，それぞれ鉄筋コ

電気工学科新館

化学工学科新館



ンクリート造4階建て（電気）と3階建て（化工）となって，中央共用部分付近が2階建てとなり延べ1,455坪（4,800 m²）電気工学2,841 m²，化学工学1,959 m²である．電気工学科は昭和24年開学と同時に開設されながら，木造2階建ての実験室を作ったりした時期を経て，ようやく本建築が完成したものである．

36. 大学院工学研究科設置

昭和38年，本学工学部に念願の大学院工学研究科設置が実現した．ここに至るまでには，初代冨山学長時代から，歴代学長ならびに関係教職員のなみなみならぬ努力があった．

冨山初代学長は，工専から大学工学部に移行する際，大学人事委員会を設け，教授陣の充実をはかり，旧制大学に劣らない大学たらしめることを目ざした．

昭和26，27年ごろ文部当局は，旧制大学より移行した大学に限り大学院を付置するという原則を立てた．これに対し冨山学長は，新制と旧制大学とを区別すべきではない，そんな区別をすれば新制大学の真の発達充実は期し得ない．新制といえども真に価値ありと認められるものは逐次大学院を設置すべきであると当局に強く進言した（冨山学長退任の辞参照）．しかしながら，この主張は認められず，昭和28年4月，旧制大学の国立12（博士，修士コースとも），公立4（3校は修士コースのみ），私立6（修士コースのみ）の計22校に大学院が開設認可となった．

本学部では以上のように冨山初代学長以来大学院を設置する構想を有しており，学部内に大学院設置委員会を作り，教官人事および設備の充実を図ってきた．その当時本学工学部が大学院設置案として作成準備したものは大要次のごとくで，特に教授陣の充実ぶりを示していた．

大学院設置案　横浜国立大学工学研究科　昭和27年8月（抜粋）

1. 目的及び使命

修士課程は本大学の目的使命に則り学部に於ける一般的並びに専門的教養の基礎の上に専門の学術を研究し精深なる学識と研究能力とを養い以て学術文化の発展に貢献することを目的とする．

博士課程は本大学の目的使命に則り高度にして専門的な学術の理論及び応用を研究教授しその深奥を極め文化の進展に寄与すると共に専攻分野に関し研究を指導する能力を養うことを目的とする．

2. 名　　称　横浜国立大学大学院
3. 位　　置　横浜市南区大岡町
4. 校　　地　総坪数　100,342坪（工学 34,094坪）
5. 校舎研究所　総坪数　18,431坪（工学 7,469坪）
6. 図　　書　略
7. 組　　織　略
8. 研究科専門課程別学科目概要（以下略）

以上のように大学移行当時より大学院実現のため，着々と準備を重ねてきたが，一方神戸大学工学部，広島大学工学部などと連携して文部省はじめ大蔵省その他に働きかけを行なった．

こうして35年ごろから当局の間でもこの機運がようやく高まり，38年に至りついに本大学と広島大学に工学研究科修士課程が設置されるにいたった．ついで翌39年には神戸，山形，群馬，静

岡，徳島の５大学と名古屋工大に，昭和40年には金沢大ほか10大学に工学研究科が設置された．

なお博士課程の設置については，学部内に博士課程設置準備委員会を置き，学外では静岡，神戸，広島各大学工学部および名古屋工大と共に連携をとりあってその実現に努力中である．

大学院修士課程の定員は設置当初の昭和38年度は58名であったが45年度は82名となっている．

大学院学生定員　（45年度）

区	分	入学定員	区	分	入学定員
工学研究科	機械工学専攻	14		電気工学専攻	16
	応用化学専攻	8		金属工学専攻	8
	電気化学専攻	8		化学工学専攻	8
	建築学専攻	10			
	造船工学専攻	10	合	計	82

37. 横浜国立大学大学院学則制定，同委員会規則制定

横浜国立大学大学院学則　（昭和38年６月17日制定）

第１章　総　則

（目的）

第１条　大学院は，学術の理論および応用を教授研究し，その深奥を究めて文化の進展に寄与することを目的とする．

（研究科）

第２条　大学院に次の研究科を置く．

工学研究科

第３条　工学研究科（以下「研究科」という．）に修士課程を置く．

２　修士課程は学部において履修した一般ならびに専門教育を基礎とし，広い視野に立って専攻分野を研究し，精深な学識と研究能力を養うものとする．

（専攻課程）

第４条　研究科に次の専攻課程を置く．

機械工学専攻
応用化学専攻
電気化学専攻
建築学専攻
造船工学専攻
電気工学専攻
金属工学専攻

（学生定員）

第５条　学生定員は別表のとおりとする．

（修学年限）

第６条　大学院の修業年限は２年とする．ただし，４年を超えて在学することはできない．

（学年・学期・休業）

第７条　大学院の学年，学期，休業については横浜国立大学学則（以下「大学学則」という．）の規定を準用する．

第２章　授業科目・単位および履修方法

（授業科目・単位）

第８条　研究科に設ける授業科目および単位数等は別に定める．

（履修方法）

第９条　学生は，研究科の定めるところにより，それぞれの専攻課程における所要の授業科目について，所定の単位を取得し，且つ学位論文を提出してその審査ならびに最終試験に合格しなければならない．

第３章　課程の修了および学位の授与

（単位修得認定）

第10条　履修単位の認定は筆記または口頭試験あるいは研究報告により行う．

（学位）

第11条　修士課程を修了した者には次の学位を授与する．

工学修士

第４章　入学・退学・転学および休学

（入学資格）

第12条　大学院に入学することのできる者は次の

各号の一に該当するものでなければならない.

1. 学校教育法第52条に定める大学卒業者
2. 文部大臣の指定した者
3. 外国において学校教育における16年の課程を修了した者

(入学・退学・再入学・編入学・転学および休学)

第13条 入学，退学，再入学，編入学，転学および休学等については大学学則の規定を準用する．ただし，休学期間は通計2年を超えることはできない．

第5章 除籍および懲戒

(除籍および懲戒)

第14条 除籍，懲戒については大学学則の規定を準用する．

第6章 検定料・入学料および授業料

(検定料)

第15条 入学を志願する者の検定料は1,500円とする．

(入学料)

第16条 入学を許可された者の入学料は1,500円とする．

(授業料)

第17条 授業料は年額8,000円とする．

第18条 検定料，入学料，授業料の納付ならびに徴収猶予，免除については大学学則の規定を準用する．

第7章 聴講生および外国人特別学生

(聴講生および外国人特別学生)

第19条 大学院に，聴講生および外国人特別学生の制度を置く．

2 聴講生および外国人特別学生については大学学則の規定を準用する．ただし，聴講生の授業料は1単位につき600円とする．

第8章 教員組織・運営組織

(教員組織)

第20条 大学院の授業ならびに研究指導は教授が担当する．ただし，必要があるときは，助教授または講師にこれを分担させることができる．

(研究科長)

第21条 研究科に研究科長を置き，次の者をもってこれにあてる．

工学研究科長 工学部長

(委員会)

第22条 大学院の管理運営のため，大学院委員会および研究科委員会を置く．

2 前項の委員会の組織，権限等については別に定める．

付 則

この学則は，昭和38年4月1日から適用する．

(別表) 学生定員

大学院

区分		入学定員	総定員
工学研究科	機械工学専攻	10	10
	応用化学専攻	8	8
	電気化学専攻	8	8
	建築学専攻	8	8
	造船工学専攻	8	8
	電気工学専攻	8	8
	金属工学専攻	8	8
合計		58	58

横浜国立大学大学院委員会規程 (昭和38年6月17日制定)

第1条 横浜国立大学大学院学則第22条の規定による大学院委員会(以下「委員会」という.)の組織および運営等は，この規程の定めるところによる．

第2条 委員会は，次の委員をもって組織する．

(1) 学長
(2) 研究科長
(3) 各専攻課程の教授1名

第3条　前条第3号の委員は，研究科委員会の議を経て学長が委嘱する．

第4条　第2条第3号の委員の任期は2年とする．ただし，再任を妨げない．

2　補欠により委嘱された委員の任期は，前任者の残任期間とする．

第5条　委員会は，学長の諮問に応じて次の各号に掲げる事項を審議する．

(1)　大学院に関する重要規則の制定，改廃に関する事項

(2)　学位の認証に関する事項

(3)　その他大学院に関する重要事項

第6条　委員会は，学長が招集し，その議長となる．

2　学長に事故あるときは，研究科長又は委員会において定められた委員がその職務を代行する．

第7条　委員会は，委員の3分の2以上の出席がなければ議事を開くことができない．

2　委員会の議事は，出席委員の過半数をもって決し，可否同数の場合は議長がこれを決する．

第8条　議長は，必要に応じ委員以外の者に出席を求め意見を聞くことができる．

第9条　委員会の事務は，庶務課において処理する．

第10条　この規程に定めるもののほか委員会の議事および運営に関し必要な事項は，委員会において定める．

附　則

この規程は，昭和38年6月17日から施行する．ただし，この規程により最初に委嘱された者の任期は，第4条の規定にかかわらず昭和40年3月31日までとする．

横浜国立大学大学院工学研究科委員会規程（昭和38年6月17日制定）

第1条　横浜国立大学大学院学則第22条の規定による大学院工学研究科委員会（以下「研究科委員会」という．）をおく．

第2条　研究科委員会は，次の委員をもって組織する．

(1)　研究科長

(2)　研究科の授業担当教授

2　研究科委員会において必要があると認めたときは，研究科の授業を分担する助教授および専任講師を構成員に加えることができる．

第3条　研究科委員会は，次の事項を審議する．

(1)　大学院教官の選考に関する事項

(2)　学位論文の審査ならびに最終試験に関する事項

(3)　研究科の学科課程に関する事項

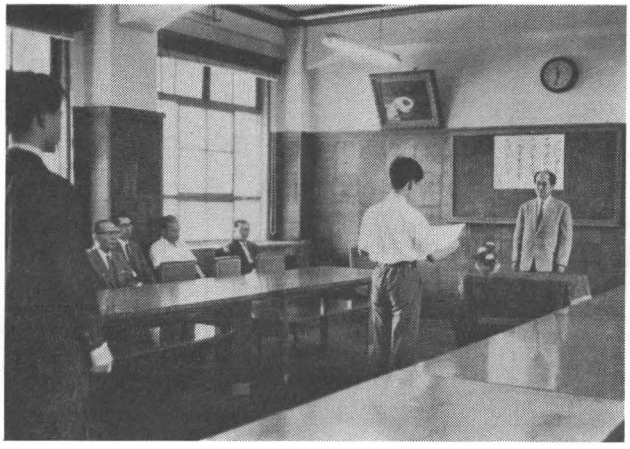
(4)　大学院学生の入学，休学，退学，除籍および懲戒に関する事項

(5)　その他研究科に関する重要な事項

第4条　研究科委員会は，研究科長が招集し，その議長となる．

2　研究科長に事故あるときは，研究科委員会において予め定められた委員がその職務を代行する．

第5条　研究科委員会は，委員の過半数の出席で



大学院工学研究科　第1回入学式

成立するものとし，議事は出席委員の過半数で決し，可否同数の場合は議長が決する．ただし，第3条第1号および第2号の審議については委員会の成立ならびに議決は，それぞれ3分の2以上とする．

2　海外旅行者および休職者は，構成員から除く．

第6条　議長は，必要に応じ委員以外の者の出席を求め意見を聞くことができる．

第7条　研究科委員会の事務は，工学部事務部において処理する．

第8条　この規程に定めるもののほか研究科委員会の議事および運営に関し，必要な事項は研究科委員会が定める．

附　則

この規程は，昭和38年4月1日から適用する．

注　第2条第2項の運用についての了解事項

第3条第3号以下の審議については原則として助教授および専任講師を加える．

38.　大学院第1回入学式挙行

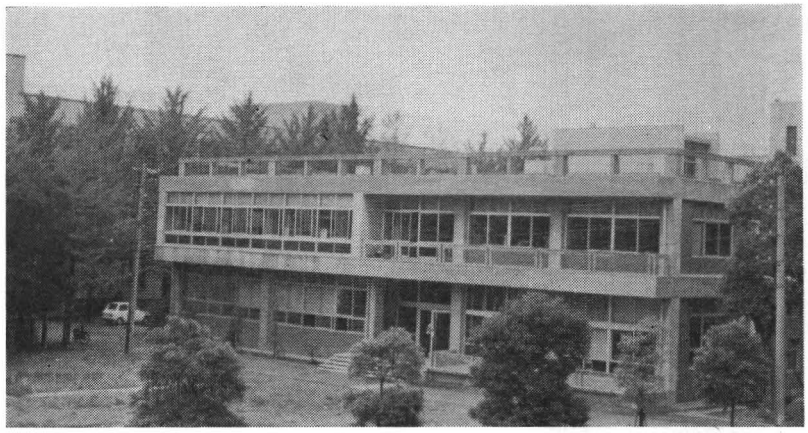
昭和38年6月28日午前11時より工学部第一会議室で大学院第1回入学式が挙行された．式は黒沢学長の式辞，入学生代表の宣誓があって閉式となった．

大学院設置についての思い出　工業分析教授　桃木弘三 (DENKA No. 6)

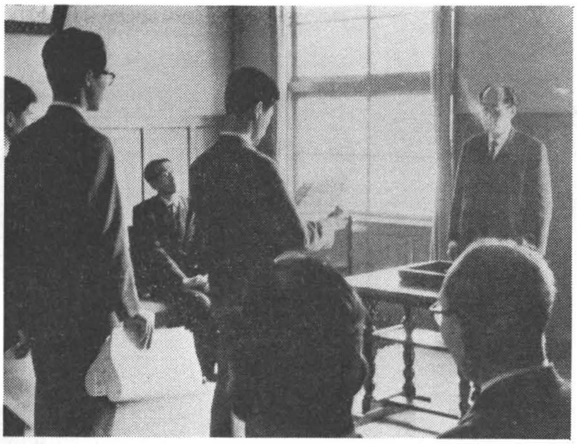
昭和37年に本学は大学院設置を望んで猛運動をしたが，その成功はまず見込みないものと思われていた．裏口的政治運動よりも実質的に学内の充実を計る努力をしながら，要求は堂々と正面から出すべきだと主張したが，これもまた全く相手にされなかった．38年1月の中央公論に自分の書いた“大学院の充実こそ我国の急務である”という論文が掲載されたが，思いがけずその月末本学に大学院許可の報が齎された．

39.　工学部長に中村教授就任

昭和39年4月1日，機械工学科教授中村康治工学博士は第9代工学部長に就任した．同教授は昭和40年4月1日から，前学長黒沢　清のあとが決まらないまま，同年5月31日まで，学長事務取扱となり，また，40年1月1日から，夜間学部に主事制度が設けられ，二部主事事務取扱を併任した．

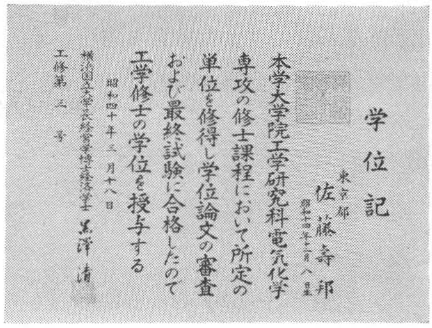


付属図書館工学部分館
（記事次頁）



大学院工学研究科第１回修了式

大学院工学研究科第１回修了の学位記



学位記

東京都
佐藤壽邦
昭和十四年十二月八日生

本学大学院工学研究科電気化学専攻の修士課程において所定の単位を修得し学位論文の審査および最終試験に合格したので工学修士の学位を授与する

昭和四十年三月十八日
横浜国立大学長経営学博士経済学士　黒澤清

工修第三号

中村康治（なかむら・こうじ）工学博士　略歴

昭和11. 3.31	東京帝国大学工学部機械工学科卒業
〃 18.11.19	台北帝国大学助教授工学部
〃 21.12.27	横浜工業専門学校教授
〃 24. 6.30	横浜国立大学助教授工学部
昭和33. 4. 1	横浜国立大学教授工学部
〃 39.4.1～〃 40.5.31	横浜国立大工学部長
〃 40.6.1～〃 44.2.28	横浜国立大学長
〃 40.6.1～〃 40.7.10	横浜国立大学工学部長事務取扱
〃 44.2.28	辞職
〃 44.4.1	横浜国立大学名誉教授

40.　図書館落成

本学工学部施設拡充第一期事業である本学付属図書館工学部分館は39年５月16日落成した．この建築は38年８月着工され，建築費用は神奈川県の寄付金5,000万円によるものであった．建物は鉄筋コンクリート造２階建延486坪（1,600 m²）．図書閲覧室２室，書庫は４層，図書収容部数は約10万冊であった．（本節17項参照）

41.　横浜国立大学大学院第１回修了式

昭和40年３月18日午後１時から本学事務局会議室で第１回大学院修了式が挙行された．黒沢学長の式辞の後，機械１，応化１，電化１の３名に学位記が授与され，修了生代表の答辞があって閉式した．

42.　中村教授学長に就任

40年３月31日黒沢学長辞任後の後任については，東大石井照久教授が選出されたが，同教授の学長就任辞退により学長選挙は再出発し，40年５月19日候補者青木，阿部，越村，中村，宮島５教授について選挙の後，決選投票で中村康治教授115票，宮島肇教授67票，無効２票で中村教授が選出された．中村教授はその後に行なわれた協議会で受諾する旨を表明，40年６月１日付けで

発令され，約3カ月ぶりで学長が決まった．(略歴前出)

中村新学長は，就任後次のように語った．「学校の既定方針として，大船統合推進に努力する．周囲の土地を買収して20万坪ぐらいにしたい．大船がだめなら，むずかしいが他に土地を捜さなくてはならない．また統合に関連して，より多くの学部を持った総合大学を理想としているが，現実では非常に困難であろう．」(機浜国立大学新聞より)

43. 河村文一名誉教授に

昭和40年3月31日付けで河村文一教授は停年退職し，同年4月1日付けで本学名誉教授の称号が授与された．

河村文一（かわむら・ふみかず）理学博士　略歴

大正14.3.17	横浜高等工業学校電気化学科卒業	昭和12.10.1	横浜高等工業学校教授
		〃 25.4. 1	横浜国立大学教授
〃 14.4.13	横浜高等工業学校助教授	〃 40.3.31	停年退官
		〃 40.4. 1	横浜国立大学名誉教授

44. 工学部長に河東教授就任

40年6月28日の工学部長選挙で化学工学科教授河東準が選出され，11代工学部長に就任した．

河東　準（かわひがし・じゅん）略歴

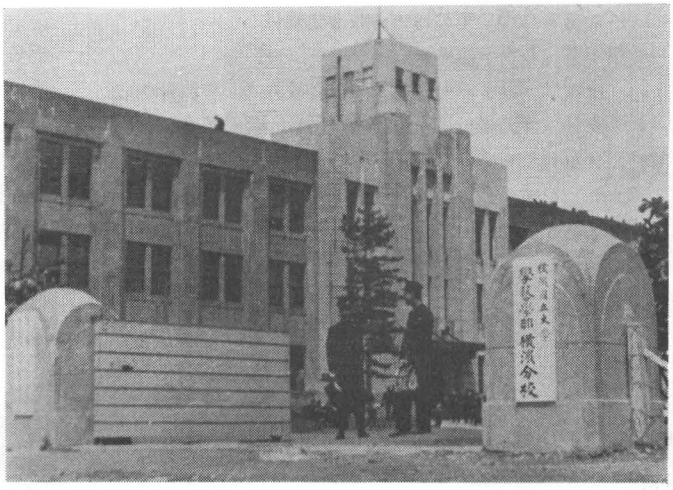
昭和10.3	東京帝国大学工学部機械工学科卒業	昭和23.9.18	東京都立大学助教授工学部
〃 14.3.31	京都帝国大学講師嘱託	〃 31.4.23〜〃 31.4.30	東京都立大学教授工学部
〃 15.3.30〜〃 16.9.24	京都帝国大学助教授化学研究所	〃 31.4.30〜〃 37.9.30	会社，協会役員
〃 19.9.4	台北帝国大学講師嘱託	〃 37.10.1	横浜国立大学教授工学部
〃 19.10.25	台北帝国大学助教授工学部	〃 40.7.10〜〃 42.3.31	横浜国立大学工学部長
〃 20.7.13〜〃 21.5.31	台北帝国大学教授工学部	〃 44.1.21〜〃 44.1.31	横浜国立大学工学部長事務取扱

45. 一般教育審議会設置

一般教育は，新制大学の最も特徴とする基本理念の一つであるが，旧制大学になかった制度であり，またその存在価値を真に理解することの困難さから，さきに述べたように本学においても開学以来とかく問題になりがちであった．

本学の一般教育は，開学当初には各学部で行なわれていたが，本学設置認可の付帯条件第2項「一般教養科目の履修が1か所で行なわれる施設をできるだけ早く整備すること」にもとづいて，昭和26年度以降は，横浜分校において行なわれてきた．

本学が創設された昭和24年より，一般教育審議会の発足が決定された昭和42年3月までの18年間における，本学の一般教育の沿革については，それを4つの時期に区分して考えることができよう．



横浜分校

第1期は，主として冨山学長在任の期間で，本学創設時より第2代江国学長の就任直後の昭和28年10月までの期間である．この時期に，横浜分校で第1年次の一般教育が行なわれることになり，ここに集合教育の場が確立されたのである．

第2期は，昭和28年10月より昭和34年3月までの主として江国学長在任の期間である．昭和32年2月の評議会で，33年度よりの実施を目標に，一般教育の独自の方式を研究するため，「一般教育研究会」をつくることが江国学長によって提案されたのである．そして，江国学長の任期満了の日の前日，すなわち，昭和34年3月30日の評議会で，学内措置としての教養部（仮称）の設置が承認され，その実施が翌3月31日付けで通知されたのである．

江国学長の任期の終わりの2カ年間は，一般教育担当機関の独立が全学的規模で議論された時期であると同時に，学外においては，一方では，中央教育審議会の教員養成制度の改善についての答申が公表され，他方では，理工系学部の拡充が開始されたため，一般教育がこれらとの関連において特別の関心を集めた時期でもあった．

第3期は，昭和34年4月より昭和40年3月までの黒沢学長在任の期間である．教養部設置は，原則的には横浜分校所属教官を学芸学部より切り離して，それをもって教養部教授会を構成することになっていたので，学芸学部教官組織の分断と，それによる学芸学部の性格の変更が問題になり，それに清水ケ丘統合の停滞に対する学芸学部教官の不満が加わって，一般教育はとかくこのような問題との関連において議論されがちであった．この時期は国大協を中心として，一般教育課程の確立が要望され，教養部が制度化され，文理学部の改組による教養部設置が開始されるなど，全国的には，一般教育に制度上の大変革がおこりつつあったのである．

第4期は，昭和40年4月より現在にいたる，主として中村学長の在任期である．昭和34年3月に教養部(仮称)の設置が評議会で決定されながら，それが未着手のままで放置されているのは，このましくない状態であるとして，一般教育についての検討を評議会で継続して行なうことになり，昭和42年3月31日の評議会で，一般教育についての横浜分校暫定規程が制定され，横浜分校は暫定的に本学の一般教育を担当することが成文化された．次にこの規程を示そう．

一般教育についての横浜分校暫定規程

第1条　教育学部横浜分校（以下「分校」という）は本学（第2部を除く）の一般教育（一般教育課目，外国語科目，保健体育科目，基礎教育科目を含みその履修課程を「一般教育課程」という）を担当するものとする．

第2条　分校に一般教育課程の適正な管理運営を図るため一般教育委員会（以下「委員会」という）をおく．

2　委員会の構成は次のとおりとする．

委員長　分校主事

委　員　分校委員のほか各学部委員若干名

3　委員会の審議事項は別に定める．

第3条　一般教育課程に関する各学部との連絡調整は教務協議会があたり学生の厚生補導に関する各学部との連絡調整は補導協議会がこれにあたるものとする．

付　則

この規程は昭和42年4月1日から施行する．

一方，昭和42年3月31日の評議会で一般教育審議会は，学長の諮問に応じて，本学における一般教育のあり方を検討し，その担当機関の組織，機構および運営について審議するために設けられた．

次にその規程を掲げておく．

一般教育審議会規程　制定　昭和42年4月1日

第1条　本学に一般教育審議会（以下「審議会」という．）をおく．

2　審議会は一般教育担当機関の組織，機構，運営等について審議することを目的とする．

3　審議会は学長の諮問機関とする．

第2条　審議会は各学部，分校から選出された各3名の委員および分校主事をもって構成する．

第3条　審議会に委員長をおく．

2　委員長は委員の互選により定める．

3　委員長は審議会を招集し，その議長となる．

付　則

この規程は，昭和42年4月1日から施行する．

規定により，工学部からは，河東準，田口武一，飯島健一の3教授が委員となり，全学で16名の委員によって構成されたが，教育学部横浜分校主事亘理達郎教授が委員長となった．そして第1回会議（42. 5.11）の席で，学長からつぎの諮問とそれについての説明とがあった．

諮　問　事　項　　昭和42年5月11日

本学における一般教育について

本学の一般教育担当機関の組織，機構，運営は如何にすべきか諮問します．

本学における一般教育について――諮問の際の学長説明要旨――

本学における一般教育は，暫定的には教育学部横浜分校で担当することになっていますが，本学の将来のために，担当機関を大学の中の如何なる機構とすべきか，その組織運営はどうするのがよいかを伺い，審議会の結論にそって立案，決定をしたいと考えます．

この問題は，いわゆる江国案以来本学の懸案であり，昨年1カ年評議会で検討されてきましたが，その結果，この審議会を設けることになりました．

大学としてはすでに長期にわたり色々な機関において検討され，議論はすでに出尽していると思われますので，今回は従来の議論の繰り返しをさけ，また過去のあり方にこだわらず，将来に向っての新たな構想をもって，一般教育担当機関を如何にすべきかについてそれを決定するに足る資料を添えて答申してください．

一方，保土ケ谷への統合建設計画を進めねばならないので，答申はできるだけ速やかに出してください．

なお，来年度概算要求に盛り込むべき事項もあり，必要なものについては，中間において答申してください．

このようにして，約１年半の後，昭和43年10月４日の第19回の会議で，答申の最終案が検討され，昭和43年11月１日，「本学による一般教育について」という答申がなされた．

いまその結果をきわめて端的に要約すると次の通りである．

(1) 一般教育を担当する機関は，履修量おおむね1.5年分の一般教育課程（一般教育科目，外国語科目，保健体育科目，基礎教育科目）を総合的に計画し，実施する機関であり，入学した全学生（原則として第２部学生を含む）が１年以上の期間集合して行なわれる教育の場であること．

(2) 一般教育課程に専任の教官(必要によっては併任の教官を加える)による教授会がもたれ，その権限は学部の教授会と原則的に同一であること．

(3) 一般教育課程に所要の教官数は十分に確保されるべきこと(所要教官数の算定方法は省略)

(4) 教官の研究には学部と同等の便宜が保障され，また，一般教育についての研究所，あるいは，法文学部，理学部のような基礎学術的な学部の設置が継続的に考慮されて，研究の便宜が拡充されるよう努力されること．

(5) 教官は専攻分野についての専門講義を，また，専門学部の教官はつとめて一般教育課程の講義を担当して，全学的了解においてむしろ積極的に専門学部との相互の兼担が奨励されるとともに，学部との人事交流が容易に行なわれること．

などであった．このように一般教育審議会は，多大の労力をかけて一応の答申を終わったが，その年の暮れごろから学内は次第に騒がしくなった．そしていわゆる教養部がいよいよ独立する機運が出てきたところを再び日の目をみずに終わった．しかも，紛争後44年９月の工学部授業再開の段階で，再度横浜分校への不満が台頭するとともに，45年からは統合に関連して建物の計画上，横浜分校を解体し，いわゆる“全学出動方式”の考えを取り入れて，各学部がそれぞれ関係の深い一般教育課目をもつことになった．工学部は数学，物理，化学，および図学の一般教育課目を担当して，これらの全学的責任をもつこととなり，大学改革の一つとして全国に先がけ，46年度からは省令も改正されて，長い間の一般教育に関する問題に終止符を打つことになるのである．

46. 阿部滋弘名誉教授となる

昭和42年４月１日付けで，応用化学科阿部教授は停年退職した．大正12年助手として勤務して以来，44年間研究と教育に専念し，同日付けで名誉教授の称号を授与された．(略歴前出)

47. 工学部長に小山教授就任

昭和42年４月１日，造船工学科教授小山永敏は12代工学部長に就任した．

小山永敏（こやま・ながとし）略歴

昭和8.3　東京帝国大学工学部船舶学科卒業

〃 8.4.～〃 11.7.　海軍技術研究所造船研究部勤務

昭和11.7.10～〃 23.3.31　三菱重工業株式会社勤務

〃 23.4.1　九州大学教授工学部

昭和24.8.31　横浜工業専門学校教授
　　兼横浜国立大学教授
〃 25.4.1　横浜国立大学教授工学部
昭和42.4.1～〃 44.1.20 横浜国立大学工学部長

48. 安全工学科の新設

昭和42年9月7日，横浜国立大学学則の一部を改正し安全工学科が設置された．

わが国の産業は戦後著しい発展を遂げたが，工業界における生産技術の革新的な進歩にくらべると，破壊，倒壊，火災，爆発，工業中毒，職業病，労働災害などの産業災害ならびに大気汚染，水質汚濁，悪臭．土壌汚染，騒音振動，地盤沈下などの産業公害に対する防止技術がはなはだしく立ちおくれていた．このことは最近の各種の災害および公害の頻発となって現われていることで否定できない事実であろう．

近年わが国の産業の実態は，その生産規模ならびに製造方式においてもはや昔日の比ではなく，それに伴って新規に出現する原材料製品は未知の災害危険を有し，危険有害な化学薬品の輸送または貯蔵設備はますます大量化し，工場の生産工程には高速，高圧，高温，極低温などの極限状態が導入されるなど，産業における災害や公害の発生の危険はいたるところに潜在しているといえる．また事故の発生原因はますます複雑化してきている．したがって一度災害または公害が発生すれば，その影響するところは多大でその被害は測り知れぬものがあるといえる．

このため昭和40年12月には日本学術会議は「産業安全衛生に関する諸研究の拡充強化について」の決議をとりまとめ政府に勧告を行なった．その中には大学工学部における産業安全関係の講座の充実，専門の安全技術者の養成，安全衛生関係の研究実験の促進などの諸項目が提唱されていた．

また昭和34年に総理府に設置された産業災害防止対策審議会は，今後における産業構造および労働事情等の変化に対処する産業災害防止対策に関する諮問についての意見をとりまとめ，昭和41年3月29日三村起一同会会長より佐藤内閣総理大臣あてに答申が提出された．その中には「安全および衛生の確保の対策につき，科学的基礎を強化し，高等教育において専門職種の養成をはかる目的のもとに，企業の地域的分布を考慮し，安全衛生に関係ある基礎学科を持つ若干の大学を手はじめに，年次別に計画をたて，大学に講座または専門学科を設ける必要がある．この点につき国は適切な措置を講ずべきである．」と記載されている．

わが国大工学部では，すでに昭和30年前後から電気化学科に安全工学（主として防火防爆―北川教授担当，および労働衛生工学―小林助教授担当）の教科目をおき，工学部学生に対して安全工学の講義を課してきた．また昭和32年より北川教授，松野教授，小林助教授などの本学教官の協力によって安全工学協会が設立され，昭和35年より学術雑誌「安全工学」が刊行され，学協会活動が活発に行なわれてきた．

これらの約10年間におよぶ経験と実績とにもとづいて上記の日本学術会議勧告ならびに産業災害防止対策審議会答申の内容を受けて，横浜国立大学工学部は，安全工学科新設に関する昭和42年度予算要求を文部省に対し行なった．

幸いこの要望が採り上げられ，わが国で初めての安全工学科（学生定員40名）が昭和42年度か

ら設置されることとなった．これは横浜市がわが国有数の京浜工業地帯の中心に位置しているのみならず，当時すでに10年間におよぶ安全工学協会の活動などによって安全工学に対する産業界の要求が高まっていた時でもあり，さらに永年にわたる北川教授を中心とした本学工学部における安全工学教育および研究の実績がおおやけに認められたことによるものであった．なお，本学教官のほかに本学外において京都大学若園吉一助教授（後本学教授）の熱心な協力があったことも忘れてはならない．

こうして本学安全工学科は，当時の学界ならびに産業界の注目を浴びてここに発足した．

安全工学とは，“主として近代工業社会において発生する災害の原因および経過の究明とその防止に必要な科学および技術に関する系統的な知識体系である”と定義される．最近，テクノロジイ・アセスメント（Technology Asessment）と称して技術開発の分野で人間性を再評価することが提唱され，人間性の豊かな社会，人間中心的な社会にすべきだといわれているが，安全工学はこのような社会の育成を目的にした工学であるといえる．

安全工学科の教科内容の特徴として，一般教育および基礎工学の学修の上に，主として機械工学，工業化学，化学工学などに関連する学科目のうちから選ばれる一般技術者として必要な基礎的諸科目とともに，特に安全技術者として重要な科目を重点的に課することとなっているが，将来のわが国の産業界ではすべての技術者に安全工学の素養を与えるとともに，専門の安全技術者を企画，設計，保全，検査などの各部門において活用し，各官庁においてはこれを技術監督者として安全指導に当たらせる必要性がますます大きくなってくるものと考えられる．

最初，本学から新設を希望した安全工学科の講座は，材料安全工学講座（材料力学，破壊現象論，高圧装置，特殊材料，腐食防食）設計安全工学講座（機械設計原論，電気設備，計装，安全検査，工場立地配置）反応安全工学講座（反応速度論，伝熱，危険反応，相変化，高圧ガス）燃焼安全工学講座（燃焼基礎学，防爆工学，防火工学，危険性物質）環境安全工学講座（有害物質，環境測定，労働衛生学．労働環境換気工学，公害対策）の５講座であり，このほかに労働心理，人間工学，土質力学，災害経済，災害分析演習，安全関係法規等について学外から専門家を非常勤講師として招き，常に産業界の実情に合致した新知識の吸収に努めようとするものであった．

しかし実際には，文部省の予算のつごう上，昭和42年度に始まる安全工学科の新設決定以来，42年度一般教育等，43年度反応安全工学講座および燃焼安全工学講座の２講座，44年度の材料安全工学講座，45年度は環境安全工学講座が設置された．そして46年度公害基礎工学講座，47年度公害計測工学講座の各講座が増置されることとなっている．

学部の学生定員は40名で，このほか46年度より新設予定の大学院安全工学専攻修士課程の学生定員８名をもって，安全工学科は一応の完成を見ることとなっている．

昭和42年第１回入学試験を実施以来，合計４回の入学試験を実施したが，毎年定員に対する志願者の数は約10倍の高率に達し，最近の安全工学に対する関心のほどが現われている．

安全工学科　講義要目（42.4.1）

学科目	科目名	単位数 必	単位数 選	毎週授業時間数 1年前	1年後	2年前	2年後	3年前	3年後	4年前	4年後	担当教官
反応安全工学	安全工学概論	1.5*					2					北川
	反応安全	1.5*						2				
	高圧，液化ガス	1.5*								2		
	反応安全工学実験	2								6		
燃焼安全工学	燃焼基礎学	1.5*					2					若園
	防爆工学	1.5*						2				
	防火工学	1.5*						2				
	燃焼安全工学実験	2							6			
材料安全工学	材料安全	1.5*							2			井上
	腐食防食	1.5*								2		
	化学装置用材料	1.5*						2				
	材料安全工学実験	2							6			
環境安全工学	労働衛生工学	1.5*					2					小林
	産業公害	1.5*						2				
	換気工学	1.5*						2				
	環境安全工学実験	2								6		
工学基礎	一般力学	3**				2	2					佐藤
	材料力学	3**				2	2					井上
	流体力学	1.5**				2						
	電気工学原論	3**						2	2			中島・中西
	移動及速度論	1.5**						2				
	計測	3**							2	2		
	工学基礎実験 Ⅰ	1						3				
	〃 Ⅱ	1						3				中島・高瀬
講座外	分析化学	1				2						桃木
	工業分析 Ⅰ		1.5					2				
	工業分析 Ⅱ		1.5						2			
	分析化学有機化学実験	1.5						4.5				
	化学熱力学		1.5				2		2			
	物理化学	3				2	2					北川
	物化演習	3					2	2				
	熱力学		1.5						2			
	化工教学		1.5						2			
講座外	粉体基礎		1.5						2			
	化学工学概論		3					2	2			
	化工計算 Ⅰ		1.5					2				
	〃 Ⅱ		1.5						2			
	反応装置設計		1.5							2		
	化学工学実験 Ⅰ	1					3					
	〃 Ⅱ	1						3				
	設計および製図	4				8	4					井上
	生産施設設計		3					2	2			
	自動制御		1.5						2			
	プロセス開発		1.5							2		(平川)
	応用数学		3					2	2			佐藤
	無機化学	1.5				2						小川
	有機化学	3				2	2					宮本
講座外	高分子特論		1.5							2		
	物理化学実験	2					6					小川
	品質管理		1.5							2		(岸)
	実験計画法		1.5							2		(岸)
	特許法		1.5							2		(井坂)
	触媒化学		1.5							2		
	多相平衡論		1.5					2				
	反応速度論		1.5			2						松野
	材料基礎学		1.5					2				
	原子力工学概論		1.5							2		

人間工学		1.5					2					
安全工学演習	2							2	2			
輪講	3						2	2	2			各教官
卒業研究	10									30		各教官

*印は各講座より3単位を必修とする.
**印は15単位中9単位を必修とする.
卒業研究着手の条件は四年の学期はじめにおいて教室会議で決定する.
卒業に必要な最低修得単位（教養，専門共）160単位とする.
（ ）は非常勤講師を示す.

安全工学科
北川教授

北川徹三（きたがわ・てつぞう）理学博士・工学博士　略歴

昭和 6. 3	京都帝国大学理学部（化学専攻）卒業
〃 12. 5	京都帝国大学大学院（物理化学専攻）中退
〃 12. 5.20〜〃 20.10.15	海軍火薬廠研究部勤務
〃 20.11. 1〜〃 24. 8.31	東京工業試験所研究員
〃 24. 8.31	横浜国立大学教授工学部

49.　安全工学科の建築

安全工学科実験研究室の一部は，昭和43年3月25日に鉄骨平屋建80坪（262 m²）が完成した．これは，保土ケ谷への統合をひかえプレハブ建築であった．その後，昭和44年3月31日，プレハブではあったが，鉄骨造2階建延371坪（1,225 m²）が完成した．さらに昭和44年4月1日には，事務局，および学生部が常盤台（保土ケ谷区常盤台196）に移転したので，同年10月1日にこの木造2階建一部平屋建延264坪（872.81 m²）を安全工学科の研究室，製図室等に転用した．

50.　42年ごろの工学部の運営について

このころの工学部の運営について，学報昭和42年12月号に当時の工学部長小山教授が学部紹介として次のように記しているので，全文を掲げておく．

なおそのころの全学々生数は別表の通りであった．

昭和42年9月1日現在　学生数

学部	第1部	第2部
教育学部	1,642（2）	
経済学部	788（2）	244
経営学部	123	79
工学部	1,569（22）	329（2）
合計	4,122（26）	652（2）

（注）（ ）内は外国人留学生数（内数）

学部聴講生，研究生，専攻生等

聴講生	244（2）	研究生	26（1）
専攻生	12		

経済学部専攻科生　4

大学院	工学研究科修士課程	113（2）
	聴講生	3（2）
工業教員養成所		109

工学部の運営について　小山工学部長

1.　まえがき

この4月から評議会はじめ，全学の諸会議に出席する機会が多いが，各学部の運営の実情は必ずしもいちようでなく，それぞれ慣習があり特色のあることがわかった．事務局から学報の原稿の依頼があったので，工学部運営の実情を御紹介して参考に供することにした．

2.　運営の基本方針

運営の基本的考え方は“民主的運営”であることは今日の常識で当然のことで説明の要もない．問題は“民主的運営”の方法であろう．学部内のあらゆる問題に全員の意思が反映し，多数の意見で決められたことに対しては必ずこれを尊重しこれを守るようにすることが“民主的”と考えている．

民主主義とは面倒で時間と手間がかかり忍耐を要するといわれるが確かにそのとおりで簡単にことがはこばないことが多い．しかし忍耐強く根気良くこのルールを守ることが最終的には運営が円滑になりさらには学部の発展の根本となることと信じ努力し実行している．

3. 教室会議

現在工学部には機械・応用化学・電気化学・建築・造船・電気・金属・化学工学・安全の9学科があり，人事，予算，教育，学生の就職などに関してはそれぞれ自主的運営を行なっている．このために原則として毎週講師以上の教官による教室会議を開いており，その責任者を教室主任と称し，教授が交替でこれに当っている．機械と応用化学には2部があるが，この両科は2部も含めて運営している．

上記9学科の外に工業分析，応用物理，応用数学の独立講座があるので，これは共通教室として学科に準じた運営を行なっている．この教室会議は工学部運営の基礎でありあらゆる問題がここで審議され各個人の意見がじゅうぶんに発言できることとなる．

4. 教室主任会議

工学部の最終決議機関は教授会(教官人事問題)教授総会（全般問題）であるが，この運営の円滑をはかるために教室主任会議を設けている．この会議は9学科と共通教室の主任に，材料基礎工学研究施設長と2部主事をもって構成し学部長が議長となっている．この会議の主な任務は，教授会，教授総会の議題の準備と調整であるが，報告，情報交換など学部全般の問題を取り扱っている．具体的には，ある諸議題が提案されると，ここで検討し，教室会議にはかり，その結果を持ち寄って改めて審議し結論をまとめる．この結論を教授総会に提案し審議して決定するという手続をとっている．

.5 各種専門委員会

教務，補導，将来計画など全学的委員会の外に学部特有の研究センターの運営，電子計算機，募金（設備拡充のための）などの委員会がありそれぞれ各学科から委員が出て運営している．これらの委員会には各教室の意見がじゅうぶん反映されるので，教授総会では専門委員会の結論を尊重して決議することにしている．

6. 大学院関係

学部の運営とも関連はあるが，組織上も別個であるので研究科委員会（学部の教授会に相当）と研究科主任会議ですべての問題を処理している．

7. むすび

工学部運営の現状は上記のとおりであるが，学部の規模が大きくなり，統合など特殊な問題があると会議も増加し，これに費される時間，作業も多くなるが，運営上必要なことながら，教官の負担が過重になるのは心苦しい．できるだけ能率の良い運営をはかり大切な研究と教育に支障を来さぬ配慮が大切と考えている．

51. 昭和43年（明治100年）学長の年頭の辞

明治100年を迎えた昭和43年の“年頭のことば”として，中村学長は学報42年1月号に次のように記している．

昭和戊申の新春を迎える．

“ふる雪や明治は遠くなりにけり”（草田男）

遠ざかりゆく明治へのあこがれは，今年明治満百年ということで，さらに高まっているようである．

明治の末に生れた私はこの百年のうちの後半，太平洋戦争を中心とする50年を自分の目でみ，自分の耳できき，これを自分の体験として知った．その時間的長さは今省みれば，案外に短かい感じである．私の知らない維新から日清・日露の戦いを含む時代のできごとは，私には遙かなる歴史の中のものでしかないが，私の経験した後半とほぼ同じ程度の時間的長さであることを考えると，百年というものも，その長さを実感としてもつことができるように思う．

この百年の初期，明治9年，早くも横浜師範学

校がこの地に創められ，その後いろいろな変遷をへて今日の教育学部へとうけつがれてきた．高商，高工がともに大正の末近くにこの地に創立され，それから今日の経済，経営，工学の学部へと50年に近い歴史，これらは数多くの教職員，卒業生の方々の記憶の中に生きている．

戦後の新学制発足とともに一つの横浜国立大学へと統合されて19年，今年はそれらをそれぞれの人の記憶を語りつがれた歴史との中に残る伝統をふまえて，程ヶ谷の地に真に一つの大学として統合する計画が実現される第一年である．明治百年，近代日本の過去の反省と新しい出発の起点として意義ある年にこの統合建設がはじまることはまことに奇しきめぐり合せである．

明治初期において今日の日本の社会の実情を予想することは不可能であったであろう．しかし日本が世界に誇り得た教育の仕事は，明治の初めにその礎が定められ，連綿としてうけつがれてきた．百年に近い風雪に耐え，今日立派な学園へと発展してきているものも少しとはしない．今大学の将来をかけて建設される統合計画はこれから百年のあと，その歴史の批判に耐えうるだけのものでありたい．それには全教職員の方々がそれぞれのもつ深い経験を集め，過去を省み，よき伝統を残し，利己をすて，大学の将来のあり方に焦点を絞り，たがいに力を合せることが必要であると私は思う．

程ヶ谷の地に大学百年の礎を定めるこの年のはじめにあたり，私は全教職員の方々のご多幸を祈るとともに，統合建設の円滑な進展を祈念する．

横浜国立大学長　　中村　康治

52.　第20回入学式

昭和43年4月13日横浜市文化体育館で，本学第20回の入学式が行なわれた．教育学部443名，経済学部134名，経営学部127名，同第2部80名，工学部428名，同第2部53名，計1,265名の新入生を迎えた．この中には台湾，タイ，インドネシアなどからの留学生数名が含まれていた．当日の中村学長の式辞は次の通りであった．

学長　式辞

今日新しく諸君を，若々しくすぐれた生命である諸君をここに迎えて大学は再びこの春の若々しい緑にも似た清新な気持をもって，新しき年の歩みをはじめるのであります．年はうつり行けど常に新しく，常に若々しく，これは大学の特性であり，大学人の喜びであります．

今日よりわが大学は大学20年目をはじめるのであります．

今年は諸君が夫々に身をもって経験されたことでありますが，戦後のベビーブーム第3波，また最大の波が大学に押しよせて，70万人を超える大学入学志願者がありました．その中74国立大学へ志願数は一，二期校併せて延べ約40万6千人，実数は30万人前後と思いますが，それに対して国立大学へ入学しえたものは6万6千人であります．

中でも横浜国立大学の門は誠にせまい門であり，恵まれた頭脳と体力，それに不屈の精神をもって立向って，はじめてくぐることの出来た門でありましょう．私は諸君のこれまでの健闘に対して心からの敬意を表します．同時に諸君の今日の栄冠を得られるについて諸君を後援されたお父様お母様方の今日のお喜びは一入深いものがあろうと思い，改めてお祝いを申上げます．

もう一つこの際，新入生諸君に願うことは，諸君の父兄の方への感謝の気持を，また幸いにして数多くの志望者の中から選ばれた幸運，もちろん諸君自身の努力そのものが最大の要素ではありましたが，諸君に劣らぬ努力をしてわずかの差で入学出来なかった数多くの友人があることで，合格したという幸いを反省し，さらに国立大学が諸君の授業料の何十倍かの税金によって支えられている学園であり，そこに学び得るということについての自覚，責任の自覚，このようなことをよく考えて欲しいのであります．

諸君は今大学生として大きい期待をもって，明日からの学生生活を考えていられることと思います．同時に大学が今社会に色々な問題を投げていることについて，緊張の気持をもって明日からの大学生活に立向うべく，心構をしていられるであろうかと思います．

私もまた社会の険しい動きに時にゆれ動く大学の中に純粋で若々しい諸君を迎えることに大いなる期待をもつのであります．

新入生諸君，大学は今日第20年目の第1日をはじめるのであります．20年，これは短からぬ年月であります．昭和24年5月，新しい6.3.3.4の学制の発足によって，神奈川県にあった専門学校が集まって，横浜国立大学を創めたのであります が，それら母体となりました専門学校はそれぞれにまた歴史をもつものであります．…….

しかし新制大学として相集まって横浜国立大学を形成したとき，過去の歴史と共に新しき綜合大学としての共同体，それを貫く一本の学風が育ち上がることが必要でありますが，この点について20年の年月は横浜国立大学にとって必ずしも尚充分でないようにみえるのであります．諸君にとって横浜国大は諸君の生れて物心ついた時既に存在していた訳であります．しかし大学はそれ以前の過去の長い歴史をしょっているものであります．そしてこの歴史の新しい1年を諸君達自らが作ることになるのであります．

諸君が明日から毎日通うのは清水ケ丘キャンパスであります．ここは富士が見える丘でありますが，今は旧高商の本校舎，新しく大学になってから出来た2棟の研究室棟，それに千数百坪のプレハブ校舎群であります．昼時となれば小さい食堂は満員になる．誠に混雑している校舎であります．

昭和40年1月，既に3年前になりますが，鎌倉にありました教育学部校舎，これは旧師範学校時代のものでありますが，火災によりほとんど全焼してしまい，そのため清水ケ丘にプレハブ応急校舎が建てられたのであります．以来3ケ年プレハブ校舎をつづけているのはこの清水ケ丘に在る校舎の他に弘明寺にある工学部，また権太坂にある教育学部の農学，技術教室すべてを一つのキャンパスに移転，統合する計画が進んでいるからなのであります．その詳細については新入生諸君には改めて知らせることになると思いますが，横浜駅に近く東京との間の第三京浜国道の終端に近く，程ケ谷ゴルフ場がありました．そこが市の港北地区に移転をし，その跡地十数万坪のところに全学を集める計画が進行中であり，土地の一部は既に購入され，そこに建設する設計を今年一杯かけてやっていこうというのであります．

この新しい建設をまっているために，プレハブ校舎での混雑は今しばらく続けねばならないのであります．大学創設20年にしてやっと全大学が一つのキャンパスにそれぞれに，過去の歴史と伝統とをふまえて，新しい一つの大学共同体へと発足しようと今大学は苦労をしているところであります．新入生諸君はこの事態をよく理解して頂きたい．そして明日の大学の発展のためにしばらく不便を辛抱して頂きたい．もちろん大学について諸君達の抱く希望を，大学をよりよくするように意見をのべることは自由であり，特に新しい大学建設に若い諸君の建設的意見を歓迎するところであります．

諸君は大学入試ということを目ざして，ひたすら努力をされた．そこでは自分は勉強をしたんだという自覚をそれぞれにもっていられると思う．その勉強をやりとおしたという経験は大切なものであります．しかし大学での勉学は恐らく高校までの勉学とは少し違ったものとなるはずであります．何処が異るか，それは大学の使命は単なる教育機関だけではなく，教育と研究とが中心となっているところであります．大学は学問研究をとおして人間を作る人間修練の場であります．また大学の任務は若い学生諸君を教育すると共に，われわれに残された文化の遺産を維持し，研究によって知識の領域を開拓していくというのであります．そのため学問の自由，ひいて大学の自治の問題があります．このことについてはこれから諸君自ら考え勉強をして頂かねばなりません．

諸君は大学においてそれぞれに教官の研究活動に参加することによって未知の領域内で研究活動を自ら行ない，新しい知識の領域を広めていくことが要請されるのであります．しかしそのために諸君はまずそれが可能であるように諸君自身の力を高めることが必要であります．人文，社会，自然あるいはその応用科学，何れの分野にしても先人の開拓した領域は広く，その最前線にまで到達するのは諸君においてはなお前途はるかであります．

4年という年月はこの道程を踏破していくだけでも決して充分ではありません．ましてその上に未知の領域に一歩でも二歩でも入るということをやるためには並大低のことでは駄目であると私は思います．しかし入試を目ざして努力した不屈の精神，その諸君自身の経験はこの道程を踏破することに必ず役立つと私は信じます．

しかし未知の領域を開拓する研究活動においてはその時頼るべき教科書も，ノートもないのであります．指導教官ですら答をもっていないのでありましょう．どうすればよいのか，そこで動けなくなってはいけないのであります．教科書やノートにかかれていることを覚えて，それで答案をかけばよいというのではないのであります．

未知の問題を独創的に解決すること，これが要求されるのであります．そのためにはどうすればよいか，私は諸君に次のことをまず覚えて頂きたい．

（知識）＋（経験）＝（教養）
K　　E　　C
(Knowledge)（Experience）(Culture)

受験で鍛えた諸君にこんな簡単な公式を覚えることはいとやさしいことと思います．

知識は教科書により，また教室における講義から伝達されて知ることが出来ます．しかしそれだけでは単なる「物知り」が出来るのであります．更にその知識を自らくりかえし練習するとか，また自分で既知の知識に到達する道程を辿るとかそのような経験を自らすることによって，はじめて知識以上のあるものが身につくのであります．このあるものは Mental power といってもよいでしょうが，これを「教養」Culture と定義するならば，はっきりするのであります．教養という言葉は色々に使われています．広い知識をもつ人を時に教養人といったりしますが，真に教養ある人とは単なる広い物知りとは異るべきでありましょう．それは高い識見をもち仕事に当って正しい判断を下し，仕事に向ってはこれをよく遂行出来る人であります．大学において学問的知識を知り，また自ら学問上の研究を実行したとき，そこに学問的教養が身につくのであります．大学における学問研究はこの意味における高い知的教養を身につけることが行なわれるのであります．

もちろんこのことは諸君が既にやってこられたものの中にもまたあるわけです．入学試験において諸君が数学の未知の問題に解を与えました．それは数学的知識とそれを反覆自ら練習した経験とにより，諸君自身のもつ数学の力が，諸君にとって未知の問題を解くことを可能にしたのであります．問題をみて，これはこうすればよいのだとハッと頭にひらめく，それは諸君の記憶の中にある数学の知識を端から総ざらえして，ああここにあったと見つけるようなものではないはずであります．

このような数学の力，これが数学的教養であり，数学の未知の領域の中で新しい問題を独創的に解決していく原動力となるものであります．
数学者岡潔先生の言葉に

「人は極端になにかをやれば，必ず好きになる性質をもっています．好きにならぬのがむしろ不思議です」．

というのがありますが，自ら学び，自ら経験することをやっていると自ずと興味がわくのであります．これが教養の特色であります．

同時にそれはよりむずかしいことでないと面白くなくなるのであります．わが大学の数学の先生方にとって，入学試験の問題位をとくことは余り面白くないのであります．

もう一つの特色は単なる知識は忘れ易いが，教養となった知識は忘れにくいものであります．諸君が自ら考えて自ら発見したと信ずる定理，それは既に昔発見されたものであったとしても諸君自身にとっては一生忘れることがないでしょう．諸君の入試のための勉強が諸君の知的教養となっているならば，それはこれからの大学の勉強に大きい力となるはずであります．またこれからの諸君の勉学は諸君の知的教養を培うようなものであることが必要であります．

教養の最も注意すべき特性は，それは経験を含んでいるために，自ら経験をする者のみに得られるものであり，教室において知的教養豊かな教授先生方が諸君に如何に熱心に講義をされても，そのとき諸君に伝えられるものは知識であって，先生方のもつ経験はそのとき脱落してしまうのであります．そこに教室における先生方と学生諸君との間の限界があります．先生方は，諸君が自ら経験するように導き，鼓舞することが出来るだけであります．教養は自ら行なうことによってのみ身につくものであり，先生方の如何ともすることの出来ないものであります．

同時にそれが未知領域を開拓する力の源となるものであり，大学において求められるものが学問研究であるならば，諸君が明日からの勉学の態度は自らきまってくるものであります．

只今私が〔K＋E＝C〕なる公式を諸君に伝えました．これは一つの知識であります．しかしこれが真であることを理解するためには先ず諸君は

自ら実行してみて，それを自ら会得するよりほかないのであります．

新入生諸君，私は知的教養について今諸君に語りましたが，大学は知識のみを対象とする場所ではないことをよく考えて欲しいのです．小学校以来諸君は人間としての教育をうけ，今大学にきてさてここでは専門の学問をする．そこには自然科学なり社会科学なり専門学問の教養のみが考えられていると万一思うようなことがありはしないか，私はひそかにおそれるのです．

今申し上げた公式〔K＋E＝C〕は単に知性の上のみでなく感性の上においても成立つものであります．正しき道理，正義，善，そのようなものは何かを知識として知ると共に，善を自ら行なうことによって道義の感覚を鋭くすること，美しきもの，とは何かを考え，自ら美しきものを創造することによって芸術的情操を豊かにすることが必要であります．

私は工学その中でも機械を専攻したのでありますが，機械，構造物を設計しようとするとき，それぞれのもつ工学的知識と共に過去の技術的経験が合わさった技術的教養が設計を可能とするのであります．そして技術という複雑なものについての教養の中には，芸術的感覚も入っているのであります．美しき構造物は必ずやよい構造物であります．

自然の中に，野の花の美しさ，とぶ鳥の姿の美しさ，これらを鋭く認め，美しきものの創造へと努力することは，技術の世界のみでなく，人間に香りと豊かさとを加えるものであります．

新入生諸君

戦後の日本に生を受けた諸君は苦しい日本の社会の中に育ちながら，この日本の成長と共に今日に至ったのであります．

世界は繁栄しつつも，思想に経済に，あるいは政治に対立と抗争があり，それは清らかで正しい社会であるべき大学という領域の中にも，色々な問題を持ち込み，若い学生諸君にもその渦に巻き込まれるものもある．若くて純真なる諸君も大学生となったこと，その自覚の故に，或はすでに危惧と緊張とに心のときめきを感じていられるかと思います．しかし学問の道は遠く，4年の年月は余りにみじかいこと．この道程に棹さしつつ諸君は大学に学ぶものにふさわしく

知性によって行動し
道義によって方向づけられ
美的情操によって香り豊かなる人間へ

と修練を重ねることに闘志を燃やして頂きたい．特に道義の鋭い感覚こそは最も心にかけて磨いて頂きたい．善を自ら行ない，如何なることありとも悪を実行しないという経験を重ねることに闘志を燃やして頂きたい．

健康なる肉体こそ，この闘志をはぐくむものであることを思い，健康に留意することを終りに特に願っておきます．第二部の諸君には働きながらの勉強ということで，この点には一段と意をつかって頂きたい．

以上をもって私の諸君を迎える辞と致します．

53. 黒沢　清，森川幾久雄　名誉教授に

昭和43年3月31日付けで黒沢教授，森川幾久雄教授は停年退職し，同年4月1日付けでそれぞれ本学名誉教授の称号が授与された．（黒沢教授略歴前出）

森川幾久雄（もりかわ・いくお）理学博士　略歴

昭和 4. 3.15　横浜高等工業学校応用化学科卒業
〃　8. 5. 3　横浜高等工業学校助手
〃 10. 4. 1　〃　〃　助教授
〃 16. 5. 9　〃　〃　教授
〃 19. 4. 1　官制改正により校名改称　横浜工業専門学校教授となる
〃 24. 6.30　兼横浜国立大学助教授
〃 25. 4. 1　横浜国立大学助教授　兼横浜国立大学横浜工業専門学校教授
昭和26. 3.31　兼務免
〃 31. 4. 1　横浜国立大学教授工学部
〃 40. 4. 1～〃 43. 3.31　横浜国立大学工学部夜間学部主事併任
〃 43. 3.31　停年退職

第3章　第2節　統合問題と学園紛争　(昭和43年～昭和44年)

1.　学舎統合について

昭和24年，神奈川県内にあった横浜高工，高商，神奈川師範(男，女)，青年師範の諸校が相集まって横浜国立大学を構成したとき，それぞれの地に散在している校舎を一カ所に移転統合して，それぞれの歴史を持つ各学部が一つの大学としての学風を創造することこそ，真の University として必要であるとされた．ここにおいて校舎の統合が初代冨山学長以来の本学の願望となった．

現在本学は保土ケ谷ゴルフ場跡に13万坪（429,000 m²）の広大な土地を得て，昭和51年を目標として統合学舎建設にまい進しているが，ここに至るまでには先人のいうにいわれぬ労苦があり，長いけわしい道であった．この統合問題に端を発した昭和43年から44年暮れに至る学園紛争は，横浜国大紛争として当時各地で起こった大学紛争中でも最も世人の注目をひいた一つであった．このため本事業も一時停止するのやむなきに至った．統合についてはここではそのころまでのことを述べ，再開後のことは次節に記すこととする．

(1)　**当初案**　昭和29年，学芸学部を横浜市内の清水ケ丘に移転させ，ここを経済，教育両学部および一般教育の場とし，弘明寺に工学部を置く．このように大学のキャンパスを清水ケ丘地区と弘明寺地区の二地区に整備統合するという基本方針が決まった．これは名古屋大学の統合計画とともに，新制大学の統合のモデルケースとして注目されたのであった．しかし，それは名古屋大学が東山地区25万坪（83万m²）の敷地に建設を終わった時点で，なお本学は清水ケ丘の経済学部の地続きに4万坪（96,856 m²）を購入したに過ぎないままで停とんしていた．

(2)　**大船案**　昭和39年，このような事態を打開するため，全学部を大船にあった米軍施設跡地11万坪（363,000 m²）へ移転統合する案が検討された．この大船案は，地元県，市の好意ある協力によって進展が期待されたが，候補地内を鉄道関係施設が横断する計画が決定的であることがわかり，この案もまた中止せざるを得ないこととなった．

(3)　**第3案**　昭和40年1月，鎌倉市にあった学芸学部の校舎が火災で焼失したので，これが対策として横浜市清水ケ丘地区にプレハブ校舎を建設して急場をしのぐこととした．これによって一度廃棄された第1案が思わぬ火災から実質的に一部できあがったこととなった．

ここにいたって大学は再び第1案にもどるか，大船にかわるべき第3の土地を他に求めるかということとなった．清水ケ丘に建設された前記プレハブ校舎は，学芸学部の本来あるべき基準面積の半分にも満たぬ貧弱なものであり，全体としてはあまりに狭小であった．時の学長中村康治

ほか大学関係者は第3案を採るべきだとし，評議会にかけ同意を得た．

(4) **保土ケ谷に決定**　こうした新しい構想のもとに土地が物色された．そのうちたまたま．昭和40年4月，保土ケ谷ゴルフ場が他に移転する計画があることを知り，最有力候補地としてあげられた．この土地は直ぐ隣に常盤台公園，三ッ沢グラウンド，少しはなれて保土ケ谷公園があり，第3京浜国道につながる幹線道路に接し，広大な土地，なだらかな起伏，美しい芝生と，その中に点在する樹林があり，横浜市内で考えられる最良の地であった．

41年6月の本学第155回評議会で保土ケ谷ゴルフ場跡に本学を統合し，現有施設は統合移転の財源とすることが決定された．同年8月文部省から統合用地として適当であるとの正式通知を受け，本格的に土地取得の交渉にはいることとなった．

(5) **土地取得で難航**　ところが，この時期はすでに国の昭和41年度予算年度にはいっており，当年度の予算に本学の統合用地購入費を盛りこむことは不可能であった．他方ゴルフ場側は移転先の用地取得について早急にその資金を必要としていた．そこで学外者をも含めた統合用地取得のための「統合委員会」（会長加賀美　勝　新菱冷熱工業K. K. 社長，前出）を結成し，この委員会の手によって，とりあえずゴルフ場跡地を確保することにした．そしてこれにもとづき，昭和42年度から用地買収ができるように文部省に予算要求を行ない，これが認められるに至った．

横浜国立大学統合委員会規約（制定　昭和41年5月7日）

第1条　本会は，横浜国立大学統合委員会と称する．

第2条　本会の事務所は，横浜国立大学事務局におく．

等3号　本会は，横浜国立大学の統合の達成を図ることを目的とする．

第4条　本会に次の役員をおく．

会員	1　名
理事	若干名
監事	若干名

2　会長は理事会で推せんする．

3　理事及び監事は会長が委嘱する．

第5条　会長は，会務を総理し，本会を代表する．

2　理事は会長とともに理事会を構成し，会務を議決し執行する．

3　監事は会計を監査する．

第6条　理事会は必要に応じ会長が招集する．

2　理事会の議長は会長がこれに当る．

3　理事会は理事の過半数の出席をもって成立し，その議事は出席者の過半数の同意をもって決する．

第7条　本会に顧問をおく．顧問は，本会の会務について，会長の諮問に応える．

第8条　本会に参与をおく．参与は，本会の会務に参画する．

第9条　本会の経費は寄付金その他をもって充てる．

第10条　本会は，理事会が適当と認めたときは解散する．

第11条　本会の解散時における残余財産は，横浜国立大学に帰属させるものとする．

附　則

第1条　本会の設立当時の役員は第4条第2項および第3項の規定に拘らず次のとおりとする．

会長	横浜国立大学工学部施設拡充後援会会長代理	加賀美　勝
理事	横浜国立大学教育学部長	青木利夫
	横浜国立大学事務局長	鬼山信一
	友松会会長	金子　馨
	横浜国立大学工学部施設拡充後援会理事	兼坂忠次郎
	横浜国立大学工学部長	河東　準
	富丘会名誉顧問	栗原義潤
	神奈川県総務部長	佐々井典比古
	教友会会長	陶山千春
	富丘会会長	長尾貫一
	横浜国立大学経済学部長	長洲一二

	横浜市渉外部長	森　道夫		友松会副会長	葛野重雄
	横浜工業会会長	山口辰男	第2条	この規約は，昭和41年5月7日から施行する．	
監事	横浜国立大学工学部施設拡充後援会理事	阿部滋弘			
	富丘会相談役	大類武雄			

(6) **第1次土地購入成る**　こうした紆余曲折（うよきょくせつ）を経てようやく42年度に第1次として約7万坪の土地を確保することができた．横浜国大要覧昭和43年2月21日の項に「統合計画用地として旧保土ケ谷ゴルフ場跡地のうち211,299.35 m² を加賀美勝より購入した」とあるのがこれである．

この用地確保については，当時の学長中村康治が統合ニュース特集号（昭和43年）に統合の道程と題して次のように述べている．

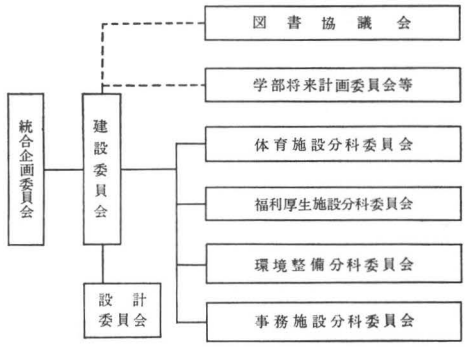
……ここまでくる道程(42年2月)は錯雑したもの，困難をきわめたものであった．縣，市，地元の政，財界，同窓会関係者よりなる統合委員会の結成とその活動，カントリークラブ側の好意，文部省，大蔵省の理解など今日に至るまで学外の協力はまことに大きい．特にカントリークラブが新しいゴルフ場建設のため国の予算化実現まで待っていられないとして，住宅公団へこれを譲る方針を決定したとき，機を失せず，30億円の巨費を立替えてこの決定をくつがえし，この地を大学のため確保してくださった加賀美統合委員会会長に負うところきわめて大きい．

大学発足以来20年，つまずきながら曲折を重ねた本学の統合計画はここに理想の校地を得た．……

(7) **第2次土地購入成る**　昭和43年5月31日は横浜国立大学創立20回目の記念すべき日であったが，この日保土ケ谷カントリークラブ跡地の第2次購入手続きが終わった．以上により42年度購入分と合わせて約12万坪（396,000 m²）を国有地とすることができた．横浜国大要覧によると「43年5月25日，168,653.71 m² を加賀美勝他2名より購入した」「同年5月30日，18,515.91 m² を間宮五兵衛より購入した」とある．この合計12万坪の敷地は当初予定計画の約90%に相当する面積であった．中村学長はこの喜びを次のように語った．(国大統合ニュース No. 6 より抜粋)

……ここに至るまでの学外，学内の多くの方々の努力と好意に対しての私の感謝の気持は，どのような言葉でも表わすことができない．学園創設20年目にして，いま統合建設の実現が確実となった．20年という歳月は決して短いものではない．普通の場合であれば，すでに校内の樹々も根を張り，その緑の深さ，枝の繁みと同じくその学風も定着しているであろう．大学創設が敗戦後の混乱期であったこともあろうが，戦前にそれぞれの歴史を持ち，伝統を築き上げていた専門学校が，ただ同一県内にあったというだけで，その他には必然的な何の理由もなくして一つの大学を構成したということは，大学としてのまとまりという点では，無から出発するよりはるかにむずかしいものを含んでいる．保土ケ谷の地に新しく建設される大学は，低迷を続けた大学一本化の課題に真剣にとり組むべき責任を全学の人々に課するもので，その方々と共にこれに献身することは学長に再任された私の使命であると信ずる．

(8) **統合企画委員会，連絡会議**　この統合を推進するための基幹の組織として統合企画委員会が昭和42年1月に設置された．委員会は学長・部局長・補導協議会委員長および専門委員（建築



建設委員会規程に基づく組織図

関係）によって構成されている．同年９月統合企画委員会の下部機構として建設，設計の両委員会を設けた．このうち建設委員会は下部組織として体育施設，福利厚生施設，環境整備，事務施設の４分科会を持ち，初代委員長に水戸部教育学部長がなり，積極的に統合計画を推進した．組織図で統合企画委員会を示すと別図の通りである．

横浜国立大学統合企画委員会規則　（昭和42年１月12日制定）

改正　昭和42年９月１日　昭和42年９月22日　昭和45年６月11日

（目的）

第１条　横浜国立大学（以下「本学」という．）の統合を促進するため統合企画委員会（以下「委員会」という．）をおく．

第２条　委員会は，学長の諮問により本学の統合に関する基本計画および基本設計の立案にあたる．

（組織）

第３条　委員会は，学長，部局長，建設委員会委員長，設計委員会委員長の職にあるものおよび専門委員をもって構成する．

（専門委員の任命）

第４条　専門委員は，学長が任命し，任期は特に定めない．

（議長）

第５条　学長は，委員会を招集し，その議長となる．ただし，学長に事故あるときは，学長のあらかじめ指名する委員がその職務を代行する．

（運営）

第６条　委員会は，構成員の過半数の出席をもって議事を開く．

（建設委員会および設計委員会）

第７条　委員会に建設委員会および設計委員会をおく．

２　建設委員会および設計委員会に関する細則は，別に定める．

（事務）

第８条　委員会の事務は，統合事務室において行なう．

附　則

この規程は，昭和42年１月12日から施行する．

附　則　（昭和42年６月１日）

この規程は，昭和42年６月１日から施行する．

附　則　（昭和42年９月22日）

この規程は，昭和42年９月22日から施行する．

附　則　（昭和45年６月11日）

この規則は，昭和45年６月11日から施行する．

建設委員会規程　（制定　昭和42年10月２日）

第１条　建設委員会は，本学の整備統合に関する次の事項について審議し立案する．

(1)　基本計画

(2)　設計委員会が作成した基本設計

(3)　学部，分校，図書協議会および各分科委員会が作成した建設計画

(4)　その他建設に必要な事項

第２条　建設委員会は，統合企画委員会委員（学

長を除く.）および次の委員をもって構成する.

(1) 学部および分校から選出された教官（各1人）
(2) 図書協議会協議員（1人）
(3) 教務協議会委員長
(4) 設計委員会および分科委員会委員(各1人)

第3条 建設委員会の委員長は委員の互選とする.

第4条 建設委員会に設計委員会および次の分科委員会を置く.

体育施設分科委員会
福利厚生施設分科委員会
環境整備分科委員会
事務施設分科委員会

第5条 設計委員会は，建設委員会の整備統合に関する基本計画に基づき，基本設計，その他建設に必要な設計を行なう.

第6条 設計委員会は，次の委員をもって構成する.

専門委員（若干名）
事務官，技官（若干名）

第7条 設計委員会の委員長は，統合企画委員会の議長が専門委員のうちから指名する.

第8条 分科委員会は，建設委員会の整備統合に関する基本計画に基づき，それぞれの施設の計画の原案を作成する.

第9条 分科委員会は，次の委員をもって構成する.

(1) 体育施設分科委員会
学生部長
体育担当教官（3人）
事務官（3人）
(2) 福利厚生施設分科委員会
補導協議会委員長
学生部長
学生健康相談所長
補導協議会協議員
学部の補導委員（若干名）
事務官（若干名）
(3) 環境整備分科委員会
専門委員（若干名）
事務官（3人）
(4) 事務施設分科委員会
事務局長
事務官（若干名）

第10条 分科委員会の委員長は，次のとおりとする.

体育施設分科委員会	学生部長
福利厚生施設分科委員会	補導協議会委員長
環境整備分科委員会	専門委員
事務施設分科委員会	事務局長

第11条 建設委員会および設計委員会ならびに分科委員会の事務担当は，次のとおりとする．ただし，技術に関する事項については施設課が担当する.

建設委員会	庶務部
設計委員会	施設課
体育施設分科委員会	学生部
福利厚生施設分科委員会	学生部
環境整備分科委員会	経理部
事務施設分科委員会	経理部

第12条 建設委員会および設計委員会ならびに分科委員会の運営に関し必要な事項は，この要項に定めるものの外当該委員会が定める.

附 則

この規程は，昭和42年10月2日から施行する.

一方学生側の強い要望によって，学生の意見をとり入れるための連絡会議が42年6月の団交の結果持たれることとなった.（これについては次項の学園紛争のはじまりを参照されたい.）統合ニュース特集号（昭和43年）によれば「建設委員会で案がまとまれば，それにそって設計委員会が各種の設計図を作る．できた素案は当然教授会にはかられ，また問題によっては連絡会を通じて学生の希望や意見を聞くなどの手続きをへて最終案をつくっていくことになる.」とある.

2. 学報および統合ニュースの発刊

(1) 学報 発刊

昭和42年10月10日を第1号として横浜国立大学学報が横浜国大庶務課より発刊された.「本学

のいろいろのできごとを全職員に知ってもらうというのがこの小冊子の役目であります」と中村学長は「発刊に寄せる」で述べている，本誌は学園紛争中もだいたい毎月1回発行され，45年12月10日号で VOL. 4 No. 12 となっておる．

発刊に寄せる　横浜国立大学長　中村康治

「学報」を発行することとなりました．本学のいろいろのできごとを全職員に知ってもらうというのがこの小冊子の役目であります．

大学の中の重要なるできごとは，それぞれの部局に正規のルートを通じて知らされるはずでありますが，案外にすみずみにまで行きわたっていないようであります．「そんなことは自分は少しも知らないことだ．」とか「あんなことをあのときやったのは理解に苦しむ．」とか言った声をきかされてがっかりすることも私はたびたび経験させられました．ただそれだけで終わればよいのですが，知っている人と知らない人との間，知っている人と一部しか知らない人との間に意思疎通をかき，誤解を生ずるということになることすらあるのをみるとき，少なくとも重要なるできごとだけは全職員に正確に知っておいていただきたいと私は思います．この小冊子がそのような役目の一端を引き受けてくれることを私は期待しています．

さらに学園内の楽しいできごとをつたえ，また職員諸氏の声をも交換する“Forum”となるならばと願っている次第です．

(2)　統合ニュース

統合問題を学内外にＰＲするため，昭和42年12月９日，第１号が発行され，以後43年11月28日 No. 9 まで発行されたが，その後学園紛争などのため発行取りやめとなった．

3.　学園紛争

ここで述べる本学の紛争とは，昭和42年６月に学舎統合問題に端を発した長期紛争についてである．

当時の全国を風靡（ふうび）した学生運動の本質については識者によっていろいろいわれているが，次のような見方も一つの見解であろう．

……全学連の結成されたのは昭和23年９月であった．当時学園は戦争により荒廃し，財政の窮迫に苦しんでいた．新しい日本を夢見ていた学生たちはその再建，復興のためにじっとしていられなかった．その年の６月，「教育復興闘争」「授業料値上げ反対闘争」などに全国の大学生たちがたちあがり，大学，高専約22校，学生約22万人が組織され，全学連が結成された．学生運動の最初の動機は，学園の再建，復興のごとき地味な建設的事業に学生として参加することであった，が……，しかし民主化の波に洗われた戦後学生にとって，因襲や制度にとらわれがちな大学管理者や学部セクショナリズムの教授会などに新たな価値と権威が求められないのは自然である．……学生は当然のことながら，民主主義も平和主義も，また国家の自主性も，きわめて単純かつ自己中心的に考えやすい．経済問題なども授業料値上げとか学寮費とか身近な問題には敏感である．これも生活意識の高まっている現代青年として自然である．全学連が燎原（りょうげん）の火のごとく全国の大学生を組織していったのも自然のなりゆきといえよう……(中央公論社・日本の歴史　よみがえる日本・著者蠟山政道)

このことはある点では，本学にもあてはまるのではなかろうか．本学の場合も紛争は統合問題から次第に「大学のあり方」に対する根元的な問題と政治的な意図とが複雑にからまりあった状態へと発展して「問題は単に学舎統合にとどまらず，教授会，学生，事務組織の位置づけ，学園

と国家権力の関係など，広く大学自治全体の問題に関連してきた.」（本学の基本見解〔後述〕による）そして学園閉鎖，授業放棄という最悪の事態に突入し，ついに工学部をはじめとして各学部とも機動隊の導入による封鎖解除により，ようやく44年暮れ学園再開となった．次に簡単にその経過をあえて述べることとする．

(1) 紛争のはじまり

昭和42年６月29日正午ごろ，統合企画委員会（統合の項参照）へ自治会中央委員など学生数十人がおしかけ，中村学長をとりかこみ統合計画を大学当局が一方的に推進しているとして抗議し，学生との間に統合のための連絡会議を作ることを要求した．この交渉は翌30日昼ごろまでつづき学長も，学舎統合に関する連絡会を設け，学生諸君の意見も十分聞こうと答えたので，ようやくこの長い交渉も終わった．

(2) 工学部見解

工学部では６月30日午後５時から緊急教授総会を開き「学舎統合に関する連絡会設置」の是非について話しあったが結論が出なかった．その後数回工学部教授総会で検討した結果，７月６日学長に対して本件は工学部教授会としては認め難いと回答した．７月10日工学部では，学生自治会に対し〔１〕かかる異常な状態で行なわれた交渉での話合いは認め難い.〔２〕大学の管理権の主体は教授会，評議会にある〔３〕学校側と学生側との意思疎通をはかるため正規の話合いの方式を確立すべきである，との見解を工学部補導委員長を通じて伝達した．

８月10日の評議会で工学部はあくまで筋を通してゆくことを堅持する旨を表明し，学長ならびに他学部長との間に結論が得られなかった．また工学部では夏休み前に学生自治会の間違った宣伝を正す意味から，「学生諸君に告ぐ」というプリントを２部を含む，工学部全員に送付した．その後，工学部側と学生自治会との間に数次の交渉があったが，大事には至らず約１年間小康状態がつづいた．次に学生諸君に告ぐの全文を掲げておく．

工学部学生諸君に告ぐ　昭和42年８月　横浜国立大学工学部教授総会教官一同

９月の開講も近づいたが，諸君はそれぞれ有意義に休暇を過ごしていることと思う．一方，われわれの大学には休暇直前に起こった遺憾な事件が長く尾を引いて，当工学部も少なからぬ影響をこうむっている．

今回の事件は，６月末に学生代表と称する一部の学生が学長らを長時間軟禁し，保土ヶ谷統合企画に，学生を教官と対等の立場で全面的に参加させるよう強要したことに，端を発している．夏期休暇前にこれらの学生から，諸君になされた過激な宣伝には，多くの誤りがあり，また，当工学部の考えも，諸君の大部分には公表されないまま休暇を迎えたので，ここに工学部の立場を明らかにするため，事件の経過の概要，その意味するものの重要性，および大学の管理運営の基本理念について，われわれの統一した見解を述べ，あわせて工学部の現状と将来の構想とを説明して，諸君の良識ある判断の資としたい．

事件の経過

諸君は，本学が保土ヶ谷のゴルフ場跡地に，近く統合されようとしていることは，すでに知っているであろう．

大学当局は，統合を円滑に推進するため，本年当初学内に，部局長，専門委員および補導協議会委員長をもって構成する統合企画委員会を設け，同委員会は，統合に関する根本方針の検討と提案とを行なってきた．

全学学生自治会および全寮連と称する学生らは，補導協議会の熱心な活動にもかかわらず，福利厚生施設についての統合企画案を不満として，

6月28日補導協議会委員長に対し，統合企画委員会へ，「統合に関する学生との協議機関」を直ちに設置すべきであるという提案を行なうように強要してきた．そこで，これを補導協議会にはかることを約束したにもかかわらず，上記学生らは，急を要するとしてこれにあきたらず，直接，翌29日の統合企画委員会に乱入し，同提案を学長に強要した．

統合企画委員会は，これに対し，「学生の福利厚生に関する連絡会設置案」を示したところ，学生らは，これをも不満とし，教官の制止にもかかわらず，会議室内に多数乱入し，会議の続行を不可能にしたばかりでなく，その後，引き続いて学長らを前後約30時間にわたり軟禁し，不法な圧力を加えた．

学長は，事態の収拾をはかるため，「学舎統合に関する大学側と学生側との連絡会」（学生側の主張によれば，この連絡会では，学生が教官と対等の立場で，学舎統合に関するあらゆる事項について，立案することになる．）を設けることの可否について，各学部教授会にはかることを約束した．

その後の十日ほどは，一部過激な学生の独断的な，ゆがめられた宣伝がくりかえされた．7月7日には，再度，学長に面会を強要し，学長室に乱入した．さらに，7月10日夜工学部学生に，教授総会の決議内容を説明しようとした補導委員に対して，学生代表と称する一部学生は，終夜にわたって，粗暴な態度をとり，野卑な言葉を浴びせた．このような事態が続いているため，学内の行事をはじめ，統合に関する事務までが，混乱し，阻害されている．

大学の管理運営の基本理念

大学の使命は，真理の探求とそれにもとづく教育とにあることは，いまさらここに述べるまでもない．学問の進歩のためには，その研究が外部の政治的，経済的，社会的，また宗教的な勢力によって干渉されることなく，自由に行なわれるように保障されなければならない．「大学の自治」は，この意味での「学問の自由」の当然の帰結である．

このような意味での「学問の自由」を守り，「大学の自治」を確保するためには，大学の人事権をはじめとして，研究と教育とを中心とする大学の管理権が，大学の評議会および教授会に確保されることが不可欠の要件である．すなわち，大学の管理運営の責任をもつものは学長および学部長，ならびに評議会および教授会であり，それらの機関が外部のなにものにも拘束されず，自由な意思決定を行なうことが保障されなければならない．

さて，大学教育が高校までの普通教育と異なる点は，教育が研究と一体化して行われるところにあり，大学に学び研究する諸君は，謙虚な勉学態度とともに自主的な批判・探究精神が必要とされることはいうまでもない．しかしながら，いかにおう盛な批判的態度や自発性が要求されるとしても，諸君は，なおまだ修学中のものであり，したがって勉学および研究上の諸問題については，教官の指導と助言とに従わなければならない．また，それらの点に関しては，大学自体が責任をもつべきものである．さらに，学生の自治活動は，民主的人間形成の方法の一環として，学生の身分に即して認められているものであるから，大学の自治と混同してはならないものである．したがって，学生は，当然のことながら，大学の管理運営に直接関与することはできないのである．

しかし，諸君は大学に対して，建設的な希望や，意見を述べることはできるし，また望ましいことでもある．それは，大学が諸君に向って開かれているものであり，諸君の新鮮な感覚ととらわれない考え方とが，大学の機能を高めるのに有益な示唆となることもあるからである．しかし，学生の本分は，あくまでも勉学にあるのであるから，諸君の短い在学期間を最も有効に過ごすためには，自ら研究する精神をもって極力学問の研さんに努めるべきである．

工学部の見解

今回の事件の経過は，ほぼ前記のとおりであるが，諸君の大部分は，もしこの事件が発展すれば，それがわれわれの大学の将来に，どのような重大な影響を与えるかについて，余り深く考えていないのではないかと推測されるので，ここに，工学部の見解を明らかにしておこう．

すなわち，まず，工学部の基本的な考え方として，このような異常な状態での強要された話し合いは，一切認めない方針である．教官と学生との間の正式な話し合いの場は，あくまでも全学的には補導協議会であり，工学部については補導委員会である．従来の補導協議会の運営に多少は不備

な点があったかも知れないが，われわれは今後これを改善するのにやぶさかではなく，具体的方策については目下鋭意検討中である．

また，工学部が，それにもまして危ぐの念を深くするところは，すなわち，一部学生の主張する連絡会なるものにあっては，学生が教官と対等の立場で，大学の管理運営に参画する点である．このような形での大学の管理運営のあり方は，前記の基本理念に反するものであり，大学の自治を放棄したことになるから，当工学部は絶対に認めることはできない．ここにおいてわれわれは，厳然として大学本来の正しい姿での自治を堅持する決意をあらたにするものである．

しかし，なお重ねて述べるが，われわれは，諸君が建設的な希望や意見を補導委員会等を通じて，十分に述べることをむしろ歓迎するし，従来にもまして，学生と教官との間の意思の疎通を図っていきたい所存である．

工学部の現状と将来の構想

工学部が昭和24年新制大学として発足して以来，学部充実のためにあらゆる努力が傾けられ，その間に3学科と1研究施設（小規模の研究所を研究施設という）が増設された．昭和38年に，はじめて新制大学に大学院工学研究科修士課程が設置されるにあたり，まず本学と広島大学とに設けられた．一方，学科課程に工学基礎の思想を盛りこんだ改訂が，全国の大学にさきがけて昭和35年から実施されてきたが，その後これにならう工学部が，全国にふえつつある．また，各学科の建物，研究設備ともに着々整備されており，特に神奈川県から寄付された工学部図書館は，全国の大学にその比を見ないほど特色のある立派なものといわれている．卒業生，産業界および教職員からの寄付による研究センターもきわめて特徴のあるものである．

工学部では，購買施設（生活協同組合）については，諸君の企画をほぼ適当であると認めたので，いろいろ困難な条件があったにもかかわらず，これを設置することにふみきり，9月の開講時には実現の運びとなった．福利厚生施設の現状は，残念ながら決して十分な状態とはいえないが，統合後にはできるだけ充実したいと考えている．

工学部の将来の構想としては，各学科，講座の充実，増設を図ることはもちろん，現在の大学院修士課程をさらに発展させ，博士課程の大学院にする方針で鋭意努力を積み重ねている．

また，現在の研究施設以外に他の研究施設を増設し，それらを総合した大規模な研究所にして，ますます関係学界に貢献することをも意図している．

以上，今回の事件に直面し，いささか所信を表明して工学部の立場を明らかにしたが，諸君が，一部の過激な学生に左右されず，また付和雷同して大局を見失うことなく，透徹した理性と思慮ある行動とにより，幾多先輩各位の努力によって築かれたわが学園を，ますます発展させることを期待して筆をおく．

(3)　7項目の要求

その後42年11月末から12月にかけて連絡会の運営についてひと騒動あったが，それから約一年間は大したこともなく過ぎた．43年12月4日，横浜分校で中央自治会，各学部自治会等と学長会見が行なわれ，学生側から次の7項目の要求があった．

① 学生施設の拡充と学生による完全管理
② 学部新設に伴う現学部の改悪，カリキュラム改悪の反対
③ 研究施設の拡充，マスプロ化反対
④ 文部官僚の大学横すべり反対
⑤ 学生部廃止
⑥ 工学部見解の撤回と自己批判
⑦ 大学当局の一方的統合推進を自己批判せよ

この時は午後3時から7時30分ごろまでで，話合いも割合なごやかに行なわれた．

つづいて同年12月17日，工学部で第２回学長会見が行なわれた．これは午後４時30分より行なわれたが，学生側は工学部見解徹回に関し，工学部長の出席を強く求めたので，午後８時30分ごろ小山工学部長が出席した．交渉は難航し深夜におよんだ．小山工学部長は「工学部学生に告ぐ」なる文書は多くの誤りがあり，学部長は全面撤回する立場に立ち，教授総会に提出する．19日までに教授総会で審議し結論を連絡する，などの工学部教授総会の方針と異なる確認書を取られ，また学長も「学生と意見の一致を見ない限り統合配置案の文部省への提出を行なわない」との確認書を取られた．18，19日行なわれた工学部教授総会では次の回答を自治会に出すとともに同文を一般学生に掲示した．

掲　示

工学部長は去る12月17日夜，中央自治会から (1) 工学部長は常に学生との会見に応じよ (2) 「工学部学生諸君に告ぐ」なる文書は撤回せよ，などの要求を受けた．それに対する回答は次の通りである．

〔１〕 昭和28年８月の手紙「工学部学生諸君に告ぐ」は撤回できないが，これからの工学部のあり方については，この手紙の内容にこだわらずに前向きに検討をはじめた．

〔２〕 工学部長は学生諸君に積極的に会う用意はあるが，12月17日夜のような状態では会えない．

(4) 団交つづく

43年はこうして暮れたが，翌44年１月１日清水ケ丘の学生食堂の火災と，それに伴う警官の強制現場検証により問題はさらにこじれて行った．自治会では，工学部見解の白紙徹回と学生部廃止問題を中心に，１月14日の団交を要求してきたが17日に至り，工学部教授会は種々会見の条件を付して，１月20日小山工学部長が自治会代表と会うと回答した．学生側はこれを聞き入れず，16日夜には工学部長室を占拠し，さらに17日夜事務局の封鎖を行なった．この間小山工学部長は病気のため入院したので，辞任を申出て，学部長代行として河東教授が就任した．

１月17日全共闘準備会が結成され，１月20日学長，全学部長との団交を要求してきた．大学側は評議会で検討のうえ，これに応ずることとなった．学生側は ① 学生部の廃止 ② 工学部見解の徹回 ③ 統合に関する問題等を持ち出した．

つづいて１月23日午後６時，清水ケ丘で団交が開かれ，学生部の廃止，事務官の罷免等の要求が出され，休みなく学長を追及，24日午前１時30分遂に学長は疲労はなはだしく，医師の診断の結果，退席休養した．自治会はさらに河東工学部長代理にほこ先を転じ攻め立てたので，同代理も遂に貧血を起こし，急救車により病院に入院するに至った．よって次回１月28日団交を再開せよということでひとまず解散となった．なお小山工学部長は１月20日辞任した．

(5) 最悪の事態に突入

大学側では学生側の要求する１月28日の団交再開には応じなかったので，教育学部は１月25日，分校は１月27日，経済学部，経営学部は１月29日，工学部は１月31日，それぞれ無期限ストライキに突入し，２月１日より全学封鎖が行なわれた．

封鎖と同時に教官は学内にはいれなくなったが，清水ケ丘では事務官はしばらく勤務をつづけ

ていた．工学部は松尾事務長の方針もあって，２月１日から，横浜市立横浜工業高等学校長 石山延雄の好意により，同校寿分校（中区翁町）へ移転して事務をとることになった．同事務長はあらかじめその日のあるのを予想して，重要書類，その他事務機器類を持ち出しておいたのであった．

寿分校の本館は戦災をうけた鉄筋コンクリート造であったが，事務室は木造校舎の一部を借用し，教授総会などはすべて本館の中の教室を使用させてもらった．そして７月末封鎖解除までこれを借用したのであった．

全学スト突入に際し中村学長は「学報」（44年２月10日発行）で次のように述べている．

紛争について思う　学長　中村康治

12月４日学生自治会の求めに応じた学長会見にはじまる今回の紛争は，大学側の対応が円滑を欠き全学ストライキへと発展したことは誠に残念なことである．

本学の統合問題は新制大学発足以来の懸案であり，幾多の先輩方の努力の空しくなった苦い経験の後，大学の将来を託すに足る理想の土地を得て，その地へ建設する計画第一案の提示にまで至って停屯することになった．省みるに４年前の大船案，さらに保土ケ谷案へと計画は拡大しながら，より大きい可能性を求めて変わっていった．鎌倉校舎火災復旧をおさえての統合計画遂行は学内一部に大きい不便に耐えることを要請しつつ，一日も早い新建設開始を期し，それに向っての努力がなされて来た．

しかし大学変革の急速な動きがあらわれてきたとき，従来の大学像のもとに将来を卜した計画は果してこのままでよいであろうか，これまでの計画は再検討さるべきではなかろうか．こうした疑問を私は私自身に投げてきた．同時にそれは私よりも大学の将来を担う若い方々の意見，またそれらの人々の研究と討議の上に求めらるべきであろうと考えた．こうした思いが12月４日学生との会見の席上大学の「たましい」を求めねばならないという私の発言となった．

「工学部見解」は大学における学生の位置づけに関する基本問題を含んでいる．それについて学生の自治が「ままごと」自治か，責任ある社会的一個の人間と同じ責任をとる人間集合の自治と考えるか，その何れかによって撤廃する，しないがきまることであろう．その何れをとるか，それは学生自ら真剣に考えるべき問題であると私は考えた．これが「ままごと」自治か否かという私の発言となった．その後曲折を経て「工学部見解」は廃棄された．こうして学生側には重い責任が課せられたことになった．

12月17日学生側との第２回会見において保土ケ谷配置計画案は学生側と基本的意見の一致をみるまでは文部省へ提出しないと約束したが，それは配置案について学生側は勢力的に検討を行なうという前提のもとでの約束である．学生側に対してのこの私の約束は教官側には不満の強いことがみうけられたが，これによって学生自身が責任を担うことになるわけで，私は敢えてこれを行なった．

元日２回にわたり自治会室より出火，これは不審火として極めて不可解な事件であったが，このとき学生側の示した行動は一人前の責任をとる自治を主張する者のそれと言えるであろうか．

こうして１月20日の所謂大衆団交となったが，私自身風邪で高熱を出し，１月12日にはじまる団交要求に応ぜられなくなるなど多くの学生の要求に円滑に応えられず，「学生資料」なる学生部職員の作った文書の暴露によって，学生部に対する不信感は多くの学生のみならず，教官の中にも深くなり，学生部廃止の要求は教授会側においても現実性をもって方向づけられるに至った．

こうして統合問題そのものはいつか後退し，学生部廃止問題としてストライキは燃え拡がっていく観を呈した．しかしその間保土ケ谷配置図に対しては白紙撤回となって要求が強まってきている．それは配置図の勢力的検討放棄の結果によるものであろうか．

設計委員会が長い時間をかけてまとめた配置案は全大学へはじめて示された具体的な第一案であり，それについては各方面からの意見が求められている．この案がいけないということであれば，これを白紙にかえして第二案を求めることも当然

ありうると私は考える．さらに大学のたましいを求めて統合を最初の点から考え直していこうという意見もあると思うし，私自身もその必要を感じている．そこまで原点に立ち帰ったときには保土ヶ谷の土地そのものが使用可能かどうかの検討からはじめねばならないという主張があるともきく．理論的にはそれも正しいことであると私は考えるが，現実的に土地のかく得が如何に困難なものであるか，またそれが客観的には大学の校地として決して悪くない，否望んでも得られないような条件をそなえた土地が，幸運なめぐり合せと協力との結果殆んどがかく得された現在，そこに理想の大学をどう空間化するか，それこそ技術者の仕事である．保土ヶ谷の地に大学建設が出来ないという技術的見解を示す者は技術を語る資格のないものである．

もう一つ本学における現実的問題は教育学部の施設を一日も早く改善することである．理想と現実，二つの問題をもつ本学の統合計画は両者を区別しながら，その調和を求めて現実的な解決へ向って早く前進を開始しなければならない．

いま紛争はこの本質的な問題をはなれて学生部問題にとらわれているように見える．一昨年来の学長の行動に対する自己批判，工学部見解の廃棄，学生部廃止，これで大学の「たましい」は入ったと云う意見もあるが，私の発言した「たましい」はこのようなものではない．一日も早く大学の本質の問題に焦点が合されることをこの際特に強く私は望む．

(6)　田口工学部長の就任

辞任した小山工学部長のあと，この難局をうけて建築学科教授田口武一が工学部長に就任した．就任に際し同学部長は次の通り述べた（学報44年2月10日発行による）．

就任あいさつ　工学部長　田口武一

昭和44年2月1日という日は，いわゆるストライキと同時に学部封鎖という当工学部にとって開学以来の最も悲しい日であったと思います．そしてこの日がまた私の発令の日であったということは私の生涯を通して忘れることのできない日となることでしょう．

このような苛酷な時期に際し，突然私が皆様方から工学部長として選ばれましたことは，おそらく私の能力を過大評価された結果と思いますと同時に，あるいは私 如き者に何等かの期待をされたことかとも考えられ，大へん有難いことと存じております．かくなりました上は，ひたすらに工学部のために，また大学のためにたおれて後やむという以外に何が考えられましょう．懸命に努力する以外に何もありません．

さて，現在の大学には研究に教育に数々の難問が山積しておりますが，私は昨今特に当工学部の前身の時代に行なわれておりました鈴木煙洲先生の無賞罰，無試験，無採点という三無主義をしみじみと思い出しております．このような教育の理想が今の時代にはどう評価されるべきでありましょうか，このようなことは遠い過去のことがらであって，現在では絶対に適用できないことなのでしょうか．いろいろと大学の将来像を思考する中に度々浮び上って参ります．

いずれにしましても余りにもむずかしいことの多く将来の予測さえできない時期であります．教官，事務職員の皆々様，ならびに多くの学生諸君の御協力を得て，よりよい大学への改革にこん身の努力を傾注したいと存じますので，何卒くれぐれもよろしく御願い申しあげ，就任に際しましての御挨拶といたします．

田口武一（たぐち・たけかず）工学博士　略歴

昭和10.3	東京工業大学建築学科卒業
〃 10.4.1〜〃 16.8.29	横須賀海軍建築部勤務
〃 16.9.24	横浜高等工業学校講師嘱託
昭和18.6.25	横浜高等工業学校教授
〃 25.4.1	横浜国立大学助教授工学部
〃 32.7.16	横浜国立大学教授工学部
〃 44.2.1〜現在	構浜国立大学工学部長

(7) 中村学長辞任

大学では2月5日，武蔵小杉の小杉会館で，評議会を開き，自治会要求の2月6日の団交には応じられないが，次週には開催したい，ただし学生要求の学生部長，同次長，課長の団交出席は拒否すると回答した．学生側は2月11日全共闘組織を成立させ，いっそう態度を硬化した．2月17日中村学長は学長としての紛争解決の方針と評議会の多数意見とが一致しないとして辞表を提出した．

中村康治学長は辞任にあたって次のように述べている（学報44年4月1日発行抜粋）．

> 今回の紛争で統合の実現は大分おくれることにならざるを得ないと思います．学生の要求とは別に統合問題について将来の大学像を目ざして白紙からもう一度考えてみることもまた必要ではないかと思います．
>
> 学長として私は私なりの考えからできる限り中立的立場をとろうと努力をいたしました．これは最初は従来の大学内の事情を考えてのことでありましたが，統合計画を進めていく途中，私が特定の学部に特別な関心をおけば，自然に公平にやれないであろう．私が学長を終えた後，工学部で再び仕事をするといたしますと，つい自分のことが中心になりそうであります．凡俗の私心でありましょう．それを断つ意味で再び工学部には帰らない決心をして仕事をしておったのであります．しかし，今回の紛争に際しての学生側の要求や考え方をみますと，工学部と私とが一体になって統合推進をやっているといった主張がみられます．これは統合委員会の存在ということにも原因があることとは思いますが，この点は私としては残念な気持であります．また私は教職員の中にも学生側の考えと似たものがあることを知って，むずかしいものであると思い，反省もしている次第です．私の師が人間60歳にならぬと考えは定まらぬと言われました．未熟者の私の考えは流れ動いていたと思われます．そうした事が私の考えが正面切って出ていかなかったのであろうかと思います．また学内の多くの方々の希望を十分吸収しえなかったのであろうと思います．……紛争さなかに去ることについて深くお詫びを申し上げます．一日も早く紛争の解決することを祈る次第です．（3月1日記す）．

(8) 水戸部学長事務取扱の就任と紛争解決への努力

中村学長辞任に伴い44年2月22日の評議会で，水戸部正男教育学部長を学長事務取扱と決定した．水戸部学長事務取扱は各学部長および分校主事で執行部を構成し「学生部廃止の方針を堅持し，積極的に団交に応じ，紛争解決に取組む姿勢」を明らかにした．また紛争処理に敏速に対処し全学の意思統一のための臨時拡大評議会（臨拡評）を設け，かつ問題になった学生部の活動調査のため，学生部問題調査委員会を発足させ，さらに大学改革の根本問題を解決する4つの分科会をこの臨拡評と緊密に連絡させて，早急に具体的方針を打ち出すこととした．

このような状況下では特に広報活動の必要性を認め，全学広報委員会，学部広報委員会を発足させた．工学部では昭和44年2月13日に工学部長名の「お知らせ」という形で第1号を出し，その後同年3月6日第3号から「工学部広報」と改め，46年7月2日第42号まで発行した．一方全共闘は闘争方針に革命をめざす政治活動力を次第に強くし，大学側にのめないような条件をつぎつぎと出し，それを認めなければ団交には応じられないとし大学側と断絶状態となった．一般学生もまた次第に全共闘と離れる傾向を示してきた．

3月の卒業，入試など別項のように例年とは極度に異状ながらも，どうやら終えたので，大学側ではまた紛争一本にとり組み，5月8日「基本見解」を全教職員，学生に発表，送付した．こ

れは，今回の大学紛争の本質を論じ，学生要求の問題点に答えた大学改革の基本方針を示したものであった．「基本見解」はあまりに長文にわたるので省略するが，そのまえがきに次の通り述べている．

> 紛争以来既に3ヶ月余，問題は学舎統合問題に端を発し，“工学部見解”問題をまじえつつ，学生部問題に触発され拡大深化され，問題はたんに学舎統合や学生部の機構にとどまらず教授会，学生，事務組織の位置づけ，学園と国家権力の関係など広く大学自治全体の問題にかかわっている．それは今日，全国的な，さらには全世界的な規模で爆発している現代大学革新の潮の，わが横浜国大におけるあらわれにほかならず，進んでは現代における社会改革，学問と知性のあり方を根底から問い直す動きの一環をなすものというべきであろう．

6月14日，さらにこれを具体化した「第2の基本見解」を全学生に送り，全学集会を計画した．それらの基本方針をもって5月中旬からクラスごとや，ゼミ単位，科単位で一般学生との話合いを開始した．

まず2部自治会は，全学交渉委員（大学側），大学執行部全員と交渉にはいった．一方昼間の学生も改革推進準備会（工学部革推），全学連絡会議などが成長し，全共闘を攻撃し，紛争も次第に自主的解決の方向に向かっていった．

工学部は，他学部に先がけ6月30日に工学部集会を計画したが，この時は全共闘の妨害によって実行できなかった．一方臨拡評は全学集会を開いて全学生に大学の方針を伝えようとしたが，時期，方法等についてなかなか意見が一致しなかった．

(9) 工学部の封鎖解除と授業再開

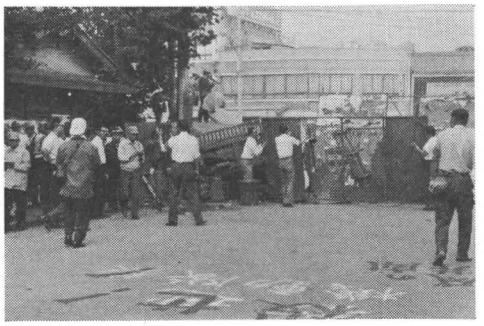
この全学封鎖中，4月5日弘明寺構内，7月7日清水ケ丘構内で不審火災が起こり，また清水ケ丘にはたびたびボヤが起こった．このような事情や，大学立法成立予想，翌年度入試などを考え，工学部長は学長事務取扱と共に管理者としての責任上やむをえず機動隊の導入により7月25日封鎖を解除した．

すなわち44年7月25日午前7時，水戸部学長事務取扱，田口工学部長らは正門前で「構内の学生及び職員は7時10分までに構外に退去せよ」と退去命令を発し，機動隊約500名の応援のもとに教職員が学内にはいり，正門のバリケードを撤去し，封鎖を解除した．同時に多数の県警検証班が検証を開始した．構内には全く学生の姿はなかった．午前9時55分検証を終わり，機動隊の

学内荒廃の状況 44.7.25（工学部正面）

同左（工学部長応接室落書）

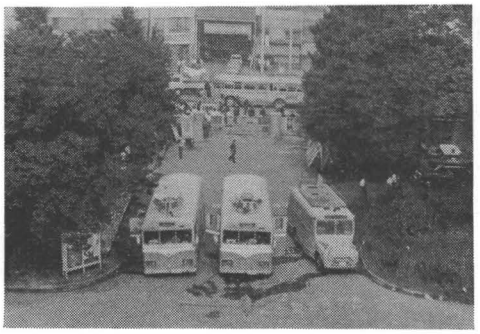
名教自然碑前より正門



正門のバリケード撤去

本館前の機動隊の整備

封鎖解除時の工学部　44.7.25



正門のロツクアウト

大部分は退去し，1個小隊が残り常駐，警備にあたった．この常駐は，工学部内の諸状況がほとんどすべて復旧した10月6日まで続けられた．

6カ月余の封鎖であったが建物の破壊はほとんどなかった．本学では封鎖解除と同時に次の声明書を発し，工学部正門前にもこれを掲示した．なお封鎖解除後もしばらくは本学職員および特に許可された者以外の構内立入りを禁止した．

声明書

1. 国有財産管理責任者としての職権に基づき，封鎖を解くため，機動隊を導入した．
2. 理由

〔1〕 本年2月1日以来6ヶ月近く封鎖が続き，教職員の構内立入りが阻止されて，研究施設の荒廃，事故発生の可能性の増大によって，このままの状態をこれ以上放置することはできない．

〔2〕 大学当局は今日迄あくまでも話合いによる解決を望み，全学集会，学部集会の提案をいく度か行なってきたが，いずれも学生自治会中央委員会によって拒否された．同委員は集会への事務官出席，電話設置等問題の本質とかけ離れた条件をたてに，大学からの集会提案を拒否してきた事実か

ら，同委員会側には大学と話合う意志が全く無いと結論せざるをえず，話合いによる解決の望みが断たれた．

〔3〕 一方工学部の一般学生による平和的紛争解決への動きも見受けられるが，全共闘，工闘委による暴力的圧力により，具体的成果を期待することは困難となり，さらに近日中に開催を予想される一般学生による集会が，全共闘等により暴力的に阻止され，学内において重大な暴力事件が発生する懸念が生じてきた．大学当局は，学内においてこのような暴力事件が発生することを断じて許すことはできない．

〔4〕 学舎のバリケード封鎖の理由が大学に対する改革の要求から離れ，学内問題と無関係な政治闘争の手段に転化し，これに伴って学外者（外人部隊）の侵入のおそれが増大し，大学施設の破壊が予想されるようになった．

3. 今後の処置

9月に授業再開を目標として，学舎を一時閉鎖し内部の整備を行なう．

昭和44年7月25日　　横浜国立大学長事務取扱　水戸部正男
横浜国立大学工学部長　田口武一

今回の機動隊導入による封鎖解除は，これまで工学部の取ってきた方針の一大転換であり，また，学生の事前察知による破壊工作を防ぐため教授総会へも諮ることができずに実施されたが，紛争解決への第一歩としてこれを認め，工学部のその後の足並みはきわめてよくそろったものであった．

しかしながら，翌7月26日から8月10日に至る間は連日のように正門前で，学生が騒ぎ，各種の学生団体からの予備折衝，団交要求の申入れが行なわれたりした．

8月5日，工学部では臨時学生大会を開き，新工学部自治会を発足させた．工学部側では現段階における唯一の交渉相手としてこれを認め，数次にわたる交渉がつづけられた．そして9月11日から，それまで自宅待機させられていた1年生を最初とし，各科各学年で逐次授業が再開された．

(10) 水戸部学長事務取扱の辞任

水戸部学長事務取扱は前に述べたように，臨拡評の話合い路線による自主解決方針と異なる工学部における封鎖の強制排除を評議会にも部局長にも相談なく行なったことにつき，これらの人々からの不信をまねき学内の意見の一致をみないことの責任をとり，44年9月1日辞任した．

辞任にあたりて　水戸部正男（9月6日）

私は8月14日協議会の席上で学長事務取扱の辞任を申し出で，同21日の協議会で受理され，9月1日付けで解任の辞令を受けた．辞任の理由は，もともと暫定的短期的である学長事務取扱がすでに3月1日就任以来半歳になり，しかも紛争の解決にはほど遠く，あまつさえ紛争解決の方策について学内の意見は必ずしも一致を見ないことに責任を感じたからである．幸いに学識・経験豊かな越村教授にあとをお引き受けいただいたから私は安心して学部にもどることができる．

学園にとって創立以来の非常事態に私ごとき者が6か月間も責任ある重要な地位を与えられたことに不思議な感をもたざるをえないが，この間多くの方々のご支援をいただいたことを深く感謝申し上げたい．いろいろ思い出は多いが，2回にわたった“基本見解”は執筆者が精魂をこめ，知能をしぼったもので，紛争解決の指針となる内容をじゅうぶんもっており，全学がこれを討議の資料として大いに活用していただきたいと思う．

（学報　44.9.10号）

水戸部正男（みとべ・まさお）法学博士　略歴

昭和10.3　東京文理科大学国史学科卒
〃 10.4.5〜〃 18.3.31 公立学校教諭
〃 18.4.1〜〃 22.3.14 神奈川師範学校助教授
〃 22.3.14　神奈川師範学校教授
〃 24.6.30　横浜国立大学助教授学芸学部
〃 37.4.1　横浜国立大学教授学芸学部
（41.4.5　教育学部と改称）
昭和42.5.10〜〃 44.8.15　横浜国立大学教育学部長
〃 44.3.1〜〃 44.9.1　横浜国立大学長事務取扱
〃 46.9.1〜現在　横浜国立大学教育学部長

(11)　越村学長事務取扱の就任と紛争解決への決意

昭和44年9月1日，経済学部教授越村信三郎は学長事務取扱に就任した．9月4日次のように学園再開を全学生に呼びかけ，積極的に本問題に取り組んだ．

学長代行をお引受けするにあたって　越村信三郎（1969年9月4日）

わが横浜国大の頭上には，ダモクレスの剣がつるされています．危機というほか言いようがありません．

この大学を廃校にみちびくことは，民主主義のトリデを掘りくずすことを意味します．

一致して望みさえすれば解決は即座にえられるのです．勇気をふるってたたきさえすれば重い扉も開かれましょう．

全学のみなさん！　いまこそ力と心を合わせて外からの圧力を排し，内ではドラスチックな改革を推進して，真理探究のゆるぎない場を創りだすために努力しようではありませんか．

（学報　44.9.10号）

越村信三郎（こしむら・しんざぶろう）経済学博士　略歴

昭和8.3　東京商科大学卒
〃 8.3.31〜〃 12.3.31 横浜高等商業学校講師
〃 12.3.31　横浜高等商業学校助教授
〃 14.9.30　横浜高等商業学校教授
〃 24.6.30　横浜国立大学教授経済学部
昭和36.4.1〜〃 38.3.31 横浜国立大学経済学部長
〃 44.9.1〜〃 45.3.1　横浜国立大学長事務取扱
〃 45.2.28〜現在　横浜国立大学長

(12)　工学部集会

44年6月ごろから全共闘系の学生自治会は，次第に一般学生の支持を得ることが少なくなり，その一部はいわゆる民青系へと近づく様相を示していた．前述のように，8月5日に発足した新学生自治会を大学側が正規のものとして認めるころには，民青系新自治会として応化3年奥村欽一委員長が中心となって，大学側にいわゆる団交を申し入れていた．

工学部当局は，9月17日午後1時過ぎから工学部体育館で，学生約180名，教官約60名参加のもとにこの新執行部と学部集会（いわゆる大衆団交）を行ない，①工学部見解　②学生との交渉およびストライキ　③学生の自治活動および処分制度　④学生の大学の管理，運営への参加　⑤学生部問題　⑥厚生施設　⑦大学自治防衛の7項目について話合った．この集会で大学側と学生側とはほぼ合意に達したが，7月25日の機動隊導入，常駐およびストライキ中の授業再開などについて，両者の見解は大きく食い違っていた．また，当日の学部集会さえ機動隊によって全共闘系学生の妨害を排除してもらって，ようやく開催している点を工学部長から強く指摘されたりして，大学側のかなり強い姿勢が示されていた．

しかし，この集会の７項目要求などが，後に大学執行部と学生自治会統一代表団との全学集会に提案される確認書のもととなるものであった．

(13)　全学集会

44年９月29日午後，横浜公園体育館で，大学執行部と学生自治会統一代表団（代表電気３年種帰建夫）共催の全学集会が開催された．

この集会は正午からの予定であったが，予定よりかなりおくれ，午後３時30分からようやく開かれた．この間，全共闘系学生の執ような抵抗にあって，相当多数の学生と教官の大部分が入場できず，また，開催中３方の出入口付近で繰返される小ぜり合いのため，しばしば議事が中断した．

交渉は，学生側が紛争の経過報告をしたあと，９項目にわたる要求を大学側に示し，大学側がこれに答える形で進められた．学生側要求の９項目のほとんどは合意に達したが，工学部の機動隊導入，常駐，またストライキ中の授業強行などについては，田口工学部長と鋭く対立し，結局もの別れとなって，午後７時30分ごろ閉会した．そしてこの９項目の合意事項は，10月２日全共闘の妨害をおそれ，東京本郷の学士会館で双方の署名を終わり，各学部および学生代表団側にそれぞれ持ち帰り，それぞれが承認してから初めて確認書が発効することであったが，工学部では，このうちの３項目について承認せず，10月14日の評議会でもこれが了承されて，12月27日付けで次のような確認書が正式に交換されたのであった．

また，この全学集会の会場として借用した横浜市の体育館は，全共闘系学生と統一代表団側の学生との間の，終日にわたった乱闘のため，100万円以上の損害を生じ，後にこれを学長はじめ，教官の有志が弁償するということになった．

確　認　書　1969年12月27日

横浜国立大学学長事務取扱	越　村　信三郎	横浜国立大学	
教育学部長	河　村　十寸穂	全学学生自治会統一代表団代表	種　帰　建　夫
経済学部長	長　洲　一　二	経済経営学部学生自治会委員長	清　　晌一郎
経営学部長	清　水　　新	学芸学部学生自治会委員長	中　村　章　悟
工学部長	田　口　武　一	工学部学生自治会委員長	奥　村　欽　一
教育学部横浜分校主事	宮　田　直　憲	分校学生自治会委員長	嶋　田　光　道
経営学部夜間学部主事		経済経営学部第２部	
経済学部夜間学部主事	河　野　五　郎	学生自治会委員長代行	佐　藤　完　治
工学部夜間学部主事	小　栗　　達	工学部第二部	
		学生自治会委員長代行	内　山　孝　道

Ⅰ　大学の管理運営の民主化

(1)　大学当局は，いわゆる「大学の自治＝教授会の自治」という考えを廃棄し，「工学部見解」を白紙撤回する．

(2)　大学は教官，学生，職員の３者によって構成され，３者はその機能と立場の相違にもかかわらず，それぞれ固有の権利をもち，それぞれが大学の自治を守る責任ある主体として，ともに大学の自治を担うものであるという基本原則を確認する．

(3)　教官，学生，職員の意思を大学運営に正しく反映させるため，全学的な協議機関を設置する．この機関は，教育，研究，管理運営にかかわる相互に関係ある重要事項につき，３者のいずれかが提起した場合，これについて協議・交渉する場であり，ここで合意に達した事項については，評議会，教授会等の審議・決定機関において尊重される．この協議機関の性格，構成，権限等について，早

急に準備委員会を設けて検討する．

(4) 学長の選出には，なんらかの形の学生参加を認める．その具体的な形態については今後検討する．

(5) 評議会・教授会は，その議題および決定事項を原則として公開する．

(6) 大学の予算，および決算の具体的周知方法について今後検討する．

(7) 学生施設（学寮，学館，サークル室，自治会室等）は，それを利用する学生自身の手で責任をもって運営されるべきである．「〇管規」「学館設置要項」は文部省が大学施設の実質的な管理運営に介入することであり，われわれはこれを認めることはできない．また「負担区分」についても，文部省が一片の通達で全国の大学を一律に規制すべきではないと考える．学寮，学館などの学生施設の管理運営は，明確に法の制約がある事項は別として，実質的にはこれを学生に一任する．

Ⅱ 学生の権利の保障

(1) 学長，学部長，分校主事，二部主事および学生部長は，各単位自治会のいずれか，あるはい二以上が協議ないし交渉を要求し出席を求めたときは，これに応ずる．この協議ないし交渉は原則として公開する．

交渉団体の構成員全員の参加を前提とする交渉を要求し出席を求めたときにも，これに応ずる．具体的ルールについては，今後協議して決める．

(2) 学生の総意に基づいて集団的授業放棄（「ストライキ」）が行なわれた場合，教官は処分や授業強行によってこれに対処するのではなく，これを行なうにいたらしめた原因を取除くよう努力する．（なお，「ストライキ」の概念のなかには，占拠，封鎖その他の暴力行為をふくまない．）

(3) 学生の自治活動は，他の構成員の権利の侵害，施設の損傷等をともなわないかぎり，自由であり，これを保障する．この観点から施設の使用，集会，掲示などにかんする現行の諸手続，諸規則を学生と協議して改める．

(4) 学生の自治活動を対象とする処分は行なわない．その他についても教官側による一方的処分は行なわず，現在の処分制度は学生と協議の上，根本的に再検討する．

なお，今回の「ストライキ」については，処分を行なわない．

Ⅲ 学舎統合について

(1) 保土ケ谷地区への統合計画のこれまでの立案過程において，学生の意思が充分に反映されてこなかったことをみとめ，統合について全学の意思を反映させるための協議機関を設ける．

(2) 43年12月中村前学長による「現在の段階において統合推進における学生と教官との基本的一致がみられないので，12月の配置案の提出は中止する」との確約を再確認する．

配置案は現在白紙の状態にある．

Ⅳ 学生部問題について

(1) 学生部長は今後とも教官が兼任する慣例を保持する．その選考過程には学生の参加を認める．

(2) 学生部廃止の基本方針を堅持し，終局的には大学がすべての人事権をもち，教職員・学生の意見が充分反映される厚生のための部局をつくるべく努力する．学生部廃止にいたるまでの暫定案は，今後学生と協議して決める．

(3) 学生部問題調査委員会の本報告を検討して，他大学への第二次アピールを早急に作成し，公表する．

(4) 学生部予算は公開し，そのうち学生関係の予算の配分は，協議機関を経て，学生間の協議に基づいて決定する．

Ⅴ 大学当局は焼失施設の復旧，その他厚生福利施設の充実に努力する．

Ⅵ 授業の内容，方法，カリキュラムについて，学生の意思を反映させる具体的方策を検討する．

Ⅶ 機動隊，ロックアウト問題

(1) 「大学紛争」の解決は大学構成員の自主的努力によって行なわれるべきであり，原則として外部の力（警察力等）に依存することはしない．

(2) 火災，盗難，傷害等の刑事事件にともなう警察の学内立入りが問題になる場合でも，できうるかぎり学生自治会と連絡をとるなど，大学自治の侵害にならぬよう万全の措置をとる．

Ⅷ 自衛官，警察官の入学問題

(1) 自衛官，警察官の派遣入学は，派遣母体の性格が学術研究の府としての大学の基本的性格となじまないのでこれを拒否する．

(2) いわゆる個人入学については，望ましい教育環境を確保し，大学自治をまもるという見地から個々の場合について慎重に判定する．

Ⅸ 「大学法」問題

(1) さきの評議会決定に基づく前学長代行声明，各教授会声明，評議会確認に明らかなとおり，「大学運営臨時措置法」には基本的に反対である．

上記のうち，Ⅰ……(7)，Ⅱ……(2)，Ⅷ……(1)の3項目については，工学部教授会で未承認であるが，今後承認された場合は，評議会の承認があったものとする．

了解事項

(1) 確認書にⅠ(3)ついて

協議機関への職員の参加の方式については今後検討することとし，さしあたり教官，学生の二者により準備委員会を発足させることができる．

(2) 同Ⅱ全体について

体育会の問題については，本Ⅱ項の精神に基づいて，今後学生と協議する．

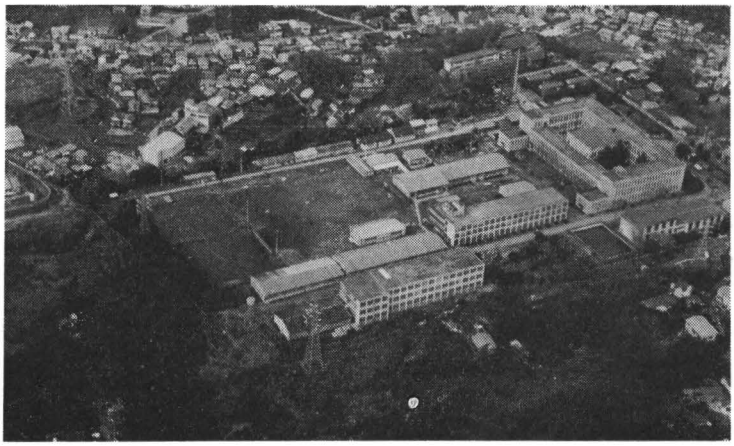
(3) 同Ⅳ全体について

学生部問題にかんする大学当局の謝罪と文部省にたいする抗議文のことについては，学長代行が全教官を代表して，何らかの形で所信を表明する．

(14) 清水ケ丘封鎖解除

10月9日越村学長事務取扱は清水ケ丘校舎を封鎖，占拠中の学生に対し「国有財産の適正な管理，大学の再建，運営上重大な支障がある」として，すみやかに封鎖を解き，退去するよう通告を郵送した．また各学部長，分校主事も連名で同趣旨の退去要求文を郵送した．

工学部が7月25日に突然機動隊を入れて封鎖を解除したときには，大学としての話合い路線を勝手に逸脱したとして，他学部からは激しく非難されたが，清水ケ丘の封鎖も結局は機動隊の力に頼らなければ，最後の解決はつかなかった．



清水ケ丘 (昭和44年10月)

すなわち10月29日午前9時，越村学長事務取扱は清水ケ丘占拠中の学生に対し退去命令を伝え，県警機動隊の協力により，正門バリケードを徹去，9時30分から現場検証が行なわれ，10時30分終了した．実に9カ月におよぶ封鎖であった．

封鎖解除と同時に次の告示が出された．

立 入 禁 止

構内整理のため，本学教職員および特別に許可された者以外は，当分の間本学構内に立ち入ることを禁ずる．

昭和44年10月29日

横浜国立大学長事務取扱　越　村　信三郎

告　　示

1. 本日午前9時，警察力の協力のもとに清水ケ丘キャンパスの封鎖を解除した．
2. 大学はこれまで，全共闘の諸君による自発的な封鎖解除を求めて，なしうるかぎりの努力をはらってきた．一方，各自治会は封鎖解除を決議し，また全学集会をとおして大学と自治会統一代表団との間で「確認書」が承認され，この線にそった大学改革が推進されることになった．今やキャンパスの封鎖占拠は，大学改革を妨害するのみならず，大学そのものの崩壊をもたらそうとしている．大学は，封鎖解除のあらゆる手段を検討し，追求した上で，やむをえぬ必要事として本日の措置をとった．
3. もちろん本日の封鎖解除は，真実の紛争解決，真実の封鎖解除のための経過的な一歩にすぎず，今後の大学改革のための出発点の一つにすぎない．大学は，大学の問題は大学構成員の理性的，自主的な努力によってのみ解決されるとの原則を堅持している．
4. 9カ月にわたる封鎖の結果，キャンパス内の荒廃は極度に達している．目下教職員全体が応急の保全と復旧の作業に従事している．この緊急異常事態の現在，ただちに多数の学生諸君が構内にはいることは，いたずらに不測の混乱や危険を招くおそれがあるので，入構はいましばらく待ってほしい．
5. キャンパス内の復旧のめどがつき次第，早急に大学の機能を再開する予定である．

昭和44年10月29日

横浜国立大学長事務取扱　越　村　信三郎
横浜国立大学教育学部長　河　村　十寸穂
横浜国立大学経済学部長　長　洲　一　二
横浜国立大学経営学部長　清　水　　新
横浜国立大学教育学部横浜分校主事　宮　田　直　憲

(15) 全学授業再開

11月25日清水ケ丘地区の各学部（教育，経済，経営）および横浜分校の授業がいっせいに開始された．

同地区3学部および分校（一般教育）の授業再開は当初11月18日に予定されていたが，当日は混乱が生じ延びたものである．

こうしてすでに9月11日から授業開始の工学部と共に，ここに全学授業が再開され約11カ月にわたる長期紛争もひとまず解決した．

4. 全学封鎖中の工学部入学試験

44年の入試は全学封鎖のため，やむなく日吉の慶応義塾普通部と東京新宿の文化服装学院を借用して3月23，24の両日行なわれた，しかしながら，この時の試験場の確保は，並たいていのも

のではなかった．日吉の慶応義塾普通部は，前から予定されていた試験場の一つであったが，新宿の文化服装学院を借り受けたのは，試験当日のわずか3日前のことであった．これは東京等々力の武蔵工業大学を全面的に借りて，大部分の受験生をここに収容する予定でいたところ，3日前に突然断わられたのである．武蔵工大の非情をなげく一方，当時の文部省管理局長の助言もあってか，並木学園 文化服装学院 大沼　淳理事長の好意はまことに感謝にたえないものであった．事実，もしこれが借用できなかったら，試験場がないために工学部の入試が実施できなかったという大事件を引きおこすところであった．それにしても平素なら，いろいろな手続きや段取りなどのため，10数日を要するのに，わずか2日間で，夜を徹しこの膨大な試験場の準備をなしとげた担当教職員の一致協力した努力はまことに涙ぐましいものがあった．各試験場では入試を阻止しようとする自治会学生の動きがあるとして，試験場にチェックポイントを設けて受験生を入場させ，あるいは外部の力を借りて周辺を警戒するなどし，まずまず無事試験を終えた．3月31日午後3時蒔田公園を借用し合格者の発表掲示を行なった．

44年度の全学の入学定員1,350人(昨年と同数)に対し，志願者は昨年より1,530人の減であった．

昭和44年度　横浜国立大学入学者状況

区　　分	定　員 (A)	志願者数 (B)	倍　率 (B/A)	受験者数 (D)	合格者数 (E)	率 (D/E)
教育学部	450	2,075 (2,531)	4.57	1,505	473	3.18
経済　〃	140	2,727 (3,482)	19.48	1,427	142	10.05
経営　〃	120	1,939 (1,694)	16.16	1,131	129	8.77
経営学部第2部	80	351 (350)	4.39	247	80	3.09
工　学　部	500	5,492 (6,036)	10.98	3,346	503	6.33
工学部第2部	60	434 (437)	7.23	353	57	6.19
計	1,350	13,000 (14,530)	9.63	8,009	1,384	5.17

(注)　志願者欄(　)数は昨年度のもの

昭和44年度　工学部入学者状況

区　　分	定　員（A）	志願者数（B）	倍　率（B/A）	受験者数（D）	合格者数（E）	率（D/E）
機械工学科	100	987	9.87	609	99	6.15
応用化学科	40	505	12.63	291	40	7.28
電気化学科	40	209	5.23	137	40	3.43
建築学科	80	1,269	15.85	827	81	10.21
造船工学科	40	562	14.05	331	40	8.28
電気工学科	80	1,212	15.15	678	80	8.48
金属工学科	40	229	5.73	131	40	3.28
化学工学科	40	239	5.98	163	40	4.08
安全工学科	40	281	7.03	171	43	3.98
二部機械工学科	30	268	8.93	216	27	8.00
二部応用化学科	30	167	5.57	129	30	4.30

5.　卒業式　中止

学園紛争のため予定されていた44年3月18日の例年のような全学統一卒業式は中止され，水戸部学長事務取扱から次のような文書がそれぞれ卒業生あてに送られた．

卒業生を送るに当りて　水戸部学長事務取扱

横浜国立大学は，昭和43年度において卒業式を挙げることができなかったばかりでなく，多数の卒業延期者を出さざるをえない事態となったことは甚だ遺憾である．それにもまして，卒業生諸君が大学にたいし多くの不満と不信の念を解消しないままに学窓を後にしたのではないかと想像されることはまことに悲しい極みである．

しかしながら，大部分の諸君にとって，わが横浜国立大学は，最後の学窓である．

ここでの四年間を顧みるとき，断ちがたい絆が諸君をとらえて離さないであろう．

大学もまた諸君の後姿をいつまでも見守るであろう．大学は諸君とともに別れの言葉を交し，杯をほすことはできなかったが，後をふりかえる諸君と諸君を見守る大学とは強い絆で結ばれていることを私は信ずる．

大学は，いま苦難のなかで，新しい大学改革への道を歩もうとしている．諸君もまた，わが大学の再生への努力を，愛着をもって見つめて欲しい．

諸君一人一人にとって，これから新しい人生が始まる．その点，心からお祝いの挨拶を送りたいと思う．人生に生きる意義をあらためて諸君に語る要はないかも知れないが，老婆心ながら一言させて頂きたい．人生の意義は，各自が実力を蓄え，その実力を発揮し，自分が属する社会や広く人類の進歩発達に貢献するところにあるものと考える．諸君は絶えず実力の涵養に努め，多くの困難をものりこえ人生の勝利者になって頂くことを切望し，諸君への餞としたい．

6.　入学式　中止

学園紛争がつづいているため，44年4月14日に予定されていた入学式は延期され，新入生は自

宅待機となった．このため水戸部学長事務取扱は次のあいさつ文を送り，新入生に対し大学のおかれている重大な事態を認識し，冷静な理解と自主的な判断に基づく協力を切望した，

あいさつ文次の通り．

新入生諸君への挨拶　学長事務取扱　水戸部正男

新入生の諸君，私は本学を代表して，諸君の入学を心から歓迎いたします．しかし，同時に本学がいまなお紛争の渦中にあり，入学式の挙行もしばらく延期せざるをえないという異常な事態のもとに，諸君を迎えなければならなかったことをまことに残念に思います．大学としては，このことをお詫びするとともに，一日も早く諸君をキャンパスのなかに迎え入れるために，一層努力する決意であります．とりあえず，今日の大学が直面している事態について所見の一端を述べ，新しい学園創造のための諸君の自覚と協力を期待したいと思います．

大学はいま大きな変革期にあり，本学もその激動のなかに置かれています．社会と文化の変化のなかで，これまでの大学における研究と教育のあり方，自治のあり方が根本的に問いなおされているのです．先日お送りした「新入学の諸君へ」を通して諸君も御承知のように，今回の本学の紛争は，直接には保土ヶ谷統合問題を発端とし，学生部問題をきっかけに激化してきたものです．しかし，それらの問題の含んでいる内容を検討してみますと，いずれも今日の大学が共通に直面している根本的な諸問題にかかわる性質のものです．したがってまた，たんに大学のあり方ばかりではなく，現代における社会や文化のあり方の全体にかかわるものでもあります．現代においては，高度の工業化，組織化の進行とともに，民主主義や市民的自由の形骸化，知性の細分化，人間の自己喪失といった問題が顕在化しつつあります．こうした社会的・文化的な状況のなかで，あらためてこれまでの大学のあり方が問いなおされております．

今日，改革を必要とするのは，なにも大学だけではありません．しかし，さまざまな形でこうした社会的・文化的な状況のなかに組み込まれていきながら，「理性の府」という美名のもとに，大学がこれまで自主的な検討と改革への努力を，きわめて不十分にしか行なってこなかったことはたしかです．本学の教官は，こうした自己反省にもとづいて，今回の紛争を通して学生諸君から提起された諸問題を，正面からその本質において受けとめ，まず本学自身の改革を通して問題の根本的解決への道を進もうと考えており，すでにさまざまな形でその第一歩を踏み出しております．また当面の紛争についても，積極的に改革のための具体的な方策を提起するとともに，どこまでも学生諸君との理性的な話合いを通して，その解決をはかっていきたいと考えております．

ところで，「大学の自治」は「学問の自由」を保障するために必要なものであります．そして，外部のさまざまな力から自治や自由をまもっていくためには，どうしても大学の構成員である教官，職員と学生諸君との共同の努力が必要であります．共同の努力によって自主的な改革を推進していくとともに，大学をして真に自由で自律的な研究と教育の場，充実した知的創造の場たらしめなければなりません．そうすることによってのみ，大学は社会の進歩，文化の発展に寄与しうるでありましょう．こうした見地から，新しく本学の構成員となった諸君に望みたいことは，まず第一に大学生としての心がまえを確立してほしいということであります．言いかえれば，生活と学問に対する自主的・主体的な態度を確立し，学問を通して大学生としての実力を養うことに努力してほしいということであります．

ここで大学生としての実力というのは，けっしていわゆる学力だけをいうのではなく，学問の裏づけをもった物事についての自主的・総合的な判断力のことであります．大学生活の意義は，諸君のひとりひとりがこうした実力を身につけることにあると思います．学問の裏づけのない自己主張は，ともすれば主観的なひとりよがりに流れがちです．私たち教官一同は，諸君が本学でこうした真の実力を養っていくことを期待するとともに，そのためのよき助言者としての役割をはたしたいと念願しております．諸君はまた，私たちにとって，大学自治の共同の担い手でもあります．残念ながら現在のところ在学生諸君との連帯のきずなはなおつながらず，「全学封鎖」といった異常な事態が続いておりますが，私どもは自主的に紛争

を解決し，全学をあげて大学の改革と学問の発展に取り組んでいきたいと存じます．新入生諸君も大学のおかれている重大な事態を認識され，冷静な理解と自主的な判断にもとづく協力を切望してやみません．

昭和44年４月14日

（学報　44年４月10日号）

7.　田口武一　工学部長に再選

昭和44年２月１日発令の田口工学部長の任期は，横浜国立大学工学部長候補者選考規定により就任した日の翌年度の末日となっているため，45年３月末日をもって，１期１年２カ月の任期を終わるので，２月23日工学部長候補者の選挙が行なわれた．その結果田口教授は，１回の選挙で有効投票数の過半数を獲得し，任期１カ年の予定で再選され，これを受諾した．（略歴前出）

8.　黒川教授　逝去

昭和44年５月14日，機械工学科教授黒川恒勝工学博士は，心不全で逝去した．同教授は，昭和７年東北帝大工学部機械工学科卒業後，石川島飛行機製作所を経て，東北帝大講師となり，昭和14年３月，横浜高工教授，昭和24年横浜国大教授に任命された．

専門は流体工学，特に流体機械を専攻し，学会におけるこの分野での研究業績は高く評価され，機械工学科においても同教授の円満な人柄によって，学生はもちろん，学内の教職員からも畏敬されていた．

また，昭和36年には，工学部施設拡充後援会理事となり，募金については同教授に負うところきわめて大きかった．

昭和43年４月１日夜間学部主事に就任，その後学園紛争にあたっては連日連夜学生との折衝等激務をかさね，心身ともに疲労のうちに，心臓発作をおこし，数週間入院加療したが，ついに紛争の犠牲となった．同日付けで，多年の教育，研究に尽力した功績によって，従三位勲三等旭日中綬章に叙せられた．

第3章　第3節　横浜国立大学工学部（高工・工専）創立50周年を迎える　(昭和45年)

本節をもって本校誌の最終節とする．すなわちわが工学部では大正9年横浜高等工業学校として発足以来，昭和45年をもってここに満50周年を迎えた．前節では長期にわたる学園紛争といういたましい事実について述べたが，それも一応の解決を見，越村学長事務取扱が45年の新年初頭のあいさつに述べたように，横浜国大のルネッサンス実現に全学一致協力してまい進せんとする機運となった．本稿の最終項として工学部50周年祝賀会で筆を擱（お）くことができたことを喜ぶ．

1.　45年の新年を迎える　学長の決意のあいさつ

前節で述べたように長い間の本学紛争も44年末で一応の解決をみ，いっせいに授業再開となったので，昭和45年正月は学園も久しぶりで朗かさをとりもどした．新年を迎えるにあたり越村学長事務取扱は，次の通り述べ，横浜国大の復興の一日も早く実現することを願った．

新年を迎えるにあたって　学長事務取扱　越村信三郎

皆さん，明けましておめでとうございます．いま1970年を迎えるにあたり，一言ごあいさつをもうしあげます．

昨年1月末以来，11カ月にわたってつづいた本学の紛争も昨年末でどうやら授業再開にこぎつけました．これひとえに皆さま方の絶大なご尽力のたまものとぞんじ，ここに全学を代表して厚くお礼申しあげたいとぞんじます．

本年の最大の課題は統合と改革の問題でありまして，これが成るか成らぬかに本学の運命がかかっているといってもいい過ぎではないと思います．

国際港都であり，京浜工業地帯に位置する横浜国大は，統合にさいしてどんな使命をもつべきでしょうか．いうまでもなくひろい国際感覚と21世紀にたいする雄大な展望をもった，しかも，人間的教養のゆたかな勤労的・創造的インテリゲンチアを生みだすべきであると思います．

しかも横浜国大は，東京大学や京都大学の小モデルであってはあまり存在の意義はありません．それは新しい理念と新しい組織をもったニュー・ユニバーシティでなければなりません．

イギリスでは8年前にケンブリッジやオックスフォードの古い型を破って英仏海峡に面した景勝の地ブライトンにサセックス大学というニュー・ユニバーシティを作りました．

新聞報道によりますと，この大学は80万平方メートル（本学統合予定地保土ケ谷ゴルフ場跡約44万平方メートルの約2倍）にわたるひろいキャンパスに有名な建築家たちのデザインした色とりどりの校舎が森林や牧草地のあいだに点在しており，そこではマスプロ教育を廃止してゼミナール中心のユニークな教育がおこなわれているとのことであります．

サセックス大学の学生数は3,500人，これに対し教授数は500人で，学生と教授とは7対1の比率を保っています．

わが学園は，学生数約5,300人に対して教授陣は約350人ですから13対1で，イギリスの平均比率8対1よりは若干高いのですが，日本の私学に

おけるマスプロ教育にくらべればまだましといえましょう．

イギリスでは最近の学制改革によって大幅な学生参加が認められ，試験と教授の人事などを除いては，学生たちは大学の運営に全面的に発言権をもつようになりました．日本でもいずれ大なり小なりの大学改革がおこなわれるでしょう．本学でもこれから独自の改革に力を入れなければならない段階にきております．

1970年を迎え，われわれは眼を世界に転じて，時代の流れにおくれをとらないように，いやむしろ流れをリードするように心がけなければなりません．

われわれは，また，なんとかして本年中に統合と改革の基礎を築き，横浜国大のルネッサンスの到来を一日も早く実現すべきであると考えます．

新春の事始めにあたり，皆さまのいっそうのご協力をえたいとぞんじ，一言感想を述べたしだいであります．

（学報　45年1月10日号）

2.　越村信三郎学長に就任

昭和45年2月16日学長候補者の選挙が行なわれ，越村信三郎学長事務取扱が当選し，同年3月1日付けをもって，第5代学長となった．（略歴前出）

学長就任にあたって　学長　越村信三郎

昨年の9月1日に学長事務取扱の任務をお引き受けしてから，もう6ヵ月間たちました．そのあいだに大学紛争もいちおう平静化し，どうにか授業再開にこぎつけることができました．これはまったく教官，職員の各位と学生諸君とが心を合わせて解決の道を探求した結果だとおもいます．ここに全学の皆さまにたいし，あつくお礼をもうしあげます．

さてこのたびはまた，皆さまの信任をえて，学長というさらに重い任務をお引き受けすることになりました．しかし問題は目のまえに山積しており，それらのひとつひとつが困難な条件をともなっているので，解決は容易ではありません．

この数日間いろいろ思いなやんだすえにデカルトの『方法序説』をひもといてみました．そしてそのなかに，あらゆる問題を解くために必要な，四つの原則と四つの格率を発見して，ようやく自信を固めえました．

わが横浜国大の当面しているいちばん大きい問題は，なんといっても統合です．これが成るか成らないかにわが学園の運命がかかっているといっても言いすぎではありますまい．

すでに先日事務局の方がたの努力により統合地約40万平方メートルの買収は土地所有者の方たちとの円満な話合いにもとづいてほとんど解決し，あとは主として建物その他の設備に要する費用を請求すればよい段階に到達しました．

統合のぜひについてはこれまで論議しつくされていますので，ここで改めて説明する必要はないとおもいます．くわしくは1月半ばごろ皆さんに配布した「学舎統合にかんする基本理念」を参照してくだされればけっこうです．

あとはただ，先哲の教えにしたがい，順序を立てて，単純なものから複雑なものへと進んでゆけばよいのです．順序としては，南地区の屋外体育施設からはじめて北地区の校舎と付属設備に及んだほうがスムーズにゆくと考えています．

大学のになっている最大の使命は，雄大な世界観と正しい社会観をふまえて，真に国民大衆に役立ちうる科学体系を樹立することにあります．そのためには教官がわの研究体制を整備することはもちろんのこと，職員の方たちの持ち場を物質的にも精神的にも快適なものにし，また，学生諸君の福利施設や部局についても，学生の意思による（by the students），学生のための（for the students），学生とともに歩む（with the students）新しいシステムをつくってゆきたいと考えています．初心を忘れてはいけません．就任にあたり，これらのことを深く心にきざみこんで，皆さんといっしょに一歩一歩と着実に進んでゆきたいと思っております．

（学報　45年3月10日号）

3. 大学院修了式と入学式

(1) 昭和45年3月19日午前10時30分から，昭和44年度の大学院工学研究科の第6回修了式が工学部会議室で挙行された．

本年度の修了生は50人で，越村学長からそれぞれ学位記が授与された．

席上越村学長は，歯車の権威者成瀬政男の見解を紹介したあと「修了生諸君はそれぞれ自分の専攻した知識を生かし，横浜国大の出身者として真に社会に役立つ大きな業績を残してほしい．」と式辞を述べた．これに対し修了生総代は「2年間の研究活動を通して学問の深さ，広さ，美しさに触れたことを報告します．学園紛争の体験もこれから社会に出てプラスに転じさせたい．ご指導くださいました諸先生に感謝します」と答辞を述べた．

(2) 昭和45年度横浜国立大学大学院工学研究科第8回入学式が，6月9日10時30分から，工学部第1会議室で行なわれた．このように入学式がおくれたのは，本年度の学部の卒業が，5月末日となったためである．入学者は，各専攻あわせて50人であった．

越村学長は，「合理主義に人道主義を加味した人格の形成が必要である」と式辞を述べ，入学生代表が，「絶えず自己を啓発し，豊かな人間性と判断力を持ち，深い知識と能力を身につけた工学者となるよう努力する」と宣誓を行なった．

4. 卒業式と入学式

(1) 工学部ではまえに述べたように，44年の9月中ごろから授業を再開したので，留年しなかった者のほとんどは5月末日の卒業となり，とくに授業妨害の激しかった建築学科は6月末日の卒業となった．

したがって，44年も卒業式は行なわれなかったが，45年も工学部ほか各学部の卒業期はまちまちのため，中止された．

卒業式の式辞に代わるものは次の通りであった．

卒業の式辞にかえて　横浜国立大学長　越村信三郎

21世紀への展望をひらく年といわれる1970年にわが学園から社会にスタートされる第18回卒業生の諸君に心から congratulation の挨拶を贈ります．

ことしは大学紛争の結果，諸君の卒業の時期が延び，しかも全学統一の卒業式を挙行することができなくなったことは，はなはだ残念であります．

諸君は本学での学園生活のあいだに，研究と勉強の面だけでなく，激動した紛争のさなかで，いろいろな角度から人生を学ばれたこととおもいます．

友情，反目，離反，不信，孤独，虚脱，諦観，大悟――それぞれがそれぞれの行動と立場をつうじて，多かれ少なかれ，以上のどれか一つ，あるいはそのいくつかを，身をもって感得されたことでしょう．

しかし社会に出て10年，20年たったのち，諸君が同窓の集いなどで学園生活を回顧されるならば，これらのすべては，おそらくなつかしい思い出として心のアルバムによみがえることでしょう．学園はつねに学生生活の栄光 Burschenherrlichkeit を映しだすアルト・ハイデルベルクだからであります．

私は多くを語りません．諸君がわが学園で学びとった不滅の真理を羅針盤として，人生の大海に勇ましく船出してください．

私たち教職員一同声をそろえて諸君の bon

voyage を祈ります.

平和の年ならば卒業式のあとで開くはずのビーア・アーベントに，おそらく私が歌うであろう歌を，心をこめて諸君にプレゼントします．詩もメロディーも稚拙なものですが，気持ちだけは受けてください.

1970年5・6月

作詩　越村信三郎

港のみえる丘で
みんなと腕を組み
ともに歌をば
歌ったあの日よ
そのほかのことはみんな
忘れてしまったが
君のなさけは
胸にしみるよ
友よさらば
　友よさらば
じゅうぶんからだに
　気をつけたまえ
また会う日まで
　また会う日まで
アウフ・
　ヴィーダーゼーエン
アウフ・
　ヴィーダーゼーエン
（作曲略）

（学報　45年6月11日号）

(2)　前述のような卒業時期となったため，45年は入学式の方が先になる程異常な事態であった．入学式は，45年も行なわれなかったが，式辞に代わるものとして，学長は次のように学報に述べた.

新入生諸君を迎えるにあたりて　横浜国立大学長　越村信三郎　（昭和45年4月30日）

日本の戦後史にマイルストーンを打ちこむものと期待されている1970年に，わが学園へ入学された諸君にたいし心から「おめでとう」のあいさつを贈ります.

昨年約10か月にわたってつづいた紛争のため，いろいろな事情によって本年も全学統一の入学式をおこないえなくなったことははなはだ残念でありますが，そのときに述べるはずの式辞にかえて，つぎの言葉を諸君に贈りたいと思います.

わが学園は国際港都ヨコハマに，したがって東西文化の交流点に位置しています．明治初年の先覚者がこの地に文明開化のさきがけとなるものを求めたように，諸君もわが学園で21世紀の扉をひらく鍵を探し求めるべきであります.

「われらなにをなすべきか？」それを決めるまえに「われらなにを学ぶべきか」を知るべきでしょう.

私が40年まえ大学に入学したとき，有名なある教授が最初の講義の時間にこう言われました.

「大学生活3か年のあいだに1冊でよいから世界最大の学者の最高傑作（magnum opus）を原書で読みなさい．それが諸君にゆるぎのない世界観と学問体系を与えてくれるでしょう.」

友人数人とこの言葉を実行しようと誓い合い，それぞれじぶんの判断で最高と思われる著作をアタックすることにしました．私はドイツ語で書かれた3,000ページの大著にとりつき，四苦八苦のすえ，それでもそれを1年数か月で読み終えることができたことを覚えています.

このことが私の生涯に決定的な影響をおよぼしました．そしてそのことをサジェストしてくれた先生にたいし，いまもなお感謝の気もちを持ちつづけています.

しかし書物はあくまでも他人の頭の産物であります．諸君はそれを媒体としてじぶんじしんの思想をつちかうべきです.

ひとりで読み，ひとりで考えるだけでは，時として独善におちいる危険性があります．それをふせぐのが教師や学友とのあいだでおこなわれる学習と討論にほかなりません.

そのときのルールとしてつぎの言葉があります.

「議論をする場合には，上も下も，肩書も，年齢も，名前もない．真理のほかには何もなく，真理のまえでは万人が平等である.」（ロマン・ロラン）

たいへんきびしいルールですが，それを守って4か年のうちにできるだけ多くの真理を学びとり，実践の場でそれらを役だてるように努力しま

しょう．

終りにのぞみ，重ねて諸君の入学を祝福し，この学園生活を人生最良の goldene Zeit にされますように心から祈ってやみません．

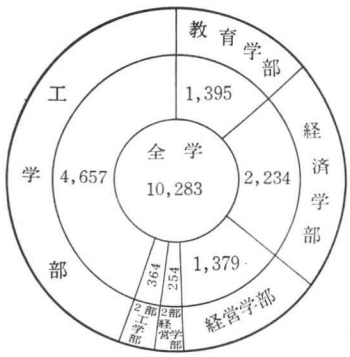
44年に続き45年も，卒業式も入学式も行なわれなかったのは，前述のように卒業日が各学部まちまちであったからで，統一卒業式が行なえなかったことはやむを得ないとしても，入学時は毎年4月であるから，いっせいに行なわれるべきであった．しかしこれが一部の学生のため，学長団交に切替えられたら相当大きな混乱になるし，事実他の国立大学でもしばしば卒業式，入学式ともに一部の学生のいう粉砕に会って取りやめの状態が続いていることもあって，中止となったもので，本学では今後も当分は実施できる見通しはないのである．

5. 昭和45年度入学試験に関する調査

45年3月に行なわれた入学試験に関する調査の結果は次の通りである．この調査は，入学試験の実情について事務処理上の参考に資するため，各学部の協力を得て行なわれたものである．入学志願者は，44年に比べ各学部とも減少しており，全体で約2,700人減となっている．

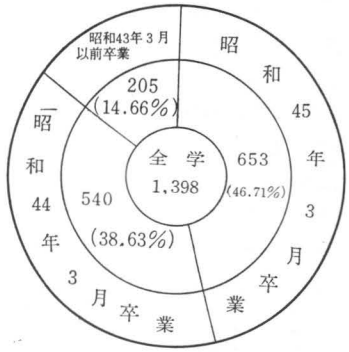
なお，外国人留学生，沖縄学生および編入学等については，この調査から除外した．

第1図　昭和45年度学部別入学志願者数



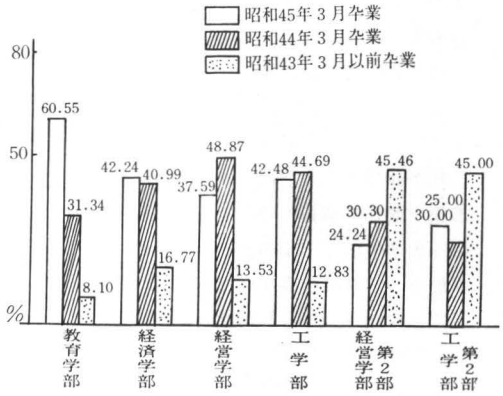
第2図　昭和45年度合格者の高校卒業年度別調査

教育学部は現役組，その他の学部は浪人組が優勢である．
なお，昨年度は現役48.46%，浪人51.54%で本年は若干浪人組が伸びた．



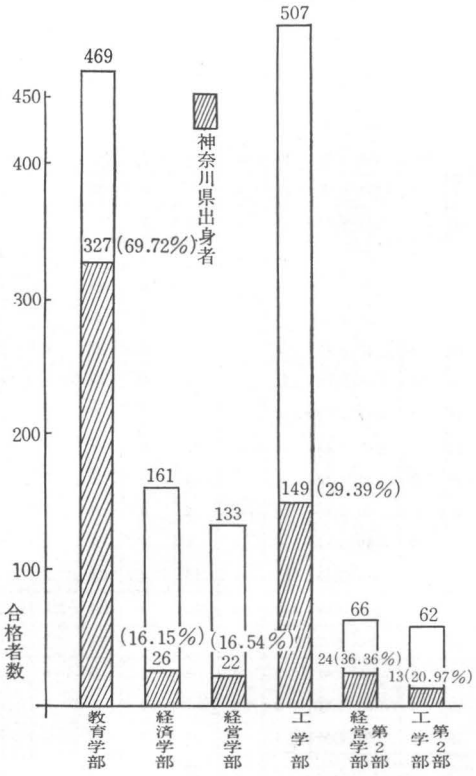
学　　部	44年度入学志願者
教育学部	2,057
経済学部	2,727
経営学部	1,939
工学部	5,488
経営学部第2部	351
工学部第2部	435
計	12,997

昭和43年の14,530人をピークとして漸次減少している。

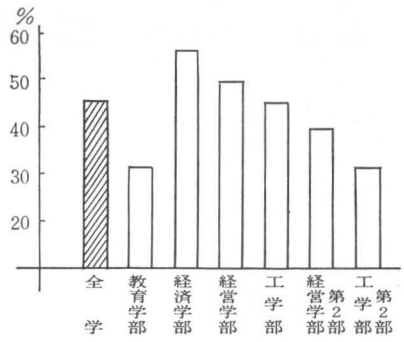


第3図　昭和45年度合格者中，神奈川県出身者の占める割合

教育学部を除き，他府県出身者が神奈川県出身者を押えている．なお，第2部を除き昨年度より若干神奈川県出身者がふえている．



第4図　昭和45年度学部別欠席者数と欠席率



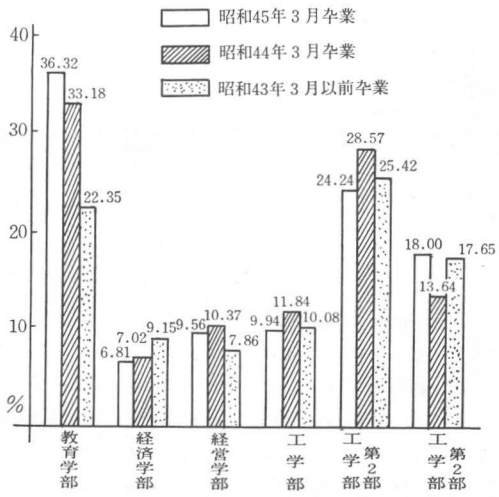
学　部	欠席者数	欠席率
教　育	448	32.11
経　済	1,259	56.36
経　営	698	50.62
工	2,110	45.31
経営2部	104	40.94
工　2　部	111	32.14
計	4,720	45.90

ここ2,3年欠席者が増加の一路をたどっている。

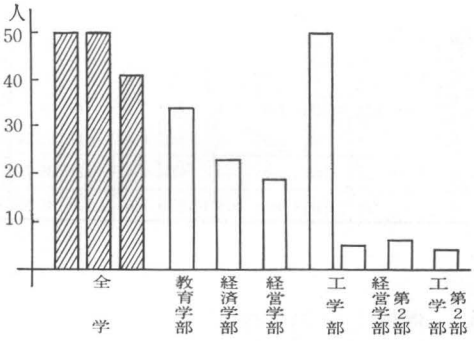
第5図　高等学校卒業年度別志願者に対する合格者の比率

この図は，各学部毎に現役，一浪，二浪別の合格率を算出したものである。

教育学部および工学部第2部を除き，浪人組が現役組を押えている．



第6図　昭和45年度学部別入学取消者数



学　部	合格者数	入学取消	%
教　育	469	34	7.25
経　済	161	23	14.29
経　営	133	19	14.29
工	507	55	11.02
経営2部	66	6	9.09
工　2　部	62	4	6.67
計	1,398	141	10.16

昭和45年度入学志願者入学者等調

区分		入学定員	入学志願者			倍率	欠席者		受験者数	合格者				入学取消			補欠入学者	入学者		
			男	女	計		欠席者	欠席率		男	女	計	受/合	男	女	計		男	女	計
教育学部	小学校教員養成課程	330	243	360	603	1.83	165	27.36	438	142	199	341	1.28	10	11	21	0	132	188	320
	中学校教員養成課程	120	448	344	792	6.60	283	35.73	509	59	69	128	3.98	6	7	13	0	53	62	115
	小計	450	691	704	1,395	3.10	448	32.11	947	201	268	469	2.02	16	18	34	0	185	250	435
経済学部		140	2,198	36	2,234	15.96	1,259	56.36	975	158	3	161	6.06	23	0	23	0	135	3	138
経営学部		120	1,353	26	1,379	9.85	698	50.62	681	130	3	133	5.12	18	1	19	0	112	2	114
工学部	機械工学科	50	804	0	804	8.04	348	43.28	456	51	0	51	4.51	4	0	4	0	47	0	47
	機械工学第二学科	50								50	0	50		6	0	6	0	44	0	44
	応用化学科	40	352	3	355	8.88	182	51.27	173	40	0	40	4.33	5	0	5	3	38	0	38
	電気化学科	40	155	1	156	3.90	58	37.18	98	40	0	40	2.45	3	0	3	0	37	0	37
	建築学科	80	1,209	27	1,236	15.45	527	42.64	709	76	2	78	9.09	12	0	12	0	64	2	66
	造船工学科	40	540	0	540	13.50	240	44.44	300	41	0	41	7.32	2	0	2	0	39	0	39
	電気工学科	80	909	1	910	11.38	481	52.86	429	79	0	79	5.43	11	0	11	0	68	0	68
	金属工学科	40	212	0	212	5.30	88	41.51	124	40	0	40	3.10	4	0	4	3	39	0	39
	化学工学科	40	171	2	173	4.33	75	43.35	98	40	0	40	2.45	2	0	2	0	38	0	38
	安全工学科	40	269	2	271	6.78	111	40.96	160	40	0	40	3.81	6	0	6	2	36	0	36
	小計	500	4,621	36	4,657	9.31	2,110	45.31	2,547	497	2	499	5.10	55	0	55	8	450	2	452
計		1,210	8,863	802	9,665	7.99	4,499	46.55	5,166	986	276	1,262	4.09	112	19	131	8	882	257	1,139
経営学部(第2部)		80	246	8	254	3.18	104	40.94	150	64	2	66	2.27	6	0	6	0	58	2	60
工学部第2部	機械工学科	30	210	1	211	7.03	71	33.65	140	30	0	30	4.67	2	0	2	0	28	0	28
	応用化学科	30	149	4	153	5.10	46	30.07	107	29	1	30	3.57	2	0	2	2	29	1	30
	小計	60	359	5	364	6.07	117	32.14	247	59	1	60	4.12	4	0	4	2	57	1	58
第2部計		140	605	13	618	4.41	221	35.76	397	123	3	126	3.15	10	0	10	2	115	3	118
合計		1,350	9,468	815	10,283	7.62	4,720	45.90	5,563	1,109	279	1,388	4.01	122	19	141	10	997	260	1,257

6. 機械工学第2学科の設置

機械工学科は，昭和36年4月，従来からの5講座を拡充改組して7講座となり，42年4月工業教員養成所の3学科目を3講座に振り替えて合計10講座，学生定員100名となって，工学部最大の学科であった．

これを45年4月から，二つの学科に分離して機械工学科と機械工学第二学科にすることとした．これで工学部は合計10学科となった．両学科とも5講座，学生定員50名，前者は材料強度学，流体力学，熱工学，機械工作，および機械設計の5講座，後者は一般構造力学，材料学，流れ学，自動制御工学，および熱学の5講座となっている．入学試験は両学科共通で行なわれ，学生は全く優劣なく2クラスに分けて教育するように変更された．

7. 事務局の移転

昭和44年2月1日，学園紛争によって，工学部構内にあった事務局は，学生部と共に封鎖されてしまった．その後事務局および学生部は，岩井宿舎および磯子の学長宿舎を仮庁舎としていた

が，同年４月１日から常盤台の旧保土ケ谷ゴルフ場クラブハウスに移転し，若干の改装を施して仮庁舎としてこれを使用していた．

同年７月25日工学部の封鎖を解除すると同時に弘明寺の事務局庁舎内部の物品はすべて常盤台に移され，事務局および学生部は，ほぼ完全な機能をとりもどした．

なお45年初めには，事実上紛争もほとんど終わったような様子をみせてきたので，同年４月１日を期して，統合地の本建築の庁舎が完工するまでの仮の施設としてではあるが，一応正式に事務局ならびに学生部庁舎として発足した．

8. 一般教育の改革

前にも述べたように，本学の一般教育については，開学以来何かと問題点が多かった．（一般教育審議会の項参照）

昭和45年度の初めごろから，工学部では，近く保土ケ谷の新キャンパスへの統合に際して，一般教育の改革を評議会に提案していたが，同年７月11日の評議会で，この具体案を次のように取りまとめ，46年度から実施できるように文部省令改正の手続きをとった．

改正案は，人文科学系は，従来どおり教育学部に残し，社会科学系を経済学部と経営学部に，自然科学系の大部分を工学部に移し，これに伴う教官の定員配分も行なわれることとなっている．

なお，教育学部は，これを機会に，新たに自然科学概論などの新設を要求している．

学部別新設要求学科目は，次のとおり．

○教 育 学 部……自然科学概論，科学史，イスパニア語
○経 済 学 部……経済学，社会科学概論（商業学を名称変更）
○経 営 学 部……法学，統計学
○工　学　部……数学，物理学，化学，図学
○工学部２部……数学，物理学

また，定員配分は，分校総定員を29人として，18人が教育学部に残り，９人を工学部へ（うち２人は２部の要員），経済，経営へ各１人となった．

上述のように，今回の改正は，いわゆる全学出動方式ともいわれる方法で，各学部がそれぞれ関係の深い学科目を引きうけ，これの教育に関して全学的責任をもつというものであった．工学部では，工学に直接関係の深い数学，物理学，化学，および図学の４学科目を受け持ったが，この機会にこれと従来から工学部にあった応用物理，応用数学，工業分析の共通講座とを一緒に考えて，理学系の教室を充実せしめ，近い将来理学を重視した工学部への発展の基礎固めをする構想を具体化することとした．また，各学部に分担された一般教育の連絡調整のため，一般教育運営委員会という大きな権限をもつ機関を設けて，これらの中心的存在としたのである．

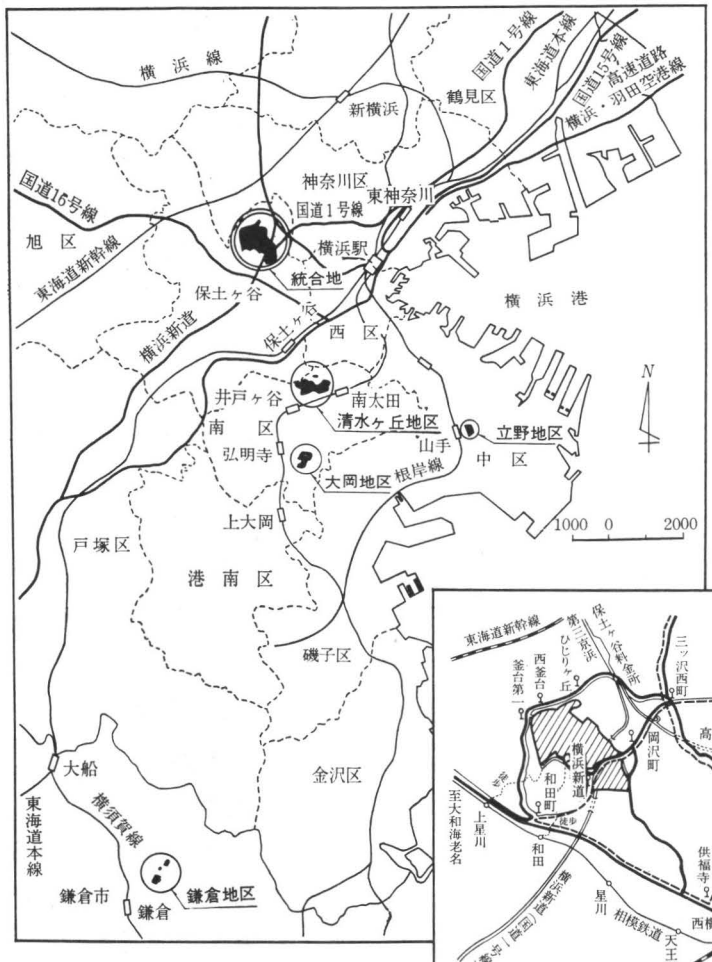
このようにして，本学の多年の懸案であった一般教育問題に終止符を打ち，保土ケ谷の新キャンパスにおける各学部の建物もこの方針に沿って設計され，開学以来一般教育に貢献してきた横浜分校も46年度から消滅することになるのである．

9. 広報の発刊

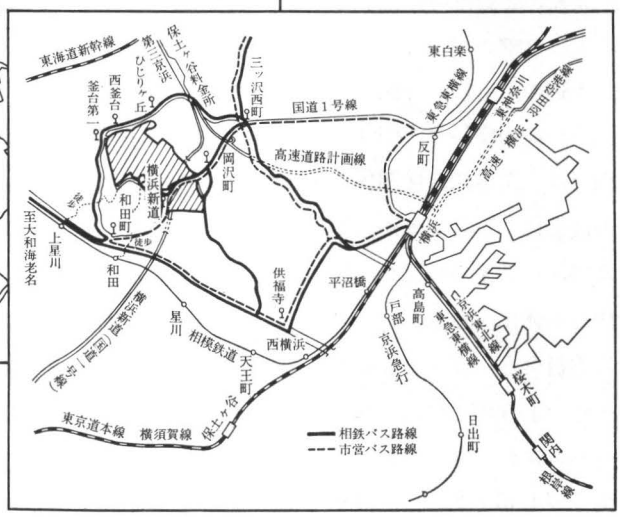
昭和45年9月1日号を No. 1 として横浜国立大学広報委員会により，広報が発刊された．その発刊の辞に，越村信三郎学長は次のように述べている．

横浜国立大学統合ニュースが，43年11月の No 9でストップしてから1年9カ月，教職員と学生との間の正規のコミュニケーションはとだえてしまった．何という不幸！　紛争が一段落をとげた現段階において，こうした断絶の時期に終止符をうち，自由で活発な表現とインフォーメーションの交換をおこなうメディアを提供することは，大学の再生と発展のためにきわめて必要なことと思われる．……報道の範囲を統合だけに限定せず，大学改革をふくめ，ひろく学内諸問題にかんする公正な情報を提供することがよいということになり，この任務を遂行するために，ことしの5月26日新しい広報委員会が発足した．……皆さんの協力によって，この「広報」が断絶の谷間をつなぐ灯となり，やがて統合への大道にみちびく炬火（きょか）となることを期待してやまない．

（本図次頁参照）



統合地所在地図
（横浜市のなかの統合地）



統合地の交通図

横浜国立大学広報委員会規則　(昭和45年5月26日制定)

(設置)

第1条　横浜国立大学(以下「本学」という.)に広報委員会(以下「委員会」という.)をおく.

(任務)

第2条　委員会は,本学の学内および学外に対し,学内諸問題に関する公正な情報を提供することを任務とする.

(所掌業務)

第3条　委員会は,前条の任務を達成するため,次の業務を行なう.

(1)　広報の編集および発行に関すること.

(2)　その他必要な事項

(組織)

第4条　委員会は,学長が委嘱する委員若干名をもって組織する.

(任期)

第5条　委員の任期は1年とし,再任を妨げない.ただし,補欠の委員の任期は,前任者の残任期間とする.

(委員長)

第6条　委員会に委員長をおく.

2　委員長は,委員のうちから学長が委嘱する.

(会議)

第7条　委員長は,委員会を招集し,その議長となる.

2　委員長に事故あるときは,委員長があらかじめ指名した委員が,その職務を行なう.

(その他)

第8条　委員会に事務室をおき,必要な事務を処理する.

付　則

この規則は,昭和45年5月26日から施行する.

10.　学舎統合への努力再開　統合配置計画図

学園紛争により学舎統合の進行が一時的に停止されていたが,紛争解決後の44年末から再び統合実現のための努力が全面的に開始された.統合企画委員会,建設委員会,設計委員会,各種分科委員会などが新たに構成し直され,学生自治会とも話しあいを重ねた後,昭和45年4月より南地区運動場の造成が始まった.この運動場は46年12月完成予定で進められた.また北地区の建築も年次計画通りに進行すれば,昭和51年夏までには全学部が移転して,名実ともに統合された総合大学ができあがる予定である.

○建設委員会細則　(昭和45年6月11日制定)

改正　昭和45年9月10日　昭和46年4月8日　昭和46年6月10日

(根拠)

第1条　横浜国立大学統合企画委員会規則第7条の規定に基づき建設委員会細則を定める.

(任務)

第2条　建設委員会は,統合企画委員会が行なう基本計画および基本設計の立案に必要な基礎資料を収集し整理するものとする.

2　前項の資料を収集整理するにあたっては,設計委員会と連絡を密にするものとする.

(組織)

第3条　建設委員会は,次の委員をもって構成する.

(1)　統合企画委員会から選出された委員1名

(2)　学部から選出された教官　各1名

(3)　全学図書協議会から選出された教官1名

(4)　全学教務委員会から選出された委員1名

(5)　第7条の分科委員会委員長　4名

(6)　一般教育運営委員会から選出された委員　1名

(委員長)

第4条　建設委員会の委員長は,委員の互選とする.

2　委員長は,委員会を招集し,その議長となる.

(分科委員会)

第5条　建設委員会に次の分科委員会をおく.

(1)　体育施設分科委員会

(2)　福利厚生施設分科委員会

学寮
テニスコート
汚水処理場
機械工場
中央機械設備室
保健管理施設
経済研究棟
経営研究
土木研究棟
機械実験棟
パーキング23台
建築実験棟
講義室棟
調整池
実験水槽 L=120m
造船実験研究棟
造船
パーキング52台
食堂
化工実験棟
化工研究棟
パーキング35台
工学部講義室棟
工学部理学系
管理棟
工学系図書分室
中央図書館
大教室
教育講義棟
教育学部人文系研究棟
教育学部自然系実験研究棟
教育学部芸能系実験研究棟
パーキング67台
パーキング34台
給水塔
公務員宿舎

N
保健管理施設
事務局
パーキング 50台
経済研究棟
経営研究棟
講義室棟
教育講義棟
学生会館
食堂
体育館
教育音楽研究棟
管理棟
国道1号線
テニスコート
テニスコート
付属施設
陸上競技場
1コース
400mトラック
サッカー場
走高跳
砲丸投
調整池
野球場
50mプール
ハンドボール
バレーコート
バスケットコート
ラグビー場
体育施設
弓道場
横浜バイパス
47年度購入計画地

(3) 環境整備分科委員会
(4) 事務施設分科委員会

第6条 分科委員会は次の委員をもって構成する.

(1) 体育施設分科委員会
学生部長
体育担当教官 若干名
事務職員 若干名

(2) 福利厚生施設分科委員会
全学厚生委員会委員長
学生部長
学生健康相談所長
学部の厚生委員 各1名
事務職員 若干名

(3) 環境整備分科委員会
教 官 若干名
事務職員 若干名

(4) 事務施設分科委員会
事務局長
事務職員 若干名

2 前項の委員で職を指定していない委員については，建設委員会委員長が委嘱する.

第7条 分科委員会委員長は次のとおりとする.

(1) 体育施設分科委員会
委員から互選された者

(2) 福利厚生施設分科委員会
全学厚生委員長

(3) 環境整備分科委員会
委員から互選された者

(4) 事務施設分科委員会
事務局長

第8条 学部・付属図書館および分科委員会は，それぞれの施設に関する必要な資料を整備するものとする.

(事務)

第9条 建設委員会の事務は庶務課で行なう.

2 分科会の事務担当は次のとおりとする.

(1) 体育施設分科委員会 学生部
(2) 福利厚生施設分科委員会 学生部
(3) 環境整備分科委員会 経理部
(4) 事務施設分科委員会 庶務部

第10条 建設委員会および分科委員会の運営に関し必要な事項は，この細則に定めるものの外，当該委員会で定める.

付 則

1 この細則は，昭和45年6月11日から施行する.

2 建設委員会規程（昭和42年10月2日制定）は，廃止する.

付 則 (昭和45年9月10日)

1 この細則は，昭和45年9月10日から施行する.

付 則 (昭和46年4月8日)

この規則は，昭和46年4月8日から施行し，昭和46年4月1日から適用する.

付 則 (昭和46年6月10日)

この細則は，昭和46年6月10日から施行し，昭和46年5月1日から適用する.

設計委員会細則 (昭和45年6月11日制定)

(根拠)

第1条 横浜国立大学統合企画委員会規則第7条の規定に基づき設計委員会細則を定める.

(任務)

第2条 設計委員会は，統合企画委員会が提示する基本計画および基礎資料等に基づき統合に関する基本設計の原案その他必要な資料を作成するものとする.

2 前項の原案作成にあたっては建設委員会と連絡を密にするものとする.

(組織)

第3条 設計委員会は教官および事務職員各若干名をもって構成する.

2 前項の委員会は，統合企画委員会議長が委嘱する.

(委員長)

第4条 設計委員会の委員長は，統合企画委員会議長が委員のうちから指名する.

2 委員長は委員会を総括し代表する.

(事務)

第5条 設計委員会の事務は施設部で行なう.

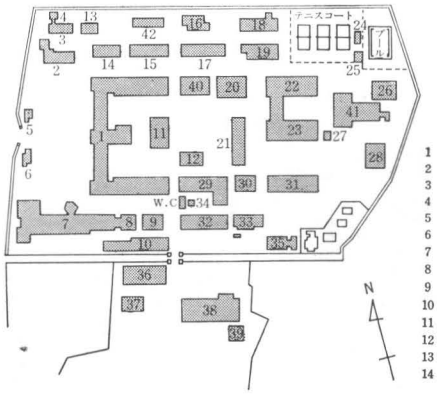
第6条 設計委員会の運営に関し必要な事項は，この細則に定めるものの外，設計委員会が定める.

付 則

この細則は，昭和45年6月11日から施行する.

11. 45年ごろの工学部の学舎

昭和45年，満50周年を迎えた工学部（大岡地区）学舎の全容は次の通りである．



1 本館
2 安全工学科第1実験研究室
3 安全工学科第2実験研究室
4 安全工学科第3実験研究室
5 車庫
6 守衛所車庫
7 建築学科実験研究室
8 建築学科実験研究室
9 造船工学科工作室
10 造船工学科船型試験水槽
11 付属図書館工学部分館
12 変電室
13 応用化学科実験室
14 応用化学科2号館
15 応用化学科・電気化学科実習工場
16 教室製図室
17 電気化学科実習工場
18 共通教室
19 材料基礎工学研究施設
20 材料基礎工学研究施設
21 共通教室
22 電気工学科研究室
23 化学工学科研究室
24 学生集会室(テニス部室)
25 薬品庫
26 電気工学科高圧実験室
27 化学工学科実験室
28 学生ホール
29 機械工学科実習工場
30 機械工学科実験研究室
31 機械工学科実験研究室
32 機械工学科実習工場
33 機械工学科実習工場
34 工学部消防ポンプ室
35 工学部職員集会所
36 機械工学科実験研究室
37 機械工学科実習工場
38 体育館
39 学生集会室
40 安全工学科第4実験研究室
41 安全工学科第3実験研究室
42 倉庫

12. 横浜国立大学工学部創立50周年記念祝賀会

横浜高等工業学校が大正9年に創設されてから，満50周年を迎える昭和45年には，何か記念行事を催すべきではないか，と多くの卒業生の間で早くから，いろいろの話が出ていた．

昭和44年の秋ごろから，工学部長田口武一（建築昭和7年卒）は，たまたま同窓の一人であることとその立場上，この行事の遂行にのり出し，各学科の同窓会長に相談し，創立50周年記念祝賀会の開催を決定した．しかしながら，その方法，規模，主催者などについて，種種議論がわかれ，容易にまとまらないうちに45年春を迎え，ようやく次のような方針でその秋に開催することがきめられた．

まず，主催は卒業生側が引き受けること，規模は恩師，卒業生および工学部教職員のみの内輪の会にすること，会は横浜で行なうことなどであった．ことに主催は，卒業生の団体である横浜工業会となるべきであったが，最近は各学科の同窓会* が非常に盛んで，横浜工業会は何の活動

その頃の工学部付近
(44. 10)

もしていないので，この際これの再建の端緒にもなればとの含みもあって，各学科の連合同窓会と銘打って，この行事を行なうこととなった．

また，主催者の代表は，創立以来の官制順序に従って，機械工学科第１期大正12年卒の別府英一が引き受けた．

祝賀会は，昭和45年11月23日（勤労感謝の日）午後１時30分～４時，ホテルニューグランドにおいて開催され，来賓約50名，卒業生約560名の出席のもとに，次に示すような次第で盛大に行なわれた．

開　会

1. 主催者代表挨拶　　別府　英一
1. 工学部長挨拶　　田口　武一
1. 来賓祝詞　　越村信三郎学長
　　冨山　保元学長
1. 祝電披露
1. 祝　宴
1. 横浜国立大学学生歌
1. 横浜高工校歌
1. 万歳三唱

閉　会

会場正面演壇のバックには，中央に大きく50の文字を浮き出させ，一方に鈴木煙洲先生の米寿のお祝いの時の写真を掲げて，往時の３学科から出発し，現在の10学科１研究施設に発展した表現のデザインが生かされていた．

会場の収容能力は500名が最大であるといわれていたが，前記のように600名を越える来会者で，会場もロビーも越満員の盛況となり，主催者側もうれしい悲鳴をあげる状態であった．

会はまず，金泉隆介（建築昭23年卒）の司会で始まり，最初に主催者代表別府英一から次のごときあいさつがあった．

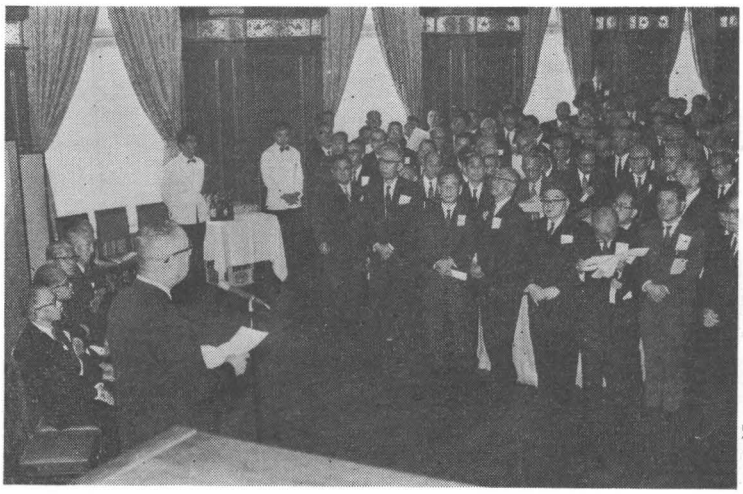
横浜国立大学工学部創立50周年記念祝賀会開催にあたり，主催者を代表して一言ごあいさつ申し上げます．

横浜国立大学工学部の前身である横浜高等工業学校が大正９年にこの地に創立されましてから，本年で50周年を迎え，本日ここに来賓ならびに諸先生方のご臨席を得て，同窓各位とともに記念祝賀会を挙行することができましたことは，まことにめでたくご同慶の至りに存じます．

旧高等工業より現国立大学工学部に至る50年の歩みや，学校の現在，将来の計画等につきましては，多分後ほど工学部長はじめその他の方々からお話があることと存じますが，僅か３学科で発足した母校が，現在10学科１研究施設の陣容を誇るわが国有数の国立大学工学部に発展致しましたことは，現旧教職員先生方のご努力はいうまでもなく，同窓生諸氏の陰に陽につくされたお力添えもまたあずかって力があったものと存ぜられます．

私共同窓生と致しましては，この上とも母校が内容外観ともに一段と充実発展せられ，わが国次

（注）各学科：機械工学科，機械工学第二学科，応用化学科，電気化学科，建築学科，造船工学科，電気工学科，金属工学科，化学工学科，安全工学科の10学科
各学科同窓会名は次の通りである．機械同窓会，横浜応化会，横浜電化会，水煙会（建築学科），弘陵造船航空会，このほか電気工学，金属工学，化学工学，安全工学の各学科は特別の名称はなく，単に同窓会と称している．



別府英一同窓会代表あいさつ
(45.11.23 ホテルニューグランド)

代の工業をになうにふさわしい立派な人材を育成せられ，一人でも多く世に送り出していただくことを念願してやみません．

本日の記念祝賀会は連休日のことでもあり，私共と致しましては1万1千余の同窓生各位に案内状はお出ししたものの，果たして何名ご参加を得られるかと心配致したのでありますが，ご出席のご回答700余名に達し，ご覧の通り予想外の盛況を見るにつけても，同窓生各位の母校愛未だ地におちずと心強く存ずる次第であります．

50年という節（ふし）は人生においても歴史においても大きな節であり，昨年あたりから記念行事を行なうべきだ，行ないたいという話はいろいろありました．……．幸い，工学部長はじめ在学諸先生方の一方ならぬご尽力と各科同窓会代表幹事諸氏のご努力が結実し，連合同窓会と銘打って，ここに挙行の運びとなりましたことは本当によろこばしく，私は参加者一同に代わり，この席をかり，これらご尽力下さいました各位に対し深甚なる謝意を表する次第であります．

われわれ同窓会は，従来各科を通じる横のラインが弱かったのでありますが，今回を契機として横の結びつきの糸口を見つけかけたかと思われます．…….

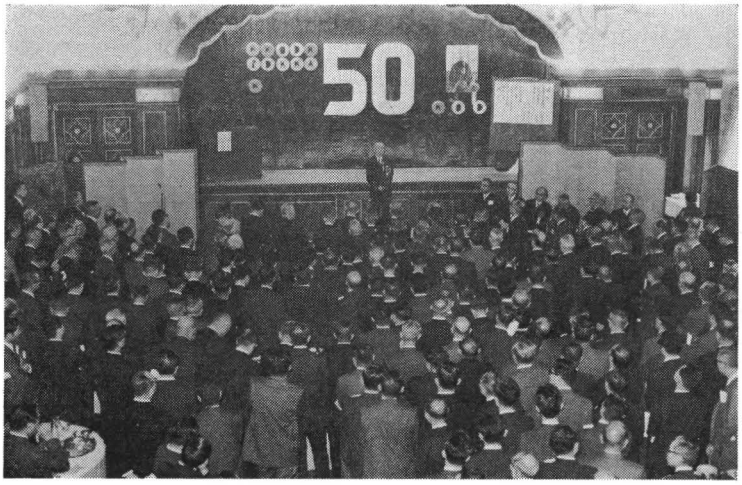
最後に私が本日記念祝賀会の主催者代表に祭り上げられましたのは，母校設立当初は機械，応化，電化の3学科であり，機応電という呼び習わしがあったので，……貴様がやるべきだと同士より強制的に指名され，甚だ不適任にもかかわらず，栄職を汚すことになった次第でありまして，次回からは輪番制により応化，電化，建築の順にそれぞれ各科同窓会が担当されることになっておることをご報告申し上げます．

本日は不慣れのため，準備その他いたらぬ点が多々あろうかと存じますが，不備の点はなにとぞご寛容のうえ，久方振りでお会いの方々も多かろうと存じますので，懐しい先生方を交え，時間の許す限りご歓談いただけますれば，本日の意義はひとしお生きるものと存じます．

以上簡単ながら私のごあいさつと致します．

続いて田口工学部長は大学側を代表して，大要次のようにあいさつを述べた．

横浜高等工業学校を前身とする横浜国立大学工学部の創立満50周年の記念祝賀会に，横浜国立大学工学部を代表してまず祝意を表し，大正9年開設以来の輝かしくも多難な発展経路を顧み，創立当初に比較して著しく大規模になった工学部の内容を説明し，工学部の今日を得た原動力は，幾多の本学園の先覚者，関係教職員，ならびに13,000名に及ぶ卒業生各位の努力の賜物である旨強調して，出席の各位に謝意を表すると同時に，前年来の大学紛争のため多くの本学関係者，ならびに卒業生各位に心労をかけたことを詫び，ついで本学発祥の地であり，多くの思い出をもつ



冨山先生祝辞
(45.11.23 ホテルニューグランド)

弘明寺地区を4，5年後には引き払って，昭和51年ごろには，保土ケ谷の旧ゴルフ場跡地に全学統合し，名実ともに総合大学となって，さらなる発展を期待したいと報告するとともにその決意を披歴した.

終わりに工学部創立50年史を刊行したいと考えているが，この企画に，卒業生各位の賛同と援助をお願いし，あわせて母校の今後いっそうの躍進を祈念するとあいさつした.

引続き来賓祝詞となり，最初に越村学長が立って，およそ次のような祝辞を述べた.

工学部は横浜国立大学の有力学部で，本日創立50周年記念祝賀会が盛大に開催されたことは，大学にとっても，まことに慶賀すべきことと全学を代表してまず祝詞を述べ，ついで学長自身，本学経済学部の前身である旧横浜高等商業学校の出身であり，学生時代から横浜高工，横浜高商の定期戦などには，大いに血をわかした思い出を語り，それが今や一つの大学となって，仲よく本学の発展に協力している旨を述べ，近く大学が全学統合して，保土ケ谷常盤台の新キャンパスに結集し，なお一段の発展をとげて，世界的な内容をもつ大学にするとの方針を披歴，あわせて来会者一同ならびに工学部の今後のいっそうの活躍を期待するとあいさつした.

次に名誉教授冨山保元学長は高齢にもかかわらず，矍鑠（かくしゃく）たる姿で概略次のように祝詞を述べた．大正9年の開校以来今日まで，連綿として50年間，在官中はもちろんのこと，退官後も本学園の身近なところにあって，いつも指導鞭韃（べんたつ）につとめる大先達の言葉の一言一句にこの半世紀の歴史が感慨ひとしおであったことがにじみ出ていた.

まず何よりも当日の創立50周年記念祝賀会の盛会と教職員ならびに卒業生各位の健闘が，現工学部の得ていることの推進力である点に祝意を表し，ついで往時を回想，横浜高等工業学校が設立された当時の社会的背景，初代校長鈴木達治先生の独特の自由啓発の教育方針が今日の工学部の存在に及んでいる点，開校直後の関東大震災時の動向，やがて鈴木校長の退任から第2次世界大戦に及び，幾多の卒業生の戦没を惜しみ，終戦時の校舎の接収の危うきを逃れた努力と，新制大学発展の喜びを語り，その後の本学の充実発展経過と，新統合地に全学が集結して開学時の学

長として，当時の理想が実現されるのも間近であり，今後のいっそうの発展を期待すると祝詞をのべた．

終わりに，先生はかねがね果たすべくして果たし得なかった開学当時の人事委員会（前述）の方々15名へこの機会にいささか謝意を表したいとて，委員全員に記念品として華麗な花びんを贈呈した．

そしてこれは会場の一隅に飾られて．来会者一同に披露された．

つづいて祝電の披露があった後，開宴の順となり，名誉教授元学長江国正義は国立大学のいっそうの発展とともに，今後60周年，70周年，100周年までも全員元気でまた出席願いたいと述べ同名誉教授の音頭で一同乾杯し祝宴にはいった．

祝宴に入るや，りっすいの余地のないほどの来会者の間に，わずかにテーブルが並ぶほどの盛会となり，往時の応援歌，寮歌，校歌，近ごろの学生歌などのバックグラウンドミュージックがいっそう会を盛り上げ，来会者それぞれ何年ぶりかの再会に時間のたつのもわからぬうち，有志の若干名は，演壇に上り，往時を回想したり，なつかしい応援団長ぶりを発揮したりして，午後4時ごろに西牧肇（建築昭和8年卒）の発声で万歳を三唱し，金泉隆介の閉会の辞によってそれぞれ再会を約しつつ，この大会も盛会裡に無事閉会の幕を閉じたのであった．

付　　表

教員名簿
定員変遷一覧表
入学卒業状況一覧表
年　表
参考文献

付　表

1．横浜高等工業学校創設時の教員名簿（大正９年）

学科等名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
	校長	鈴木　達治						
機械工学科	教授	遠藤　政直	教授	伊藤万太郎	教授	河合　匡		
	助教授	石垣　松三	講師	渋谷　武松				
応用化学科	教授	長　俊一	教授	柏木　一三				
	助教授	堀江不器雄	講師	草間　時蒼				
電気化学科	助教授	藤川由太部	講師	冨山　保	講師	平野　利貞	講師	小林　鼎
共通	教授	安川数太郎	教授	岩橋　遵成	教授	池内　本	教授	水野　常吉
	助教授	飯塚　正市	講師	浅井郁太郎	講師	佐々木　等		

2．教員異動状況一覧表（大正10年～昭和19年）

（注）主として横浜高等工業学校一覧によるもので，本文と多少違っているところがある点了解されたい。

年別		職名	称号	氏名	職名	称号	氏名	職名	称号	氏名
大正10年	（任用）	教授	理学士	津田　幹夫	教授	理学士	渡辺　義勝	助教授		秋　一雄
		助教授	理学士	今井　行雄	助教授	理学士	横山　盛彰	講師	工学士	山田　健吉
		講師		横地捨次郎						
	（減員）	助教授		△石垣　松三	講師		△平野　利貞	講師		△佐々木　等
大正11年	（任用）	教授	マスターオブサイエンス	山下誠太郎	教授	理学士	藤村　利常	教授	文学士 法学士	江剌喜四郎
		助教授		桜井　誠	助教授		高橋　武司	助教授		武田　義昌
		講師	工学士	大塚　英一	講師	工学士	岡村　幸雄	講師	マスターオブサイエンス	荒木東一郎
		〃	法学博士	岡　実	〃		栗原　邦志	〃		佐藤　虎雄
		〃	理学士	伊藤　直	〃	工学士	中原益治郎	〃		相浦　貫一
	（身分異動）	助教授→教授		今井　行雄	助教授→教授		横山　盛彰	助教授→教授		飯塚　正市
		講師→教授		草間　時蒼	講師→助教授		小林　鼎			
	（減員）	教授		△伊藤万太郎	教授		△岩橋　遵成	助教授		△秋　一雄
		助教授		△高橋　武司	講師		△山田　健吉	講師		△渋谷　武松
大正12年	（任用）	教授	文学士	大西　友太	助教授	理学士	加藤　述之	助教授		斎藤　輝治
		助教授		中本　高一	〃		村上　泰助	講師		沢　全雄
		講師		山本　敬三	講師	理学士	木戸　潔	〃	工学博士	阿部美樹志
		〃	工学博士	中村幸之助						

年別		職名	称号	氏名	職名	称号	氏名	職名	称号	氏名
大正13年	(任用)	講師	工学士	山田 嘉久	講師	工学士	飯沼 義雄	講師	理学士	北山 正吉
		〃	文学士	三井 透	〃		岡橋信重郎	〃		阿部 繁一
		〃		石橋 濕山	〃		伊達 洋造			
	(身分異動)	講師→教授		岡村 幸雄	助教授→教授		藤川由太郎			
	(減員)	教授		Δ江剌喜四郎	教授		Δ中原益治郎	助教授		Δ武田 義昌
		助教授		Δ中本 高一						
大正14年	(任用)	教授		中村 順平	教授	工学士	建部裕一郎	助教授		河村 文一
		講師		渡辺 安雄	講師	理学士	松田 和三	〃		玉田 邦平
		〃		阿部 滋弘	〃	文学士	斎藤茂三郎	講師		石川 房治
	(身分異動)	助教授→教授		加藤 述之						
	(減員)	講師		Δ岡橋信重郎	講師		Δ相浦 貫一	講師		Δ栗原 邦志
		〃		Δ山本 敬三	〃		Δ伊藤 直	〃		Δ伊達 洋造
大正15年	(任用)	教授		佐藤 好	助教授		伊藤 三郎	講師		畑 正吉
		講師	文学士	内藤 濯	講師	理学士	内田 義信	〃	工学士	竹内強一郎
	(身分異動)	助教授→教授		堀江不器雄	講師→教授		木戸 潔	講師→助教授		石川 房治
		講師		Δ中村幸之助	講師		Δ浅井郁太郎	講師		Δ北山 正吉
	(減員)	〃		Δ渡辺 安雄						
昭和2年	(任用)	講師		大野 巌	講師		深井 景二	講師	工学士	森井 健介
		〃	理学士	八田 篤敬	〃	工学士	山田七五郎	〃		座間美都治
	(身分異動)	講師→助教授		阿部 滋弘						
	(減員)	教授		Δ長 俊之	助教授		Δ桜井 誠			
昭和3年	(任用)	教授	理学士	橋本 重隆	教授		鈴木 京平	助教授		中島 正己
		講師		本間 淳治	講師	工学士	徳永 晋作	講師	理学士	小山 亮清
	(身分異動)	講師→教授		山田 嘉久	講師→教授		竹内強一郎	講師→教授		飯沼 義雄
		講師→助教授		本間 淳治	助教授→講師		小林 鼎			
	(減員)	教授		Δ柏木 一三	教授		Δ草間 時蕃	教授		Δ建部裕一郎
		〃		Δ飯塚 正市	講師		Δ深井 景二	講師		Δ大塚 英一
		講師		Δ阿部 繁一						
昭和4年	(任用)	教授	工学士	川原 五郎	教授		竹内 秀雄	助教授	工学士	寺沢 一雄
		助教授	理学士	遠藤 重郎	講師	バチエラーオブサイエンス	正木 康作			
	(身分異動)	講師→教授		三井 透						
	(減員)	教授		Δ水野 常吉	講師		Δ佐藤 虎雄	講師		Δ大野 巌
昭和5年	(任用)	助教授		鈴木 正次	講師	工学士	福田 弘一	講師	工学士	矢ヶ崎正経
		講師	工学士	近藤 政市	〃	文学士	元木 清			
	(身分異動)	助教授→教授		伊藤 三郎						
	(減員)	助教授		Δ村上 泰助	講師		Δ八田 篤敬			

年別		職名	称号	氏名	職名	称号	氏名	職名	称号	氏名
昭和6年	(任用)	助教授		野村洋一郎	講師	工学士	林 豪蔵	講師	工学士	赤星 朝晴
		講師	工学士	笹井 賢二	〃	〃	小川太一郎	〃	〃	湊 一磨
		〃		根上 耕一						
	(身分異動)	助教授→教授		寺沢 一雄	講師→教授		小山 亮清	助教授→教授		伊藤 三郎
		〃		遠藤 重郎	〃		林 豪蔵	講師→教授		近藤 政市
		講師→助教授		正木 康作						
	(減員)	講師		△矢ヶ崎正経	講師		△森井 健介	講師		△小林 鼎
		〃		△徳永 晋作	〃		△荒木東一郎			
昭和7年	(任用)	講師	工学士	東 常任	講師		西川 裕			
	(減員)	〃		△座間美郁治	〃		△湊 一磨			
昭和8年	(任用)	講師		井上 清						
	(身分異動)	教授→講師		池内 本						
	(減員)	講師		元木 清						
昭和9年～昭和10年	(任用)	教授	理学士	草間 時蕃	助教授		鈴木 秀一	助教授		吉岡 勲
		助教授	工学士	友成 忠雄	講師		佐藤 好	講師		小菅 義雄
		講師	工学士	大瀬 威						
	(身分異動)	講師→校長		冨山 保	助教授→教授		斎藤 輝治	助教授→教授		阿部 滋弘
		講師→助教授		藤井 真一	教授→講師		山下誠太郎	教授→講師		橋本 重隆
		助手→助教授		森川幾久雄						
	(減員)	教授		△竹内強一郎	教授		△小山 亮清	教授		△佐藤 好
		〃		△藤村 利常	助教授		△正木 康作			
昭和11年	(任用)	教授	法学士	佐藤 正能	講師	工学士	平林 信也	講師		中原 虎男
		講師	理学博士	箕作 信六	〃	工学博士	蒔田 宗次	〃	工学士	△堀 尚靖
	(減員)	助教授		△野村洋一郎	講師		△東 常任	講師		△赤星 朝晴
		講師		△岡 実	〃		西川 裕			
昭和12年	(任用)	助教授	工学士	高橋 安人	助教授	法学士	中野 豊	講師	工学士	生野 熊一
		講師	理学士	松川 昌蔵						
	(身分異動)	助教授→教授		河村 文一	教授→講師		遠藤 政直	教授→講師		堀江不器雄
	(減員)	教授		△山田 嘉久	講師		△堀 尚靖	講師		△井上 清
昭和13年	(任用)	教授		津村 利光	教授	工学士	木原 博	助教授		駒井 艦治
		助教授	工学士	山本 一夫	助教授	理学士	山梨 真一	助教授	文学士 法学士	川田 正斉
		講師	〃	東 貢	講師	工学士	間瀬 徳造	講師	工学士	広津 万里
		〃	〃	福田 秀雄	〃	〃	田島 良幹	〃	〃	粟野 誠一
	(身分異動)	助教授→教授		高橋 安人	助教授→教授		中島 正己	助教授→教授		中野 豊
		講師→教授		池田 健	講師→教授		松川 昌蔵			
	(減員)	教授		△三井 透	教授		△寺沢 一雄	教授		△河合 匡
		講師		△平林 信也						

年別	職名	称号	氏名	職名	称号	氏名	職名	称号	氏名
昭和14年 (任用)	教授	工学士	黒川 恒勝	教授		柴田 浩	助教授		川井 邦平
	助教授		小竹雄四郎	助教授		鶴岡 武	〃		藤野 節儀
	〃		松橋清三郎	〃		荒井 文治	〃	理学士	森川 正
	講師	工学博士	永井彰一郎	講師	工学士	吉田 俊二	講師	工学士	山口 宗雄
	〃	工学士	三戸 章方	講師	工学士	広田 守道	〃		小林 喜通
	〃	文学士	宮島 肇	〃	〃	樋口 嘉富			
(身分異動)	助教授→教授		山梨 真一	助教授→教授		川田 正斉	講師→教授		広津 万里
	教授→講師		渡辺 義勝	助教授→講師		藤井 真一			
(減員)	助教授		Δ鈴木 秀一	講師		Δ福田 弘一	講師		Δ生野 熊一
	講師		Δ田島 良幹	〃		Δ粟野 誠一	〃		Δ佐藤 好
昭和15年 (任用)	教授	理学博士	木下 恭二	助教授		小泉 勝也	助教授		神戸 蕃
	教授	工学士	山野 健郎	〃		林 参郎	講師	工学士	小沢 大作
	助教授	理学士	鈴木 勝	講師	工学士	松崎 純生	〃	工学士	阿曽真一郎
	講師	工学士	山崎 三郎						
(身分異動)	助教授→教授		友成 忠雄	教授→講師		草間 時蕃			
(減員)	教授		Δ大串不二雄	教授		Δ高橋 安人	講師		Δ大瀬 威
	講師		Δ内田 義信	講師		Δ根上 耕一	〃		Δ小菅 義雄
	〃		Δ三戸 章方						
昭和16年～昭和17年 (任用)	教授		工藤 進	教授		高橋健太郎	教授		大串 雅信
	助教授		松尾 力	講師		有馬 正雄	助教授		鈴木 洋二
	講師		田口 武一	〃		高畠 彰	講師		平尾 収
	〃		須田 豊作	〃		稲見 忠	〃		猪狩 満和
	〃		黒沢 豊	〃		佐藤 五郎	〃		吉村 慶丸
	〃		田辺 謙輔				〃		石田 鶴彦
(身分異動)	助授授→教授		鈴木 正次	助教授→教授		森川幾久雄	講師→教授		広田 守道
	教授→講師		鈴木 京平	教授→講師		池田 健	助手→助教授		内田 綱紀
(減員)	教授		Δ津村 利光	教授		Δ中野 豊	教授		Δ鈴木 京平
	〃		Δ津田 幹夫	〃		Δ小竹雄四郎	講師		Δ池田 健
	講師		Δ山下誠太郎	講師		Δ蒔田 宗次	〃		Δ小川太一郎
	〃		Δ樋口 嘉富	〃		Δ山口 宗夫			
昭和18年 (任用)	教授		豊田 浩七	教授		佐野 朝男	助教授		藤井 耕一
	助教授		羽田 義雄	講師		八田秀三郎	講師		山本 政人
(身分異動)	講師→教授		田口 武一						
(減員)	教授		Δ川田 正斉	教授		Δ工藤 進	教授		Δ山梨 進一
	〃		Δ遠藤 重郎	〃		Δ中島 正己	〃		Δ横山 盛彰
	講師		Δ浦上 学						
昭和19年 (任用)	教授		臼井 亨一	教授		柴崎 安一	助教授		和田 正三
	助教授		山田 大十	助教授		小田代恒正	〃		生野 昇
	〃		元広 友三						
(身ヵ異動)	助教授→教授		石川 房治	助教授→教授		吉岡 勲			
(減員)	教授		Δ佐野 朝男	教授		Δ本間 淳治	助教授		Δ鈴木 勝
	助教授		Δ羽田 義雄	講師		Δ山本 政人			

3. 歴代管理職一覧表

	工学部長	二部主事	事務長
1	24.5.31～25.1.15 (事務取扱) 冨山 保	40.1.1～40.3.31 (併) 中村康治	24. 6.30～26. 4.15 蒲田新太郎
2	25.1.16～27.2.15 阿部滋弘	40.4.1～43.3.31 森川幾久雄	26. 4.16～34.11.30 菅野修三
3	27.2.16～28.4.20 江国正義	43.4.1～44.4.30 黒川恒勝	34.12. 1～36.11.30 代田満穂
4	28.4.21～30.3.31 阿部滋弘	44.5.1～45.3.31 小栗達	36.12. 1～現在 松尾延治
5	30.4. 1～32.3.31 山中直次郎	45.4.1～47.3.31 木下恭二	
6	32.4. 1～34.3.31 永井彰一郎		
7	34.4. 1～36.3.31 大岡実		
8	36.4. 1～39.3.31 岩崎高雄		
9	39.4. 1～40.5.31 中村康治		
10	40.6. 1～40.7. 9 (事務取扱) 中村康治		
11	40.7.10～42.3.31 河東準		
12	42.4. 1～44.1.20 小山永敏		
13	44.1.21～44.1.31 (事務取扱) 河東準		
14	44.2. 1～現在 田口武一		

4. 歴代学長

氏名	在学期間	備考
冨山保	昭 24.5.31～27.8. 4	
江国正義	27.8. 5～28.4.20	事務取扱
〃	28.4.21～34.3.31	
黒沢清	34.4. 1～40.3.31	
中村康治	40.4. 1～40.5.31	事務取扱
〃	40.6. 1～44.2.28	
水戸部正男	44.3. 1～44.8.31	事務取扱
越村信三郎	44.9. 1～45.2.28	事務取扱
〃	45.3. 1～現在	

5. 横浜国立大学工学部教員名簿 (昭和27年)

* 併任

学科等名	職名 氏名	職名 氏名	職名 氏名	職名 氏名
	教授 (工学部長) 江国正義			
機械工学科	教授 山中直次郎	教授 湯浅亀一	教授 柴田晴彦	教授 野手悌士
	〃 三原金吾	〃 黒川恒勝		
	助教授 山野健郎	助教授 中村康治	助教授 小栗達	助教授 横山亨
	〃 中山一雄			
	講師 増淵正美			
化学工業科	教授 阿部滋弘	教授 草間時蕃	教授 多和田寛	教授 大谷泰通
	〃 木下恭二			
	助教授 森川幾久雄	助教授 高橋健太郎	助教授 田丸謙二	助教授 佐藤菊正

学科等名	職名 氏名	職名 氏名	職名 氏名	職名 氏名
化学工業科	講師 横山 金一			
電気化学科	教授 北川 徹三 助教授 柴崎 安一 講師 鶴岡 武	教授 友成 忠雄 助教授 山田 大十 講師 小川 忠彦	*教授 永井彰一郎 助教授 松野 武雄	*教授 岡 俊平 助教授 塩谷 繁雄
建築学科	教授 江国 正義 助教授 田口 武一 講師 林 豪蔵	教授 大岡 実 助教授 飯塚五郎蔵 講師 安藤 範平	教授 佐藤 鑑 助教授 井上 充夫	助教授 河合 正一
造船工学科	教授 成島 秀 助教授 沢村 鶴松 講師 永井 保	教授 小山 永敏 助教授 吉岡 勲	教授 南 義夫 助教授 丸尾 孟	助教授 八田秀三郎
電気工学科	教授 後藤 良 助教授 武田 進 講師 岡崎 彰夫	教授 中島 好忠 助教授 中西 邦雄	教授 吉田梅次郎 助教授 池田 吉堯	*教授 福田 節雄
工業分析	教授 河村 文一 講師 桃木 弘三			

6. 教員異動状況一覧表（昭和28年～昭和45年）

* 併任

年別	職名	学科等名	氏名	職名	学科等名	氏名	職名	学科等名	氏名
昭和28年 (任用)	教授	建築	山越 邦彦	教授	電工	飯島 健一			
	*助教授		岡崎 卓郎						
(身分異動)	講師 →助教授	機械	増淵 正美	講師 →助教授	造船	永井 保	講師 →助教授	建築	安藤 範平
(減員)	*教授		△岡 俊平	*教授		△福田 節雄	教授	学長就任	△江国 正義
29年 (身分異動)	助手 →講師	機械	豊倉富太郎						
昭和30年 (任用)	教授	〃	中本 守	助教授	化学工業	垣内 弘	助教授	電工	国枝 寿博
	講師	〃	寺尾 邦夫						
(身分異動)	*助教授 →教授	電化	永井彰一郎	講師 →助教授	分析	柏木 弘三	講師 →助教授	機械	豊倉富太郎
	助手 →講師	化学工業	篠田 耕三						
(減員)	*助教授		△岡崎 卓郎						
31年 (任用)	講師		村山 雅美						
(身分異動)	助教授 →教授		森川幾久雄	講師 →助教授		寺尾 邦夫	助手 →講師		芹沢 康夫
昭和32年 (任用)	教授	機械	江間 巌	助教授	機械	青木 隆一			
(身分異動)	助教授 →教授	建築	田口 武一	助教授 →教授	電化	柴崎 安一	講師 →助教授	化学工業	篠田 耕三
	助手 →講師	電化	高橋 正雄	助手 →講師	化学工業	宮本 統			
(減員)	教授		△山中直次郎	教授		△湯浅 亀一	教授	(逝去)	△多和田 寛

年別		職名	学科等名	氏名	職名	学科等名	氏名	職名	学科等名	氏名
昭和33年	(任用)	教授	化学工業	岩崎 高雄	教授	金属	沖 進	講師		田中 裕
	(身分異動)	助教授→教授	機械	中村 康治	助教授→教授	電工	中西 邦雄	講師→助教授	化学工業	横山 金一
		講師→助教授	電工	芹沢 康夫	助手→講師	〃	都築 泰雄			
	(減員)	教授		Δ草間 時蕃	教授		Δ大谷 泰通	教授		Δ中本 守
昭和34年	(任用)	教授	金属	和田 良澄	助教授	金属	葉山益次郎			
	(身分異動)	助教授→教授	電化	松野 武雄	助教授→教授	化学工業	垣内 弘	助教授→教授	化学工業	田丸 謙二
		〃	造船	丸尾 孟	講師→助教授	電化	高橋 正雄	助手→講師	〃	大塚 淳
		助手→講師	化学工業	福田十三雄						
	(減員)	助教授		Δ塩谷 繁雄	助教授		Δ永井 保			
昭和35年	(任用)	教授	電工	尾形 克彦						
	(身分異動)	助教授→教授	〃	国枝 寿博	講師→助教授	施設	田中 裕	助手→講師	電化	小林 義隆
		助手→講師	電化	十川 尭一						
	(減員)	教授		Δ永井彰一郎						
昭和36年	(任用)	助教授	建築	後藤 滋	助教授	金属	上城 太一			
	(身分異動)	助教授→教授	化学工業	高橋健太郎	助教授教授→	機械	小栗 達	助教授→教授	機械	横山 亨
		〃	機械	中山 一雄	〃	〃	増淵 正美	講師→助教授	電化	小川 忠彦
		講師→助教授	電化	鶴岡 武	講師→助教授	化学工業	大塚 淳	助手→助教授	物理	宇佐美誠二
	(減員)	教授		Δ成島 秀	助教授		Δ武田 進	助教授	工数へ	Δ山野 健郎
		講師	工教へ	Δ林 豪蔵						
昭和37年	(任用)	教授	化工	河東 準	助教授	造船	板垣 浩	講師	金属	市之瀬弘之
	(身分異動)	助教授→教授	造船	吉岡 勲	助手→講師	応化	福田 和吉			
昭和38年	(任用)	教授	金属	黒崎 永治	助教授	建築	末永 保美	助教授	造船	竹沢 誠二
	(自分異動)	併任教授	機械	工藤 英明	助教授→教授	施設	田中 裕	助教授→教授	建築	河合 正一
		助教授→教授	電工	池田 吉堯	〃	化工	青木 隆一			
	(減員)	教授	工教へ	Δ山越 邦彦	助教授	応数	Δ八田秀三郎	助教授	建築	Δ安藤 範平
昭和39年	(任用)	教授	化工	山本 一夫	教授	電工	村上 一郎	助教授	応化	小笠原貞夫
		助教授	〃	桐生 知男	助教授	化工	池田 憲治	〃	〃	広田 穣
		〃	機械	鈴木 房幸	助教授	応物	佐藤正千代	講師	機械	山口 惇
		講師	電工	関口 隆						
	(身分異動)	助教授→教授	応化	篠田 耕三	助教授→教授	機械	寺尾 邦夫			
		教授		Δ野手 悌士	教授	工教へ	Δ岩崎 高雄	教授		Δ田丸 謙二
		講師		Δ村山 正美	講師		Δ福田十三雄			
昭和40年	(任用)	教授	化工	若尾 法昭	助教授	応化	樋口 治郎	講師	造船	池畑 光尚
	(身分異動)	助教授→教授	機械	豊倉富太郎	助教授→教授	〃	小笠原貞夫	助教授→教授	分析	桃木 弘三
		講師→助教授	応化	福田 和吉	講師→助教授	機械	山口 惇	講師→助教授	金属	市瀬 弘之
		助手→講師	分析	鳥飼 直親	助手→講師	電工	高瀬 光蔵			
	(減員)	教授	学長就任	Δ中村 康治	教授		Δ河村 文一	教授	工教へ	Δ江間 巌
41年	(任用)	教授	電工	権藤 靖夫	助教授	建築	野村 東太	講師	建築	関口 欣也

年別	職名	学科等名	氏名	職名	学科等名	氏名	職名	学科等名	氏名
昭和41年 (身分異動)	併任教授→教授	機械	工藤 英明	助教授→教授	建築	井上 充夫	助教授→教授	建築	飯塚五郎蔵
	助手→講師	化工	上和野満雄						
(減員)	教授		△柴田 晴彦	教授		△大岡 実	講師		△十川 先一
昭和42年 (任用)	教授	応数	武藤 義夫	助教授	応数	大平 坦	講師		藤堂 勇雄
(身分異動)	助教授→教授	応化	佐藤 菊正	助教授→教授	造船	沢村 鶴松	助教授→教授	金属	葉山益次郎
	〃	応物	佐藤正千代	〃	施設	高橋 正雄	講師→助教授	造船	池畑 光尚
	助手→助教授	建築	石井 一夫						
昭和43年 (任用)	教授	建築	内藤 亮一	教授	安全	井上 威恭	教授	安全	若園 吉一
	〃	電工	太田 時男	助教授	建築	紺野 昭	講師	電工	菅原 昌敬
	講師	〃	土肥 康孝	講師	電化	仁木 克巳	〃	機械	小貫 隆治
	〃	化工	石井 勉	〃	〃	斎藤 朗			
(身分異動)	講師→助教授	電工	都築 泰雄	講師→助教授	電工	関口 隆	講師→助教授	安工	小林 義隆
	〃	機械	藤堂 勇雄	助手→講師	応化	中山 春夫			
(減員)	教授		△阿部 滋弘	教授		△後藤 良	教授		△柴田 晴彦
	〃		△大岡 実	〃		△三原 金吾	〃		△森川幾久雄
昭和44年 (任用)	教授	施設	小倉 信和	助教授	機械	松本 幸生	助教授	建築	佐藤 仁
	助教授	安工	福迫 達一	〃	化工	飯田 嘉宏	〃	化工	大矢 晴彦
	講師	建築	青木 博文	講師	機械	江村 超	講師	金属	井口 栄資
(身分異動)	講師→助教授	電工	菅原 昌敬	講師→助教授	電工	土肥 康孝	講師→助教授	化工	石井 勉
	助手→講師	分析	佐藤 寿邦						
(減員)	教授		△黒川 恒勝	教授		△増淵 正美			
昭和45年 (任用)	教授	機械	下田 秀夫	講師	電工	塚本 修己	講師	施設	白水 竜介
(身分異動)	助教授→教授	建築	後藤 滋	助教授→教授	建築	末永 保美	助教授→教授	建築	野村 東太
	〃	応化	樋口 治郎	講師→助教授	〃	関口 欣也	講師→助教授	分析	鳥飼 直親
	助手→講師	建築	片山 忠久						
(減員)	教授		△佐藤 鑑	助教授		△紺野 昭	助教授		△市之瀬弘之

7. 横浜国立大学工学部教員名簿（昭和45年）

学科等名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
	教授（工学部長）	田口 武一						
機械工学科	教授	下田 秀夫	教授	小栗 達	教授	中山 一雄		
	助教授	松本 幸生	助教授	鈴木 房幸	助教授	山口 惇		
	講師	小貫 隆治						
機械工学第二学科	教授	横山 亨	教授	工藤 英明	教授	寺尾 邦夫	教授	豊倉富太郎
	助教授	藤堂 勇雄						
応用化学科	教授	木下 恭二	教授	高橋健太郎	教授	垣内 弘	教授	佐藤 菊正
	〃	小笠原貞夫	〃	篠田 耕三	〃	樋口 治郎		

学科等名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
応用化学科	助教授	横山 金一	助教授	大塚 淳	助教授	福田 和吉	助教授	広田 穣
	講師	宮本 統	講師	中山 春夫				
電気化学科	教授	友成 忠雄	教授	柴崎 安一	教授	松野 武雄		
	助教授	山田 大十	助教授	鶴岡 武	助教授	小川 忠彦		
	講師	仁木 克巳	講師	斎藤 朗				
建築学科	教授	田口 武一	教授	内藤 亮一	教授	井上 充夫	教授	河合 正一
	〃	飯塚五郎蔵	〃	後藤 滋	〃	末永 保美	〃	野村 東太
	助教授	佐藤 仁	助教授	石井 一夫	助教授	関口 欣也		
	講師	青木 博文	講師	片山 忠久				
造船工学科	教授	小山 永敏	教授	南 義夫	教授	吉岡 勲	教授	丸尾 孟
	助教授	竹沢 誠二	助教授	板垣 浩	助教授	池畑 光尚		
電気工学科	教授	飯島 健一	教授	村上 一郎	教授	中西 邦雄	教授	国枝 寿博
	〃	池田 吉堯	〃	権藤 靖夫	〃	中島 忠好	〃	太田 時男
	助教授	芹沢 康夫	助教授	都築 泰雄	助教授	関口 隆		
	講師	高瀬 光蔵	講師	菅原 昌敬	講師	土肥 康孝	講師	塚本 修己
金属工学科	教授	黒崎 永治	教授	和田 良澄	教授	沖 進	教授	葉山益次郎
	助教授	上城 太一						
	講師	井口 栄資						
化学工学科	教授	河東 準	教授	山本 一夫	教授	青木 隆一	教授	若尾 法昭
	助教授	桐生 知男	助教授	池田 憲治	助教授	石井 勉		
	講師	上和野満雄						
安全工学科	教授	北川 徹三	教授	井上 威恭	教授	若園 吉一		
	助教授	小林 義隆	助教授	福迫 達一				
共通教室 工業分析	教授	桃木 弘三	助教授	鳥飼 直親	講師	佐藤 寿邦		
応用物理	教授	吉田梅次郎	教授	佐藤正千代	助教授	宇佐美誠二		
応用数学	教授	武藤 義夫	助教授	大平 坦				
移動論	助教授	大矢 晴彦	助教授	飯田 嘉宏				
材料基礎工学研究施設	教授	高橋 正雄	教授	小倉 信和	教授	田中 裕	講師	白水 竜介

8. 横浜国立大学工業教員養成所創設時の教員名簿（昭和36年）

* 併任

学科等名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
	*所長	岩崎 高雄						
機械工学科	教授	山野 健郎	*教授	中村 康治				
	助教授	真壁 肇	助教授	米谷 茂	助教授	松本 幸生		
建築学科	教授	林 豪蔵	*教授	大岡 実	*教授	佐藤 鑑		
	助教授	野村 東太						

9. 教員異動状況表（工業教員養成所）（昭和37年～昭和44年）

＊併任

年別	職名	学科等名	氏名	職名	学科等名	氏名	職名	学科等名	氏名
37年（任用）	教授	建築	内藤 亮一						
38年（任用）	教授	建築	山越 邦彦	助教授	建築	池田 昭男			
39年（任用）	所長専任		岩崎 高雄	助教授	建築	佐藤 仁			
40年（任用）	教授	機械	江間 巌	＊教授	機械	横山 亨	＊教授	建築	河合 正一
40年（減員）	＊教授	機械	Δ中村 康治	助教授	機械	Δ真壁 肇			
41年（任用）	＊教授	機械	黒川 恒勝	＊助教授	建築	野村 東太			
41年（身分異動）	助教授→教授	機械	米谷 茂						
41年（減員）	教授		Δ岩崎 高雄	助教授	建築	Δ野村 東太			
42年（任用）	＊教授	機械	中山 一雄						
42年（減員）	＊教授	機械	Δ黒川 恒勝	＊教授	建築	Δ横山 亨	教授	建築	Δ山越 邦彦
43年（減員）	教授	機械	Δ江間 巌						
44年廃止（任用）	＊教授	機械	小栗 達	＊助教授	機械	松本 幸生			
44年廃止（減員）	教授	機械	Δ山野 健郎	教授	建築	Δ林 豪蔵			
	＊教授	機械	Δ中山 一雄	＊教授	建築	Δ内藤 亮一	教授	機械	Δ米谷 茂
	＊助教授	建築	Δ佐藤 仁	助教授	建築	Δ池田 昭男	＊助教授	建築	Δ野村 東太

10. 横浜高等工業学校（工専）入学状況一覧表

年度	事項	機械工学科 本科	機械工学科 工業教員養成所	応用化学科 本科	応用化学科 工業教員養成所	電気化学科 本科	電気化学科 工業教員養成所	建築学科 本科	建築学科 工業教員養成所	造船工学科	航空工学科 本科	航空工学科 工業教員養成所	合計 本科	合計 工業教員養成所
大正9年度	志願者数	325		182		149							656	
	入学者数	41		39		35							115	
	倍率	8.0		4.7		4.3							5.7	
〃10年度	志願者数	247		121		188							556	
	入学者数	42		43		42							127	
	倍率	5.9		3.0		4.5							4.4	
〃11年度	志願者数	144		87		94							325	
	入学者数	41		40		40							121	
	倍率	3.5		2.2		2.4							2.7	
〃12年度	志願者数	145		99		124							368	
	入学者数	41		39		40							120	
	倍率	3.6		2.6		3.1							3.7	

年度	学科等 / 事項	機械工学科		応用化学科		電気化学科		建築学科		造船工学科	航空工学科		合計	
		本科	工業教員養成所	本科	工業教員養成所	本科	工業教員養成所	本科	工業教員養成所		本科	工業教員養成所	本科	工業教員養成所
大正13年度	志願者数	107		67		55							229	
	入学者数	40		36		36							112	
	倍率	2.7		1.9		1.6							2.1	
〃14年度	志願者数	174		85		99							358	
	入学者数	40		40		40							120	
	倍率	4.4		2.2		2.5							3.0	
〃15年度	志願者数	266		133		151		155					705	
	入学者数	39		39		38		31					147	
	倍率	6.8		3.4		4.0		5.0					4.8	
昭和2年度	志願者数	235		145		152		208					740	
	入学者数	40		40		40		29					149	
	倍率	5.9		3.6		3.8		7.0					5.0	
〃3年度	志願者数	485		283		291		324					1,393	
	入学者数	39		37		40		29					146	
	倍率	12.4		7.7		7.3		11.2					9.6	
〃4年度	志願者数	590	102	281	79	427	22	386	47	226			1,910	250
	入学者数	36	6	39	7	36	4	26	7	24			161	24
	倍率	16.4	17.0	7.2	11.3	11.9	5.5	14.9	6.9	9.4			11.9	1.4
〃5年度	志願者数	454	191	259	171	305	65	278	72	197			1,493	499
	入学者数	36	5	40	6	38	2	30	6	26			170	19
	倍率	12.4	38.2	6.5	28.5	8.0	32.5	9.3	12.0	7.5			21.3	26.3
〃6年度	志願者数	476	169	346	141	353	36	245	58	228			1,648	404
	入学者数	40	7	40	6	37	2	25	6	25			167	21
	倍率	11.9	25.6	8.7	23.5	9.6	18.0	9.8	9.7	9.1			9.9	18.9
〃7年度	志願者数	361	132	295	110	250	22	133	48	161			1,200	312
	入学者数	40	5	38	5	35	2	28	6	26			167	18
	倍率	9.3	26.4	7.9	22.0	7.1	11.0	4.8	8.0	6.2			7.2	17.8
〃8年度	志願者数	648	159	300	103	319	38	182	51	253			1,702	351
	入学者数	39	6	37	6	38	2	28	6	29			171	20
	倍率	16.6	26.5	8.1	17.2	8.4	19.0	6.5	8.5	8.7			10.0	17.6
〃9年度	志願者数	586	118	343	84	305	29	157	54	326			1,717	285
	入学者数	39	6	40	5	40	2	29	6	30			178	19
	倍率	15.0	19.7	8.6	16.8	7.7	14.5	5.5	9.0	10.9			9.7	15.0

年度	学科等 事項	機械工学科 本科	機械工学科 工業教員養成所	応用化学科 本科	応用化学科 工業教員養成所	電気化学科 本科	電気化学科 工業教員養成所	建築学科 本科	建築学科 工業教員養成所	造船工学科	航空工学科 本科	航空工学科 工業教員養成所	合計 本科	合計 工業教員養成所
昭和10年度	志願者数	803	134	380	108	438	28	226	48	420			2,267	318
	入学者数	39	5	42	6	40	2	31	6	29			181	19
	倍率	20.6	26.8	9.1	18.0	11.0	14.0	7.3	8.0	14.5			12.5	16.8
〃 11年度	志願者数	685	85	382	65	313	22	192	29	314			1,886	201
	入学者数	40	4	39	6	40	2	31	6	29			179	18
	倍率	17.1	21.5	9.8	10.9	7.8	11.0	6.2	4.9	10.8			10.6	11.2
〃 12年度	志願者数	500	42	395	50	360	18	175	14	428			1,858	124
	入学者数	40	5	39	6	38	2	31	6	36			184	19
	倍率	12.5	8.4	10.2	8.3	9.5	9.0	5.7	2.3	11.9			10.1	6.6
〃 13年度	志願者数	587	44	282	50	275	18	140	36	136			1,706	148
	入学者数	77	9	40	6	40	2	32	6	30			261	23
	倍率	7.7	4.9	7.1	8.4	6.9	9.0	4.4	6.0	4.6			6.6	6.5
〃 14年度	志願者数	534	112	337	55	347	21	142	16	241			1,890	204
	入学者数	75	15	75	8	75	4	30	3	30			325	30
	倍率	7.2	7.5	4.5	6.9	4.7	5.3	4.8	5.4	8.1			5.9	6.8
〃 15年度	志願者数	343	88	294	49	280	25	157	14	143			1,428	176
	入学者数	75	15	73	8	75	4	75	3	37			376	30
	倍率	4.6	5.9	4.1	6.2	4.0	6.3	2.1	4.4	3.6			3.8	5.9
〃 16年度	志願者数	448	74	260	33	203	23	258	6	172	310		1,651	186
	入学者数	75	15	75	8	75	4	75	3	40	80		420	30
	倍率	6.0	4.9	3.5	4.1	2.7	5.7	3.5	2.0	4.3	3.9		3.9	6.2
〃 17年度	志願者数	313	63	232	32	188	10	214	15	260	424		1,630	120
	入学者数	75	30	75	8	75	4	75	3	40	80		420	45
	倍率	4.2	2.1	3.1	4.0	2.5	2.5	2.9	5.0	6.5	5.3		3.9	2.7
〃 18年度	志願者数	709	61	602	17	417	11	356	8	543	934		3,559	97
	入学者数	75	30	75	8	75	4	75	3	40	80		420	45
	倍率	9.3	2.0	8.0	2.1	5.6	2.9	4.8	2.9	13.5	11.7		8.4	2.1
〃 19年度	志願者数	903 187*	85	752 180*	21	532 162*	39	421	20	952† 166* 40・	980 194*	33	4,540 889*	238
	入学者数	75 40*	30	75 40*	5	75 40*	6	75	5	80† 40* 5・	80 40*	5	460 200*	56
	倍率	12.4 4.7*	2.8	10.0 4.5*	4.2	7.1 4.1*	6.5	5.6	4.0	11.9† 4.5* 9.0・	12.5 4.9*	6.6	9.9 4.5*	4.3

昭和20年度以降は資料なく不明，各科とも * 2部，造船工学科においては † 本科・教養

11. 横浜国立大学工学部入学状況一覧表

年度	事項＼学科等	機械工学科	応用化学科	電気化学科	建築学科	造船工学科	電気工学科	金属工学科	化学工学科	安全工学科	計	2部機械工学科	2部応用化学科	計	合計
昭和24年度	志願者数	103	115	86	56	67	78				505	72	66	138	643
	入学者数	41	34	36	25	29	29				194	31	30	61	255
	倍率	2.5	3.4	2.4	2.2	2.4	2.7				2.6	2.4	2.3	2.3	2.5
昭和25年度	志願者数	373	464	177	213	227	306				1,760	138	112	250	2,010
	入学者数	48	37	38	34	33	34				224	35	30	65	289
	倍率	7.8	12.5	4.7	6.3	6.9	9.0				7.9	3.9	3.7	3.8	6.9
昭和26年度	志願者数	540	667	226	266	283	380				2,362	196	152	348	2,710
	入学者数	40	33	35	27	25	29				189	37	30	67	256
	倍率	13.5	20.3	6.5	9.5	11.3	13.1				12.5	5.3	5.1	5.2	10.6
昭和27年度	志願者数	735	745	233	274	419	438				2,844	249	199	448	3,296
	入学者数	44	36	35	31	32	32				200	30	30	60	260
	倍率	16.7	20.7	6.7	8.8	13.1	13.7				14.3	8.3	6.6	7.4	12.7
昭和28年度	志願者数	395	251	179	222	234	275				1,556	191	129	320	1,876
	入学者数	45	35	35	30	27	29				201	34	30	64	265
	倍率	8.8	7.2	5.1	7.4	8.6	9.5				7.7	5.6	4.3	5.0	7.1
昭和29年度	志願者数	1,324	886	370	522	477	760				4,339	289	191	480	4,819
	入学者数	44	36	35	29	29	25				198	29	30	59	257
	倍率	30.9	24.6	10.6	18.0	16.4	30.4				21.9	9.1	6.4	8.1	18.3
昭和30年度	志願者数	1,123	976	529	624	568	814				4,634	264	211	475	5,109
	入学者数	43	36	30	30	28	30				197	30	30	60	257
	倍率	26.1	27.1	17.6	20.8	20.3	27.1				23 5	8.8	7.0	7.9	19.9
昭和31年度	志願者数	1,317	1,033	688	722	738	809				5,287	276	250	526	5,813
	入学者数	43	37	32	29	29	30				200	32	28	60	260
	倍率	30.6	27.9	21.5	24.9	25.5	27.0				26.4	8.6	8.9	8.8	22.4
昭和32年度	志願者数	1,354	1,079	641	645	678	787				5,184	311	197	508	5,692
	入学者数	45	39	34	31	30	29				208	30	30	60	268
	倍率	30.1	27.7	18.9	20.8	22.6	27.1				24.9	10.4	6.6	8.5	21.2
昭和33年度	志願者数	1,268	989	490	647	732	1,202	399			5,727	330	247	577	6,304
	入学者数	50	40	37	31	35	36	33			262	29	30	59	321
	倍率	25.4	24.7	13.2	20.9	20.9	33.4	12.1			21.9	11.4	8.2	9.8	19.6
昭和34年度	志願者数	1,572	1,045	544	1,037	734	1,247	729			6,908	329	237	566	7,474
	入学者数	47	41	41	35	37	38	38			277	30	30	60	337
	倍率	33.4	25.5	13.3	29.6	19.8	32.8	19.2			24.9	11.0	7.9	9.4	22.2

年度	学科等 / 事項	機械工学科	応用化学科	電気化学科	建築学科	造船工学科	電気工学科	金属工学科	化学工学科	安全工学科	計	2部機械工学科	2部応用化学科	計	合計
昭和35年度	志願者数	1,357	1,091	661	1,308	608	1,354	717			7,096	320	273	593	7,689
	入学者数	49	41	39	35	36	55	35			290	31	29	60	350
	倍率	27.7	26.6	16.9	37.4	16.9	24.6	20.8			24.5	10.3	9.4	9.9	21.9
昭和36年度	志願者数	1,611	1,123	520	1,066	581	1,544	611			7,056	330	256	586	7,642
	入学者数	69	40	40	35	33	51	36			304	31	30	61	365
	倍率	23.4	28.1	13.0	30.5	17.6	30.3	17.0			23,2	10.6	8.5	9.6	20.9
昭和37年度	志願者数	1,487	701	398	993	590	1,357	454	656		6,617	342	276	618	7,235
	入学者数	67	40	40	28	38	63	40	34		350	28	30	58	408
	倍率	22.2	17.5	10.0	35.5	15.5	21.5	11.4	19.3		18.9	12.2	9.2	10.7	17.7
昭和38年度	志願者数	1,499	748	396	943	520	1,483	387	387		6,363	327	251	578	6,941
	入学者数	64	35	36	29	35	66	36	38		339	30	29	59	398
	倍率	23.4	21.4	11.0	32.5	14.9	22.5	10.8	10.2		18.8	10.9	8,7	9.8	17.5
昭和39年度	志願者数	1,273	687	317	913	634	1,415	340	353		5,932	263	194	457	6,389
	入学者数	69	39	39	32	37	66	36	39		357	30	30	60	417
	倍率	18.4	17.6	8.1	28.5	17.1	21.4	9.4	9.1		16.6	8.8	6.5	7.6	15.3
昭和40年度	志願者数	1,226	738	280	1,013	661	1,264	328	466		6,016	254	211	465	6,481
	入学者数	65	40	33	32	39	68	37	40		354	26	31	57	411
	倍率	19.5	18.5	8.5	31.7	16.9	18.6	8.9	11.7		17.0	9.8	6.8	8.2	15.8
昭和41年度	志願者数	1,345	778	287	1,063	808	1,293	331	400		6,305	232	173	405	6,710
	入学者数	72	39	39	42	39	68	38	38		375	29	30	59	434
	倍率	18.7	19.9	7.4	25.3	20.7	19.0	8.7	10.5		16.8	8.0	5.8	6.9	15.5
昭和42年度	志願者数	1,074	631	235	1,116	686	1,125	281	319	455	5,922	208	140	348	6,270
	入学者数	90	40	33	38	42	70	38	37	37	425	29	30	59	484
	倍率	11.9	15.8	7.1	29.4	16.3	16.1	7.4	8.6	12.3	13.9	7.2	4.7	5.9	13.9
昭和43年度	志願者数	1,343	579	286	1,190	586	1,196	329	268	259	6,036	268	169	437	6,473
	入学者数	83	40	35	69	39	64	36	33	34	433	24	29	53	486
	倍率	16.2	14.5	8.2	17.2	15.0	18.7	9.1	8.1	7.6	13.9	11.2	5.8	8.2	13.3
昭和44年度	志願者数	986	505	209	1,265	562	1,212	229	239	281	5,488	268	167	435	5,923
	入学者数	82	29	32	73	36	65	39	35	37	428	27	29	56	484
	倍率	12.0	17.4	6.5	17.3	15.6	18.6	5.9	6.8	7.6	12.8	9.9	5.8	7.8	12.2
昭和45年度	志願者数	806	358	157	1,236	542	910	212	173	271	4,665	211	153	364	5,029
	入学者数	92	38	37	66	39	69	39	38	36	454	28	30	58	512
	倍率	8.8	7.5	4.2	18.7	13.9	13.2	5.4	4.6	7.5	10.3	7.5	5.1	6.3	9.8

12. 横浜高等工業学校（工専）卒業状況一覧表

（ ）内数字は所定日以後の卒業者数を示し，外数

学科名 ＼ 卒業年月		大正12・3	13・3	14・3	15・3	昭和2・3	3・3	4・3	5・3	6・3	7・3	8・3	9・3	10・3	11・3	12・3
機械工学科	本科	29(1)	42	32(2)	30(1)	38	40	36	35	36	35	32(1)	38(1)	36	37	36
	夜間部															
	選科	1	2	2			1									
	工業教員養成所										3	6	7	6	6	5
応用化学科	本科	31(2)	42	35	33	30	36	39	34	31	39	39	32	41	34(1)	40
	夜間部															
	選科	2		2	1	1			1	2			1			2
	工業教員養成所										7	6	6	4	6	4
電気化学科	本科	30	37	31(1)	36	33	35(1)	37	35	40	34	36	34	38	34	38
	夜間部															
	選科	1		1			1			1			1			
	工業教員養成所										3	2	2	2	2	2
建築学科	本科						32	29	27	29	26	29	19	30	25	25(1)
	夜間部															
	選科									1		1		2	5	1
	工業教員養成所										6	6	6	6	5	6
造船工学科	本科										22(1)	23	23(1)	24(1)	28	27
	夜間部															
	選科															
	工業教員養成所															
航空工学科	本科															
	選科															
電気科	本科															
	選科															
	工業教員養成所															
合計	本科	90(3)	121	98(3)	99(1)	101	143(1)	141	131	136	156(1)	159(1)	146(2)	169(1)	158(1)	166(1)
	夜間部															
	選科	4	2	5	1	1	2		1	4		1	2	2	5	3
	工業教員養成所										19	20	21	18	19	17

昭和13・3	14・3	15・3	16・3	16・12	17・3	17・9	18・3	18・9	19・3	19・9	20・3	20・9	21・3	22・3	23・3	24・3	25・3	26・3
39	40	42	67	75		73		67		85		74		75	94	22(1)	36	22
													34	43	47	36	23	24
			3		5	3	4	3	1	5		4		4	1	2	2	2
6	4	5	8	13		13		13		26		30	(4)	25				
41	36	36	41	74		66		74		76		68(1)	36	79	82	36(4)	35	14
														31	37	37	33	25
1		2	3		6	1	7	2		1		4		2	1	4	2	2
6(1)	6	6	6	5		7		6		6		8		8	18	8	8	9
39	39	37	40	74		73		73		74		75		70	77	37(1)	27	15
														31	42			
	1		2		3	1	4	1			1			1			3	1
2	2	1	2	4		3		3		4		4		8	7	10	8	7
32(1)	27	30	27	29		36		31		27		56		51(1)	98	38	30	15
						37		35		36								
						1	1		1	1		3		1	1	1	1	2
6	6	6	5	3		3		1		5		4		8	8	2	9	8
28	26	37(1)	30	26		34		37		37		32		76	64	33	30	19
														29	22			
	1		4		6	2	3	1		6		11		4	3	4	2	6
														4				
			33	43		84		75		77		75						
			3		4		5	2	1	2		2						
															61	39	35	18
															1			
179(1)	168	182(1)	238	321		366		357		376		380(1)	36	351(1)	446	205	193	103
						37		35		36				134	148	73	56	49
1	2	2	15		24	8	24	9	3	15	1	24	34	12	6	7	10	13
20(1)	18	18	21	25		26		23		41		46	(4)	53	26	20	25	24

13. 横浜国立大学工学部卒業状況一覧表

（ ）内数字は所定日以後の卒業者数を示し，外数

学科名＼卒業年月	昭28・3	〃29・3	〃30・3	〃31・3	〃32・3	〃33・3	〃34・3	〃35・3	〃36・3	〃37・3	〃38・3	〃39・3	〃40・3	〃41・3	〃42・3	〃43・3	〃44・3	〃45・3
機械工学科	32 (2)	40 (1)	38	31 (1)	39 (1)	44	33	40	40 (2)	43 (5)	40 (4)	49	59 (6)	61	42 (6)	55 (9)	39 (11)	44 (14)
応用化学科 昭37までは化学工業科	31	35	27	30	40	33	34	36	34	40	40	38	35	43	23 (14)	29 (1)	24 (7)	31
電気化学科	32 (1)	28	26	27 (1)	31	34	27 (1)	25 (3)	32	34	36	39	34 (2)	39	21 (8)	31 (9)	22 (8)	26 (3)
建築学科	16	24	14	23 (5)	25 (4)	29 (5)	21 (2)	21 (9)	20 (7)	24 (4)	20 (9)	23 (9)	18 (15)	32 (1)	21 (7)	15 (6)	10 (18)	14 (10)
造船工学科	24	18 (3)	19 (2)	24	26 (3)	20 (3)	23	29	26 (1)	27 (1)	27 (2)	30 (4)	29 (2)	24 (4)	28 (10)	29 (7)	23 (15)	39 (3)
電気工学科	26	22	18	21	25	23	27	27	28	31 (1)	31 (4)	44 (6)	41 (2)	49 (6)	39 (10)	41 (10)	17 (16)	53 (17)
金属工学科										28	29 (1)	35 (1)	34 (6)	24 (7)	25 (3)	25 (10)	24 (6)	25 (11)
化学工学科														33	35	37	34	32 (6)
小計	161 (3)	167 (4)	142 (2)	156 (7)	186 (8)	183 (8)	165 (3)	178 (12)	180 (10)	227 (11)	223 (20)	258 (20)	250 (33)	305 (17)	234 (58)	262 (52)	193 (81)	264 (64)
2部機械工学科		15	20	23	21	26 (2)	26	27	20 (2)	13 (7)	18 (5)	23	22 (2)	25 (5)	19 (2)	18 (4)	20 (1)	6 (4)
2部応用化学科 昭37までは化学工業科		19 (5)	20 (2)	24	25	23 (1)	24	26 (2)	24 (1)	27	25 (2)	17 (2)	30	23 (2)	19 (1)	21 (4)	20 (12)	17 (8)
小計		34 (5)	40 (2)	47	46	49 (3)	50	53 (2)	44 (3)	40 (7)	43 (7)	40 (2)	52 (2)	47 (7)	38 (3)	39 (8)	40 (13)	23 (12)
合計	161 (3)	201 (9)	182 (4)	203 (7)	232 (8)	232 (11)	215 (3)	231 (14)	224 (13)	267 (18)	266 (27)	298 (22)	302 (35)	352 (24)	272 (61)	301 (60)	233 (94)	287 (76)

14. 定員変遷一覧表

年月日	根拠法令	教官									事務系職員				合計
		校長	教授	生徒主事	助教授	生徒主事補	助手	予算定員 講師	予算定員 嘱託	計	事務官	書記	予算定員 その他	計	
大正 9. 1.19	勅令第16号	1	5		1					7		3		3	10
〃 9. 4.17	〃 第111号	1	8		3			7		19		4	12	16	35
〃 9. 4.31	〃 第180号	1	8		4			7		20		4	12	16	36
〃 10. 4.26	〃 第170号	1	13		6			8		28		5	19	24	52
〃 11. 4.29	〃 第242号	1	20		10			8	2	41		6	20	26	67
〃 12. 4. 1		1	20		10			18	2	51		6	16	22	73
〃 13. 4. 1		1	20		10			21	3	55		6	23	29	84
〃 14. 6. 3	〃 第36号	1	23		11			21	2	58		6	24	30	88
〃 15. 7. 5	〃 第249号	1	24		12			21	3	61		7	26	33	94
昭和 2. 9.14	〃 第288号	1	25		13			23	5	67		7	30	37	104
〃 3. 4. 1		1	25		13			21	5	65		7	34	41	105
〃 4. 9. 6	〃 第260号	1	27		15		3	19	4	69		8	34	42	111
〃 5. 5.10	〃 第91号	1	29		16		3	21	5	75		8	41	49	124
〃 6. 5. 9	〃 第80号	1	31		17		3	18	8	78		8	44	52	130
〃 7. 4. 1		1	31		17		3	17	8	77		8	43	51	128

年月日	根拠法令	教官									事務系職員				合計
		校長	教授	生徒主事	助教授	生徒主事補	助手	予算定員 講師	予算定員 嘱託	計	事務官	書記	予算定員 その他	計	
昭和 7.12.27	勅令第395号	1	31		16		2	17	7	74		8	40	48	122
〃 9. 4. 1		1	31		16		2	22	5	77		8	44	52	129
〃 10. 4. 1		1	31		16		2	22	5	77		8	44	52	129
〃 11. 4. 1		1	31		16		2	23	9	82		8	41	49	131
〃 12. 8. 5	〃 第388号	1	31	1	16	1	2	24	8	84		8	37	45	129
〃 12. 9.11	〃 第487号	1	31	1	16	1	2	24	8	84	1	8	37	46	130
〃 13. 5.20	〃 第361号	1	34	1	17	1	3	27	6	90	1	8	33	42	132
〃 14. 6. 6	〃 第355号	1	36	1	18	1	3	32	9	101	1	9	31	41	142
〃 15. 5.30	〃 第359号	1	37	1	17	1	3	32	17	109	1	9	47	57	166
昭16～昭20.7の間	戦時中につき不明														
昭和20. 8		1	52	1	28	3	9			94	1	10			
〃 21.		1	54	0	25	0	9			89	1	10			
〃 22.		1	50		24		7			82	1	11			
〃 23.		1	42		20		6			69	事務 13				
〃 24. 4. 1		1	42		23	講師 6	3			75	〃 11		含嘱託 152	163	238

年月日	根拠法令		教授	助教授	講師	助手	計	事務系職員	合計
昭和24年度 大学創設当初		大学	学長 1 教授 13	21	5	4	44	69	113
		高専	校長(学部長) 〃 3 105	61	14	0	183	292	475
〃 24年度 (6月1日)	文部省令 第23号	大学	学長 〃 1 13	21	5	10	50	63	113
		高専	(校長)学部長 〃 3 105	61	18	0	187	288	475
〃 25年度	〃 第17号	大学	学長 〃 1 35	55	12	18	121	166	287
		高専	(校長)学部長 〃 3 65	37	11	0	116	185	301
〃 26年度 (完成年度)	〃 第19号	大学	学長 〃 1 69	112	23	30	235	341	576
		高専	(校長)学部長 〃 0	0	0	0	0	0	0
昭和26年度	(工学部定員設定) 講座＋学科目		26	28	10	17	81	95	176
〃 27度年	文部省令第23号		27	29	10	18	84	89	173
〃 〃	27.5.8 (事務機構刷新協議会)		27	29	10	18	84	90	174
〃 28度年	文部省令第10号		27	29	10	18	84	90	174
〃 29年度	〃 第6号		29	31	9	18	87	87	174
〃 30年度	〃 第13号		31	32	9	18	90	84	174
〃 31年度	〃 第8号		33	33	9	19	94	79	173
〃 32年度	〃 第7号		34	32	8	19	93	79	172
〃 33年度	〃 第13号		35	32	8	19	94	79	173
〃 34年度	〃 第19号		37	36	6	22	101	85	186
〃 35年度	〃 第6号		37	37	5	22	101	85	186
〃 〃	〃 第1号		38	38	5	24	105	89	194
〃 36年度	〃 第15号		40	40	4	27	111	97	208
〃 37年度	〃 第17号		43	42	3	32	120	106	226
〃 38年度	〃 第11号		45	46	4	38	133	121	254
〃 39年度	〃 第11号		50	51	3	41	145	129	274
〃 40年度	〃 第17号		53	53	3	43	152	138	290
〃 41年度	〃 第22号		54	54	3	44	155	137	292
〃 42年度	〃 第2号		56	56	3	45	160	136	296
〃 43年度	〃 第21号		61	59	3	47	170	140	310
〃 44年度	文大大第354号		66	64	3	48	181	146	327
〃 45年度	〃 第267号		67	65	3	51	186	147	333
〃 46年度	〃 第230号		73	70	3	52	198	149	347
〃 47年度									

15. 横浜国立大学工業教員養成所入学・卒業状況一覧表

	学科名	志願者数	入学者数	倍率
昭和36年度	機械工学科	84	37	2.27
	建築学科	78	34	2.28
	合計	162	71	2.28
〃 37年度	機械工学科	345	37	9.32
	建築学科	306	35	8.74
	合計	651	72	9.04
〃 38年度	機械工学科	166	40	4.15
	建築学科	185	37	5.0
	合計	351	77	4.55
〃 39年度	機械工学科	115	29	3.96
	建築学科	133	28	4.78
	合計	248	57	4.35
〃 40年度	機械工学科	196	35	5.60
	建築学科	149	38	3.92
	合計	345	73	4.73
〃 41年度	機械工学科	172	17	10.12
	建築学科	186	13	14.31
	合計	358	30	11.93

（卒業状況一覧表）

学科名＼事業年度	昭和38年度	〃 39年度	〃 40年度	〃 41年度	〃 42年度	〃 43年度	〃 44年度
機械工学科	32	31	27	22	27	24	1
建築学科	24	23	21	28	20	27	0
合計	56	54	48	50	47	51	1

年　表

年	月日	本校事項	月日	校外事項
大正3年 (1914)			7．28	第1次世界大戦勃発
大正5年 (1916)	12．22	神奈川県知事より横浜市に高等工業学校設置につき文部大臣に申請		
大正6年 (1917)	1．	横浜市より創立費45万円を寄付		
	3．16	神奈川県より敷地21,071坪、創立費30万円を寄付	9．	臨時教育会議設置、専門学校増設決まる
	10．9	阪田貞一（東京高等工業学校長）外4名創立委員を委嘱	11．	ロシア革命
大正7年 (1918)			8．	米騒動起こる
			8．2	シベリア出兵宣言
			11．11	第1次世界大戦終わる
大正8年 (1919)			6．28	ベルサイユ条約調印
大正9年 (1920)	1．19	本校　文部省直轄学校として設置公布、鈴木達治校長に任命		
	1．23	本校校則制定機械工学科、応用化学科、電気化学科の3科を置く		
	1．30	各学科40名ずつの生徒を募集		
	2．26	本校事務所を文部省内より横浜市本校内へ移す		
	3．24	本日より3日間本校において第1回入学試験施行		
	4．12	授業開始		
	6．	校友会組織される（昭和15．12．2 解散）	11．15	国際連盟第1回総会
大正10年 (1921)	3．8	文芸部雑誌「鵬翼」第1号発行		
	4．8	新講堂落成		
	7．20	商議委員規程認可される		
	10．29	開校式（中橋文部大臣来校）第1回記念祭	11．4	原首相暗殺される
大正11年 (1922)	5．16	第1回工業懇話会開催		
	4．24	市立大岡工業補習学校開校（大正12・4・1横浜工業専修学校と改称）	11．6	9ヵ国条約、海軍軍縮条約調印
大正12年 (1923)	1．31	校風徐興会発会		
	3．1	観光外人招待大音楽会開催		

年	月日	本校事項	月日	校外事項
大正12年 (1923)	3．17	第1回卒業式		
	8．20	大岡町岸ヶ谷第一寮（興風館）落成		
	9．1	**関東大震災で校舎大部分灰じんに帰す**	9．1	関東大震災
	11．1	仮校舎で授業開始		
		震災記念奨学資金設立		
	12中旬	仮校舎起工		
		高工時報の前身「イオンの叫び」発行		
大正13年 (1924)	3．17	第2回卒業式		
	3．	仮校舎落成		
	4．1	大岡町字力者町第2寮（復興館）開設		
		互助主義拾銭会（奨学金）		
大正14年 (1925)	1．15	横浜高工時報第1号発行	3．	治安維持法公布、普通選挙法公布
	3．17	第3回卒業式		
	4．	**建築学科を新設**　学校教練の実施	5．1．	陸軍4個師団廃止
	4．	バラック全校舎落成		
	7．2	第1回対横浜高商野球定期戦に勝つ		
	10．3	大陸会発足		
	10．	横浜工業会創立		
大正15年 (1926)	3．	文芸部を出版部と改め、高工時報を同部より発行		
	3．17	第4回卒業式	12．25	大正天皇崩御、裕仁親王践祚、昭和と改元
	7．1	第2回対高商野球定期戦に負ける		
昭和2年 (1927)	3．17	第5回卒業式	3．～	金融恐慌
	7．1	第3回対高商野球定期戦に勝つ	5．28	第1次山東出兵
昭和3年 (1928)	3．15	第6回卒業式	2．20	普通選挙法による第1回総選挙
	3．18	本年より入学試験に無試験制度採用（～昭10）	4．19	第2次山東出兵
			5．9	第3次山東出兵
	7．1	対高商野球定期戦に負ける	6．4	張作霖爆死
	9．22	野球部　専門学校関東争覇戦に優勝	11．10	天皇即位の大礼
	11．1	開校記念日を従来の10月29日から11月1日に改正		
昭和4年 (1929)	3．15	第7回卒業式	10．24	ニューヨーク株式市場大暴落（世界経済恐慌の始まり）
	3．30	**造船工学科増設**		
	4．1	**付設工業教員養成所設置**		
	6．	対高商野球定期戦中止（昭6年復活）		
昭和5年 (1930)	3．15	第8回卒業式		
	4．26	航空研究会発会式、日本学生航空連盟に加盟	4．22	ロンドン軍縮会議で条約に調印
	5．9	**社団法人横浜工業会設立**		
	5．28	校友会消費組合調査会設立	11．24	浜口首相狙撃される
	5．31	校舎復興建築実行委員会		
	6.7～8	全国高工陸上競技大会で優勝		
	7．7	田中文部大臣建築、教育状況視察のため来校		
	11．1	創立10周年記念式		
昭和6年 (1931)	3．14	第9回卒業式	4．13	浜口内閣辞職
	3．28	復興建築地鎮祭執行		

年	月日	本校事項	月日	校外事項
昭和6年 (1931)	2．18	学生消費組合創立大会	9．18	満洲事変起こる
	4．29	社団法人横浜工業会第1回総会	12．13	犬養内閣成立
	6．	対高商定期野球戦復活(本年より3回戦採用) ストレート負		
	8．15	柔道部全国高工大会に優勝		
	8．23	端艇部全国高工大会に優勝		
	9．6	水泳部全国高工大会に優勝		
昭和7年 (1932)	3．15	第10回卒業式	1．28	第一次上海事変起こる
			2．9	井上前蔵相暗殺される
	5．23	横浜工業懇話会10周年大会	3．1	満洲国建国
	6．2 12 13	対高商定期野球　1勝2敗	5．15	犬養首相暗殺(5・15事件)
			9．15	満洲国承認
	6．5	競技部第8回全国高工陸上大会に優勝		
	7．24	水泳部第3回全国高工水上競技大会に優勝		
	7．25	庭球部第2回全国高工庭球競技大会に優勝		
	11．18	第1旅団長朝香宮教練視察		
昭和8年 (1933)	3．15	第11回卒業式	1．30	ヒットラー内閣成立
	6．2 3 5	対高商定期野球　1勝2敗	3．28	国際連盟脱退
	7．10	剣道部第2回全国高工剣道大会に優勝		
	7．20	水泳部第4回全国高工水泳大会に優勝		
	7．31	端艇部全国高専学校競漕大会に優勝		
昭和9年 (1934)	3．15	第12回卒業式	12．29	日本、ワシントン海軍々縮条約廃棄
	6．2 4 6	対高商定期野球　2勝1敗		
	7．22	水泳部全国専門学校競技大会に4度連勝		
	7．28	端艇部全国専門学校競技大会優勝		
	10．20	実業教育50周年記念会で、鈴木校長、河合教授教育功労賞を受ける		
昭和10年 (1935)	1．10	松田文部大臣視察	2．19	美濃部達吉天皇機関説問題化
	2．13	**鈴木達治校長辞任、富山保2代校長に就任**		
	3．15	第13回卒業式	3．6	独、再軍備宣言
	3．25	前校長 鈴木達治、本校名誉教授の称号を受ける		
	6．	対高商定期野球ストレート勝		
	6．	第3期復興基礎工事始まる		
	10．1	横浜工業専修学校　公立青年学校神奈川県横浜市横浜工業専修学校と改称		
	11．3	端艇部第8回神宮体育大会に優勝（連勝記録99回達成）		
昭和11年 (1936)	1．	工業教員養成所の給費制廃止	2．26	斎藤内大臣高橋蔵相ら殺害（2・26事件）
	3．14	第14回卒業式		
	6．6 7	対高商定期野球にストレート勝	11．25	日独防共協定調印
	6．28	第11回4専門端艇大会に勝ち、100戦100勝の偉業成る		
	9．	第3期復興工事終了		
	11．21	入試に試験制度採択発表		

年	月日	本校事項	月日	校外事項
	12．18	体育研究会発会式		
昭和12年 (1937)	3．15	第15回卒業式	7．7	日華事変勃発蘆溝橋事件
	3．	入試に筆記試験復活	8．13	上海事変
	6．2 3	対高商定期野球ストレート負	9．25	中国々共合作
	7．17 18	全国高工陸上大会に優勝	10．12	国民精神総動員運動始まる
	9．14	特設防護団設置	11．6	伊、日独防共協定に参加
	10．1	**工業技術員養成科設置**	12．13	南京攻略
	10．25	御真影奉戴式挙行		
	11．1	名教自然碑除幕式		
昭和13年 (1938)	3．15	第16回卒業式	3．24	国家総動員法公布
	3．29	**航空工学科を増設**	9．29	ミュンヘン会談
	4．22	報国団結団式	10．27	武漢三鎮占領
	6．4 5 6	対高商定期野球　2勝1敗		
	7．10	集団勤労作業開始（防空用貯水槽兼プール）		
	8．28	新校舎へ移転（建築、航空科を除く）		
	11．	校内開放記念祭中止		
	12．	3年生授業繰上げ就職		
昭和14年 (1939)	3．15	第17回卒業式	5．11	ノモハン事件
		プール開き	7．26	米、日米通商条約廃棄通告す
	4．18	大陸会復活、第1回総会	8．23	独ソ不可侵条約締結
	6．2 3 4	対高商定期野球　2勝1敗	9．3	第2次世界大戦勃発
	6．6	特設警防団編成		
	7．22	第5回全国高工籠球大会5連勝		
	8．	航空工学科バラックから本建築へ		
	8．16	商議委員原　富太郎逝く		
	11．3	記念祭校内開放復活		
	12．	3年生授業繰上げ就職		
昭和15年 (1940)	3．15	第18回卒業式	3．30	南京に汪政権成立
	4．9	専科生として初めて女子入学	9．27	日独伊三国同盟成立
	6．	対高商定期野球ストレート負	10．12	大政翼賛会発足
	11．1	開校20周年記念式、校内開放記念祭	11．23	大日本産業報国会結成
	11．11	紀元2600年奉祝運動会		
	12．2	校友会解散・学校報国団結団		
		生徒課新設		
昭和16年 (1941)	3．14	第19回卒業式	4．1	生活必需物資統制令公布
	3．	入試課目に国史採用	4．13	日ソ中立条約調印
	4．	新入生から制服に国民服採用	6．22	独ソ開戦
	5．20	報国団々歌成る	10．16	近衛内閣辞職
	6．	対高商定期野球ストレート負	10．17	東条内閣成立
	8．26	報国隊要綱を決定	12．8	**米英に宣戦、大東亜戦争始まる**
	12．24	土俵開き		
	12．	学年歴臨時措置		
	12．26	第20回卒業式（3ヶ月繰上げ挙行）		

年	月日	本校事項	月日	校外事項
昭和17年 (1942)	5.	対高商定期野球　1勝2敗	1～2	マニラ、シンガポール占領
	8. 11	全国実業専門学校野球に優勝(初の全国制覇)	2.	衣料配給に点数切符制実施
	9.	講堂完成	6. 5	ミッドウエイ海戦
	9. 21	第21回卒業式（半年繰り上げ挙行）	8. 7	米軍ガダルカナル島上陸
昭和18年 (1943)	3.	初の勤労動員令下る	4. 18	山本連合艦隊司令長官戦死
	4.	機械、応化に2部設置	9. 8	イタリア降伏
	6.	対高商定期野球中止	11.	大東亜会議
	8.	夏期勤労動員，教職員は夏休み返上	11. 27	カイロ会談
	9. 21	第22回卒業式	12. 1	学徒出陣
	11.	記念祭中止		
	11. 1	報国団改組		
昭和19年 (1944)	1. 5	高工時報390号より謄写版刷りとなる	7. 9	日本軍サイパンを失う
	2. 10 ～ 25	全校生血液型検査実施	7. 18	東条内閣辞職
			7. 20	小磯、米内連立内閣成立
	3.	中等学校以上の通年動員　決定	10. 25	比島沖海戦
	4.	**本校名称変更、横浜工業専門学校となる**	11. 24	B29東京初空襲
	4.	高工時報399号をもって廃刊 電化、造船、航空機3科に2部増設		
	7.	夏期勤労動員		
	8.	学徒勤労令公布　勤労即教育		
	9. 20	第23回卒業式		
昭和20年 (1945)	3. 18	決戦教育措置要項　決定，4月1日より向う1ヵ年授業停止	2. 4	ヤルタ会談
			4. 1	米軍、沖縄上陸
	4.	**電気通信科を新設**	4. 4	横浜初空襲
	5. 22	戦時教育令公布（教育的玉砕）	5. 7	ドイツ降伏
	5. 29	横浜大空襲、本校あやうく無事	7. 26	ポツダム宣言発表
	8. 15	**終　戦**、首相官邸襲撃事件	8. 6 9	広島、長崎に原子爆弾投下
	9. 2	米軍より校舎接収の通告、校長奔走し取消し	8. 9	ソ連参戦
	9. 4	授業開始	8. 15	**終戦**、ポツダム宣言受諾
	9. 29	第24回卒業式		
	9.	**航空機科廃止**、格納庫を体育館として使用	8. 28	連合軍本土進駐
	12. 10	食糧難のため明年2月1日まで休校	9. 2	降伏文書調印
			9. 15	「新日本建設の教育方針」を発表
			10.	GHQ管理始まる
			10. 22	GHQ「日本教育制度に対する管理政策」を指令
			10. 24	国際連合成立
			12. 22	労働組合法公布（21. 3. 21施行）

年	月日	本校事項	月日	校外事項
昭和21年 (1946)	2. 1	授業再開	1. 9	航空研究所等廃止、各帝国大学の航空関係の講座を廃止
	4. 1	電気通信科を電気科と改める		
	5. 15	高工時報戦後第1号出る		
	6. 10	食糧難のため夏休早やまる	2. 1	公職追放
	8. 29	応援団発会式	3. 31	米国教育使節団報告書を提出
	9. 19	対高商定期野球戦復活日没引分		
	10.	籠球部全国大会優勝	4. 10	総選挙（男女平等による最初）
	11. 1 〜 3	記念祭復活校内開放	5. 1	メーデー復活
			5. 3	極東軍事裁判開始
	12.	試験制度採用	11. 3	日本国憲法公布
昭和22年 (1947)	3. 15	第25回卒業式	3. 31	教育基本法、学校教育法公布
	6.	対高商定期野球　1勝2敗		
	11. 13	専門学校籠球大会に優勝	4. 1	6・3・3・4制開始
	12. 19	大学準備委員会開催（単科大学案）	4. 25	新憲法下最初の総選挙
昭和23年 (1948)	3. 15	第26回卒業式　電気科第1回卒業		極東軍事裁判判決
	5.	総合大学案至上命令として出る		経済安定9原則
	5. 26	大学設立後援会発起人会開催	1. 15	大学設置委員会官制公布
	6. 4 5	対高商定期野球ストレート負	5. 19	参議院、教育勅語失効を議決
	7. 8	横浜貿易産業科学研究所設置		
	7. 16	講堂焼失	12. 9	文部省に新制大学推進本部を設置
	9. 25	大学設置委員会実地審査		
	11. 27	校友会解散		
昭和24年 (1949)	2. 1	学生自治会発会式	2. 21	大学設置委員会、公私立新制大学79校決定
	3. 11	第27回卒業式		
	4. 6	大学設立実行委員会	3. 25	浪速大学等30大学の設置を認可
	5. 31	**横浜国立大学発足　横浜工業専門学校、横浜経済専門学校、神奈川師範学校、神奈川青年師範学校を包括し、工学部、経済学部、学芸学部を持つ新制大学として設置** **初代学長　冨山保任命** 横浜国立大学々則制定 3学部自治会統一、中央委員会制で発足	4. 15	ドッジ・プラン 北大西洋条約
			5. 10	税制改革のためシャウプ使節団来日
			7. 5	下山事件
	7. 1	横浜国立大学新聞創刊	7. 15	三鷹事件
	7. 20	第1回入学式挙行（於経済学部講堂）	8. 17	松川事件
	8. 1	本学事務機構制定	9. 21	中華人民共和国成立
	8. 3	建築学科実習室一棟焼失	12. 10	湯川博士ノーベル賞受賞
	9. 1	授業開始		
	10.	襟章制定		
	11. 2	第1回学生祭		
	11. 3	経済学部講堂において開学式挙行		
昭和25年 (1950)	1. 16	教授阿部滋弘　工学部長兼工専校長に任命		中ソ友好相互援助条約締結
	2. 27	ドクター・イールズ来校　イールズ旋風		
	3. 15	第28回卒業式		
	6. 1	開学記念日を6月1日に制定		

年	月日	本校事項	月日	校外事項
昭和25年 (1950)	7．13	自治会捜査される	6．25	朝鮮動乱
	9．14	第2次アメリカ教育使節団来校	8．10	警察予備隊設置
	10．29	工学部、工専30周年記念祝賀式挙行	9．22	第2次米国教育使節団、報告書を提出
昭和26年 (1951)	1．29	体育館を講堂と用途変更し改装	9．4	対日平和条約、日米安全保障条約調印
	3．20	工専最終卒業式挙行		
	3．31	**横浜工業専門学校**、横浜経済専門学校、神奈川師範学校、神奈川青年師範学校**廃止**		
	4．18	本年度より学芸学部2年課程、工学部2部を除く各学部1年に対する一般教育を学芸学部横浜分校で実施		
	4．19	工学部強電弱電実験室完成		
	12．3	事務局庁舎落成式		
昭和27年 (1952)	7．1	工学部教授会内規施行	2．	日米行政協定成立 李承晩ライン声明
	8．5	**富山学長辞任、工学部長江国正義　学長事務取扱に任命**	2．20	東大事件起こる（ポポロ事件）
	12．25	横浜国大名誉教授の称号授与規程制定	4．	日本占領終了
			4～6月	破防法反対闘争
			5．1	メーデー事件
			7．1	破壊活動防止法公布
			8．1	保安庁発足
昭和28年 (1953)	3．1	富山保 横浜国大名誉教授の称号を受ける	4．20	日米通商航海条約調印
	3．20	第1回卒業式　工学部講堂において挙行	7．27	朝鮮休戦協定調印
	3．25	工学部電炉電解実験室完成	12．24	奄美大島返還
	4．21	**江国正義学長に任命**		
昭和29年 (1954)	3．15	第2回卒業式挙行（於工学部講堂）	3．8	日米 MSA 協定調印
	4．1	工学部専攻科設置	7．1	防衛庁設置
	7．20	建築学科実験室一部完工	9．8	SEATO 成立
	10．15	整備統合施設建設委員会発足，規定制定		
	12．1	事務局に清水ケ丘土地買収臨時事務室設置		
昭和30年 (1955)	3．15	第3回卒業式（於工学部講堂）	4．18	アジア・アフリカ会議開催
	3．30	経済学部隣接地 23,797 坪購入	5．	砂川事件
	3．31	経済学部隣接地 5,502 坪購入	9．13	自由民主党結成
	12．12	清水ケ丘学生部室と学生食堂の移転改築		ワルシャワ条約
			9．15	「神武景気」
昭和31年 (1956)	2．25	協議会規定、学長候補者選考規程制定	10．19	日ソ共同宣言
	3．15	第4回卒業式	12．18	国際連合加盟
	4．1	**工学部にカーバイド化学研究施設設置**	12．	南極観測始まる
		江国正義学長に再任 施設統合計画を文部省承認		
	11．4	学生歌「みはるかす」決まる		

年	月日	本校事項	月日	校外事項
昭和32年 (1957)	2．28	工学部第4寮を大蔵省より所管換	8．1	米駐留地上軍の撤退決定
	3．15	第5回卒業式	8．27	東海村原子炉点火
	3．31	工学部化学2号館完成	10．1	日本国連非常任理事国となる
			10．4	ソ連人工衛星打上げ成功
昭和33年 (1958)	3．20	第6回卒業式	2．	アラブ連合成立不況
	4．1	**工学部金属工学科設置**	6．	勤務評定闘争
	7．5	工学部第一寮移築工事完成（岸ヶ谷→清水ヶ丘）		
	9．30	煙洲鈴木達治米寿祝賀会		
昭和34年 (1959)	3．20	第7回卒業式	1．	キューバ革命
	4．1	**黒沢　清学長に任命**		
	9．1	横浜分校（立野）の清水ヶ丘移築完了		
昭和35年 (1960)	2．25	工学部建築学科実験研究室増築完成	1．24	民主社会党発足
	3．18	第8回卒業式	4～6月	安保改定阻止第一次統一行動
			5．19	日米安保新条約調印
			10．12	浅沼社会党委員長刺殺
昭和36年 (1961)	3．18	第9回卒業式	4．12	ソ連、人間衛星成功
	3．31	工学部金属工学科実験研究室完成	5．16	韓国クーデター
	4．1	学生部設置	6．	農業基本法成立
	5．19	**工業教員養成所設置**（～44年4月）		
	8．29	**煙洲鈴木達治逝く**		
	12．1	工学部施設拡充後援会発足		
昭和37年 (1962)	2．28	学生部事務室完成（弘明寺）		キューバ基地問題
	3．17	第10回卒業式		南極観測中断
	4．1	**化学工学科設置**、化学工業科を応用化学科と改称		日英通商航海条約調印
				国産第1号原子炉点火
		黒沢清　学長に再任	7．11	大学管理法阻止闘争
昭和38年 (1963)	1．14	文部大臣へ大学院工学研究科（修士課程）設置申請書提出		部分的核実験停止条約成立
	3．17	第11回卒業式	6．	ポポロ事件最高裁判決 原潜寄港反対闘争おこる
	3．26	工学部電気工学科、化学工学科実験研究室完成	11．22	米、ケネディ大統領暗殺
	4．1	**大学院工学研究科設置** 工学部第2寮老朽化のため廃止		
	6．17	大学院学則ならびに同委員会規程制定		
昭和39年 (1964)		金属工学科施設拡充後援会設立	4．28	日本 OECD に加盟
	3．18	第12回卒業式	10．10	オリンピック東京大会開会
	3．25	化学工学科実験研究室増築完成		
	5．16	付属図書館工学部分館完成		
昭和40年 (1965)	1．1	夜間学部に主事制度を設ける	6．22	日韓条約調印
	3．17	第13回卒業式（於県立音楽堂）	11．21	朝永振一郎博士ノーベル賞受賞
	3．18	第1回大学院修了式（於事務局会議室）		

年	月日	本校事項	月日	校外事項
昭和40年 (1965)	4. 1	工学部付属カーバイド化学研究施設を材料基礎工学研究施設に拡充改組 **中村工学部長、学長事務取扱に任命**		
	6. 1	**中村康治　学長に任命**		
	12. 15	付属材料基礎工学研究施設を含む研究センター完成、同センターに電子計算機室設置		
昭和41年 (1966)	3. 18	第14回卒業式（学芸学部は22日）	2. 4	全日空羽田沖墜落に始まる航空事故多発
	4. 15	**大学院工学研究科に化学工学専攻設置**	1. 18 〜 6. 22	早大学費値上げ反対スト
昭和42年 (1967)	1. 12	統合企画委員会規程制定	4. 24	美濃部亮吉初の革新都知事となる
	3. 18	第15回卒業式（於横浜文化体育館）		
	6. 29	統合問題につき自治会中央委員中村学長に交渉，学園紛争のはじまり	10. 8	羽田闘争（佐藤首相訪米阻止）
	7. 10	工学部の見解を自治会に伝達	11. 16	小笠原返還
	8.	「工学部学生諸君に告ぐ」を工学部全学生に送る		
	9. 7	**工学部安全工学科設置**		
	12. 12	統合配置図について学生に対し説明会開催		
昭和43年 (1968)	2. 21	統合計画用地として旧保土ケ谷ゴルフ場跡地211,299 m² 購入	1. 29	東大医学部無期限ストに入る
	3. 18	第16回卒業式	8. 31	横浜市電６系統路線廃止（通町１〜保土ケ谷橋、弘明寺〜吉野町）
	3. 25	工学部安全工学科実験室一部完成		
	5. 25	統合計画地の一部 168,654.71 m² 購入	10.	地下鉄１号線着工（上大岡〜吉野町）
	5. 30	統合計画地の一部 18,515.91 m² 購入	10.	国際反戦デーの学生デモ新宿駅占拠
	6. 1	**中村康治　学長に再任**		
	7. 10	統合地歩道橋新設工事完了	11.	東大紛争の責任をとって大河内総長辞任
	12. 4	学長、学生自治会との公開会見、学生７項目要求を出す		
昭和44年 (1969)	1. 1	火災により清水ケ丘地区学生食堂、部室焼失	1. 18	東大安田トリデ陥落
	1. 17	自治会学生により、事務局封鎖	4. 1	毛、林体制確立
	1. 25 〜 31	教育学部、経済学部、経営学部、横浜分校、工学部あいついで授業放棄	5. 3	東名高速道路全通
			7. 20	米、月着陸成功
	2. 1	各学部封鎖（工学部２部を除く）		
	2. 28	**中村学長　辞任**		
	3. 1	**水戸部正男　学長事務取扱に任命**		
	3. 8	旧保土ケ谷カントリークラブ建物増改築工事完成（事務局仮庁舎予定）		
	3. 19	第５回大学院修了式（於薬業会館）		
	3. 23 24	工学部入学試験学外において実施		
	3. 31	工学部安全工学科実験研究室完成		
	4. 1	**工業教員養成所廃止**		
	4. 3	評議会、昭和43年度統一卒業式取止め決定		
	7. 25	弘明寺地区（事務局、学生部、工学部）封鎖解除		
	9. 1	**水戸部学長事務取扱辞任** **越村信三郎　学長事務取扱に任命**		
	9. 11	工学部授業を学年別に順次開始		
	10. 29	清水ケ丘地区封鎖解除		
	11. 25	清水ケ丘地区各学部順次授業再開		

年	月日	本校事項	月日	校外事項
昭和45年 (1970)	3. 1	**越村信三郎　学長に任命**	3. 31	赤軍学生よど号乗取り
	3. 19	第6回大学院修了式	6. 23	安保自動延長に入る
	3. 22	統合計画地一部 22,938.91 m² 購入	11. 25	三島由紀夫割腹事件
	4. 1	**工学部に機械工学第2学科設置** 学生部、事務局常盤台へ正式移転		
	10. 23	統合地南地区運動場工事地鎮祭		
	11. 23	横浜国立大学工学部**創立50周年記念祝賀会**		

おもな参考文献

この年史を編さんするにあたって，以下の文献を参考にさせていただきました．謹んで謝意を表します．

東京工業大学60年史　昭15
金沢大学工学部50年史　昭45
神戸大学工学部50年史　昭46
横浜高工・横浜高商定期野球戦史　昭43　横浜野球クラブ
横浜高等商業学校20年史　昭18
神奈川県立商工高等学校50周年記念史　昭45
横浜市立横浜工業高等学校　概要
実業教育50年史　文部省
学制90年史　文部省
高工教育　昭2～3
太平洋戦争（上下）　児島　襄　中公新書
昭和史　遠山茂樹／今井清一／藤原彰　岩波新書
日本の歴史（下）　井上清　岩波新書
日本の歴史　No. 23～26　中央公論社
暗黒日記（上中下）　清沢洌
日本終戦史（上中下）　林茂　読売新聞社
終戦史録（上下）　外務省
朝日年鑑（終戦前後）
毎日年鑑（　〃　）
朝日経済年史（　〃　）

横浜銀行40年史
京浜電気鉄道沿革史
野村洋三伝　白土秀次
横浜復興史　No. 1～No. 4　昭7
大正大震災史　大15　神奈川県警察部
横浜市史稿　No. 1～No. 11　昭6～8
神奈川の歴史　読売新聞横浜支局
神奈川の100年　毎日新聞横浜支局
横浜の市蹟と名所　横浜郷土史研究会
名教自然碑の由来と教育私見の断片　昭32　鈴木達治
自由教育の片鱗　昭8 鈴木達治
名教自然　先生の思い出　昭37　煙洲会
煙洲残筆　昭34　山口辰男（編）
名教自然　六ツ川夜話　昭12　鈴木達治
自由主義教育の思い出　昭29　鈴木達治
鈴木達治先生記念事業報告　昭12　記念事業会
入愚亭独嘯　昭17　鈴木達治
自由教育の俤　昭4　鈴木達治
自由教育10年　昭5　鈴木達治

横浜高等工業学校一覧　大9～昭16
横浜国立大学要覧　昭29～昭45
学　報（横浜国立大学）昭42～昭47
広　報（　〃　）　昭45～昭47
統合ニュース（　〃　）昭42～昭43
横浜貿易産業科学研究所要覧　昭23
横浜高工時報　昭3～昭17
横浜工業会誌　大15～昭18
横浜工業会報　昭26～昭28
横浜国立大学工学部各科同窓会会員名簿　昭45
渡満要綱　昭14
大陸会記録　大14～
森川幾久雄日記　昭18～昭37
鵬翼 No. 2, No. 5, No. 6
横浜工業懇談会10年百回　昭7
電気化学会誌　大14～昭6
横浜電化会々報　昭44
DENKA　No. 5, No. 6
横浜応化会々報　昭40, 41
横浜応化会誌　No. 5～No. 8
横浜電気工学科同窓会々報　20周年特集号
同窓会会誌　第8号　金属工学科
かたりすと（応化　昭39～42）

編集後記

昭和46年の6月10日，編者の先輩である東芝音楽工業社長の菅要助氏より，横浜国立大学工学部50年史を作りたいから相談にのってくれとの話があり，音工本社ではじめて田口工学部長に紹介された．初めは田口部長の相談相手のような軽い気持で引き受けたところ，いつの間にか執筆編集の大任を負わされていることに気づいたが，時すでにおそく，乗りかかった舟ということもあり，とうとう終着駅まできてしまった．

一介のサラリーマンで教育界のことは何も知らず，また教育史を専攻したわけでもない．ただ社命で大分以前に「東京芝浦電気株式会社85年史」を編さんしただけのディレツタントに過ぎない．ただ資料を読んでいるうちに鈴木，冨山両校長の人柄に興味がもて，とうとう深入りしてしまった次第である．

本校誌は主として本校卒業者および関係者を対象としたが，事実に忠実なることにつとめた．日本近代教育史のために，僅かでも参考になれば幸である．

執筆にあたり田口工学部長をはじめ，たくさんの方のご指導，ご援助をいただいたことを深謝する．

ただ昭和47年12月12日突如として冨山先生の訃報に接し，ご生前にこの本をお目にかけることが出来なかったことは残念なことであった．先生には六ツ川のご自宅と野沢町のマンションとで僅かに2度お目にかかっただけであったが，その高潔な人格と国士の風貌に接することができた．謹んでご冥福を祈り，本史をご霊前にささげていただく．

短日月の編さんと不才のため，記事中失礼にわたったことが多いと思うが，ご寛容願いたい．他は田口工学部長の例言に詳しいので略させていただく．

（48—1—7 布生）

横浜国立大学工学部五十年史

〔非売品〕

発行日　昭和48年4月20日

発行代表者　田口武一
横浜市南区大岡2—32—1

編集者　布雄吉
東京都世田ケ谷区上野毛2—7—17

印刷所　大東印刷工芸株式会社
東京都中央区新富1—15—8

落丁・乱丁本はお取替えします。

拝　啓

陽春の候、皆々様にはますますご清祥のこととおよろこび申し上げます。

さて、横浜国立大学工学部五十年史の刊行は、ページ数の増加などのため大へん遅れましたが、多くの方々の絶大なご協力を得まして、ここに発刊することができましたことはまことにご同慶の至りに存じます。

当初は約450ページの予定のところ，約80ページ増加しましたため，単価は著しく上昇致しましたが，幸い皆様方のご支援によりまして，発行部数も予定の2,000部より400部も増加し，ここに無事お届けできました。

発行の遅れましたことをおわび致しますとともに，皆様方の一層のご発展ご健勝をお祈りしまして，ご送付のご案内申し上げます。

敬　具

昭和48年4月

世話人代表

横浜国立大学工学部長　田　口　武　一